ＳＫ16　（第236図、図版107―６）

緩傾斜地ほぼ中央、沢頭の頂部のＬＳ61グリッドで検出した。ＳＮ12石囲炉の下にあたり、石囲炉部分は本土坑の上、東側に寄った位置にある。開口部の平面形は径179×153cmのややいびつな円形を呈する。断面形は開口部が大きく開き底部近くはほぼ垂直あるいはやや外側に張り出す形態を呈する。底面は水平であるが、南壁には幅32cm、奥行き46cmで底面と同じレベルで掘り込まれた小穴がある。沢頭部分に位置するためと、掘り込まれた基盤層がやや砂質であるため、湧水が著しい。遺物は出土していない。

ＳＫ38　（第237図、第254図66、図版107―７、図版116―66）

調査区北西端平坦面の南西隅、ＮＡ71グリッドで検出した。検出地点はちょうど斜面への降り際にあたる。平面形は径104×92cmの円形を呈し、中央での深さは32cmを測る。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ちあがる。遺構内の覆土は黒色～黒褐色土が主体を占める。

遺構内からの出土遺物はないが、北東側壁坑外から第254図66の土器が出土している。

ＳＫ39　（第237図、第242図６、図版107―８、図版111―６）

ＳＫ38の西隣、同じＮＡ71グリッドで検出した。平面形は径146×130cmのややいびつな円形を呈し、中央での深さは56cmを測る。底面は平坦であるが、壁はやや開きながら立ち上がる。覆土は黒褐色～暗褐色土が主体を占める。

遺構内覆土中から第242図６のＬＲ縄文の施文された深鉢形土器胴部片を検出している。

ＳＫ41　（第237図、第253図43、第254図65、図版108―１、図版115―43、図版116―65）

やはり斜面の降り際、ＭＴ72グリッドで検出した。ＳＫ42を切って作られている。平面形は径120×106cmの円形を呈し、中央部での深さは74cmを測る。底面は平坦である。壁の立ち上がりは開口部近くで大きく開き、その下ではやや内側に入った袋状の断面形を呈する。覆土は暗褐色～褐色土を主体とする。

遺構内からの出土遺物ではないが、遺構検出前に精査した包含層中から第253図43の壷形土器および第254図65の深鉢形土器胴部片が出土している。

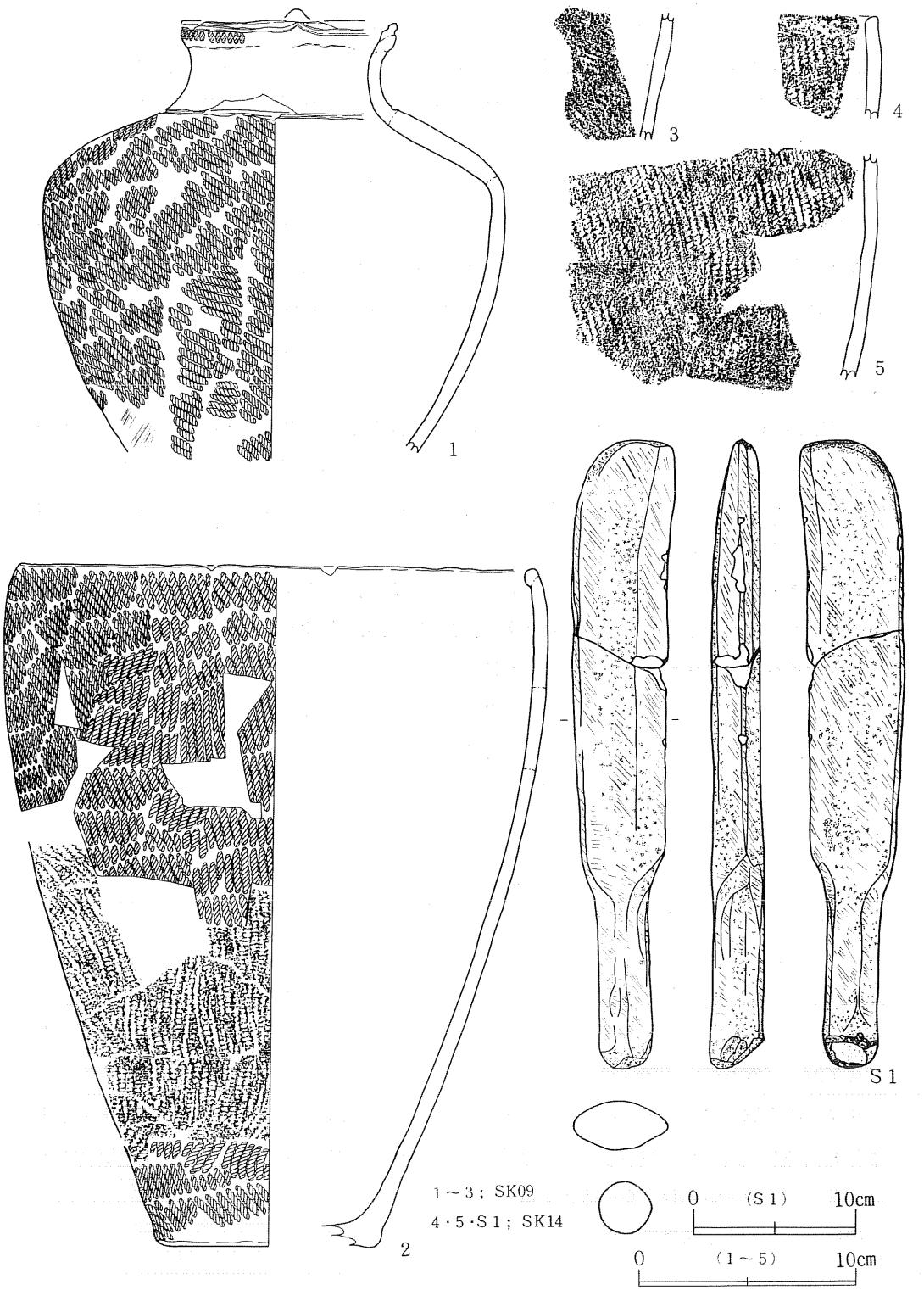
ＳＫ42　（第237図、図版108―１）

ＳＫ41の南側、ＭＴ70・ＭＴ71グリッドで検出した。ＳＫ41により切られている。長径推定140cm、短径120cmの楕円形を呈する。深さは中央で18cmと極めて浅い。覆土は褐色～黄褐色を呈する。

遺構内からの出土遺物はない。

ＳＫ45　（第237図、第242図Ｓ２・Ｓ３、図版108―２、図版112―２・３）

調査区北西端平坦面の南西隅、調査区際のＮＣ71グリッドで検出した。調査区外に伸びるため規模は定かでないが、長径２ｍ、短径1.6ｍ程度の楕円形を呈するものと推定される。深さ



第235図　遺構内出土遺物（１）

は中央部で10cmと浅い。覆土は黄褐色～明黄褐色を呈する。

覆土中から第242図Ｓ２・Ｓ３の石核・剥片ほか数片の剥片が出土している。黒色頁岩の同一母材からの石器で、Ｓ２の石核では節理面を打面とした剥離痕が認められる。

(2)　Ｔピット

ＳＫＴ25　（第235図、第242図７・Ｓ５、図版108―３、図版111―７、図版112―Ｓ５）

調査区北西端の平坦面上北側のＭＧ83グリッドで検出した。２基並列して検出されたうちの北側の１基である。長軸はＮ－57°－Ｗの方向にあり、長さ306cm、幅46～88cm、深さ110cmを測る。南から西の側壁はその中位で段をもつ。覆土は黒褐色～暗褐色～褐色土を主とする。南側壁の中段から第242図Ｓ５の石匙が出土したほか、坑外ではあるが北西隅から第242図７の土器が出土している。

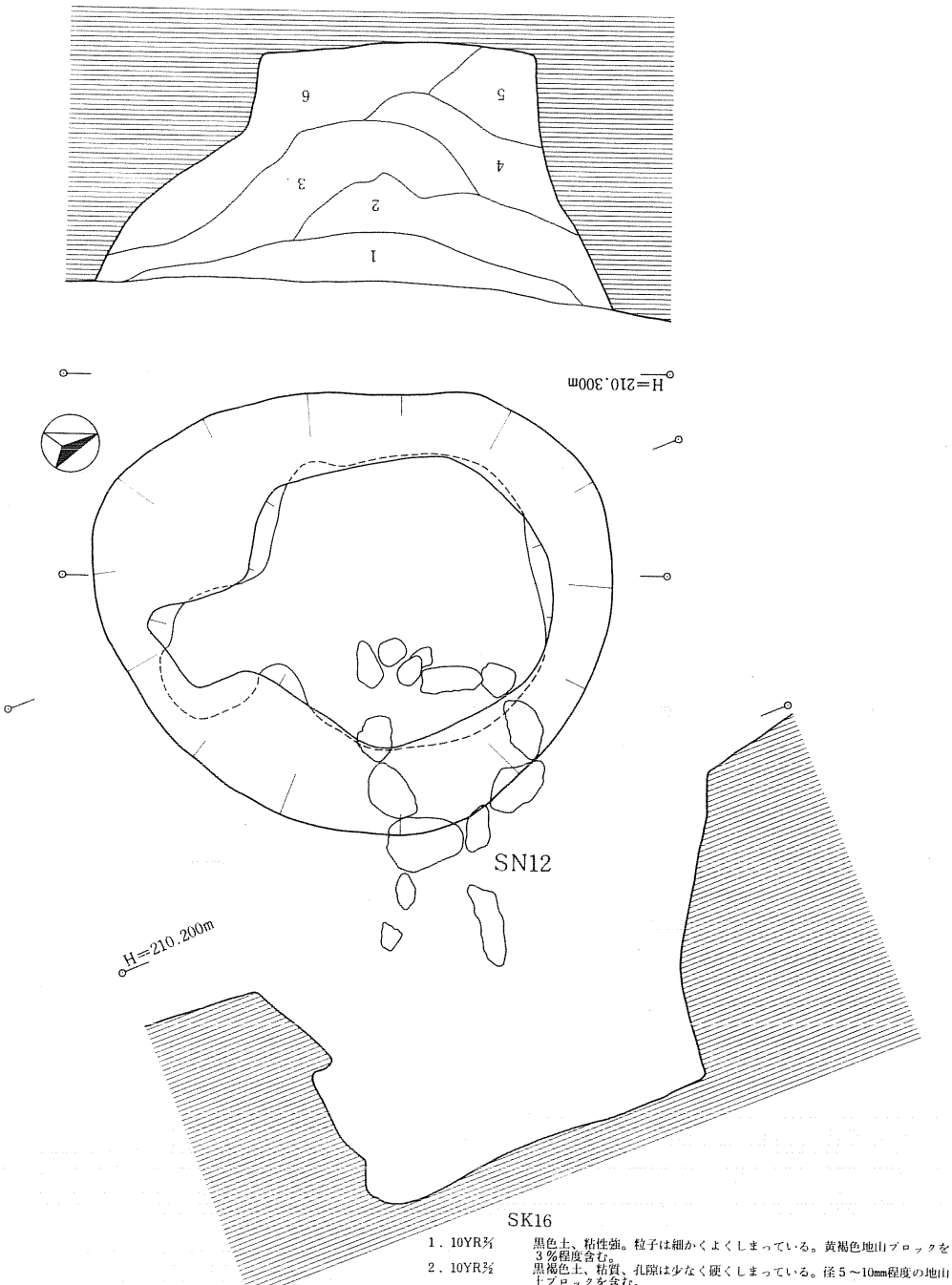
第242図７は工字文の施された鉢形土器である。底部を欠いた口縁～胴部の１／３程度の破片であるが、おそらく低い台の付いた資料であろう。口縁から胴部下半までごく緩く湾曲しなら降りる器形を呈する。口唇上には１箇所にＡ突起が付けられ、ほかにＢ突起が６cm間隔で付けられている。また突起間を沈線が１条巡る。口縁直下には１条の沈線が巡るが、Ａ突起下では上にせりあがって施文されている。さらにその下には幅８mm前後の無文帯が設けられ、頸部文様帯との間を埋めている。頸部の文様帯は口縁部無文帯、縄文施文の胴部との境を限る１条づつの沈線を除いて基本的に４条の平行沈線によって構成される。１条目の沈線には２個１対の粘土瘤が貼り付けられ、４条目の沈線は３条目の沈線を切って２条目の沈線に伸びそれぞれ工字文を作っている。１条目の沈線の粘土瘤の位置、４条目の沈線が上に伸びる位置は口唇上のＢ突起の位置と対応している。胴部にはＲＬ原体を左上―右下の方向で回転した縦走縄文が施文される。内面の調整は丁寧なナデによって行われる。胎土には少量の砂粒を含むが焼成は良好である。口縁内面には厚く煤状炭化物が付着している。

第242図Ｓ５は頁岩製の縦長石匙である。両面からの加工により整形されるが、図右側の面には素材の縦長剥片の主要剥離面が残されている。調整剥離は素材の厚さをある程度薄くするための粗い剥離を加えた後、縁辺に細かな剥離を加えて刃縁形状を整えているが、図右側の面の左下縁は後者の加工のみで終了している。

ＳＫＴ27　（第238図、図版108―４）

ＳＫ25の南側、ＭＧ82・ＭＨ82グリッドで検出した。長軸はＮ－65°－Ｗの方向にあり、長さ340cm、幅37cm、深さ104cmを測る。北西側の長軸端坑外に23×14cmの大きな礫が置かれている。覆土は褐色～暗褐色土を主体とする。

遺構内からの出土遺物はない。



1．10YR3/1　黒色土、粘性強。粒子は細かくよくしまっている。黄褐色地山ブロックを３％程度含む。

2．10YR3/2　黒褐色土、粘質、孔隙は少なく硬くしまっている。径５～10mm程度の地山土ブロックを含む。

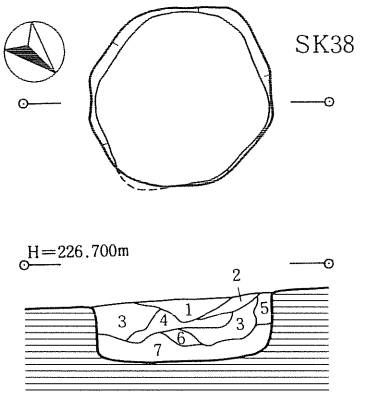
3．10YR3/2～3/3　黒褐色土、粘質、２層よりは孔隙があり、軟質である。混入する地山土のブロックは径が大きく、最大のものでは100mm程の大きさをもつものまで含まれる。

4．10YR3/2～3/3　黒褐色～暗褐色土、粘性は大きく、孔隙も多い、極めて軟質の土。地山土のブロックを含むが、量はさ程多くない。むしろ、細粒となって黒褐色土と混じり合いベースの土を形成している。

5．10YR3/3～3/4　暗褐色土、粘性は大きく、孔隙も極めて多い。４層よりさらに軟質の土。地山土のブロックはほとんど混じっていない。底部近くに堆積する土のため、沢地への伏流水が浸潤して極めて水分を多く含む。

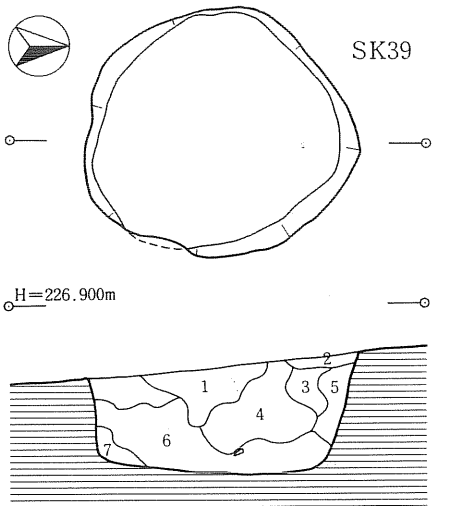
6．10YR3/3～3/3　暗褐色～黒褐色土、粘質で孔隙多く軟質の土。５層より僅かに暗い色調を呈し、少量小径ながら地山土ブロックを混入している。５層同様、底面近くは水分を多く含む。

第236図　SK16土坑



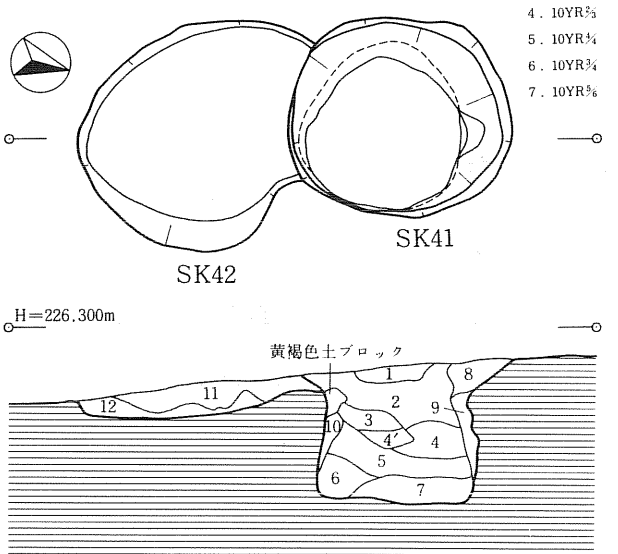
SK38

1．10YR3/1　黒色、粘質、孔隙は少ない。均質でキメ細かな土である。
2．10YR3/3　褐色、粘性大きく、孔隙は少ない。１層に比べやや粗い土質である。
3．10YR3/4　暗褐色、粘質、孔隙が僅かにあり、褐色土粒および黒褐色土粒が混じり合った土。
4．10YR3/2　黒褐色、粘質であるが、孔隙は他の層に比べ多い。キメも比較的粗い。
5．10YR3/6　黄褐色、粘性大、孔隙は少なく、しまっている。壁面からの崩落土。
6．10YR3/3　黒褐色、粘質があるが、４層同様、孔隙があり、比較的キメ粗い。
7．10YR3/4　褐色、粘性大きく、孔隙もある。褐色土をベースとして暗褐色～黒褐色土が混じり合っている土。



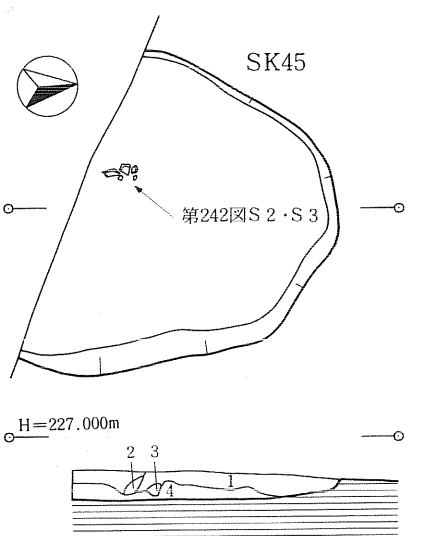
SK39

1．10YR3/2～2/1　黒褐色～黒色、粘性はなく脆いが、孔隙は少なく硬くしまっている。
2．10YR3/4　暗褐色、粘性大、孔隙がややあって軟質、キメ細かな土である。
3．10YR4/3～2/3　にぶい黄褐色～暗褐色、粘性大、孔隙は多く軟質である。褐色土および暗褐色土の混じり合った土。
4．10YR2/3　黒褐色、粘性は大きいが、比較的よくしまった土である。褐色土粒が僅かながら混じっている。
5．10YR4/4　褐色土、粘性大きく、孔隙は少なく、黄褐色土ブロックが上部において多く混入する。壁崩落土。
6．10YR3/4　暗褐色、粘質、孔隙があり、キメは比較的粗い。褐色土粒が混じる土である。また、遺物を含む。
7．10YR5/6　黄褐色、粘性大きく、孔隙は少ない。暗褐色土が混じり合っているが、壁面からの崩落土ブロックが主となる土である。



SK41.42

1．10YR5/4　褐色、粘性あり、よくしまっている。粒子細かい。黄褐色粒混入。炭化物微量混入。
2．10YR3/4　暗褐色、粒子１層より粗い。粘性ややあり、１層より柔らかいが、比較的しまった土である。
3．10YR3/4　暗褐色、２層より粘性あり。礫（径２㎜）混入。
4．10YR4/6　褐色、粘性あり。黄褐色土、黒褐色土が混じり合った土。粒子はやや粗く軟質である。
4′．10YR4/6　褐色、４層より粘性少ない、粒子はやや粗く軟質、黄褐色土の混入が多く４層より明るい色調である。
5．10YR3/3　暗褐色、粘性ややあり。４層より粒子はキメ細かいが、軟質である。炭化物微量混入。
6．10YR2/3　黒褐色、粘性大。粒子はやや粗く柔らかい。黄褐色土粒子が混入している。
7．10YR3/2　黒褐色、粘性大。粒子はやや粗くしまりがない。黄褐色土粒子が混入している。
8．10YR4/6　褐色、粘性ややあり。粒子は細かくしまっている。黄褐色土が混入している。炭化物微量混入、ひげ根が侵入している。
9．10YR5/6　明黄褐色、粘性は小さい。粒子は細かく硬くしまっている。褐色土が混入している。
10．10YR4/4　褐色、粘性あり。粒子はやや粗い。しまりがなく柔らかい土である。炭化物が微量混入している。
11．10YR4/4　褐色、粘性は少ない。ひげ根が入っているが、孔隙は少なくよくしまっている。
12．10YR5/6　黄褐色、粘性は大きい。粒子はキメ細かい。比較的よくしまっているが、11層より柔らかい。

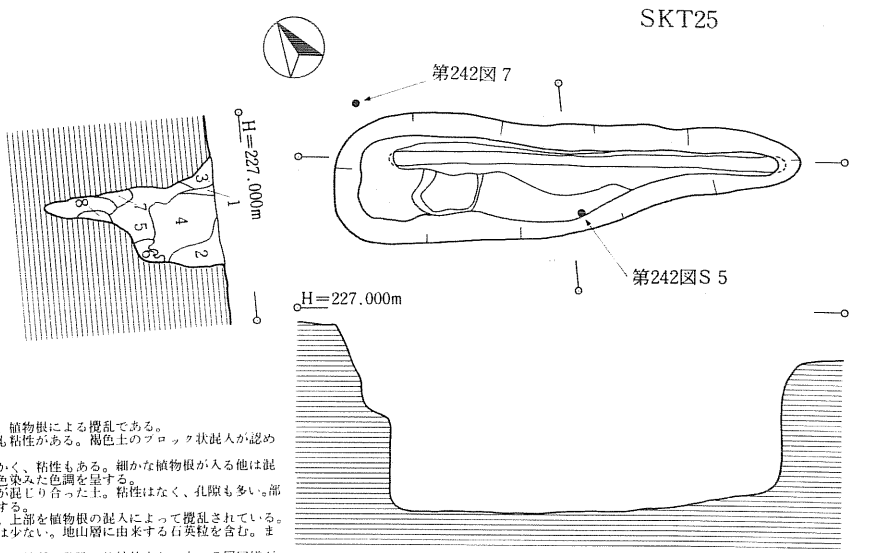


SK45

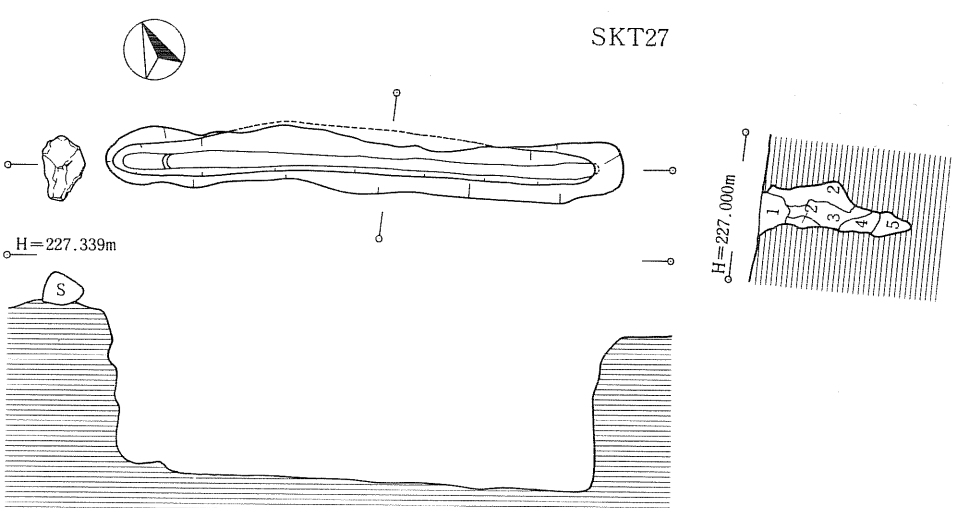
1．10YR5/6　黄褐色、粘質、孔隙少なく、比較的しまっている。炭化物粒を若干含んでいる。
2．10YR5/6　明黄褐色、粘性大、僅かに孔隙がある。１層中に混じった４層土のブロック。
3．10YR5/6　黄褐色、粘質、孔隙は多い。植の攪乱によって４層中に１層の入り込んだ土。孔隙が多くボソボソしている。
4．10YR5/6　明黄褐色、粘性大、キメ細かく、比較的しまっている。上部に僅かばかりの炭化物粒を含む。

0　2 m

第237図　SK38・SK39・SK41・SK42・SK45土坑



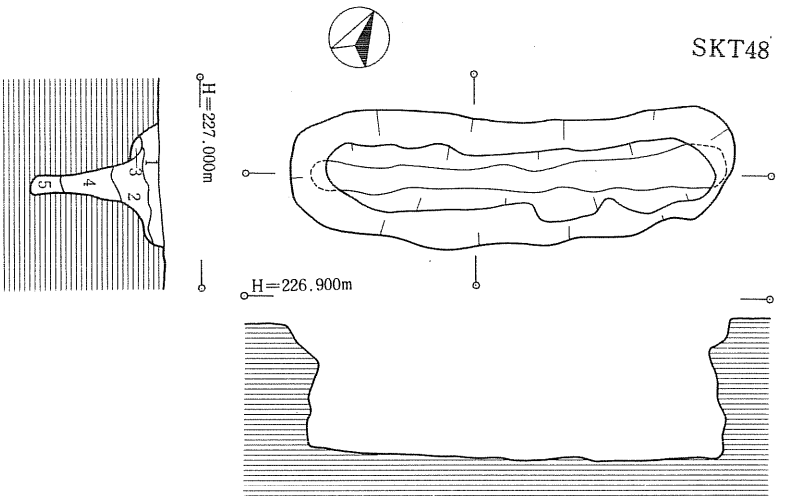
SKT25
1．10YR3/2　黒褐色、孔隙が多く粘性はない。植物根による攪乱である。
2．10YR3/3　黒褐色、キメ細かく僅かながらも粘性がある。褐色土のブロック状混入が認められる。
3．10YR3/2　黒褐色、２層よりさらにキメ細かく、粘性もある。細かな植物根が入る他は混入物はないが、壁際ではやや褐色染みた色調を呈する。
4．10YR3/3　暗褐色、黒褐色土粒と褐色土粒が混じり合った土。粘性はなく、孔隙も多い。部分的に褐色土のブロックを混入する。
5．10YR4/4　褐色、粘性強く、孔隙は少ない。上部を植物根の混入によって攪乱されている。
6．10YR3/2　黒褐色、キメ細かく粘質、孔隙は少ない。地山層に由来する石英粒を含む。また、含水率の高い土である。
7．10YR2/1　黒色、７層よりもややキメ粗いが、粘質で孔隙の比較的少ない土。７層同様石英粒を含む。また、水分に富む。
8．2.5YR8/4　淡黄色、粘質強く、孔隙少ない。壁面地山土の崩れ落ちた土。
※石匙第242図Ｓ５は、壁面にはり付いた状態で出土。



SKT27
1．10YR3/2　黒褐色、粘質、孔隙多く軟質。黄褐色土がブロック状に混入している。地山土に由来する亜角礫を含む。
2．10YR3/4　褐色、粘質、孔隙がいく分あり、軟質。暗褐色土が斑状に混じっている。立ち上がり面の崩落土である。
3．10YR3/4　暗褐色、粘質、孔隙は比較的少ない、しまった硬質の土。褐色土粒が多く混入する。
4．10YR3/2　黒褐色、粘質、孔隙多い。水分を多く含み軟質。地山土に由来する石英粒が多く混じっている。
5．10YR2/1　黒色、粘質、水分を多く含んで軟質。４層同様石英粒を含む。

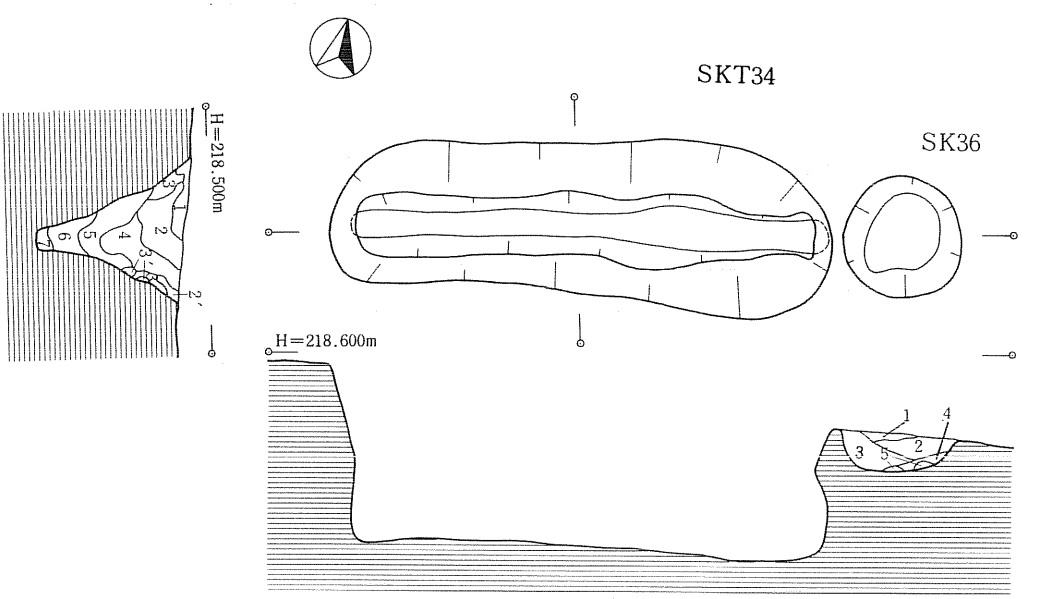
0　2 m

第238図　SKT25・SKT27Tピット



SKT48

1．10YR3/3　暗褐色、炭化粒多し。粘性なく、しまりは強。
2．10YR2/2　黒褐色、明黄褐色土（粘性なし）が混入する。粘性なくしまり強。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色、粘性なく、しまりは弱い。
4．10YR3/3　暗褐色、明黄褐色粘質粒が混入する。非常にかたくしまっている。粘性なし。
5．10YR6/6　部分的に明褐色を呈する。粘性強く、しまりあり。



SKT34

1．10YR1.7/1　黒色、粘性を帯びた土。孔隙は少なく、キメ細かい。比較的硬質の土。
2．10YR2/2　黒褐色、粘質、孔隙は１層より少なくしまった感触を与える。軽石の風化した黄褐色土ブロック（径１～７mm程度）を僅かに含む。
3．10YR3/3　暗褐色、粘性強く、孔隙は少なく、しまった土。黒褐色土と暗褐色土が斑状に混じり合っている。
4．10YR3/3　黒褐色、粘質であるが、疎密があり、全体に硬軟の差が認められる。暗褐色土粒が薄く粒状に入り込んでいる。
5．10YR3/2　黒褐色、粘質、上位では３層に似て土性は柔らかく、また、暗褐色土が斑状に混入する。下位では６層と漸移して硬質でしまった土となる。
6．10YR4/6～5/6　褐色～黄褐色、砂質土、Ⅶ層下位の砂質層壁面の崩落土である。粗く崩れ易い。
7．10YR3/4　暗褐色、粘質、孔隙は少ないが、キメ細かく柔らかい。開口時の流入土であるが、水分に富んでいる。
2′.3′．10YR5/6　黄褐色、粘質強、硬度大、第Ⅶ層に由来する土、ブロック状に埋土内に混じり込んだ土である。3′層がより下位に位置するため、若干砂質に傾く。

SK36

1．10YR3/1　黒色、粘質土、均質でキメ細かく比較的しまっている。
2．10YR3/2　黒褐色、粘性強く、孔隙は少ない。黄褐色土粒が混じっている。
3．10YR3/3　暗褐色、粘性強く、孔隙は少なくしまっている。黄褐色土粒が黒褐色土粒と混じり合って、暗褐色を呈する粘質土となった土。
4．10YR3/2　暗褐色、粘性強く、孔隙少ない。黄褐色土ブロックが少量混入。
5．10YR5/6　黄褐色、粘性強い。地山第Ⅶ層のブロック状混入土。

0　2 m

第239図　SKT48・SKT34Tピット、SK36土坑

ＳＫＴ48　（第239図、第242図Ｓ４、図版108―５、図版112―Ｓ４）

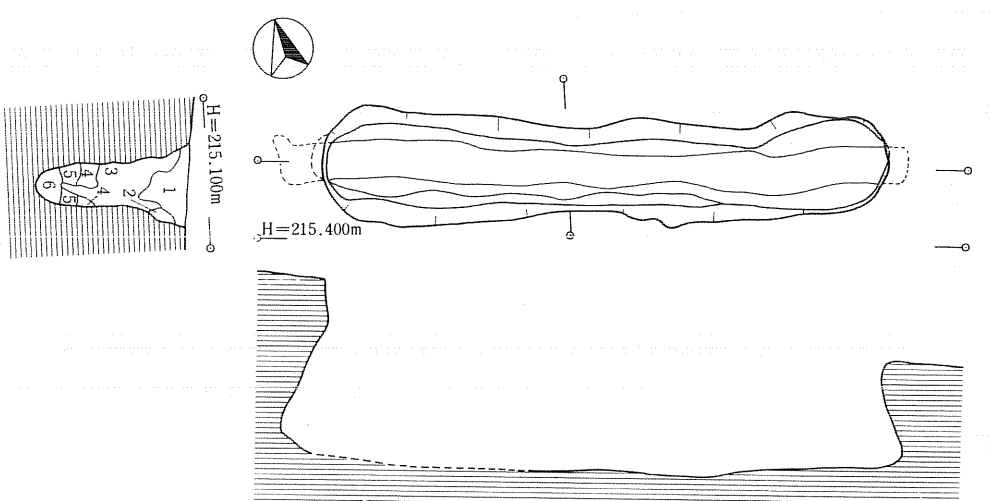
調査区北西端平坦面、南西隅のＮＢ71・ＮＣ71グリッドで検出した。検出地点の周辺はＳＮ22、ＳＮ42の焼土遺構を含む縄文時代後期の遺物包含層が広がっており、その包含層精査中に暗褐色土のプランとして検出した。長軸はＮ－61°－Ｅの方向にあり、長さ292cm、幅78～92cm、深さ112cmを測る。開口部下10～20cmが大きく開きその下が急激にすぼまる横断面形を呈する。覆土は黒褐色～暗褐色土を主体とする。

遺構内から第242図Ｓ４の剥片が出土している。頁岩製の剥片であり、図の上端に点状打面が残り、図左側の面右側縁には逆方向からの数回の先行剥離面が認められる。また、左側縁中央には使用によると思われる細かい剥離が２個所に認められる。左下端の剥片末端は折断されている。

ＳＫＴ34　（第239図、図版108―６）

斜面中腹、ちょうど斜面が回り込むあたり、ＭＩ69グリッド、ＭＪ69グリッドで検出した。長軸の長さ330cm、幅92～104cm、深さ108cmを測る。底部から開口部まで緩く湾曲しながら開く横断面形を呈する。長軸はＮ－77°－Ｅの方向にある。覆土は黒褐色～褐色土を主体とする。土坑外東側にＳＫ36がある。

遺構内からの出土遺物はない。



SKT32
1．10YR3/4　黒色土、比較的よくしまっており、粘質、黄褐色土粒の混入割合は極めて少ない。
2．10YR3/4　褐色土、やや粘質、孔隙は多い。黄褐色土粒と、黒褐色土粒が、混じり合った土であり、ベースとなる黄褐色土は基本層位第Ⅶ層の崩落土である。
3．10YR3/2　黒褐色土、やや孔隙があり、比較的軟質だが、粘性は強い。１層に比べ黄褐色土粒の混入割合が多く、大きいものでは径５mm程のものも含まれる。４、５層への貫入部は植物根によると判断され、やや褐色染みている。
4．10YR5/6　明黄褐色土、孔隙はなく、硬くしまっている。基本層位第Ⅶ層の崩落土であるが、より下層の土に由来し、やや砂質に傾く土である。
5．10YR5/4　にぶい黄橙色土、第Ⅷ層下位の砂層崩落土、崩れやすく脆い。
6．10YR3/2　黒褐色土、開口当時の流入土。僅かに粘性を帯び、孔隙多く軟質である。

第240図　SKT32Tピット

ＳＫＴ32　（第240図、図版108―7）

斜面下の傾斜が緩く変換する付近、ＭＢ67グリッド、ＭＣ67グリッド、ＭＣ68グリッドで検出した。長軸はＮ―71°―Ｗの方向にあり、斜面の傾斜方向に沿うように位置する。長軸の長さ374cm、幅54～78cm、深さ102cmを測る。覆土は黒色～黒褐色土を主体とする。

遺構内からの出土遺物はない。

(3)　石囲炉

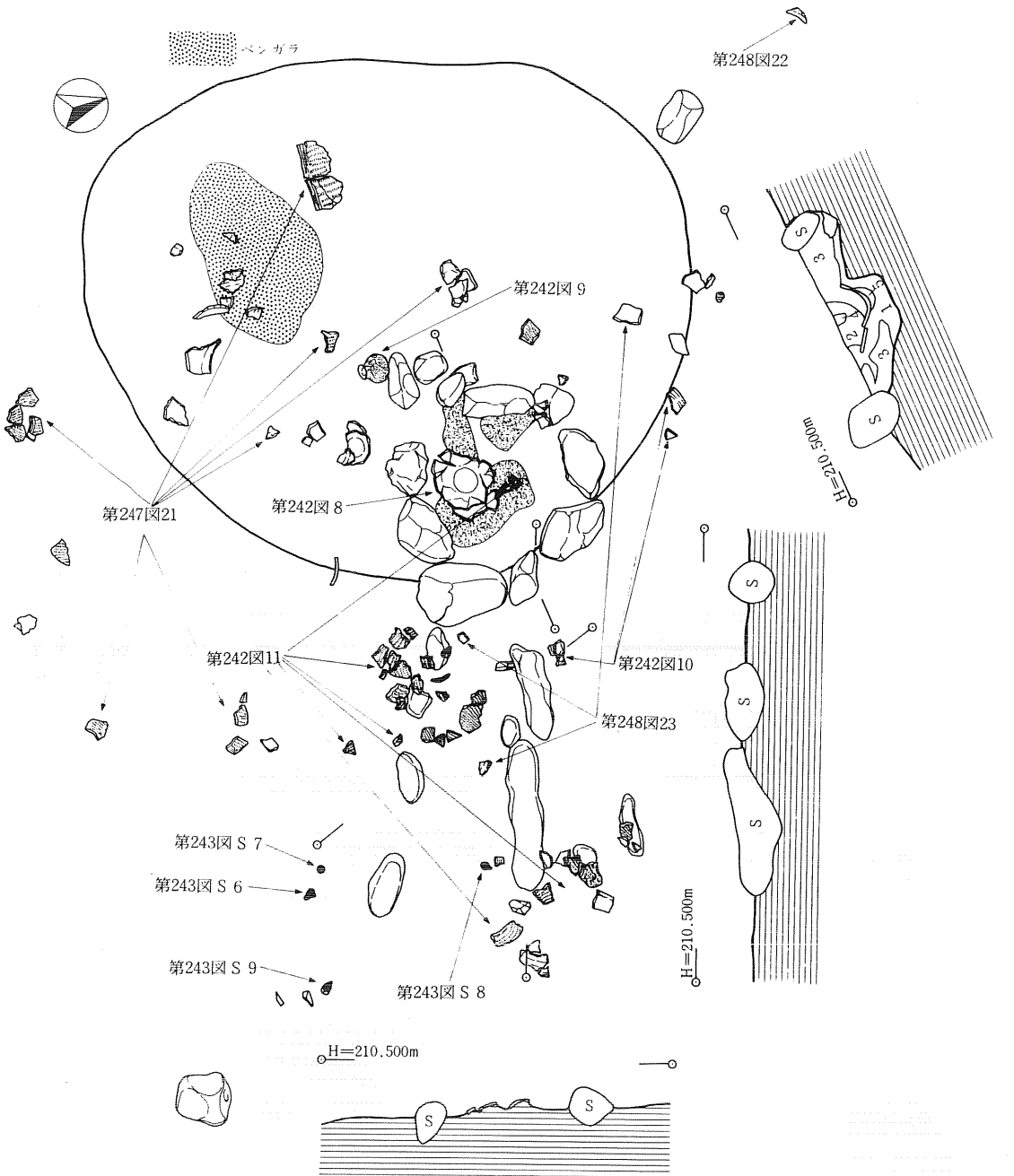
ＳＮ12　（第241図、第242図、第243図、図版109、図版111、図版112）

調査区南東隅の緩傾斜地中央ＬＳ61グリッドで検出した。ちょうどＳＫ09とＳＫ14の中間位置にあたり、ＳＫ16の上に作られている。検出地点は沢頭の頂部にあたり、緩傾斜地の中では最も低く縄文時代晩期の遺物包含層が厚く堆積している。検出はこの包含層を掘り下げる過程で行ったが、はじめ石囲炉東側の２列の河原石列を検出し、その後石囲炉部分を検出した。全体の形状は炉の部分を径65～70cmで13個の河原石で囲い、その東側に15～30cmの間をおいて、北側には２個の長大な礫を南側には４個の楕円礫および角礫を配している。炉に組まれた礫は明らかに火を受けている。炉の西側には径57×34cmのベンガラ散布範囲が検出された。周辺には遺物が多く、第243図Ｓ６～Ｓ９のスクレーパー、磨製石斧などが炉の東側から出土している。炉の内部には深鉢形土器の底部（第242図８）が埋め込まれ周囲は焼土化している。また、炉の南西隅からは小形の壺形土器（第242図９）が、北東側から浅鉢形土器（第242図10）、南東側から深鉢形土器（第242図11）が出土している。

第242図８は深鉢形土器の底部である。底面は幾分揚げ底ぎみとなる。器面に施される縄文原体はＲＬが用いられ、横位回転により斜行縄文が表される。胎土には砂粒を含む。二次火熱により器面全体が剥落しやすく、また脆くなっている。

第242図９は小形の壺形土器である。口縁上端は外側に開き内面に１条の沈線が巡る。頸部は縦位のミガキ調整によって無文研磨され、胴部はその半ばより僅かに下で最大径をもつ。胴部に施される縄文原体はＲＬを用いて主に左上―右下の方向で回転して縦走する縄文を施している。内面調整はおもに横位に行われているが、口縁内面と胴部下半はミガキ調整によって平滑にされ、頸部～胴部上半はケズリ調整が施されている。胎土は精選された粘土が用いられ、焼成は良い。

第242図10は無文研磨された浅鉢形土器である。口縁部は幅１cm程度の粘土帯を接合して作り出している。この口縁上には１個のＡ突起が設けられその両側にＢ突起が貼り付けられている。Ｂ突起はこのＡ突起の両側以外にもおよそ６cm間隔で付く。口唇上と口縁内面には１条づつの沈線が巡っている。口縁直下は粘土接合痕を横位にナデて調整し僅かではあるが凹んでいる。胴部から底部底面にかけては横位のミガキ調整により研磨されている。内面も横位のナデ

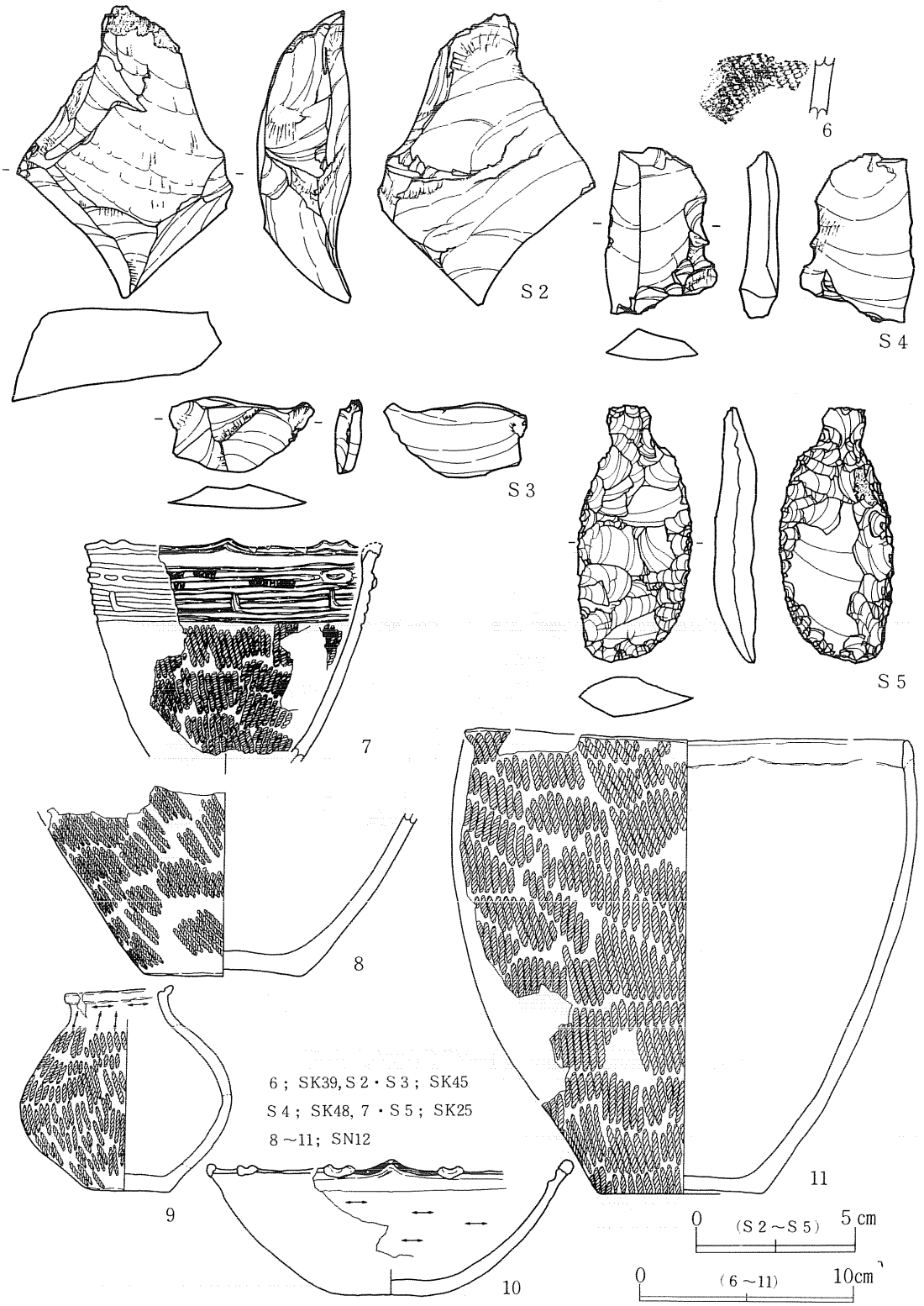


SN12

1．7.5YR5/6　明褐色土。焼土。粘性弱。きめ細かくよくしまっている。10YR5/2黒褐色土を含む。
2．10YR2/1　黒色土、粘性ややあり、粒子はきめ細かくしまっている。焼土粒子が微量点在している。
3．10YR1.7/1　黒色土、２層よりやや粘性あり。軽石（直径約５㎜）を少量含む。粒子は２層より粗くしまりがない。
4．10YR1.7/1　黒色土、粘性弱。粒子は粗くもろい。しまりがない。根の痕跡か？
5．10YR1.7/1　黒色土、粘性強。キメ細かくよくしまっている。

0　1 m

第241図　SN12石囲炉



第242図　遺構内出土遺物(2)

により丁寧に調整される。胎土には細かな砂粒を含み、概して緻密であり、焼成も良好である。

第242図11は全面縄文の施された深鉢形土器である。口縁部はやや内傾ぎみに立ち上がり、胴部でごく緩いカーブを描いて降りる。底部は僅かに揚げ底ぎみとなる。口縁内面は内傾ぎみに作るための粘土の接合痕跡が残されている。器面に施される縄文原体はＲＬを用いるが、口縁部では横位に回転して斜行縄文を、胴部では左上―右下の方向で回転して縦走する縄文が表される。内面の調整は横位ないし斜位に丁寧に施されている。胎土にはごく少量の砂粒を含み、焼成は良い。

第243図Ｓ６はメノウ製のスクレイパーである。両面とも周縁からの調整剥離でバチ形になるよう仕上げているが、図左側の面には素材の表面の礫皮部分が残されている。また図右側の面では連続した小孔面が認められる。これは節理面か焼け弾け面のいずれかであるが、後者である場合は加熱による剥離を二次加工に利用した可能性がある。

第243図Ｓ７は第243図Ｓ６と同じ母材から得られたメノウ製のスクレイパーである。同じく両面とも周縁からの剥離によりバチ形の形状に整形している。図左側の面にはやはり礫皮の自然面が残るが、図右側の面にはタール状の付着物が広く認められる。

第243図Ｓ８もまた第243図Ｓ６、Ｓ７と同じ母材からの剥片を用いて作られたメノウ製のスクレイパーである。やはり両面ともに周縁からの調整剥離で整形するが、図上端には素材を折断した面が残されている。図左側の面には自然面が残り、図右側の面には節理面あるいは焼け弾けによる連続した小孔面が残っている。

第243図Ｓ９は黒色頁岩製の磨製石斧である。両面との中軸線に対して30～35度の角度で調整痕が残され、刃部には刃縁と平行な調整痕と直角の使用痕が残されている。側縁は長軸線に対してやはり30度前後の角度の調整痕が残る部分と、平行な調整痕が残る部分とがある。基端の調整は行われていない。

(4)　焼土遺構

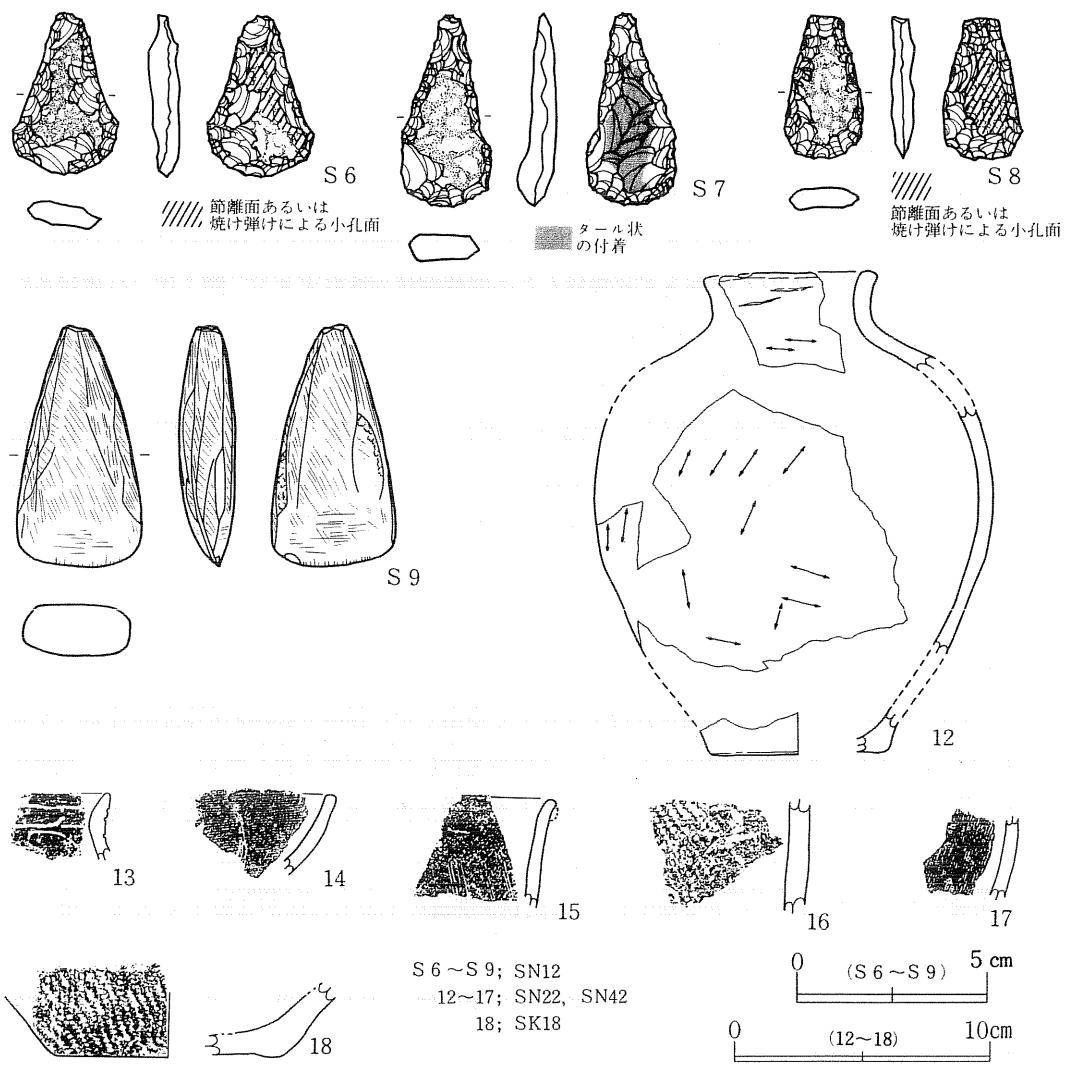
ＳＮ22　（第244図、図版108―８）

調査区北西端平坦面の南西隅ＮＢ72グリッドで検出した。径62×46㎝の不整形に広がった焼土である。焼土は本遺構周辺での縄文時代後期の遺物包含層が焼土化したものであり、程度の差によって３層に分けられる。うち、中央からやや東に寄った部分にその中心がある。

ＳＮ42　（第244図、第243図12～17、図版111―12～17）

ＳＮ22北側ＮＢ73グリッドで検出した。径114×66㎝の不整形に広がる焼土である。焼土の広がる範囲の東半は径65×40㎝、深さ９㎝程の凹みがあり、その凹み内の北側に12×20㎝で堅く焼け締まった面が認められた。また、焼土面の東外側には径26×28㎝、深さ３～５㎝の遺構形成面の凹みが確認されている。

第243図12～17はＳＮ22、ＳＮ42の周辺、主に両遺構の間から出土した土器である。第243図12は無文研磨された壺形土器である。頸部から口縁部分にかけて外反して立ち上がり、胴部はその上半部分で大きく曲線を描くが下半分はごく緩いカーブで下りる。外面は丹念なミガキ調整によって研磨され、内面は口縁～頸部にかけてミガキ、胴部はケズリによって調整されている。胎土は細砂粒を含むが概して精選された粘土が用いられ、焼成も良好である。13は鉢形土器の屈曲外反する口縁部破片である。口縁下には沈線が２条巡りさらに下部にも沈線文が描かれている。14は小形浅鉢形土器であり、器面はミガキに近い横位のナデ調整によって無文研磨されている。15はやや外反する深鉢形土器口縁部片である。口縁端外面には粘土紐の貼り付け痕跡が残り、胴部には縦位の条線が施文される。16はＬＲ縄文の施された深鉢形土器胴部片、



第243図　遺構内出土遺物（３）

17は縦位のミガキ調整が施された無文の小形土器胴部片である。

2　弥生時代以前（浮石降下以前）の検出遺構

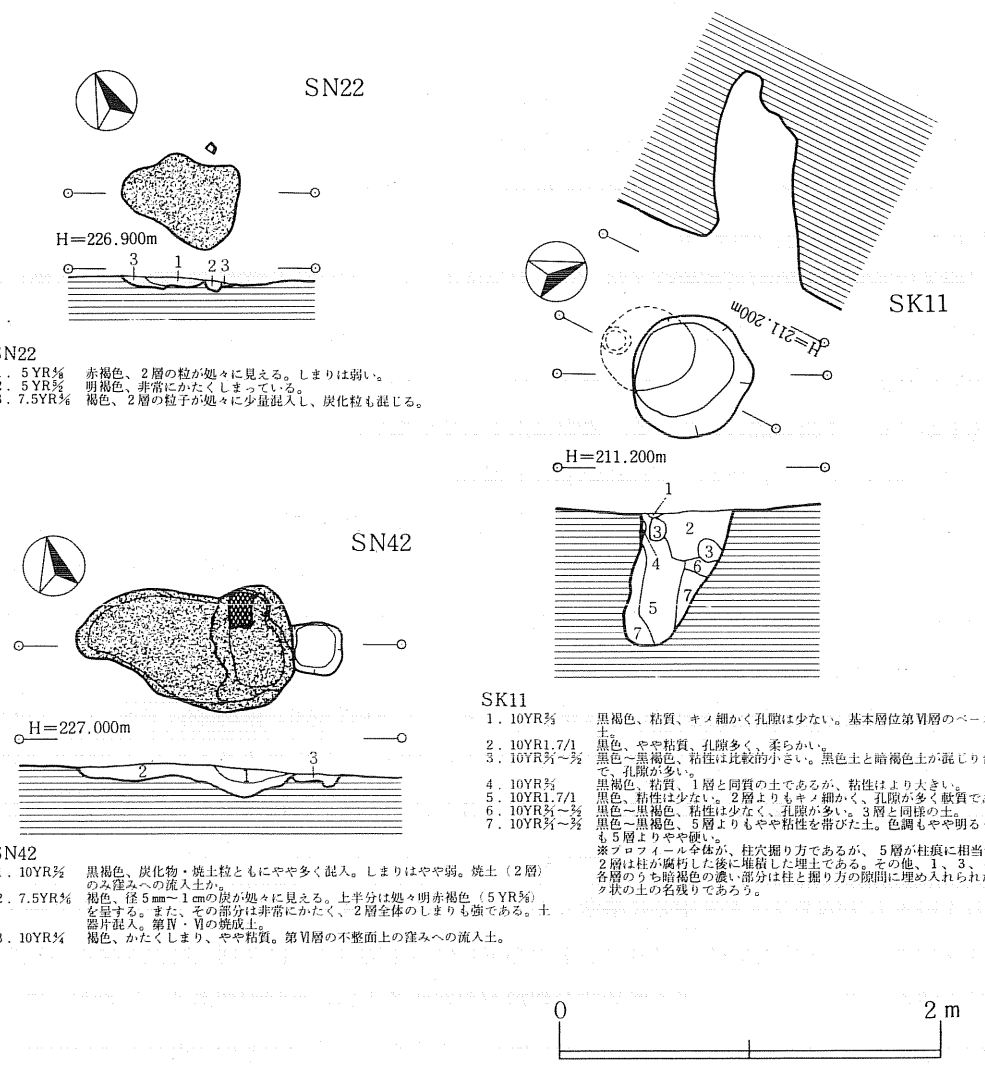
(1) 土　　坑

ＳＫ11　（第244図）

調査区南西隅の緩傾斜地、ＬＴ63グリッドで検出した。柱穴状の土坑である。開口部径66×62cm、深さ62cmを測る。開口部分から斜めに掘り込まれ、底面には１段段差がある。覆土は柱痕跡と柱と掘り方の間に埋め込まれた土にそれぞれ相当する層がある。出土遺物はない。

ＳＫ19　（第245図、図版110―１）

調査区北西端平坦面の斜面への降り際、ＭＬ76グリッドで検出した。開口部は径110×106cm



第244図　SN22・SN42焼土遺構、SK11土坑

のほぼ円形を呈し、深さ26cmの規模をもつ。覆土は５層に分かれ、黒褐色～暗褐色土が主体となる。出土遺物はない。

ＳＫ28　（第245図、図版110－２）

斜面下の傾斜が変わる付近、ＭＤ68グリッドで検出した。平面形は径150×104cmの楕円形を呈し、深さは16cmを測る。底面中央からやや北に寄った部分に径37×30cm、深さ４cmの小穴がある。遺物は出土していない。

ＳＫ29　（第245図、図版110－３）

ＳＫ28の南側、ＭＤ67グリッドで検出した。平面形は176×106cmの隅の丸くなった長方形を呈し、深さは20cmを測る。覆土は黒褐色～暗褐色を呈し、地山中にある角礫が含まれている。底面西側に径16×20cm程の円礫がある。遺物は出土していない。

ＳＫ36　（第239図）

斜面中央、ＭＩ69・ＭＩ70グリッドで検出した。ＳＫ34の東側に位置する。径80×78cm、深さ26cmを測り、平面形は円形、断面形は鍋底形を呈する。覆土は黒色～黒褐色土を主体とするが、底面近くには地山土に似た黄褐色土が堆積する。遺物は出土していない。

ＳＫ46　（第245図、図版110－４）

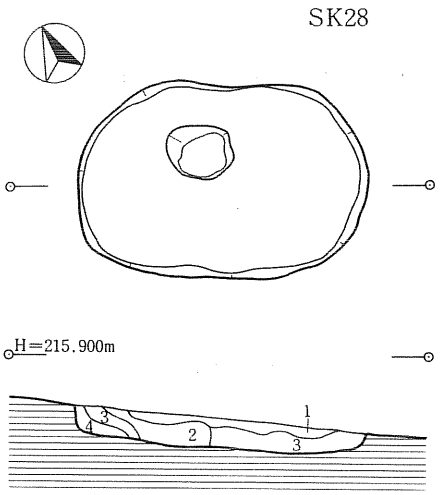
調査区北西端平坦面の北側ＭＪ79グリッドで検出した。ＳＫ19と同様、斜面への降り際に位置する。平面形は径192×176cmの円形を呈し、深さ60cmを測る。底面は平坦である。覆土は黒褐色～暗褐色土を主体とし、５層に分けられる。最下層の５層中には壁面の崩落土である黄褐色土がブロック状に混入している。遺物は出土していない。

３　縄文時代・弥生時代の遺構外出土遺物

Ｂ区での縄文時代・弥生時代の遺物の分布状況には第１節３で述べたように、地点によって時期的な偏在傾向をうかがうことができる。以下では縄文時代晩期の遺物が主体となる調査区南東側の緩傾斜地と、縄文時代後期、弥生時代の遺物が出土した調査区北西端平坦面および斜面とに分けて記述する。

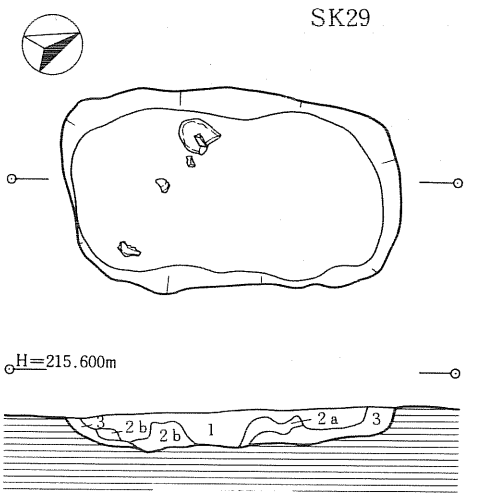
(1)　調査区南東側緩傾斜地の出土遺物　（第246図～第250図、第253図、図版112～114）

この区域で出土した土器は縄文時代前期、縄文時代晩期、弥生時代のそれぞれの時期に属するが、その主体は検出されたＳＫ09、ＳＫ14、ＳＮ12の３基の遺構内出土のものも含め縄文時代晩期後葉の土器である。特に沢頭を囲むＬＲ60・ＬＲ61・ＬＳ60・ＬＳ61・ＬＳ62・ＬＳ63・ＬＴ61・ＬＴ62グリッドを中心に濃密である。他の時期、縄文時代前期の土器はこれら縄文時代晩期後葉の遺物集中域からは外れ、また弥生時代の土器は出土区が縄文時代晩期の遺物集中域と重なっているものの、ごく断片的な資料が混在するといった状況である。したがって、この区域で出土した石器については縄文時代晩期後葉以外の異時期のものが混在する可能性はほ



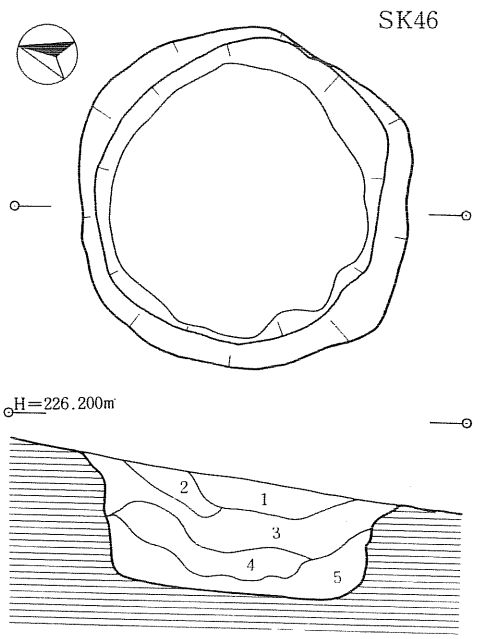
SK28

1．10YR3/1　黒色土、粘性弱。暗褐色土がブロック状に混入。しまりは弱い。
2．10YR3/2　黒褐色土、粘性弱。地山粒、ブロック（粘質）が混入。しまりはやや弱。
3．10YR3/4　暗褐色土、粘性無。地山ブロック（粘質）を多量、１層の黒色土を少量混入。しまりはやや強。
4．10YR3/4　暗褐色土、粘性無。地山ブロック（粘質）を多く混入し、かたくしまる。炭化物粒少量含む。



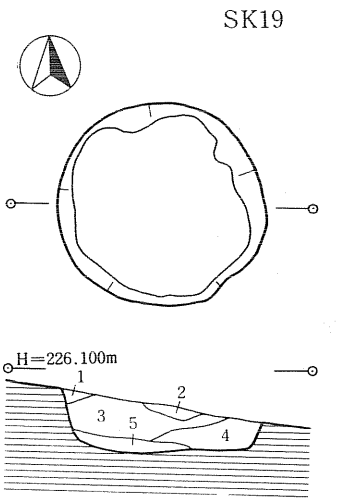
SK29

1．10YR3/2　黒褐色土、粘性無。地山粒が少量混入し、しまりあり。
2．10YR3/3　黒褐色土、a、粘性無。地山粒が多く混入し、しまりはやや弱。
b、粘性無。地山ブロック（粘質）が多く混入。しまりやや弱。
3．10YR3/4　暗褐色土、粘性無。地山ブロック（粘質）が多く混入。炭化物が混入。しまりは弱。



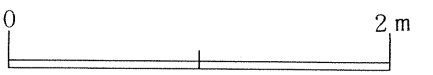
SK46

1．10YR3/4　暗褐色、粘質、地山粒子が若干量混入している。孔隙があり、砂礫（径10～20mm程のもの）を少量含む。基本層位第Ⅳ層の土。
2．10YR3/3　黒褐色、粘性少なく、サラサラしている。孔隙は比較的多く、キメ細かい。砂礫の混入は少ない。
3．10YR3/3～4/6　暗褐色～褐色、粘性少なく、孔隙も多い。地山土粒子、炭化物粒を少量含む、砂礫の混入最も多い。
4．10YR3/3　暗褐色、やや粘質、孔隙僅か。黄褐色土粒がごく少量混入する。砂礫の混入は少ない。
5．10YR3/3　暗褐色、僅かに粘性を帯びた土。黄褐色土のブロックがとくに壁際に多い。砂礫の混入は少ない。



SK19

1．10YR3/4　暗褐色、粘性はほとんどなくサラサラしている。孔隙も多い。根による攪乱で地山褐色土と黒褐色土の混じり合った土。
2．10YR2/3　黒褐色、僅かに粘性を帯びる。孔隙は比較的少ない。炭化物を若干含む。
3．10YR2/2　黒褐色、粘質土、孔隙は少なくしまっており、キメ細かい。一部褐色土（粒子の細かい土）のブロックを混入する。
4．10YR3/3　暗褐色、粘質、孔隙は多く、軟質の土である。褐色土粒が混入する。
5．10YR3/4　暗褐色、粘質で孔隙多い。褐色土を含む、地山に由来する角礫が混在する。



第245図　SK28・SK29・SK46・SK19土坑

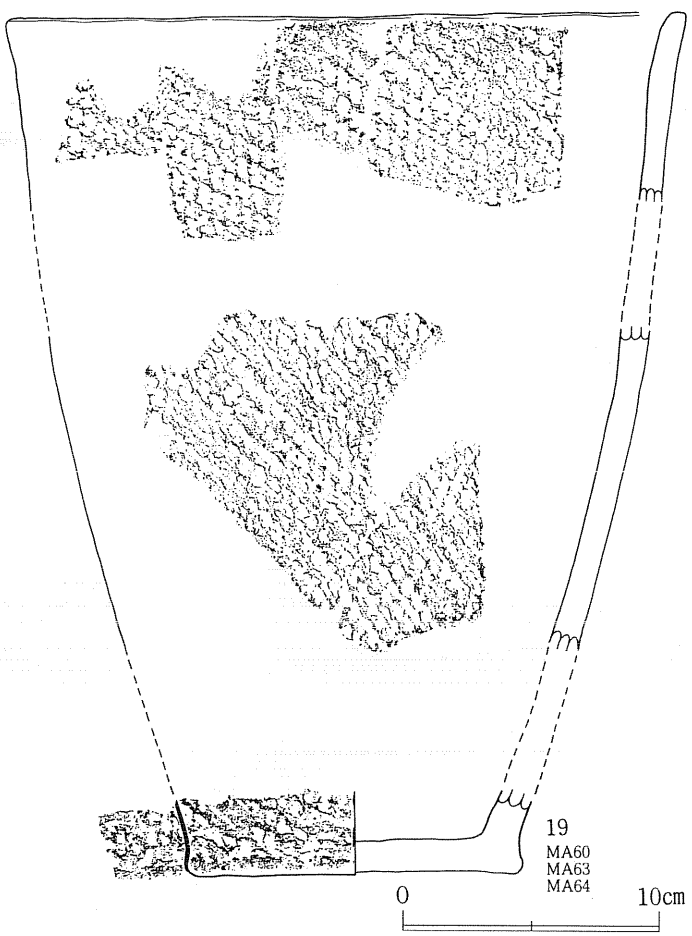
とんどないと予想される。以下、土器、石器の順で記述する。

第246図19は縄文晩期後葉の遺物集中域から北北西に外れたＭＡ60・ＭＡ63・ＭＡ64グリッドで出土した円筒形の深鉢形土器である。口縁部で僅かに外反するが以下は底部まで直線的に下りる。器面にはＲＬＲの原体を横位に回転して複節の斜行縄文が施紋される。底面には僅かながら網代痕が観察される。内面の調整は横位のナデによって行われている。器壁は厚く、繊維および砂粒が含まれるが、焼成は良好である。

第247図20〜第248図27は縄文時代晩期後葉の遺物集中域から出土した該期の土器である。

第247図20は胴部全面が縄文施文の深鉢形土器である。口縁部は内傾し胴部はごく緩い曲線を描いて下りる。口唇部は10〜15㎜間隔で削り込まれて小波状を呈する。口縁の内傾部分は横位のミガキ調整で研磨され、胴部との境に段差が作られる。胴部にはＲＬ原体を横位に回転した斜行縄文が施文されるが、一部に縄文施文前に施されたハケメの痕跡が残る。また、口縁の無紋部分の直下に２個１対の突起が５単位貼り付けられる。底部底面はやや揚げ底ぎみに作られる。内面の調整は丁寧な横位のナデによって行われている。胎土には細かな砂粒を少量含むが、焼成は良好で堅緻に仕上がっている。

第247図21は口頸部に平行沈線による文様帯をもった深鉢形土器である。口縁上端は直立し口頸部は内傾して立ち上がる。胴部は緩い膨らみをもって下り底部底面は揚げ底ぎみに作られる。口唇上は３〜４㎜間隔で刻み込まれ小波状を呈し、内面には１条の沈線が巡る。口頸部には３条の平行沈線が巡り沈線間は丹念に

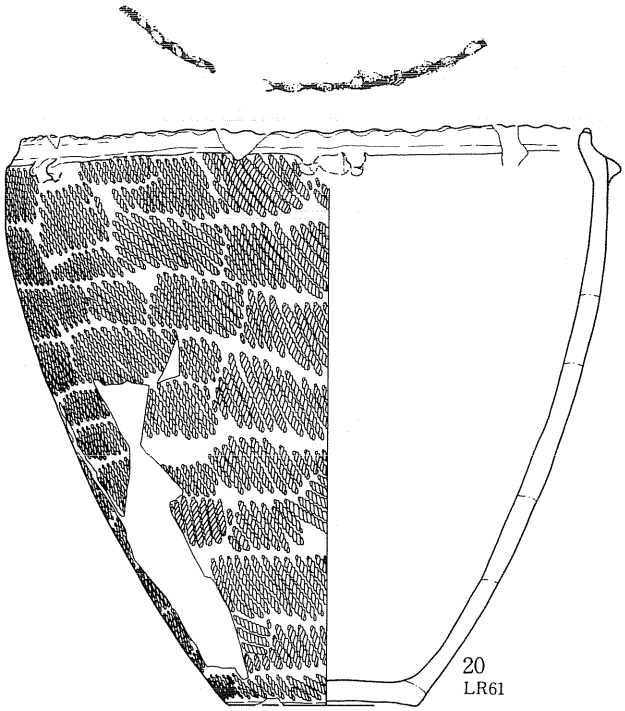


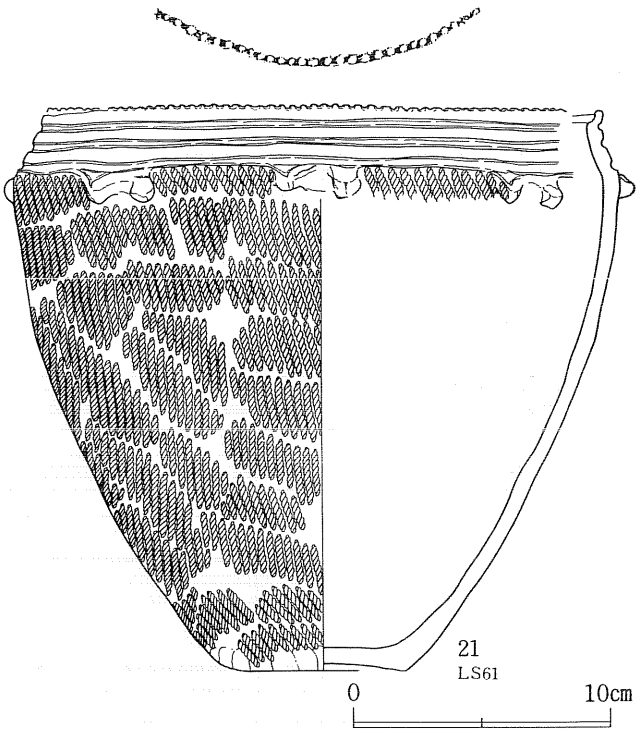
第246図　緩傾斜地遺構外出土遺物（１）

ミガキ調整が施される。口頸部と胴部の境には２個１対の突起が７単位貼り付けられ、それぞれの左側の１個の上は口頸部の３条目の沈線に接続して三叉にえぐり込まれる。胴部の縄文はＲＬ原体が用いられるが、胴部の上端では横位に、以下では左上―右下の方向で回転されている。底部外面は指頭で押さえた痕跡が残る。内面調整は横位のナデによって丁寧に行われている。胎土には細砂粒を少量含み焼成は良好である。

第248図22は無文研磨された壺形土器である。胴部下半から底部を欠失するが、頸部から口縁部にかけてわずかに外反しながら立ち上がり、胴部はその上半部に最大径をもって張り出す。口縁内側は幾分肥厚するが、１条の沈線が巡りその上に爪形文列が施文される。頸部と胴部の境に２条の平行沈線が巡る。内外面はミガキ調整によって研磨される。胎土は精選された粘土を用いて製作されるが、仕上げに際し化粧塗りされており、部分的な剥落も認められる。焼成は良好である。

第248図23は大形の壺形土器である。口頸部を欠失するが、胴部はその上半に最大径をもち、下半はほぼ直線的に下りる。内外面と

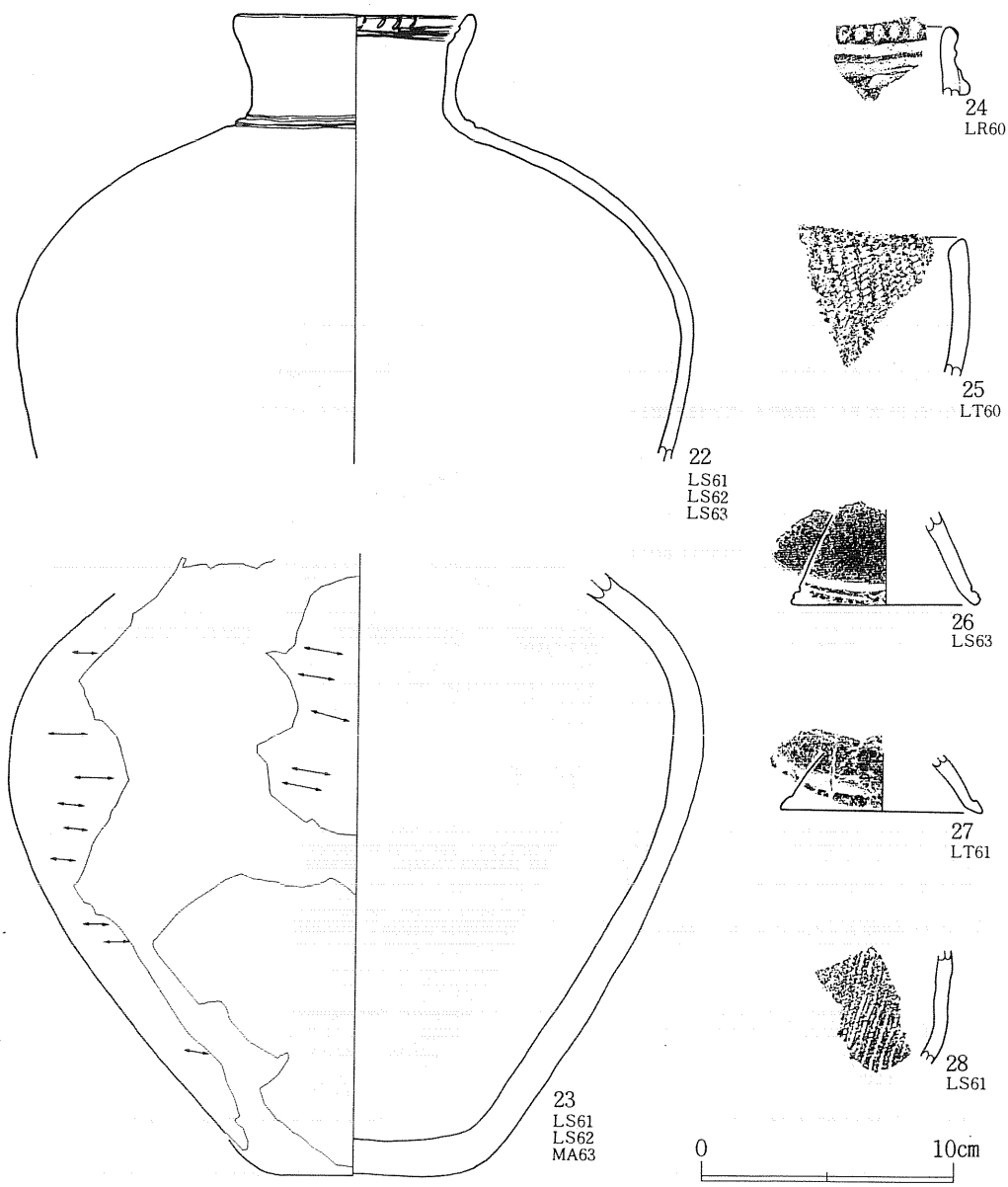




第247図　緩傾斜地遺構外出土遺物（２）

も横位のナデによって調整されている。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。

第248図24は第247図21と同様やや内傾する鉢形土器の深鉢形土器口縁部破片である。口唇部には刻目列が施され、その直下を沈線が巡る。頸部の屈曲部分には粘土瘤が貼り付けられている。25は内湾内傾する深鉢形土器口縁部破片である。縦走するＲＬ縄文が施されている。26、27は鉢形土器に付けられた台部である。26は縦位のミガキ調整が丹念に施され、底縁を１条の沈線が巡る。27は粗いナデによって調整され、底縁の張り出しも指頭を底縁端に当てて作りだ



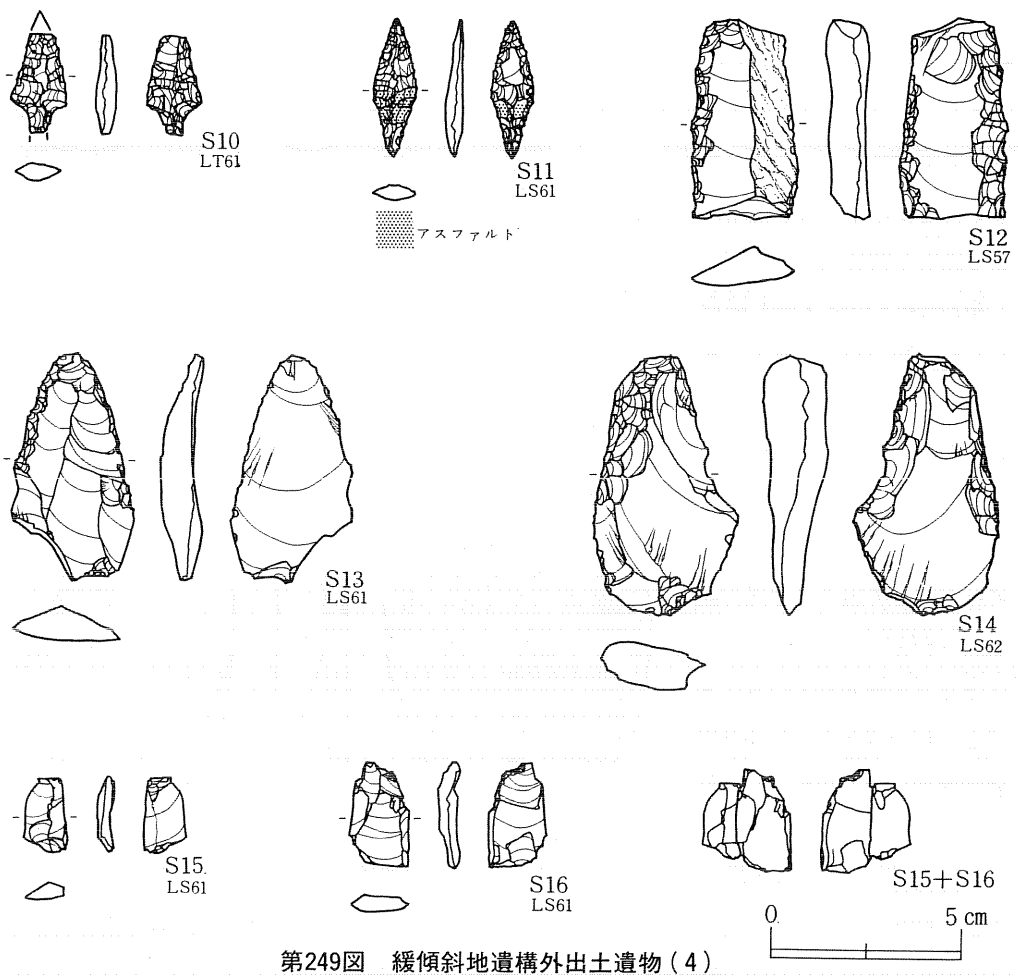
第248図　緩傾斜地遺構外出土遺物（３）

している。

第253図41は条間のあく縄文を施文した土器で、縄文時代晩期遺物集中域に混在した弥生時代の土器である。深鉢形土器の胴部片と推定されるがいびつな断面形を呈する。器壁は薄く、砂粒を含むが焼成は良い。

第249図Ｓ10は頁岩製の石鏃である。先端および茎部を折損する。調整両面ともに丹念に施され、素材の表面、主要剥離面ともほとんど除かれているが、図左側の面中央にごく僅かに素材主要剥離面が残されている。本胴部分の剥離は両側両面とも対向して施された剥離により中軸線上に稜が作られるよう整形されている。

第249図Ｓ11は頁岩製の石鏃である。平面形は柳葉形に近いが、素材に加えられた調整剥離が本体部分と茎部分とで異なっている。本体部分は両側両面から浅い剥離が施され直線的な縁辺が形作られるが、茎部分は両面交互に比較的深い剥離が施されて鋸歯状の縁辺が形成されている。また本胴部分には図左側の面中央に素材剥片の主要剥離面の一部が残されている。本体



第249図　緩傾斜地遺構外出土遺物（４）

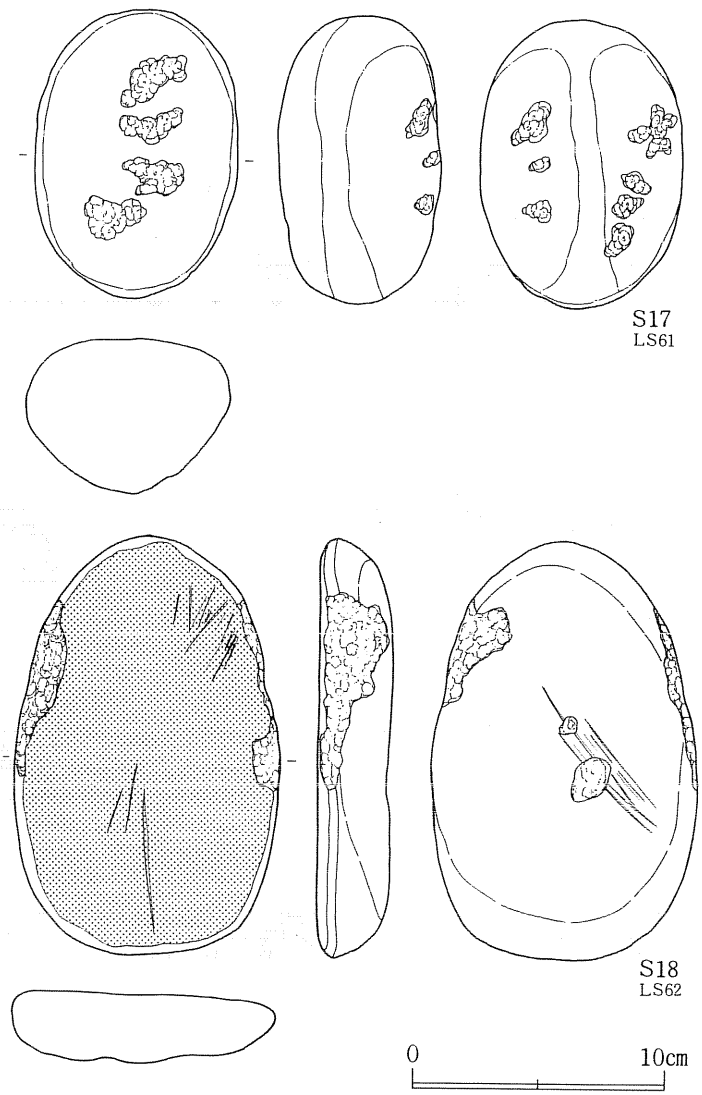
部分と茎部分との境にはアスファルトの帯状の付着が認められる。

第249図Ｓ12は頁岩製の縦長剥片を利用したスクレイパーである。末端側が折断されているほかは素材の形状がほとんどそのままに残されており、図左側の面の左側縁は両面から、右側縁は表面から連続した浅い剥離が施されている。

第249図Ｓ13は頁岩製の縦長剥片を素材としたスクレイパーである。素材の打面はそのままに残され、両側縁に主要剥離面側から連続した細かな剥離を加えて刃縁を作りだしている。末端側は図左側の面の左側が折断されているほか、右側は表面から比較的強い加撃を一回加えた後、主要剥離面側から２～３回の細かな剥離を施している。

第249図Ｓ14は頁岩の縦長剥片を利用したスクレイパーである。素材剥片の打面は残されるが、打面に近い肉厚部分の両側縁には階段状剥離が施されて石器基部が作り出されている。末端側はその先端に僅か数回の調整剥離が加えられているが、素材の鋭利な縁辺がそのまま刃縁として利用されていたものと見られ、使用による微細な剥離が認められる。

第249図Ｓ15はＳ16と接合した頁岩製の剥片である。第249図Ｓ15の図左側の面右側縁と第249図Ｓ16の図左側の面左側縁とが接合する。第249図Ｓ15の図左側の面下端には対向して施された先行剥離面の末端がヒンジフラクチュアとなって残されている。Ｓ15とＳ16の接合面はＳ16の主要剥離面の一方の端（図右側の面右端）とＳ15の図左側の先行剥離面であり、Ｓ15の接合面と同様な面はＳ16の図左



第250図　緩傾斜地遺構外出土遺物（５）

側の面右側縁にも残されているため、石核からのはぎ取りは打面位置から見て右回りの方向で行われたと推定される。

第250図Ｓ17は安山岩製の凹石である。図左側の面には縦位に４箇所の凹みが、図右側の面には左側面に３箇所、右側面に４箇所の凹みが認められる。

第250図Ｓ18は凝灰岩製の磨石である。図左側の面全面が平滑に磨き上げられている。逆の面には２箇所に凹みが認められ、また中軸線に対して斜位の擦痕も認められる。

(2)　調査区北西端平坦面、斜面の出土遺物　（第251図～第256図、図版114～図版117）

調査区北西端平坦面から斜面にかけてはおもに縄文時代後期前葉と弥生時代後期の土器が出土している。縄文時代後期前葉に属する土器の分布は遺構の集中した平坦面南西隅に中心があるが、平坦面上の他の区域や斜面にも広がっている。また弥生時代後期の土器は出土量ははるかに少ないもののやはりこの平坦面上に点在し、両者の分布域を峻別することはできなかった。したがって石器に関しては一応この両時期にまたがるもののあることも考えておきたい。

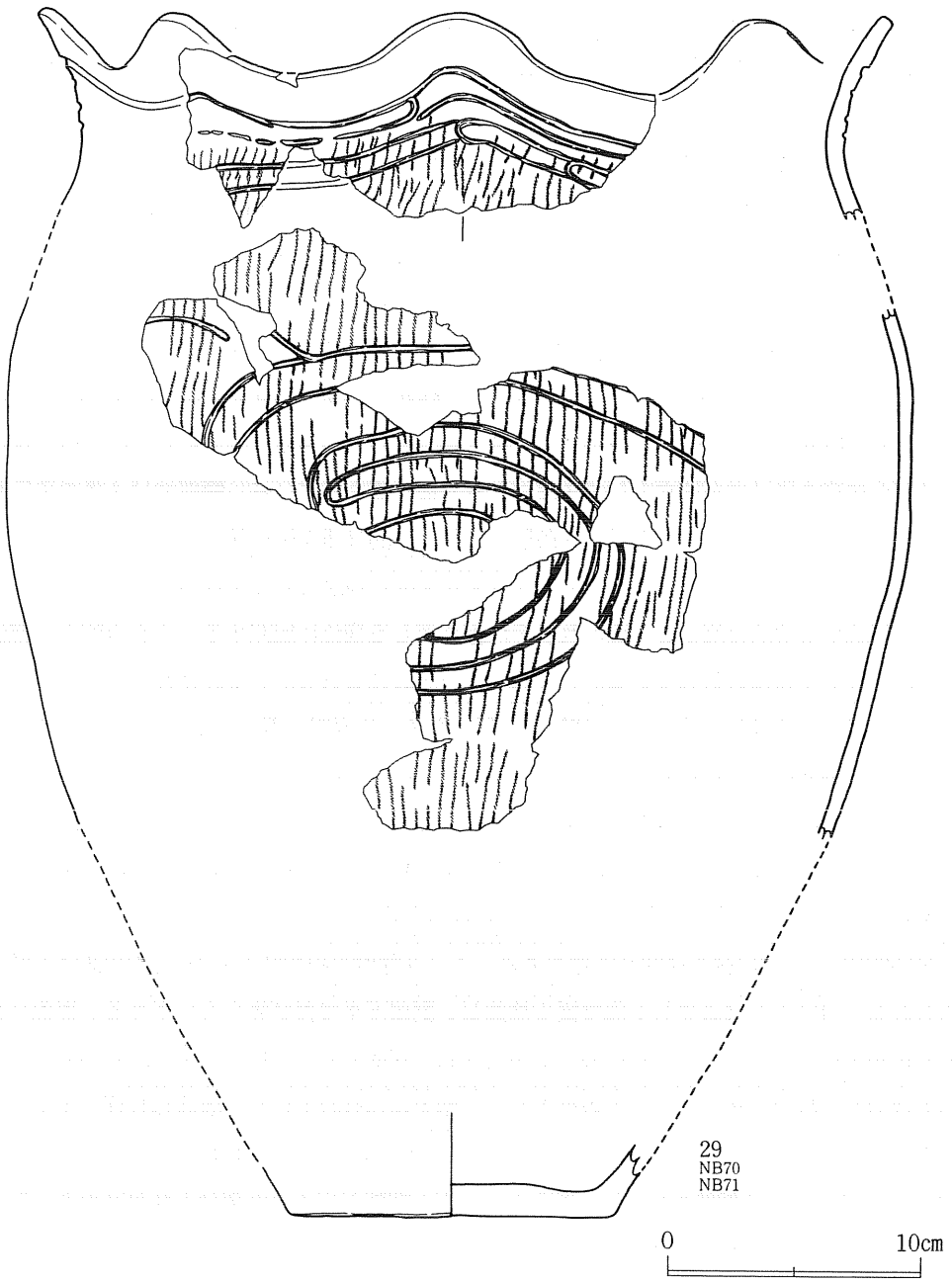
第251図29は波状口縁の深鉢形土器である。口縁の波頂部は７～８単位程度と思われる。折り返しぎみに作られた口縁は大きく外反外傾し、頸部で屈曲して胴部で緩い曲線を描きながら下降する。口縁部は横位のナデ調整により無文研磨され、頸部以下胴部にはｒの原体を軸に巻き付けた無節の撚糸文を地文として沈線による文様が描かれている。頸部では４条の平行沈線が巡り、そのうち１条目と２条目、３条目と４条目の間は処々短い弧線によって連絡されている。胴部では２条の平行沈線によって渦巻き文を主要な構図とした文様が描かれている。渦巻き文を構成する沈線は反転して描かれ、その繰り返しを横位に展開する。内面の調整は横位のナデによって丁寧に行われている。胎土は少量の細砂粒を含むが、焼成は良い。

第252図30は全面縄文の施された深鉢形土器である。口縁部は器高の上位１／４程度から内湾内傾し、胴部はごく緩いカーブで下降する。口唇部は円みをもって作られる。外面に施された縄文はＲＬ原体が用いられるが、横位に回転して施した斜行縄文である。底部外面は横位にナデ調整され、内面も横位にナデ調整される。胎土にはごく少量の細砂粒を含む。焼成は良好である。

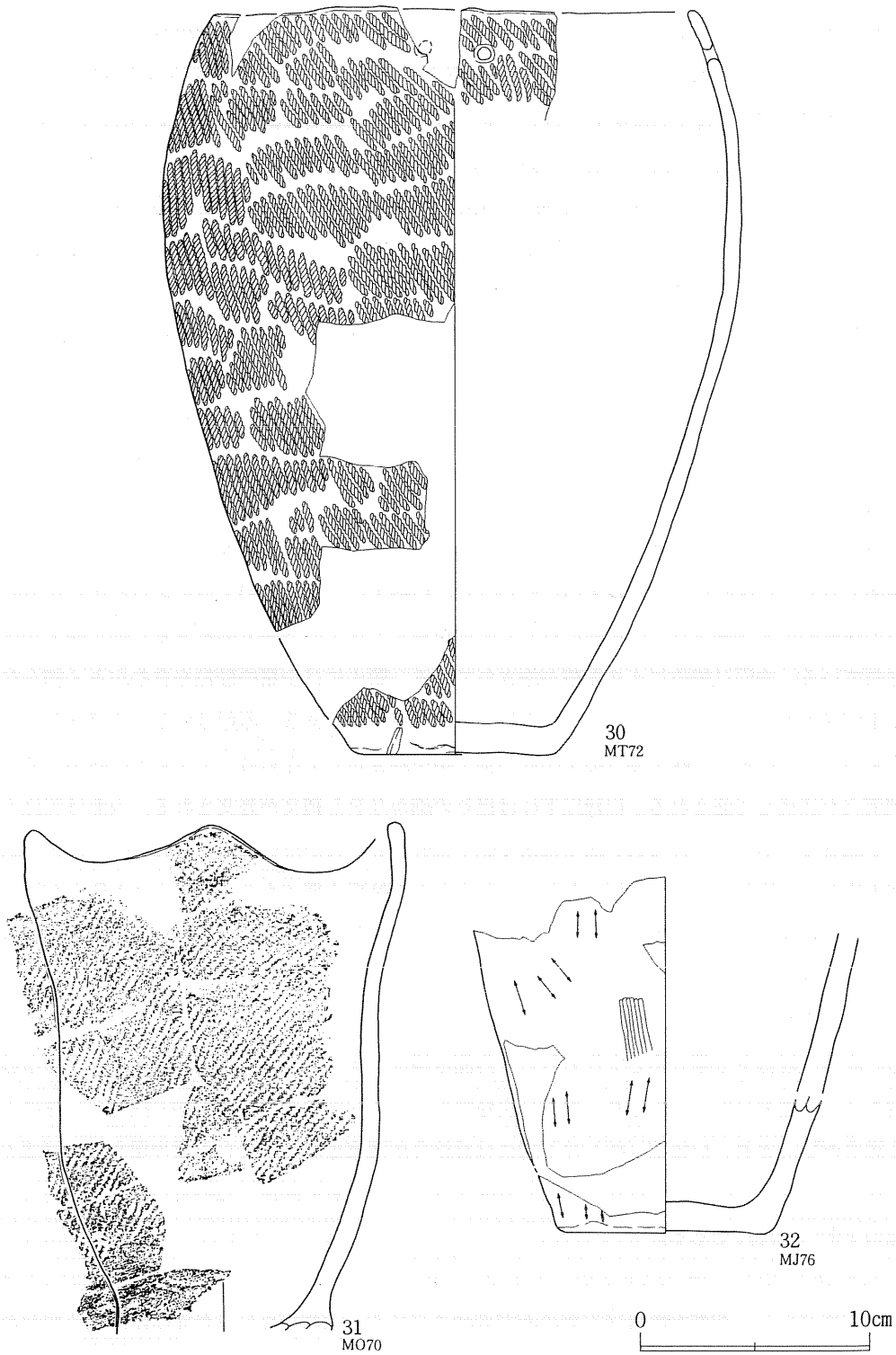
第252図31は波状口縁の深鉢形土器である。１／３程度の破片であるが、波頂部は４単位と思われる。口縁上部は直立し下部で緩く湾曲し、胴部下半で再び膨らんで下りる。器面にはＲＬ原体を縦位に回転施文した斜行縄文が施文され、底部近くでは横位のナデ調整が施される。内面はおもに横位のナデによって調整される。胎土には砂粒を含む。焼成は良好である。

第252図32は直線的に下りる深鉢形土器の胴部下半である。外面は縦位、内面は横位ないし斜位のナデによって調整されるが、外面ではミガキ調整が施された部分も観察される。胎土には細砂粒を含むが、焼成は良好で堅緻に仕上がっている。

第253図33～60は沈線文の施される土器群であるが33～54までが曲線的な構図で描かれるもの、55～60が斜格子文が描かれた土器である。前者には外反する波状口縁の深鉢形土器（33～36）、壺形土器（37～45）があり、それぞれ上位の文様帯中では沈線間が浮文とされる。他の例でも器面の調整は非常に丹念に行われ、内面調整もナデによって平滑に仕上げられている。後者の斜格子文を描く土器は口縁部分が認められず確言できないが、深鉢形の器形をとるもの



第251図　調査区北西端平坦面、斜面遺構外出土遺物（１）



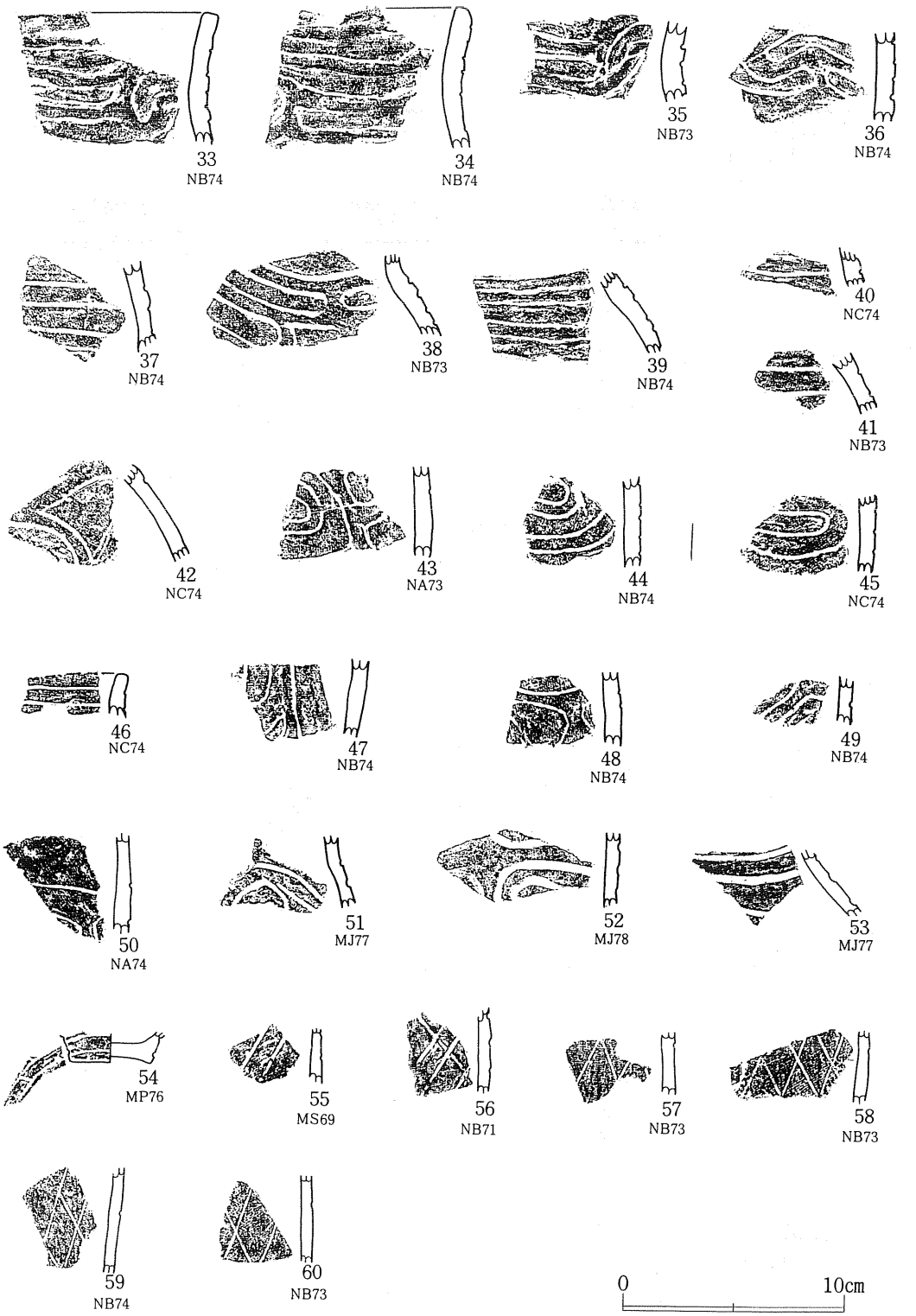
第252図　調査区北西端平坦面、斜面遺構外出土遺物（２）

と推定される。斜格子文は右上―左下あるいは左上―右下のどちらかの沈線を先行して描いたのち逆向きの沈線を加え施文している。第253図55・56の個体では左上―右下の沈線を、57～60の個体では右上―左下の沈線を先行して描いている。曲線的な構図の沈線文が描かれる土器群に比べいずれも器壁は薄く、器面の調整は57以下と同程度に丁寧に行われる。

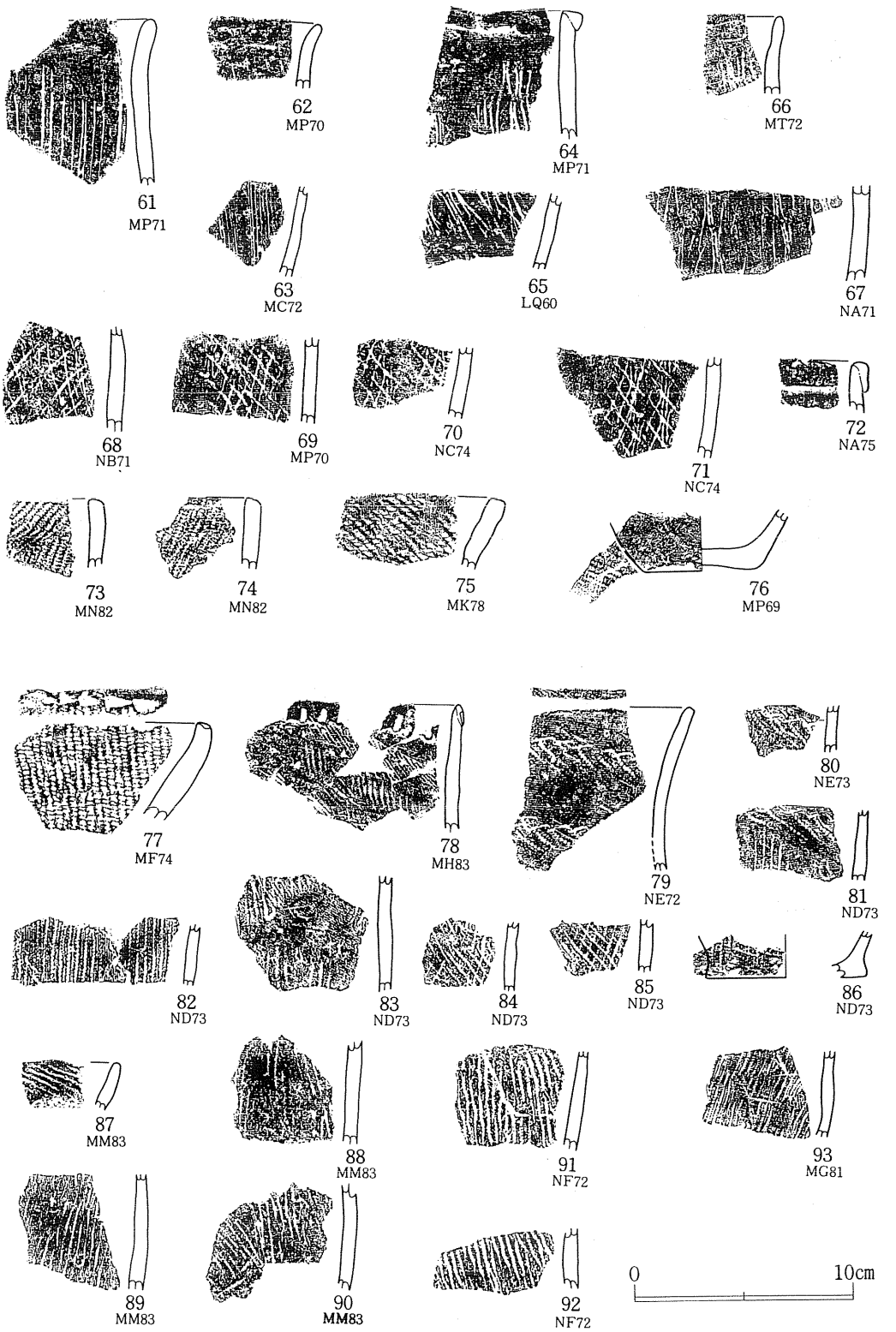
第254図61～76は条線文、撚糸文、縄文の施文された土器群である。第254図61～63は条線文が施され、うち61・62は口縁端が外反する深鉢形の器形をとる。64～71は撚糸文の施文された土器であるが、64～67では平行撚糸文が、68～71では網目状撚糸文が施文されている。軸に巻かれる撚紐は全例Ｒが用いられる。第254図72は折り返し口縁の深鉢あるいは鉢形土器口縁部片である。器面はナデ調整され無文とされる。73～74は縄文施文の口縁部、底部破片である。口縁部形状にはほぼ直立して立ち上がるもの（73・74）と、頸部に屈曲部をもって外反するものがある。76の底部片は揚げ底ぎみにつくられている。縄文施文原体は73・74ではＬＲ、75はＬ、76ではＲＬである。

第254図77～92は弥生時代の土器である。77は受け口状の口縁部片である。おそらく器形は頸部で屈曲する深鉢形を呈するものと思われる。口唇上には丸棒状の工具による右から左方向への連続刺突文が施され、口縁部にはＬＲ原体を右上―左下の方向で回転させた縦走縄文が施されている。内面は横位にナデ調整が施されている。胎土には少量の砂粒を含むがキメ細かな粘土が使用され、焼成も良い。78はほぼ直立する口縁部片である。器形はおそらく深鉢形をとるものと思われる。口縁上端は幅１㎝程の粘土帯を継ぎ足して作られ、下から上に向かっての刺突文が連続して施される。口縁以下には撚りの細かなＲＬ縄文が施文される。内面は斜位のナデ調整で平滑に仕上げられ、器壁は薄く胎土は砂粒を含むが焼成は良い。79～86の個体は胴部上半から口縁部にかけて外反しながら立ち上がる深鉢形土器である。口唇上にも縄文が施文され、口縁部から頸部にかけては、二段にわたって、１段の撚紐Ｌをさらに撚合わせる際一方を他方に巻き付けてその開端を結縛した原体を用い、結び目の回転文である綾絡文と条間隔のあいた縄文を同時に施文している。胴部下半では原体の回転方向を変え網目状に施文されている。底部底縁はやや張り出して作られる。内面は横位のナデによって調整される。胎土には砂粒を含むが器壁は薄手に作られ、焼成は良好である。87～90の個体も79～89と同種の原体による縄文が施文され、口縁部（87）の下端には綾絡文が観察される。この土器の場合は口縁部の形状から頸部に屈曲のある深鉢形土器と判断される。90・91の個体、92の資料とも前二者と同様の土器の胴部片である。

第255図Ｓ19は頁岩製の縦長の剥片の末端に主要剥離面側から細かな調整剥離を連続的に施した石器である。調整剥離は図左側の面左側縁まで及ぶ。両側縁にはまた使用によると思われる微細な剥離痕も認められる。打面そのものは残されるが、図左側の面、打面の左下には主要



第253図　調査区北西端平坦面、斜面遺構外出土遺物（３）

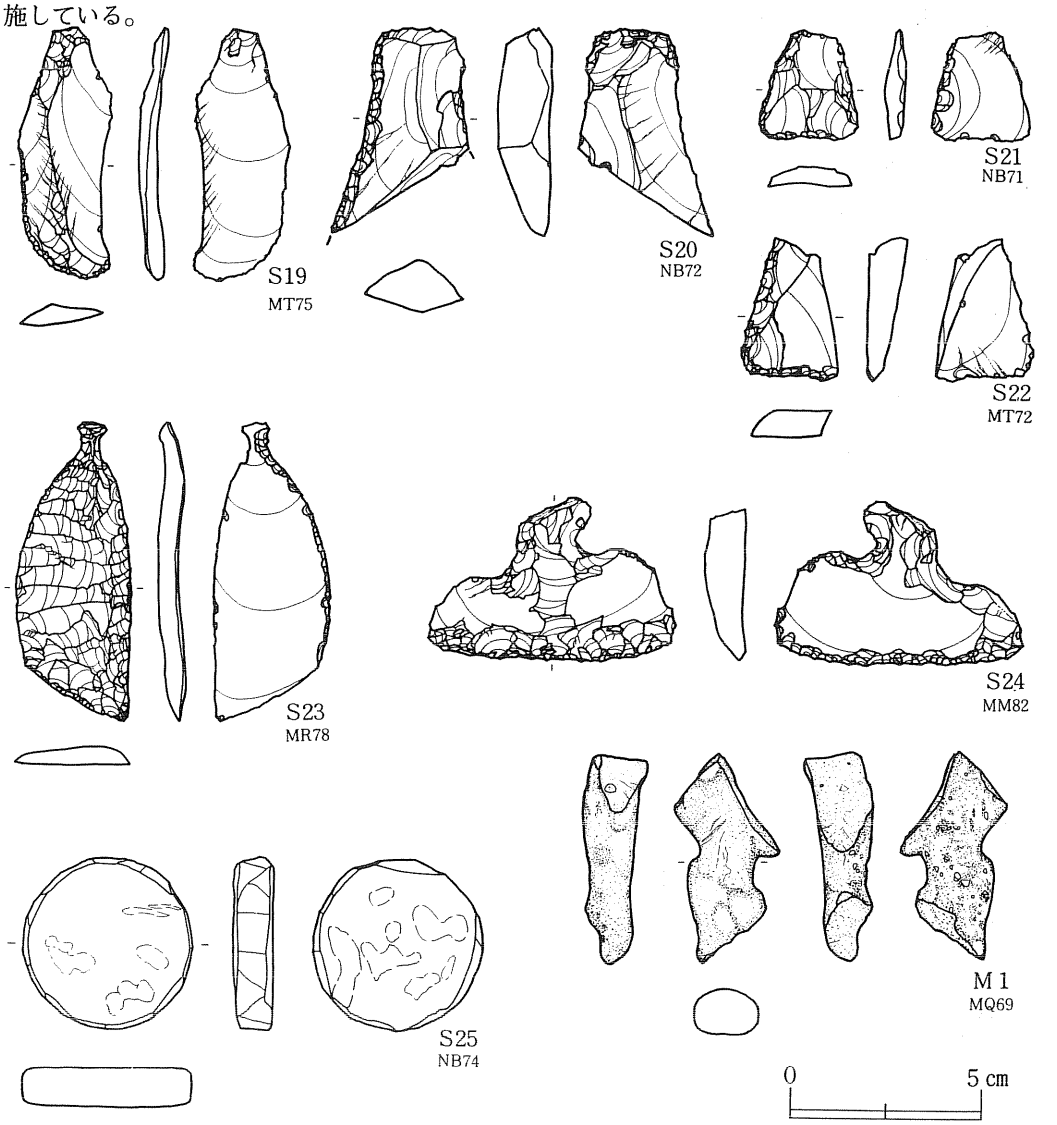


第254図　調査区北西端平坦面、斜面遺構外出土遺物（４）

剥離面側からの調整剥離が数回施されている。

第255図Ｓ20は長石製の剥片を用いたスクレイパーである。素材剥片の主要剥離面末端（図左側の面左側縁）に連続した細かな剥離を加えて刃縁を作り出している。素材の表面側（図右側の面）には図の上側からの剥離を数回加え、そのうち一回の比較的大きな剥離によって出来た稜を打点としての加撃で図左側の面右側縁の面を作り出している。図の下側は折断されている。

第255図Ｓ21はメノウ製の剥片を利用したスクレイパーである。図左側の面左側縁から下縁にかけては、素材の主要剥離面側から連続した細かな調整剥離を加えている。右側縁は、素材の折断面を打面として主要剥離面側にはまばらな押圧剥離を加え、表面側には階段状の剥離を施している。



第255図　調査区北西端平坦面、斜面遺構外出土遺物（５）

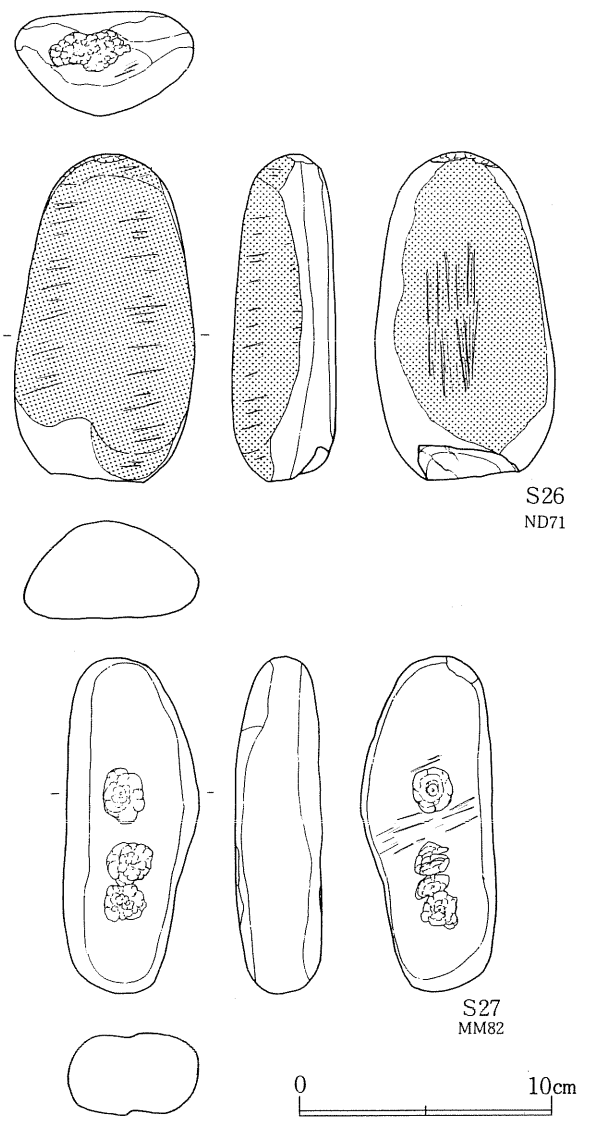
第255図Ｓ22は頁岩製のスクレイパーである。石器の基部側は折損している。刃縁を作り出すための調整剥離は主要剥離面側からのみ行われている。

第255図Ｓ23は頁岩製の縦長石匙である。縦長剥片を素材として用い、つまみ部分を除いたほとんどの石器の主要な形態は表面側からの調整により整えられている。図左側の面の左側縁には長さ25㎜にも及ぶ細長い剥離が連続して加えられ、右側縁にはこれと平行して短い連続剥離が加えられている。また左下縁はやや粗い数回の剥離の後、細かな剥離が連続的に施されている。素材剥片の表面はこの３縁からの調整剥離によりその先行剥離面がすべて除かれており、両側縁の剥離の対照的な長さの違いにより石器の稜は右側縁に寄って新たに作り出されている。左側縁側には刃縁を作り出すための細かな連続剥離が施され、その延長はつまみ部分の作り出すための刈込みの剥離としても加えられている。

第255図Ｓ24は頁岩製の横長石匙である。素材は礫皮を打面とした横長の剥片を用い、加工はおもに刃縁とつまみ部分の作出のために行われ、素材の先行剥離面、主要剥離面ともに残されている。末端側を表面からの比較的大きな連続剥離により直線的にしたのち、両面に細かな剥離を加えて刃縁を作り出している。図左側の面右端は折断され、つまみ部分は素材の打面の両側両面に加えられた剥離により作り出している。

第255図Ｓ25は凝灰岩製の円盤状石製品である。表裏両面を研磨して平滑に仕上げたのち、周縁を幅10㎜前後で連続して擦りあげ整形している。表裏両面には研磨しきれなかった凹みが部分的に残されている。

第256図Ｓ26は凝灰岩製の磨石である。図左側の面には中軸線に平行な擦



第256図　調査区北西端平坦面、斜面遺構外出土遺物（６）

痕が残され、逆の面では中軸線と直交する擦痕が僅かに観察される。また、図の下面には叩打の痕跡が残されている。

第256図Ｓ27は緑色凝灰岩製の凹石である。図左側の面には縦位に３箇所の凹みが、図右側の面には４箇所の凹みが認められる。

第３節　古代以降の遺構と遺物

１　古代以降の検出遺構と遺物

Ｂ区では伴出遺物の時期から確実に古代以降と保証される遺構はない。以下に記述する土坑、焼土遺構、炭焼成遺構は浮石の上面で検出したことをもって、浮石降下後すなわち古代以降に構築された遺構と判断した。調査区北西端平坦面上のように大湯浮石の降下・堆積が一次的な状態を保った地形上に構築された遺構の覆土中には、かなりの量の浮石の混入が認められる。

(1) 土　　坑

ＳＫ10　（第257図、第110―５）

調査区北西端平坦面のＮＡ71、ＮＡ72グリッドで検出した。径280×264㎝、深さは80㎝を測る。平面形はほぼ円形を呈するが、底面には径20㎝から70㎝の凹みが連続して認められる。覆土は基本的に３層にまとめられたが、１層はさらに７層程度、２・３層はそれぞれ４層づつに細分され、さらに何種類かのブロック状の混入土もみとめられる。１層は遺構の埋没がある程度進んだ後の自然流入土で黒色～暗褐色土が主体となる。２層は浮石が多量に混在する黄褐色土であり自然流入あるいは人為堆積土の両方が考えられる。３層は黄褐色を呈する地山の再堆積土で人為堆積土である。遺構内覆土中からは縄文土器の小片が検出されたが、本来この遺構に伴うものではなく、埋没過程における混入と判断された。本遺構の覆土の堆積状況は調査区北端に確認された粘土採掘箇所（図版106―３）と類似する。また、円形の開口部分は意図的に掘り込まれた形状を示すが、底面の凹凸は本遺構が何らかの機能を意図して構築されたのではなく、そうした形状になるような行為の結果、すなわち粘土採掘に際しての掘り込みの結果を示すものと解される。おそらく、粘土採掘にあたっては不要な表土や浮石をある範囲（本遺構の場合は径３ｍ弱の円形）で除去したのち、目的とする粘土層の採掘をある単位（底面に残された凹みの規模）で行ったものと考えられる。

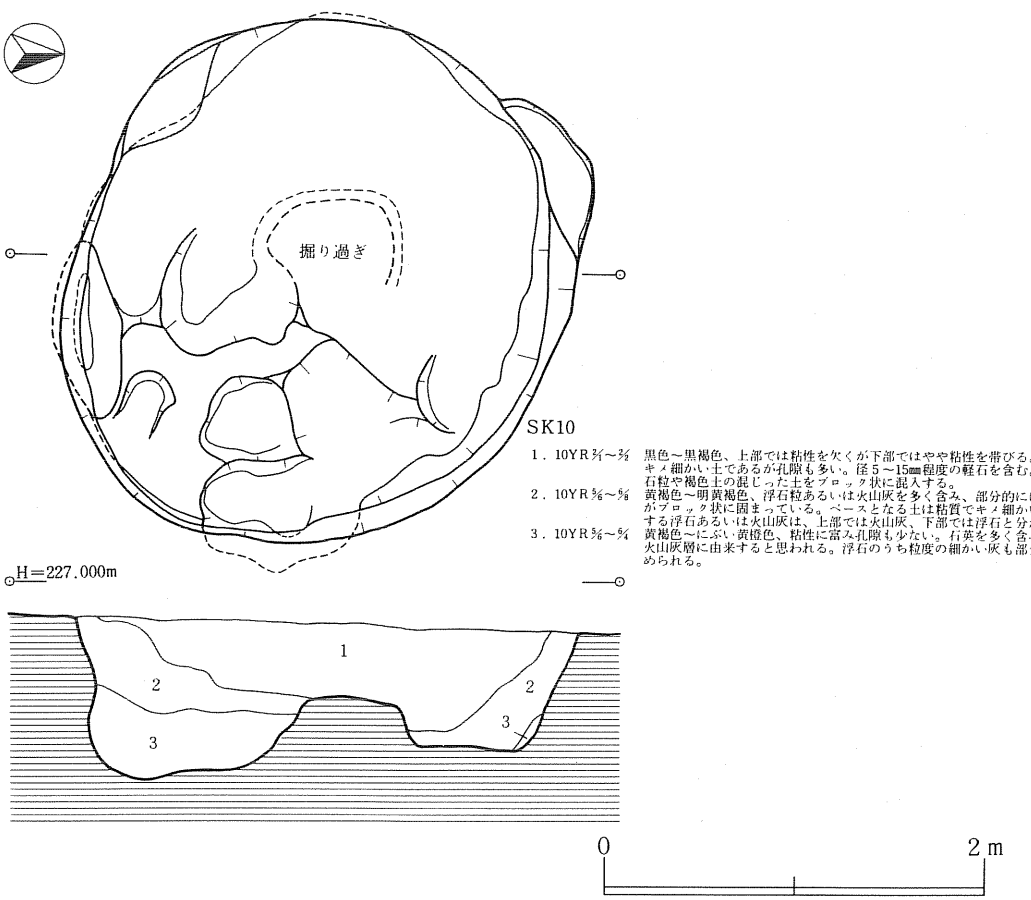
(2) 焼土遺構

ＳＮ35　（第258図、図版110―６）

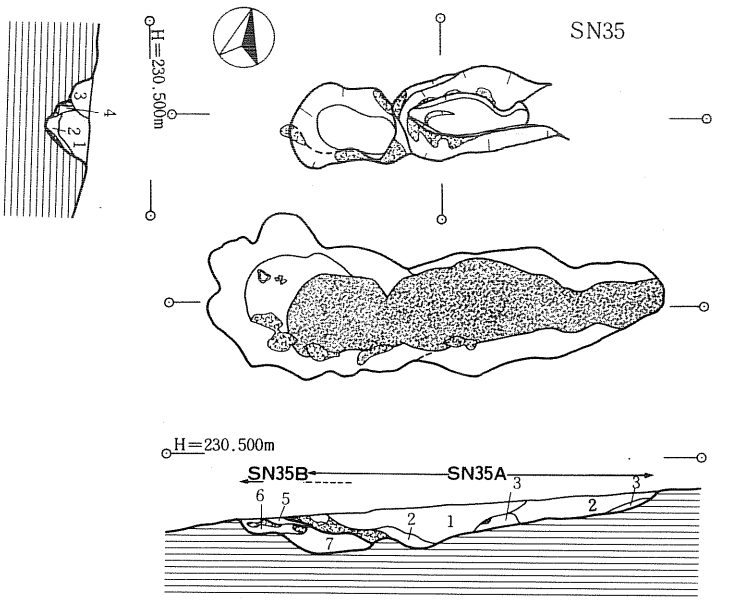
調査区の斜面中腹ＭＬ70グリッドで検出した。ちょうど等高線がまわり込む部分にあたり、

長軸方向を斜面の傾斜方向に直交させるように位置している。確認面で長さ240㎝、幅40〜84㎝の焼土を含む暗褐色土プランとして検出した。長軸はほぼ南北方向にあり、南側がやや膨らんでいる。深さは南側がやや深く20㎝を測り、北側に向かうに従い徐々に浅くなる。焼土はこのプランの内側に断続的に連なっており、内部は木炭砕片を含む黒色土で充填されていた。精査の結果、遺構は一回の作り替えがなされていることが確認され、南側のやや膨らんだ部分に新期の遺構の立ち上がりが焼土層となって検出された。また、その延長である焼土化した側壁上部はやや内に張り出して続き、旧期の遺構とはその北側で共通している。遺構下部は2個の楕円形を連ねたような形状で地山面に掘り込まれており、新期、旧期のものとも遺構底面よりもその周囲に焼面が残されている。出土遺物はない。

本遺構は、燃焼部と焚口部をもつ『かまど状遺構』と呼称されるものに類似する。(註1) 本遺構の場合は新期、旧期の遺構とも共通する北側の緩い傾斜部分が焚口にあたり、壁の作り替えが行われている南側が燃焼部に相当しよう。この種の遺構は明確な伴出遺物を欠くことが多く時期の特定が難しいが、中世城館址上での検出例などもある。(註2)



第257図　SK10土坑



SN35-A

1．10YR3/1　黒色、粘質であるが、孔隙が多く、柔らかい土である。比較的均質で、細かな植物根が貫入する他は目立った混入物はない。遺構廃絶後に流入した土。

2．10YR3/2　黒褐色、やや粘性を帯びてはいるが、やはり孔隙の多い軟質の土である。密度に疎密があり、焼土の混在する箇所ではキメ細かいが他は粗い。立ち上がり面の崩壊土を混入する土である。

3．10YR3/1　黒褐色、粘質土、極めてキメ細かく孔隙は少ないが軟質の土である。遺構埋土ではなく、堀り方内への充填土あるいは地山漸移層に由来する土である。

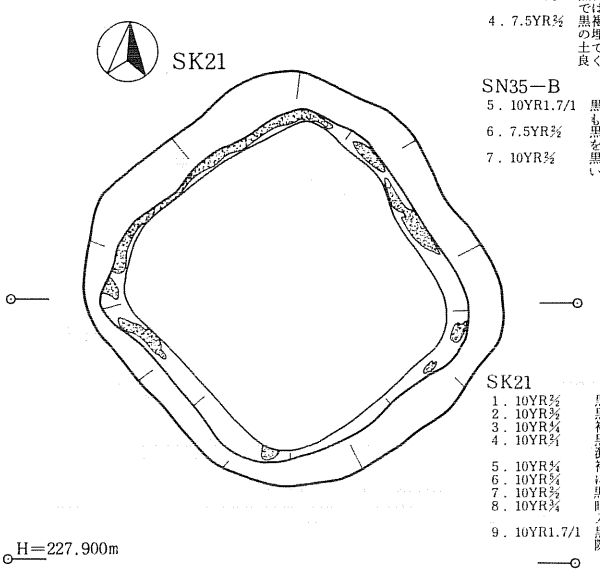
4．7.5YR3/2　黒褐色、キメ細かく粘質、軟質だが部分的に弱く焼土化している。ＳＮ35－Ｂの埋土中に、ＳＮ35－Ａの壁面として貼られた土であり、本来は３層と同様の土であろう。熱を受けた結果、細かな焼土粒を含むが、下層においては比較的良く焼けている。

SN35－B

5．10YR1.7/1　黒色、粘質土、孔隙は少ないが軟質の土である。キメ細かい。６．７層とともに遺構廃絶後の流入土。

6．7.5YR3/2　黒褐色、粘質、キメ細かく孔隙は少ないが軟質の土。部分的に焼土化した土をブロック状に混じえているが、焼土自体もきわめて柔らかい。

7．10YR3/2　黒褐色、軟質かつ粘質、木炭を含む。木炭は、10～30mm程度の長さのごく短いもの。



SK21

1．10YR2/2　黒褐色、浮石粒少量混入し、しまりはやや弱い。

2．10YR3/2　黒褐色、浮石粒少量混入し、しまりはやや強い。

3．10YR4/4　褐色、浮石粒やや多く混入し、しまりは強い。やや粘性あり。

4．10YR2/1　黒色、浮石粒の混入はごく僅かであり、しまりはやや弱い。木炭細片が多く混入。

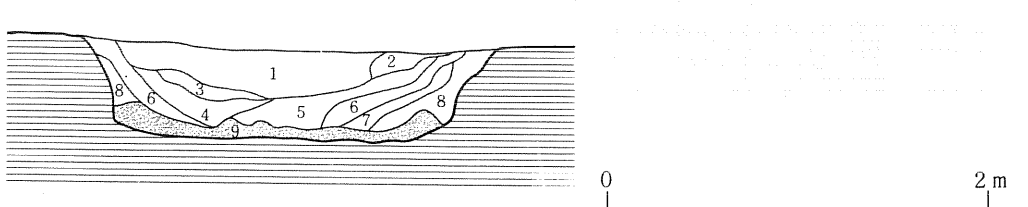
5．10YR4/4　褐色、浮石粒多く混入し、しまりは強い。やや粘性あり。３層に似ている。

6．10YR5/4　にぶい黄褐色、浮石粒多く混入し、しまりは弱い（大湯浮石主体層）。

7．10YR3/2　黒褐色、浮石粒少量混入し、しまりはやや弱い。木炭細片が少量混入。

8．10YR3/4　暗褐色、浮石粒やや多く混入し、しまりはやや弱い。炭化物も僅かながら混入。

9．10YR1.7/1　黒色、浮石粒が若干混入するが、炭化物（木炭）層である。しまり弱い。壁際に焼土が混入。



第258図　SN35焼土遺構、SK21炭焼成遺構

(3) 炭焼成遺構

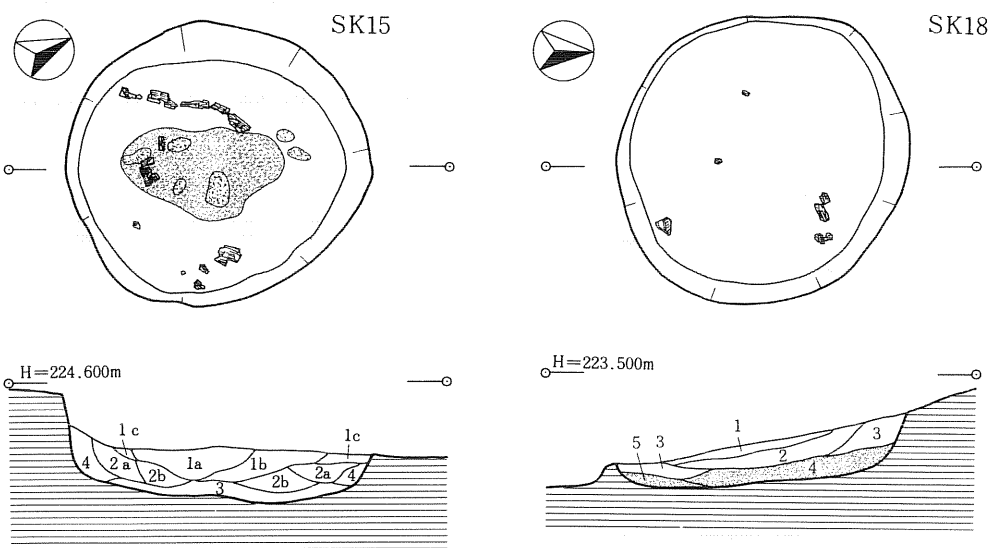
ＳＫ15　（第259図、図版110―７）

斜面の南際ＭＱ67グリッドで検出した。径162×152cm、深さ26cmの規模をもち、平面形は円形、断面形は鍋底形を呈する。覆土は木炭片を含む黒色～暗褐色土を主とする。底面には処々に焼土を混じえた木炭砕片が広がり、西側には長さ70cm程度の原木状態の木炭が残っている。木炭以外に出土遺物はない。

ＳＫ18　（第259図、第243図18、図版111―18）

調査区を含む斜面全体の地形上ではＳＫ15と反対側のＭＦ76グリッドで検出した。径165×148cm、深さ22cmの規模をもち、平面形は円形、断面形は鍋底形を呈する。覆土は木炭の微細片を含む黒色～暗褐色土からなり、底面北東側には木炭片が散らばっている。顕著な焼土の形成は認められなかった。覆土の上層において第243図18の縄文土器が混在した状況で出土している。

第243図18は深鉢形土器の底部片である。全面に右上―左下の方向で回転されたＬＲ縦走縄



SK15

1a. 10YR1.7/1　黒色、僅かに粘性を帯び、孔隙が多い。均質さを欠き、径１～３mm程に固結した黒色土塊（炭？）を含んでいる。植物根の攪乱多い。浮石粒僅かに含む。

1b. 10YR2/2　黒褐色、粘性はなく、孔隙が多い。サラサラした感触を与える。土性はシルト質で、ａ層に比較し、均質である。浮石粒を含み、その量はａ層より僅かに多い。

1c. 10YR3/3　暗褐色、僅かに粘性をもつ。浮石粒を含んでおり、孔隙も多い（２層に近い）。

2a. 10YR3/3　暗褐色、粘性はなく、非常に崩れ易い土。大湯浮石層主体の土であり、径１～７mm程度の軽石粒を多く含む。また、南側ではさらに細かな火山灰層が主体となっている。

2b. 10YR3/1～3/3黒色～黒褐色。僅かに粘性を帯びるが、浮石粒を混入するためａ層同様崩れ易い。浮石の混入割合は小さく、黒～黒褐色土がベースとなっている。

3. 10YR3/1　黒色、やや粘質、孔隙があり、軟質。処々木炭の残存を認めるが、中央よりも、周縁近くに多く残っている。

4. 10YR3/3　暗褐色、粘質、基本層位Ⅳ層よりなるが、浮石粒含まず軟質。

SK18

1. 10YR3/1　黒色、僅かに粘性を帯びる。孔隙があり、軟質である。

2. 10YR3/2　黒褐色、粘質であり、孔隙はなく、しまっている。浮石粒を含み、サラサラした感触を与える。土器片の出土層。

3. 10YR3/3　暗褐色、粘質、孔隙が多く柔らかい。大湯浮石の多量に含まれる土。

4. 10YR1.7/1　黒色、木炭の微細片からなる層。粘質で孔隙は少なく、比較的しまっている。

5. 10YR1.7/1　黒色、４層同様木炭の細片からなる層であるが、より粒が大きく、孔隙も多い。粘性は小さい。

0　2 m

第259図　SK15・SK18炭焼成遺構

文が施文され、底面は揚げ底を呈する。胎土には内面の調整は横位のナデによって行われている。胎土には砂粒を含み焼成は良好である。

ＳＫ21　（第258図、図版110―８）

調査区北西端平坦面北側のＭＦ81グリッドで検出した。平面形は204×188cmの方形を呈し、深さ46cmを測る。底面は堅くしまって平坦であるが、焼土の形成は底面よりも壁面に顕著である。覆土は黒色～暗褐色を呈し９層に分けられるが、このうち中層にある５・６・８層には多量の浮石が混入し、最下層第９層は木炭細片からなる層である。木炭以外に出土遺物はない。

(4)　遺構外出土の遺物　（第255図Ｍ１、図版117―Ｍ１）

古代以降に属する遺物としては第255図Ｍ１の鉄滓がある。斜面上方のＭＱ69グリッド内、ＳＫ15炭焼成遺構の北側８ｍ程の地点で検出された。図左側の面がくすんだ暗青色の光沢もった表面で、砂粒を噛み込んだ図右側の面は炉底あるいは湯道底への接地面と思われる。製鉄に伴う遺物であるが、製錬（たたら）滓か精錬（大鍛冶）滓かは不明である。

第４節　小　結

Ｂ区の調査では縄文時代前期から古代以降にかけての遺構・遺物が検出されている。ここでは、調査区南東隅の緩い傾斜地で検出された縄文時代晩期後葉の該期の遺構・遺物について若干の考察を行い、まとめに代えたい。

１　出土土器の型式学的位置について

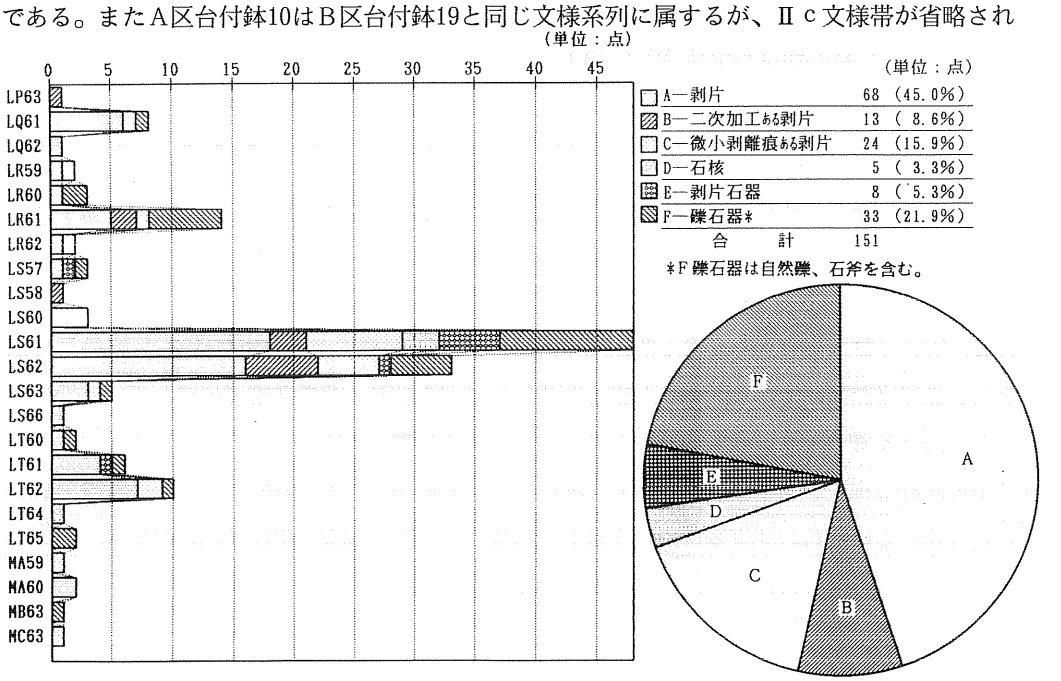
第261図、第262図にはりま館遺跡出土の縄文時代晩期後葉の土器を掲げる。

器形別構成は小形深鉢、台付鉢、台付浅鉢、浅鉢、壺、中～大形の半精製深鉢、同じく中～大形の粗製深鉢と７種類の土器からなり、小形深鉢、台付鉢、浅鉢、台付浅鉢の４種類については、平口縁を基調とし、平行沈線のみあるいはそれをもって工字文を描く群（第261図１～13、19、25、26、28～30）と、波状口縁の変形工字文を施す群（第262図14～18）とに分けられる。後者の群は剣吉荒町Ⅱ群ｂ期(註３)以降の大洞Ａ′式の一段階・一系列下にある土器群と評価され、はりま館遺跡ではＡ区でしか出土していない。Ａ、Ｂ、Ｄの３地点を通して見ることのできるのは前者の土器群である。以下ではこの前者４種類の土器について考えてみたい。

小形深鉢には１、２、４のようにⅡ文様帯とⅡｃ文様帯のメガネ状附帯文を識別できる例が含まれる。この場合、メガネ状附帯文は３段に描かれた平行沈線の中段の沈線に粘土の掻き上げあるいは貼り付けによって結節部を設けることで表され、Ⅱ文様帯には同じく３段に描かれた平行沈線の上段の一条を断続的に描き、その中断部分に２段目の沈線末端を切り上げるようにして工字文を施している。同じ文様帯構成、施文法はＢ区台付鉢19にも見られ、メガネ状附

帯文を欠いた例はA区台付鉢10にも見られる。また、施文法は異なるがA区浅鉢11や上巻第161図81、82もメガネ状附帯文がⅡ文様帯の上限を画し、上巻第160図72の体部破片は工字文の施文法が近い資料である。

次に台付鉢であるが、A区台付鉢5、D区台付鉢25の資料は口縁上に伸びた粘土帯が突起となって伸びる例である。この種の形制の土器は岩手・九年橋遺跡(註4)の資料を見る限り、大洞C_2式からA_1式まで続くが、Ⅱ文様帯をもつことが通例であり、それを欠く例は極めて少ない。すなわち、九年橋遺跡の資料が示す時期では精製土器としての性格が強い。そして、それらの資料の突起はⅡc文様帯のメガネ状附帯文から隆起する。5、25の資料では既に文様帯として認めることができないものの、口頸部下の屈曲部を巡って2個1対の粘土瘤が、それぞれ4単位および5単位貼り付けられている。こうした粘土瘤は、九年橋遺跡などのA_1式台付鉢に認められるメガネ状附帯文の結節部隆起が残存した、Ⅱc文様帯に対応するものと考えられる。したがって、同じ台付鉢という形制を採りながらも口頸部下からの突起が伸びない6、7、8、さらには中〜大形の半精製深鉢37、48、49口頸部下の粘土瘤も、同様に理解できるものと考える。ちなみに5、25のような形制の土器台部は、C_2式の鉢形土器にごく低い台として現れ、次第に高さを増す。5、25の資料はそれがかなり発達したものととれる。台付鉢のうち、D区台付鉢26の土器は、平行沈線間に一対の粘土瘤を貼付けて工字文を作っている。したがって、A区台付鉢10、B区台付鉢19とは同じ形制にある土器であるが、異なる文様系列に属する土器である。またA区台付鉢10はB区台付鉢19と同じ文様系列に属するが、Ⅱc文様帯が省略され



対象グリッドは沢頭部を囲む23グリッドである。グリッド別ではSN12石囲炉の位置するLS61・LS62の2グリッドに81点と全体の53%が集中しする。剥片を利用して製作された石器は8点の剥片石器のうち、SN12周辺から出土した3点は同じ母材から得られたスクレーパー(メノウ製)であるが、他の3点のスクレーパー、2点の石器はそれぞれ別の石材から製作されている。剥片および石核の個体別資料の同定は今回の作業ではなし得ていない。

第260図　南東隅緩傾斜地石器組成

たⅡ文様帯のみの構成からなり、より新しい階程におかれるものと考えられる。

浅鉢ではA区浅鉢11がⅡc文様帯とⅡ文様帯に分かれて施文される土器であるが、丸い底部には円形沈線文が施される特徴を備える。この底部の円形沈線文が施される浅鉢形制の祖形は、亀ケ岡式土器の前半までさかのぼって認められ、C_2式注口土器等にも浮彫的に施される。A_1式浅鉢では九年橋遺跡に見られるように4つの袋状突起をもつ底部へ交替するか、平底に変わるのが一般的である。おそらく、このⅡ文様帯が明確な工字文へ変化した時期では希有の例であろう。B区台付鉢20は口縁1箇所にA突起をもち、体部が無文化されて底部が平底になる例である。この種の形制の土器はA_1式には出現するがその前後の脈絡は不明である。

D区台付浅鉢28〜30もA_1式には出現する形制である。28に見られるように工字文作出の技法は同じD区台付鉢26と共通する。

以上、ごく簡単に3地点に共通する4種類の器形の土器を見たが、小形深鉢形土器に見られるような工字文作出の手法(註5)、台付鉢に見られるような半精製土器化などは、大洞A式土器のうち、より新しいA_2式土器の指標と見なすことができるのではないかと思われる。そして、おそらくは工字文作出において沈線間に粘土粒を貼り付けただけの手法しかないD区の土器群がより古く、Ⅱ文様帯をもつ台付鉢10、19、26の関係で見れば、A区のものを最も新しい階程に、B区の土器はその中位に置かれるものではないかと考えられる。

2　検出遺構について

調査区の南東側傾斜地で検出された遺構は土壙墓と考えられるSK09、SK14、石囲炉SN12、およびSN12下部の土坑SK16の4基である。SK16を除いた3基の遺構が縄文時代晩期後葉に属する遺構であるが、これらの遺構は東に開いた沢頭（湧水箇所）を囲むように位置し、SN12を中心とした区域では遺物の集中も認められた。このような縄文時代晩期の遺跡内に湧水箇所を抱える例としては、青森・右ェ門次郎窪遺跡(註6)がある。

右ェ門次郎窪遺跡では晩期前〜中葉の竪穴住居跡、土坑などが斜面上で検出され、その一角に土坑10基、野外炉3基、集石遺構1基の集中地点を伴った湧水箇所がある。土坑には貯蔵穴の可能性ある4基のほかに、「土壙墓的機能」を想定された1基が含まれる。また野外炉のうち1基（第1号炉）は本遺跡B区SN12と類似の構造をもつ例であるが、これについて報告者は、集積遺構との関連で「葬礼的に使用した施設の可能性」を考え、さらにこの湧水箇所周辺は「遺構廃棄後に捨て場として利用」されたと推定している。秋田県内の縄文時代晩期の墓域跡でも野（屋）外炉ならびに配石を伴う例(註7)、土壙群に近い沢頭が捨て場として利用された例(註8)がある。こうした例から、東北北部の縄文時代晩期墓域では〝土壙墓（群）〟、〝野（屋）外炉〟、〝配石遺構〟、〝捨て場〟がその構成要素にあったことが考えられ、B区の調査区南東側の遺構の配置状況はこれらの組み合わせの一つの類型と見ることも可能であろう。

第260図にＢ区南東側調査区から出土した石器の量比を示す。剥片を利用して製作された石器は計８点（内訳/石鏃：２，スクレーパー：６）しかなく、剥片ならびに二次加工、微小剥離痕ある剥片が計105点と石器群全体の69％の高率を占める。こうした投棄された石器群中の定形的な生産用具の少なさは、やはりそれを所有した集団規模に由来するものと理解される。小坂町周辺の調査では、縄文時代晩期中～後葉の遺物は、はりま館遺跡の他、大岱Ⅰ（註９）、大岱Ⅲ（註10）、寺の沢遺跡、館野遺跡（註11）で少量づつが出土しているのみで、これらの遺跡の性格も不明な部分が多い。しかし、いずれも遺物量から見れば、たとえそれらが生活の痕跡を残した遺跡であっても、ごく小規模な集団の短期の居住であったろうと推定される。はりま館遺跡ではＡⅢ区、Ｂ区、Ｄ区の３地点で晩期後葉の遺物が出土しているが、このうち、Ｄ区でも沢頭に近く晩期後葉の土坑が存在した可能性が認められている。Ｂ区南東側の遺構の在り方は、地形的に限定された地点に営まれた小規模集団の墓域の１形態を現したものであろうと推定される。

註

註１　八戸市教育委員会「史跡根城跡発掘調査報告書Ⅲ」1982（昭和57年）
　　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター「高玉遺跡発掘調査報告書」1985（昭和60年）
　　この他、「かまど遺構」、「焼土遺構」と呼称される例もある。

註２　本遺跡の近隣では、南南東3.8㎞に所在する当麻館遺跡で24基（うち１基重複）の「焼土遺構」が検出されている。
　　鹿角市教育委員会「当麻館遺跡発掘調査報告書」1989（平成元年）

註３　工藤竹久「東北北部における亀ケ岡式土器の終末」『考古学雑誌』72―４　1987（昭和62年）

註４　北上市教育委員会「九年橋遺跡第３次～第10次調査報告書」1977（昭和52年）～1987（昭和62年）

註５　大洞Ａ式の細別型式である大洞Ａ$_2$式の指標として、鈴木正博氏は工字文帯を切る「スリット手法」をそのひとつにおいている。鈴木氏の摘出した福島・浦尻磯坂遺跡の鉢形土器、馬目氏の分析された一人子遺跡の半精製土器のこの手法の分布は、新潟・鳥屋遺跡にも類似の資料が認められるように北陸まで範囲を広げている。しかし、鈴木氏が確認しているように北奥地域での状況は未だ分かっていない。本遺跡の小形深鉢、台付鉢第255図１、２、４、10、19のような工字文作出の技法について、現在までのところこの南東北から北陸にまで広がる「スリット手法」と直接の関連は評価できないにしても（浦尻磯坂遺跡、一人子遺跡の場合にはスリットによる切り込みは工字文帯を上下につなぐ）、類似の手法として注意したい。
　　馬目順一他「一人子遺跡の研究」1970（昭和45年）
　　鈴木正博「続大洞Ａ$_2$式考」1987（昭和62年）
　　豊栄市史編纂委員会『豊栄市史資料編１（考古編）』1988（昭和63年）
　　例えば、甕形土器Ａ類に「平行沈線に短線や刻みを加えただけの簡素な工字文」（Ｐ277）と説明される資料がある（第９図53、54）。

註６　青森県教育委員会「右ェ門次郎窪遺跡、三合山遺跡、石ノ窪遺跡」1981（昭和56年）

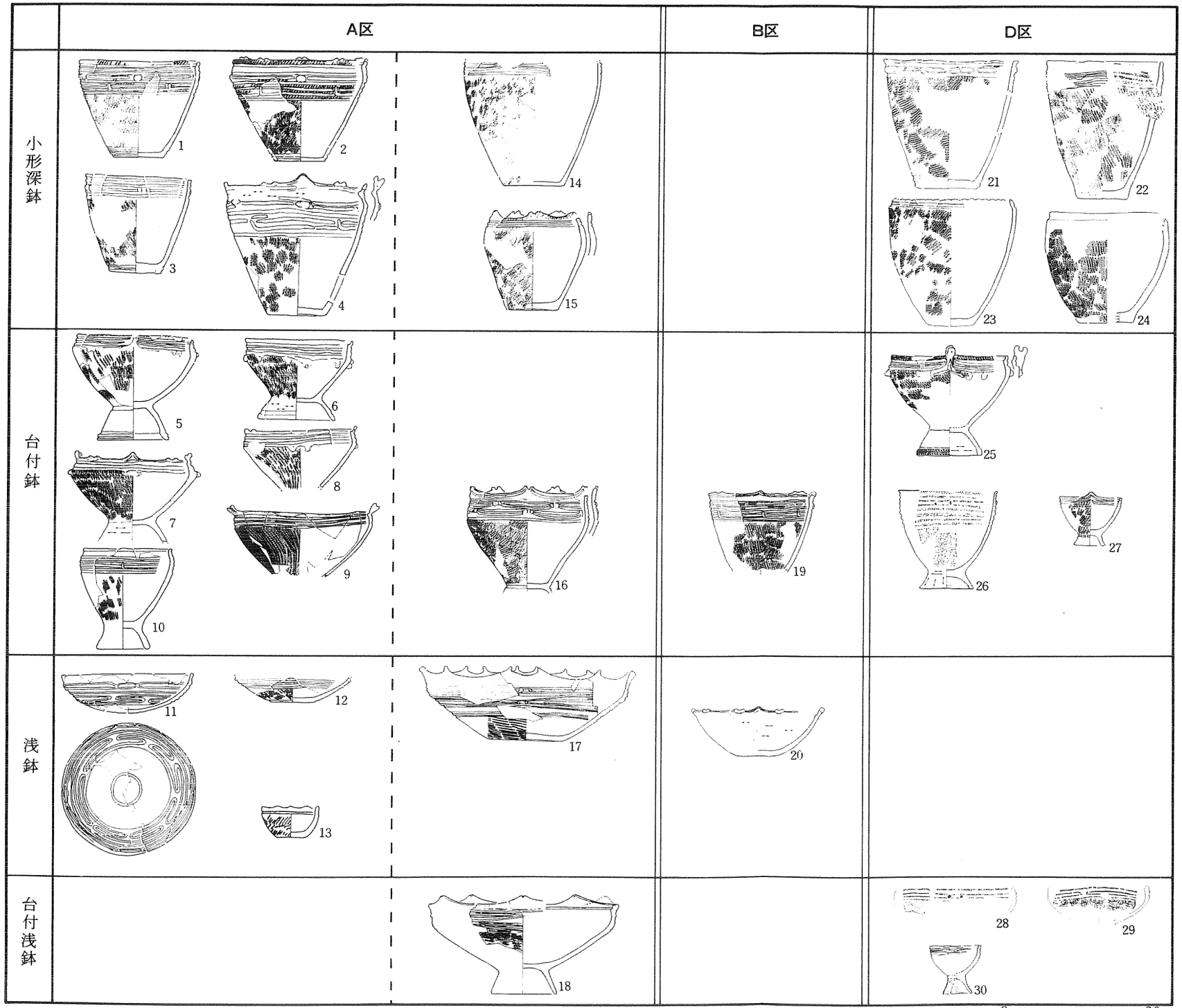
註７　秋田県教育委員会「平鹿遺跡発掘調査報告書」1983（昭和58年）

註８　秋田市教育委員会「地方遺跡」『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1987（昭和62年）

註９　秋田県教育委員会「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ｘ」1984（昭和59年）

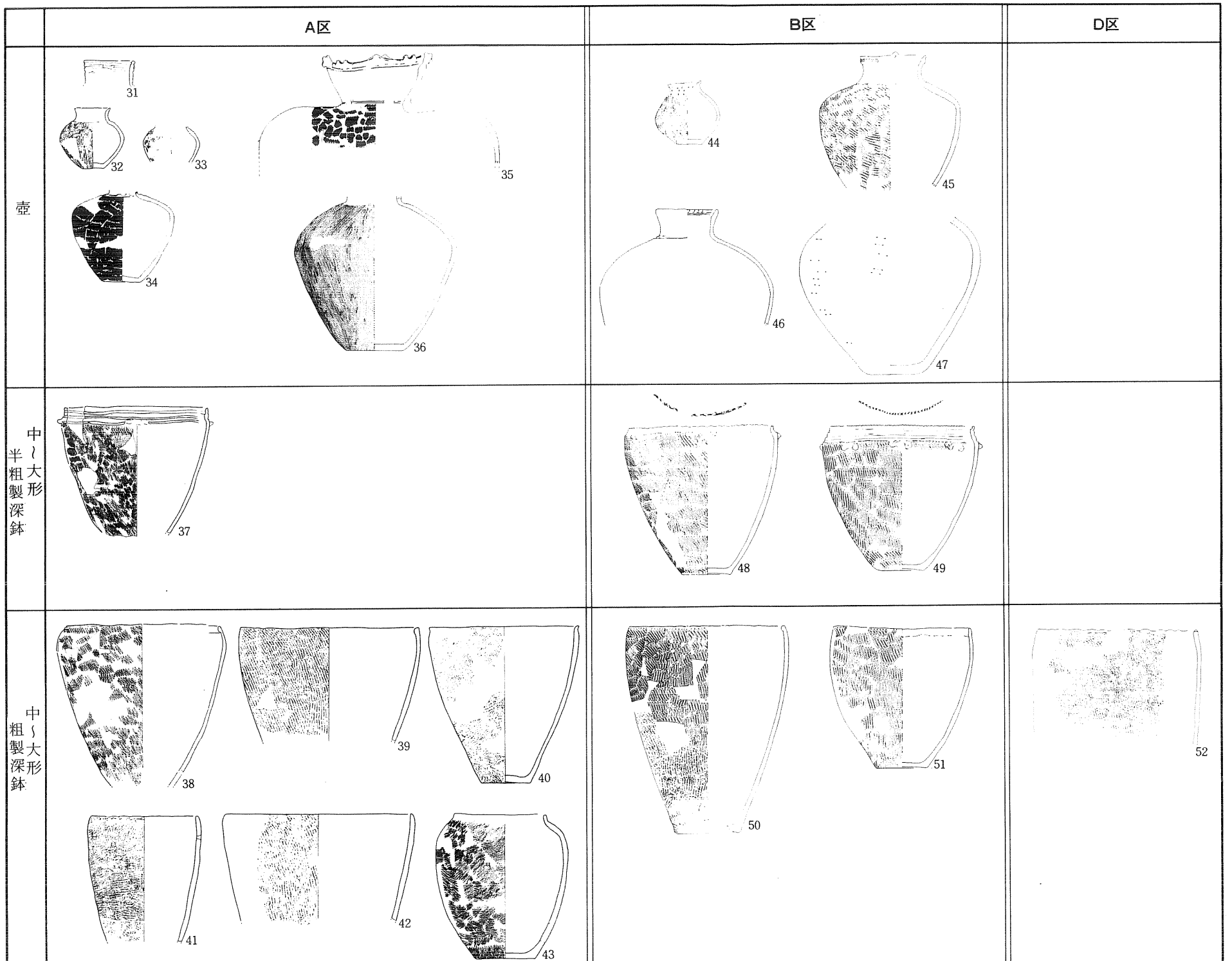
註10　秋田県教育委員会「東北縦貫自動車道発掘調査報告書XII」1984（昭和59年）

註11　安保　　彰「小坂のあけぼの」『小坂町史』1975（昭和55年）



※9・12・17は昭和57年調査時出土

第261図　はりま館遺跡出土縄文時代晩期後葉土器一覧(1)



※34～36は昭和57年調査時出土

第262図　はりま館遺跡出土縄文時代晩期後葉土器一覧（2）

第９章　Ｄ区の調査の記録

第１節　Ｄ区の概要

１　地　　形

本調査区は北から南に向かってのびる開析谷の谷頭部をとりまく緩斜面を中心とする。東および北側は上位の段丘の段丘崖が迫っている。東側の段丘崖上の段丘面がＢ区西端部である。西側にはＥ区東側の緩斜面が続くが、段丘崖と開析谷に挟まれて、狭小なものとなっている。開析谷周辺では湧水が比較的豊富である。本調査区の地表面の標高は209～222ｍ前後を測り、調査面積は5,800㎡である。

２　基本土層

本調査区の基本層序は以下の通りである（第264図）。

Ⅰ層　黒褐色土（10ＹＲ２/２）　表土層である。塊状をなし、草根が密集する。調査区南端周辺（Ｎ）では新旧の表土層（Ⅰａ・Ⅰｂ層）に二分される。

Ⅱ層　黒色土（10ＹＲ２/１）　いわゆるクロボク土であるが、大湯浮石を混在する。調査区西南端の沢部分では二分される（Ｊ）。下層（Ⅱｂ層）は上層に比べ、より粘性が強まり、色調も黒味を増している。

Ⅲ層　灰白色火山灰（2.5Ｙ８/２）～明黄褐色浮石（10ＹＲ７/６）　いわゆる大湯浮石層である。径数㎜前後の浮石粒を主体とするが、調査区全体に安定的に堆積せず、部分的に認められるのみであった。本層の堆積の厚い部分では上位の火山灰（Ⅲａ層）と下位の浮石（Ⅲｂ層）とに分離される（Ｊ・Ｍ・Ｐ）。

Ⅳ層　暗褐色土（10ＹＲ３/４）　Ⅲ層直下に認められる。Ⅲ層が存在しない部分には基本的に認められない。上位に大湯浮石粒が若干混在することと色調のほかは土性は下位のⅤ層と基本的に類似する。層厚は10㎝前後であるが、Ⅲ層のそれと対応する傾向が認められる。本層から弥生～縄文時代の遺物が出土する。

Ⅴ層　黒褐色土（10ＹＲ２/２）　一部地山のローム粒・ブロックを混在する。上位に弥生～縄文時代の遺物を包含する。Ⅲ・Ⅳ層を欠く部分ではⅡ層との分層は困難である。

Ⅵ層　にぶい黄褐色土（10ＹＲ４/３）　地山漸移層である。上下の層との境界は漸移的である。

Ⅶ層　黄褐色土（10ＹＲ５/６）　地山のローム土である。

以上の各層の調査区内での分布状態を見ると、Ⅰ・Ⅱ層はその層厚が変化するものの、全域にわたり堆積している。Ⅲ層は調査区中央部の開析谷東側の西南部では既に削平され、消失し

ており、開析谷西側でも谷際と調査区西端の急斜面を除き、大半は削平されている。Ⅳ層の分布もほぼⅢ層と共通した状況を呈している。Ⅴ層は調査区全域にほぼ分布するが、中央の開析谷の東南際と西際は削平され、消失している。

3　遺構・遺物の分布

今回の調査で検出した遺構は大湯浮石（Ⅲ層）降下以後に形成され、古代に属する可能性のあるものと大湯浮石降下以前に形成された縄文～弥生時代に属する遺構群とに分かれる。

前者は後述するように、鍛冶関連遺構・炭焼成遺構・性格不明の土坑とに分かれる。鍛冶関連遺構は調査区中央の開析谷の西際のＯＦ88グリッド内に集中する。その他の遺構は遺構数が少なく、調査区全体に散在し、分布上のまとまりは認められない。また、大湯浮石降下以後に属するとみられる遺物はわずかに数点確認されたのみである。

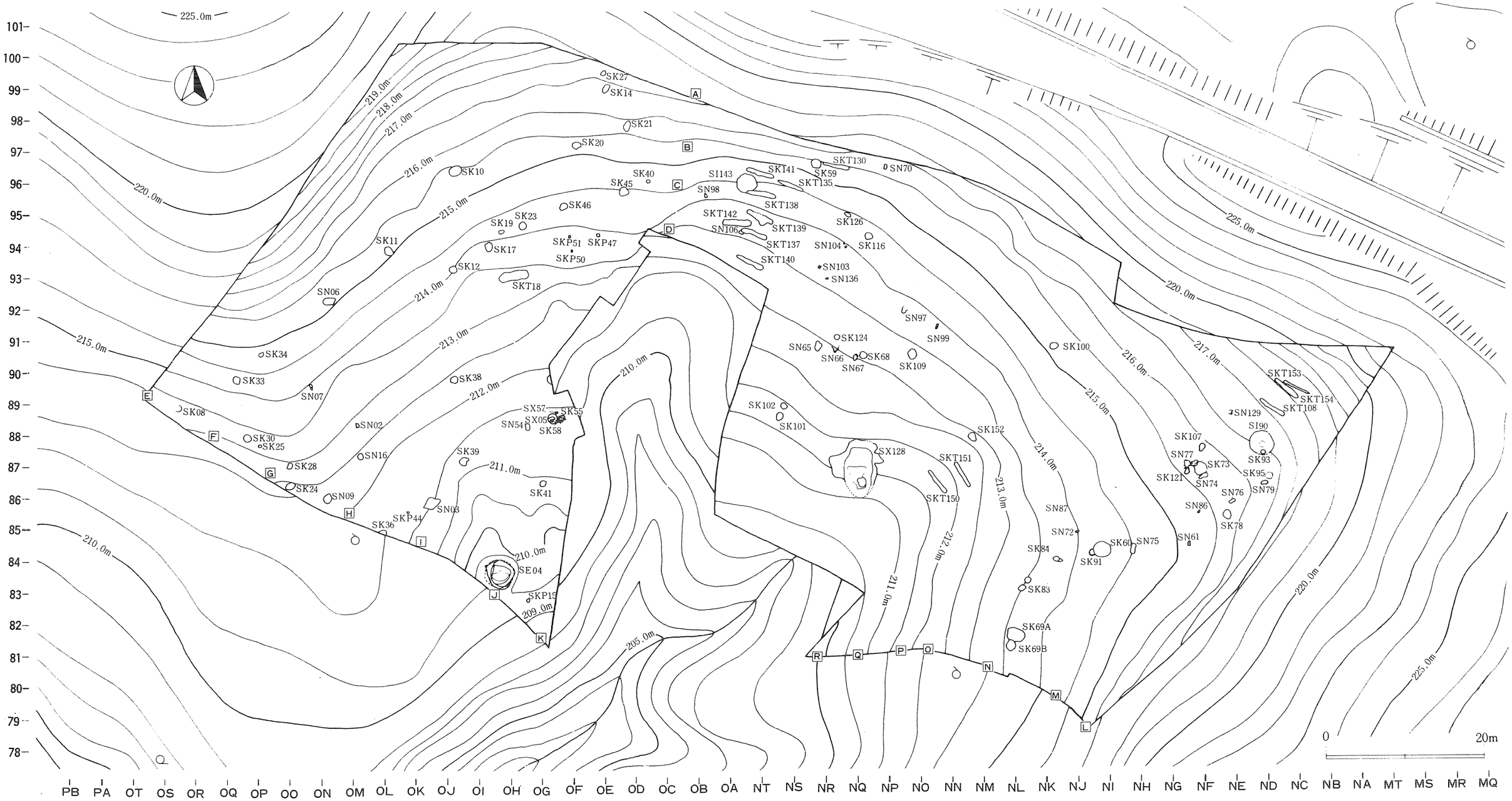
一方、大湯浮石降下以前の遺構群は主にその形態から縄文時代に属するとみられる竪穴住居跡（ＳＩ143）、Ｔピット群、土坑と弥生時代に属する竪穴住居跡（ＳＩ90）、井戸、土坑（土坑墓を含む）および時期を特定できない焼土遺構とに分かれる。これらの遺構の確認面は焼土遺構がⅣ層上面もしくはⅤ層上面であるほかはⅥ～Ⅶ層上面である。

縄文時代の遺構のうちＴピットは調査区東北部に３基、調査区東半中央に２基、調査区中央の谷頭周辺に８基、調査区西半中央に１基と分布が分かれる。これらのＴピットは調査区西半部のものを除き、複数のものが並列する特徴がある。竪穴住居跡は谷頭周辺のＴピット群と分布が重なるが、前者はＴピット群のひとつに切られており、両者は時期を異にしている。また、その南のＮＯ・ＮＰ90グリッドには土坑が存在し、その周辺には縄文時代晩期の遺物が集中している。このほかに縄文土器はＯＡ95グリッドなどで検出されているが、弥生土器に比べその分布は限定されたものとなっている。

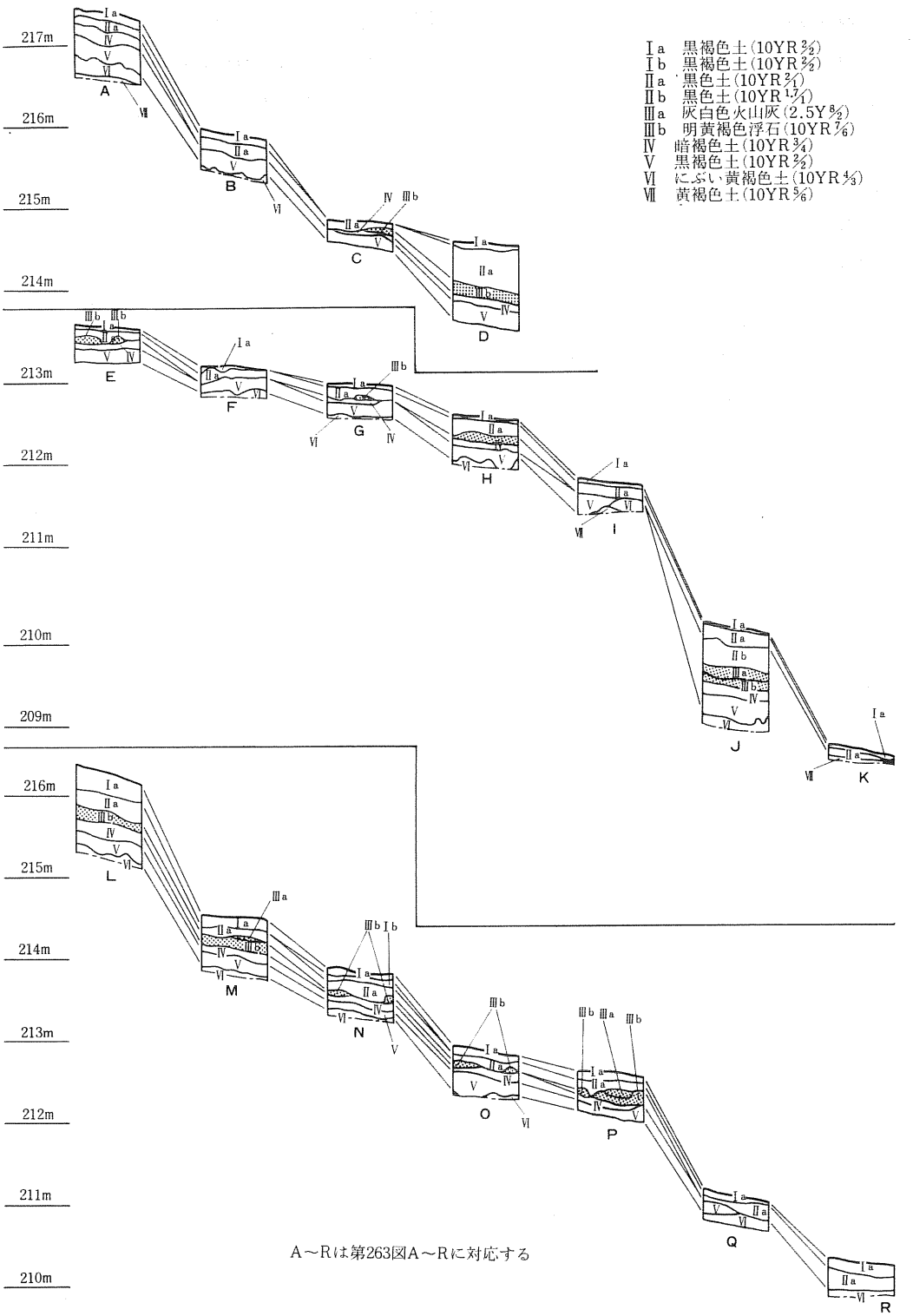
弥生時代の遺構分布は縄文時代に比べ調査区のほぼ全域に拡大する傾向が認められる。調査区東側と開析谷谷頭周辺、調査区西南端に比較的集中する。竪穴住居跡・土坑墓は調査区東側に点在する。周辺には該期の遺物の集中地点も若干存在する。井戸は調査区西半の南端に位置し、その西側には焼土遺構が分布し、遺物集中地点も伴っている。開析谷谷頭周辺には該期の遺物を含む土坑が散在している。

4　調査経過

調査は調査区周辺に排土置き場を確保できないため、調査区を中央の開析谷部を境に東西に二分しておこなうこととした。当初は調査区西半部の調査をおこない、その排土を東半部に仮り置きし、西半部の調査終了後、西半部を排土置き場とし、東半部の調査を実施することとした。また、範囲確認調査時の所見ではⅠ・Ⅱ層中にはほとんど遺物が含まれないと判断されたことからⅠ層およびⅡ層上半の除去は重機によっておこなった。



第263図　はりま館遺跡D区遺構配置図



A～Rは第263図A～Rに対応する

第264図　D区土層柱状図

調査は1988年6月16日から開始し、同年12月7日に終了した。

調査区西半部の調査は6月16日から開始し、6月下旬まではⅡ・Ⅲ層の掘り下げとⅣ層～Ⅴ層上面での遺構確認作業をおこなった。この時点でＯＦ88グリッドの鍛冶炉などや弥生時代の井戸、焼土遺構を確認し、調査を実施している。7月以降はⅣ・Ⅴ層の掘り下げ、Ⅵ・Ⅶ層上面での遺構確認作業をおこない、土坑・Ｔピットなどを確認・調査するとともに弥生時代の土器の集中地点も検出した。8月下旬に一部の遺構を除いて西半部の調査を終了した。この後、調査区中央の開析谷の急斜面の試掘調査をおこなったが、遺構は確認できなかった。

9月上旬から中旬にかけて調査区東半部の排土・表土などの除去、グリッド杭打設をおこなった後、同月26日から東半部の調査を開始した。10月中旬までⅡ・Ⅲ層の掘り下げとⅣ・Ⅴ層上面での遺構確認作業をおこない、土坑・炭焼成遺構・焼土遺構などとともに縄文・弥生土器の集中地点も検出した。10月下旬以降Ⅴ層の掘り下げとⅥ・Ⅶ層上面での遺構確認作業をおこない、11月上旬には弥生時代の竪穴住居跡を検出している。11月中旬から下旬にはＴピット、縄文時代の竪穴住居跡、性格不明の大形の土坑ＳＫ128などを確認した。12月7日にＳＫ128を完掘し、本調査区の調査を完了した。

第2節　縄文・弥生時代の遺構と遺物

1　縄文時代の検出遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡

ＳＩ143（第265図、図版120）

位置・確認状況　ＮＴ95・96グリッドⅦ層上面で検出した。南端部はＴピットＳＫＴ138によって切られている。

形態・規模　東西径2.6m、南北径2.5mのほぼ円形プランをなす。確認面から床面までの深さは4～20cm前後を測る。

覆土　覆土は壁際の堆積（4～6層）が壁の崩壊によるものとみられるほかは、総体的にⅤ層の流入土と判断される。

床・壁　床は掘り込まれたⅦ層をそのまま床面としており、貼床は認められない。壁は緩やかに立ち上がる。

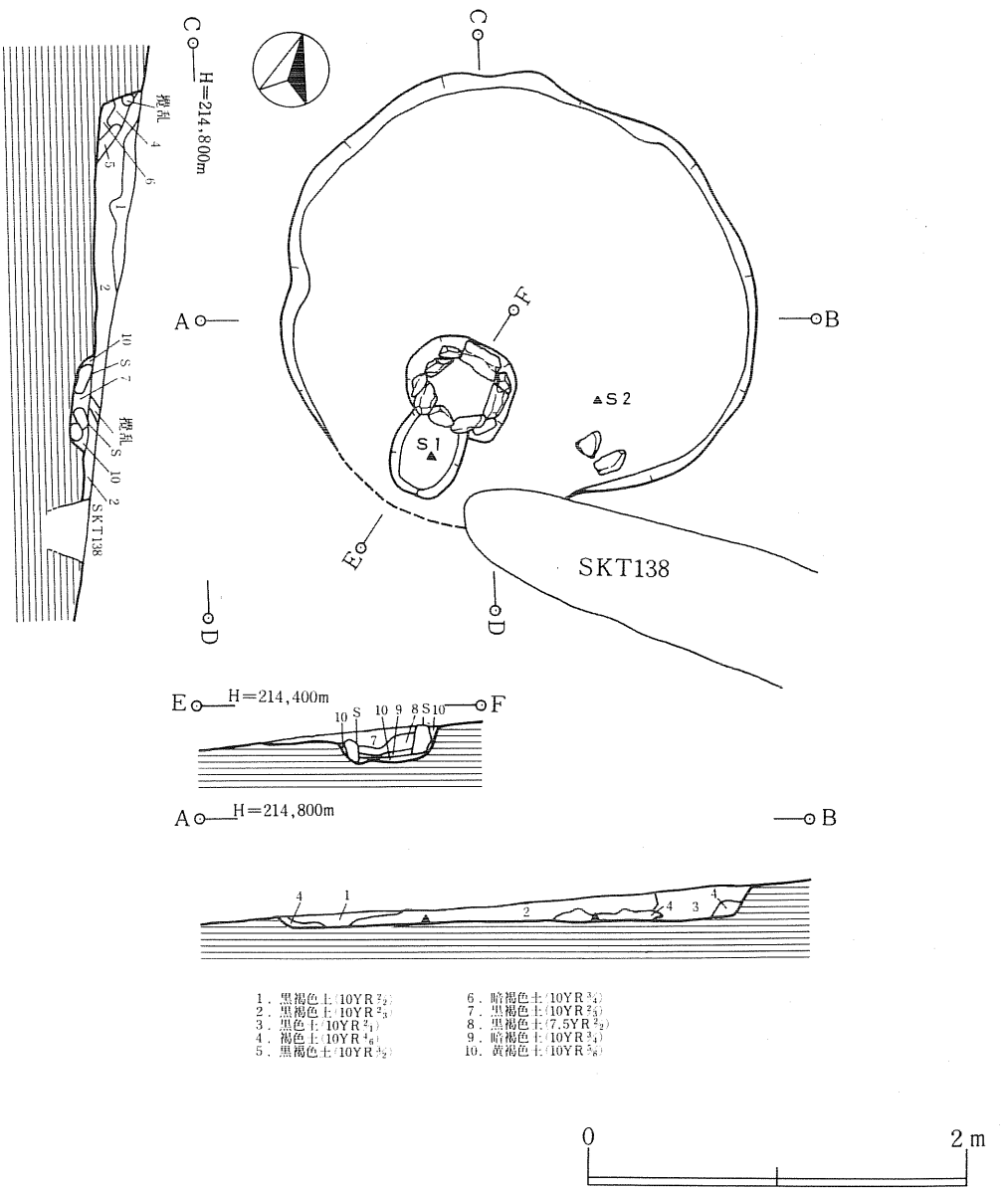
壁溝・柱穴　ともに認められなかった。

炉　床面中央南寄りには内径およそ30cmの石囲炉がある。その南側に接して壁際近くまで長径50cm、短径38cmの長楕円形の浅い掘り込みが存在する。掘り込み内にはピット等は確認されない。広義の複式炉のバリエーションに含まれると考えられる。石囲炉内には炭化物が

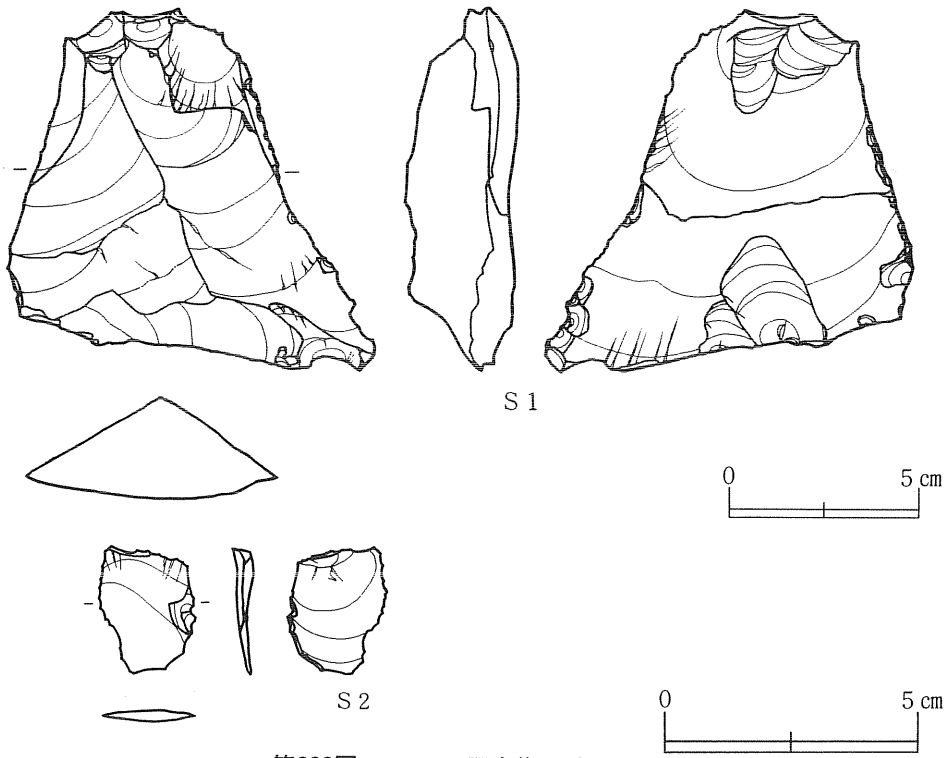
混在するが、明瞭な焼土層は認められなかった。

出土遺物（第266図）　遺物は頁岩製の微小剥離痕ある剥片（Ｓ１）と剥片（Ｓ２）が各１点づつともに床面付近から出土したのみであり、土器は検出されなかった。

所見　本竪穴住居跡は時期決定可能な出土遺物を欠くが、その構造から、縄文時代中期後葉に属するものと考えられる。周辺に散在する縄文土器が本竪穴住居が営まれた時期の遺物の可能性があろう。



第265図　ＳＩ143竪穴住居跡



第266図　ＳＩ143竪穴住居跡出土遺物

(2) 土　　坑

ＳＫ68（第267図）

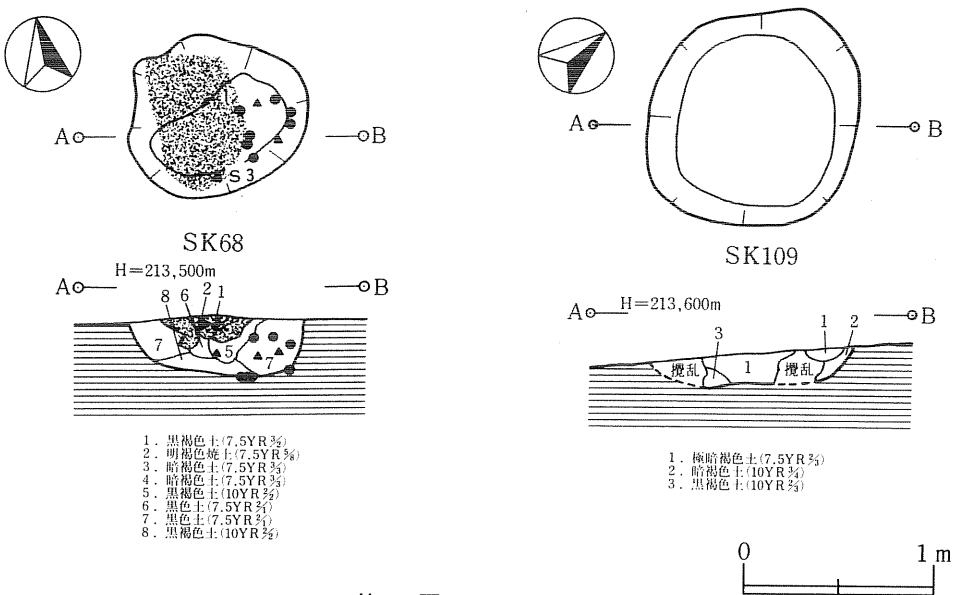
ＮＰ90グリッドに位置する。97×85cmの不整円形プランをなす。壁はやや直立気味に立ち上がり、確認面から底面までの深さは32cmを測る。覆土は８層に分かれる。１～４層は焼土混りの黒色土もしくは焼土のブロックである。いずれも締まりが弱く、本来本土坑内で形成されたものではなく、土坑埋没段階に廃棄されたものと考えられる。５～８層はＶ層起源の流入土とみられ、７・８層中からは少量の遺物が出土する（第268図）。

１はＬＲ縄文が施された深鉢の胴部破片である。縄文時代晩期に属するとみられる。Ｓ３は頁岩製の剥片で、一側縁に微小剥離痕が残る。

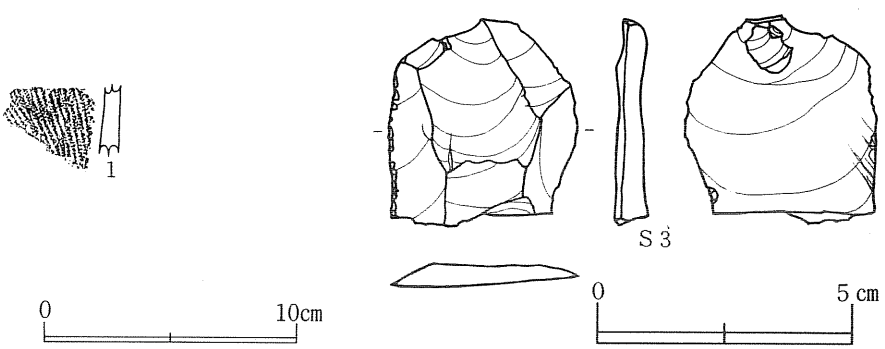
本土坑は後述する縄文時代晩期後半の遺物の集中地点と重なり、覆土中に縄文時代晩期に属するとみられる遺物が出土することから該期に属する可能性が高い。

ＳＫ109（第267図）

ＮＯ90グリッドに位置する。118×105cmの隅丸方形プランを呈する。壁は緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは約19cmを測る。全体に樹根による攪乱が著しい。１層はＶ層の流入土、３層は壁の崩壊土とＶ層とが混在した層と推定され、基本的に自然堆積と考えられる。



第267図　SK68・109土坑



第268図　SK68土坑出土遺物

本土坑の南側では、確認面から10cm前後上位で縄文時代晩期後葉土器がまとまって出土しているが、覆土中からの遺物の出土はなかった。

本遺構上位で検出した土器群は土坑埋没後の所産とみられることから、本土坑は縄文時代晩期後葉以前に属すると考えられる。。

(3)　Ｔピット

本調査区では合計14基の平面形が細長い溝状を呈するＴピットを検出した。いずれも緩斜面から平坦面にかけて立地し、総体としてその長軸は確認面の等高線に平行する傾向が認められる。その分布位置は大きく４地点にまとまる。調査区東端ではＳＫＴ154・153・108が平行に並び、調査区東半部中央のＮＮ86グリッド周辺ではＳＫＴ151・150の２基が並列する。また、調査区中央部の谷頭部は最も平坦面が狭まっており、ここでは北からＳＫＴ130・141・135・

138・139・142・137・140が若干の乱れはあるもののほぼ平行に並んでいる（図版121－１）。調査区西側ではＯＧ92・93グリッド周辺にＳＫＴ18が単独で存在している。

以上のＴピットのうち、ＳＫＴ18は１基のみの単独の検出で検討の余地はあるが、他のＴピット群は複数のＴピットが並列するという配置の共通性から、近接する時期に設置された可能性が考えられる。この中でＳＫＴ138は縄文時代中期後葉に属すると推定される竪穴住居跡ＳＩ143を切っており、一方ＳＫＴ137は完全に埋没した後にその上面で焼土遺構ＳＮ106が形成されている。この焼土遺構は確認面と出土遺物から弥生時代後期に属する可能性が高いものと推定され、これらのことから、本遺跡のＴピットは縄文時代中期後葉以降弥生時代後期以前に形成されたものと考えられるが、詳細な時期は特定できない。

ＳＫＴ154（第269図）

ＮＣ89グリッドで確認した。長軸は西北西－東南東方向を向き、その南西にはＳＫＴ153・108が並列する。ＳＫＴ153との間隔は約30cmである。本遺構は浅い谷状の落ち込みの中央に位置し、遺構上半部を掘り下げた段階でプランを確認した。現状で開口部は長さ360cm、幅20～30cmを測り、確認面から底面までの深さは100cmである。底面は幅10cm前後を測るが、壁は現状の開口部に向かって緩やかに開きながら立ち上がっている。覆土は４層に分かれる。いずれもＶ層起源の黒色土を主体とした流入土である。主に地山ブロック・地山粒子の混入度に相違が認められるが、壁の崩壊土を主体とする堆積層は認められない。

ＳＫＴ153（第269図）

ＮＣ89グリッドに位置する。北北東にはＳＫＴ154、南西には約2.4ｍ離れてＳＫＴ108がそれぞれ平行して存在する。開口部は長さ376cm、幅70cmを測り、確認面からの深さは88cmである。底面幅はおよそ16cm前後で、壁は比較的緩やかに開きながら立ち上がっている。覆土は６層に分かれる。このうち３～５層は壁の崩壊土を主体とする層であり、それ以外はＶ層の流入土とみられる。

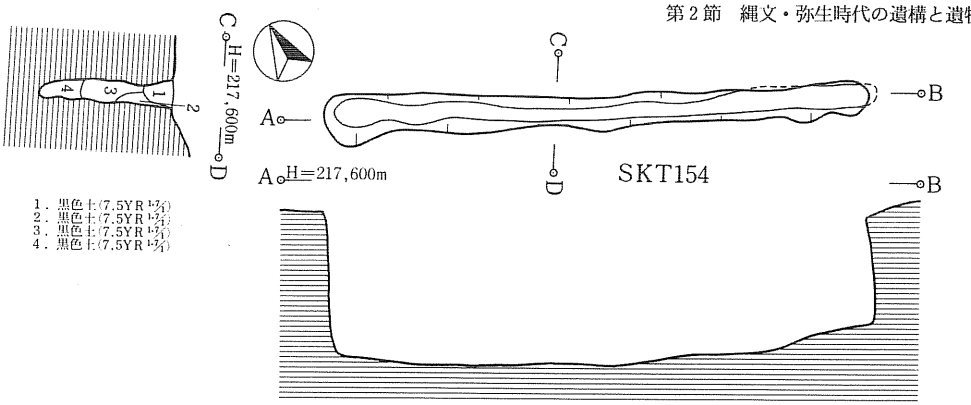
ＳＫＴ108（第269図）

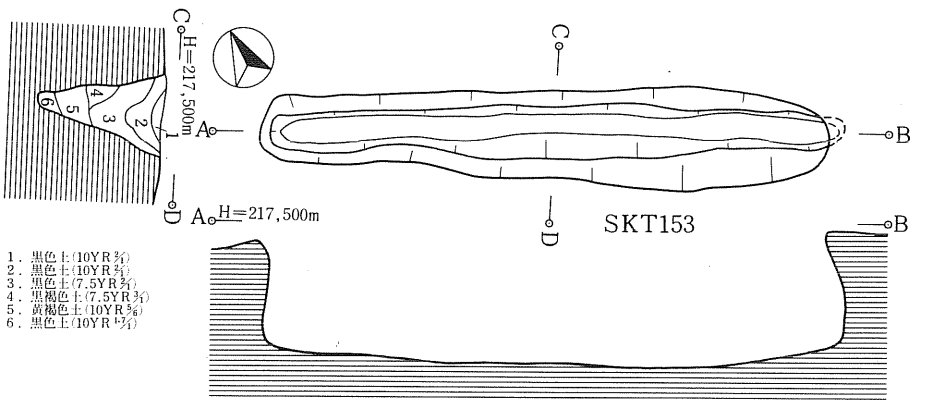
ＮＣ・ＮＤ88グリッドに位置する。ＳＫＴ153・154と並列する。長軸方向は西北西－東南東である。開口部は長さ370cm、幅46cmを測り、確認面からの深さは約80cmである。深さ20cm以下で幅が狭くなり、底面では幅７～１６cm前後である。

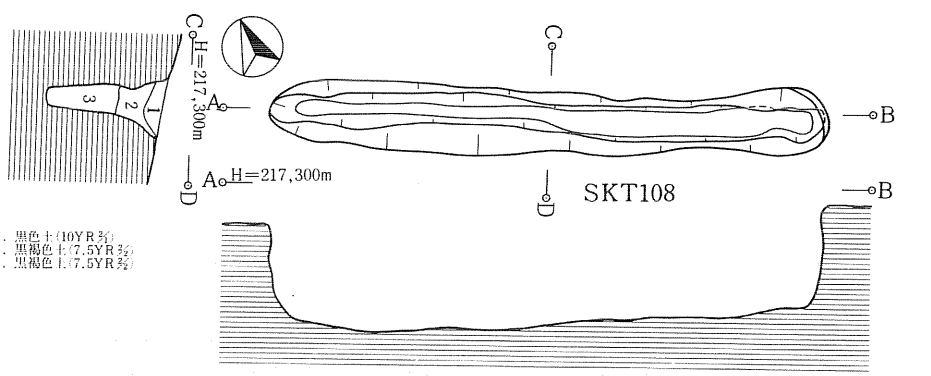
覆土は３層に分かれ、１層はＶ層流入土、２・３層は壁の崩壊土とＶ層とが混在した堆積層である。

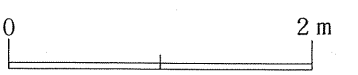
ＳＫＴ151（第270図）

NN86グリッドに位置する。長軸方向は北西－南東方向を向き、南西には約１ｍ離れてＳＫＴ150が並列している。開口部は長さ360cm、幅58cmを測る。確認面からの深さは約128cmである。

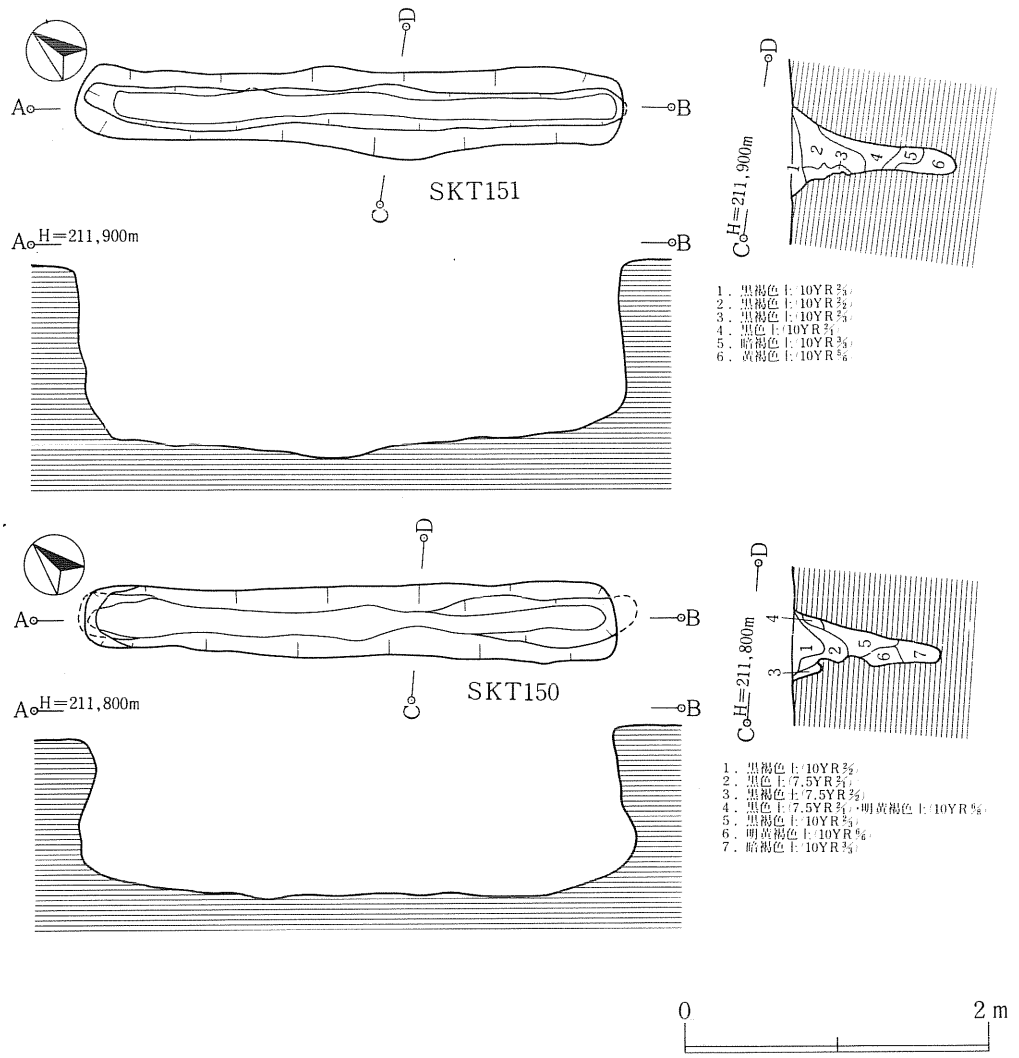








第269図　SKT154・153・108Tピット



第270図　SKT151・150Tピット

確認面から24cm以下は幅が狭まり、底面では16～20cm前後を測る。

覆土は６層に分かれる。１・２層はＶ層の流入土、３～５層はＶ層と壁崩壊土が混在した堆積、６層は壁の崩壊土である。

ＳＫＴ150（第270図）

ＮＮ86グリッドにＳＫＴ151と並列して位置する。長軸方向は北西－南東方向である。開口部で長さ350cm、幅56cm、確認面から底面までの深さ112cmを測る。確認面から20cm以下は幅が狭まり、底面では幅16～24cm前後である。

覆土は７層に分かれる。上位の１・２層はＶ層の流入土、下位の３～７層は壁の崩壊土とＶ層が混在した堆積層である。

ＳＫＴ130（第271図）

調査区中央の谷頭部周辺に位置するＴピット群の中で最も山側のＮＱ96グリッドに位置する。長軸方向は西北西－東南東である。開口部の長さ330cm、幅55cmを測る。確認面からの深さは約96cmである。確認面から20cm以下は幅が狭まり、底面では幅10～16cm前後である。

覆土は６層に分かれ、１層がＶ層流入土、２層以下は壁の崩壊土もしくは壁の崩壊土とＶ層との混在した堆積である。

ＳＫＴ141（第271図）

ＮＳ・ＮＴ96グリッドに位置する。東南隣にはＳＫＴ135が約50cm離れて同一直線上に並んでいる。長軸は西北西－東南東方向を向いている。開口部での長さ360cm、幅63cm、確認面からの深さは約104cm前後を測る。底面幅は24cm前後を測り、壁は緩やかに開きながら立ち上がっている。

覆土は６層に分かれる。このうち１・２・４・６層はＶ層を主体とする周囲からの流入土である。一方、３層と５層は壁の崩壊土の堆積であり、完全に埋没するまでに大規模な壁の崩壊が間隔をおいて前後二度生じたことを示している。

ＳＫＴ135（第271図）

ＮＲ・ＮＳ95グリッドで確認した。北西にＳＫＴ141がほぼ一直線に並んでいる。長軸方向は西北西－東南東である。開口部で長さ344cm、幅62cmを測る。確認面からの深さは110cm、確認面から60cm以下は幅が狭まり、底面では幅14cm前後である。

覆土は６層に分かれる。３～５層は壁の崩壊土を多量に混在し、他の層はＶ層を主体とする流入土である。

ＳＫＴ138（第272図）

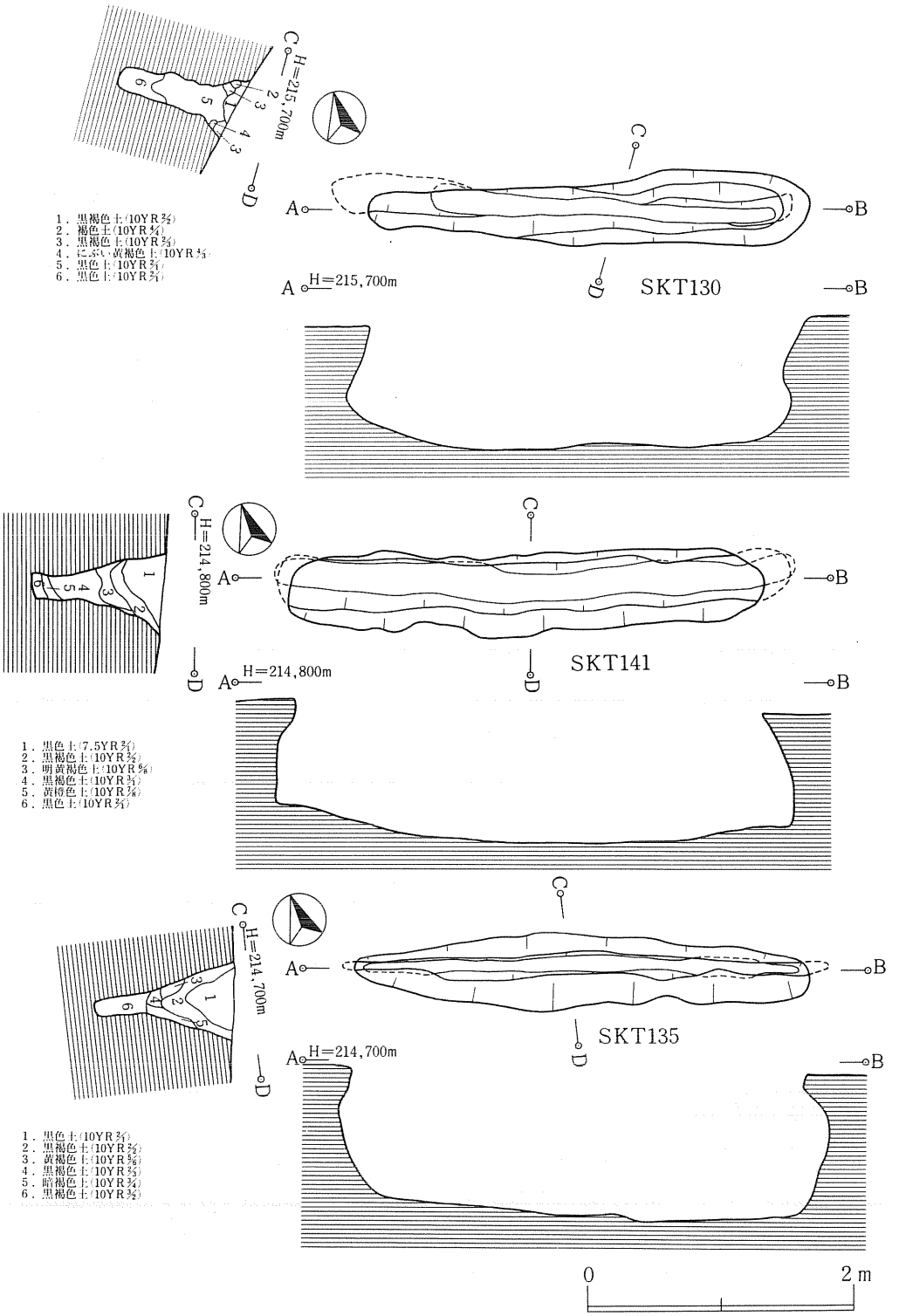
ＮＳ・ＮＴ95グリッドで確認した。西端部は竪穴住居跡ＳＩ143を一部壊している。長軸は西北西－東南東方向を向く。開口部は長さ363cm、幅64cmを測り、確認面からの深さは110cm前後である。確認面から12cm以下は幅が狭まり、底面では幅30cm前後を測る。

覆土は10層に分かれる。３・４・５・７層が壁の崩壊土の堆積であり、他はＶ層起源の流入土である。

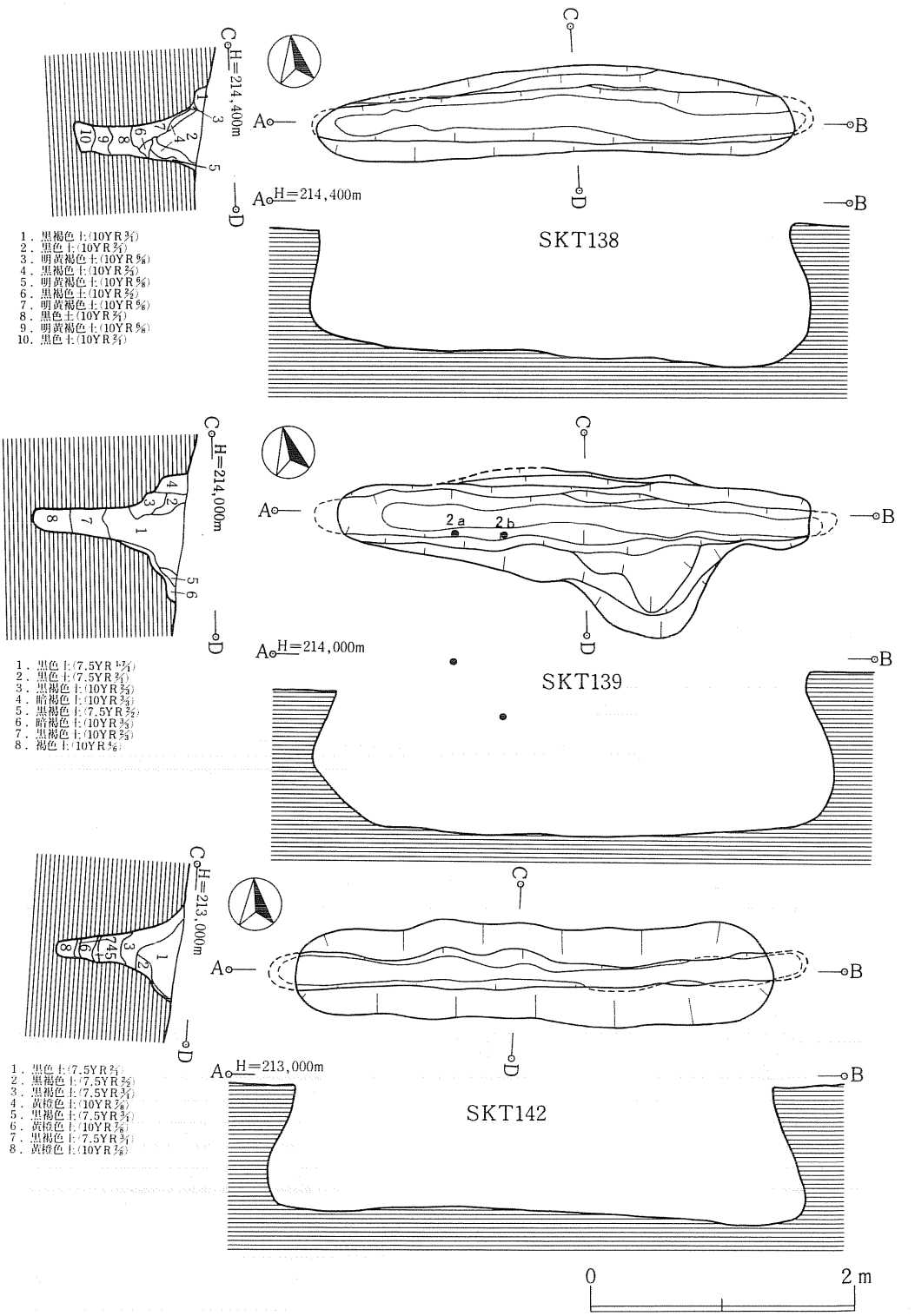
ＳＫＴ139（第272図）

ＮＳ・ＮＴ95グリッドに位置する。ＳＫＴ141・138・137と平行に並び、その長軸方向は西北西－東南東である。開口部は長さ360cmを測る。幅は40～50cm前後であるが、南に張り出す部分があり、その部分では幅124cmを測る。確認面からの深さは110cm前後で、確認面から32cm以下は幅が狭まり、底面では幅12cm前後である。

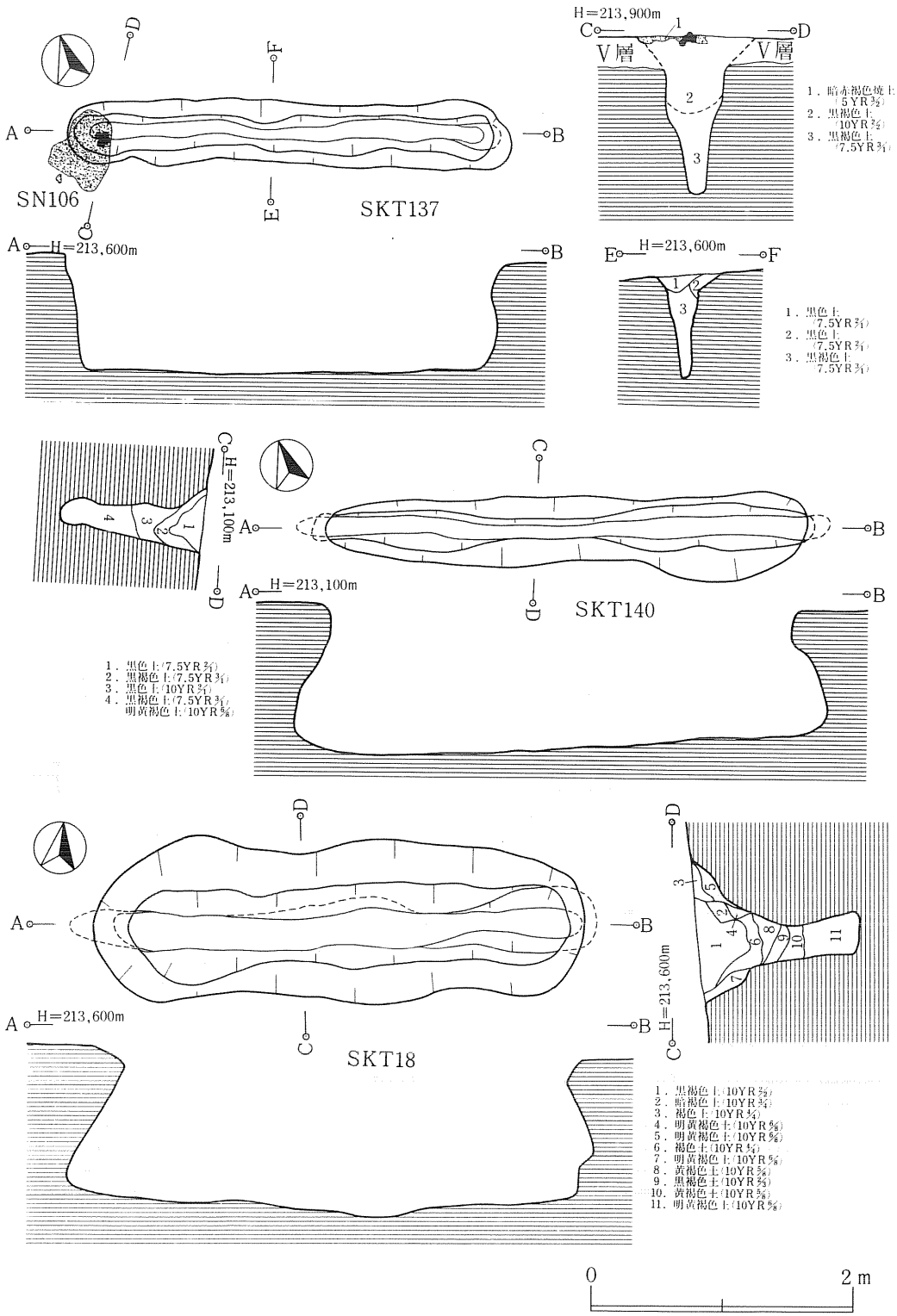
覆土は８層に分かれる。１層がＶ層起源の流入土とみられ、他は壁の崩壊土あるいは壁の崩



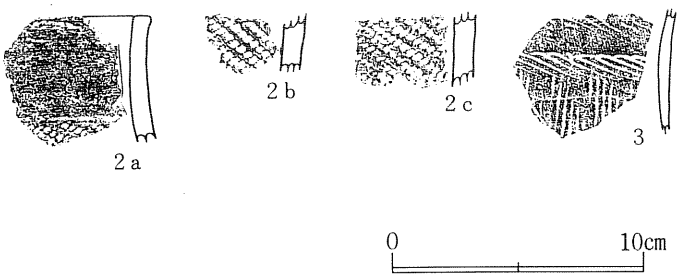
第271図　SKT130・141・135Tピット



第272図　SKT138・139・142Tピット



第273図　SKT137・140・18Tピット



第274図　SKT139Tピット、SN106焼土遺構出土遺物

壊土とＶ層とが混在した堆積である。

本遺構では１層上位から縄文土器片が２点出土している（第274図２ａ・ｂ）。同一個体の破片で、口唇部は面取りされ、口縁部は無文である。頸部以下に節の大きなＬＲ縄文が施されている。縄文時代中期後葉に属するとみられる。本遺構の北側に位置する縄文時代中期後葉に属すると推定される竪穴住居跡ＳＩ143の周辺に分布する第276図２ｄと同一個体であり、この土器は本遺構の大半が埋没した段階に北側から二次的に流入したものと考えられる。

ＳＫＴ142（第272図）

ＮＴ94グリッドからＯＡ94グリッドにかけて位置する。本遺構は長軸が西南西方向を向き、西北西方向を向く周囲のＴピットとはその方向を異にしている。開口部は長さ362cm、幅78cmを測り、確認面からの深さは102cmである。確認面から20cm以下は幅が狭まり、底面幅は８～22cm前後である。覆土は８層に分かれる。４・６・８層は壁の崩壊土であり、その間に黒褐色土の薄層が挟まれる。１～３層はＶ層起源の流入土である。

ＳＫＴ137（第273図）

ＮＴ94グリッドに位置する。西端部には本遺構埋没後に上面で焼土（ＳＮ106）が形成されている。プラン全体の確認面はⅦ層上面で、そこでは開口部は長さ340cm、幅52cmを測る。この確認面からの深さは90cm前後であるが、焼土確認時に設定したベルトの土層断面の観察では本遺構の掘り込み面はＶ層上面であり、本来120cm前後の深さがあったものと認められる。また、Ｖ層上面から70cm以下は幅が狭まり、底面での幅は６～18cm前後である。

覆土は地山のローム粒を含む黒色土～黒褐色土で、周囲からの流入土とみられる。

本遺構に確実に伴う遺物は認められないが、埋没後に形成された焼土遺構ＳＮ106の焼土層中からは縄文中期後葉土器片（第274図２ｃ）と弥生後期土器片（同３）が出土している。このうち前者はＳＫＴ139で出土した土器と同一個体である。

ＳＫＴ140（第273図）

ＮＴ93グリッドに位置する。谷頭部周辺に立地するＴピット群の中では最も谷際に存在する。開口部の平面形は長さ370cm、幅68cmを測る。確認面からの深さは約118cmで、確認面から20cm以下は幅が狭まり、底面では幅22cm前後を測る。長軸はほぼ東西方向を向いている。

覆土は４層に分かれる。４層は地山土と黒色土が斑状に混在し、壁の崩壊土を主体とする堆

積である。１～３層はＶ層を主体とする流入土である。

ＳＫＴ18（第273図）

ＯＧ・ＯＨ92・93グリッドに位置し、周辺にＴピットは存在せず、１基のみの検出である。長軸方向はほぼ東西を向き、開口部で長さ374㎝、幅128㎝を測る。確認面からの深さは約130㎝で、確認面からおよそ40㎝以下は幅が狭まり、底面幅は14～38㎝前後である。

覆土は11層に分かれる。このうち１層はＶ層の流入土、２～５・７・８・11層は壁の崩壊土、６・９・10層はＶ層と壁の崩壊土が混在した堆積層である。

２　縄文時代の出土遺物

今回の調査においては、遺構との共伴関係が必ずしも確実ではない縄文土器あるいは弥生土器を主体とする遺物の集中地点を10箇所以上確認した。以下においては、複数個体の土器がまとまって出土した地点を中心に取り上げて、土器の出土状況とその出土土器について説明を加える。

なお、１個体分のみがまとまって出土した土器はその他の出土土器の項で説明することとする。また、遺物集中地点内から出土した石器は量的に豊富ではなく、土器との共伴関係も明確とは言い難い。そのためその所属時期も特定し難く、ここでは縄文もしくは弥生時代の出土遺物の項の中で一括して記述する。

(1)　遺物集中地点と出土土器

ＮＴ・ＯＡ94～96グリッド（第275・276図）

２・４・５の３個体の土器が分布する。４はＯＡ95グリッド東側で集中的に出土するが、２・５は分布密度が低く、散在する。

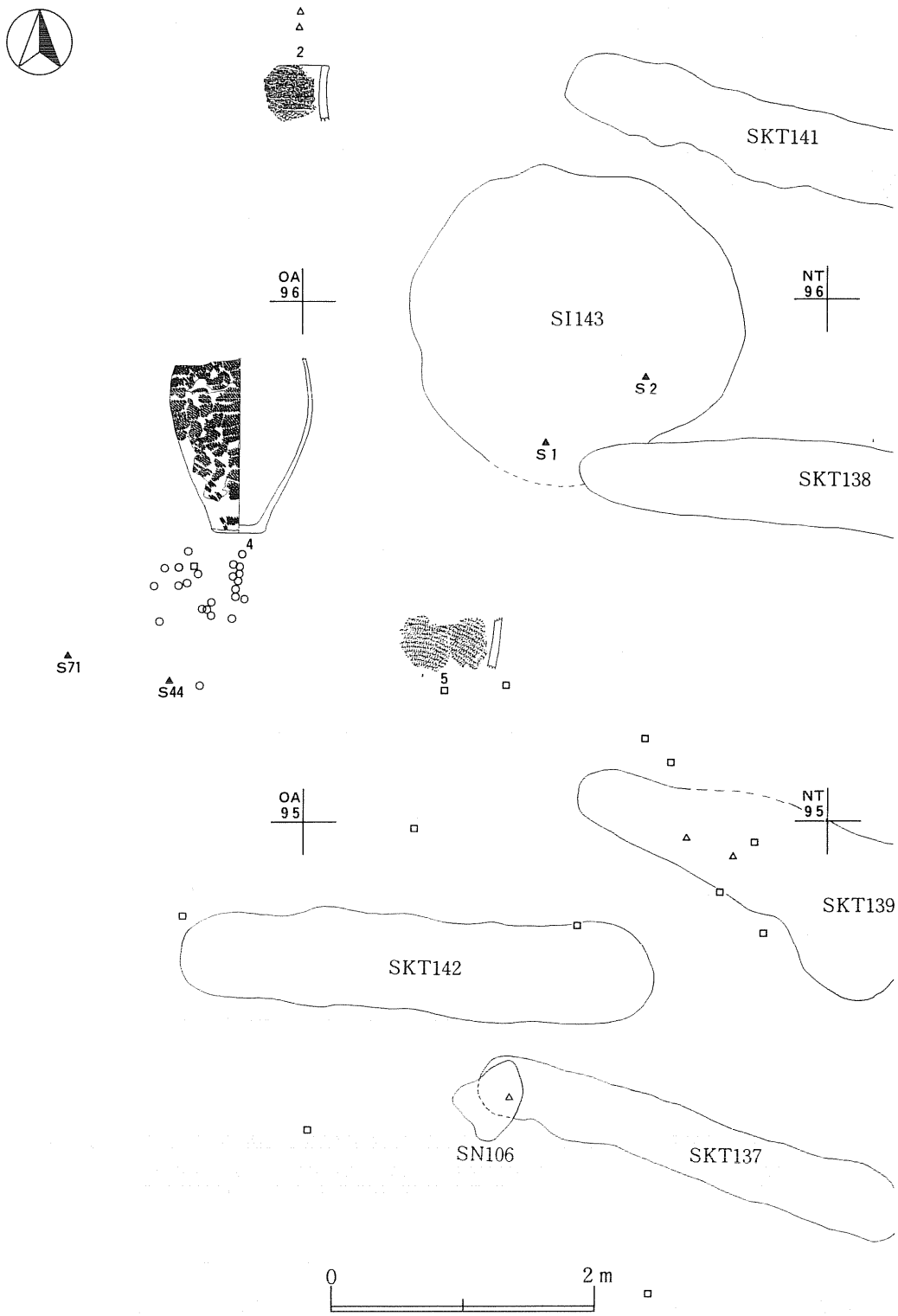
４は口縁部を欠く深鉢である。胴部が張り、比較的小形の底部をもつ。胴部にはＲＬ縄文が斜行する。２ｄはＳＫＴ139・ＳＮ106から出土した２ａ～ｃと同一個体である。下半にはＬＲ縄文が斜行するが、上半には縄文がなく、口縁に近い部位の破片である。５はＬＲ縄文をもつ深鉢である。

以上の土器群はその器形・施文等の特徴から縄文時代中期末葉前後の時期に位置づけられる。その形態から縄文時代中期末葉に属すると推定できる竪穴住居跡ＳＩ143と分布が重なり、この竪穴住居跡と関係する遺物の可能性が強い。

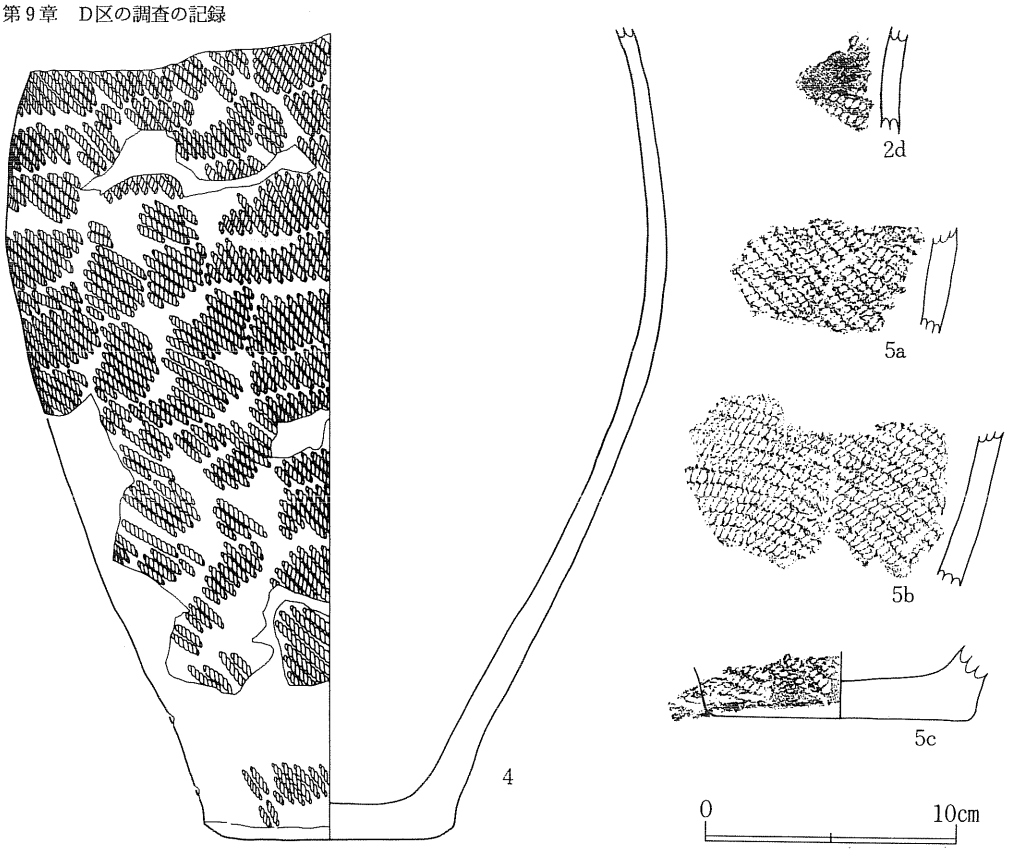
ＮＱ～ＮＳ93グリッド　（第277・278図）

６～11の６個体が分布する。７～９は東西1.5ｍ、南北1.2ｍの範囲に密集し、さらに８はＮＱ93グリッド西側にも若干分布を広げている。これに対し、他の土器には明瞭な集中状況を認めることができない。

６は口縁が若干内湾する深鉢である。口唇には押圧が連続する。外面にはＲＬ縄文が回転施



第275図　NT・OA94～96グリッド遺物出土状況



第276図　NT・OA94～96グリッド出土土器

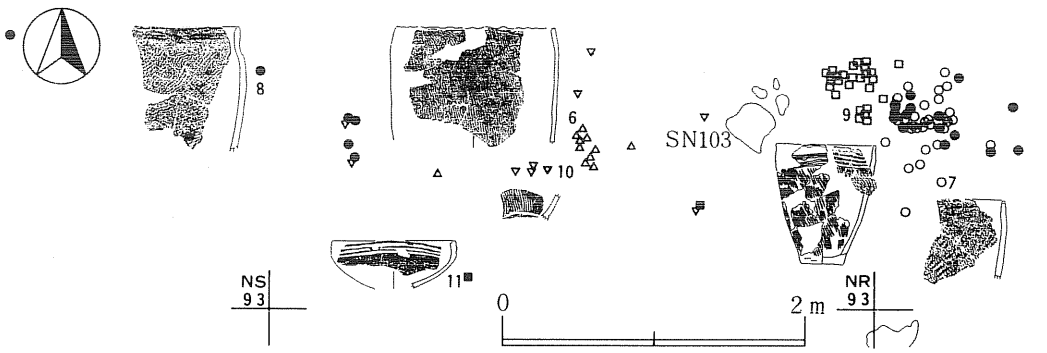
文され、内面にはケズリの痕跡を一部にとどめている。７はＬＲ縄文が施された深鉢である。口縁部は無文で、若干外反する。口唇部には押圧が施される。８もＬＲ縄文が胴部に施され、口縁が外反する深鉢である。９は口縁に平行沈線が巡る深鉢である。口唇は面取りされ、口縁端部は若干外反する。胴部にはＲＬ縄文が施される。10は深鉢もしくは鉢の胴下半の破片である。節の細かいＲＬ縄文が縦走する。底部近くでは沈線が１条巡り、台が付く可能性がある。11は工字文をもつ台付浅鉢である。

これらの土器群は縄文時代晩期後半に属し、時期的にまとまる一括資料であろう。

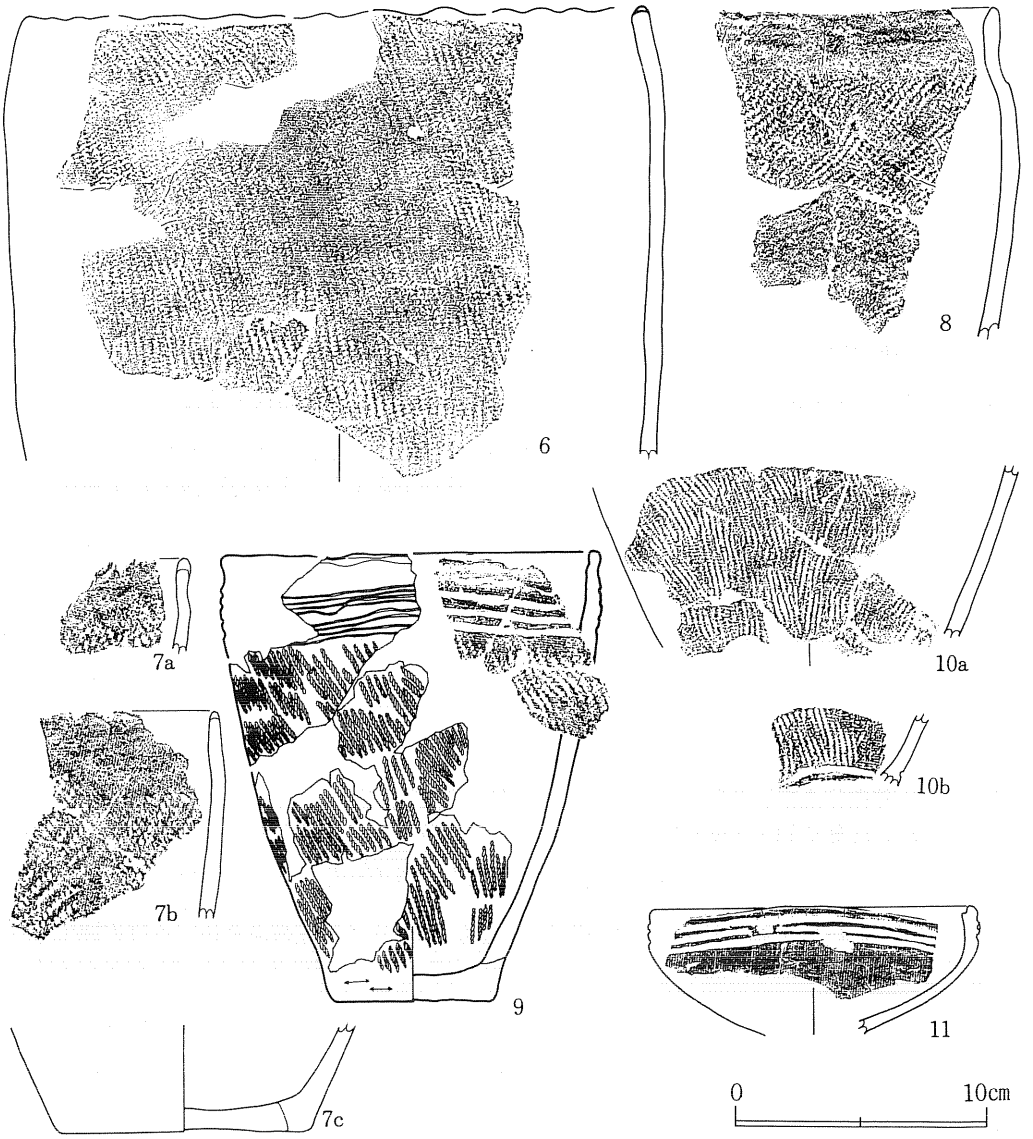
ＮＯ～ＮＲ89～91グリッド　（第279・280図）

本グリッド周辺では遺物の分布は大きく４つの集中地点に分かれる。12・13・20は上述した土坑ＳＫ109の周辺に分布する一群である。ＳＫ109が自然に埋没した後の所産と思われる。14・15・23～25はＮＰ90グリッド内に集中する。また19はＮＱ90グリッド北西側に集中し、22はＮＲ91グリッド南側に分布する。

12・13はともに口縁が内湾する深鉢である。前者は無文で、下半に縦方向の細かい条痕が残る。後者はＲＬ縄文が縦走する。14は無文の底部である。底部から胴部へは屈曲せずに直線的



第277図　NQ～NS 93グリッド遺物出土状況



第278図　NQ～NS93グリッド出土土器

に立ち上がる。15は口縁に平行に沈線が施された深鉢である。口唇には浅い沈線が巡り、小突起が付く。胴部はＲＬ縄文が施される。16・17は頸部に数条の平行沈線が施される深鉢である。18は口縁部に４条の沈線が施され、沈線間が浮き彫り状になる深鉢である。胴部にはＲＬ縄文が縦走する。19は口縁に２条の沈線を巡らし、口唇外側に刻みを施した浅鉢である。胴部にはＲＬ縄文が施される。20はＲＬ縄文が施された浅鉢である。一部に縦方向の細かい条痕が残っている。21は小形台付鉢である。口唇には１箇所に突起が付き、突起を起点に外面に２条の沈線が巡らされる。内面にも１条の沈線が巡る。胴部と台部の境界にも１条の沈線が加えられ、胴部にはＲＬ縄文が施される。22は台付鉢である。細かいＲＬ縄文を地文とし、口縁には工字文が施される。23は浅鉢の口縁部片である。口縁外面には粘土紐貼り付けによる工字文が描かれ、内面には沈線が１条巡る。24は雲形文が施された浅鉢底部である。25は羊歯状文をもつ注口土器もしくは壺の口縁部破片である。24・25は他の土器に比べ摩滅が著しい。

以上の土器群は縄文時代晩期前半に属する24・25を除き、縄文時代晩期後半に属する一括遺物と考えられる。

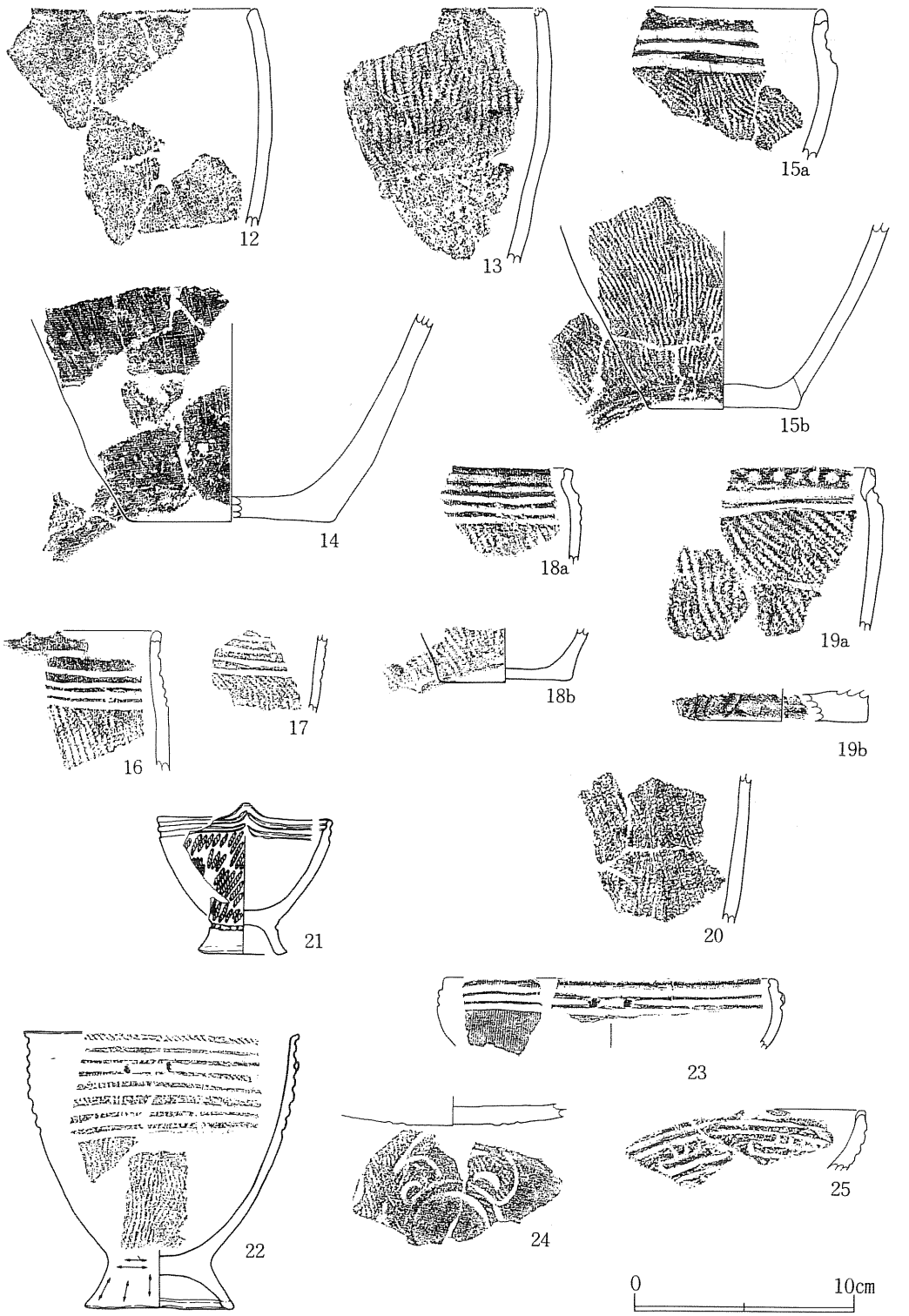
(2)　その他の出土土器（第281・282図）

26はＯＪ98グリッドから出土した円筒下層ｃ式土器の口縁部破片である。口縁部は外反し、４条のＬＲ縄文原体の側面圧痕が残る。本調査区での縄文時代前期土器は本例のみであった。27は結節をもつＬＲ縄文原体を縦位回転施文した深鉢である。縄文時代中期後半に属する。28～30は縄文時代中期末～後期初頭に属するとみられる深鉢である。いずれもＬＲ縄文が縦位回転施文される。31はＬ縄文を地文とし、やや幅広の沈線が施された小波状口縁をなす深鉢である。縄文時代後期前半に属する。調査区東北端ＮＢ88グリッドからの出土であり、東側のＢ区から流れ込んだものと推定される。32は縄文時代後期の深鉢胴部である。ＬＲ縄文が施され、底部近くでは横方向のナデが施される。

33・34は縄文時代晩期後半の深鉢である。33は口縁に粘土紐貼付けによって連続する横長の楕円形の文様が描かれ、底部近くでは２条の沈線が巡る。胴部の地文はＬＲ縄文である。34は内湾する口縁部に１条の沈線が巡り、胴部にはＬＲ縄文が施される。35は小片で、器形等は不明であるが、沈線と刺突が施されている。36は小形台付鉢で、口縁外面には工字文が、内面には１条の平行沈線が施される。37は無頸壺とみられる。外面には赤色顔料が残存している。38は注口土器の注口基部破片である。注口部を取り巻くように沈線で渦巻き状の文様が描かれている。縄文時代晩期前半に属する。

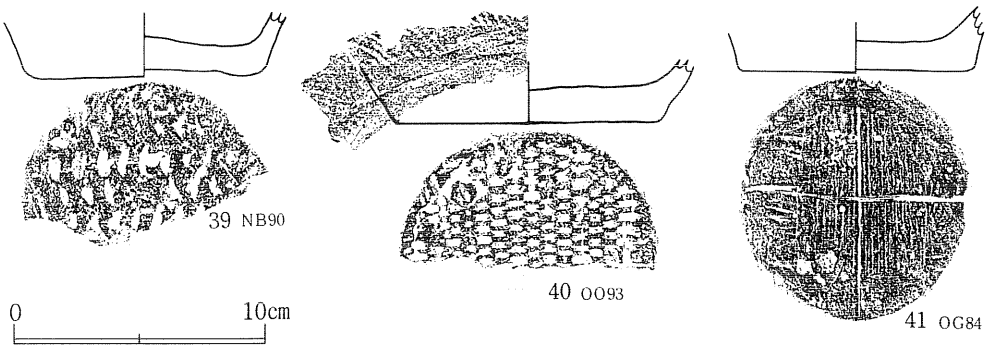
39～41は深鉢の底部である。39はスダレ状圧痕を、40は網代痕をそれぞれ底部に残す。41はヘラ状工具によって「十」字状の沈線が底面に施されている。以上の底部破片はいずれも縄文時代中期～後期に属するものであろう。

第279図　NO～NR89～91グリッド遺物出土状況



第280図　NO～NR89～91グリッド出土土器

第281図　その他の遺構外出土土器（１）



第282図　その他の遺構外出土土器（２）

3　弥生時代の検出遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡

ＳＩ90（第283図、図版122）

位置・確認状況　ＮＤ87グリッド東北部を中心に位置する。Ⅵ層上面で確認した。南側の壁は既に削平されており、さらに西端部は範囲確認調査時のトレンチによって壊されている。また、南端部はＳＫ93によって一部切られている。

形態・規模　平面形は東西3.1ｍ、南北推定3.0ｍのほぼ円形である。確認面から床面までの深さは20cm前後を測る。

覆土　覆土には比較的大形の炭化材を含み、人為的埋土とみられる。覆土中からは若干の土器片が出土している。

床・壁　床には地山土を厚さ３～10cmに貼り付けた貼り床が、中央部を中心に広がっている。また、壁は残りの良い北側では比較的急に立ち上がっている。

壁溝・柱穴　ともに認められなかった。

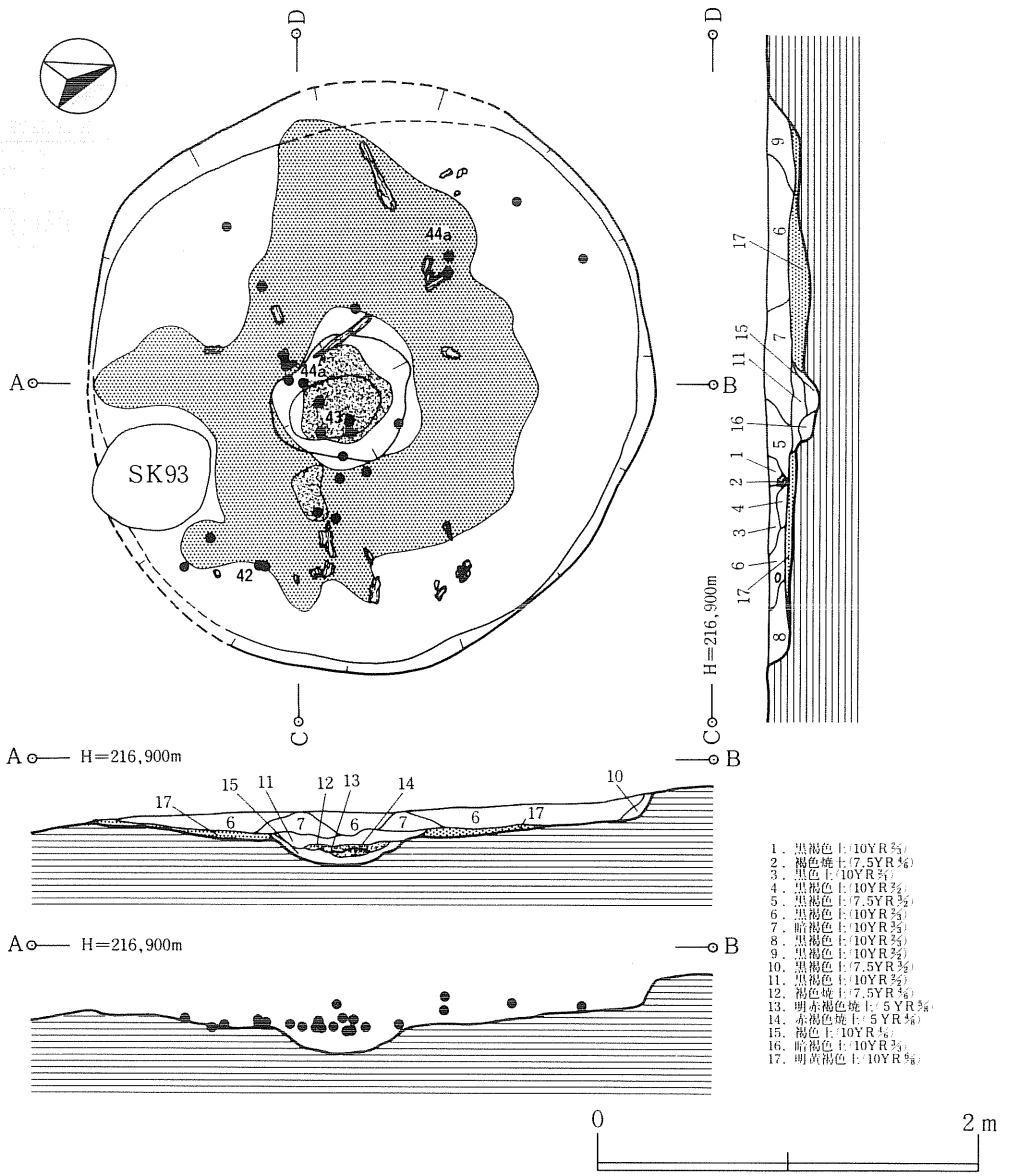
炉　床面中央に径80cm前後、深さ16cmの地床炉が存在する。

出土遺物（第284図）　遺物は土器のみの出土で、石器は出土していない。42は口縁が外反する甕の口縁部片である。若干面取りされた口唇部と口縁部外面にはＲＬ縄文が施される。口唇の内・外側には交互に刻みが加えられ、交互刺突文状を呈する。口縁外面には口唇部と同一工具で、平行沈線が施される。43・44は甕の破片で、ＲＬ縄文が縦走する。両者は同一個体の可能性があるが、確実ではない。これらの土器は床面直上から覆土中にかけての出土である。

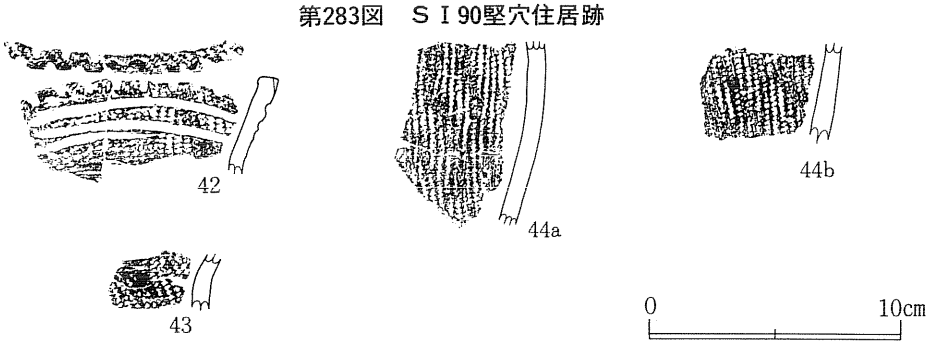
所見　本竪穴住居跡は出土土器から弥生時代に属する。また覆土中には大形の炭化材が含まれることから、焼失家屋であった可能性も考えられる。

(2)　井　　戸

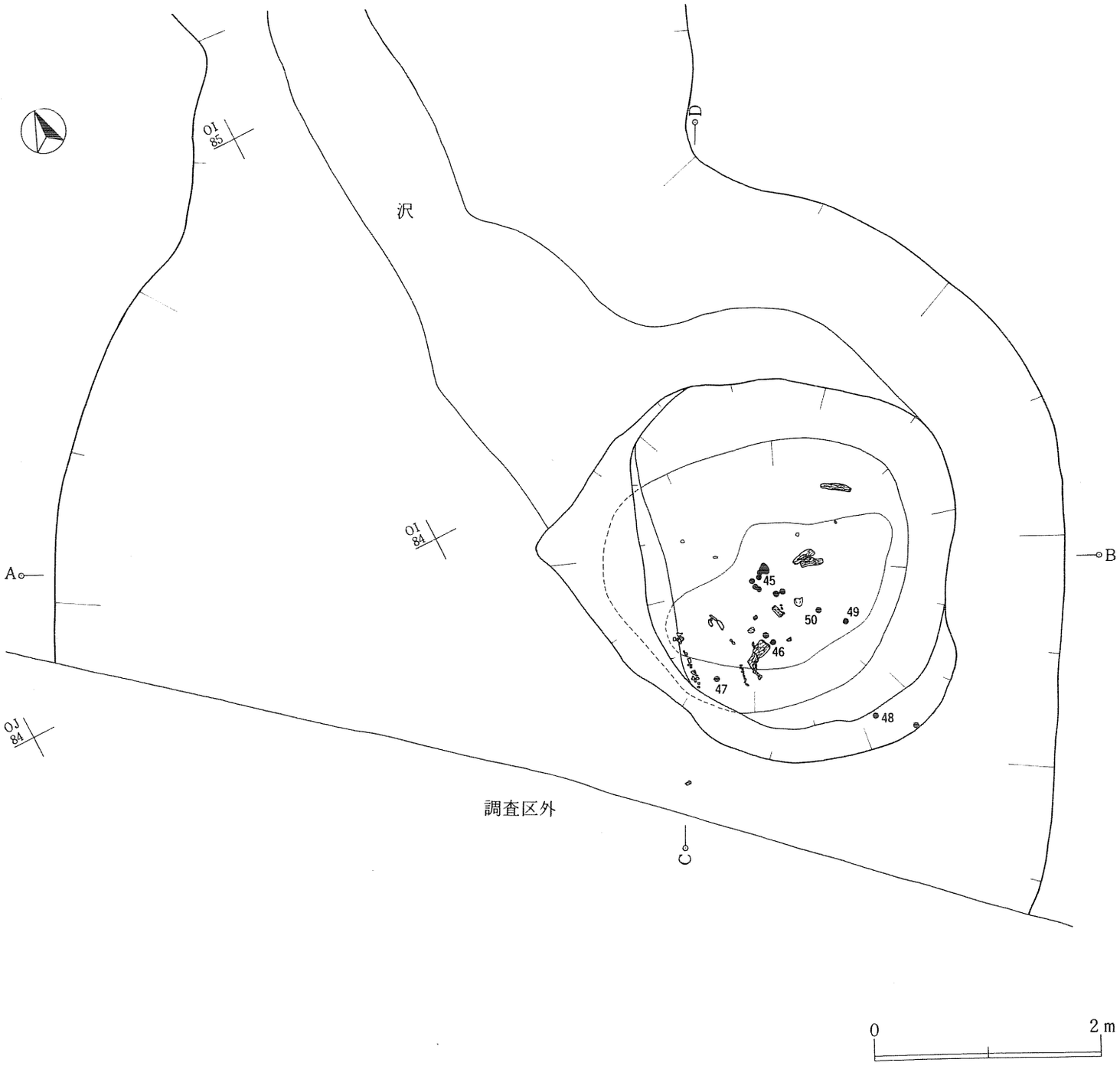
ＳＥ04（第285・286図、図版123）



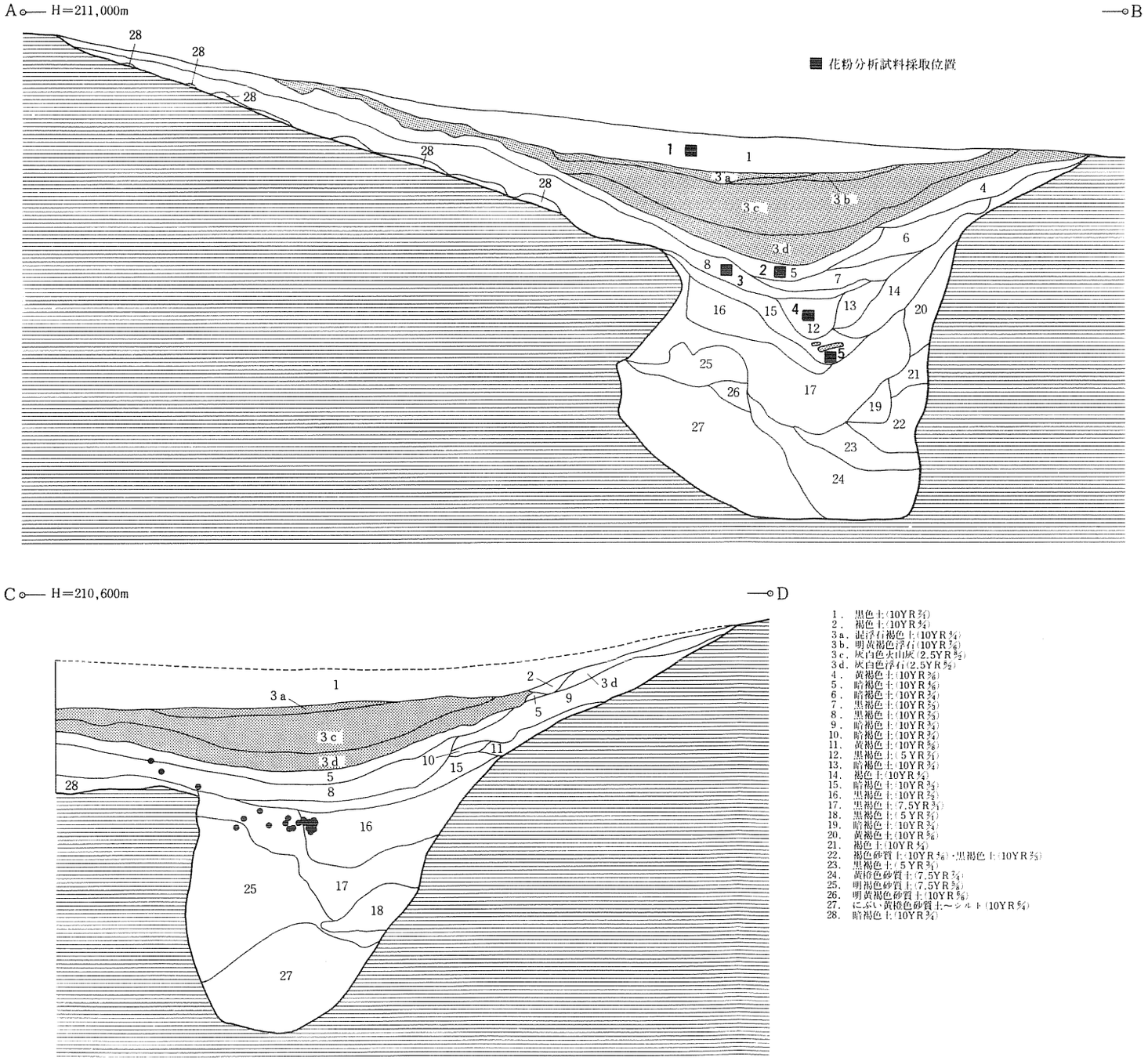
第283図　ＳＩ90竪穴住居跡



第284図　ＳＩ90竪穴住居跡出土遺物



第285図　SE04井戸平面図



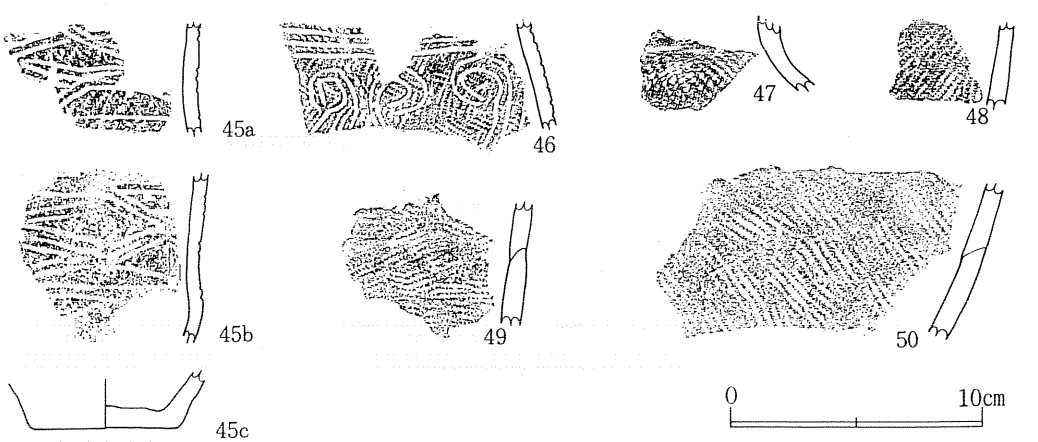
第286図　SE04井戸土層断面図

ＯＧ・ＯＨ83グリッドに位置する。ＯＨ86グリッドから南へ走る浅い沢の中央に掘り込まれている。沢底面での平面形は東西3.4ｍ、南北3.6ｍのやや不整の円形を呈する。沢底面からの深さは2.3ｍを測り、壁は崩壊が著しく、特に西側では大きくえぐれているが、覆土中の壁の崩壊土の堆積状況から考えて、本来はほぼ垂直に立ち上がっていたものと推定できる。井戸底面付近で湧水が認められたが、水量は豊富ではなく、現状では雨水が地下に浸透したものが部分的にたまったものと考えられる。

覆土は27層にわかれるが、大きくは上層・中層・下層の３群にまとめられる。上層（１～３ｄ層）はそれぞれ基本層序のⅡ・Ⅲ層に対比され、井戸の大半が埋没した後のくぼみに自然堆積したものである。中層（４～18層）は総体として井戸廃絶後間もなく周囲から流入したと考えられる層群である。下層（19～27層）は壁の崩壊土を主体とする層である。この壁の崩壊土を主体とする層は底面直上まで認められることから、本井戸は掘削後まもなく壁の崩壊によって廃絶されたものと考えられる。

遺物は中層（９・11・15・16層）からの出土である（第287図）。45は小形の甕である。口縁部を欠くが、頸部下半が若干屈曲し、胴部が張る器形をとる。頸部には沈線で重菱形文が描かれる。胎土には石英粒等の砂粒が顕著で、焼成は不良である。器面の調整は入念ではない。46は不整方向に施文されたＲＬ縄文を地文とし、沈線で曲線的な文様が描かれる甕である。沈線に沿って一部に小さな円形刺突が施される。47はＲＬ縄文が施された甕もしくは壺の頸部片である。48・50はＲＬ縄文施文の甕破片、49はＬＲ縄文施文の甕破片である。この他に頁岩製剥片５点が出土している。46は沢上流部のＯＨ86グリッド出土土器と接合する。このことから本井戸からの出土遺物の多くは沢の上流側から流入したものと推定できる。

本井戸は、壁の崩壊による廃絶後まもなく弥生土器が流入し、他時期の遺物を含まないこと、井戸がほぼ埋没しきった後に大湯浮石が堆積していることから、弥生時代に属すると考



第287図　SE04井戸出土遺物

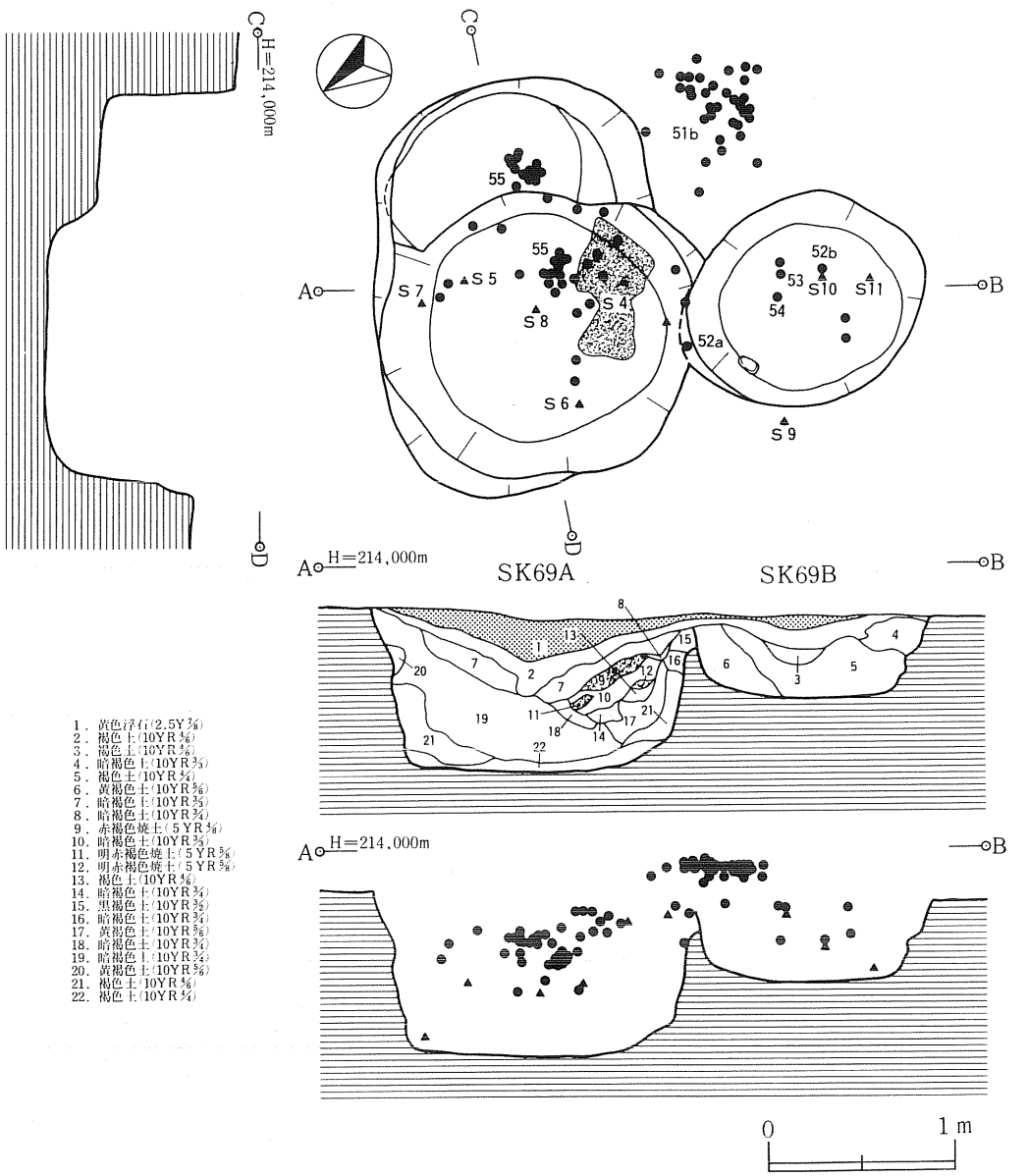
えられる。

(3) 土　　坑

ＳＫ69Ａ・Ｂ（第288図、図版124）

ＮＫ・ＮＬ81グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。本遺構は２基の土坑墓の切り合いであり、ＳＫ69Ｂが、ＳＫ69Ａを切っている。

ＳＫ69Ａは東西2.2m、南北1.8mの東に張り出しをもつ瓢箪形の平面形を呈する。深さは最深



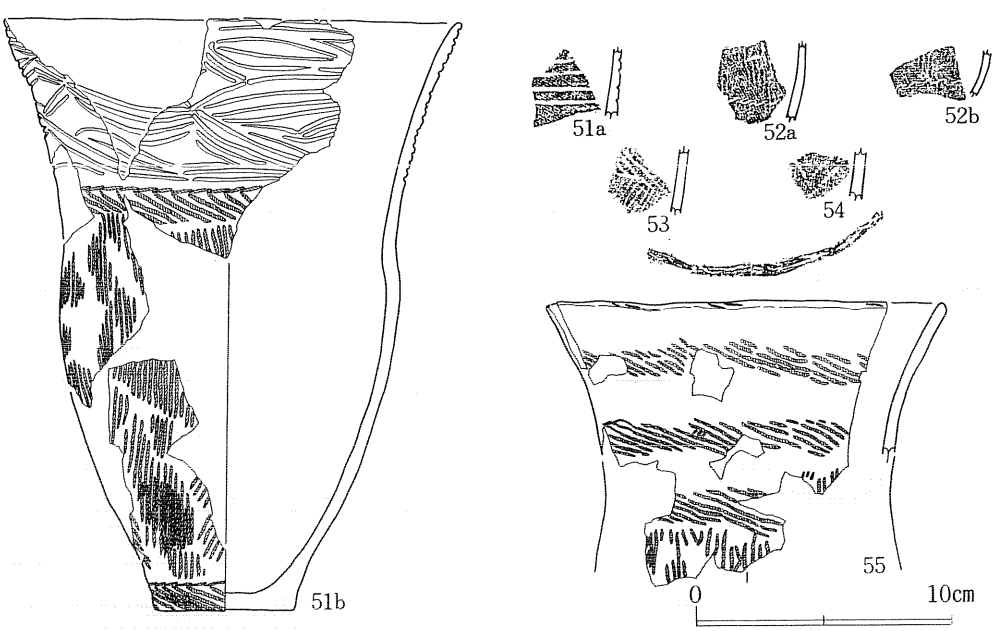
第288図　SK69A・B土坑

部で0.9m、張り出し部で0.7mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。本遺構は２基の円筒状の土坑が切り合っている可能性も考えられるが、発掘時の所見では張り出し部には19層が土坑中央部から連続して堆積しており、後述するＳＫ73が張り出し部を有する構造を示すことから、本遺構も同様の張り出し部をもつ一連の遺構と判断した。

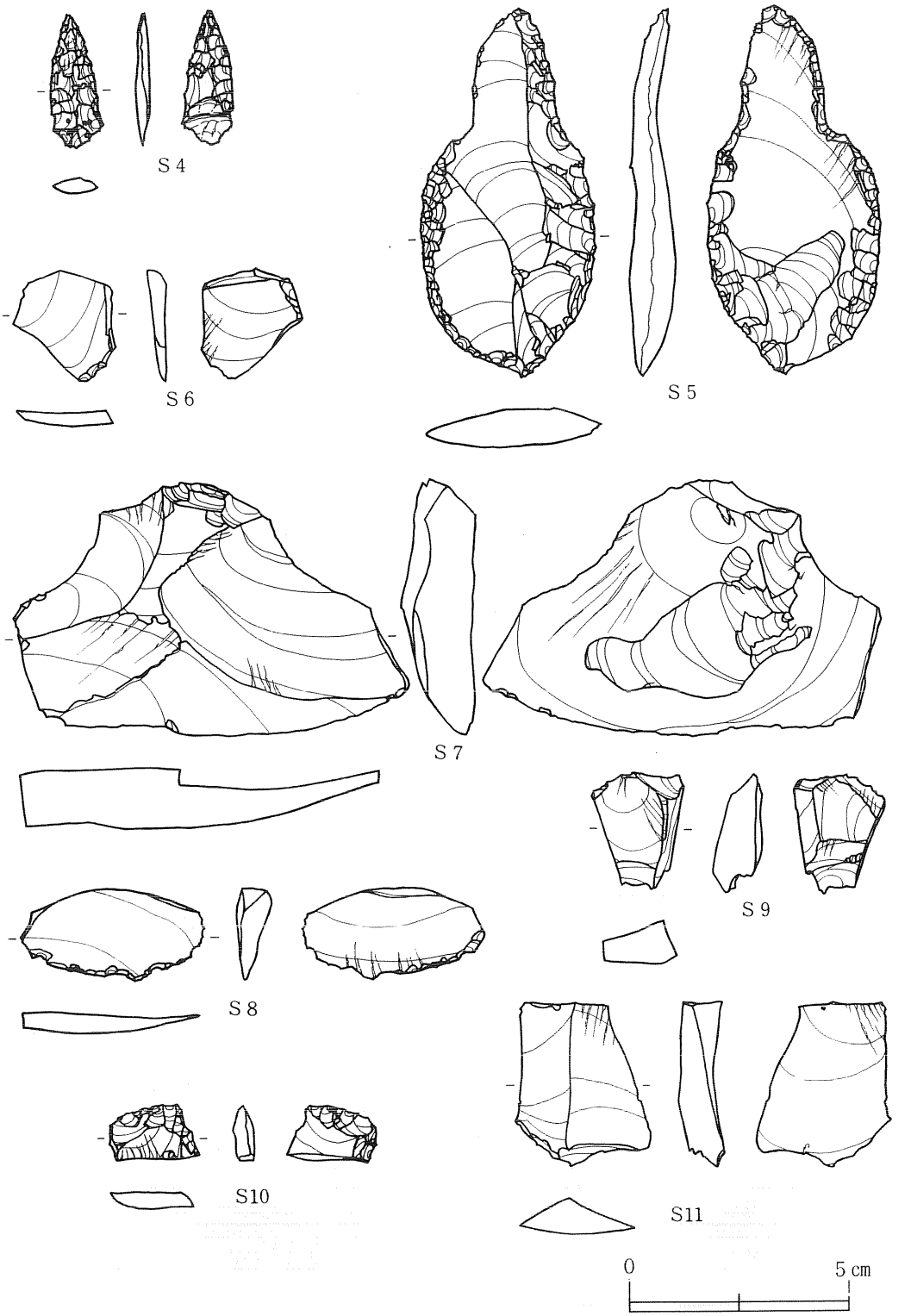
覆土は大きく１・２層と７～22層とに分かれる。前者はＳＫ69Ｂと共通する周囲からの自然流入土である。７層以下は地山土を顕著に含むことから人為的埋土と考えられ、中でも19層以下は大形の地山ブロックを含み、土坑掘削土そのものの埋め戻し土と考えられる。また、９層はよく締った焼土層であり、本来土坑上面で形成されたものが、土坑中央部が陥没して斜めに落ち込んだものと推定される。

遺物は主に２層および７層からの出土である（第289・290図）。土器は土坑の東隣から出土した甕と接合し、土坑を埋め戻した後、その上面から周囲に置かれたものが流入したものと推定される。55は口縁が外反する小形の甕で、口縁にＬ撚糸文が斜行し、胴部以下は縦走する。(註１) 51は口縁が外反し、胴部がわずかに張る器形をなす。55と類似する器形であるが、口縁が微かに肥厚し、口唇は丸く調整されている。口縁部には沈線で不整な重菱形文が描かれる。頸部のくびれ部と底部側面には結節回転文が横走し、胴部はＬ撚糸文が縦走する。

Ｓ４は頁岩製石鏃である。基部を被熱により欠失する。比較的焼土層に近い位置からの出土であり、この欠失は焼土の形成時に生じた可能性があろう。Ｓ５はスクレイパーである。頁岩の横長剥片の両縁に二次加工を加え、一方の側縁側に柄部を作出し、対する側縁側を主に表面



第289図　SK69A・B土坑出土遺物（１）



第290図　SK69A・B土坑出土遺物（２）

への加工により、鋭く尖らしている。Ｓ７は剥離面打面をもつ大形の横長剥片である。表面の先行剥離面の剥離方向は不定である。本例は底面直上からの出土である。Ｓ６は二次加工ある剥片、Ｓ８は微小剥離痕ある剥片である。ともに頁岩製である。

本土坑は掘削直後に埋め戻されていること、上面で火が焚かれ、土器が置かれていることなどから、土坑墓と考えられる。本土坑は上面出土土器から弥生時代に属する。

ＳＫ69ＢはＳＫ69Ａを北端部で僅かに切る。1.3m×1.2mのほぼ円形プランをなし、深さは約45cmを測る。底面は平らで、壁は急傾斜で立ち上がっている。

覆土は１・２層が流入土、４～６層が地山ブロックを含む埋め戻し土である。

遺物は多くは２層からの出土である（第289・290図）。51ａは51ｂと同一個体である。５層からの出土であり、その出土層位から土坑埋没後に流入したものではなく、土坑埋め戻し時に小片が混入したものと考えられる。52は薄手小形の甕である。Ｌ撚糸文が縦走し、結節回転文が横走する。52ａは２層、52ｂは５層からの出土である。53・54は羽状の撚糸文をもつ。共に２層からの出土である。Ｓ９は素材の形状は不明であるが、上下両端に剥離痕をもつ。楔形石器の可能性がある。Ｓ10は二次加工ある剥片である。素材の末端側は折損し、打面側の両面に二次加工が施される。Ｓ11は縦長剥片である。これらの石器はいずれも頁岩製である。

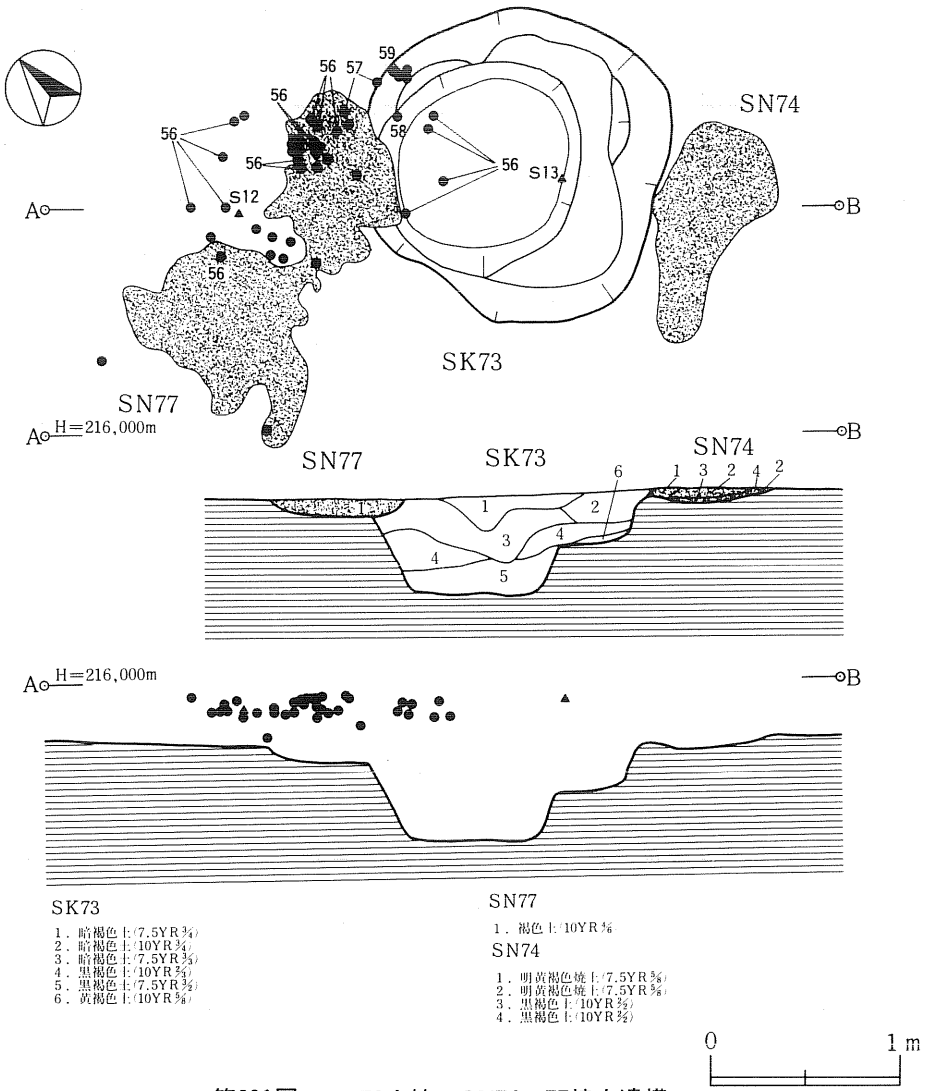
本遺構も掘削後直ちに埋め戻されていることとその形態とから土坑墓と判断できる。本土坑もＳＫ69Ａを切り、上面に弥生土器が流入しており、弥生時代に属するであろう。

ＳＫ73（第291図、図版125）

ＮＦ86グリッドから一部ＮＥ86グリッドにかけて位置する。東端で接する焼土遺構ＳＮ74を切り、土坑埋没後北西側に焼土遺構ＳＮ77が形成されている。本土坑の平面形は長軸1.7m、短軸1.6mの不整円形をなし、掘り込みは東南側に張り出した深さ28cmの段をもつ。中央部分は底径0.9m前後の円筒形をなし、確認面からの深さは約0.5mである。

覆土は６層を除き、いずれも大形の地山ブロックを多量に含み、掘削土がそのまま埋め戻されている。

遺物はＳＮ77周辺を中心に土坑上面にかけて分布する（第292図）。土坑下部には遺物の出土はない。56は口縁が強く外反し、胴下位で若干屈曲する甕である。口縁内面には沈線が２条巡り、口縁外面にはＬＲ縄文地に水平方向の沈線間に鋸歯文が２本１組の平行沈線で描かれる。頸部には重菱形文、胴下半には円の中に菱形を充塡する文様が描かれている。57は外反する口縁をもつ甕である。口縁部は無文で、頸部との境の屈曲部に水平に沈線がめぐる。口唇を面取りし、沈線を１条施した後、口唇外側を押圧している。58・59は小片であり、表面にわずかに縄文が残る。Ｓ12は剥離面打面をもつ縦長剥片の側縁に二次加工を施し、刃部を作出したスクレイパーである。左面の右側縁は両面からの加工により、ノッチ状を呈する。Ｓ13は剥離面打



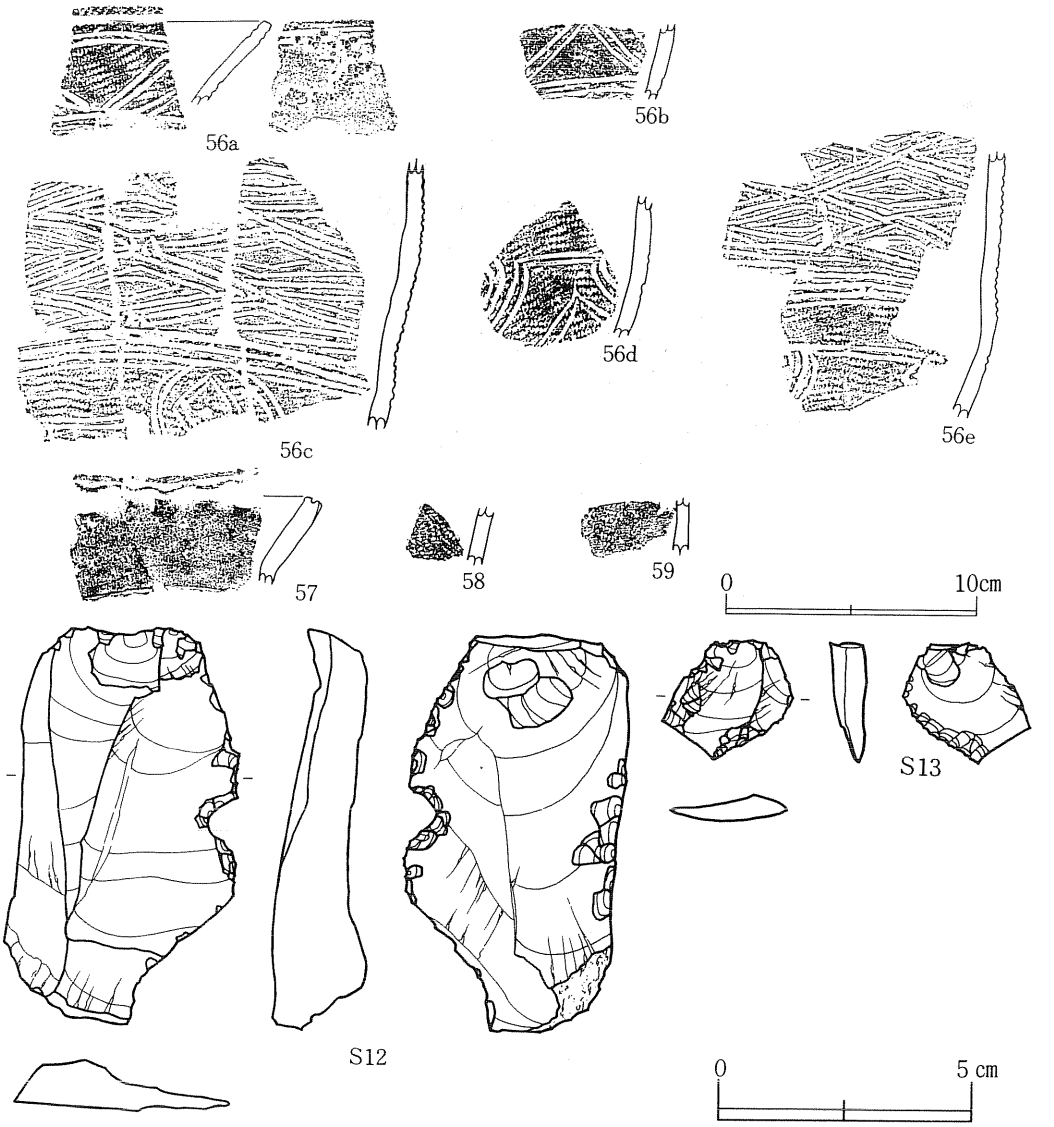
第291図　SK73土坑、SN74・77焼土遺構

面をもつ小形の剥片の末端側に斜めに二次加工を加え、刃部としたスクレイパーである。

本土坑は掘削直後に埋め戻されていること、埋め戻し後焼土が形成され、その周囲に土器が散布することから土坑墓であると考えられる。さらに先述したように張り出しをもつ掘り込みの形態はＳＫ69Ａと類似している。本土坑は上面の検出土器から弥生時代に属する。

ＳＫ78（第293図、図版125）

ＮＥ85グリッドに位置する。Ⅳ層上面で大湯浮石の落ち込みを確認したが、明瞭な掘り込みのプランを検出できなかった。このためベルトを設定し、掘り下げを行ったところ、Ⅶ層上面でわずかに掘り込みを確認した。土坑の平面形は推定で125×95cm前後の楕円形を呈する。底

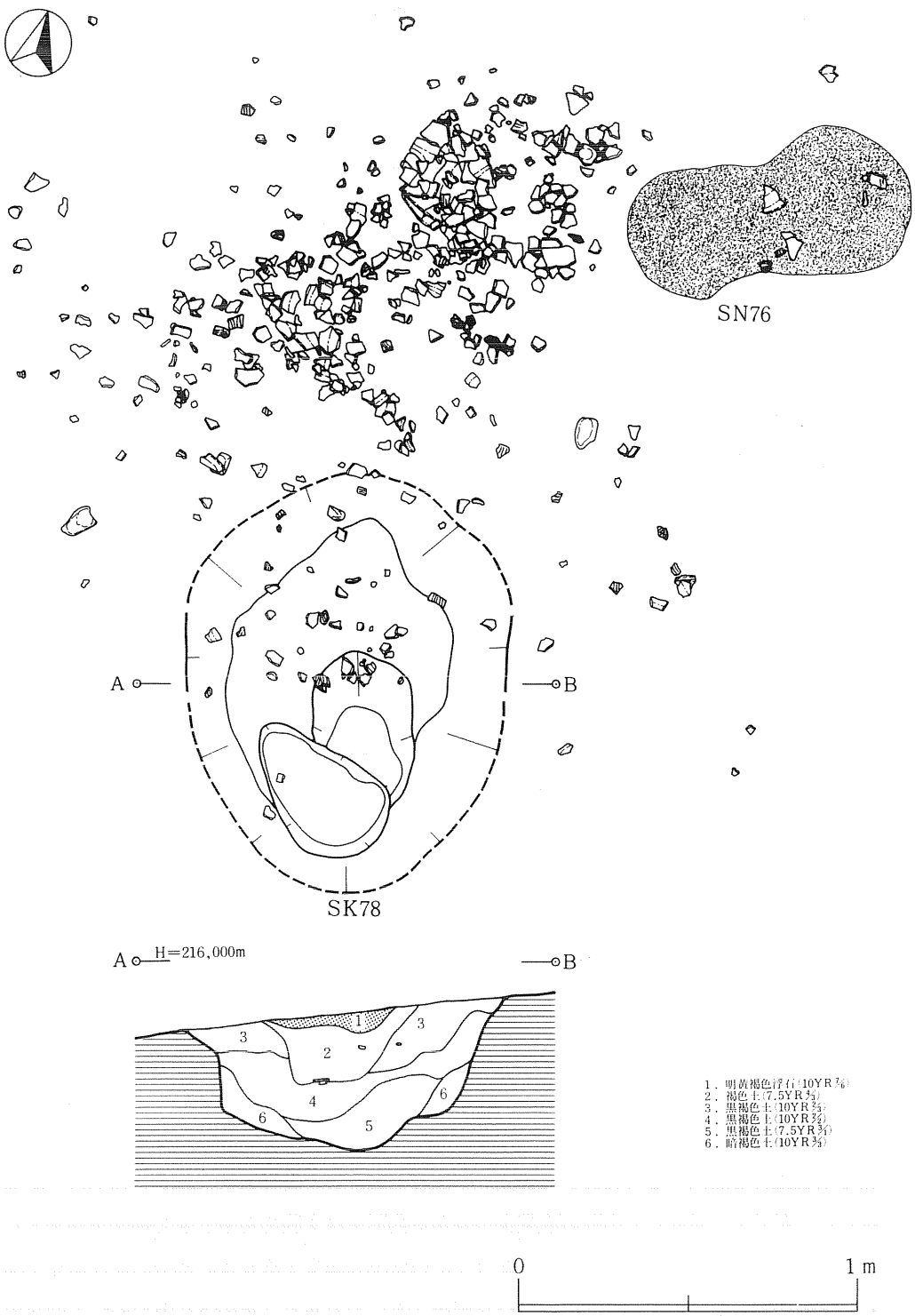


第292図　SK73土坑出土遺物

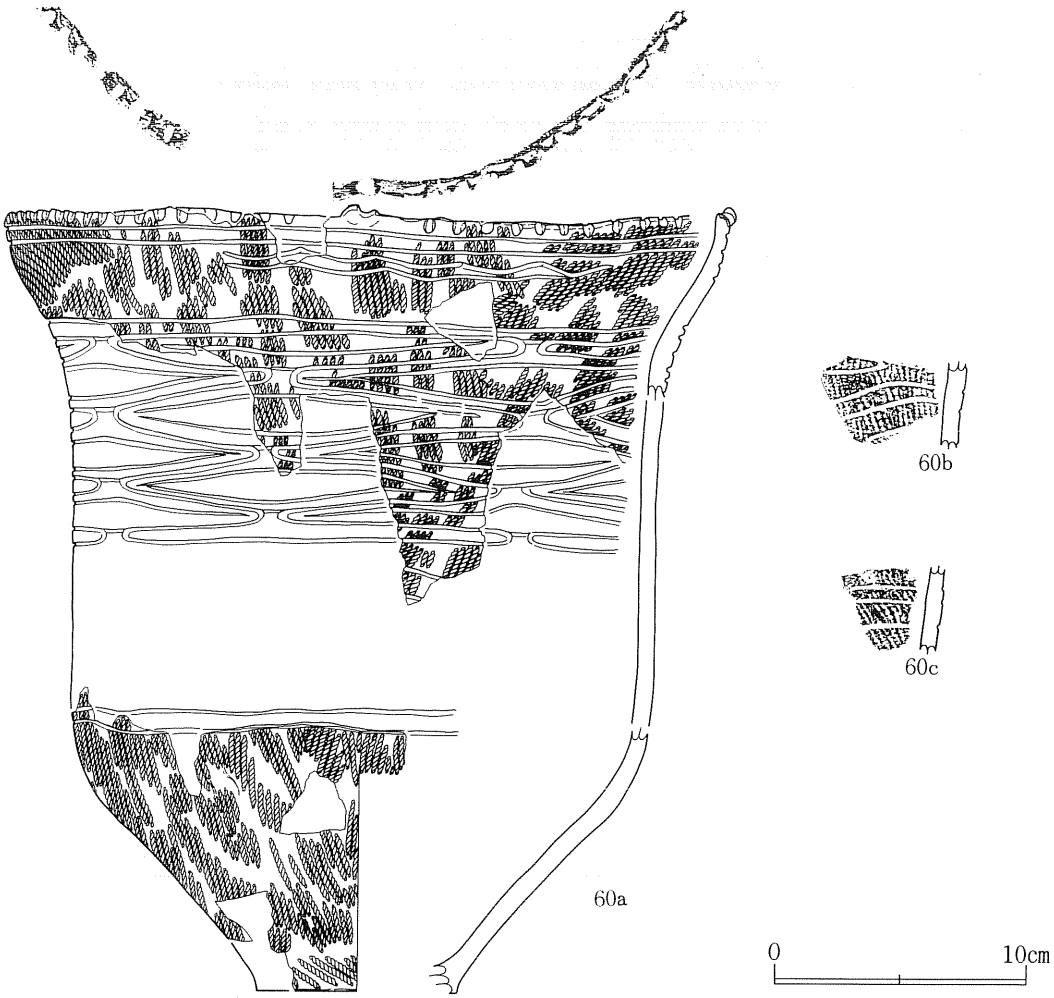
面には凹凸があり、Ⅳ層上面からの深さは42cmである。

覆土は６層に分かれるが、１層は大湯浮石の堆積であり、４・５層は基本層序Ⅴ層の流入土とみられ、覆土は基本的に自然堆積によるものと考えられる。

土坑の北側にはおよそ４個体の土器片がⅣ層中にまとまって出土している。一部の破片は土坑覆土上位にも流入する（第294～296図）。60は口縁が若干受け口状に開き、頸部以下がほぼ直立し、胴下半で屈曲して小形の底部につながる器形をなす甕である。ＲＬ縄文を地文とし、口唇部には中央に刻みを入れた小突起がつく。口唇部は縄文を施文後、部分的に沈線を１条施し、外側を刻んでいる。口縁外面は平行沈線を水平にめぐらし、その下に部分的に平行沈線で



第293図　SK78土坑、SN76焼土遺構

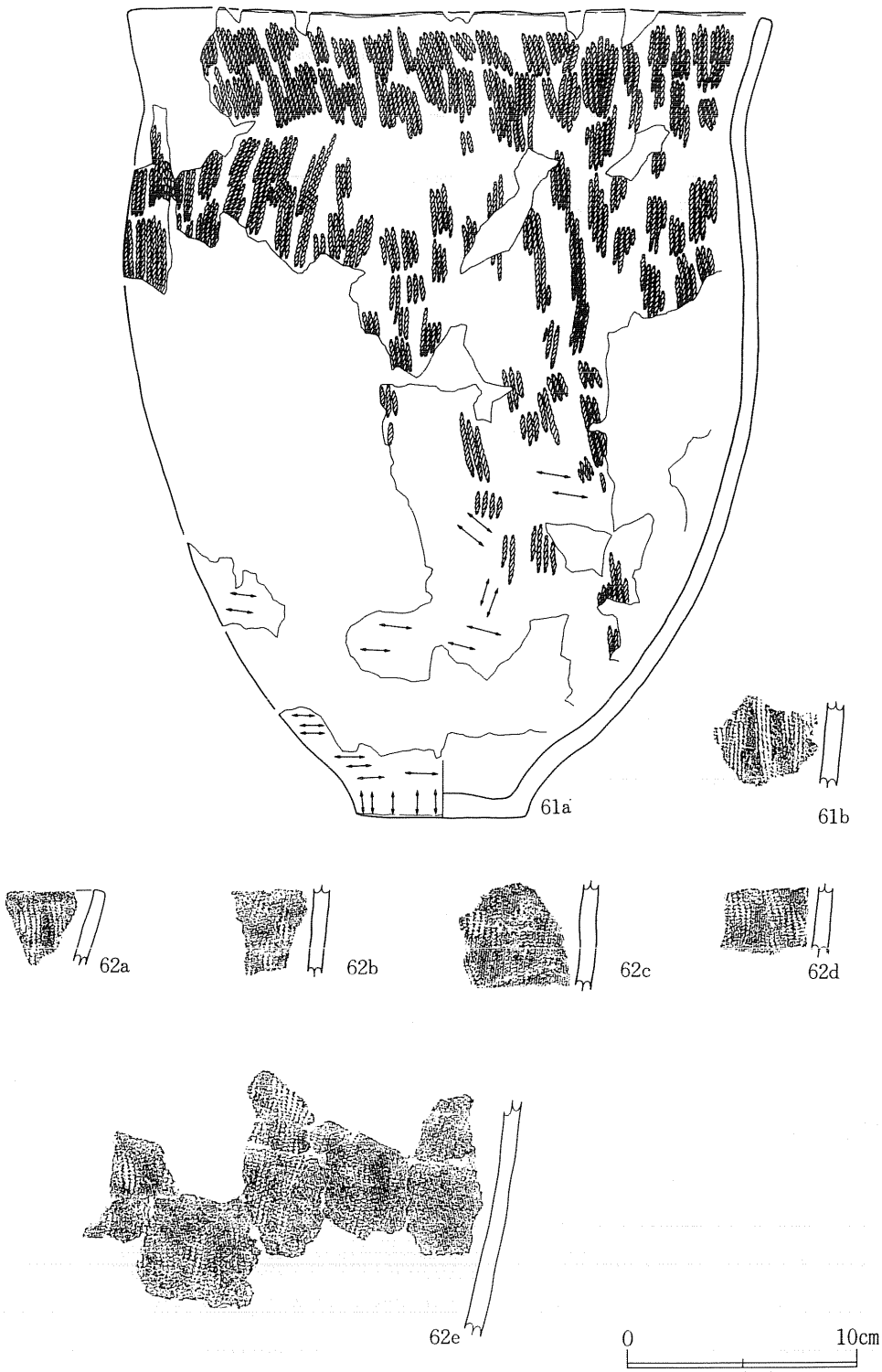


第294図　SK78土坑出土遺物（１）

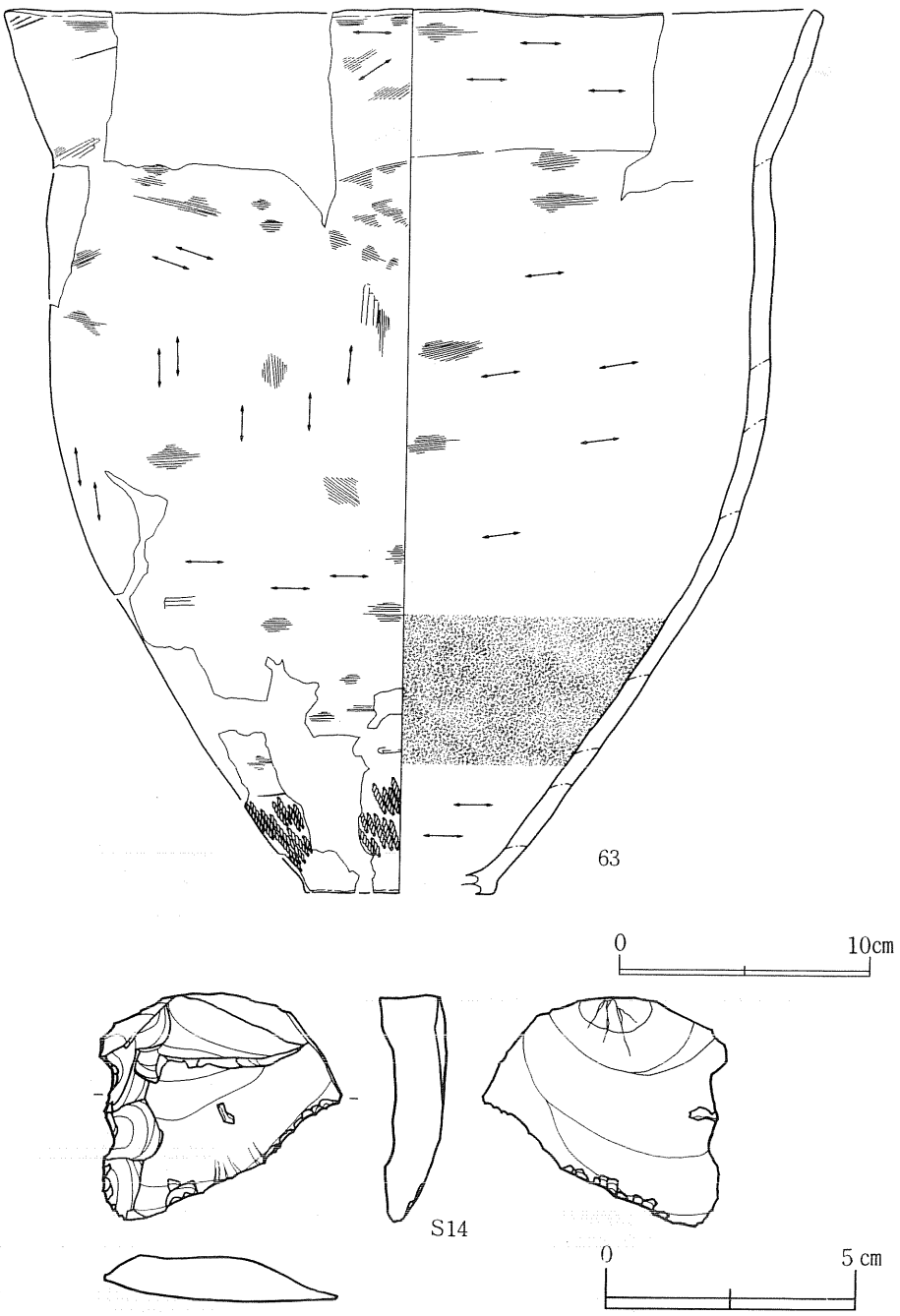
連弧文を描いている。頸部以下は変形工字文が施される。60ｂ・ｃは２層中から出土した同一個体の破片である。61は頸部が弱く「く」の字形に屈曲する甕である。口唇は面取りされるが、施文はない。口縁から胴部にかけてＲＬ縄文が縦走する。方向はやや不整であるが、縞縄文に近い。61ｂは２層から出土した同一個体である。62は小片で器形は不明確であるが、61と類似する器形の甕と思われる。ＲＬ縄文が全面に縦走している。63は頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁中位でわずかに内湾する器形の甕である。口唇は面取りされ、無文である。外面は胴下半までナデ調整され、底面近くでわずかにＲＬ縄文が存在する。

Ｓ14は頁岩製の二次加工ある剥片である。自然面打面をもつ横長剥片の表面側の一側縁に比較的大形の剥離からなる二次加工が施され、鋸歯状の縁辺が形成されている。素材の末端縁には微小剥離痕が残る。

本土坑は最上位に大湯浮石が堆積すること、その下層に弥生土器が流入していることから、



第295図　SK78土坑出土遺物（２）

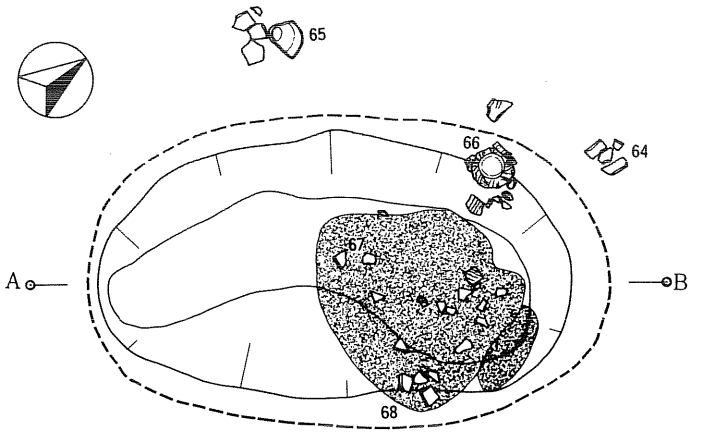


第296図　SK78土坑出土遺物（３）

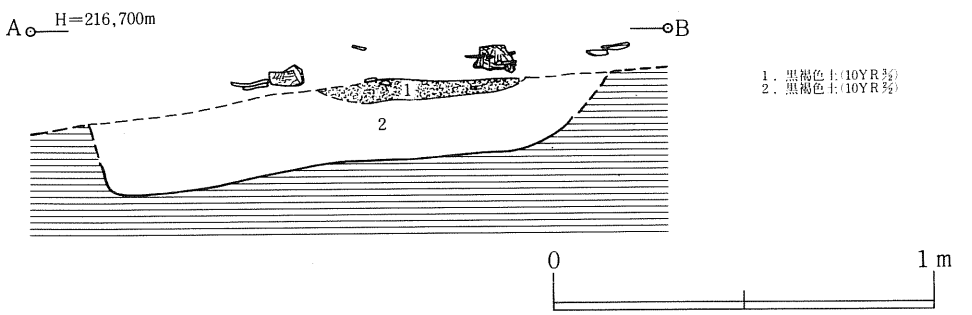
ほぼ弥生時代に属するものと考えられるが、その性格は不明である。

ＳＫ14（第297図、図版125）

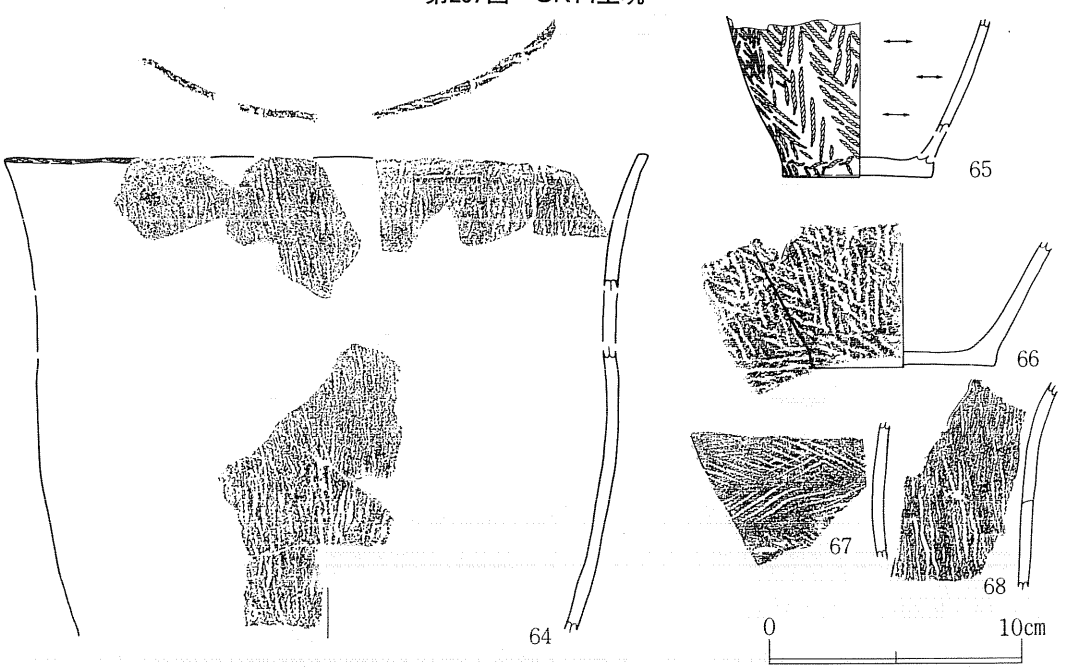
ＯＤ99グリッドを中心に位置する。Ｖ層中で弥生土器および焼土の広がりを確認したが、明



SK14



第297図　SK14土坑



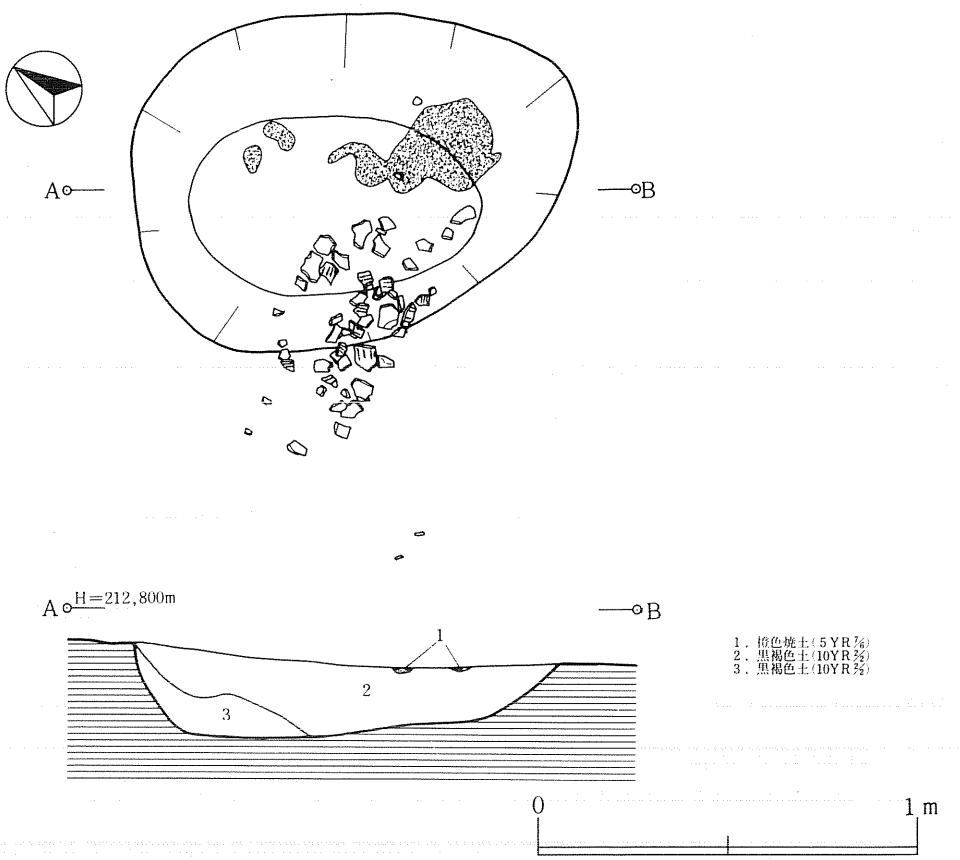
第298図　SK14土坑出土遺物

確な掘り込みはⅦ層上面で検出した。焼土確認面では推定で、長径140cm前後、短径80cm前後の楕円形プランをなすものとみられる。長軸方向は北東である。焼土確認面からの深さは20cm前後を測る。壁の立ち上がりは北側が比較的緩やかで、南側は急である。

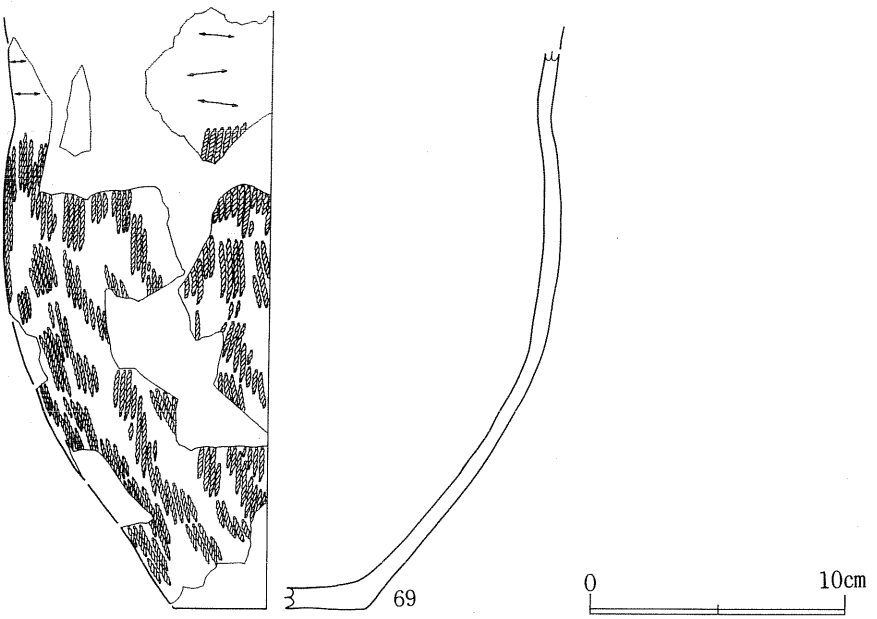
覆土は２層に分かれる。１層は焼土層である。焼土ブロックを斑状に含み、全面赤変していないが、全体が非常によく締まり、本来この位置で２層が焼土化したものと推定できる。２層はクロボク土に近いが、若干の地山の軽石粒を含み、大形の炭化物も混入することから、人為的埋土の可能性がある。

遺物は焼土周辺で５個体の土器を検出した（第298図）。64は口縁が緩く外反する甕で、口唇と外面にＬ撚糸文が施される。本例は土坑南側のＯＤ97・98グリッドにかけても分布している（第321図）。65は土坑西隣で横位の状態で検出した胴下半から底部にかけての甕破片である。羽状の撚糸文が施され、底部近くでは結節回転文が横走する。66は土坑北西部上位に逆位で検出した甕底部である。65と同じく羽状の撚糸文が施される。67・68も撚糸文をもつ甕である。67は撚糸文が羽状を呈し、ＯＤ98グリッドまで広がっている（第321図）。

本遺構は上面に焼土が形成され、周辺に弥生土器が存在することから、該期の土坑墓である



第299図　SK152土坑



第300図　SK152土坑出土遺物

可能性が認められる。しかしながら上述の土坑墓と比べ掘り込みが浅く、覆土が土坑掘削土そのものの埋め戻し土とは認められないことから土坑墓であるかは断定し難い。

ＳＫ152　（第299図）

ＮＤ87グリッドに位置する。現状で長軸118cm、短軸87cmの楕円形プランを呈するが、西南半は上部をかなり掘り下げた段階でプランを確認しており、本来は円形プランに近いのもと考えられる。確認面からの深さは25cm前後を測るが、プラン確認面から30cm前後上位で弥生時代の甕１個体を検出しており、この遺物が本遺構に伴うものとすると、本来の掘り込み面は30cm近く上位にあったものと推定される。また、確認面では焼土層を検出した。覆土は地山ブロックは顕著ではないが、大形の炭化物を含み、人為的埋土の可能性がある。

遺物は土坑確認面上位で検出した土器１個体のみである（第300図）。69は頸部で緩く屈曲する甕である。口縁部を欠くが、頸部は無文で、胴部はＲＬの縞縄文が縦走する。

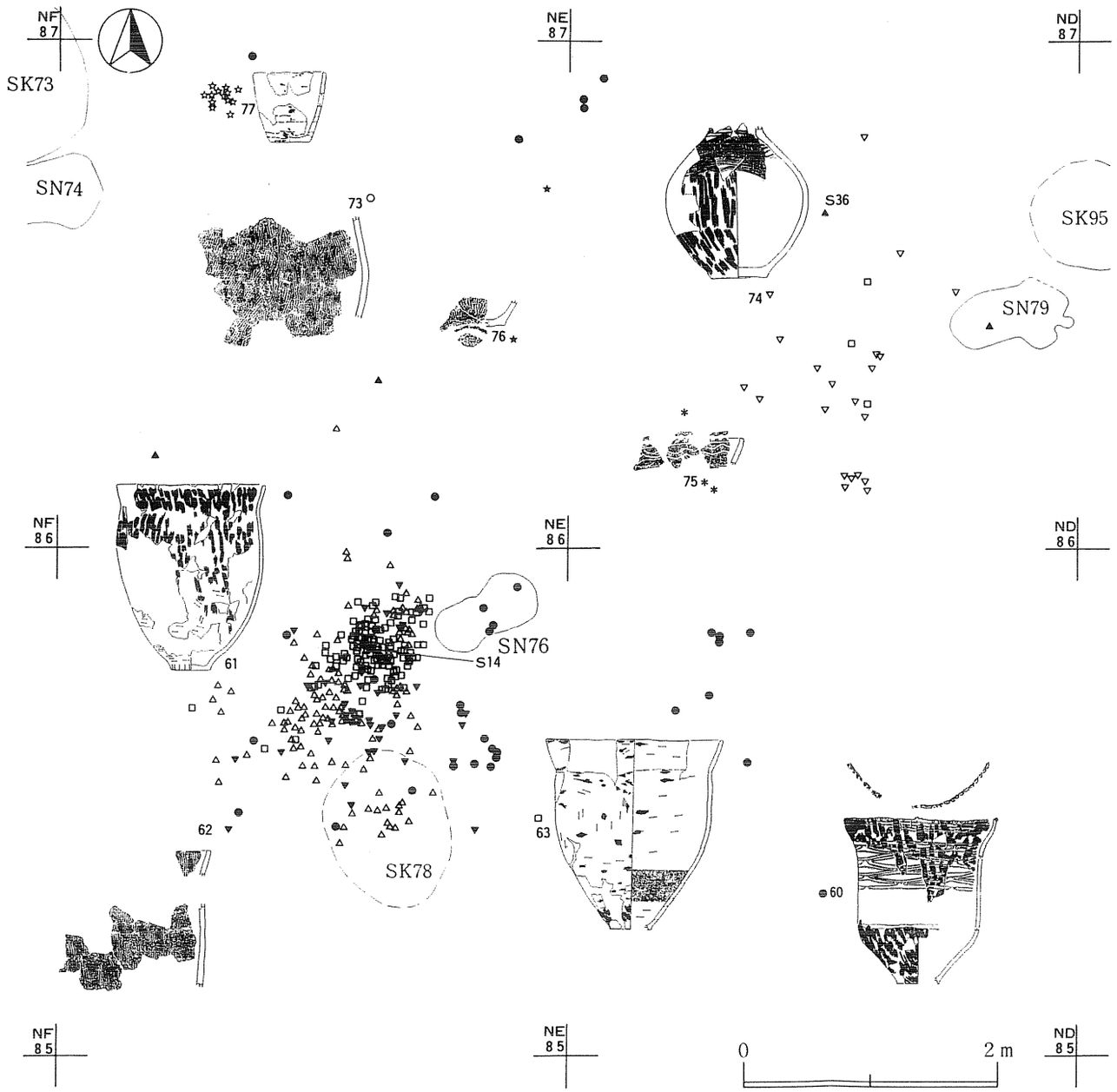
本遺構は覆土に焼土を含み、人為的埋土とみられること、遺構上位に土器が存在すること、本来円形プランを呈すると推定されること等から先に土坑墓としたものと共通性が認められる。しかしながら覆土が上述の土坑墓のように地山掘削土そのものの埋め戻し土ではなく、この点で土坑墓とは断定し難い。

4　弥生時代の出土遺物

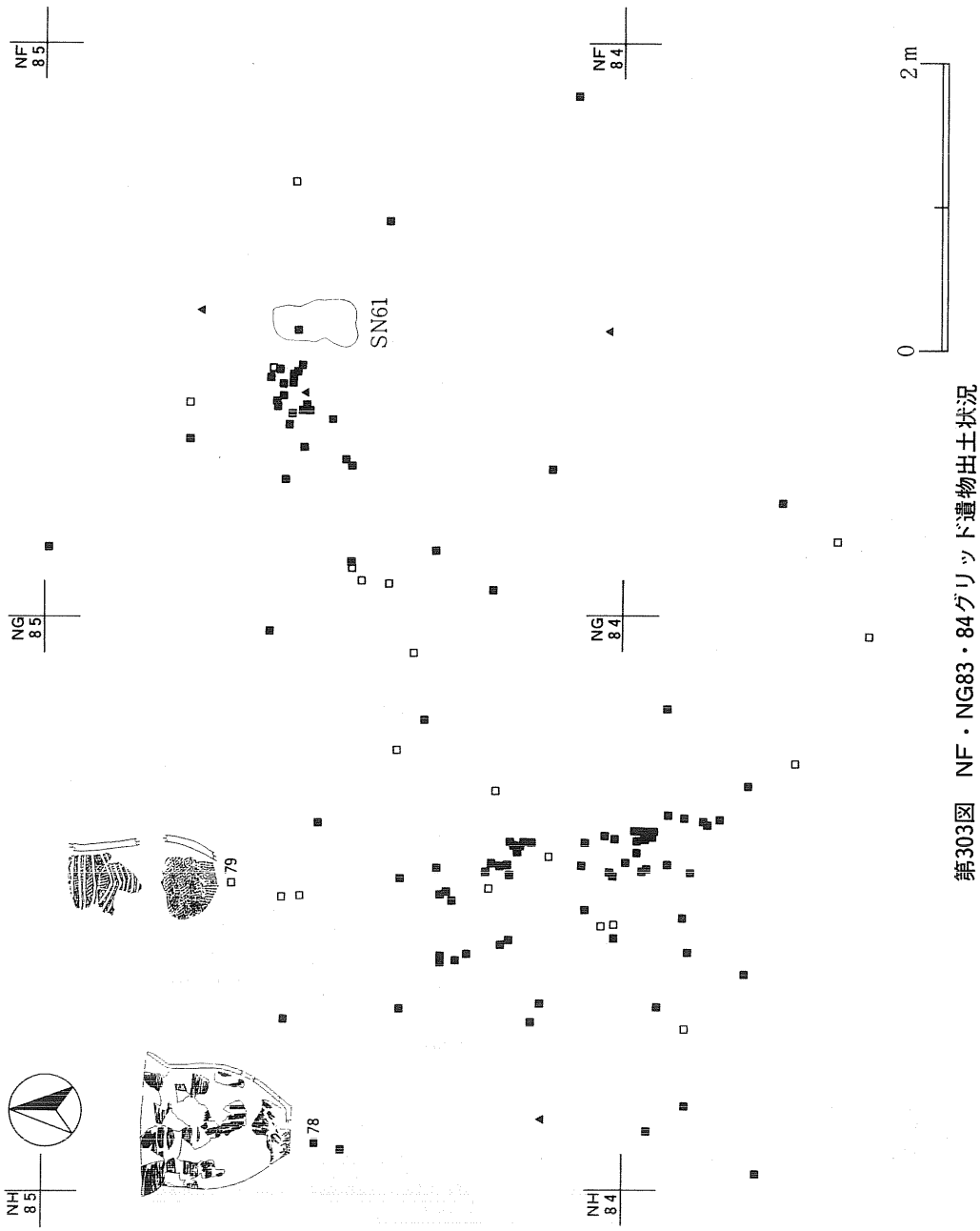
(1)　遺物集中地点とその出土土器

ここでは先に触れた縄文時代の遺物集中地点と同様に複数個体の土器が集中する地点を中心

第301図　NE～NG87～89グリッド遺物出土状況



第302図　ND・NE85・86グリッド遺物出土状況



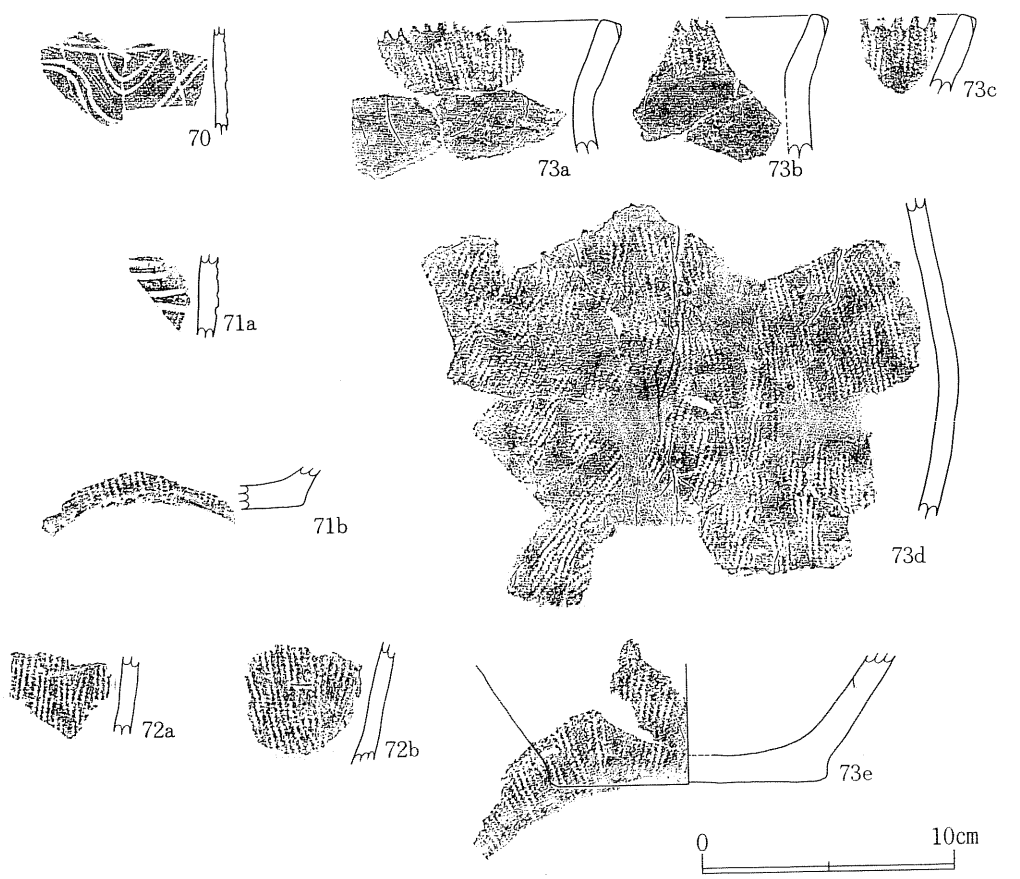
第303図　NF・NG83・84グリッド遺物出土状況

に、土器について記述する。

ＮＥ～ＮＧ87～89グリッド（第301・304図）

本地区内ではＮＥ87グリッド周辺の土器の集中地点とＮＧ87グリッドを中心とする集中地点とが認められる。両者ともその出土土器は73を主体とし、他の土器は小破片が少量出土しているのみである。なお、これらの集中地点の間には先述した土坑ＳＫ73に伴うとみられる56の土器が存在する。

70は節の細かいＲＬ縄文地に２本１単位の平行沈線によって曲線的な文様を描いた甕である。71・72は小破片のため不明瞭であるが、同一個体の可能性のあるＲＬ縄文をもつ甕である。71は口縁部にヘラ状工具によって沈線が施される。これらは縄文時代晩期後半の土器の可能性も認められるが、ここでは出土状況・底部の形態等から弥生時代に属するものと判断した。73は大形の甕である。破片は多量に出土したが、摩滅が著しい。口縁は「く」の字形に外反し、口唇は面取りされ、口唇外側が刻まれる。頸部はほぼ直立し、胴部は張る。頸部は無文で、口縁部および胴部はＲＬ縄文が縦走する。



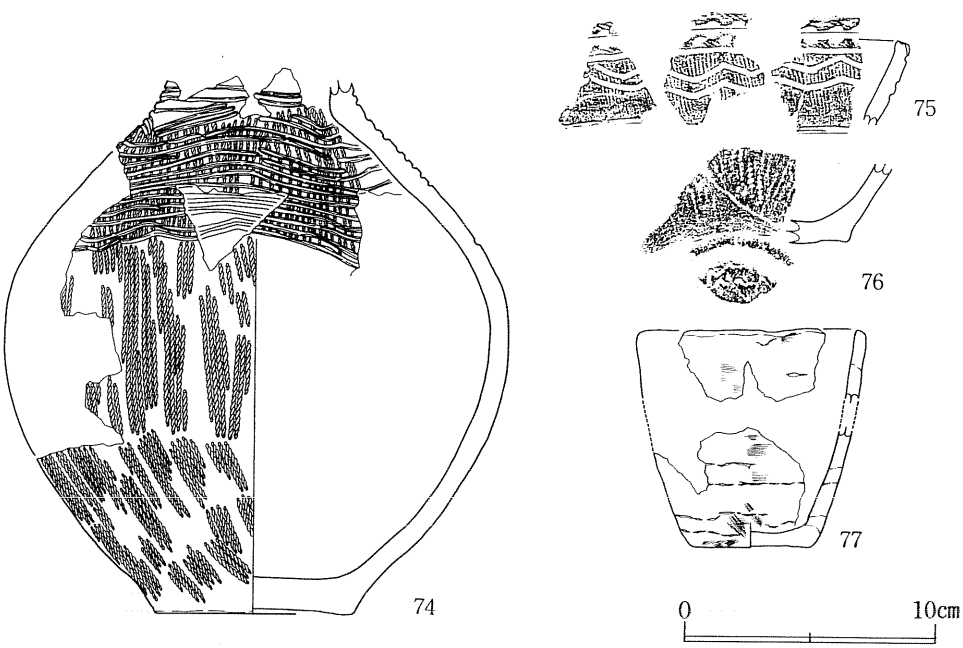
第304図　NE～NG87～89グリッド出土土器

本地区からまとまって出土した73は上述のように摩滅が著しく、集中地点が２箇所に分かれることから二次的な移動を受けた可能性が高い。さらに他の土器は小破片で量も少なく、これらの土器群は本来伴うものであるかは出土状況からは断定できない。

ＮＤ・ＮＥ85・86グリッド（第302・305図）

先に取り上げた土坑ＳＫ78の周辺に分布する60～63の土器群の東側にさらに土器が集中する。この集中地点の土器は先の60・63の土器と74とが混在しており、本来74の土器もＳＫ78に伴った可能性が認められる。一方、77の土器は他の土器とは離れて、小範囲に集中的に分布しており、独自の出土状況を示している。

74は壺である。頸部上半から口縁を欠くが、胴部は強く張って球形に近く、底部は若干揚げ底である。縦走するＲＬ縄文を地文とし、頸部には沈線で低波状あるいは山形の文様を描いている。75は甕の口縁部破片である。口縁は若干受け口状に外反し、口唇は面取り後１条の沈線を施した後に外側を押圧し、さらにＲＬ縄文を施文している。外面は節の細かいＲＬ縄文を地



第305図　ND・NE85・86グリッド出土土器

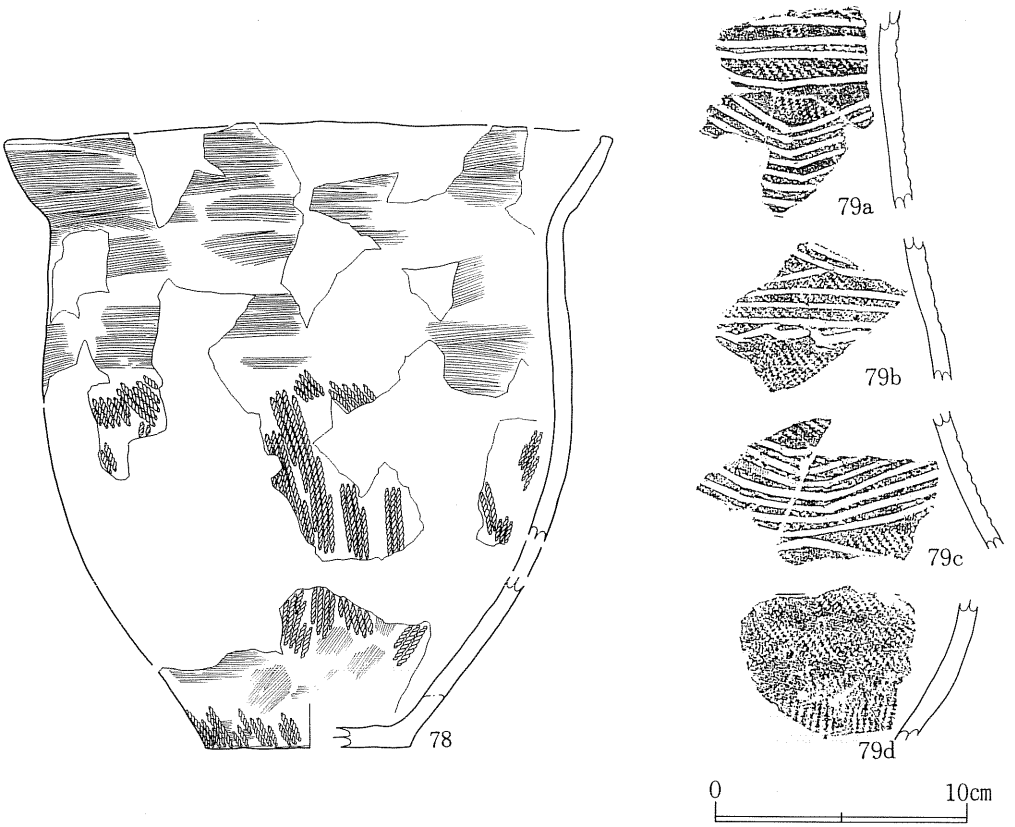
文とし、ヘラ状工具によって山形文を描いている。76は揚げ底の甕底部である。胴部にはＲＬ縄文が縦走する。77は無文の小形甕である。幅１cm前後の粘土の輪積み痕が認められる。

本地区の出土土器のうち、60～63・74は本来ＳＫ78土坑に伴った一括資料と考えられる。

ＮＦ・ＮＧ83・84グリッド（第303・306図）

東西８ｍ、南北５ｍ前後の範囲に２個体が混在する。

78は口縁部が「く」の字形に外反し、胴部が僅かに張る甕である。口縁部から頸部にかけて



第306図　NF・NG83・84グリッド出土土器

は無文で、頸部と胴部との境界部分ではＲＬ縄文が横位回転施文され、それ以下は同一原体で回転施文されたＲＬ縄文が縦走する。縦走する縄文は幅１㎝前後で、縞縄文に近い。79は壺である。ＲＬ縄文を地文とし、やや内傾する頸部にはヘラ状工具による沈線で鋸歯文などが描かれる。

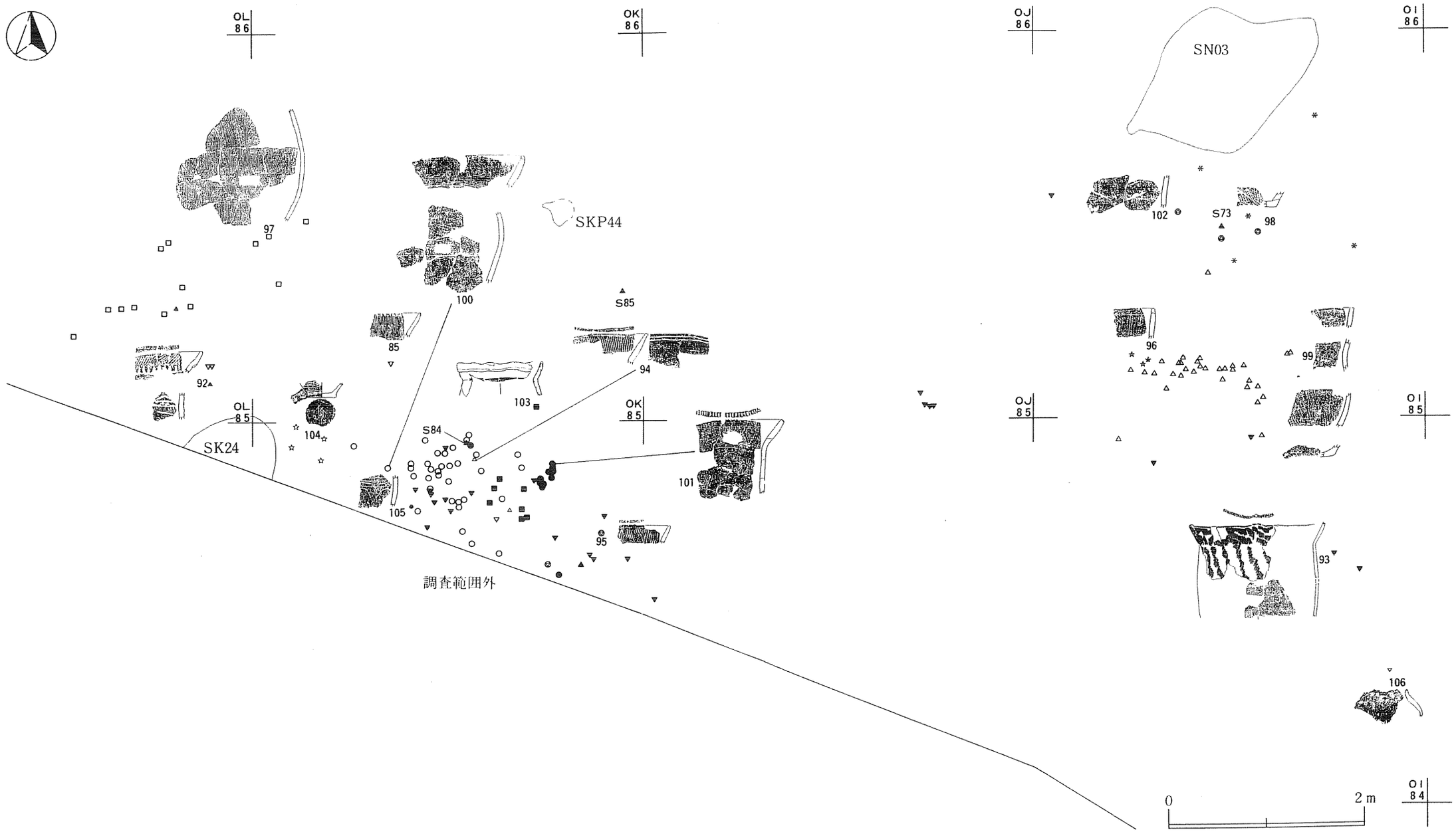
本地点からの２個体の土器は出土状況から共伴するものと認められる。

ＯＪ～ＯＬ86・87グリッド（第307・312図）

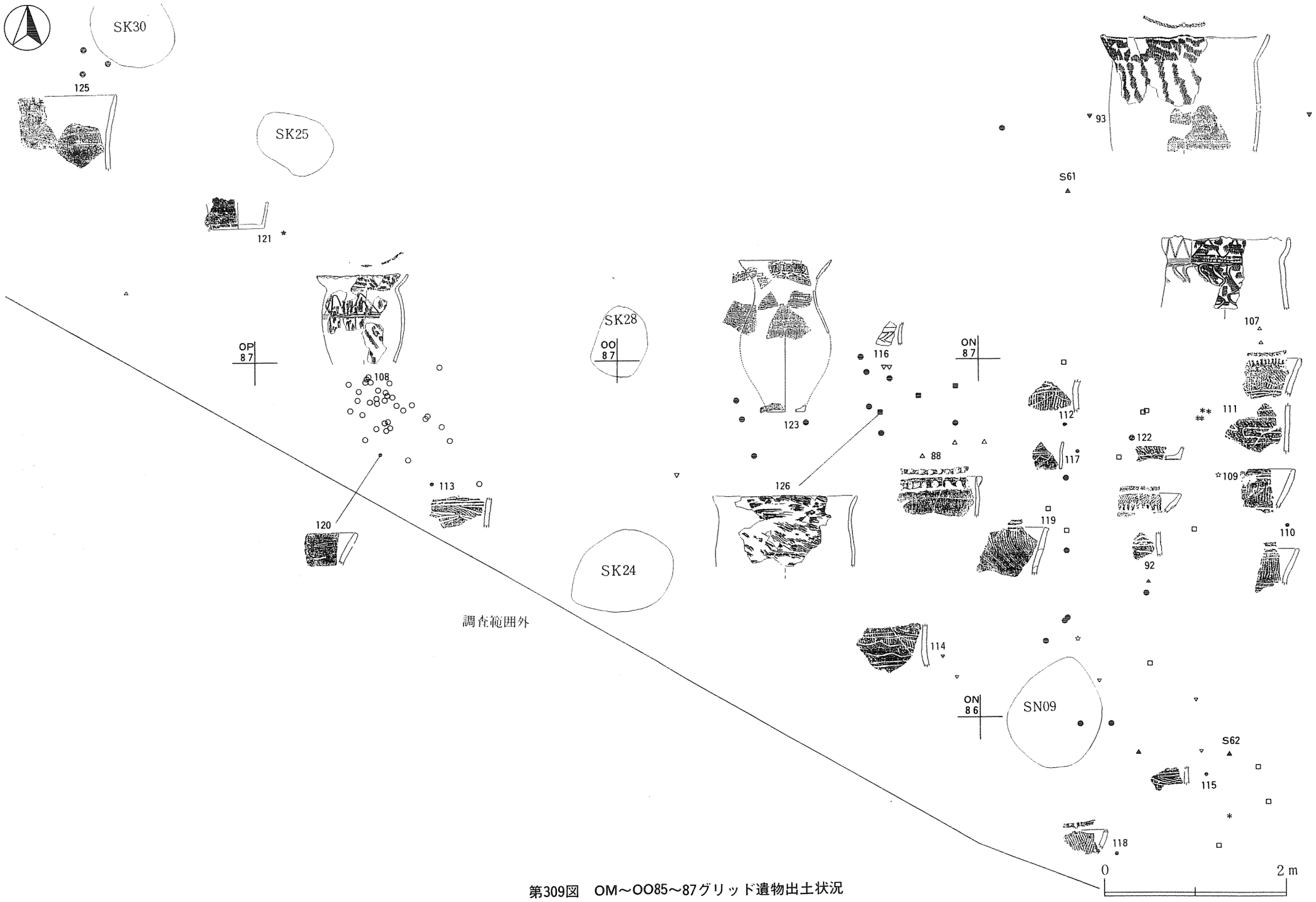
ＯＫ・ＯＬ86グリッド北側を中心に10個体を越す土器が分布する。いずれも小破片が大半で、ＯＫ・ＯＬ85グリッドにも分布する97を除き、各個体ごとの分布は若干地点を異にしながら比較的小範囲にまとまっている。

80は頸部が「く」の字形に外反し、口縁が若干受け口状になる甕である。口唇には低い突起が付き、口唇部には斜めに刻みが施される。口縁から胴部は縦走するＬＲ縄文を地文とし、２本１組の平行沈線を基本として連弧文や山形文等が描かれる。81は甕の口縁部である。ＲＬ縄文を地文とし、幾何学状の文様が沈線で描かれる。口唇には中央に刻みをもつ小突起が付き、さらに縄文と小円形の刺突が施される。82は若干受け口状をなす甕口縁で、ＲＬ縄文を地文と

第307図　OJ～OL86・87グリッド遺物出土状況

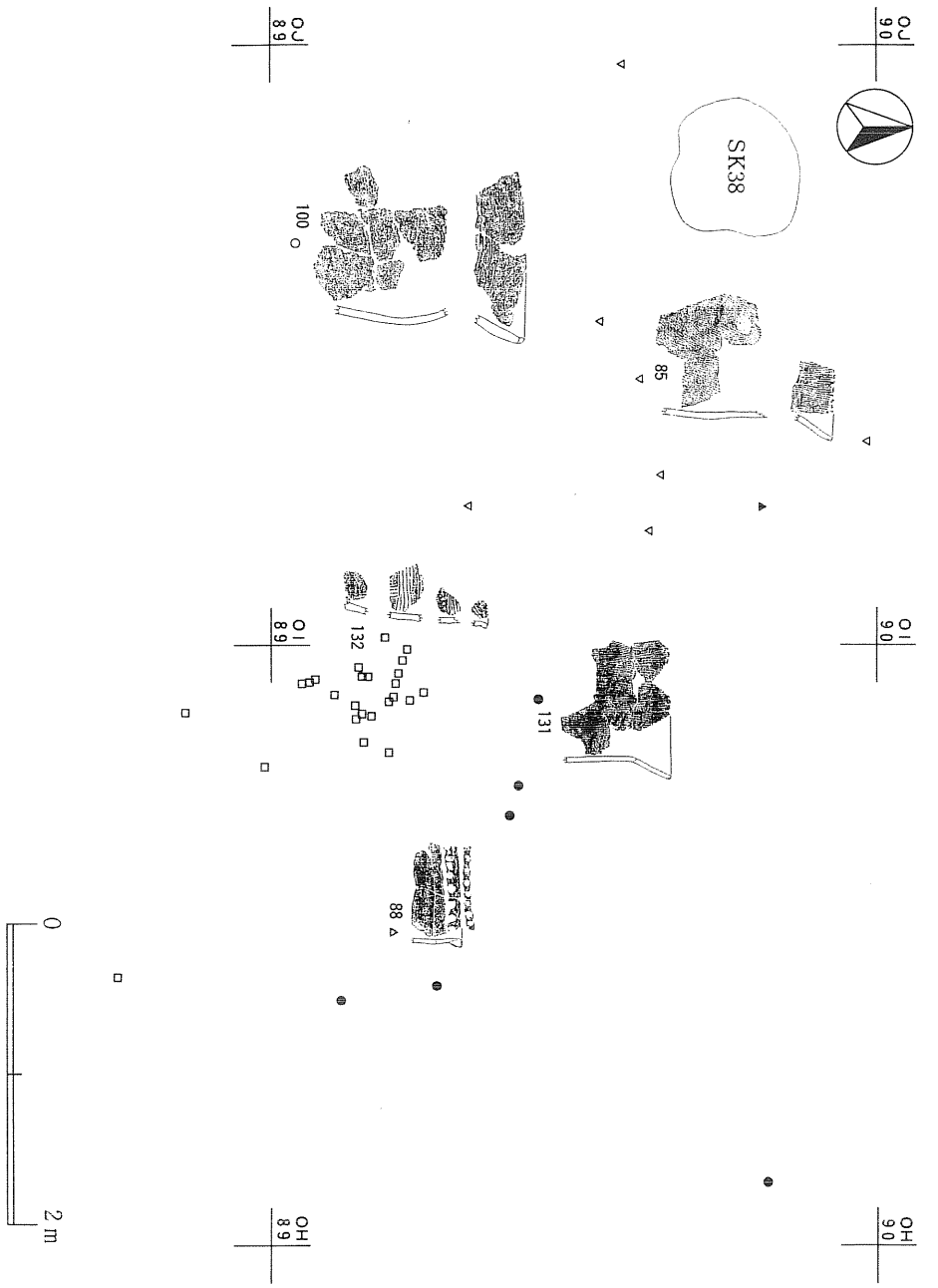


第308図　ＯＩ～OL84・85グリッド遺物出土状況

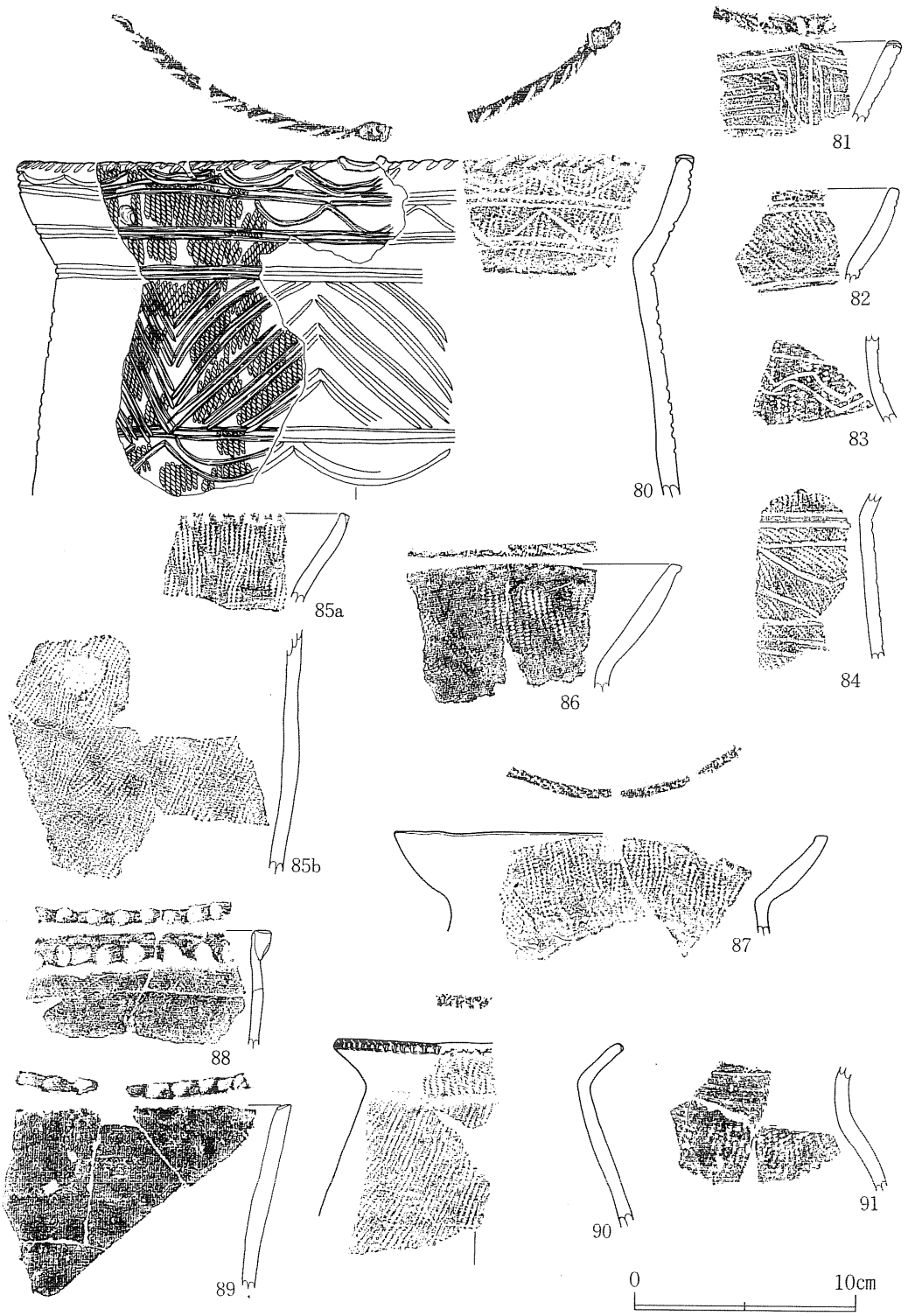


第309図　OM～OO85～87グリッド遺物出土状況

第310図　OO・OP88～90グリッド遺物出土状況



第311図　OH・OI88・89グリッド遺物出土状況



第312図　OJ～OL86・87グリッド出土土器

し、沈線が水平に巡らされる。84は甕の頸部から胴部の破片で、斜行するＲＬ縄文を地文とし、沈線によって幾何学的な文様が描かれる。83は壺の頸部とみられ、ＲＬ縄文が縦走し、沈線で山形文が描かれる。85は頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁が若干受け口状になる甕である。口唇はＲＬ縄文が施され、外側を刻んでいる。口縁以下はＲＬ縄文が幅１㎝前後で縦走するが、明瞭な縞縄文にはならない。86・87もＲＬ縄文が縦走する甕である。86は85と類似した器形をなすとみられるが、87はより口縁が外反する。共に口唇部には縄文が施されるが、87は摩滅が著しい。88・89は頸部が屈曲しない甕である。88は口縁端部を外側に折り返し、口唇部と折り返し部端部を押圧している。89は折り返し口縁ではないが、口唇部を88と同様に押圧している。90は頸部がきつく「く」の字形に屈曲し、胴部が張る壺である。口唇外側は刻みが施され、その際の粘土の盛り上がりによって端部が若干肥厚している。口縁以下は全面０段３条のＲＬ縄文が縦位に回転施文される。91は壺の頸部から肩部にかけての破片である。頸部には３条の浅く細い沈線が施され、肩部にはＲＬ縄文が縦走する。

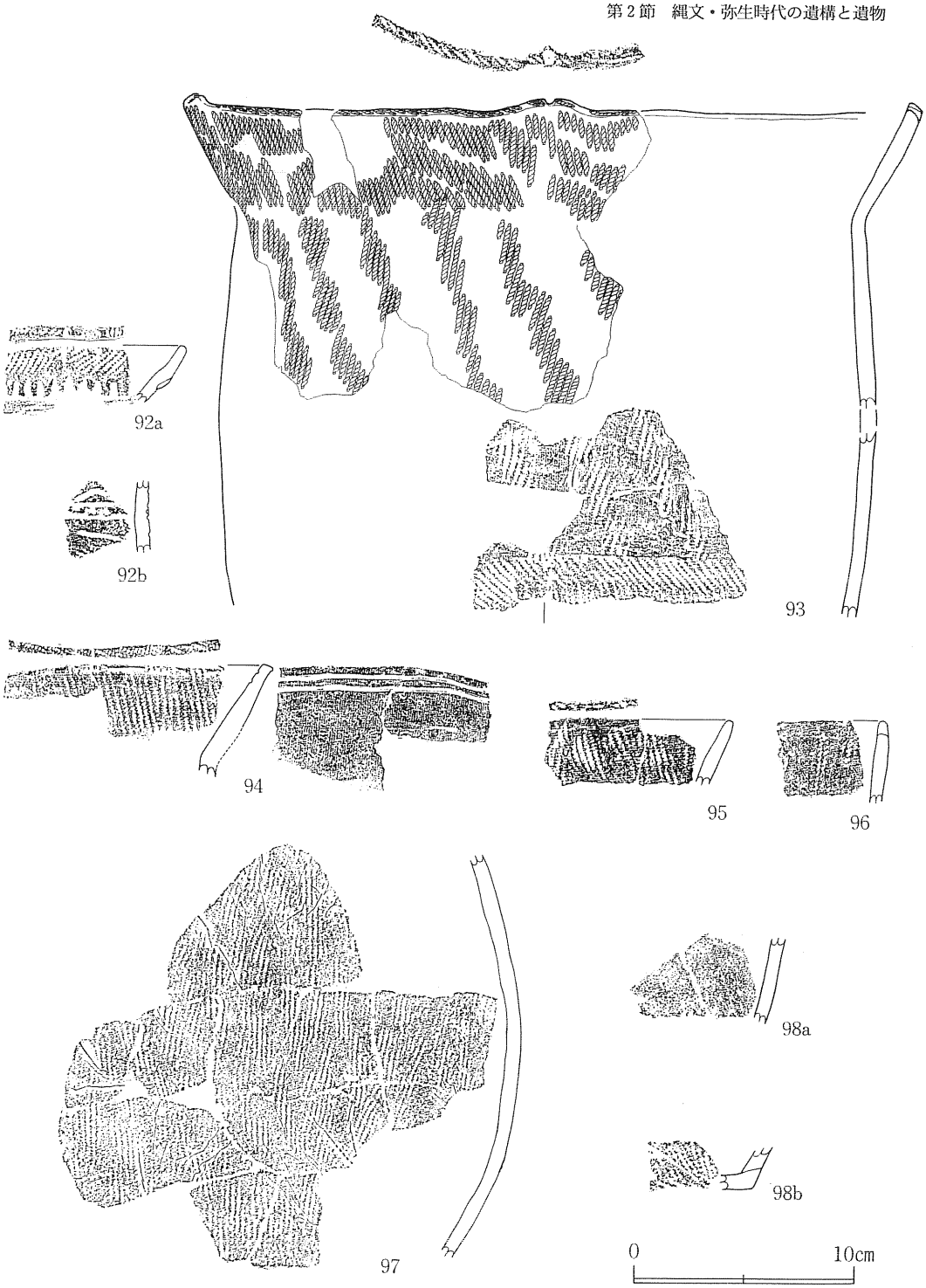
ＯＩ～ＯＬ84・85グリッド（第308・313・314図）

本地区内には大きくはＯＩ85グリッド周辺の99を主体とし、その周囲に96・98・102が分布する集中地点とＯＫ84グリッド周辺の93～95・100・101・103が分布する集中地点が認められる。後者はより南側の調査範囲外にも広がるものとみられる。その北西側には97の分布が認められる。

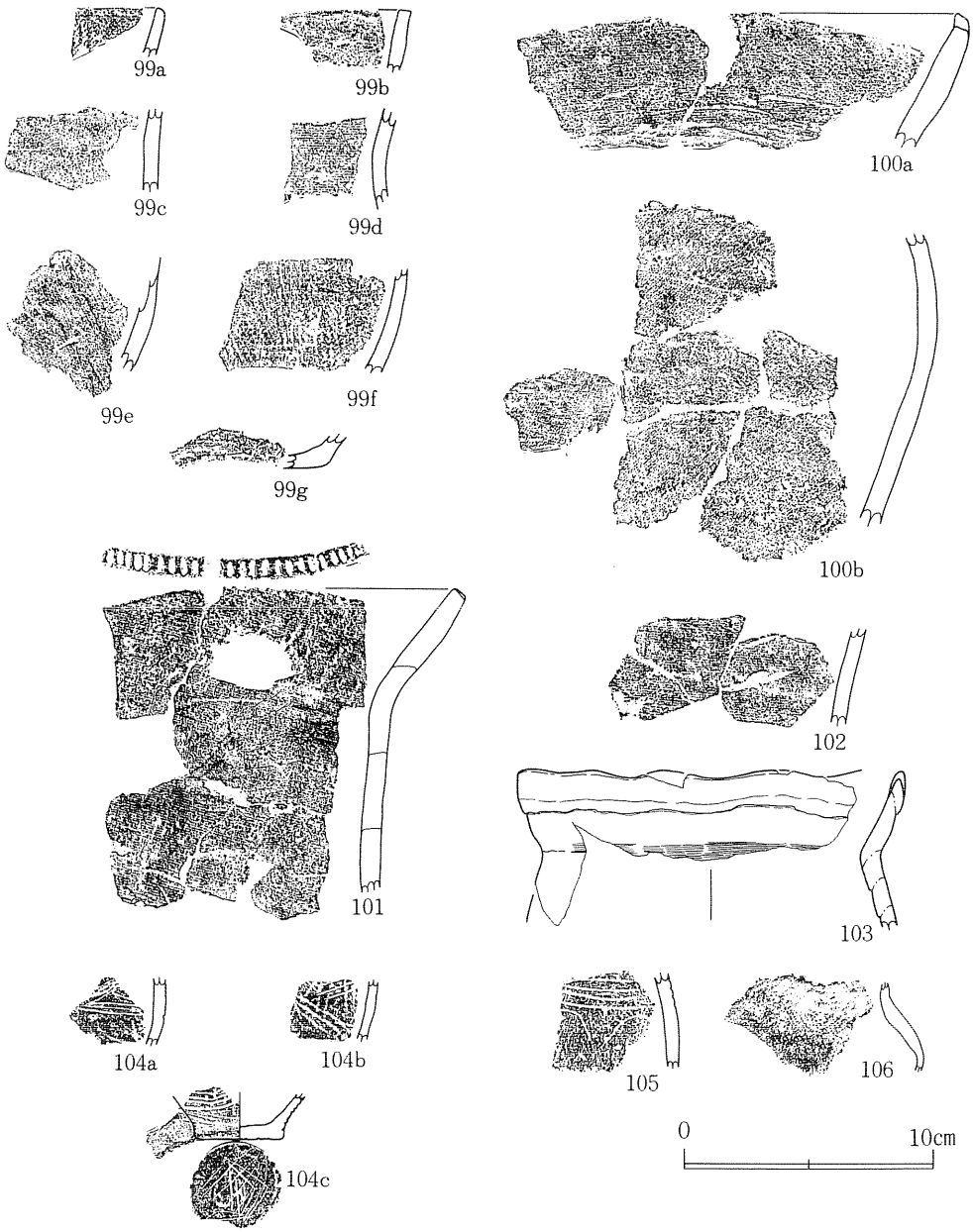
92はＯＭ85グリッドのほかＯＭ86グリッドにも分布する甕である。口縁下部では外傾接合される粘土帯の下端部が凸帯状に突出している。口縁部にはＬＲ縄文が横位回転施文され、先の突出部が縦に刻まれている。頸部には２条の平行沈線の間を下方からは縦方向の刻みを加え、その間には上方から円形の刺突を施して、交互刺突文を表出している。93はＲＬ縄文施文の甕である。口縁は「く」の字形に屈曲し、若干受け口状になる。口唇部には中央に刻みをもつ小突起が付く。口唇部および口縁部は全面に縄文が施文される。胴部は下位にＲＬ縄文が横位に回転施文され、上半は縞縄文となっている。94～98もＲＬ縄文が施された甕である。94は内面に平行沈線が巡る。96は口唇は丸くおさめられ、縄文をもたない。98ａは肩部の破片で、縄文をもたない。99は口縁に微かにＲＬ縄文が残る甕である。胴下半には縦方向の細かい条痕が残る。100～103は縄文をもたない甕である。100は口唇を面取り後、端部を部分的に内側に引き出して小突起を作出している。103は口縁部が肥厚し、端部は舌状に尖っている。104・105は小形の鉢形の土器である。細い沈線によって文様が表出される。106は無文の小形壺の肩部破片である。

ＯＭ～ＯＯ85～87グリッド（第309・315・316図）

ＯＯ86グリッドで108がまとまって分布し、119・123が比較的広範囲に分布する以外は、土器分布は散漫で、出土量も多くはない。

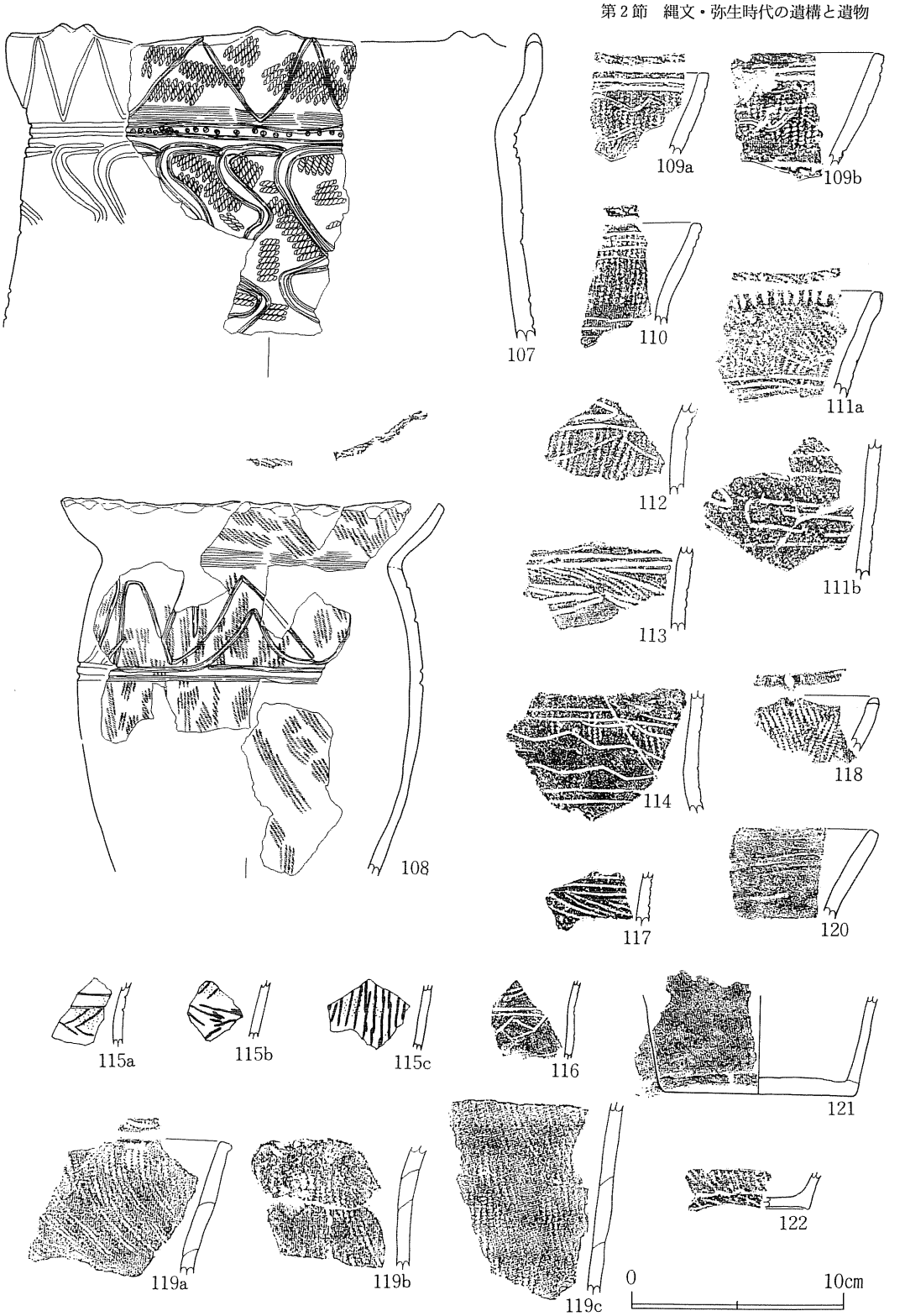


第313図　ＯＩ～ＯＬ 84・85グリッド出土土器（１）

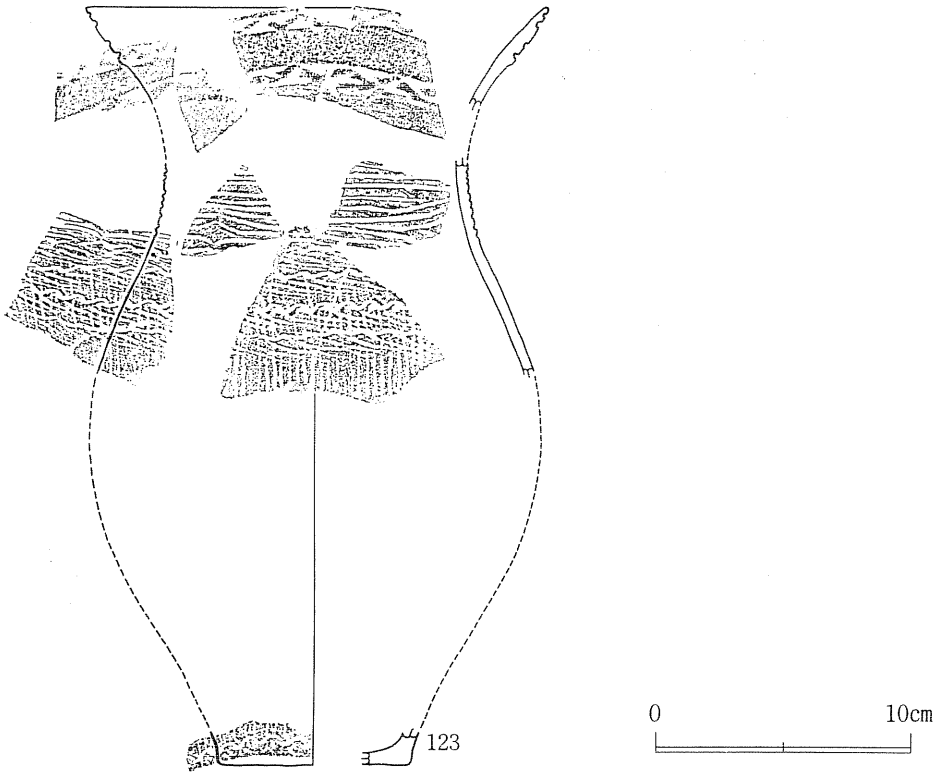


第314図　ＯＩ～OL 84・85グリッド出土土器（２）

107は受け口状口縁をもつ甕である。ＬＲ縄文を地文とし、口唇には中央を押圧した小突起がつく。口縁には１条の細い沈線で大形の山形文が描かれ、頸部には２条の沈線間に小刺突が不規則に加えられる。胴部は２本の沈線によって曲線的な文様が描かれる。108は頸部が「く」の字形に大きく屈曲する甕である。口縁部は若干受け口状をなし、口唇部外側には押圧が施される。Ｒ縄文を地文とし、胴部中位に２条の沈線が水平に巡り、胴上半には山形状の文様が描



第315図　OM～OO85～87グリッド出土土器（１）

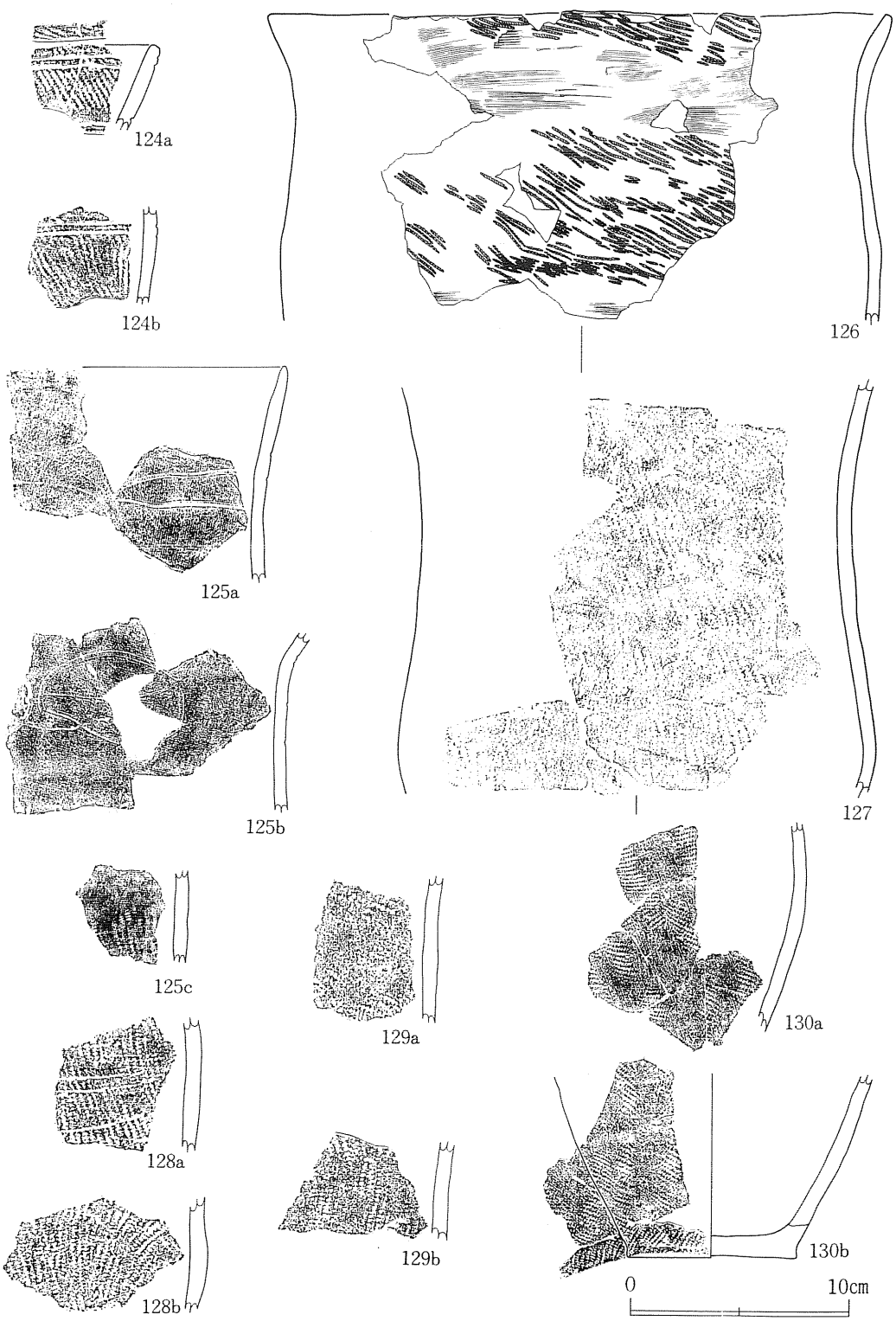


第316図　ＯＭ～ＯＯ85～87グリッド出土土器（２）

かれる。109～114はＲＬ縄文を地文とし、沈線で文様が描かれる甕である。115は甕の頸部で、沈線を密集させて文様を表出している。116はＬ撚糸文を地文とし、細い沈線を施す。表面に部分的に赤色顔料が残存する。小破片のため器形不明であるが、薄手で小形の器形をなすとみられる。117も薄手の土器片で、沈線で幾何学状の文様を描く。118はＲＬ縄文を地文とする甕である。口唇部には中央に刻みがある小突起をもつ。119はＲＬ縄文が施された甕である。120・121はともに甕の破片であるが、縄文は認められない。122は小形の甕の底部である。若干揚げ底となり、胴部にはＬ撚糸文が縦走し、底部際では結節回転文が巡る。123は壺である。口縁が大きく外反し、胴部が膨らむ器形をとるものと想定される。口縁部には２条の平行沈線間をヘラ状工具によって上下から斜めに刺突し、沈線間の粘土の盛り上がりを鋸歯状に整形した交互刺突文が２段巡る。頸部には横位に沈線が密に施される。肩部以下はℓ撚糸文を縦走させた後、原体Ｌの結節回転文が３条巡らされる。底部近くにも原体Ｌの結節回転文が巡る。

ＯＯ・ＯＰ８８～９０グリッド（第310・317図）

129がＯＯ88グリッド西南側でまとまって分布し、127・129・130がＯＯ88・89グリッドに集中する。ＯＰ89グリッド東北では125・128がまとまる。126はＯＮ86グリッドにも分布し、123と共伴する可能性がある。



第317図　OO・OP88～90グリッド出土土器

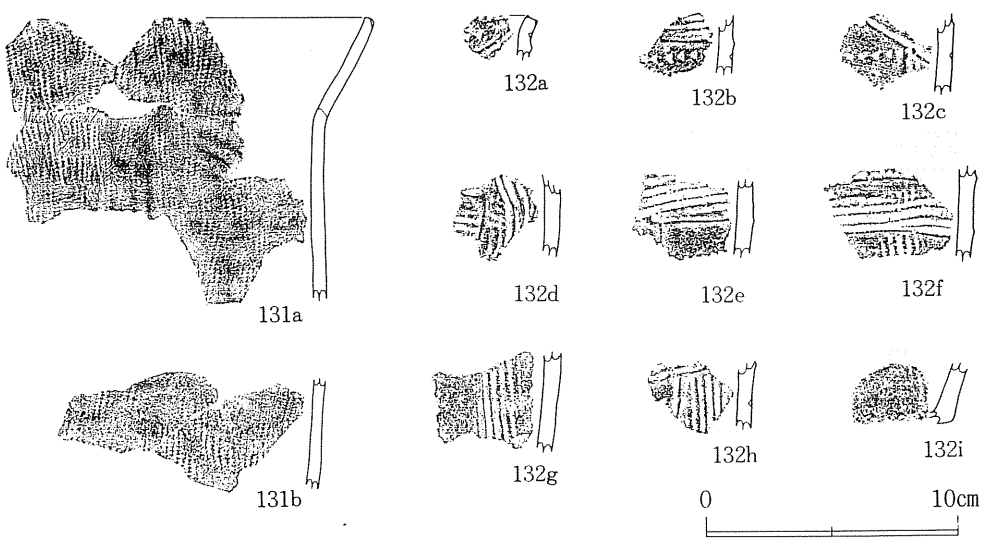
124は口縁が外反する甕である。ＲＬ縄文を地文とし、口縁上部と頸部とに沈線を巡らす。125は口縁が緩く外反する甕で、口縁端部は尖り気味に整形される。口縁部から胴部上半にかけては縄文施文はなく、間隔の狭い２本１組の沈線によって不整な文様が描かれる。胴部下半にはＲＬ縄文が施される。126は口縁が緩く外反する甕である。口唇部は丸く整形され、口縁端部は微かに肥厚する。口縁部および胴部にはＬ撚糸文が斜行する。127～130は縄文地の甕である。127～129はＲＬ縄文、130はＬＲ縄文が施文される。

以上の土器群のうち127・129・130はその出土状況から共伴するものと考えられる。

ＯＨ・ＯＩ88・89グリッド（第311・318図）

ＯＨ89グリッド西南部周辺に132が集中するが、いずれも少破片である。その周囲には85・131などが点在するが、量的に乏しい。

131は口縁が「く」の字形に外反する甕である。口唇は面取りされ、外側が刻まれる。外面は全面ＲＬ縄文が縦走する。132は微隆起線と小三角形の刺突をもつ後北Ｃ２式土器である。小破片のため器形は不明である。本例周辺には131のほか85・88・100などが分布しているが、上述したように量的に乏しく、共伴するかは不明である。



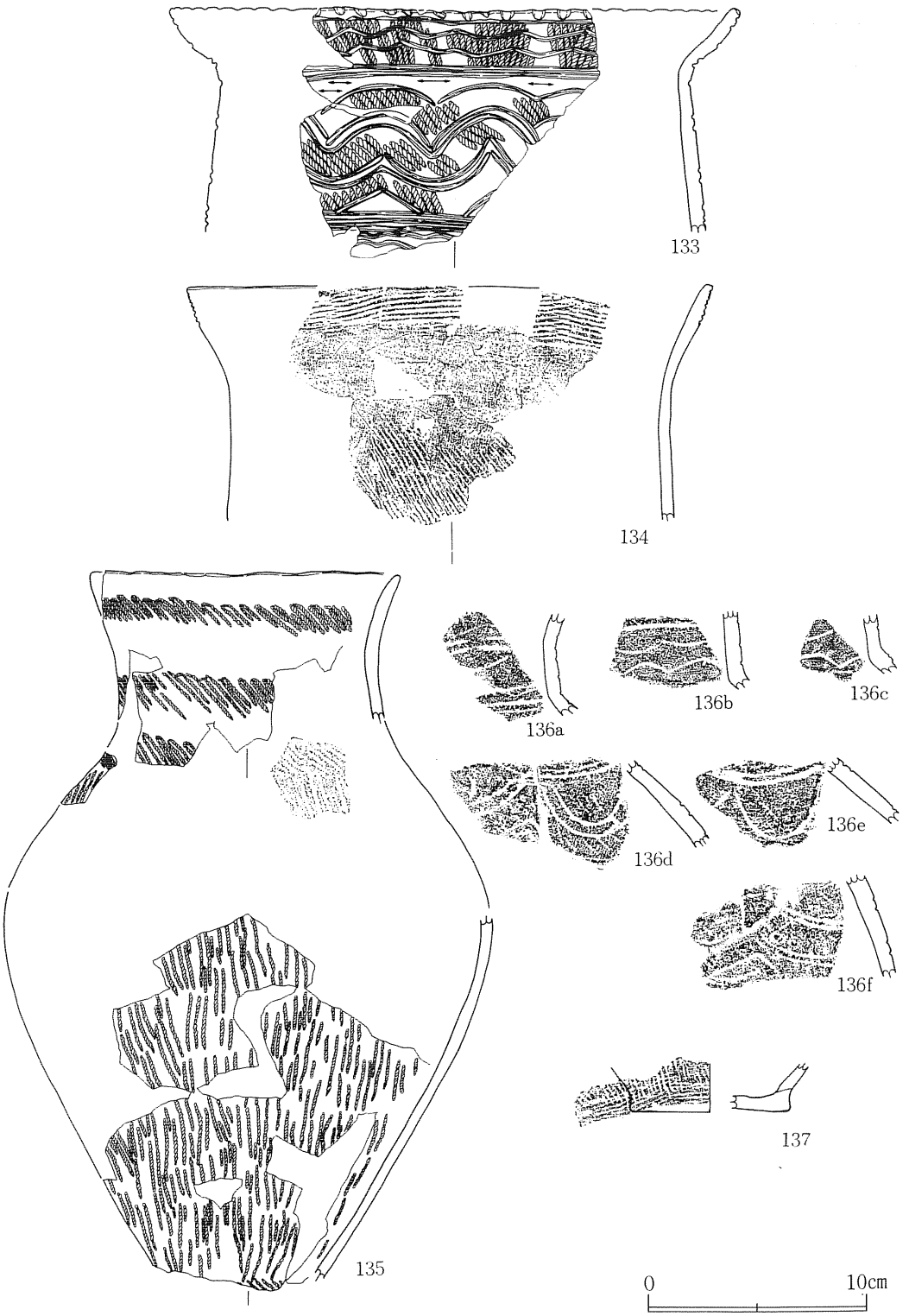
第318図　ＯＨ・ＯＩ 88・89グリッド出土土器

ＯＦ・ＯＧ93～95グリッド（第319・320図）

ＯＧ94グリッド西南側に135、ＯＧ94グリッド東北側からＯＧ95グリッドにかけて134・136、ＯＦ95グリッドに133がそれぞれまとまって分布する。

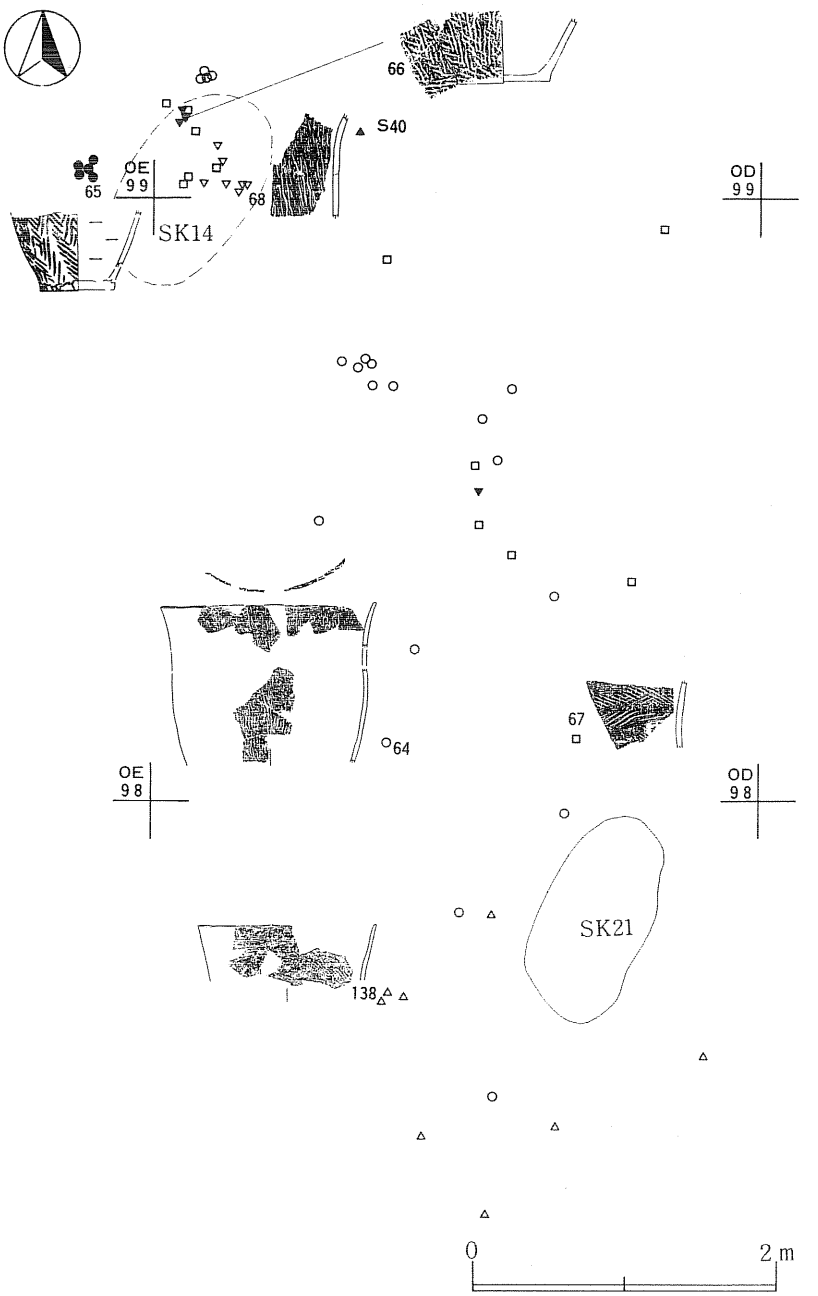
133は受け口状口縁をもち、頸部が「く」の字状に屈曲する甕である。ＲＬ縄文を地文とし、口唇外側は押圧される。口縁部には沈線で低い山形文が描かれる。頸部の屈曲部から胴上半には下向きと上向きの連弧状の文様が沈線で描かれる。134は頸部が緩く屈曲して口縁が外反す

第319図　OF・OG93～95グリッド遺物出土状況



第320図　OF・OG93～95グリッド出土土器

る甕である。口縁部は若干肥厚し、ℓ撚糸文が横走し、胴部は斜めに走る。137もℓ撚糸文が施される甕底部で、134と同一個体の可能性がある。底部側面には部分的に粘土が貼付けられ、張り出し気味に整形されている。135・136はいずれも壺とみられるが、器形・胎土・施文等は異なる。前者は口縁部が緩く外反し、胴部が張る器形をなし、口縁部から頸部にかけては3段



第321図　OD・OE97～99グリッド遺物出土状況

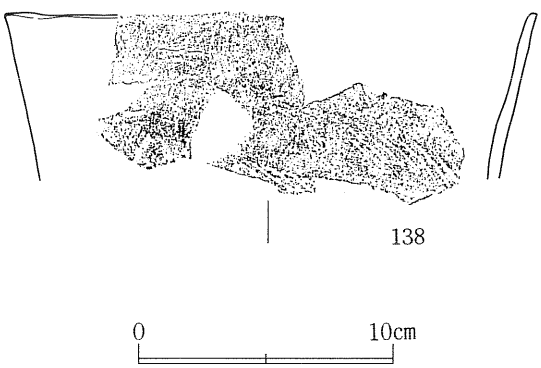
にＬ撚糸文が横位に回転施文される。肩部以下はＬ撚糸文が縦走する。後者は小破片で、詳細は不明であるが、頸部はほぼ直立し、胴部が強く張る器形をなすものと想定される。頸部には１本の沈線によって上向きと下向きの連弧状の文様、肩部には２本１組の沈線によって弧状を連ねた文様を描いている。本例は器表の摩滅が著しく、ほぼ同一の分布を示す134とは摩滅の程度が異なっている。そのため両者の共伴関係は確実ではない。

ＯＤ・ＯＥ97～99グリッド（第321・322図）

先に述べた土坑ＳＫ14周辺の土器群がより南側のＯＤ97グリッドまで広がっている。その分布の南限に138が混在している。全体に散漫な分布状況で、完形近くまで復元できる個体は存在しない。

138は口縁が緩く外反する薄手の甕である。口唇部は部分的に面取りされる。口縁にはＬ撚糸文が横位に回転施文されるが、上段の撚糸文は部分的に施されるのみである。

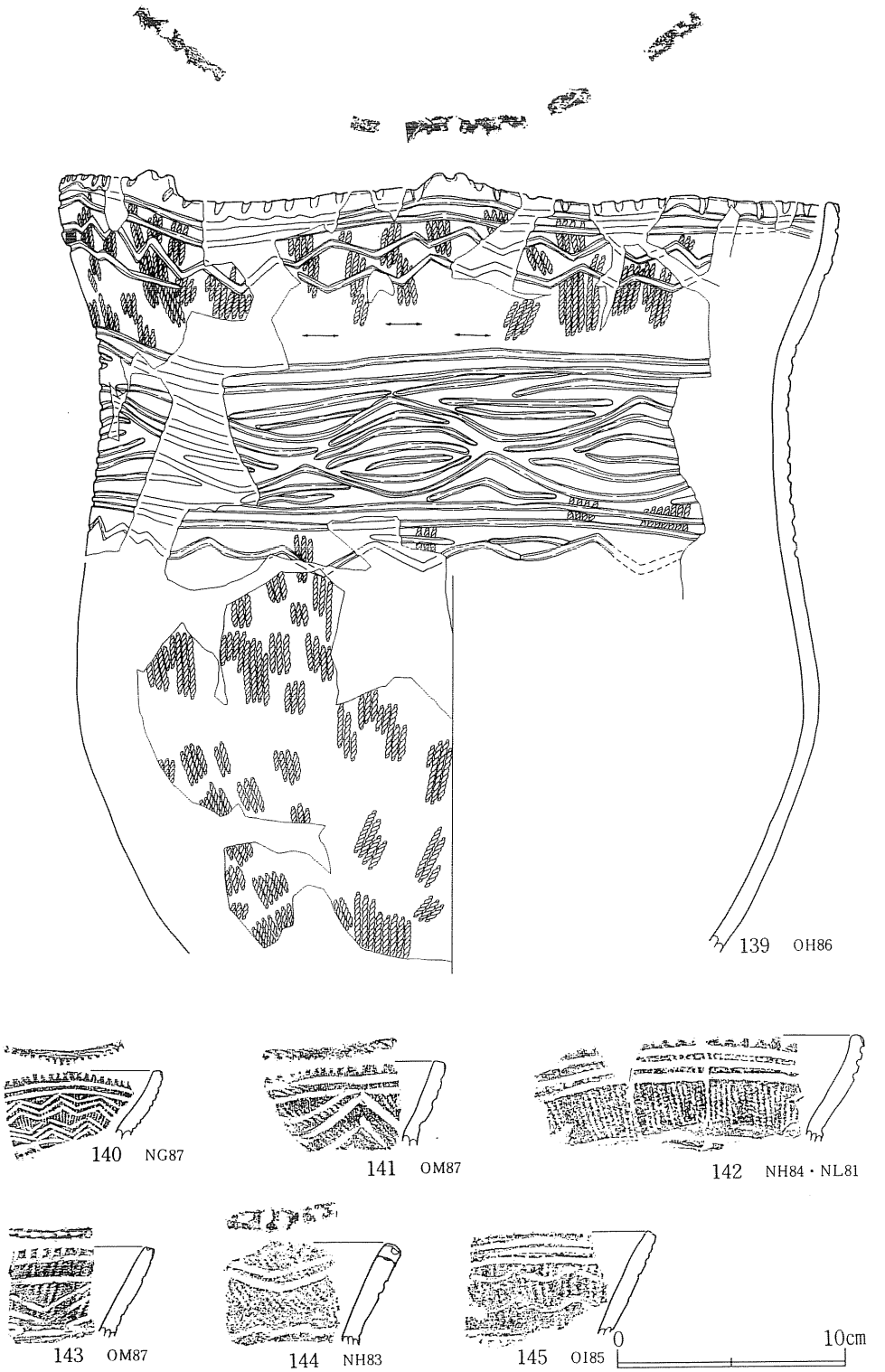
上述したように本地点は全体に散漫な分布で、復元可能な個体も存在しない。しかしながら識別した６個体の土器はいずれも撚糸文が施された薄手の甕であり、斉一性が高い。法量・撚糸文の施文方法等には違いが認められるものの、縄文や沈線が施文されたものなどが存在しないことから、これらの土器群は一時期の一括資料の可能性がある。



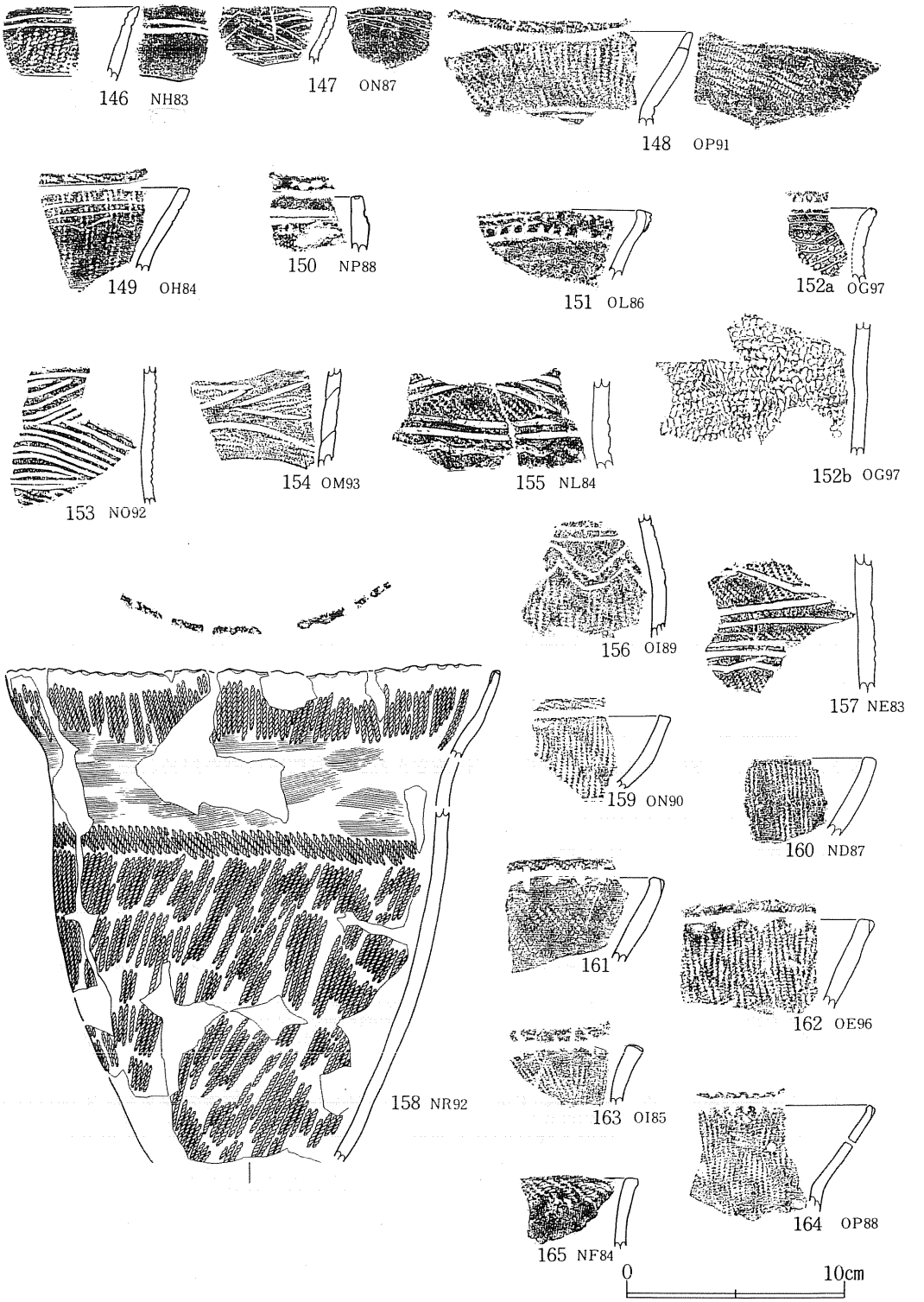
第322図　OD・OE97～99グリッド出土土器

(2)　その他の出土土器（第323～326図）

139は口縁部が緩く外反し、微かに受け口状になり、胴部が緩く張る甕である。口唇部には中央を押圧した突起が付くが、全周に規則的には配されない。口唇部は面取り後縄文施文され、口唇部外側が押圧される。口縁部は縦走するＲＬ縄文を地文とし、１本単位の沈線で、山形文等が施される。頸部には沈線で密に不整な文様が描かれ、文様帯の下限は低い山形文で画される。胴部以下はＲＬ縄文が縦走する。ＯＨ86グリッド周辺での出土である。140は甕もしくは壺の内湾する口縁部である。口唇部には細かいＲＬ縄文が施され、口唇外側は刻みをもつ。外面はＲＬ縄文を地文とし、口縁上位に２本１組の平行沈線を水平に巡らし、その下には３本１組の沈線で描いた山形文を２段巡らしている。141～145・149はＲＬ縄文を地文とし、ヘラ状工具で沈線を施した甕の口縁部である。144は頂部に円形刺突を施し、両側を刻んだ突起が口唇部に付く。さらに口唇には刺突列が巡らされる。146もＲＬ縄文を地文とする甕の口縁部破片であるが、口縁端部は舌状を呈し、微かに外反する。内外面に沈線が施される。147は薄手



第323図　その他の遺構外出土土器（３）



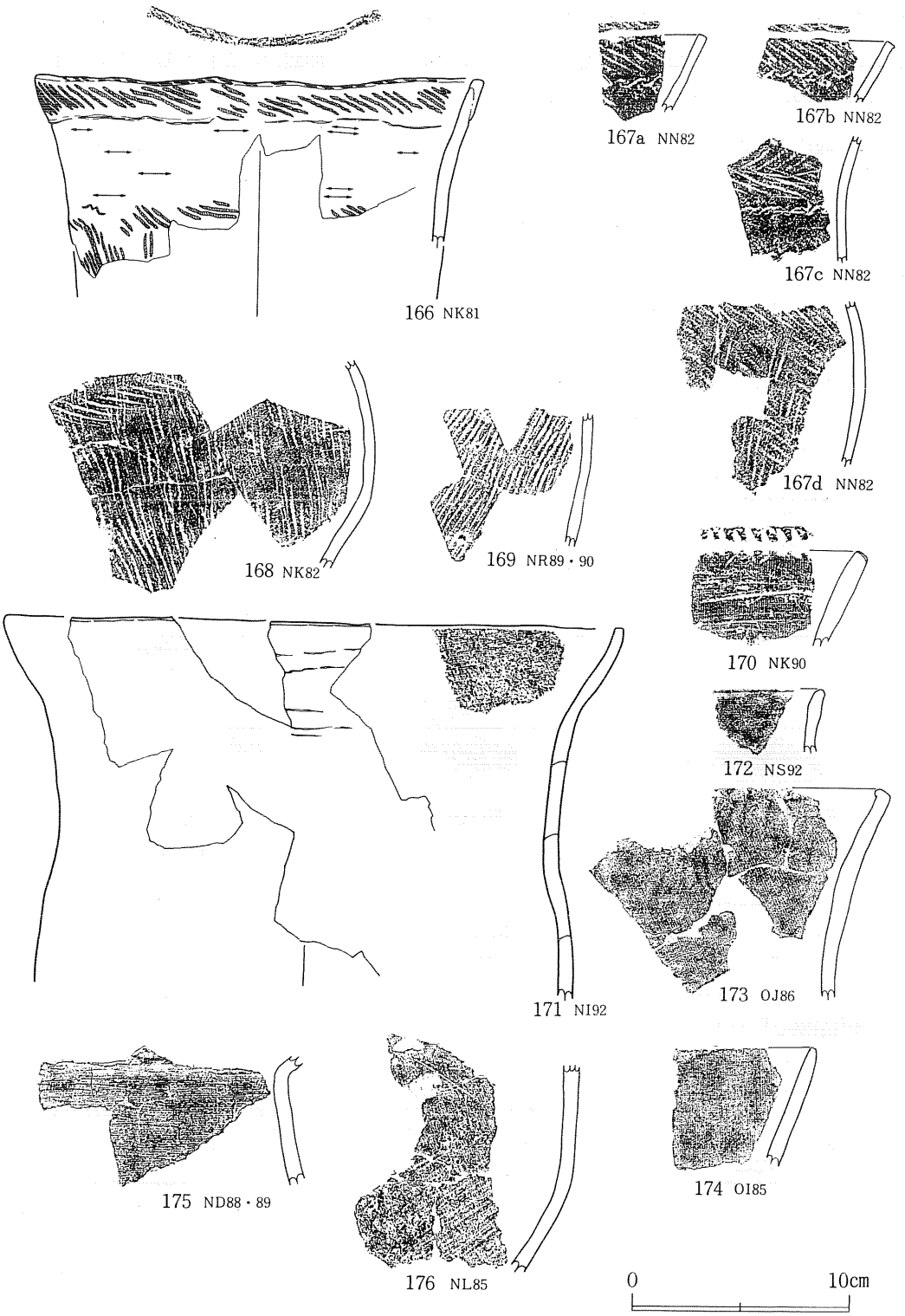
第324図　その他の遺構外出土土器（４）

の甕口縁で、細沈線で内外面に施文される。148は受け口状口縁をなす甕口縁部破片である。口唇部には山形の突起が付く。口唇部・口縁部内外面にＲＬ縄文が施され、外面の頸部との境界には沈線が巡る。150は小片で、器形は不明である。口縁に２条の沈線が巡り、口唇は面取りされ、「Ｄ」字形爪形文が施される。151は端部が若干内湾する甕口縁部である。口縁端部に凸帯が１条貼り付けられ、凸帯上は斜めに刻まれている。152は甕と思われるが、詳細は不明である。口縁は緩やかに外反し、口唇部には竹管状工具で刺突が加えられる。口縁部はＬＲ縄文を地文とし、２本１組の比較的細い沈線で文様が描かれる。胴部はあまり膨らまず、ＬＲ縄文を施文後、結節回転文が垂下される。153は沈線を重ねて施し、下端にＬ撚糸文を施した甕頸部破片、154・155・157は沈線が施された甕頸部破片である。いずれもＲＬ縄文を地文とし、154・155・157は一部沈線間が磨消されている。156は外面に炭化物が付着する甕もしくは壺の肩部から胴部上半にかけての破片である。ＲＬ縄文を地文とし、連弧文等が沈線で描かれる。158は受け口状口縁をもつ甕である。比較的薄手で、口唇は面取りされず、押圧が連続的に加えられる。口縁部にはＲＬ縄文が縦走し、頸部は無文である。頸部と胴部の境界にはＲＬ縄文が斜行し、それ以下は縦走する。159～164もＲＬ縄文が施される甕の口縁部破片である。160を除き口唇部にも縄文が施され、161～164はさらに刻みをもつ。165は甕もしくは壺の僅かに外反する口縁部破片である。口縁部上位にはＲＬ縄文が施され、口唇部と外面はミガキが施される。また内外面の一部にハケメ様の条痕が認められる。166～169は撚糸文施文の甕である。166は口縁部が緩やかに外反し、口縁端部が肥厚する器形をなす。口唇部および肥厚部にＬ撚糸文が施される。頸部下半にも横方向に回転施文され、それ以下はやや斜めに縦走する。167は口縁にはＬ撚糸文と結節回転文が施され、頸部以下には異原体による羽状の撚糸文と結節回転文が施される。168・169もＬ撚糸文が施される。168は羽状構成をとる可能性がある。

170～176は無文の甕である。170は厚手で、口唇部には刻みをもつ。外面にはハケメ様の条痕が認められる。171は比較的薄手で、受け口状口縁をなし、頸部がほぼ直立し、胴部が少し張る器形をなす。172～174は外反する口縁部破片で、受け口状にはならない。175は頸部で強く屈曲する器形をなす。176には外面にハケメ様の条痕が認められる。

177・178は後北Ｃ２式土器である。177は４単位の波状口縁となる鉢である。口縁部には刻みをもつ３条の微隆起線を巡らし、上位２条の微隆起線間には刺突列を充填する。胴部には２条の微隆起線による区画内にＲＬ縄文原体を連続的に回転施文している。区画の外側には横位に刺突列を巡らしている。ＮＬ94グリッドの出土で、共伴土器は存在しない。178はＮＲ90グリッド出土で、刻みをもつ２条の微隆起線間に刺突列が巡る。

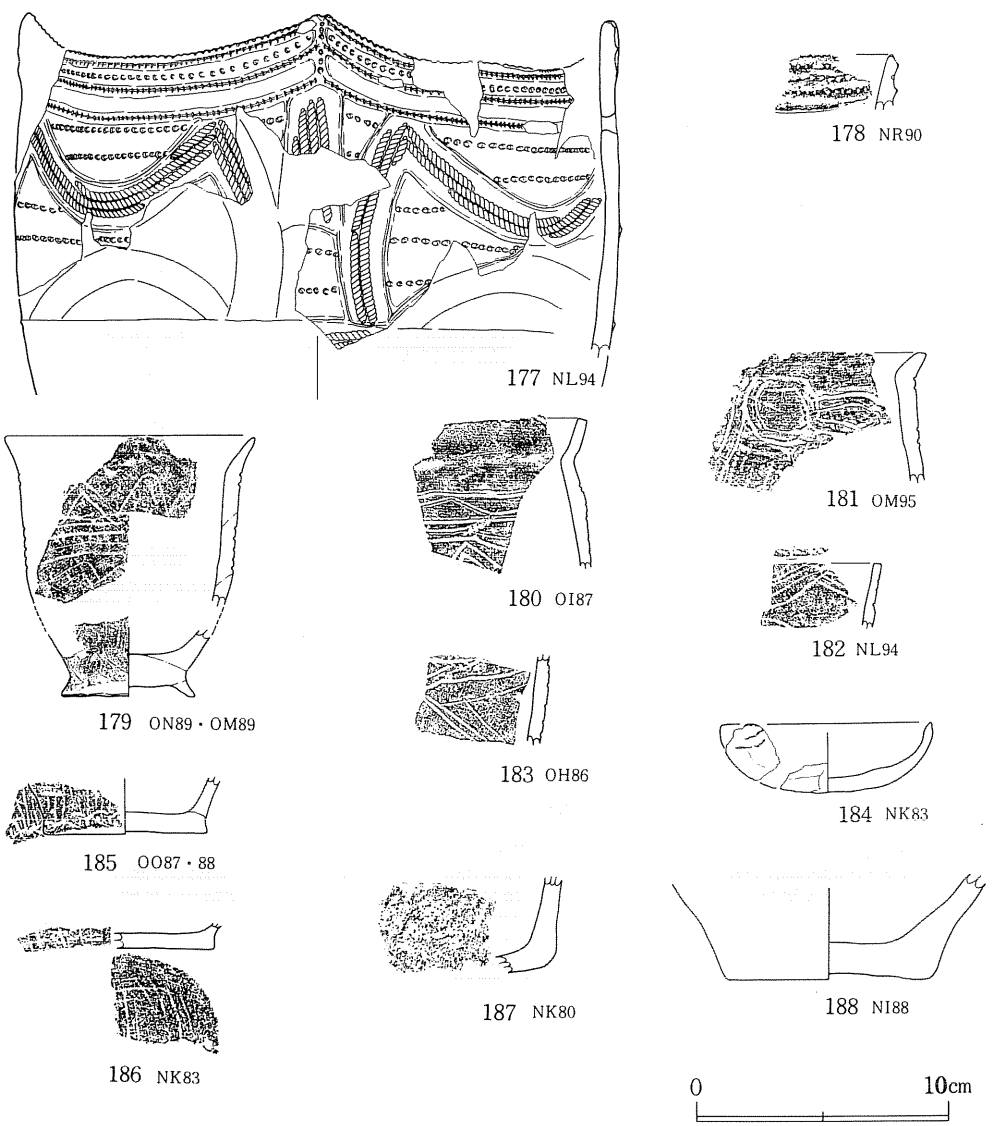
179～183は小形の器形をとるものである。179は低い台部が付く鉢である。口縁端部は舌状を呈し、外反する。頸部から胴部には２本１組の細沈線で、鋸歯文等が描かれる。胴部下半は



第325図　その他の遺構外出土土器(5)

ＲＬ縄文が縦走する。180は受け口状口縁をなす甕とみられるが、薄手で、焼成は非常に堅緻である。頸部以下には間隔が極めて狭い２本１組の細沈線で、曲線的な文様が描かれる。181は口縁端部が外反する甕もしくは壺の破片である。２本１組の細沈線で文様が描かれる。182・183は小破片のため器形不明であるが、細沈線による文様が施文される。184は無文の浅鉢である。底部は丸底に近く、口縁は短く、尖り気味に終わる。

185・186はＬ撚糸文施文の底部破片である。185は結節回転文が施される。186は底面にも撚糸文が施される。187も底部破片であるが、全体に摩滅が著しく、施文等は不明である。188は大形の甕の底部破片で、底面中央部が若干くぼみ、揚げ底状となっている。



第326図　その他の遺構外出土土器（６）

5　縄文もしくは弥生時代の検出遺構と遺物

(1) 土　　坑

ＳＫ128（第327・328図、図版125・126）

ＮＰ86・87・ＮＱ86・87グリッドに位置する。南端は沢の斜面に当たり、その部分のプランは不明瞭であり、また、全体に壁面の崩壊が著しい。このため不明確ではあるが、現状で南北7.4m、東西6.2mの不整形を呈する。掘り込みは南端側が深く、袋状土坑形をなす。この部分では径1.3〜1.4m前後を測り、底面には握り拳大の亜角礫が比較的集中する。この南端部での確認面からの深さは2.4m前後である。底面の標高は208.6m前後を測るが、底面および壁面には標高209.3m前後の高さまで鉄分が沈着しており、調査時には認めらられなかったが、過去にこのレベルまで湧水があったものと考えられる。

覆土は32層に分かれるが、８層の焼土層と５層の樹根によるとみられる撹乱、および地山土のブロックを多量に混在し、人為的埋土とみられる９・11層のほかは、いずれも壁の崩壊土等をふくむ自然堆積層と考えられる。このうち１〜３層はそれぞれ基本層序のⅡ〜Ⅳ層に対応する。４・７層は基本層序Ⅴ層に対比されるが、地山粒子を比較的多量に含み、二次堆積土の可能性が高い。縄文時代晩期土器がまとまって出土しているほか、数片の弥生土器片も検出した。９・１１層は前述したように地山土のブロックを混在するほか、炭化物も含み、人為的埋土と考えられるが、遺物は含まない。また９層が被熱によって焼土化したのが８層である。本層周辺は若干傾斜が緩やかになっている。12層以下はほとんどが壁の崩壊土を主体とする自然堆積層であるが、袋状土坑部最下の30層はシルト質粘土層であり、滞水下の堆積と考えられる。

遺物は主に４層および７層からの出土であり、９層以下からは出土していない。縄文晩期土器を主体とするが、わずかに弥生土器と見られる土器片も混在する（第329図）。189はＲＬ縄文を地文とする鉢、190は台付鉢で口縁に突起をもつ。191も台付鉢の台部片である。192・193は節の細かいＲＬ縄文が縦走し、弥生時代の甕の破片とみられる。194は７層から出土した耳栓である。一方の端面には刺突があり、内面は朱彩されている。この他に７点の頁岩の砕片が４・７層中より出土している。これらの遺物の出土状態は４・７層の傾斜に沿っており、遺構の北側から流れ込んだものと考えられる。本遺構の北側は縄文時代晩期の遺物をまとまって検出したＮＯ・ＮＰ90グリッド付近までⅡ〜Ⅶ層上部が削平されている。このことから４層は本来ＮＯ・ＮＰ90グリッドより南に広がっていた縄文時代晩期の遺物包含層が弥生時代以降に削平され、遺物ごと再堆積したものと考えられる。

本遺構は現状の形態と覆土の壁崩壊土の堆積状況から考えて、当初は南端部の袋状土坑形の掘り込みが形成された後、壁の崩壊によって最終的に現状の形態を呈するようになったと推定される。予想される当初の形態と湧水が存在したとみられることから本遺構は井戸ＳＥ04との

類似性を認めることができる。しかしながら、本遺構は底面に礫が置かれ、覆土が人為的に埋め戻され、さらにその上面で火が焚かれているという相違がある。なお、この焼土面の周囲には縄文時代晩期後葉の台付鉢190がまとまって出土しているが、上述した4・7層の堆積状況から本来焼土面に伴うかは現状では判断し難い。

本遺構の性格は現在のところ特定できず、その所属時期も明確に断定し難い。

ＳＫ25（第330図）

ＯＯ87グリッドに位置する。開口部は86×60cmの楕円形を呈する。壁は末広がりになり、底面径は100×70cmを測る。確認面から底面までの深さは30cmである。覆土は2層に分かれる。下層は上層よりも締まるが、ともにＶ層起源の流入土とみられる。本土坑からの遺物の出土はなかった。

ＳＫ23（第330図、図版126）

ＯＧ94グリッドに位置する。平面形は96×86cmの円形を呈する。壁は末広がりになり、底面径は88cm前後を測る。確認面からの深さは35cmである。覆土は4層に分かれる。2層は壁の崩壊土の塊で、1・3・4層はＶ層の流入土である。1層には少量の炭化物が含まれる。本土坑から遺物は検出されなかった。

ＳＫ84（第330図、図版126）

ＮＫ83グリッドに位置する。開口部の平面形は86×75cmの円形を呈する。底面は径90cm前後を測り、壁はやや末広がりになる。覆土は6層に分かれる。2・4・6層は壁の崩壊土の堆積層で、3層は壁崩壊土とＶ層の混在した堆積とみられ、炭化物を若干含んでいる。1・5層はＶ層の流入土であり、炭化物を少量含む。本土坑からの出土遺物はなかった。

ＳＫ16（第330図）

ＯＬ87グリッドに位置する。平面形は83×62cmの楕円形を呈する。確認面からの深さは45cmを測る。壁は僅かに開き気味に立ち上がる。覆土は5層に分かれる。2・4層は壁崩壊土の堆積である。1・3・5層はＶ層起源の流入土であるが、このうち1層は炭化物を少量含み、5層には地山ブロックが混在する。遺物は出土しなかった。

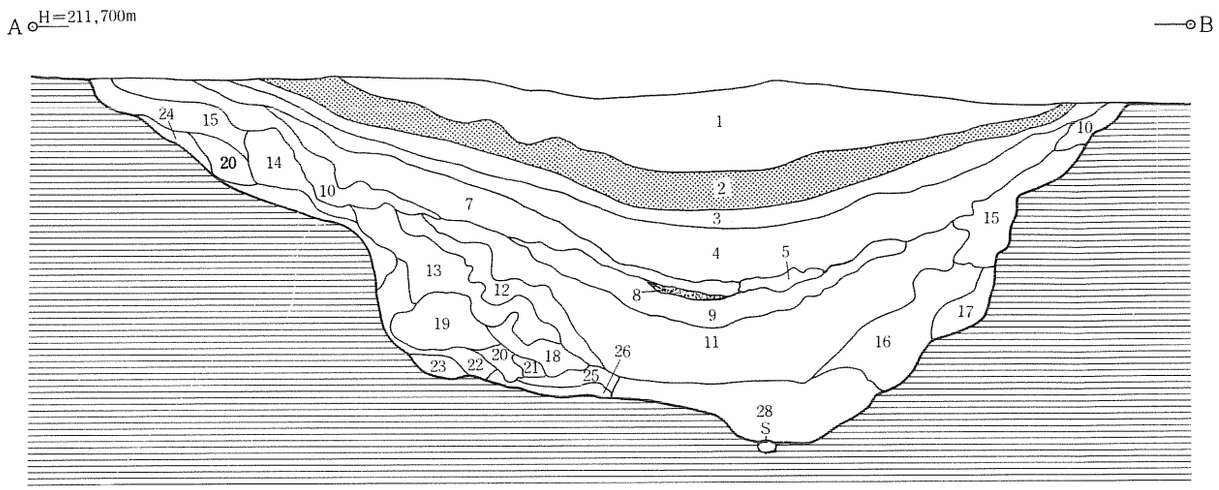
ＳＫ124（第330図）

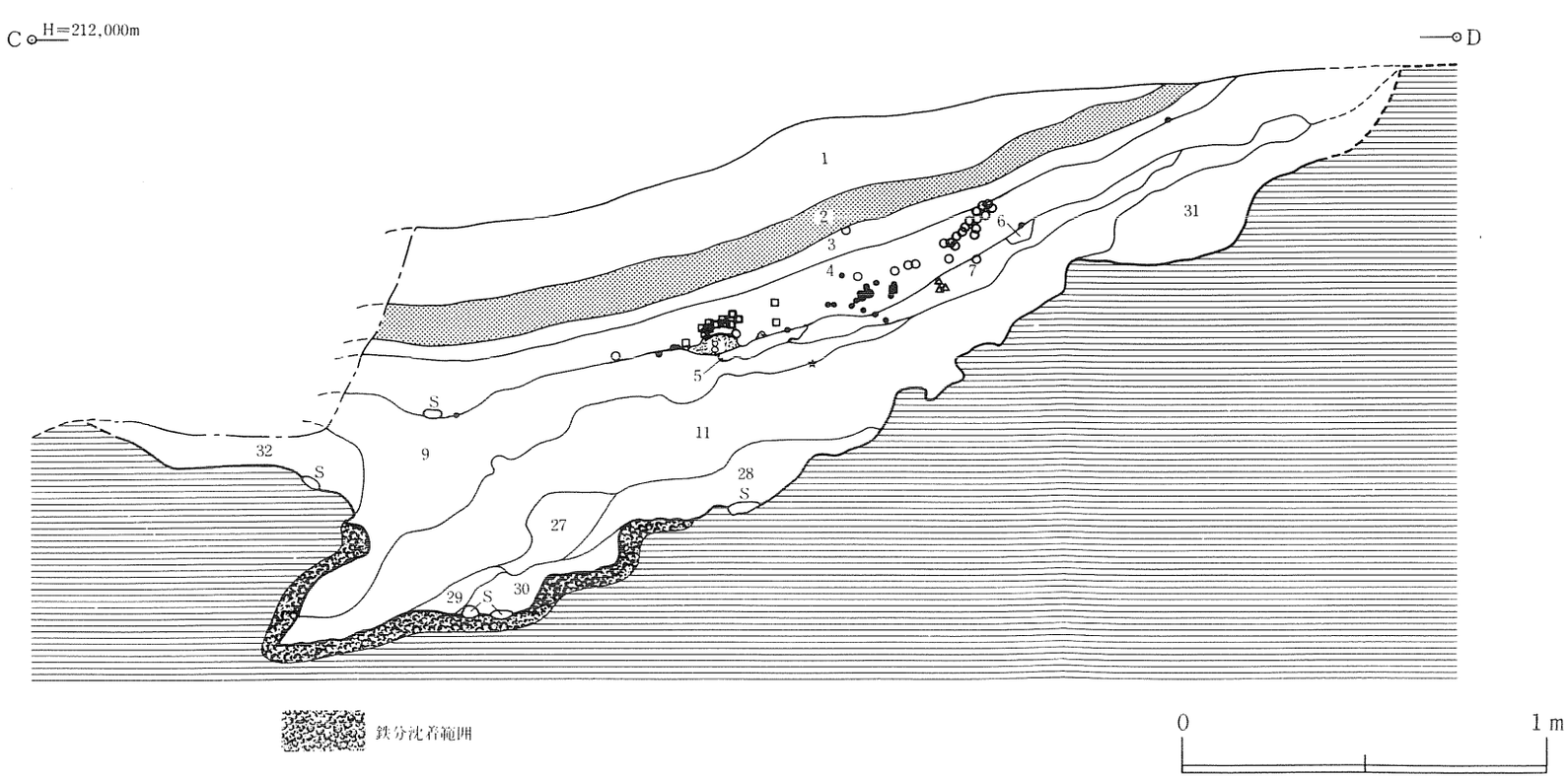
ＮＰ90グリッドに位置する。平面形は72×66cmの不整円形を呈し、確認面からの深さは24cmを測る。壁は若干開き気味に立ち上がる。覆土は7層に分かれるが、3層は樹根による攪乱、5層は壁の崩壊土である。他の層はＶ層起源の自然堆積土とみられる。出土遺物はない。

ＳＫ95（第330図）

ＮＣ・ＮＤ86グリッドに位置する。平面形は90×84cmの円形をなす。確認面からの深さは40cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。覆土は4層に分かれる。2層は樹根による攪乱、他はＶ

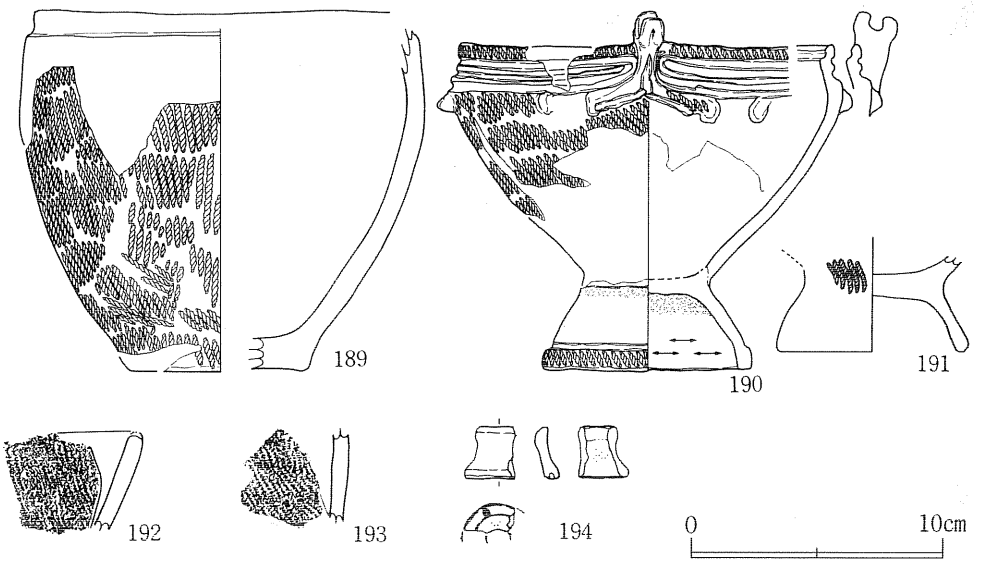
第327図　ＳＫ128土坑平面図





1．黒色土（10YR 3/1）
2．明黄褐色（ブロック 10YR 7/6）
3．暗褐色土（10YR 3/3）
4．黒褐色土（10YR 2/2）
5．胡桃焼乱
6．暗褐色土（10YR 3/4）
7．暗褐色土（10YR 3/4）
8．明褐色焼土（7.5YR 5/8）
9．暗褐色土（10YR 3/4）
10．暗褐色土（10YR 3/4）
11．黒褐色土（10YR 2/3）
12．暗褐色土（10YR 3/4）
13．褐色土（10YR 3/6）
14．黄褐色土（10YR 5/6）
15．褐色土（10YR 4/6）
16．暗褐色土（10YR 3/3）
17．黄褐色土（10YR 5/8）
18．黄褐色土（10YR 5/8）
19．黄褐色土（10YR 5/8）
20．黄褐色土（10YR 5/8）
21．暗褐色土（10YR 3/3）
22．黄褐色土（10YR 5/8）
23．黄褐色土（10YR 5/8）
24．黄褐色土（10YR 5/8）
25．暗褐色土（10YR 3/3）
26．暗褐色土（10YR 3/3）
27．黒褐色土（10YR 2/3）
28．黒褐色土（10YR 2/3）
29．黒褐色土（10YR 2/3）
30．黒褐色土（10YR 2/3）
31．黒褐色土（10YR 2/3）
32．暗褐色土（10YR 3/4）

第328図　ＳＫ128土坑断面図



第329図　SK128土坑出土遺物

層起源の流入土である。３・４層には南隣の焼土遺構ＳＮ79起源とみられる焼土ブロックが少量混在している。本土坑から遺物は出土しなかった。

ＳＫ46（第330図）

ＯＦ95グリッドに位置する。平面形は101×90cmの円形を呈する。確認面から底面までの深さは27cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。覆土は２層に分かれ、共にＶ層の流入土とみられる。２層下位では地山土のブロックを含んでいる。遺物の出土はない。

ＳＫ116（第330図）

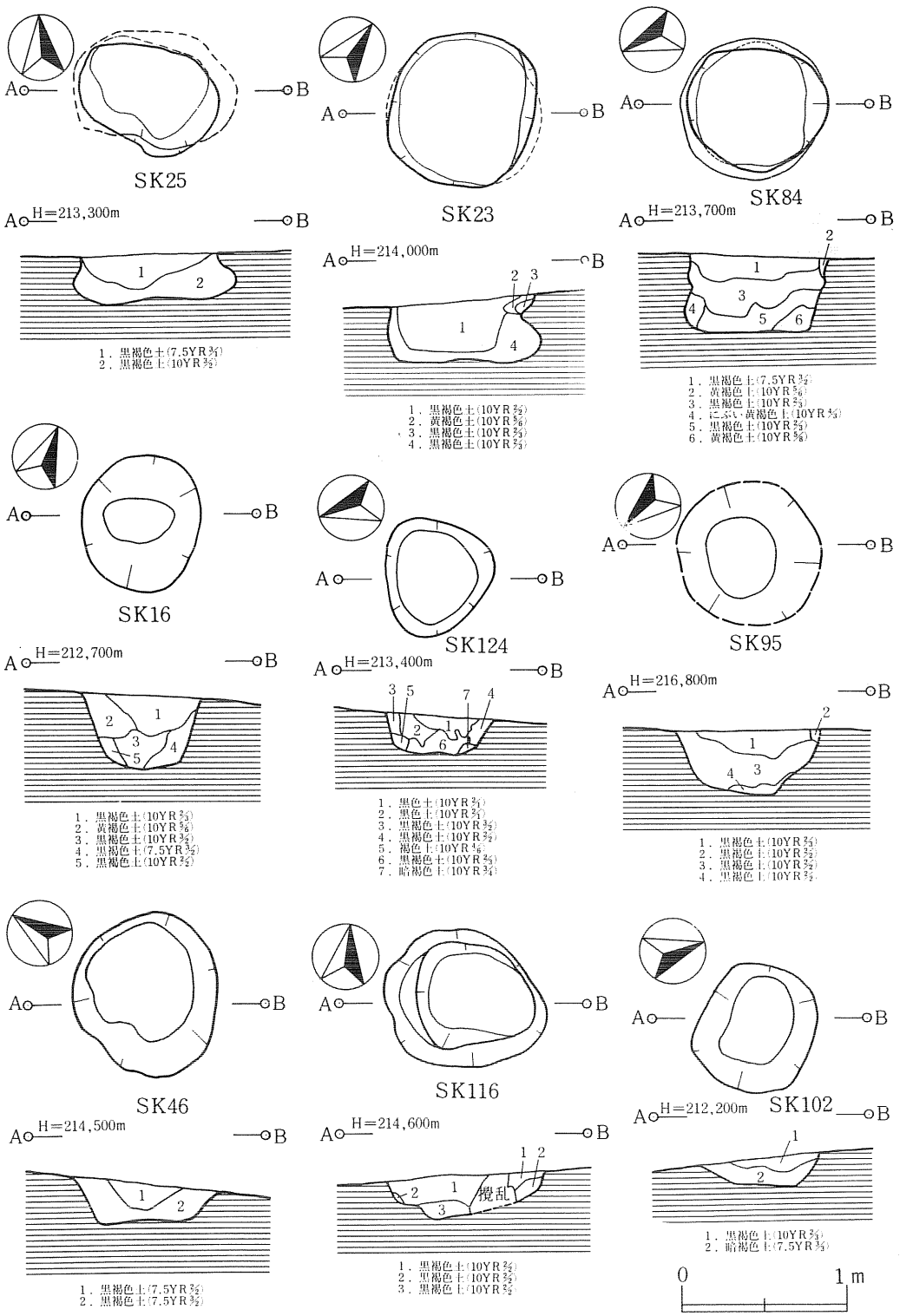
ＮＰ94グリッドに位置する。平面形は101×85cmの不整楕円形をなす。樹根によるとみられる攪乱が著しく、その形態は必ずしも明瞭ではないが、壁は一部段をなし、底面は斜めに傾斜している。確認面からの深さは26cmである。覆土は３層に分かれる。いずれもＶ層流入土であるが、地山土の混入度が下層ほど増加する。本土坑から遺物の出土はなかった。

ＳＫ102（第330図）

ＮＳ89グリッドに位置する。平面形は78×68cmの楕円形をなす。壁は斜めに立ち上がり、確認面からの深さは20cmを測る。覆土は２層に分かれる。ともにＶ層流入土とみられるが、下層には地山土の混入が顕著である。検出遺物はない。

ＳＫ83（第331図）

ＮＫ83グリッドに位置する。平面形は100×80cmの不整楕円形をなす。確認面からの深さは22cmを測り、壁は南側ではほぼ垂直に、他の部分では斜めに立ち上がっている。覆土は４層に分かれる。１層はＶ層流入土とみられるが、２～４層は地山土のブロックを含み、土坑掘削土



第330図　SK25・23・84・16・124・95・46・116・102土坑

の埋め戻し土の可能性がある。本土坑から遺物の出土はなかった。

ＳＫ24（第331図）

ＯＮ・ＯＯ83グリッドに位置する。平面形は122×90cmの楕円形を呈する。東壁は垂直に立ち上がるが、他の部分は斜めに立ち上がっている。底面は不整であるが、確認面から最下底までの深さは22cmを測る。覆土は４層に分かれるが、このうち１層は地山土のブロック、３層は樹根によるとみられる攪乱層である。２・４層はＶ層流入土である。本土坑からの出土遺物はない。

ＳＫ20（第331図）

ＯＥ97グリッドに位置する。平面形は113×93cmの不整楕円形をなす。壁は擂り鉢状を呈し、土坑底は明確な面をなさない。確認面からの深さは28cmを測る。覆土は２層に分かれる。１層はＶ層の流入土、２層は壁の崩壊土とＶ層とが混合した堆積である。本土坑から遺物は出土しなかった。

ＳＫ38（第331図）

ＯＩ89グリッドに位置する。平面形は90×85cmのやや不整の隅丸方形を呈する。壁は擂り鉢状をなし、確認面からの深さは24cmを測る。覆土は２層にわかれる。ともに地山ブロックと炭化物を多量に含み、下層の方がより地山土の混入が顕著である。これらの覆土はその土性から人為的埋土である可能性が高い。本土坑からは１層より土器破片が１点出土した（第335図）。195は薄手で、焼成は良好で、非常に堅緻である。無文の口縁部破片であるが、小片のため詳細は不明である。

ＳＫ101（第331図）

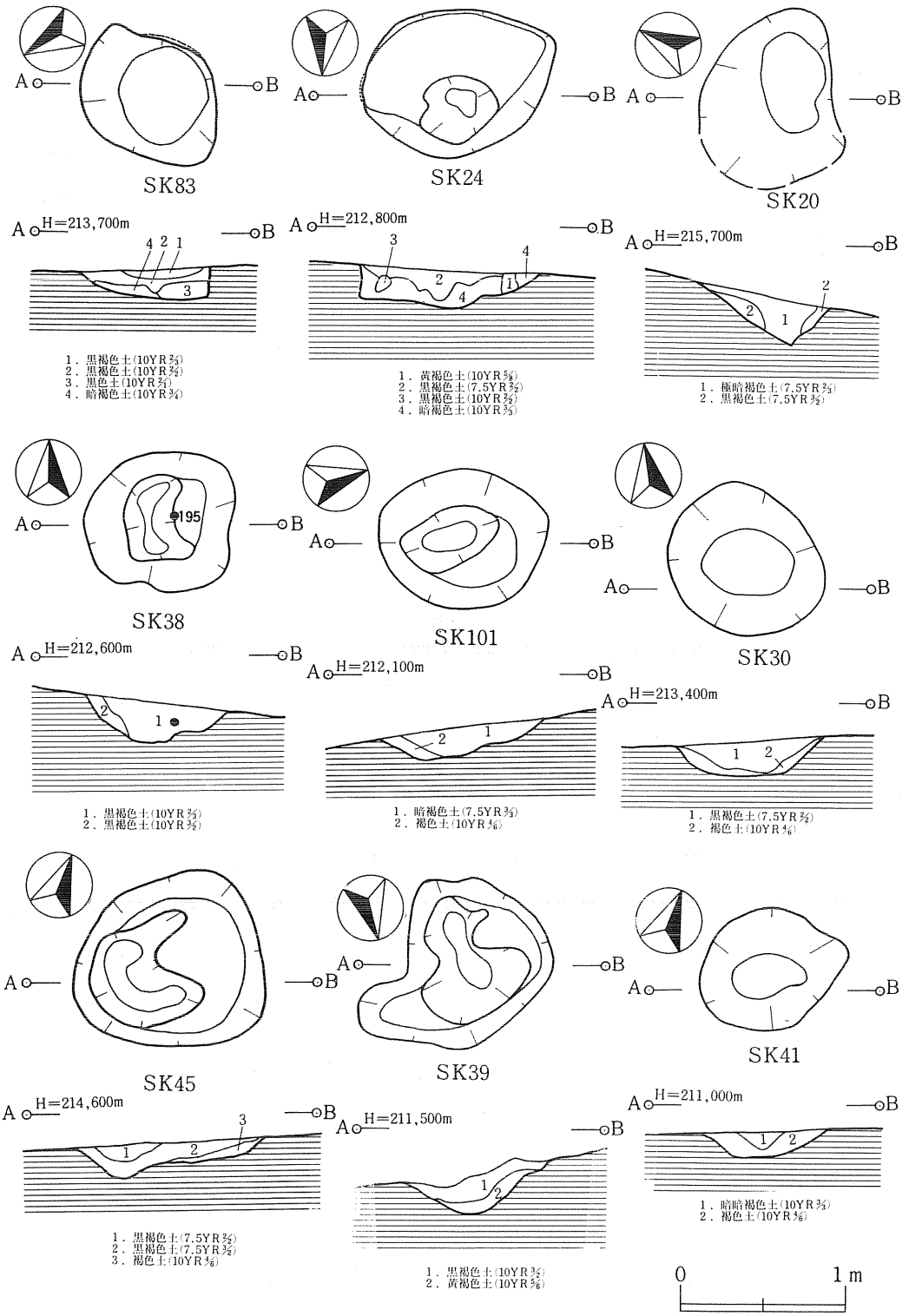
ＮＳ89グリッドに位置する。平面形は103×85cmの楕円形をなす。壁は擂り鉢状を呈し、底面には凹凸があり、不整である。確認面からの深さは17cmを測る。覆土は２層に分かれる。１層はＶ層の流入土、２層は壁の崩壊土を主体とする層である。本土坑からの出土遺物はなかった。

ＳＫ30（第331図）

ＯＰ87グリッドに位置する。平面形は96×85cmの楕円形を呈する。壁は擂り鉢状を呈し、確認面からの深さは22cmである。覆土は２層に分かれ、共にＶ層起源の流入土とみられる。遺物は出土していない。

ＳＫ45（第331図）

ＯＤ95グリッドに位置する。平面形は116×106cmのやや不整の円形をなす。壁は擂り鉢状をなし、底面は凹凸があり、平らではない。確認面から最下底までの深さは20cmである。覆土は３層に分かれる。１・２層はＶ層の流入土、３層は地山ブロックを多量に含む壁の崩壊土であ



第331図　SK83・24・20・38・101・30・45・39・41土坑

る。本土坑からの遺物の出土はなかった。

ＳＫ39（第331図）

ＯＩ86・87グリッドに位置する。平面形は120×103cmの不整形である。壁は擂り鉢状をし、確認面からの深さは24cmを測る。覆土は２層に分かれる。２層は壁および底面の地山土が崩壊したものとみられる。１層は地山ブロックを含み、人為的埋土の可能性がある。遺物の出土はない。

ＳＫ41（第331図）

ＯＦ・ＯＧ86グリッドに位置する。平面形は92×73cmの紡錘形をなす。壁は擂り鉢状を呈し、確認面からの深さは15cmである。覆土は２層に分かれる。共に地山土を含み、特に２層では地山ブロックを多量に混在する。これらの覆土はその地山土の混入状況から人為的埋土の可能性が認められる。本土坑からは遺物は検出されなかった。

ＳＫ12（第332図）

ＯＩ93グリッドに位置する。平面形は106×84cmの楕円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは25cmを測る。覆土は３層に分かれる。１層はＶ層起源の流入土であり、２・３層は地山土を含み、壁もしくは底面の崩壊土とみられる。本遺構から遺物は出土しなかった。

ＳＫ17（第332図）

ＯＨ93・94グリッドに位置する。平面形は110×92cmのやや不整楕円形をなす。壁は擂り鉢状をなし、底面から緩やかに立ち上がる。確認面からの深さは14cmである。覆土はＶ層起源の流入土とみられる。遺物は検出されなかった。

ＳＫ91（第332図）

ＮＩ84グリッドに位置し、東半部は古代以降の炭焼成遺構ＳＫ60によって破壊されている。現状からその平面形は82×63cm前後の楕円形を呈するものと推定される。壁は緩やかに立ち上がり底面は不整である。覆土は２層に分かれる。共にＶ層起源の流入土とみられる。２層からは弥生土器の甕の口縁部の破片が１点出土している（第335図）。196は口縁が外反し、口唇部外側に刻みをもつ。口縁外面にはＲＬ縄文が縦走する。本例はＮＥ90グリッド出土破片と接合する。

ＳＫ33（第332図）

ＯＰ89グリッドに位置する。平面形は113×92cmの不整楕円形を呈する。壁は一部段をなしながら斜めに立ち上がる。確認面からの深さは20cmである。覆土は５層に分かれる。１層は樹根の攪乱の可能性があるが、２～４層はＶ層起源の流入土とみられる。５層は壁の崩壊土と考えられる。本土坑からは３層上面から土器が１点出土した（第335図）。128ｃはＲＬ縄文が縦

走する甕胴部破片である。土坑周辺には同一個体が分布しており、本例は土坑埋没過程で流入したものと考えられる。

ＳＫ100（第332図）

ＮＪ90グリッドに位置する。平面形は100×73cmの楕円形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、確認面から底面までの深さは７cmと浅い。覆土はＶ層流入土である。本土坑からの出土遺物はない。

ＳＫ28（第332図）

ＯＮ・ＯＯ87グリッド周辺に位置する。平面形は77×58cmの楕円形をなす。壁は擂り鉢状を呈し、確認面から底面までの深さは21cmを測る。覆土は３層に分かれる。１・２層はＶ層流入土とみられ、３層はＶ層と壁崩壊土が混在した堆積層である。本土坑から遺物は検出されなかった。

ＳＫ11（第332図）

ＯＫ93グリッドに位置する。平面形は120×90cmの楕円形を呈する。壁は緩やかに斜めに立ち上がり、確認面から底面までの深さは12cmである。覆土は６層に分かれる。１層は攪乱土、２・３層はＶ層起源の流入土とみられる。４層以下は地山土の混入が著しく、壁の崩壊土とＶ層が混在したものと考えられる。本土坑の確認面上からは磨石が１点検出された（第335図）。Ｓ15は凝灰岩円礫を素材とし、両面に磨面を残している。さらに両面の一部には擦痕も認められる。

ＳＫ107（第332図）

ＮＦ87グリッドに位置する。平面形は110×73cmの不整形をなす。底面・壁も凹凸があって、不整である。確認面からの深さは14cm前後である。覆土は３層に分かれる。２層は壁の崩壊土、１・３層はＶ層流入土とみられる。本土坑からの遺物の出土はない。

ＳＫ126（第332図）

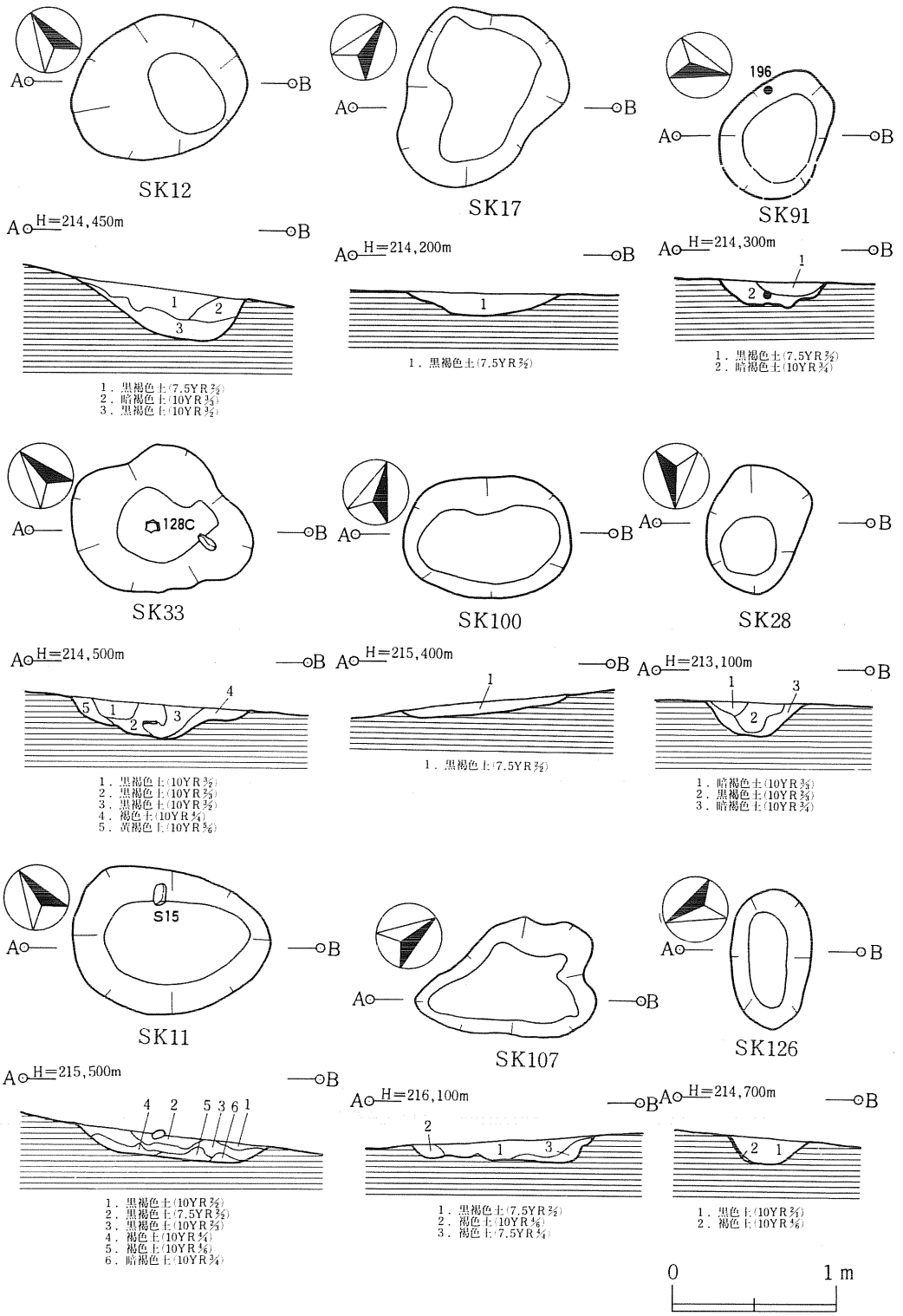
ＮＱ94グリッドに位置する。平面形は86×49cmの楕円形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、確認面からの深さは16cmを測る。覆土は２層に分かれる。１層はＶ層流入土、２層は壁崩壊土とみられる。本土坑からは遺物は検出されなかった。

ＳＫ21（第333図）

ＯＤ97グリッドに位置する。平面形は140×72cmの楕円形をなす。底面は不整で、凹凸があり、壁は斜めに立ち上がる。確認面から底面までの深さは20cm前後である。覆土は２層に分かれるが、共にＶ層起源の流入土とみられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ36（第333図）

ＯＬ84グリッド周辺に位置し、南西部は調査区外のため未調査である。平面形は現状からは



第332図　SK12・17・91・33・100・28・11・107・126土坑

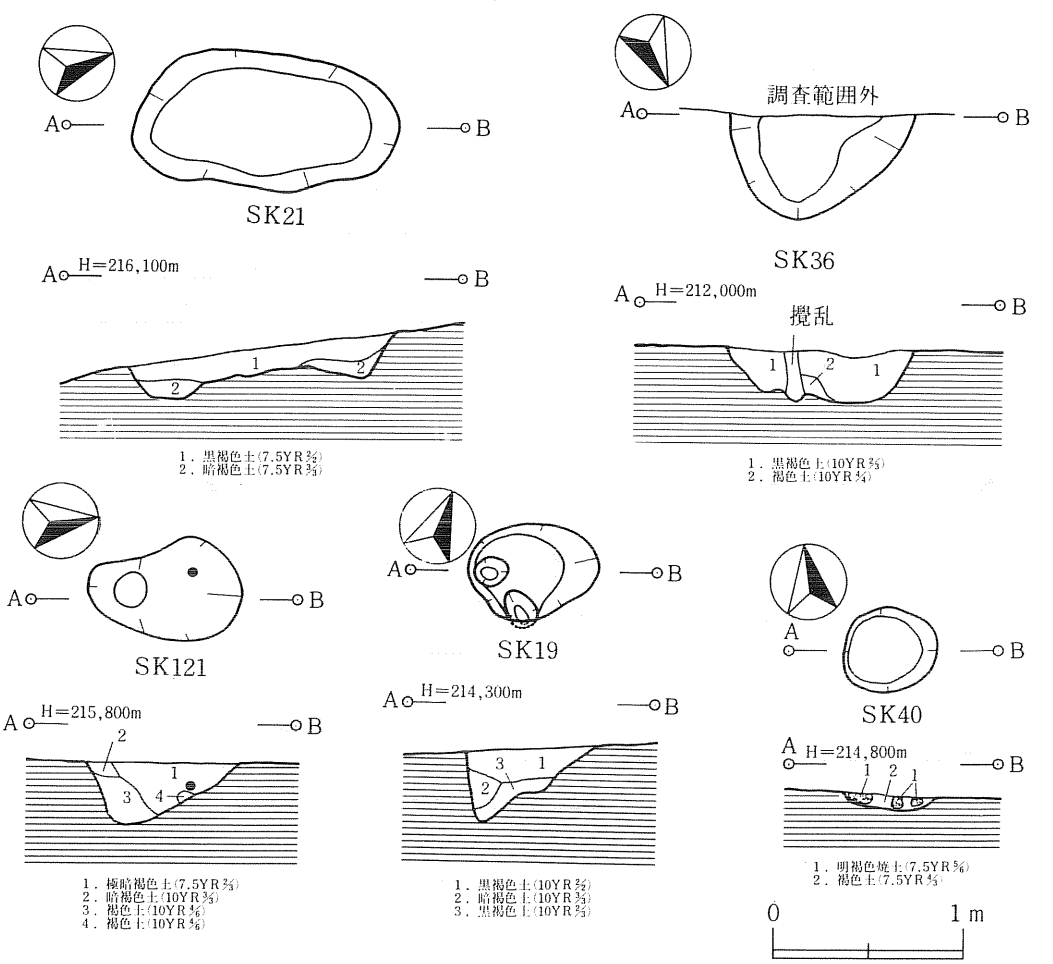
短軸長90cm前後の楕円形を呈するものと推定される。壁は斜めに立ち上がり、確認面から底面までの深さは25cmを測る。覆土は２層に分かれ、共にＶ層流入土とみられる。本土坑からの遺物の出土はない。

ＳＫ121（第333図）

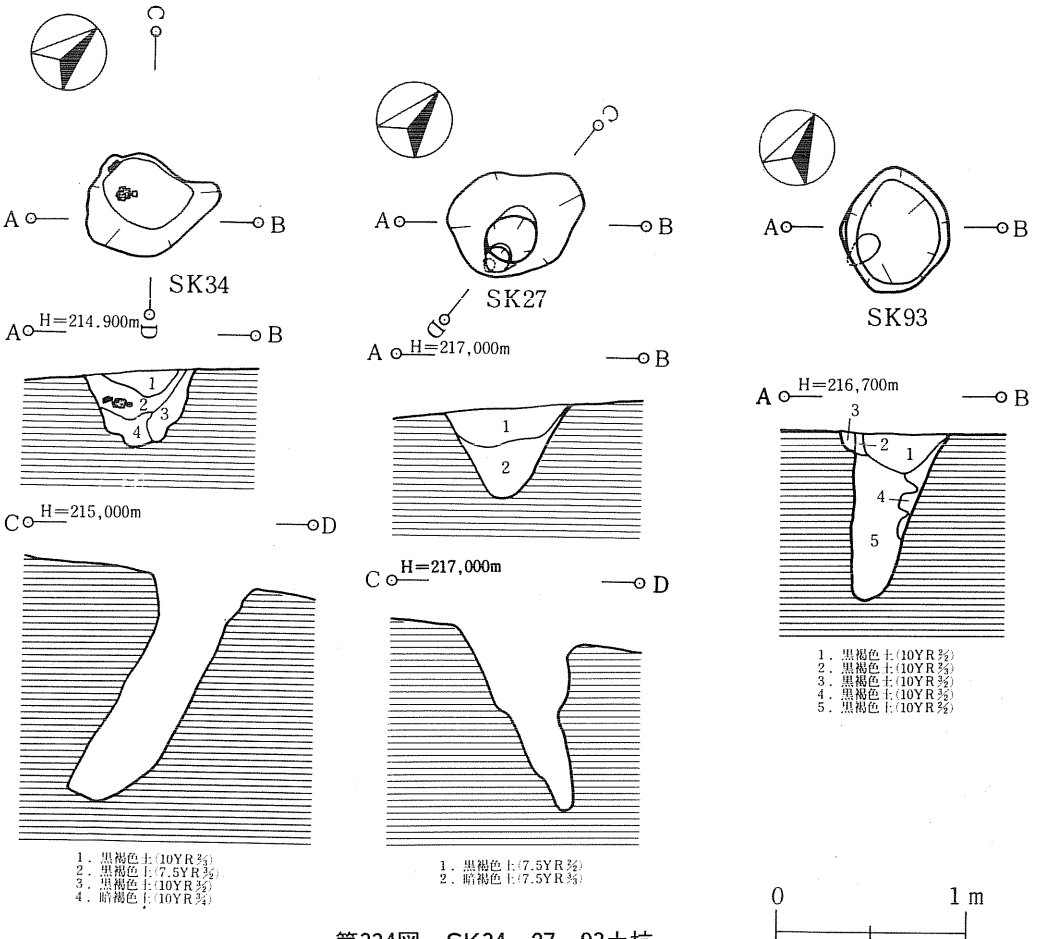
ＮＦ86グリッドに位置する。平面形は80×55cmのやや不整の楕円形をなす。壁は擂り鉢状を呈し、確認面から底面までの深さは32cmである。覆土は４層に分かれる。３・４層は壁の崩壊土層、２層は攪乱土、１層はＶ層流入土とみられる。１層中より土器破片が１点出土している。摩滅が著しい小破片のため時期等は明らかでなく、また本土坑に本来伴うものとは考えられない。

ＳＫ19（第333図）

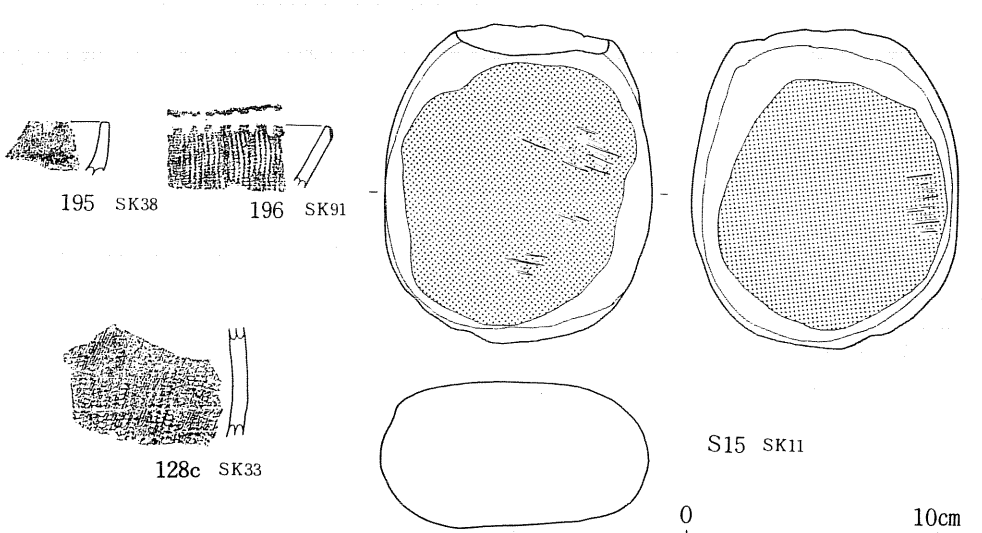
ＯＨ94グリッドに位置する。平面形は70×52cmの楕円形を呈する。壁は東側では斜めに立ち



第333図　SK21・36・121・19・40土坑



第334図　SK34・27・93土坑



第335図　SK38・91・33・11土坑出土遺物

上がり、西側では垂直に近い角度で立ち上がる。底面には凹凸があり、確認面から底面最下底までの深さは37cmを測る。覆土は３層に分かれる。１・３層はＶ層流入土、２層は壁崩壊土である。本土坑から遺物は出土しなかった。

ＳＫ40（第333図）

ＯＣ95・96グリッドに位置する。平面形は50×46cmの円形をなす。壁は擂り鉢状をなし、確認面から底面までの深さは７cmを測るに過ぎない。覆土は２層に分かれる。２層は炭化物が少量混在し、良く締まっている。１層は塊状をなす焼土層であり、２層が焼土化したものと考えられる。本土坑からの出土遺物はない。

ＳＫ34（第334図）

ＯＯ90グリッドに位置する。平面形は72×57cmの不整形をなす。本土坑は深さ125cm前後まで斜めに掘り込まれ、特異な形態を呈する。覆土は６層に分かれ、２・４層には炭化物が混在している。４層より下位には確認面から70cm前後の深さまで黒褐色土（7.5ＹＲ３/２）が堆積し、いずれもＶ層に地山土が混在した流入土とみられる。それ以下には軟質の地山土（10ＹＲ３/４）が堆積している。本土坑からは遺物は出土していない。

ＳＫ27（第334図）

ＯＥ99グリッドに位置する。平面形は70×55cmの不整円形を呈する。本土坑もＳＫ39と同様斜めに深く掘り込まれ、確認面から最下底までの深さは約90cmを測る。覆土は３層に分かれる。１層はＶ層起源の流入土、２層はＶ層と壁崩壊土の混在した層とみられる。確認面からおよそ50cm以下には軟質の暗褐色土（10ＹＲ３/４）が堆積する。本土坑からの出土遺物はない。

ＳＫ93（第334図）

ＮＤ87グリッド周辺に位置し、弥生時代の竪穴住居跡ＳＩ90を破壊している。平面形は66×58cmの円形をなす。本土坑も確認面から約90cmの深さまで深く掘り込まれている。覆土は５層に分かれる。３・４層は壁の崩壊土で、１・２層はＶ層起源の流入土とみられる。５層は軟質の土層で、地山土をブロック状に含んでいる。遺物は出土していない。

(2)　柱穴状遺構

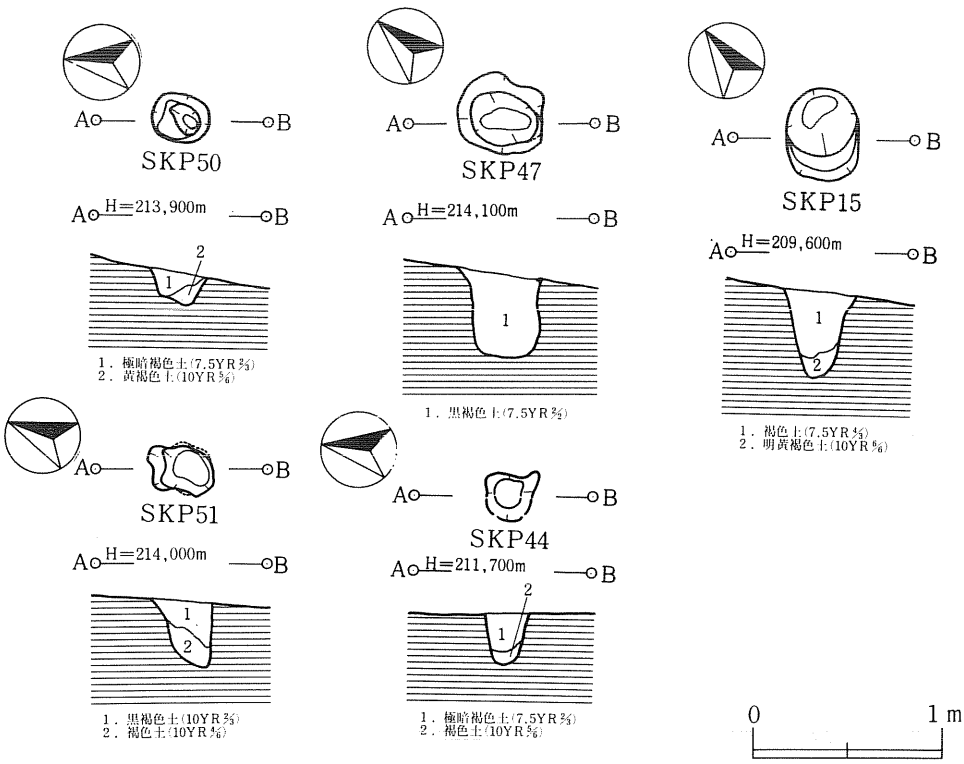
以下では柱穴状の小規模の掘り込みを柱穴状遺構としてとりあげる。調査区全体で５基の検出に過ぎず、明確な配列を認めることはできなかった。

ＳＫＰ50（第336図）

ＯＦ93グリッドに位置する。平面形は30×25cmの楕円形をなし、深さは17cmである。土層断面には柱痕跡は確認されない。

ＳＫＰ47（第336図）

ＯＥ９４グリッドに位置する。平面形は44×42cmの不整円形をなし、深さは43cmを測る。土



第336図　SKP50・47・15・51・44柱穴状遺構

層断面には柱痕跡は認められない。

ＳＫＰ15（第336図、図版126）

ＯＧ82グリッドに位置する。平面形は50×40cmの楕円形を呈し、深さは45cmである。土層断面には柱痕跡は確認されない。

ＳＫＰ51（第336図）

ＯＦ94グリッドに位置する。平面形は34×25cmの不整楕円形をなし、深さは34cmを測る。土層断面には柱痕跡は認められない。

ＳＫＰ44（第336図）

ＯＫ85グリッドに位置する。平面形は29×26cm不整形で、深さは26cmである。土層断面には柱痕跡は認められない。

(3)　焼土遺構

本調査区においては30基の焼土遺構を確認した。いずれもⅣ層上面もしくはⅤ層上面での検出であり、検出地点での被熱により当時の地表面が焼土化したものと判断される。その分布は遺物の集中地点と重なる傾向が認められる。焼土遺構には屋外炉と想定されるもののほかＳＮ77のように埋葬儀礼に関連する可能性があるものも存在し、個々の焼土遺構の性格は現状では明らかにし難い。

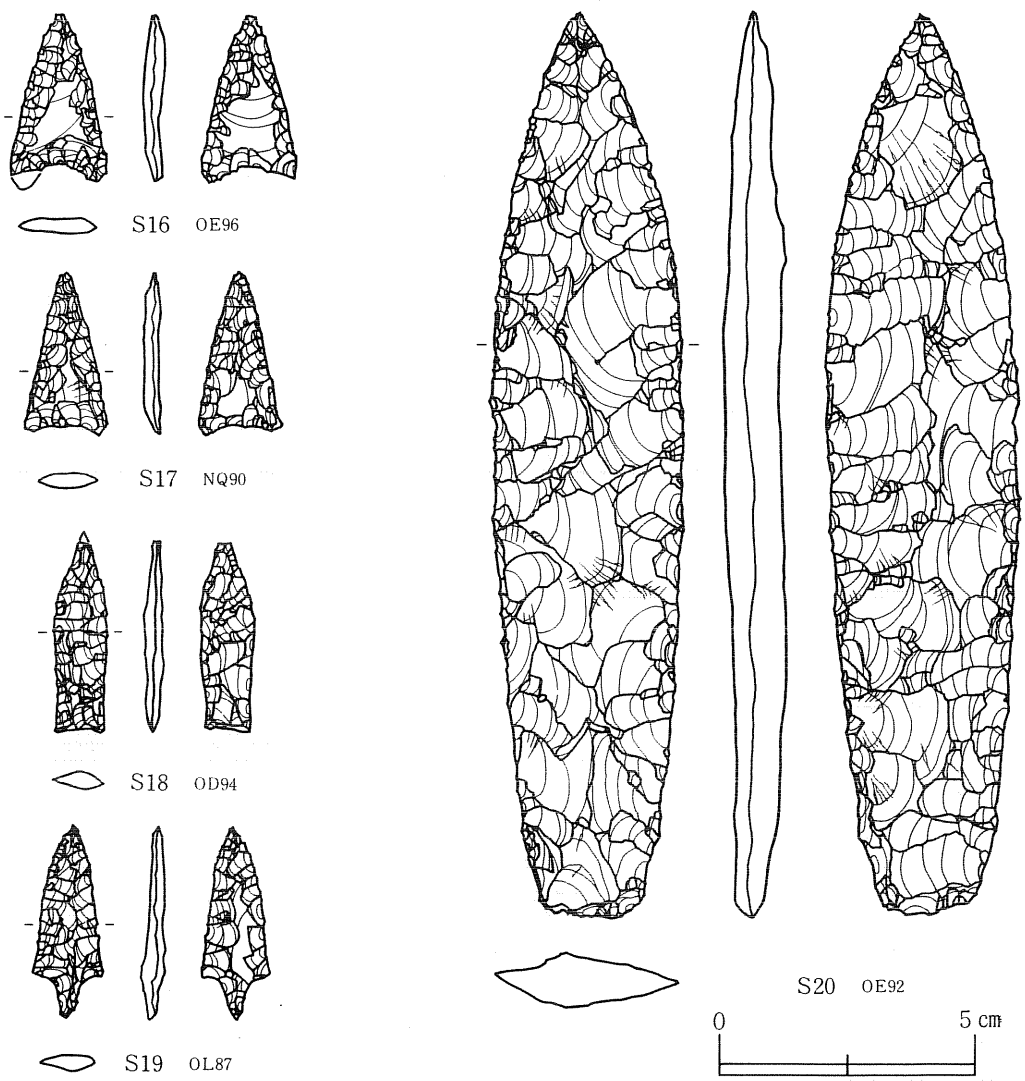
6　縄文もしくは弥生時代の出土遺物

(1)　石器（第337～353図）

以下においては遺構外出土でその所属時期を特定し難い石器類について記述する。石質は特記しない限り剥片石器・石核は頁岩、礫石器は凝灰岩である。

石鏃　S16・17は凹基無茎鏃である。両者とも表裏面に素材の剥離面を残している。S18は基部の抉りがほとんどない平基無茎鏃で、全体の平面形は細身の五角形を呈している。両面とも素材の剥離面を残さない。S19は平基有茎鏃で、片面に素材の剥離面を残している。

石槍　S20は両側縁が緩やかに外湾し、最大幅の位置は長軸中央よりも先端寄りである。基部は平坦に整形される。両面とも全面に平坦な二次加工が施され、素材の剥離面は残さない。



第337図　遺構外出土石器（１）

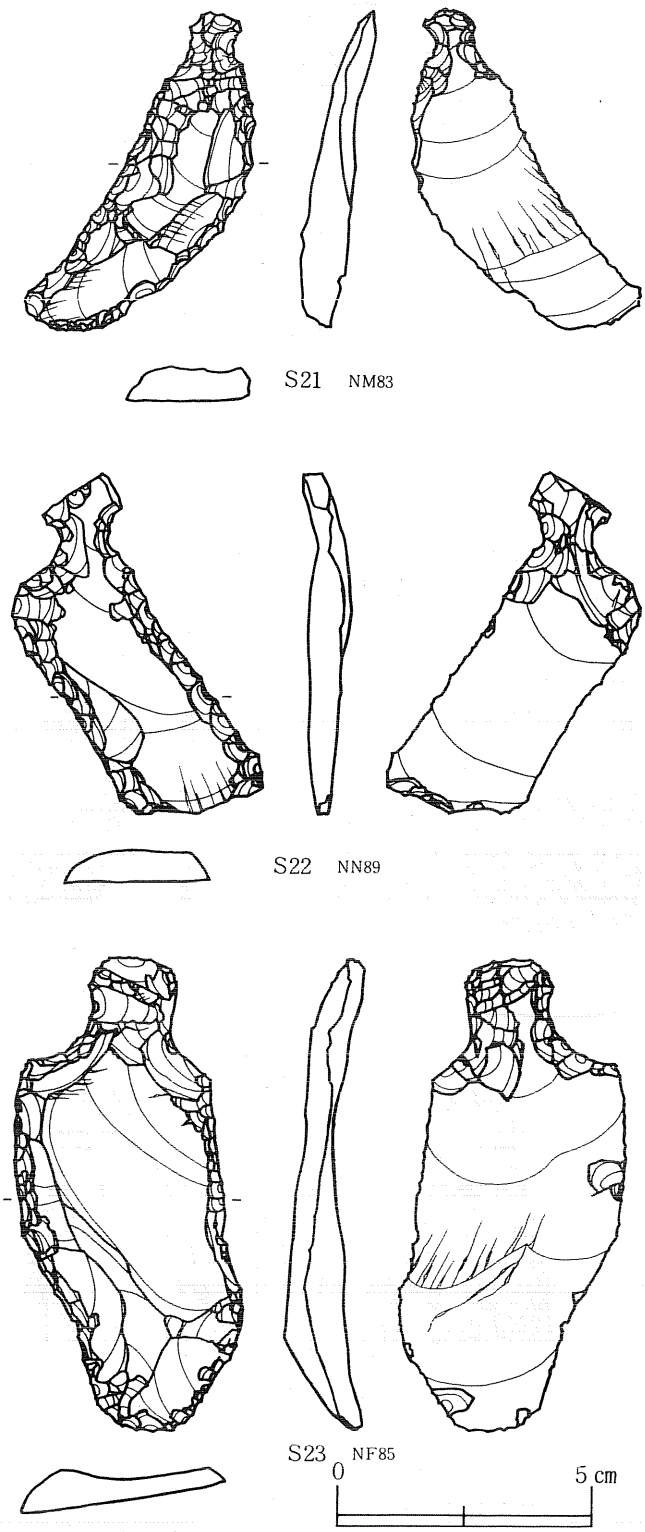
石匙　Ｓ21～23は縦長剥片を素材とし、打面側に両面からの二次加工によってつまみ部を作出した縦型石匙である。いずれも両側縁の表面側に二次加工を施し、刃部としている。

石篦　４点出土した。刃部の平面形はＳ24がやや斜刃であるほかはいずれも直刃である。平面形はＳ27が撥形を呈し、他は短冊形である。二次加工は素材の表面側は全面に及び、主要剥離面側は側縁部にとどまり、刃部には施されない。素材と刃部との関係をみると、Ｓ24・27は打面側に、Ｓ25は末端側に、Ｓ26は側縁側に刃部が作出され、両者の関係は多様である。

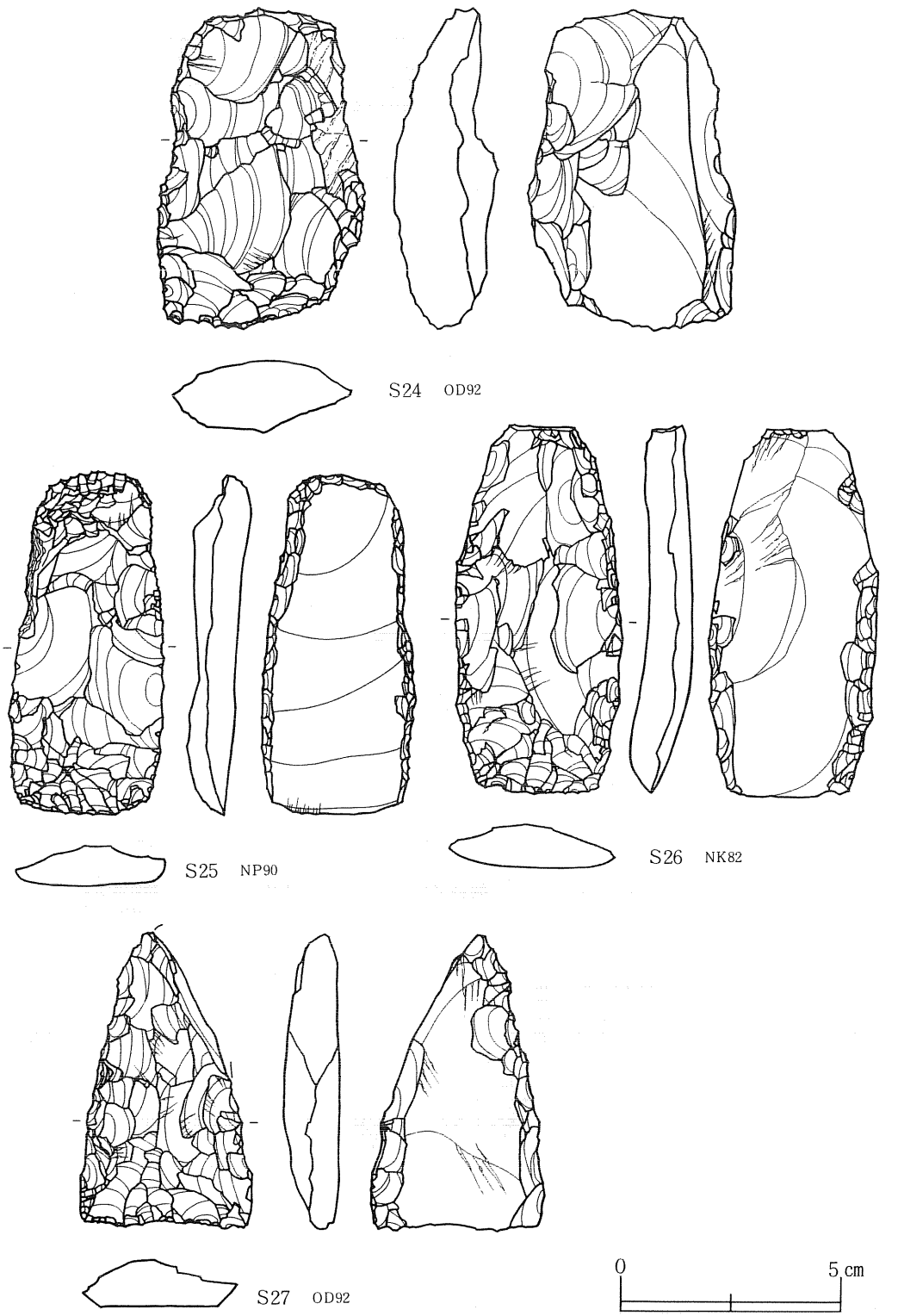
打製石斧　Ｓ28は厚手の縦長剥片を素材とし、撥形を呈する。二次加工は全面に及ばず、特に刃部は部分的に施されされるのみで、素材剥片の末端を大きく変形せずに利用している。

スクレイパー　ここでは剥片の縁辺に比較的細かい二次加工を連続して加え、刃部を作出したものを一括した。

Ｓ29はめのうを素材とし、両面とも全面二次加工が施されている。上端部を欠失するが、下縁部を刃部とみるといわゆる靴形石篦に類似した形態である。Ｓ30は横長剥



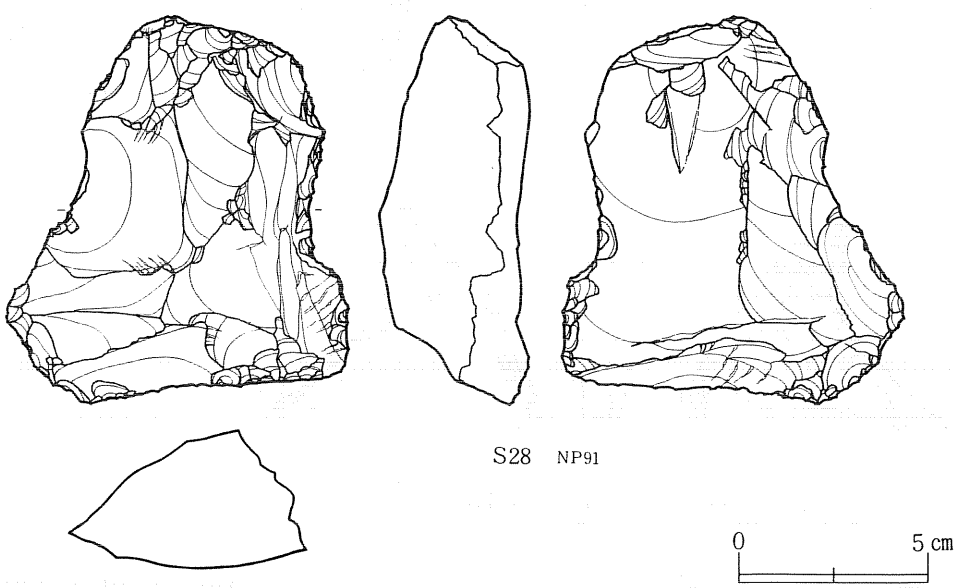
第338図　遺構外出土石器（２）



第339図　遺構外出土石器（３）

片を素材とし、表面の周辺に二次加工を施したものである。本例も一部を欠失するが、現状の形態は靴形石鎚に類似している。S31は剥片の末端の両側に二次加工を施し、刃部としたものである。刃部の反対側は両面からの二次加工によって棒状に整形されている。棒状部の一部にはアスファルトが付着しており、棒状部には柄が装着された可能性が推定される。S32〜36はいずれも縦長剥片を素材に一側縁の表面に連続して細かい二次加工を加え、刃部を作出している。素材剥片の形態は一定しないが、S35を除いていずれも剥離面打面を持ち、表面の先行剥離面の剥離方向はほとんどが裏面の主要剥離方向と一致している。S37は打面側を欠損する縦長剥片の主に表面側に二次加工を施し、両側縁および末端に連続的に刃部を作出したものである。S38・39は素材の一側縁に表裏両面から二次加工を施し、刃部を作出している。S38は打面を欠失するが、S39は剥離面打面を残している。S40は両側縁に両面からの二次加工が加えられ、刃部が作出されている。S41も両面からの二次加工によって刃部が作出されるが、本例では一側縁と末端縁とに刃部が作出されている。S42〜46は素材の剥片の末端縁に二次加工を施し、刃部を作出したスクレイパーである。S42・43は横長剥片の表面に二次加工を施し、若干の凹凸ある刃部を作出する。S44は素材表面への二次加工によって円形の刃部を作り出している。S45は横長剥片の末端に表面から急角度の二次加工を加え、刃部を作出する。裏面打面側は一部被熱によって剥落している。S46は打面側を折損するが、縦長剥片を素材とするとみられ、裏面に二次加工を施し、刃部を作出している。

楔形石器　S47は素材剥片の両側に階段状剥離痕を残す。素材打面側は急角度の剥離によって除去されている。図の上端側の縁辺には若干のつぶれの痕跡がある。S48は素材剥片の両側

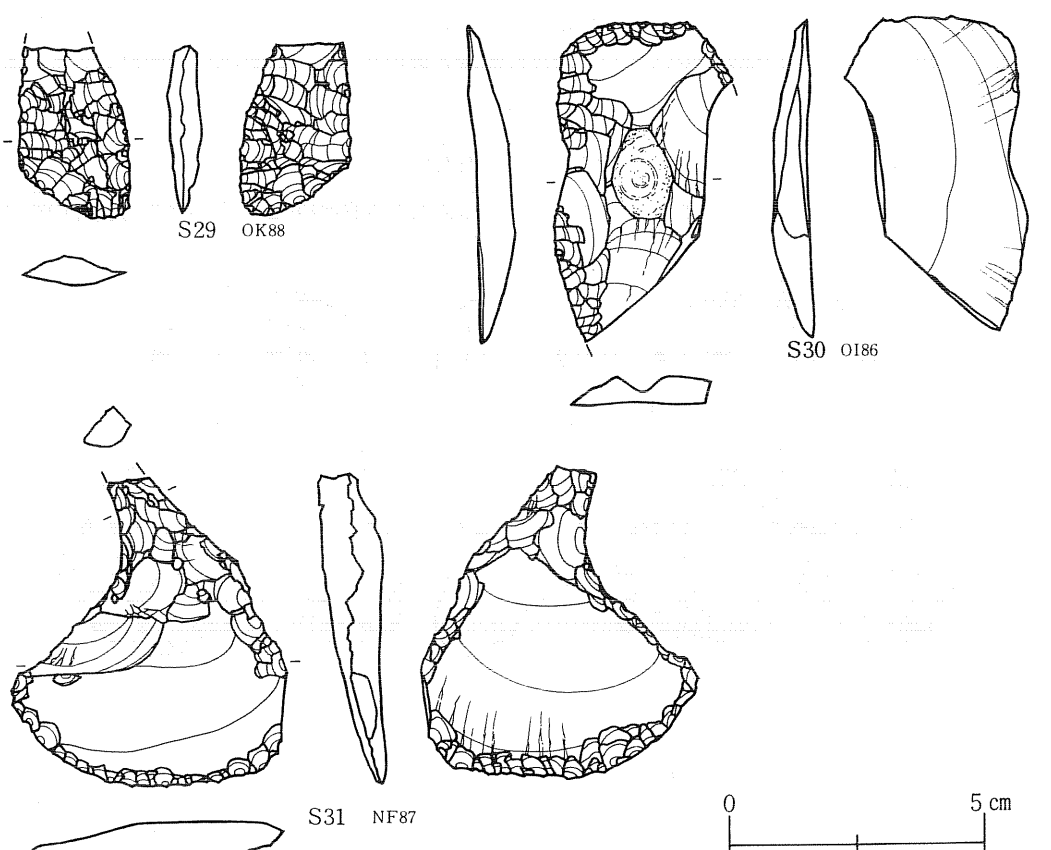


第340図　遺構外出土石器(4)

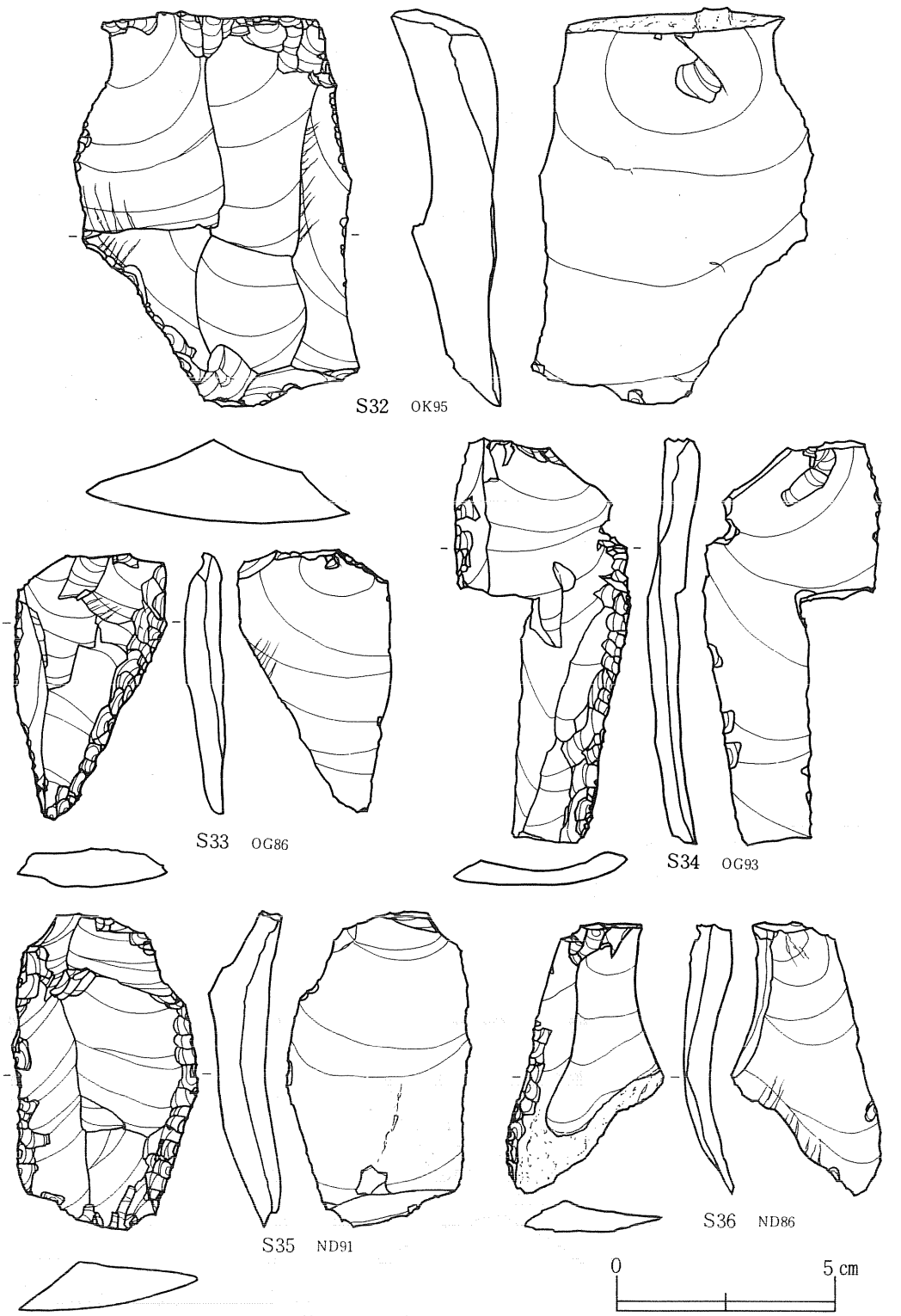
に階段状剥離痕を残す。素材の打面側は側縁側からの加撃によって截断状に断ち切られている。S49は小形の縦長剥片の上下両端に階段状剥離痕を残す。打面側の縁辺はつぶれている。

二次加工ある剥片　ここでは二次加工が加えられた剥片のうち、上述の剥片石器に含められないものを一括する。

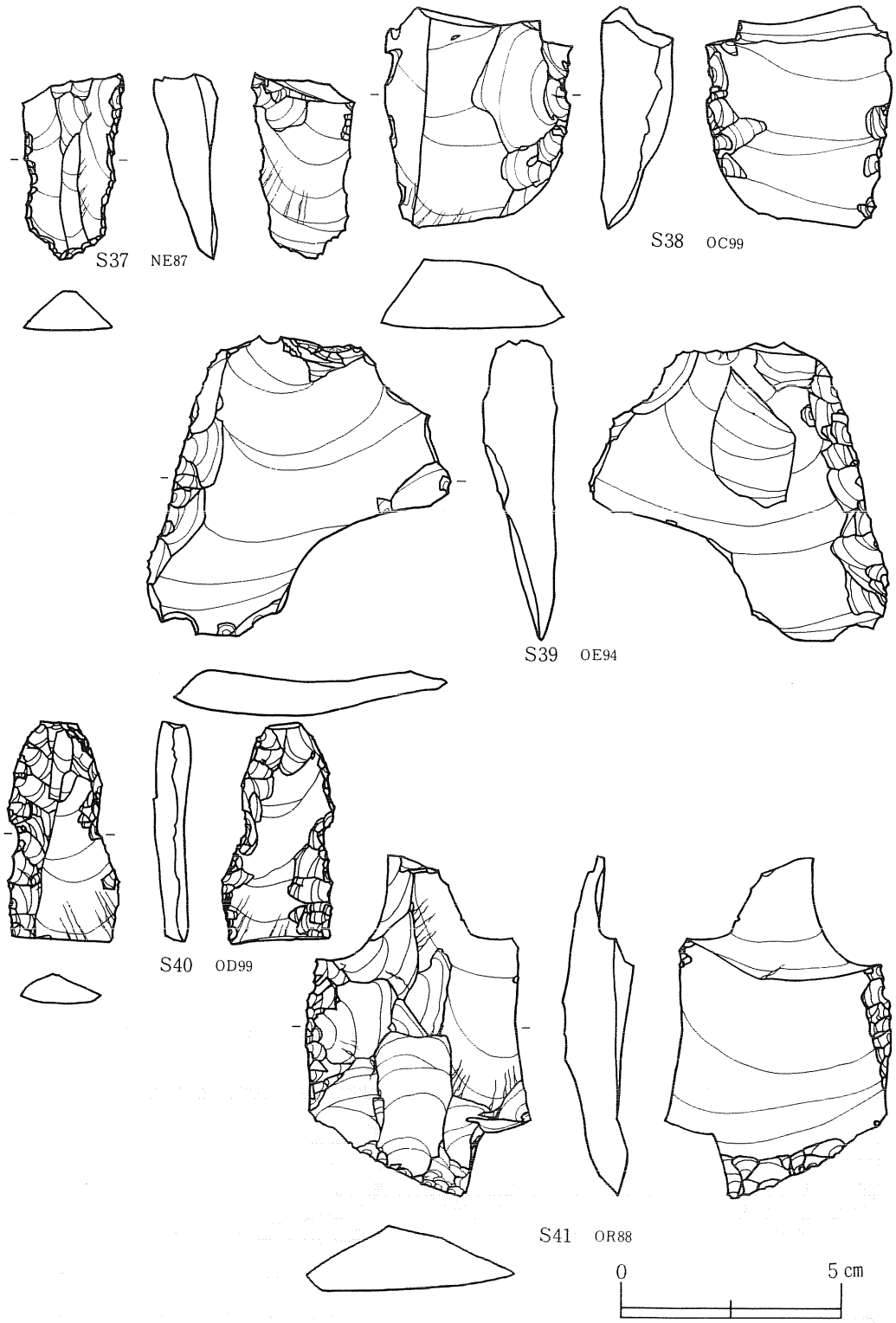
S50は縦長剥片の表面の一側縁に比較的大形の剥離による二次加工を施したものである。二次加工部分の縁辺の角度は鈍く、上述のスクレイパーの刃部とは差がある。S51は節理面を打面とする石刃状の剥片を素材とする。主に裏面の打面付近の一側縁に二次加工が施されている。両側縁には微小剥離痕が顕著である。S52は剥離面打面をもつ大形の縦長剥片を素材とする。裏面の一側縁に部分的に二次加工が存在するが、連続的ではなく、明確に刃部を形成するまでには至っていない。一方、二次加工が加えられた側縁と反対側の側縁には微小剥離痕が残存する。S53は二枚の剥離面からなる打面を有する剥片の表裏の一部に二次加工が施される。S54は素材の形状は不明確であるが、一側縁の一部を除き、全周に比較的大形の剥離による二次加工が施されている。図の下端は折れ面である。S55は二枚の剥離面からなる打面をもつ剥片を素材とする。表面の左側縁の下端に顕著な階段状剥離痕が存在するが、二次加工は主に裏面の



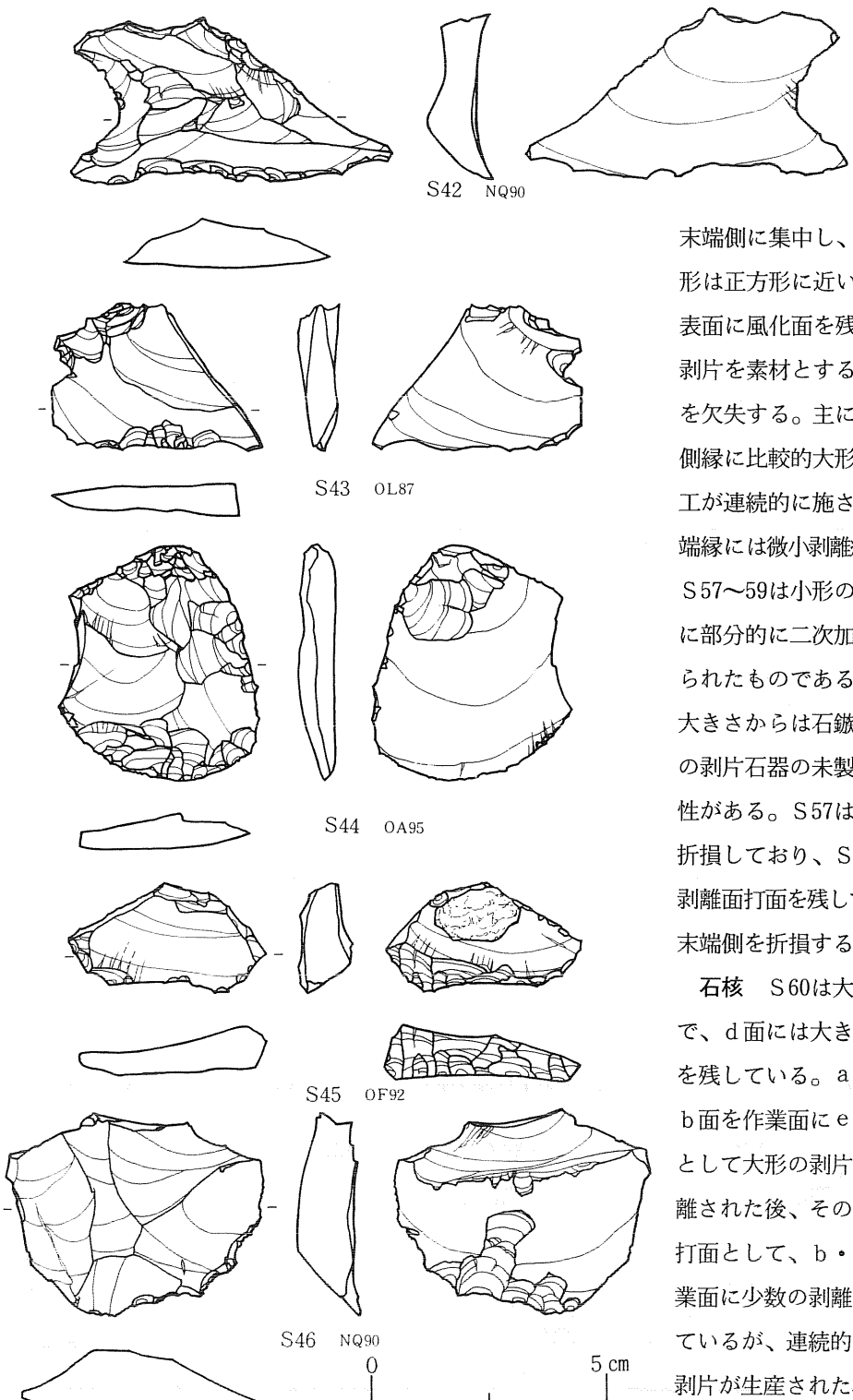
第341図　遺構外出土石器(5)



第342図　遺構外出土石器（６）



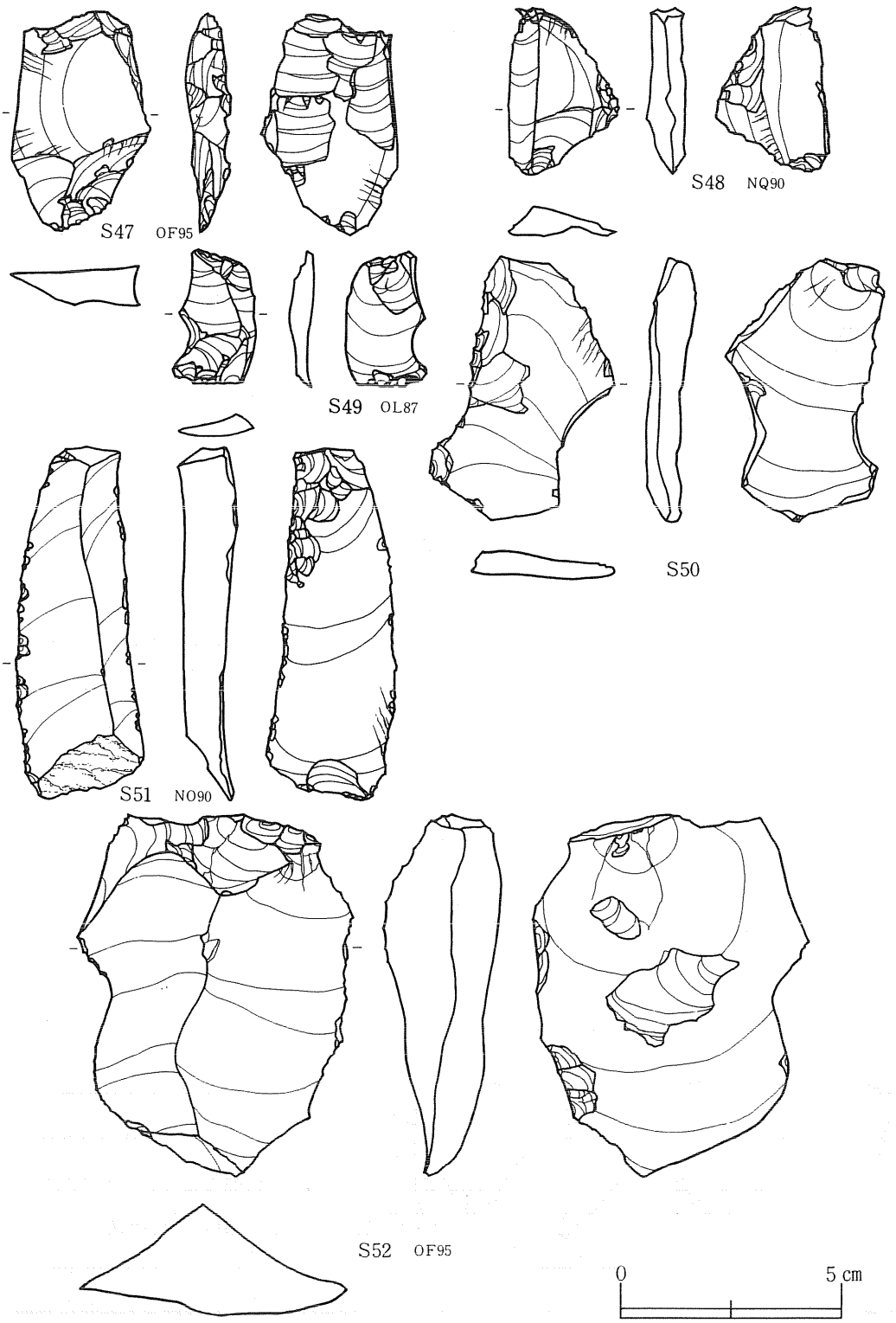
第343図　遺構外出土石器（７）



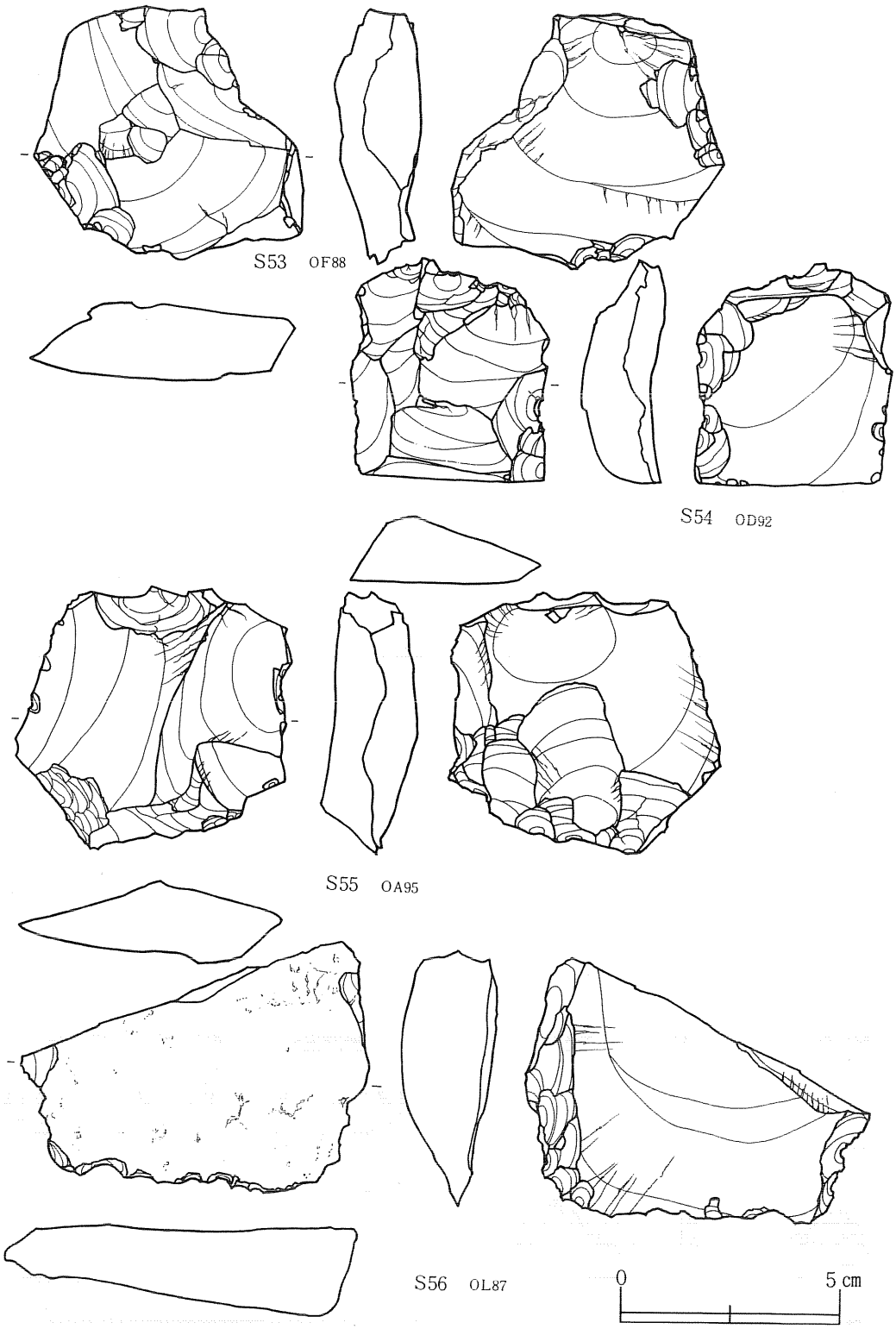
第344図　遺構外出土石器（８）

末端側に集中し、全体の器形は正方形に近い。Ｓ56は表面に風化面を残す大形の剥片を素材とする。打面側を欠失する。主に裏面の両側縁に比較的大形の二次加工が連続的に施される。末端縁には微小剥離痕が残る。Ｓ57～59は小形の横長剥片に部分的に二次加工が加えられたものである。素材の大きさからは石鏃等の小形の剥片石器の未製品の可能性がある。Ｓ57は打面側を折損しており、Ｓ58・59は剥離面打面を残しているが、末端側を折損する。

石核　Ｓ60は大形の石核で、ｄ面には大きく自然面を残している。ａ面およびｂ面を作業面にｅ面を打面として大形の剥片が数枚剥離された後、その剥離面を打面として、ｂ・ｄ面を作業面に少数の剥離がなされているが、連続的に良好な剥片が生産された状況は認



第345図　遺構外出土石器（９）



第346図　遺構外出土石器(10)

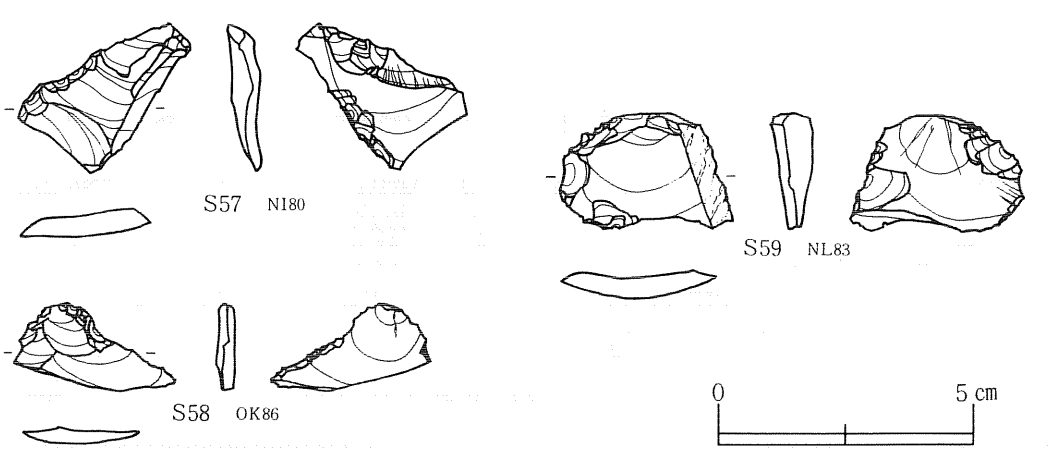
められない。S61は主にa面を作業面として、周囲から数枚の剥片が生産される。他面の剥離は石核整形のためのものと思われる。S62は最終段階の剥離はいずれもa面上方の剥離面を打面とし、a面およびb面を作業面として剥片が生産されている。a面下方の横方向からの剥離は上方からの剥離に先行するとみられるが、その性格は不明瞭である。S63はb面下半に自然面を残し、b面上半の剥離痕からは良好な剥片が生産されたとはみられない。目的的な剥片は主にa面を作業面として、周囲から求心的に打点を移動しながら生産されたものとみられる。その際の打面は剥離面と自然面とが混在する。また打点周辺には細かい階段状剥離痕が認められるものも存在する。S64は基本的に作業面と打面とを交互に入れ替えながら、打点が求心的に移動するものである。S65は基本的に打点がf面の周囲を移動し、最終的に剥離の末端がa面下端に集中する傾向が認められる。f面の大形の剥離面は打面再生を目的とする可能性がある。また打点を残す剥離面は一般に打点周囲に階段状剥離痕が顕著である。

敲石　S66は棒状礫の両端に敲打痕を残す。

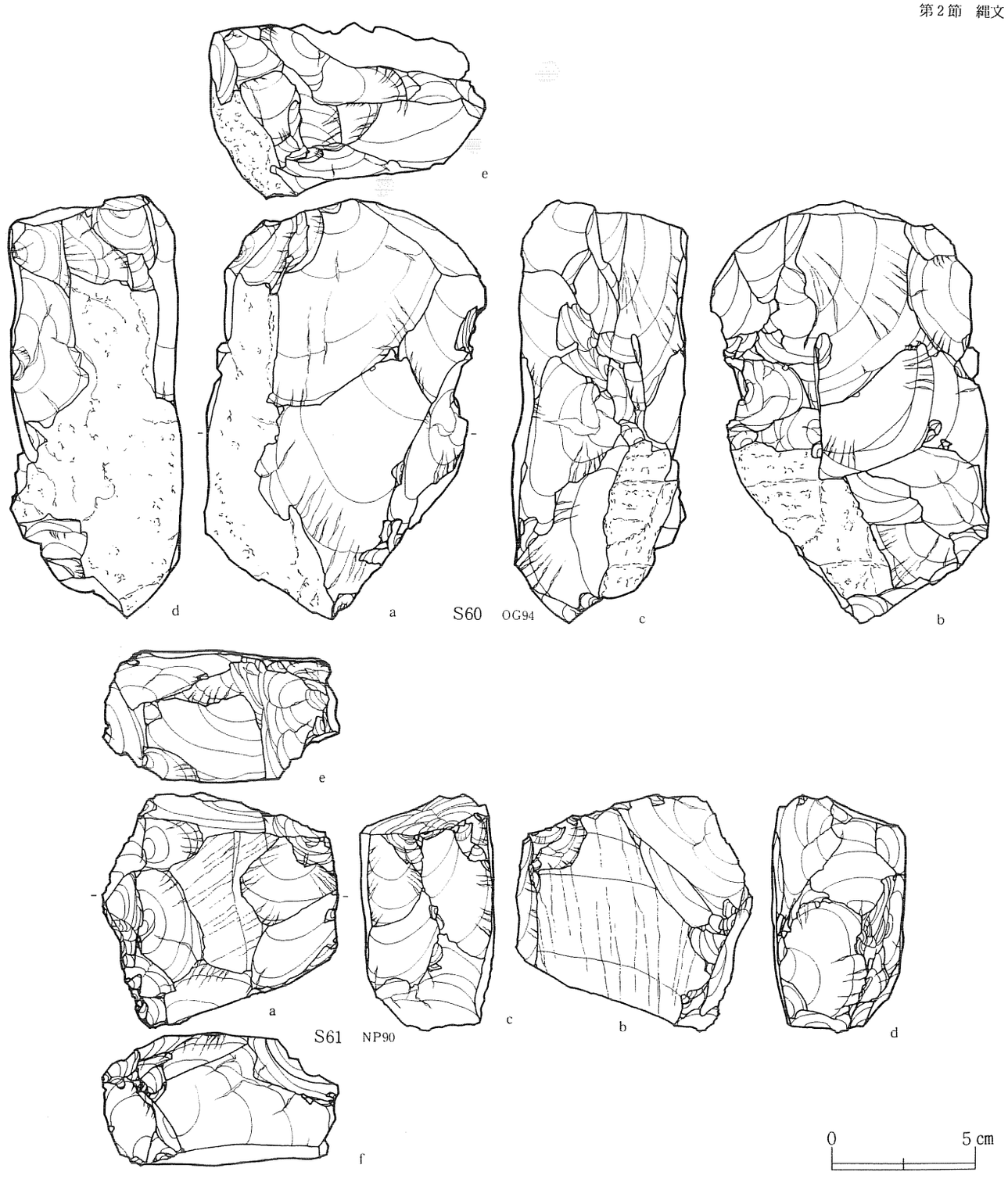
凹石　S67～81は凹石である。S67・69・71のように円礫～亜角礫を素材とするものもあるが、多くは棒状の礫を素材としている。多くは手に持って使用されたとみられるが、S71は大形で、固定されて使用されたものであろう。凹石の凹みには片面のみに存在するもの（S67～71・80）、片面と側面にあるもの（S72・78）、両面にあるもの（S73～78・81）とがある。このうちS76は両面の凹みが比較的平滑な面となっており、他の凹みがあばた状を呈するのとはその状態を異にしている。またS79～81は磨面も合わせもっている。

磨石　S82は亜角礫の一面に磨面を、S83は円礫の両面に磨面を有する。S84・85は横断面が三角形を呈する細長い亜角礫の長軸に沿う稜の部分を加撃・整形し、その部分に幅2㎝前後の細長い磨面を作出したものである。S86はこの種の磨石の未製品の可能性があろう。

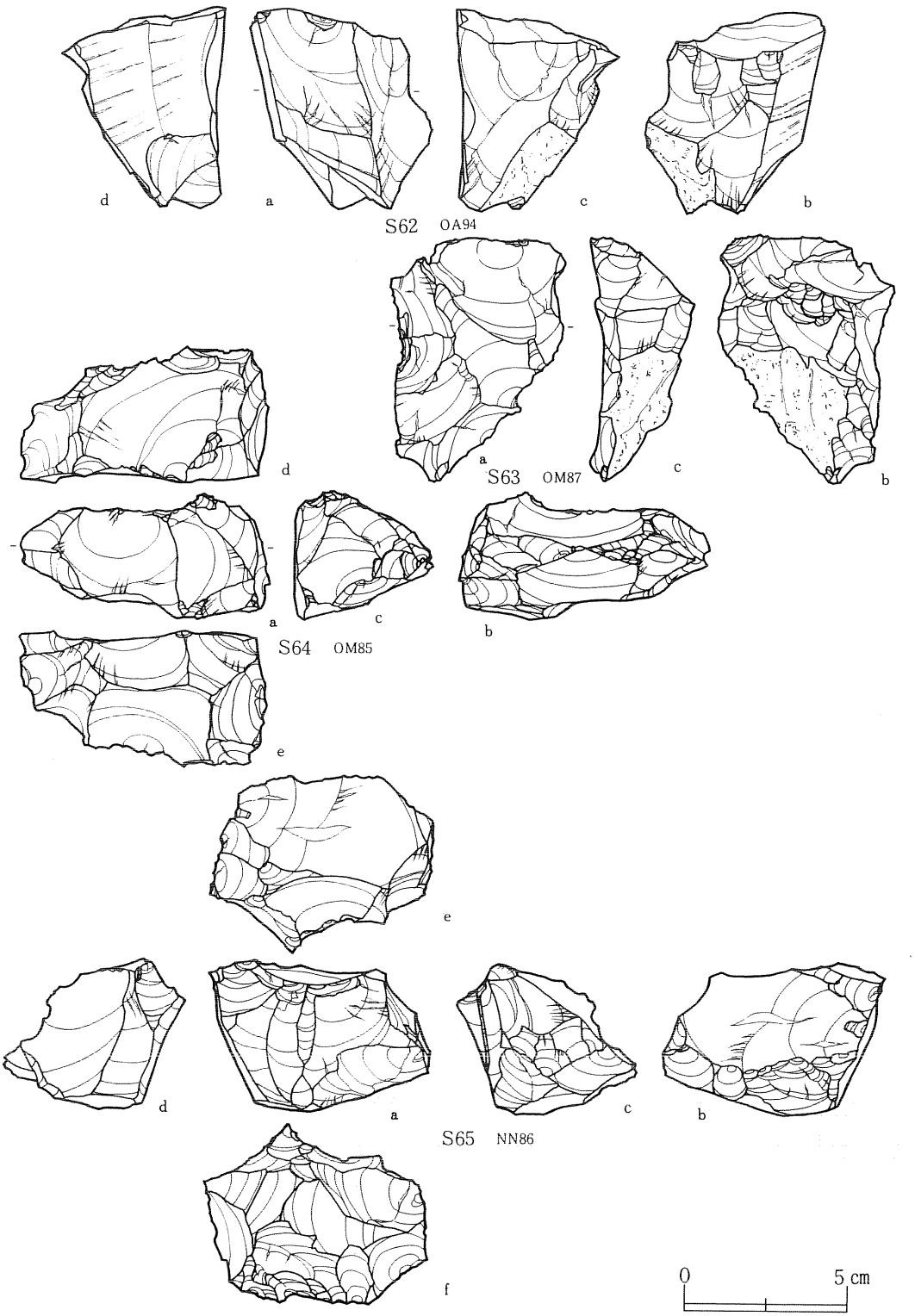
石皿　いずれも扁平な大形礫を利用したもので、全体に磨面の凹みは浅い。



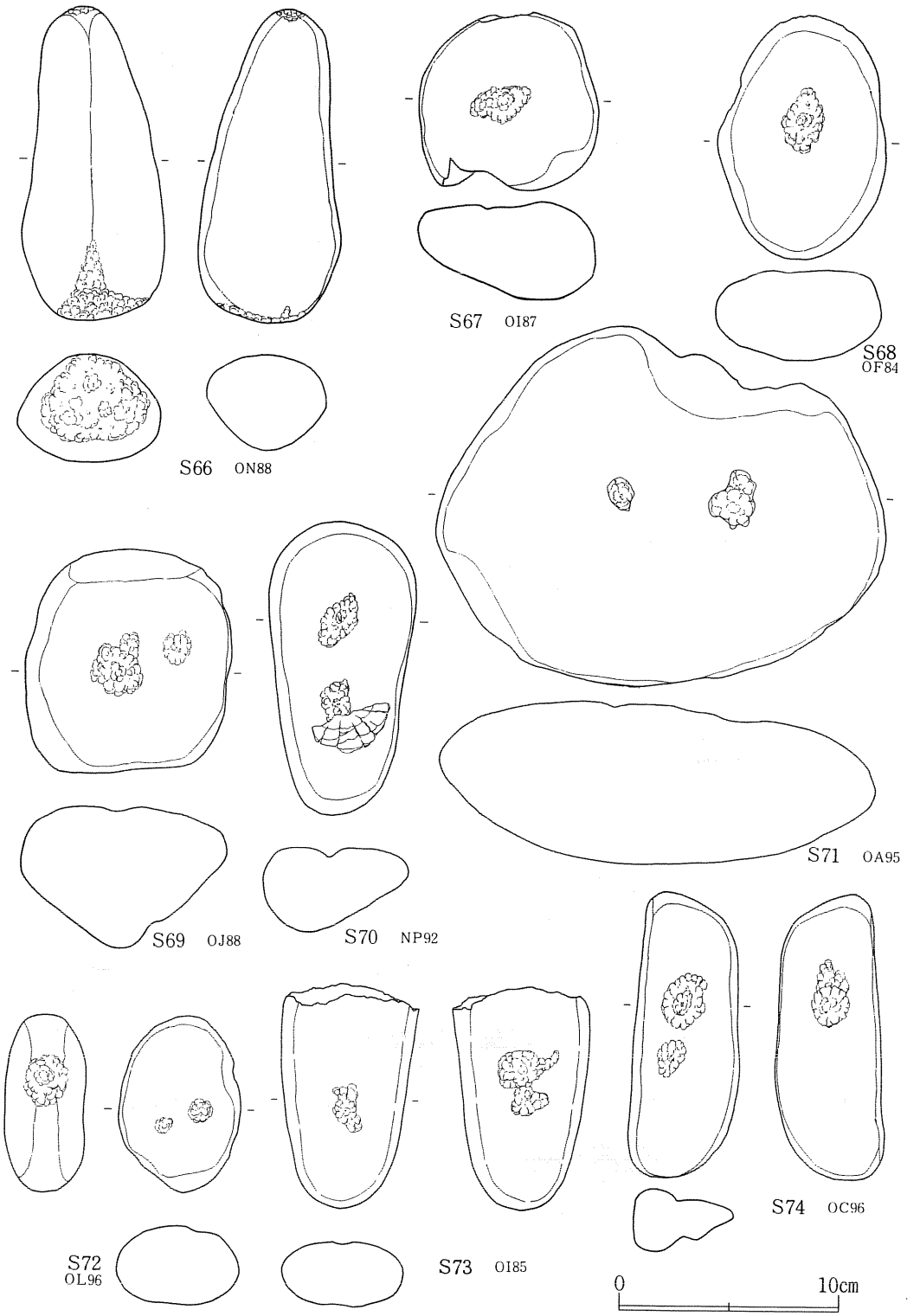
第347図　遺構外出土石器(11)



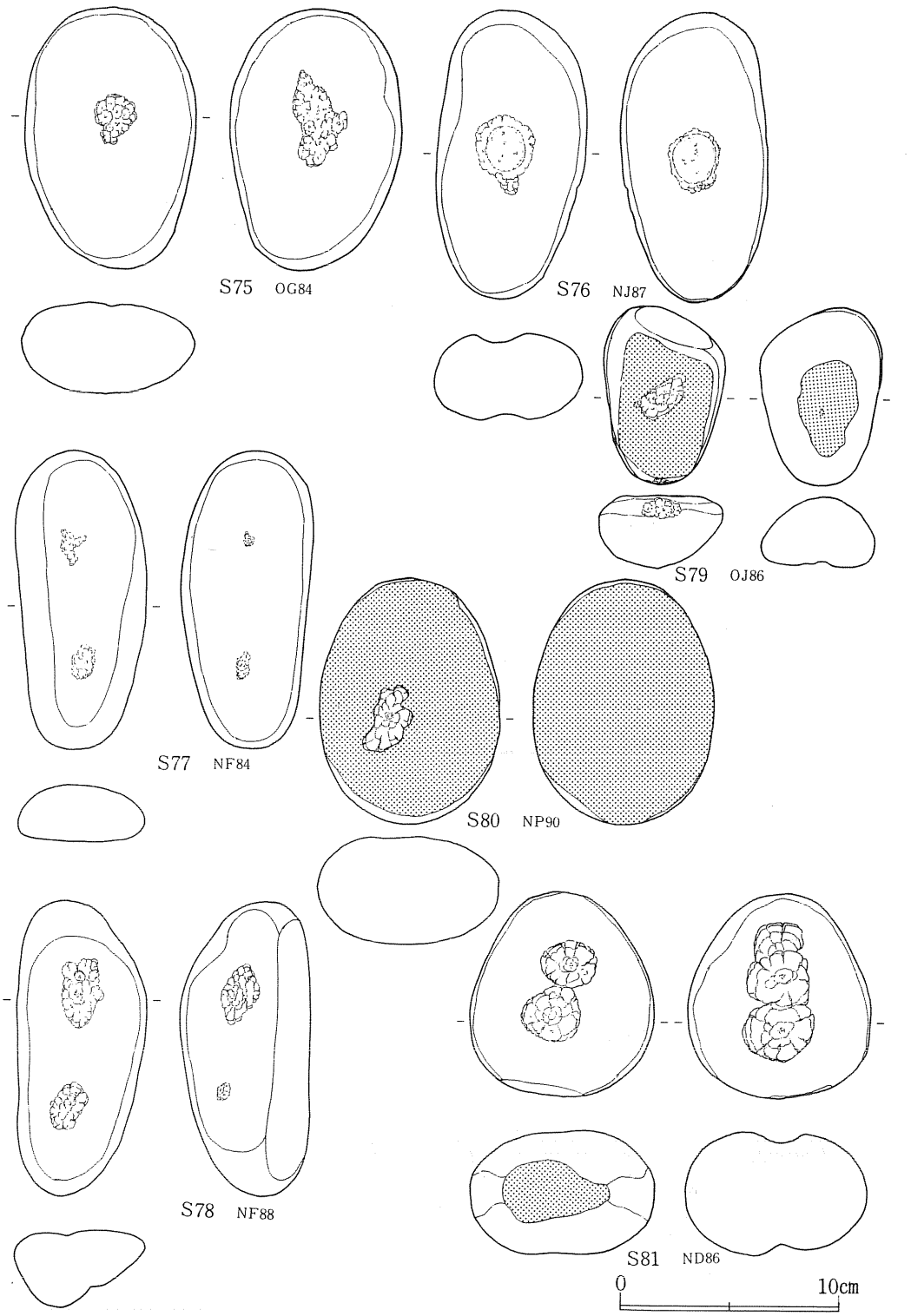
第348図　遺構外出土石器(12)



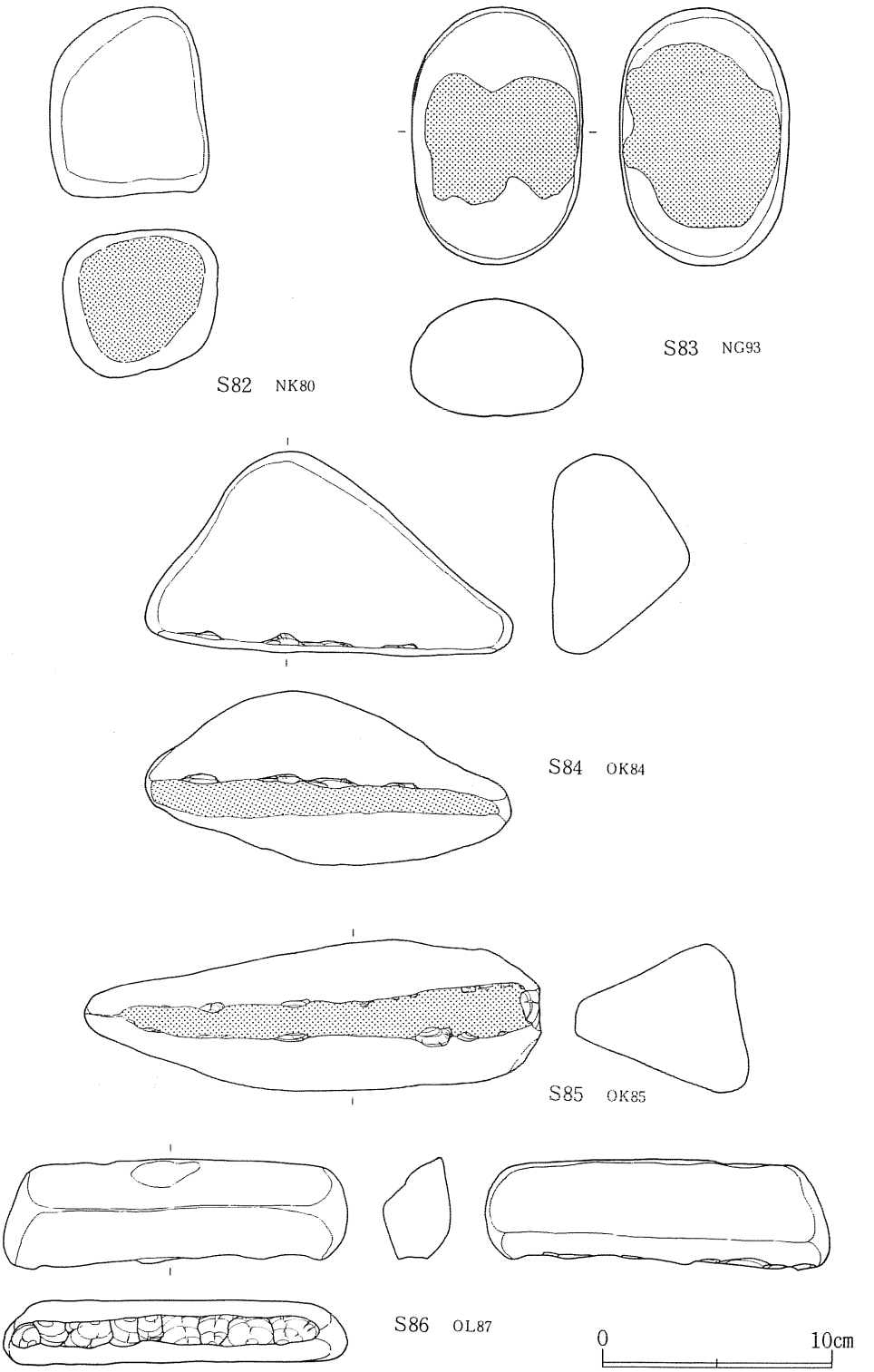
第349図　遺構外出土石器(13)



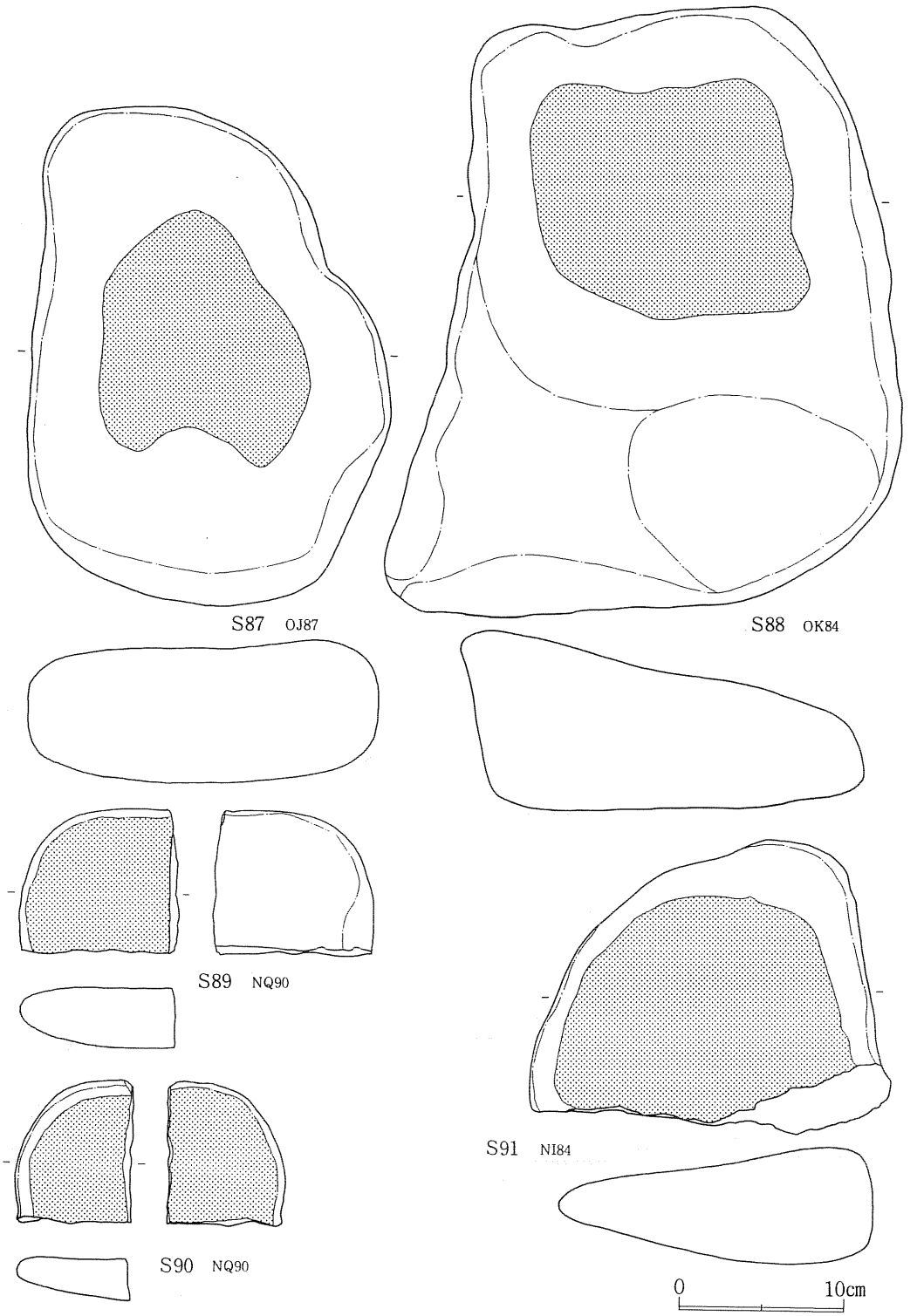
第350図　遺構外出土石器(14)



第351図　遺構外出土石器(15)



第352図　遺構外出土石器(16)



第353図　遺構外出土石器(17)

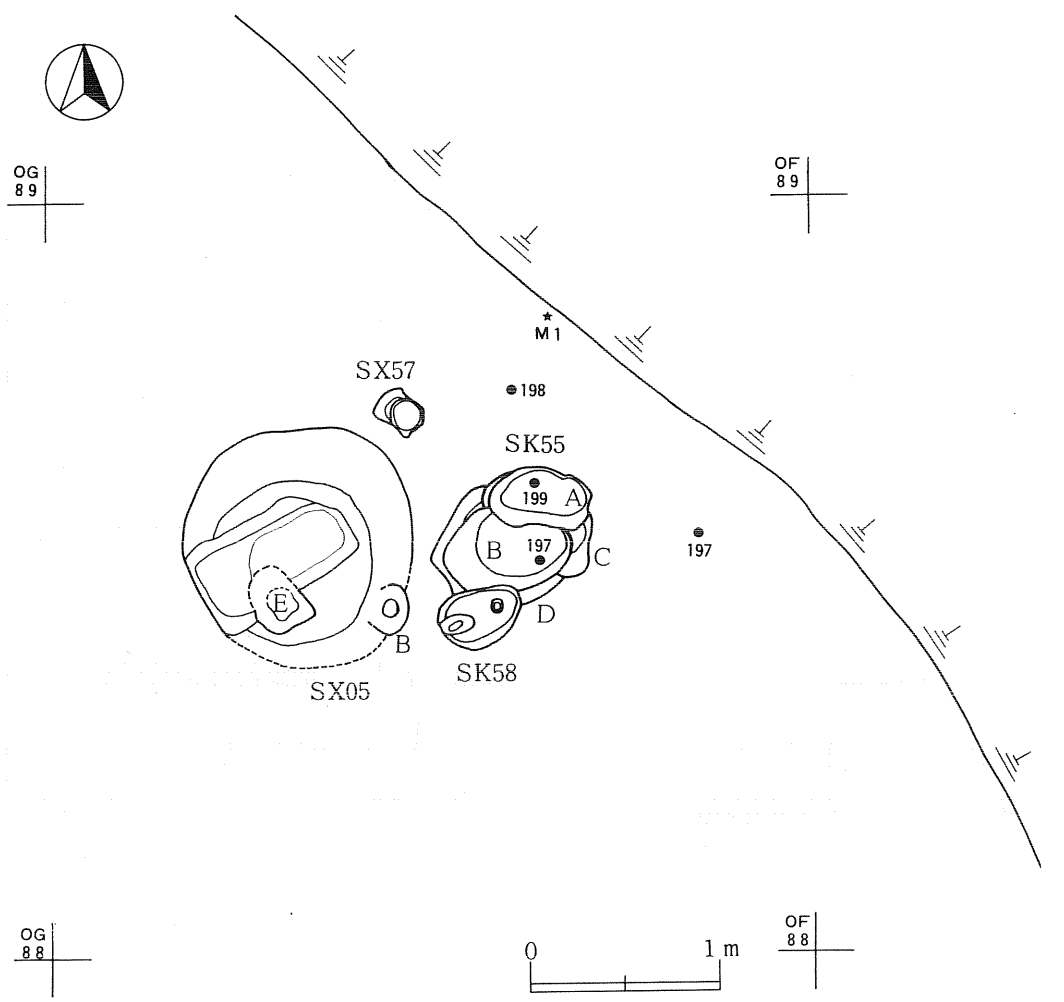
第３節　古代以降の遺構と遺物

１　古代以降の検出遺構と遺物

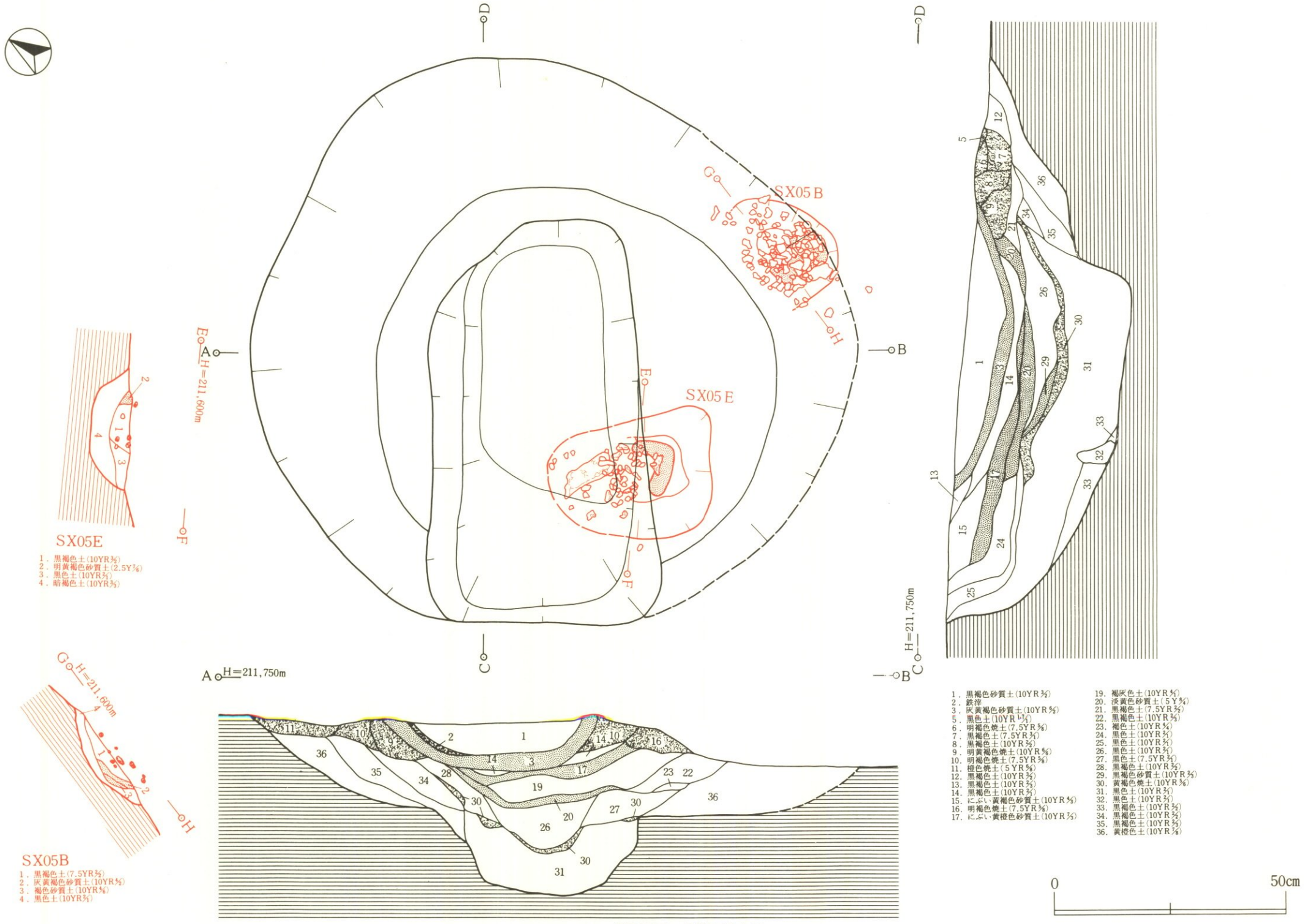
ここで扱う遺構は大湯浮石降下以後に形成されたものであるが、いずれも時期決定が可能な共伴遺物を欠き、その時期を特定できない。遺構は鍛冶関連遺構（ＳＸ05・57・ＳＫ55・58）、炭焼成遺構（ＳＫ10・59・60）、性格不明の土坑（ＳＫ08）とに分かれる。このうち、鍛冶関連遺構は鍛冶炉の形態がＡⅡ区のそれと類似し、古代に属する可能性が強い。

(1)　鍛冶関連遺構

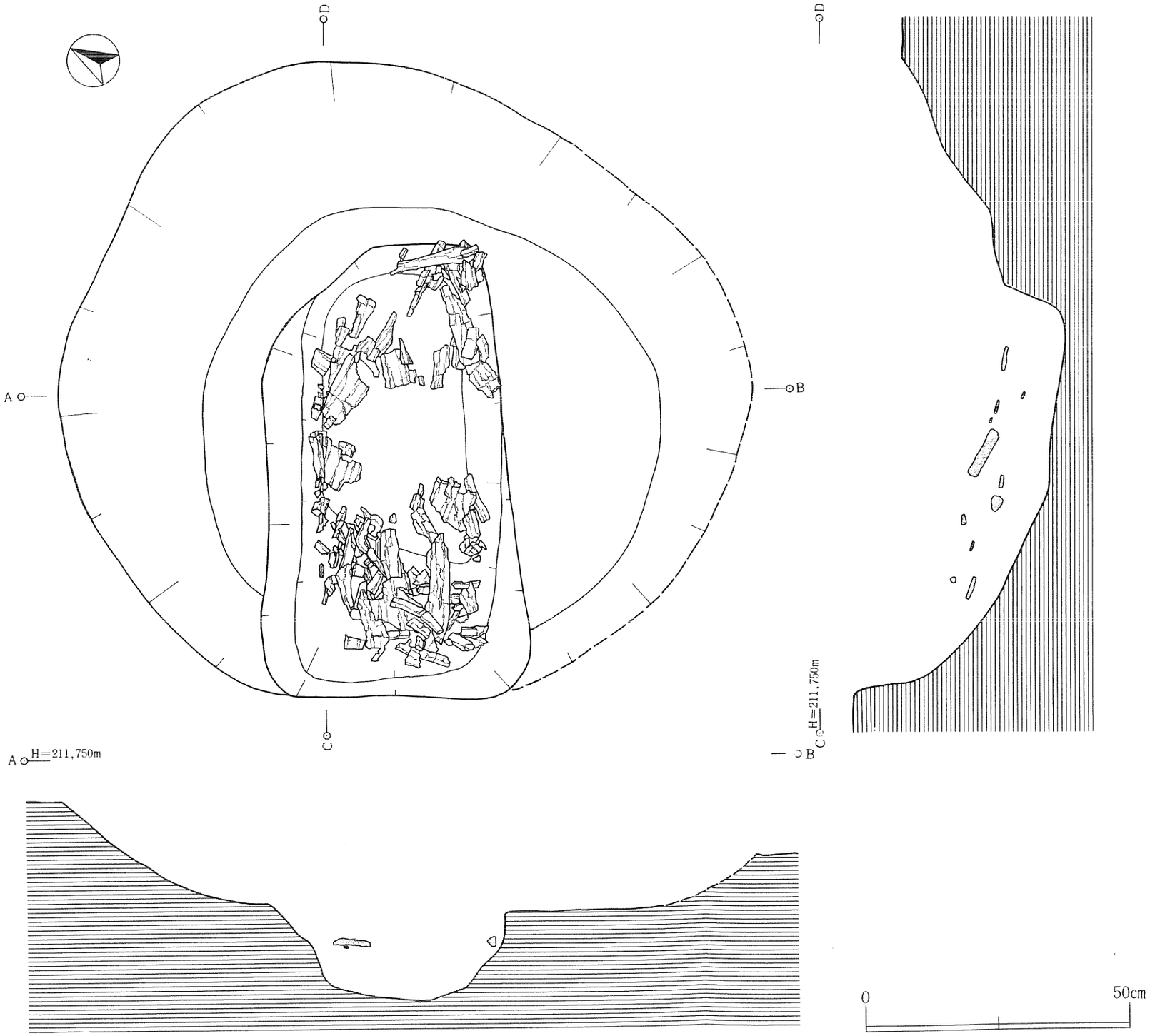
本遺構群は大小の鍛冶炉（ＳＸ05・57）と鉄滓・鍛造薄片・鉄床片等を含む土坑群（ＳＫ55・58）とからなる。いずれもＯＦ88グリッドに位置し、調査区中央を南北に走る開析谷を東に望む谷際の平坦面に立地している（第354図）。遺構群周辺ではⅢ層は削平されており、Ⅳ層上



第354図　鍛冶関連遺構配置図

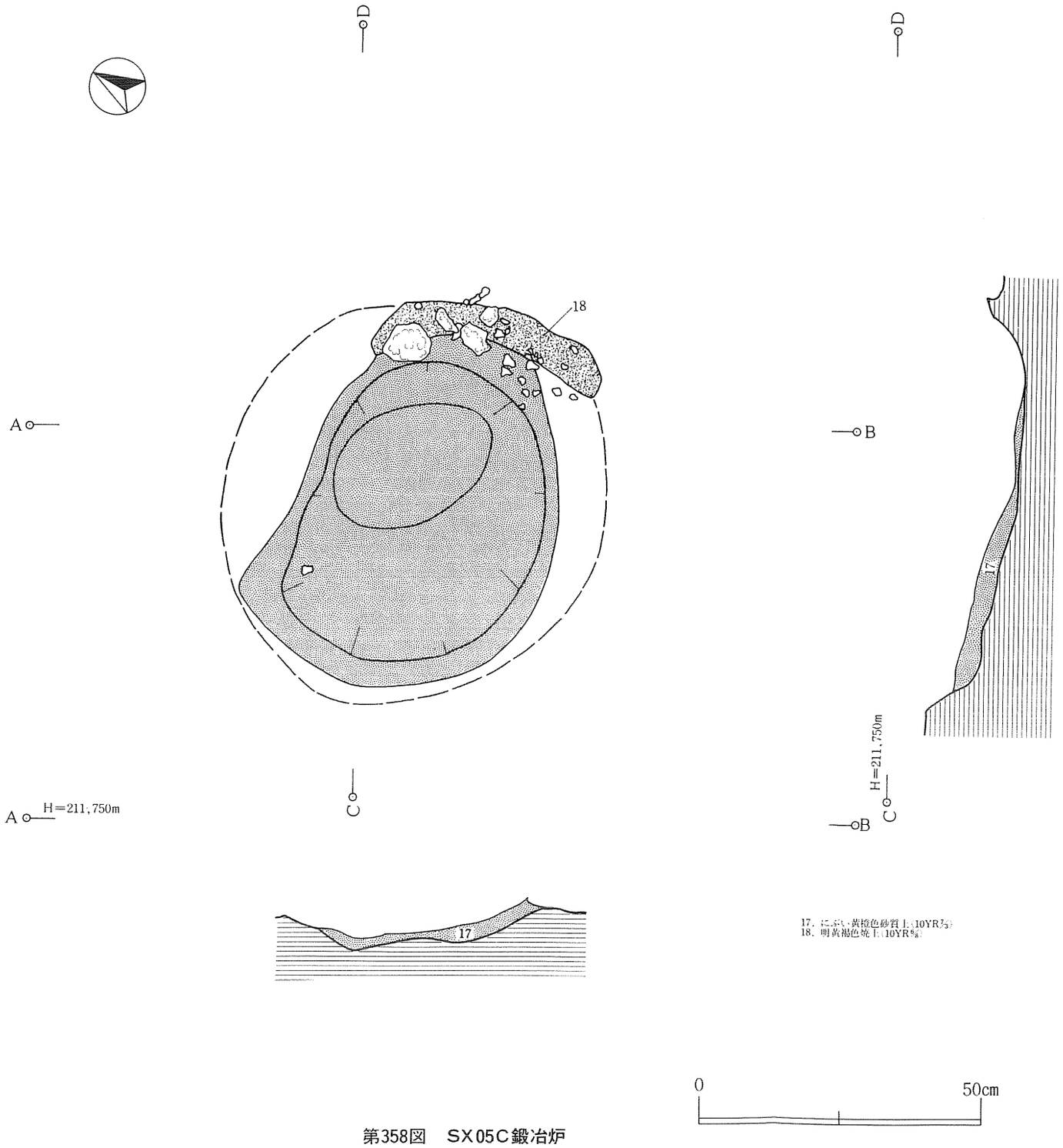


第355図　SX05鍛冶炉

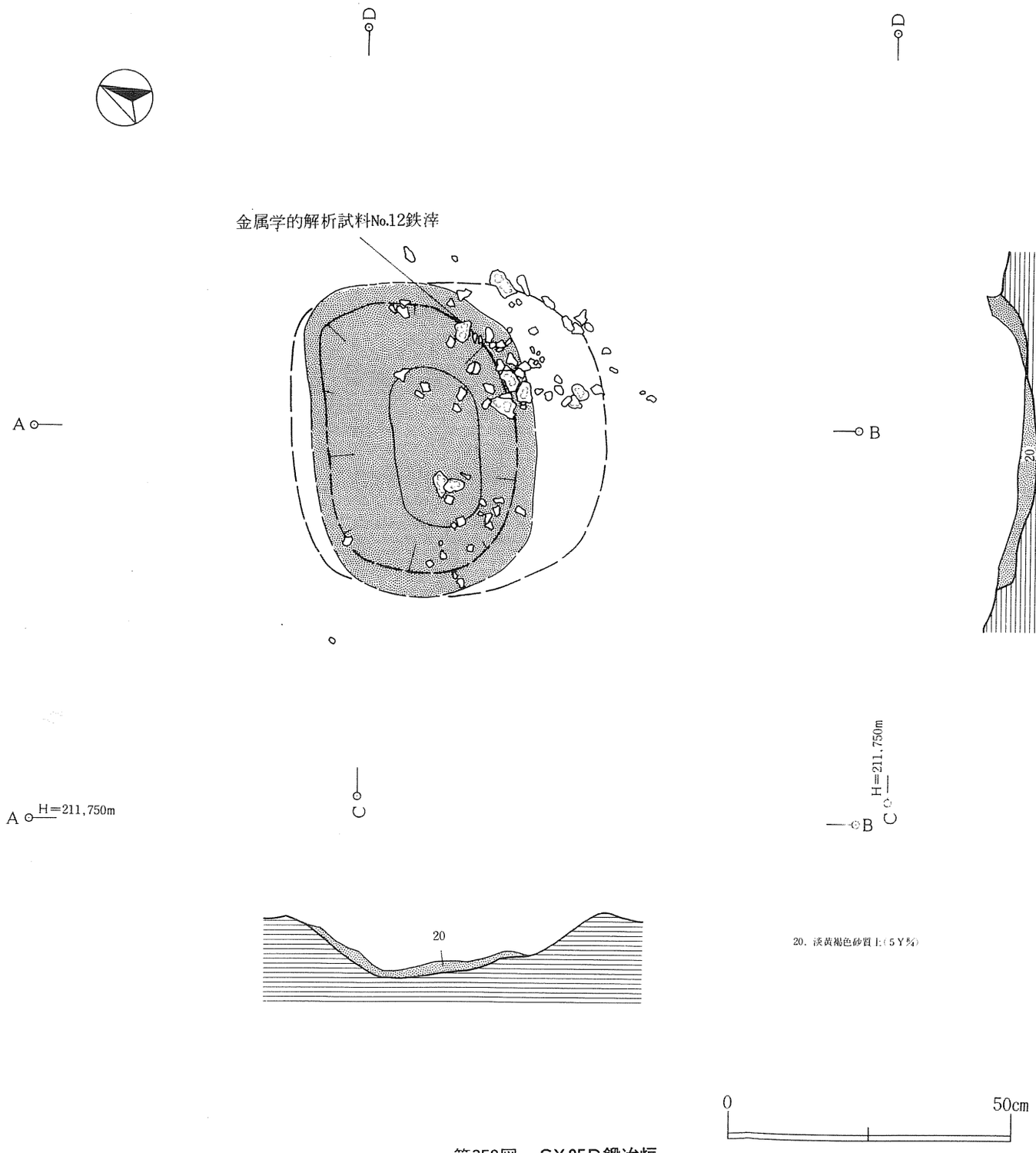


第356図　SX05鍛冶炉炭化材検出状況

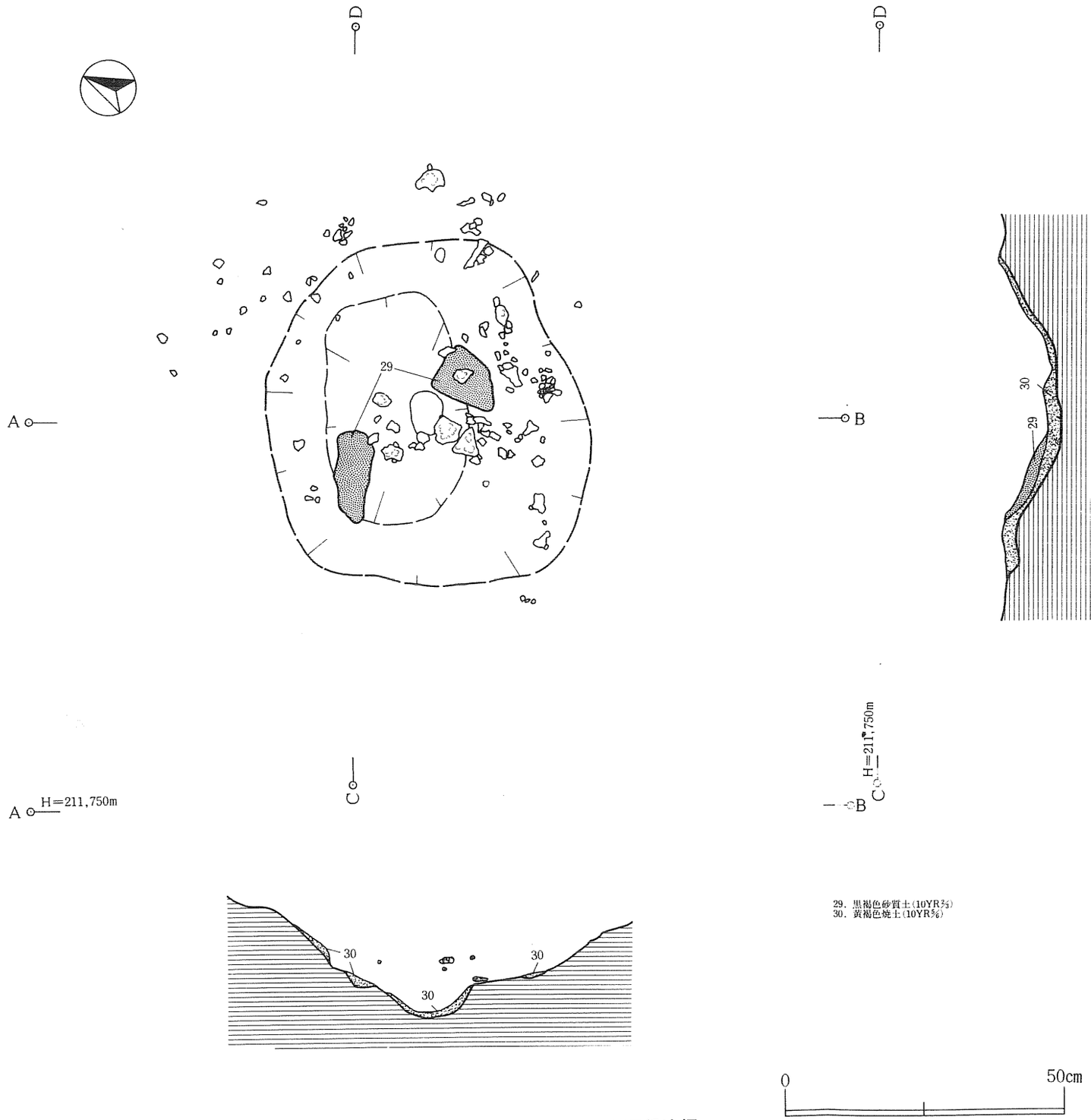
第357図　SX05A鍛冶炉



第358図　SX05C鍛冶炉



第359図　ＳＸ05Ｄ鍛冶炉



第360図　SX05F鍛冶炉

面が遺構確認面である。本遺構群の周囲からは柱穴等は検出できず、上屋の存在は確認できなかった。周辺のⅠ～Ⅱ層中からは大量の鉄滓が出土しているほか、鞴羽口片・刀子も出土している（第354・366図）。197～199は推定内径が３cm前後の小形の鞴羽口である。Ｍ１は現状で長さ9.7cm、刃幅1.9cmを測る刀子である。不均等関で、茎は幅0.4cm前後と細身である。

ＳＸ05（第355～360図、図版127）

本遺構は最終操業時の炉内法が長軸55cm、短軸39cm、深さ８cmを測る相対的に大形の炉と炉内法が径20cm内外の小形の炉２基とが切り合ったものである。

前者は土層断面の観察から４枚の還元化した操業面を認めることができ（３・17・20・29層）、最底４度の操業がおこなわれたことが推定できる（ＳＸ05操業面Ａ・Ｃ・Ｄ・Ｆ）。さらに下部には炭化材を埋設した防湿施設が存在する（第356図）。

本炉の構築と操業は現状からは以下のように推定される。まず、径130cm前後、深さ約18cmの擂り鉢状の土坑を掘り、内面に粘土（35・36層）を貼り付けた後、空焚きする。この際に焼土化したのが、35層である。次に土坑底の中央に長軸87cm、短軸51cm、深さ16cmの箱形の土坑を坑ち、その中に炭化材を埋設する。さらにその上に粘土を貼り付け（30層）、空焚きする。その後炉内面に粘土を貼り付け、最底４度の操業がおこなわれる。この際に順次操業面Ｆ（29層）、同Ｄ（20層）、同Ｃ（17層）、同Ａ（３層）が形成されている。

掘り下げ時には各操業面の一部が面的にも確認でき、操業面Ｃに伴う酸化した炉壁の一部（18層）も検出した。本炉の内面の形態は各操業面とも基本的に楕円形プランの擂り鉢形をなし、いわゆる湯口をもたない。また、炉壁材は周辺ではほとんど認められないことから、壁は確認面からはほとんど立ち上がらないものと推定される。最終操業面のＡでは赤変した炉壁が西南側と北側の一部で認められず、前者は炉内生成物の取り出し部、後者は鞴羽口の装着部の可能性が推定される。以上の構造から本炉は製錬炉でなく、鍛冶炉と考えられる。また、13層・29層などには大湯浮石が混在することから、本遺構は大湯浮石降下後の構築と判断できる。

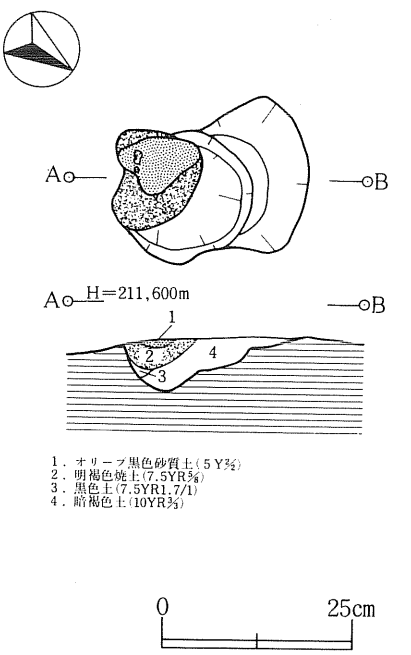
一方後者の小形の炉（ＳＸ05Ｂ・Ｅ）は共に浅い椀形をなし、ＳＸ05Ｂが炉内法が径16cm前後、深さ３cmを、ＳＸ05Ｅが径20cm前後、深さ４cmを測る。これらの炉は後述するＳＸ57と基本的に共通する構造を有するもので、いずれも炉内面よりも若干大形の土坑を掘り込み、黒色土もしくは褐色土を土坑内面に入れ、さらに粘土を貼り付け、操業面を構築している。ただし、ＳＸ05Ｅは大形の炉のＳＸ05Ｆと切り合う西半部は粘土をめぐらせていない。この粘土を貼り付けた操業面は操業によって還元化している。これらの炉には操業面の重複は認められない。これらの小形の炉もその椀形の炉形から鍛冶炉と考えられる。

以上のＳＸ05の大形の炉の各操業面と小形の炉の操業順序は古い方からＦ→Ｅ→Ｄ→Ｃ→Ｂ→Ａとなる。後述するＳＸ57がＳＸ05Ｂ・Ｅと共通した構造をもつことを考えると、明確な順

序は不明だが総体として、大形の炉と小形の炉が交互に繰り返し操業された状況が考えられる。両者の炉の規模の相違を鍛冶工程の段階の相違とらえるならば、さらに周辺から鍛造薄片や鉄床などが出土していることを考え合わせると、大形の炉はいわゆる大鍛冶炉に小形の炉は小鍛冶炉にそれぞれ対応し、本遺跡では大鍛冶から小鍛冶までの一貫した鍛冶作業が数回にわたり繰り返しおこなわれた可能性が推定される。

ＳＸ57（第361図、図版127）

ＳＸ05の北東側に隣接する。上部は削平され、現状では還元化した炉底面とその外側の酸化した壁面が部分的に残存するのみである。現状では長径26cm、短径20cm、深さ７cmの不整形の土坑を掘り込み、黒色土および暗褐色土を入れ、さらに粘土を貼り付けて炉底・炉壁を構築している。１層の還元化した炉底中からは鉄滓が出土している。確認面より上位の構造は不明であるが、先のＳＸ05の小形の炉周辺においても本炉周辺でも炉の上部構造物の一部とみられるものは確認されておらず、これらの炉は本来現状の確認形態に近いものであったと想定される。



第361図　ＳＸ57鍛冶炉

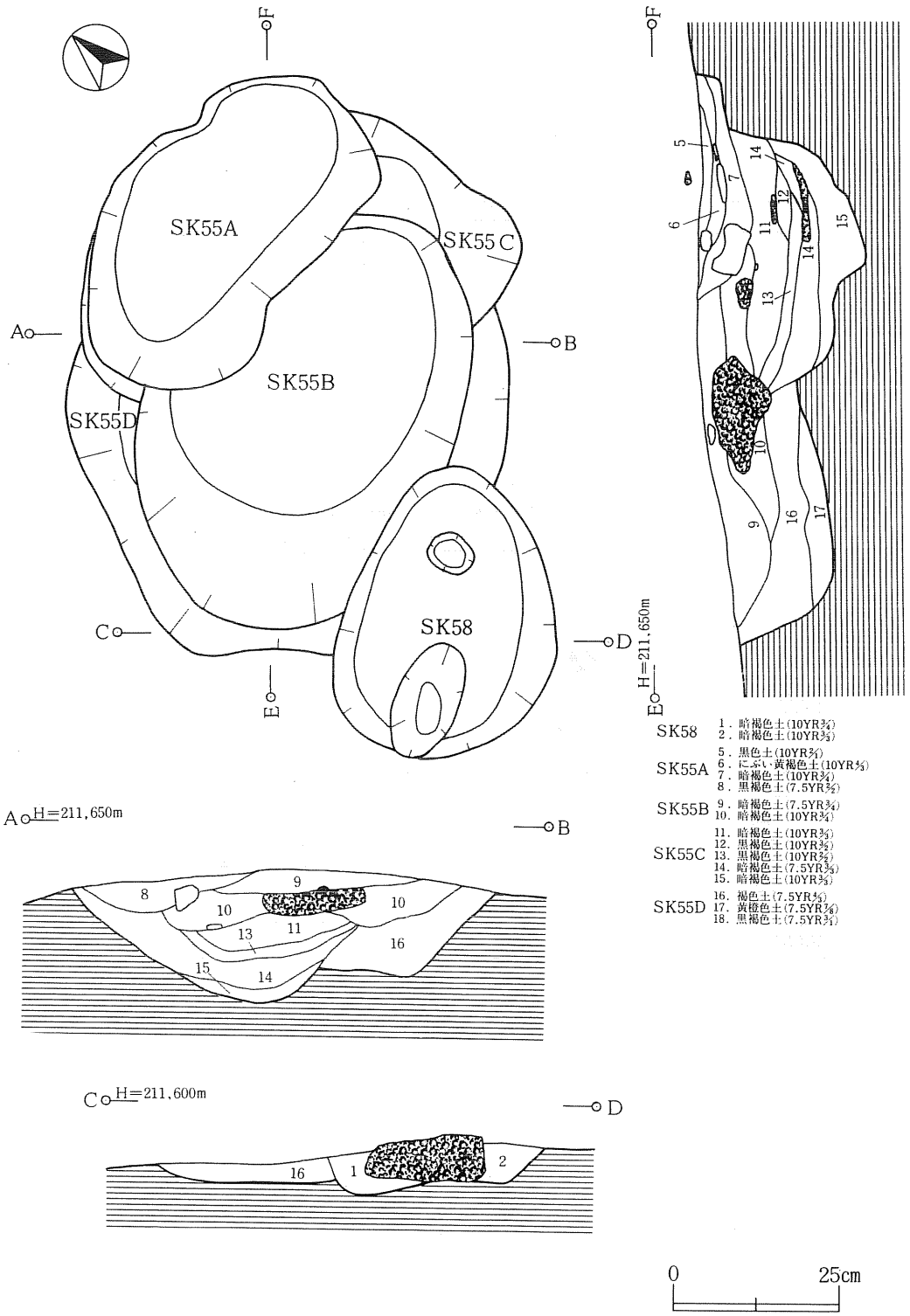
ＳＫ55・58（第362～365図、図版128）

本遺構は５基の土坑が切り合ったもので、位置関係から北側の土坑群（ＳＫ55Ａ～Ｄ）と南側の土坑（ＳＫ58）とに分けた。前者の最終的な平面形は90cm×70cmの不整形となっているが、主に土層断面の観察から推定すると当初の土坑（ＳＫ55Ｄ）は径66cm、深さ８cmの規模である。以下、Ｃが推定径67×44cm、深さ26cm、Ｂが径65×48cm、深さ７cm、Ａが径53×32cm、深さ８cmとなる。覆土中には多量の鉄滓を含んでおり、Ｃ・Ｄの覆土からは鍛造薄片も検出している。また、鉄床片とみられる鉄分が融着した礫片も出土している（第366図、Ｓ92～94）。

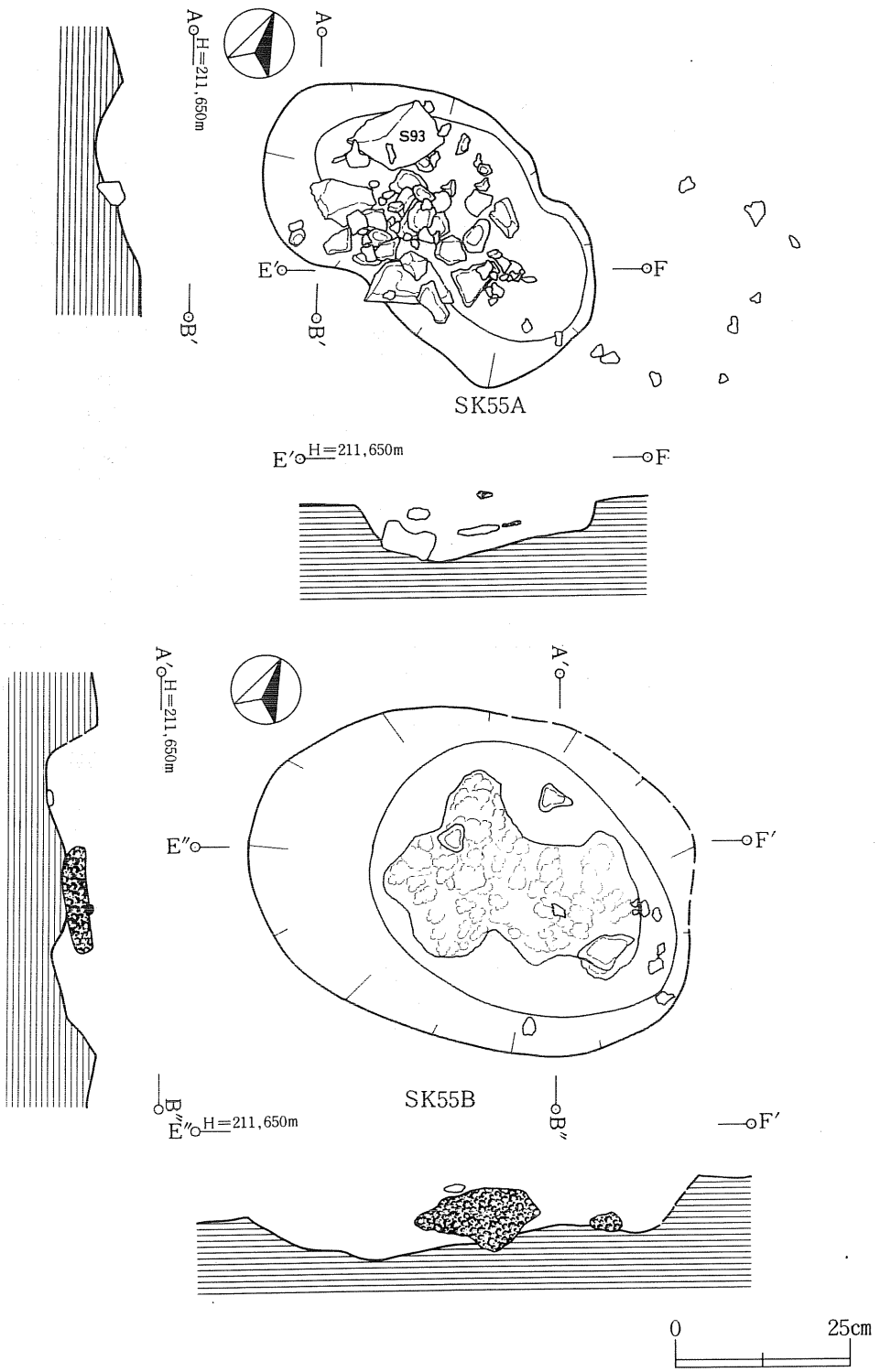
ＳＫ58はＳＫ55Ｂを切り、長径45cm、短径33cmの楕円形プランをなす。底面には２カ所の落ち込みがあり、最深部で深さ14cm、浅い部分で７cmを測る。覆土中には大形の鉄滓を含み、さらに１・３層中からは鍛造薄片も出土している。

これらの土坑群の覆土中には大湯浮石を混在することから、ＳＸ05同様大湯浮石降下後に掘り込まれたものとみられる。

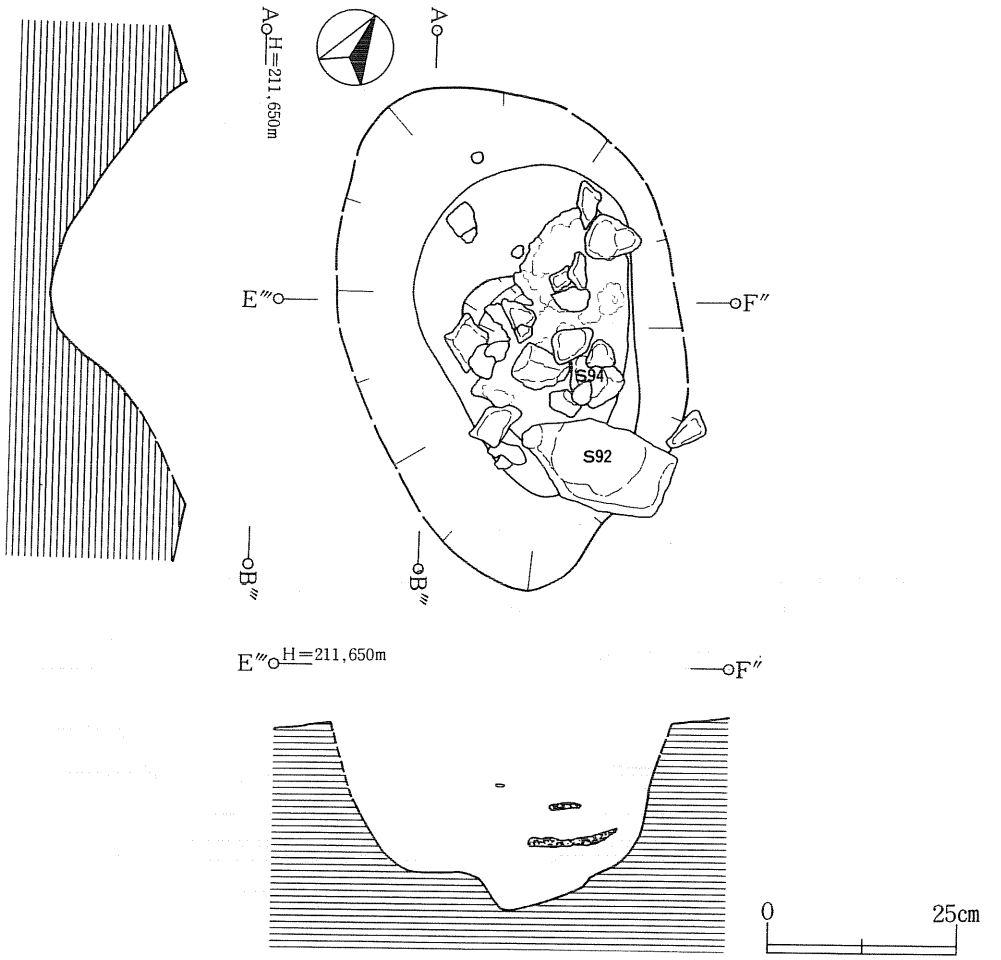
これらの土坑群は鉄滓・鍛造薄片を多量に含み、鍛冶作業で生成した鉄滓等を廃棄するための土坑と考えられる。多くの切り合いが存在するのは、各操業ごとに土坑を掘り直したためと



第362図　SK55・58土坑



第363図　SK55A・B土坑



第364図　ＳＫ55Ｃ土坑

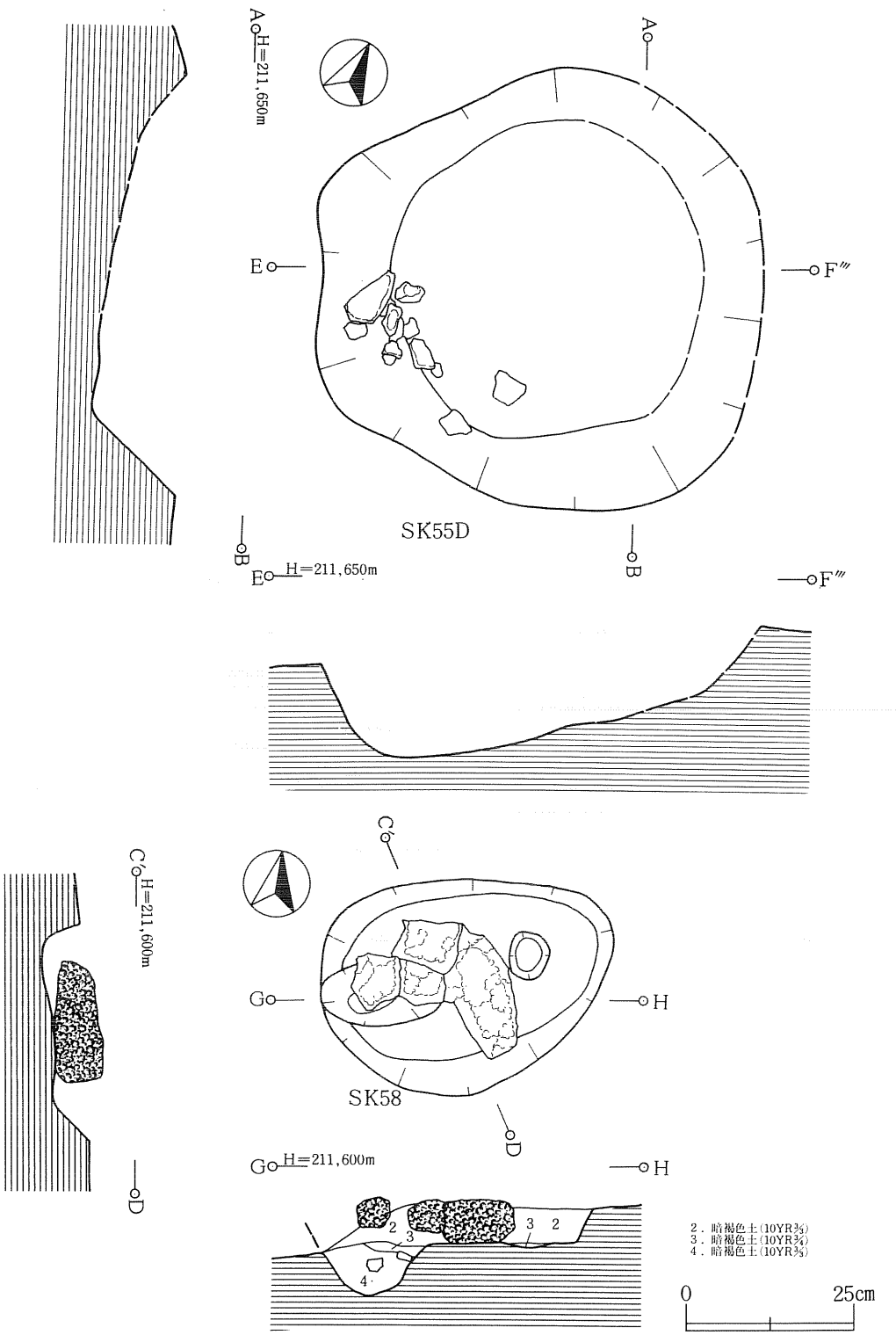
思われる。それと共に鉄床とみられる礫片が出土することから、本来の状態を留めてはいないが、小鍛冶段階で鉄床を設置した施設でもあった可能性も想定される。

(2)　炭焼成遺構

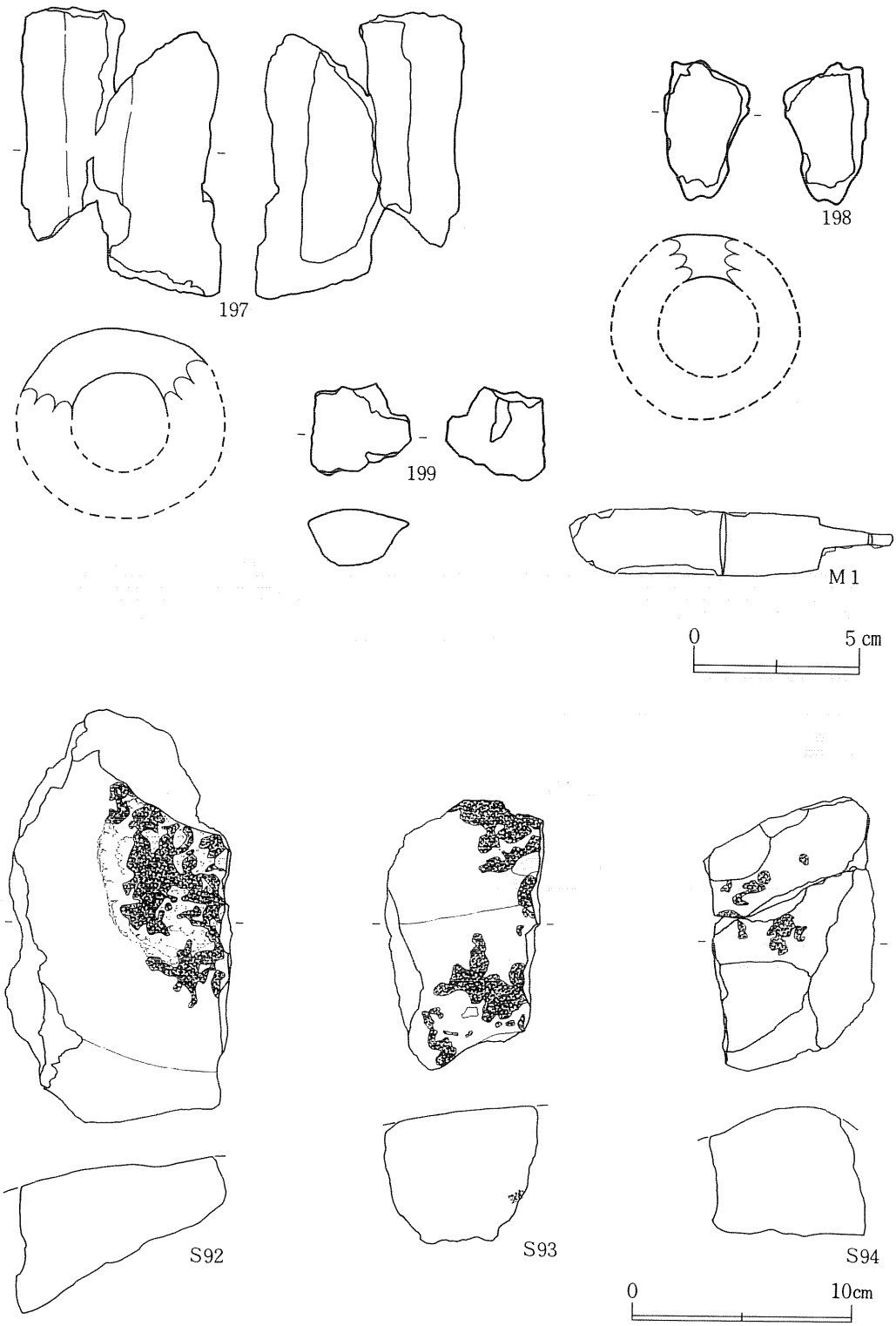
炭焼成遺構は調査区周辺に３基散在する。その形態はいずれも円形もしくは楕円形プランの土坑状を呈し、その構造は類似する。

ＳＫ10（第367図、図版128）

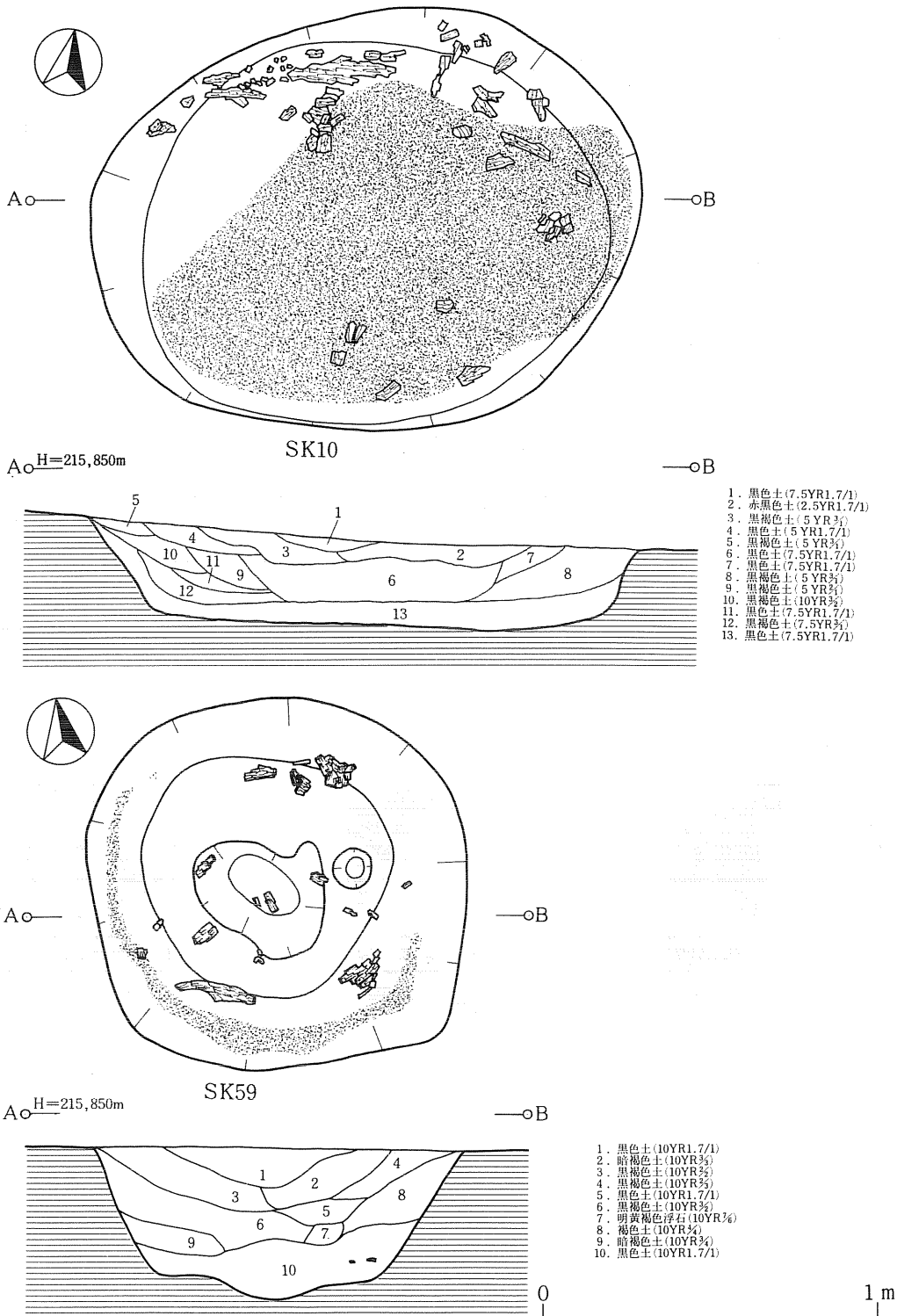
ＯＩ96グリッドに位置する。長径166cm、短径126cmの楕円形プランを呈し、深さ約30cmを測る。覆土は13層に分かれるが、１～12層には大湯浮石が混在しており、大湯浮石降下後に掘り込まれたものとみられる。最下層の13層には大量の炭化材が含まれており、底面も広範囲に焼けて赤変している。本遺構は底面からの炭化材の検出状況、底面の焼土化の状況から、炭焼成を目的とした遺構と考えられる。



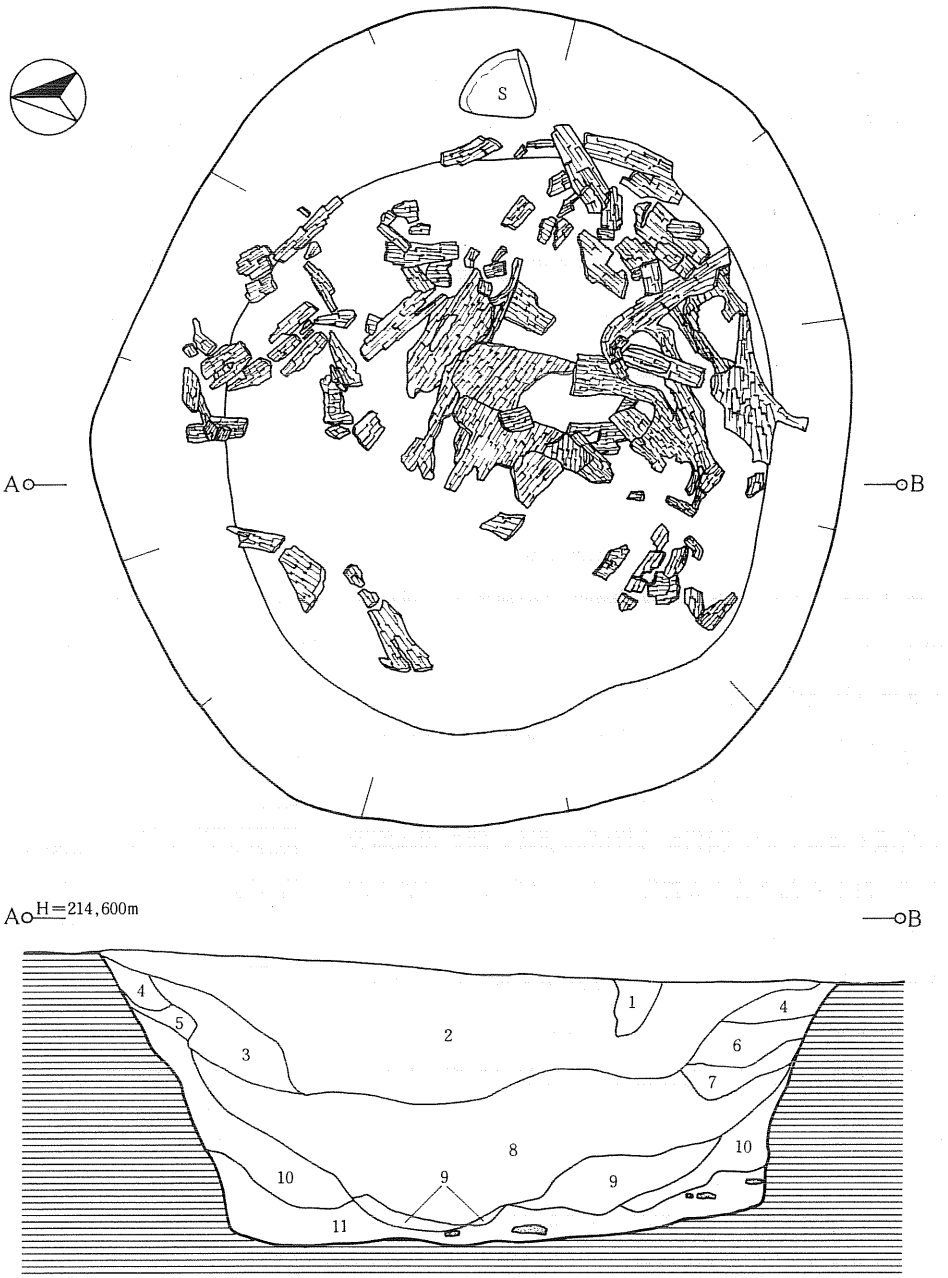
第365図　SK55D・58土坑



第366図　鍛冶関連遺構および周辺の出土遺物



第367図　SK10・59炭焼成遺構



1．黒褐色土(10YR3/1)
2．暗褐色土(10YR3/4)
3．暗褐色土(10YR3/4)
4．明黄褐色火山灰(2.5Y7/6)・褐色土(10YR4/4)
5．黒褐色土(10YR3/2)
6．褐色土(7.5YR4/4)
7．褐色土(10YR4/6)
8．暗褐色土(10YR3/3)
9．褐色土(10YR4/4)
10．黒褐色土(10YR3/2)
11．黒褐色土(10YR2/2)

0　1m

第368図　SK60炭焼成遺構

ＳＫ59（第367図、図版128）

ＮＲ96グリッドに位置する。115×112cmの円形プランをなし、深さは約45cmである。覆土はいずれも大湯浮石を含んでおり、10層からは炭化材が出土している。底面では顕著でないが、壁面は部分的に焼土化している。

ＳＫ60（第368図、図版128）

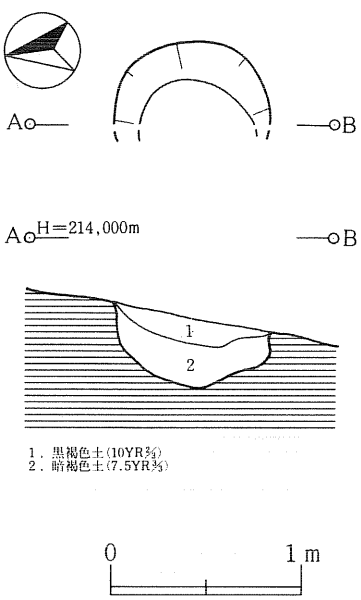
ＮＩ84グリッドに位置する。216×200cmのほぼ円形プランで、深さは約80cmを測る。覆土はいずれも大湯浮石を混在する埋め戻し土である。最下の11層からは大量の炭化材が出土しているが、壁面および底面の焼土化は顕著ではない。覆土中には少量の弥生土器・石器が混入している。

(3) 土　　坑

今回の調査で検出した土坑のうち古代以降に属するとみられるものは、上述した鍛冶関連遺構に含めたものと炭焼成遺構とを除くと調査区西南端に位置する１基のみであった。

ＳＫ08（第369図）

ＯＲ88グリッドに位置する。西半分を範囲確認調査時のトレンチによって壊されているためその形態は必ずしも明確ではないが、現状から径80cm前後、深さ40cm前後の擂り鉢形の掘り込みと推定される。確認面はＶ層上面であるが、覆土には大湯浮石が混在していることから、大湯浮石降下後に掘り込まれた土坑であると考えられる。覆土は大湯浮石が全体に混在し、人為的に埋め戻されたものとみられる。出土遺物はなく、土坑の時期・性格は不明である。

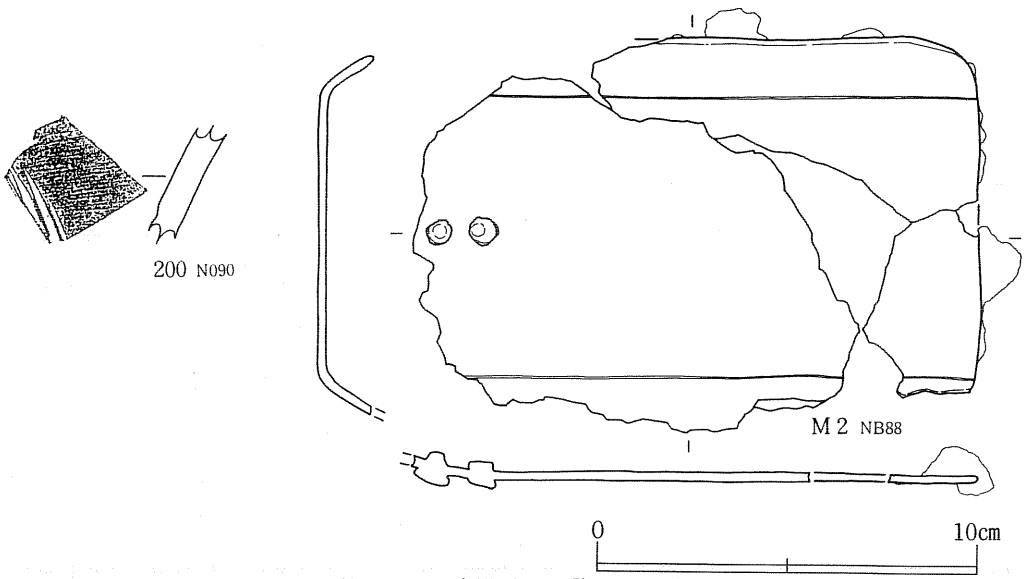


第369図　ＳＫ08土坑

2　古代以降の出土遺物（第370図）

上述した鍛冶関連遺構周辺からの鞴羽口・刀子・鉄床以外に今回の調査で検出した古代以降に属するとみられる遺物は僅かに陶器と鉄器各１点のみであった。

200はＮＯ90グリッドから出土した越前系かと思われる擂り鉢破片である。小破片のため明確ではないが、近世以降のものとみられる。Ｍ２は調査区北東端のＮＢ88グリッドから出土した十能である。図の左端中央には着柄のための鋲が２個留められている。Ⅱ層からの出土で、遺構との関連は認められない。検出状況からは時期を特定できないが、その形態から近現代の遺物であろう。



第370図　遺構外出土陶器・鉄製品

第４節　小　　結

今回の調査で検出した遺構は、縄文時代の竪穴住居跡１軒、同土坑２基、同Ｔピット14基、弥生時代の竪穴住居跡１軒、同井戸１基、同土坑６基、縄文もしくは弥生時代の土坑36基、同柱穴状遺構５基、同焼土遺構30基（うち弥生時代の土坑墓に伴うとみられるもの１基）、古代以降の鍛冶炉４基、同土坑６基（うち鍛冶関連のもの５基）、同炭焼成遺構３基である。

以上の遺構のほか、今回の調査では比較的まとまった量の弥生土器、若干の縄文土器と石器および極少量の陶器と鉄器などを検出した。弥生時代の遺構と遺物については後章で触れることとし、以下では縄文時代の竪穴住居跡と鍛冶炉について簡単に触れておきたい。

縄文時代の竪穴住居跡ＳＩ143は平面径2.5ｍ前後の小形のもので、広義の石囲複式炉を有する。周辺地域で規模と炉の形態が比較的類似する例には鹿角市天戸森遺跡ＳＩ21Ｂ竪穴住居跡がある。(註２) ただし、本遺構では柱穴は確認できなかったが、天戸森例では主柱穴と壁柱穴が検出されている。天戸森例は縄文時代中期後葉（大木９式併行期）とされているが、縄文時代中期から後期にかけての竪穴住居跡の詳細な変遷は現状では明確ではないため、本例の詳細な時期は不明である。本竪穴住居跡は調査区中央の開析谷の谷頭近くに単独で立地し、周囲には併存する可能性がある遺構は認められない。縄文時代中期後葉から後期前葉にかけての集落の一類型と考えられる。はりま館遺跡Ｃ区・ＥⅢ区などでは前後する時期の竪穴住居跡が検出されており、これらとの併存関係の有無を検討し、本竪穴住居跡の性格を考える必要がある。

つぎに鍛冶炉について触れておく。本調査区で検出した鍛冶炉には、相対的に大形で最低４枚の操業面が認められるもの１基と、より小形のもの３基がある。(註３)後者のうち２基は前者の大形の炉と切り合っており、既述のように大鍛冶から小鍛冶までの一貫した操業が数回繰り返されたことが推定される。また本調査区からは３基の炭焼成遺構が検出されており、これらの遺構で鍛冶操業用の燃料が生産された可能性も考えられる。しかし、これらの遺構は大規模なものではなく、その内面の被熱の程度からは繰り返し炭焼成が行われたとは認め難い。鍛冶炉の推定操業回数からはこれらの炭焼成遺構で充分な燃料の供給が可能であったとは考えられず、少なくとも調査区外からも燃料が搬入されたものと推定される。

これらの鍛冶炉は時期決定可能な伴出遺物を欠くが、前者の大形の炉は方形に掘り込まれた下部施設をもつ構造がＡⅡ区の鍛冶炉ＳＸ110と類似し、ＳＸ110と近接した時期に営まれた可能性があろう。しかし、ＳＸ110では周囲に上屋が存在し（ＳＢ111）、さらに上屋に隣接して竪穴住居跡ＳＩ107が併存しているのに対し、本例では周囲にこれらの遺構は確認されていない。鍛冶炉の周囲にはその操業過程から本来上屋が存在したことは推定されるが、周辺に明確な住居跡を伴わないことは、ＡⅡ区例を含め、一般には鍛冶炉が集落内に存在することと顕著な相違である。このことは鍛冶工人集団の出自を含めたその性格の相違を示している可能性も考えられ、両者の対比にはなお検討の余地は大きい。

註１　本例の口縁部の横位回転施文帯では条間に一段の縄Ｌの横位回転圧痕が、その施文帯上端に原体閉端の横位回転圧痕がそれぞれ部分的に認められる。これらのことから本例の施文原体は一段の縄Ｌを折り返し、一方を軸としてもう一方をコイル状に右巻きした不均等撚合せの縄と考えられる（石本1979：159頁）。今回の資料中の条間隔の離れた施文にはこのように原体を特定できるものは極めて乏しく、本文では便宜的にこれらの施文を撚糸文と呼称し、条の撚の符号を付すこととする。

石本省三「Ⅵ　聖山遺跡出土の続縄文式土器について」『聖山』　北海道大学教養部人類学研究室　1979（昭和54年）

註２　鹿角市教育委員会『天戸森遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料26　1984（昭和59年）

註３　小形の炉に類似する例には金属学的調査の結果精錬鍛冶をおこなったとされる福島県三貫地遺跡ＳＸ13・14・15がある。これらの遺構には作業場とされる掘り込みが伴っている。三貫地遺跡例は９世紀前半に属するとされており、本遺跡例とは時期差がある。

福島県文化センター『国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅲ　三貫地遺跡（原口地区）』福島県文化財調査報告書第179集　1987（昭和62年）

第10章　Ｅ区の調査の記録

第１節　Ｅ区の概要

１　Ｅ区の位置と地形　（第４図）

はりま館遺跡Ｅ区は、小坂インターチェンジ料金所建設予定地であるＤ区の西側から、県道大館―十和田湖線までの区間が調査対象地区である。Ｅ区全域は、ＴＷＩＰ（十和田火山第Ｉ期と見られる軽石流堆積物）からなり、これが提沢川の小支沢によって開析されており、Ｉ～Ⅳ区の地形がそれぞれに異なっている。ＥＩ・Ⅱ区は、前述の小支沢の北側にあたり、全体は南に向く斜面となっている。ＥⅢ区の中央部には、周囲の略平坦面との比高差が約10ｍの小山があり、調査区はこの小山頂部とその斜面にある。この小山の北側は道路と県立小坂高等学校のグランド造成によって削り取られている。ＥⅣ区は、ＥＩ・Ⅱ区の小支沢とは別の小支沢の沢頭部分に当たり、湿気のある略平坦面をなしている。

２　調査経過

この区間は、昭和63年度の発掘調査予定地に含まれていなかった。しかし同年５月と９月の試掘調査の結果、縄文時代から弥生時代の遺物の出土を見たため、工事によって削平される部分について、発掘調査を実施することになったものである。昭和63年11月１日～18日にボックス部分（ＥⅢ区）、排水路部分（ＥＩ・Ⅳ区）の調査を行い、広範囲に削平されるＥⅢ区については、平成元年４月２日～28日調査を実施した。

第２節　ＥＩ・Ⅱ・Ⅳ区の調査

１　ＥＩ区　（第371図）

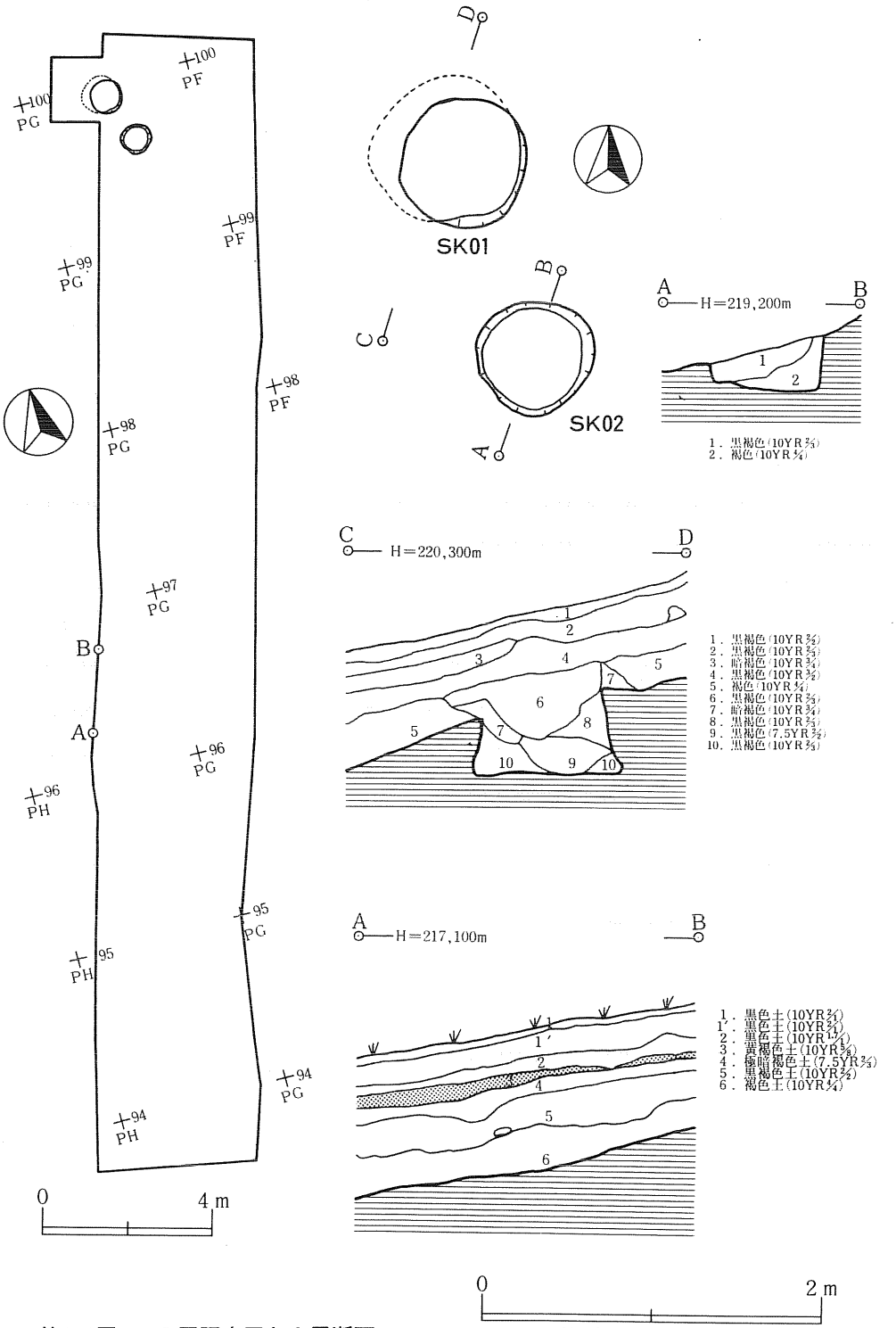
ＥＩ区は、南向きの斜面で、北側ほど傾斜が急で約13°あり、南に向かって緩くなる。水路部分の調査のため、長さ約27ｍ、幅3.4～3.8ｍのトレンチ調査である。

基本土層は、Ａ区などと基本的な変化はないが、急斜面の部分には第Ⅲ層大湯浮石層の堆積が認められなかった。

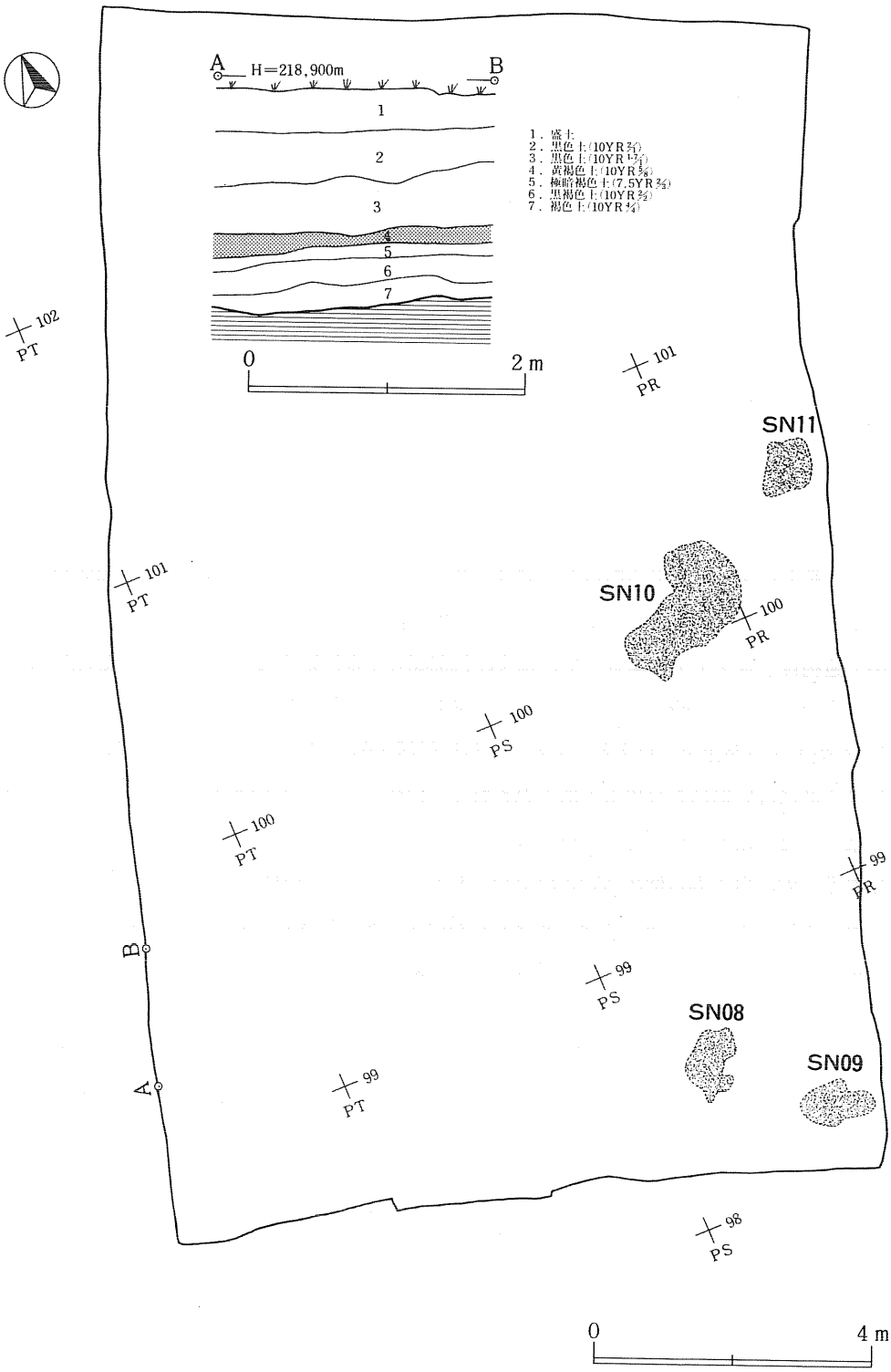
遺構は、トレンチ北端の急な斜面で、フラスコ状ピットと土坑が各々１基ずつ検出された。

ＳＫＦ01　（第371図）

口径約80㎝、底径約85㎝の略円形を呈するフラスコ状ピットである。断面観察によれば、基本層位の第Ⅳ層下部から掘り込まれており、深さは60㎝である。斜面に構築されているが、底面は水平で、平坦でよくしまっている。



第371図　E I 区調査区と土層断面、SKF01フラスコ状ピット、SK02土坑



第372図　ＥⅡ区調査とSN08・09・10・11焼土遺構、土層断面

ＳＫ02　（第371図）

ＳＫＦ01の南東側約60cmで検出された土坑である。平面形は、径65〜70cmの円形で、深さは30cmである。壁は垂直に立ち上がり、底面も略水平である。

ＳＫＦ01・ＳＫ02共に、覆土中から遺物は出土していない。また、遺物は調査区全体でも剥片しかなく、これらの遺構の時期を決定する材料とはならない。しかし、ＳＫＦ01の掘り込み面は第Ⅳ層下部（あるいは第Ⅴ層上面）であることから、これらの遺構の時期は弥生時代後葉と推測される。

2　ＥⅡ区　（第372図）

ＥⅡ区はボックス予定部分約18m×10mの調査区である。南向きの緩い斜面であるがかつて畑地にされたこともあり、概ね平坦な部分が多い。

基本土層は、他の調査区と大略変わらないが、畑地造成の際の盛土が基本層位の第Ⅰ層の上にのっている。

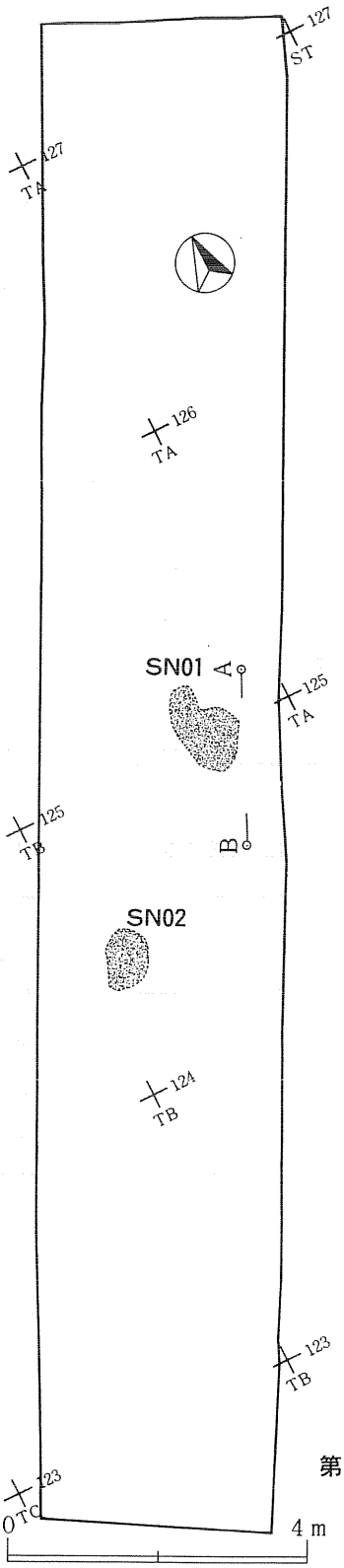
遺構は、5層上面（基本層位の第Ⅴ層に相当）に、4基の焼土遺構が存在する。この焼土遺構は、4層中から焼土粒子の散布として見えていたもので、5層上面で図示した範囲が堅く赤化していた。周辺の同層位の出土遺物から、弥生時代後葉のものと考えられる。

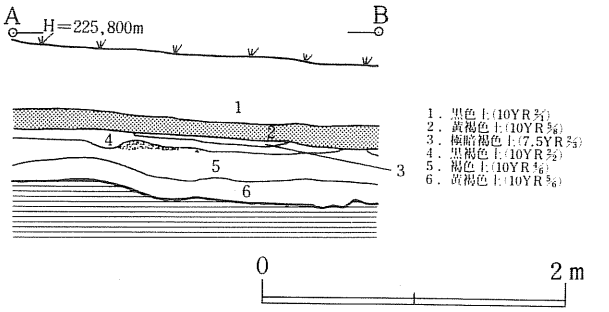
出土遺物は、コンテナ1箱ほどで、縄文時代前期の土器片数点と、他は弥生時代後葉の土器、他に剥片である。弥生時代の土器は摩滅した甕形土器の破片が主で、うまく接合しない。

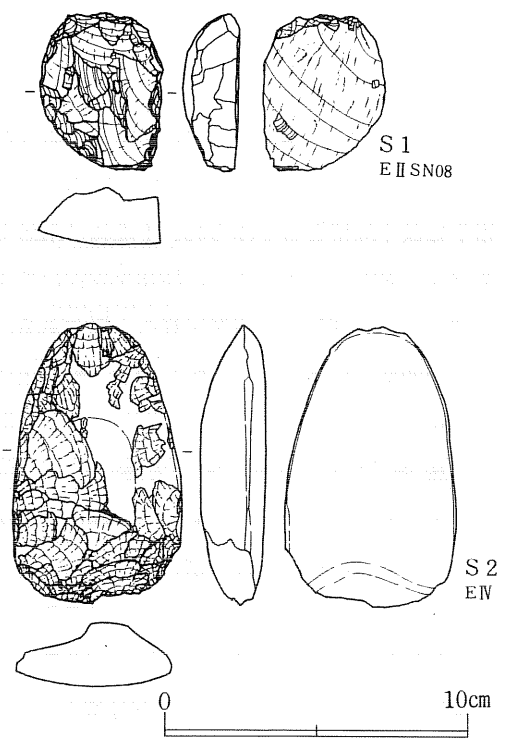
第375図1〜11が出土した土器である。1は口唇端が薄く尖り、胴部上半でなだらかな屈曲を見せる壺に近い器形を呈する土器と思われる。口縁下には「不均等撚り合わせ」(註1)のＲＬ原体の開端の一方を他方に結び付けた綾絡文が2段に亙って施され、下には条間隔のあいた縄文が表される。破片の下端に僅かな段差が認められることから、口縁部はごく僅かに肥厚していたと見ることができる。2〜5（同一個体）は頸部が屈曲する甕に近い形態を呈する土器である。口唇部は丸みを帯びて口縁部にかけて横位のナデ調整され、頸部の屈曲部以下は縦位のナデ、また胴部下半では胎土の砂粒の移動があることからケズリに近い調整が行われ、全面無文である。内面は横位のナデ調整によって仕上げられている。器厚は頸屈曲部が6mm程とやや厚くなる他は、3mm前後の厚さしかない。6〜11（同一個体）は外傾する口縁の深鉢形土器である。口縁部は粘土帯を外傾接合して作られ、接合部分の段差が認められる(6)。口唇部は平らに面とりがなされる。口縁部内外面の器面調整は横位のハケメによって行われ(8)、胴部の調整は外面が横位のナデを丁寧に施して平滑にし、内面は成形痕を残すような粗いナデで仕上げられている。

3　ＥⅣ区　（第373図）

ＥⅣ区は、排水路部分の約20.5m×3.3mの調査区である。牧草地となっていたこともあり、







第374図　ＥⅡ、Ⅳ区出土遺物・石器

第373図　ＥⅣ区調査区とSN01・02焼土遺構、土層断面

略平坦であるが、小沢の沢頭方向に向かってわずかに傾斜している。

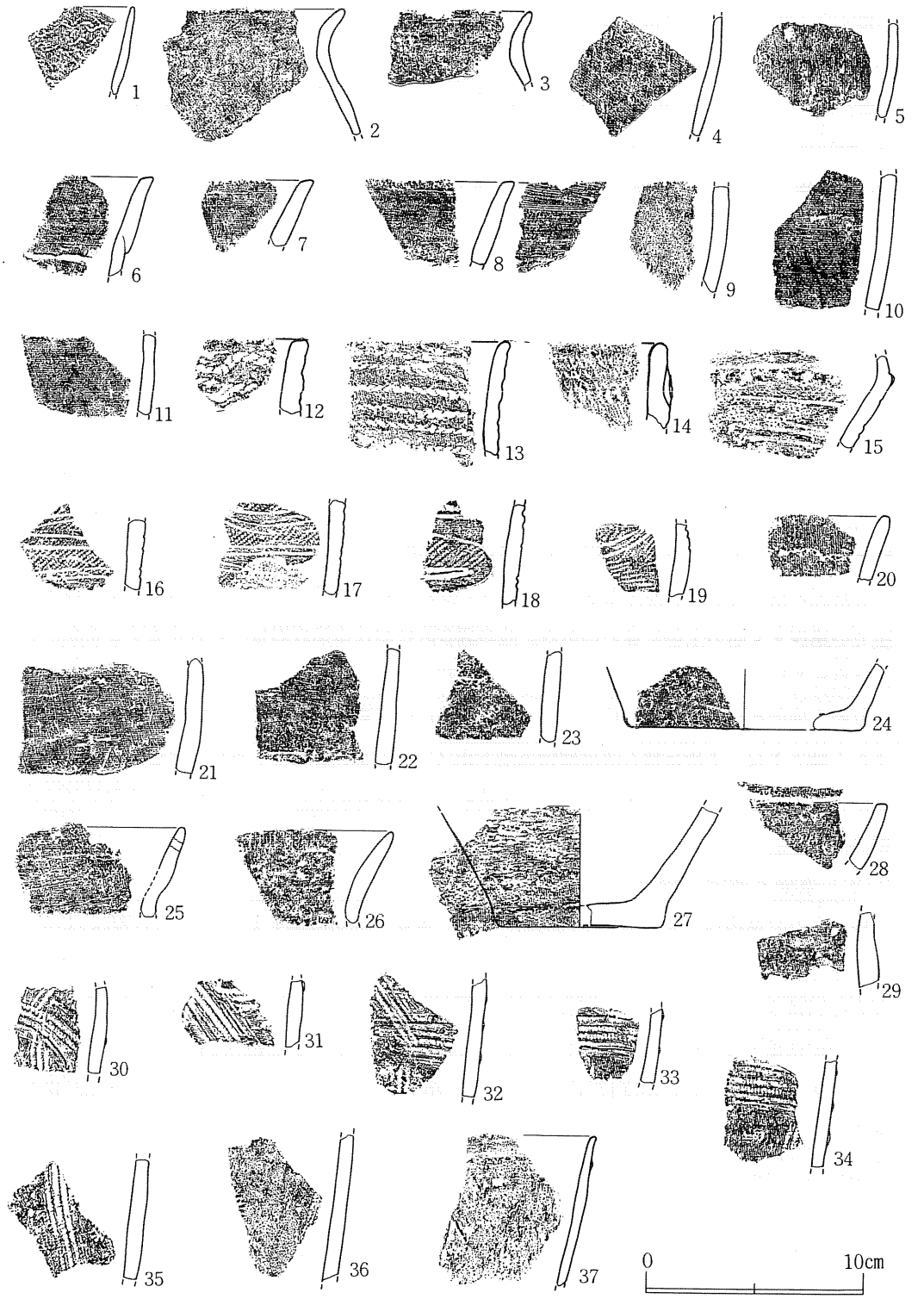
土層は、基本層位のⅠ・Ⅱ層が草地造成による攪乱を受け分層できない以外は、他の部分の層序と変化ない。

検出された遺構は、２基の焼土遺構だけである。両者とも、第Ⅴ層上面に堅く赤化した焼土面がある。周囲の遺物から、この焼土遺構は弥生時代後葉に属するものと思われる。

遺物は４、５層から出土している。４層中からは後北Ｃ式土器、５層中からは縄文時代前期と後期の土器が出土している。

第375図12～37が出土した土器である。12はＲ｛の撚紐に数段の結節部を設けて回転した綾絡文が施された深鉢形土器の口縁部片である。口唇部は平らに面とりがなされ、口縁上部は僅かに外反する。胎土には少量の繊維が含まれる。13は縄文原体の側面圧痕が平行して施された深鉢形土器である。口唇部は丸みをもって作られ、口縁上部は僅かに外反する。最下段のものを含め６条の原体側面圧痕列が施されるが、施文原体はＲＬとＬＲの２種類が用いられ、左側上３条、右側下３条がＲＬ、右側上３条、左側３条がＬＲである。胎土には砂粒および繊維を多く含んでいる。14はごく狭い文様帯をもった深鉢形土器の口縁部片である。口唇部は丸みをもって作られ、口縁下には単軸絡条体第５類の圧痕列が４段に施されている。また口縁部文様帯下は低く隆帯として作られ、上面には爪形文列が施されている。隆帯下には細かい撚りの縄文が浅く施文されているが、種類を判別はできない。

15～18(同一個体)は器形不詳の土器である。口縁部近くの破片(15)は接合部を境として屈曲し、屈曲部は隆帯となって張り出す。隆帯上には断面Ｖ字形の刻目列が施され、接合痕である上側縁にはＬＲ原体の側面圧痕が施される。胴部片(16、17、18)にはＬＲ縄文を横位回転施文した後、細い沈線を多重に描いて磨消縄文の手法が採られるが、15の下半分に連続して鉢形の器形を呈するものか、それともさらに屈曲して深鉢の形態を示すものか判断がつかない。内面にはハケメ状の調整痕が残る破片(16、17)とナデ調整が行われた破片(15、18)がある。19は地文にＲＬ縄文を施した後、２条の上向きの弧線文を施した胴部破片である。断面の湾曲の程度から、口縁部が屈曲する深鉢形土器の屈曲部下かあるいは胴部上半に文様帯をもつ深鉢形土器の文様帯下の破片と思われる。20～29は無文の土器である。20～24(同一個体)は外傾する口縁をもった深鉢形土器で、底部(24)は短く垂直に立ち上がった後、外側に向かって開く。内面は横位、外面は横位の後縦位のナデによって器面調整を行っている。25～27(同一個体)も深鉢形土器である。外傾する口縁が頸部の屈曲部から開き、底部は短く垂直に立ち上がって胴部下半に開く。口縁部外面、胴部は横位のナデ調整が施され、底部近く(27)の内面も横位にナデ調整されている。28、29(同一個体)も外傾する深鉢形土器口縁部および頸部片である。口縁部は僅かに受け口状に内湾し、頸部は緩く屈曲する。内外面とも横位のナデ調整によって仕上げられている。



第375図　EⅡ・Ⅳ区　出土遺物・土器

30〜37は微隆起線、特殊縄文によって特徴づけられる土器である。30〜35（同一個体）は、口縁を欠くが、0段3条の特殊縄文を施した後、微隆起線を添わせ、さらに空いた空間に右から左の方向での刺突列を加えている。36は別個体の胴部下半の資料であるが、右端にＲＬを用いた特殊縄文が施されている。37は摩滅が著しいが、口縁下に刻みをもった隆線が施され、襷掛け状に施文された微隆起線が観察される。波状口縁の鉢形土器である。

第3節　EⅢ区の調査

1　地形と基本土層

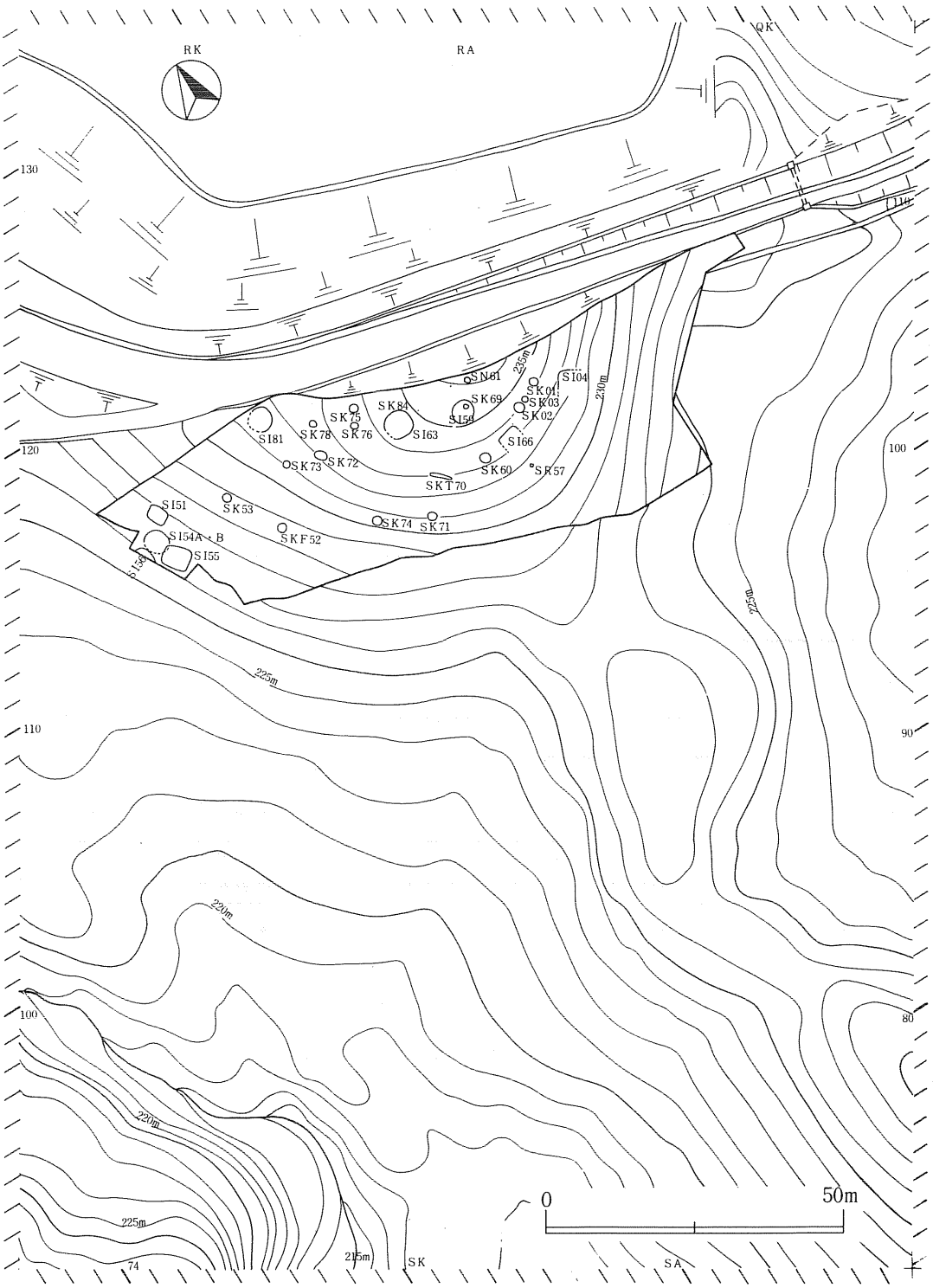
EⅢ区は、ＲＨ112グリッド付近を最高位（標高236.75ｍ）とする小山の、西一南一東側斜面が調査区である。小山の北側は、道路と県立小坂高等学校のグランド造成によって、既に削平されている。ＲＨ112グリッドから西側へ約20ｍ、南側へ約５ｍ、南東側へ約７ｍの範囲が緩やかな斜面であるが、その外側は斜度11〜17°の比較的急な斜面となっている。小山の南東側と西側に入り込んでいる堤沢川の小支沢までの距離は、それぞれ100ｍである。

EⅢ区の基本層序は、他区と基本的に大きく変わるものではないが、小山の上部及び斜面中腹での第Ⅳ・Ⅴ層の土色に違いがある。他の調査区における第Ⅳ層は、いわゆるチョコレート色に見える黒褐色土であるのに対し、ここでは暗褐色（10ＴＲ３／４）を呈している。同様に第Ⅴ層も他調査区で黒色土（10ＹＲ２／１）なのに対し褐色土（10ＹＲ４／４）を呈している。また、地山土は、上位に軽石流堆積物の風土化（ＴＷＩＰ）があり、その下に砂礫層が存在するが、小山頂部付近では、灰白色のシルト質粘土が砂礫層の上にあり、ＴＷＩＰを欠いている部分もある。

2　遺構と遺物の分布

検出された遺構は、全て縄文時代前期・中期・後期・晩期に属する。竪穴住居10軒、Ｔピット２基、フラスコ状ピット４基、土坑11基、焼土遺構２基、土器埋設遺構１基である。前期の竪穴住居跡６軒のうち５軒は、調査区西端の緩斜面に群をなし、他の１軒は西側斜面中腹にある。中期末葉〜後期初頭と考えられる４軒の竪穴住居跡のうち、２軒は小山頂部に近い緩い斜面に位置し、他の２軒は斜度17°近い急な斜面に構築されている。その他の遺構は、緩斜面にあるものは少なく、急な斜面に集散しといる。

遺物は、一部を除いて基本層位の第Ⅴ層の中から出土している。土器は、20数片の細片となった後北Ｃ式土器とわずかの弥生時代の土器を除くと、縄文時代前期中葉・中期末葉〜後期中葉のものである。前期の土器は概ねＲＨ112・ＲＯ108グリッドを結ぶ線の西側に多く、その東側には中期末葉〜後期中葉の土器が多い。



第376図　EⅢ区の遺構配置図と周辺の地形

3　検出遺構と出土遺物

縄文時代の29遺構のうち、床面や覆土中から出土した遺物によってその時期が明らかなのは15遺構である。しかし、時期を明確にできないものにあっても、周囲から出土している遺物から、前期かあるいは中期末葉～後期中葉のいずれかに属するものと考えられる。

以下、遺構の種類別に説明する。

(1)　竪穴住居跡

竪穴住居跡は10軒検出された。その時期別の内訳は、ＳＩ51・54Ａ・54Ｂ・55・56・81の６軒が前期、ＳＩ04・59・63・66の４軒が中期末葉～後期初頭のものである。前期の竪穴住居跡は、単独で存在する１軒を除く５軒が調査区西端部に集中している。調査区西端部は、小さな沢の北～東側に広がる略平坦～緩斜面の縁辺部に当たり、今回検出した５軒以外にも相当数の竪穴住居跡が存在すると予想される。

ＳＩ51　（第372図、図版147）

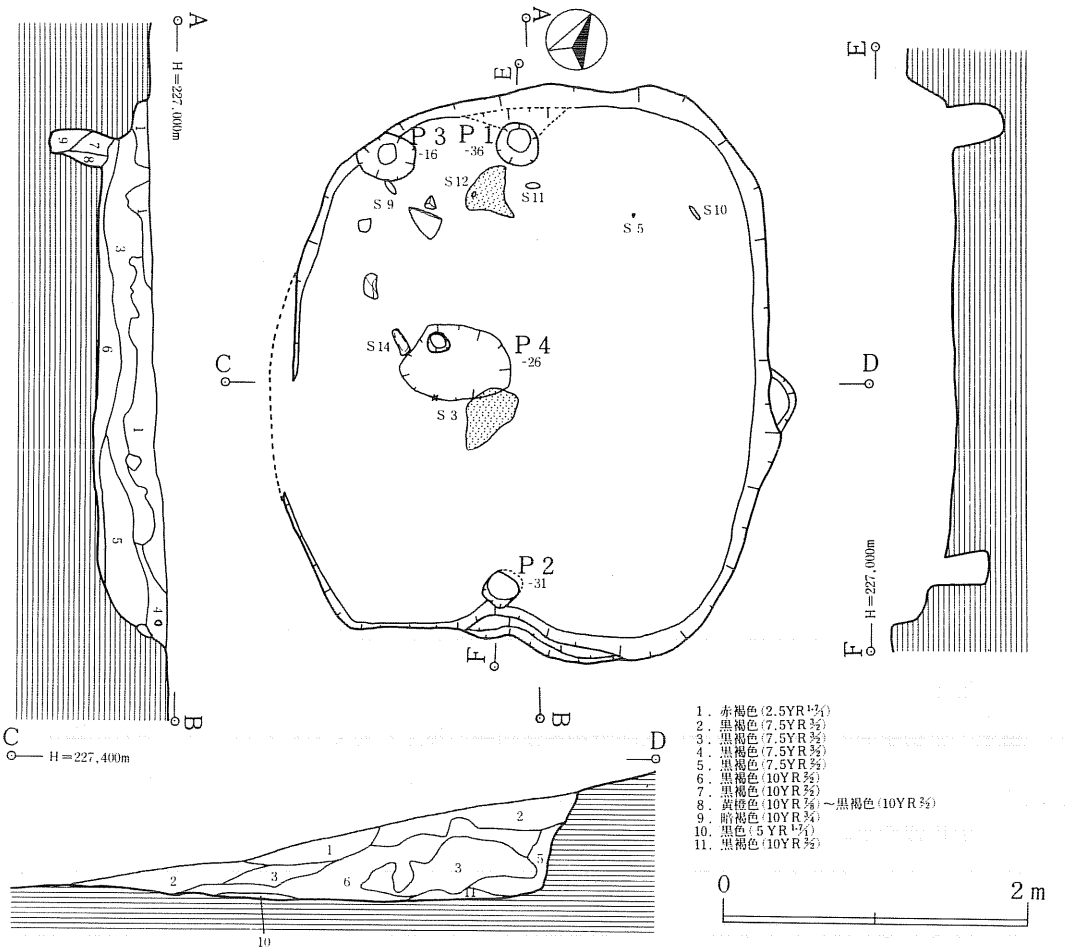
位置・確認状況　調査区西端部ＳＢ114グリッド、第Ⅶ層地出上面で確認された。調査区中央部から西に下降する斜面の下方に位置し、南西側のＳＩ54Ａ・54Ｂ・55・56と共に竪穴住居群を構成する。

形態・規模　長径（南南東―北北西）3.8ｍ、短径3.1ｍの隅丸長方形を呈する。斜面に（ＳＩ51付近で斜度11°）構築されているため、東壁での深さは70㎝あるが、西辺では壁を検出できない。床面積は約9.5㎡である。

覆土　１層は耕作のための攪乱で、２層は第Ⅴ層に相当する。２～６層が周囲からの流入土かあるいは人為的に埋められた土で、礫・炭化物・チップ・フレイクを含み、特に６層下部にチップ・フレイクが多い。10・11層は住居跡床面上に特徴的に見られる黒色を呈する粘性のある土である。６・10・11層と床面の間に、多くのチップ・フレイクなどが押し潰された状態で出土している。

床・壁　本住居跡周辺の地山土は、黄橙（10ＹＲ７／８）～明黄褐（10ＹＲ６／８）の風化軽石に砂礫を含んでいる。本住居はこの地山を掘り込んでいるため、壁面及び床面に砂礫の露頭があるものの、床面は平坦で堅くしまっている。壁は、２本の主柱穴Ｐ１・２の部分で住居中央に向かって緩くなっているが、他は垂直である。

壁溝・柱穴　壁溝は認められない。ピットはＰ１～４を検出した。Ｐ１、２が主柱穴である。Ｐ１がわずかに住居中央方向に傾いているものの、Ｐ２は垂直に掘られている。Ｐ４は埋められていた柱穴で、あるいはここに、１本主柱かＰ３、４を２本主柱にする住居がＳＩ51の前に存在した可能性もある。



第377図　SI 51竪穴住居跡

炉　明確な炉は検出されなかったが、床面中央から西側にわずかにくぼみ、この中に木炭粒を含むような黒土があったことから、ここが地床炉と考えられる。焼土や赤変している部分は認められなかった。

出土遺物　覆土中を含め、土器は全く出土していないものの、多くの石器が出土した。石器は、6・10・11層中と床面に多く（図中のスクリーントーン部分に特に集中）、多量のチップやフレイクが土圧によって押し潰されたような状況で出土している。393図と395図S15～18が出土した石器で、この他にも図示できなかった削器などがあり、S3・9・11・12・14が床面から出土している。S3～8が石鏃であるが、完形品はS3のみで、他は破損している。石鏃の破損品は、厚さ3～5㎜の薄い剥片を素材にしており、使用による破損ではなく、製作中に失敗したものであると考えられる。S3も完形品であるが、先端部と器中央下部の厚みの除去ができないため、チップとともに捨てられたものと思われる。S9は

石槍、S10は石箆、S11・12が縦型の石匙で、S15〜18も何らかの石器を製作しようとしたが途中で捨てられたものと見られる。

SI54A　（第378図、図版148）

位置・確認状況　調査区西端部の竪穴住居群中に位置する（SC113グリッド）。第Ⅶ層上面で、SI51の南西約1mに竪穴住居跡の存在を認め、これをSI54として調査した。しかしSI54の床面中央部には地床炉と考えられる焼土部分があり、焼土部分の中には焼土を切る柱穴があった。さらに焼土部分の北側には高低差数cmの段差が認められた。この2つの事と周囲の柱穴等の検討を行った結果、SI54とした部分は、2軒の竪穴住居跡の重複であることが判明した。新しい方をSI54A、古い方をSI54Bとする。なお、SI54A・B共にその南側のSI55と重複しており、SI55がこれらよりも新しい。

形態・規模　斜度約11°の斜面に構築されているため西辺は不明で、南辺はSI55に切られている。わずかに残った北辺と主柱穴2本の配置から、南北約3.8m、南西約2.5mの隅丸長方形（あるいは楕円形）プランを呈すると推定される。推定床面積は6.8㎡で、深さは、推定45cmである。

覆土　土層断面の6・7・8層の大部分が本住居跡の覆土と考えられるが、SI54Bの覆土と区別することはできなかった。7・8層は木炭片やチップ類をわずかに含み6層はこれに亜角礫や土器片を比較的多く含んでいる。

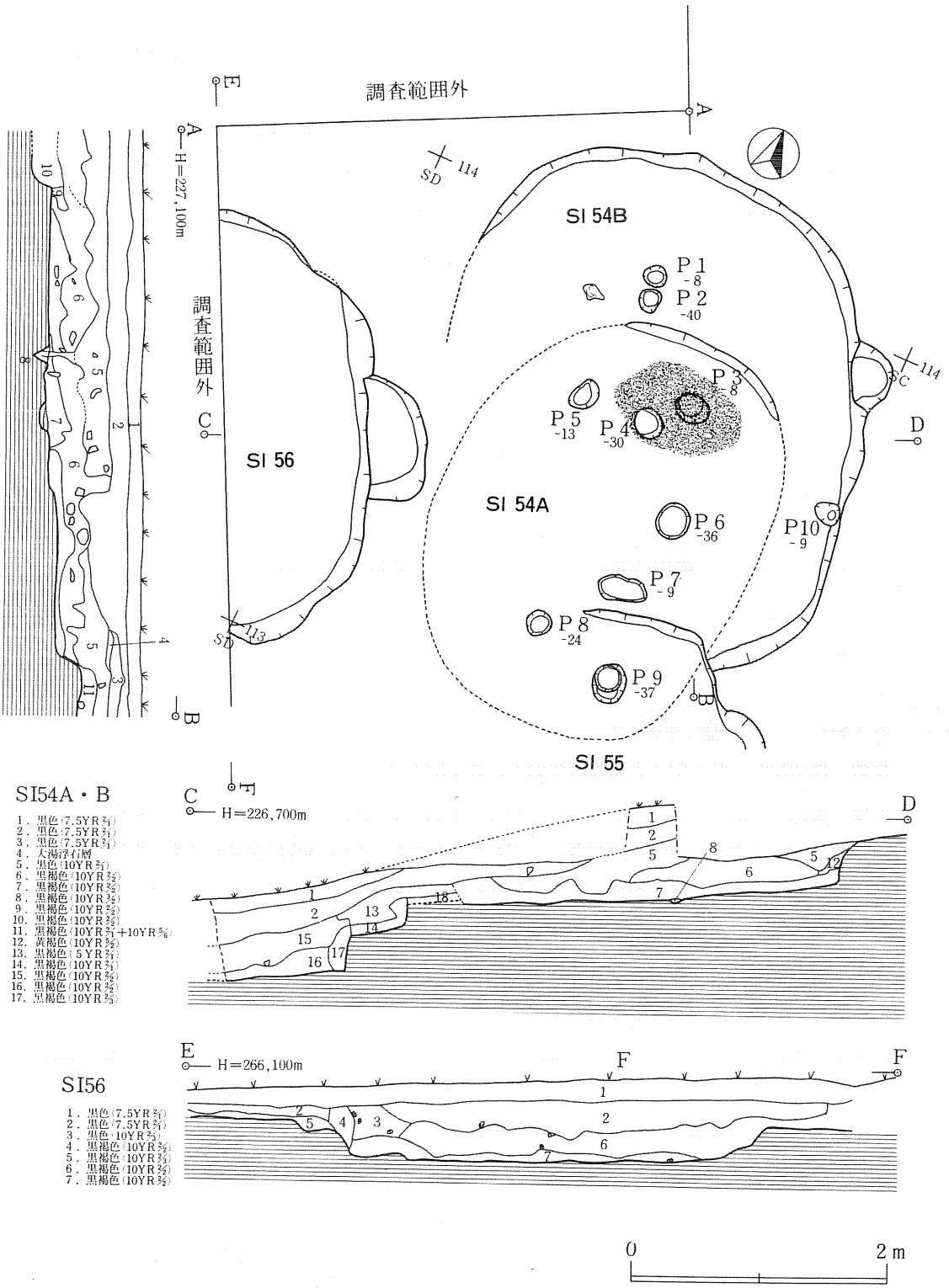
床・壁　床面は西面を除くと堅くしまって平坦で良好であるが、西辺は地山をほとんど掘り込んでいないため、少し軟かく、不明な部分もある。砂利の露頭はほとんどなく、壁は北辺を除いて残っていない。

壁溝・柱穴　壁溝は認められなかった。柱穴は、位置・規模・埋土の状況などから、SI54Bの地床炉を切るP4とSI55北壁にあるP8の2本が主柱穴である。

炉　P4とP8の間の床面中央部がほんのわずかくぼんでいるものの、明瞭な炉は認められなかった。

出土遺物　発掘時における遺物は全てSI54として取り上げ、床面から出土した遺物もなかったことから、出土遺物がSI54A・Bのいずれに属するものか不明である。このためここでは、SI54A・Bの出土遺物を一括して述べることにする。

388図38、392図55〜62の土器と、398図S66〜399図S76の石器が覆土中から出土した。38は、外縁が大きく張り出した底部から胴部が外傾して立ち上がり、そのまま口縁に至る深鉢形土器である。平行縁で、口唇部には縄文が回転施文されている。口縁部と胴部下半に不整の綾絡文が、胴部には斜縄文が施されている。底部は、底面外側が僅かにめく



第378図　SI 54A・B、56竪穴住居跡

り上がるような感じになっており、不整の綾絡文が付されている。胎土には繊維と砂粒を多く含み、間隙が多い。焼成は普通で、内面は微細な剥落のためにミガキ痕が残っていない。器内外面に煤状炭化物が付着している。55は、胴部から口縁部まで筒状を呈する器形と考えられる深鉢形土器の口縁部である。口縁部には縦位の撚糸文を施した後に、斜位の撚糸文を施しており、口唇部には刻み状の刺突列が間隔をおいて施されている。56・57は口縁部に不整の綾絡文、胴部に複節のＲＬ斜縄文が施されており、56の口縁部は大きく外反する。58・59は口縁部から単節斜縄文が施されている例である。59の口縁端は、他の大部分の土器が口唇に面をもつのに対し、小さく丸く収められている。60〜62は底面に単節（60・61）・複節（62）の縄文が施されており、60の底部は小型土器のもので、揚げ底状になっている。石器は石鏃（Ｓ66・69）、石匙（Ｓ71）、石槍（Ｓ71）、削器（Ｓ74・75）などが出土している。Ｓ72は、石鏃の素材となる薄く小さな剥片を取った後の残核に、調整を加えて大型の削器にしたものと思われる。Ｓ73は扁平な短冊状を呈する大型の削器と考えられるが、上半が欠損している。Ｓ76は大型の剥片を素材とした石核である。薄くてあまり大きくない剥片が取られていることから、石鏃の素材を得るための石核と考えられる。石器はこの他にも、石鏃の失敗品や大型の削器、ノッチのあるものなどが出土している。

ＳＩ54Ｂ　（第378図、図版148）

位置・確認状況　ＳＩ54Ａと重複しており、ＳＩ54Ａに同じ。

形態・規模　斜面に構築されているため西辺は不明で、南辺はＳＩ55に切られて失われている。北・東辺と南辺の一部に壁が残存しており、長径約4.1ｍ、短径約3.3ｍの隅丸長方形（あるいは楕円形）プランを呈すると考えられる。長軸方向は南南東―北北西である。東辺の第Ⅶ層地山上面からの深さは36㎝である。推定床面積は10.5㎡である。

覆土　覆土の上半分を占める５・６層の中には、軟かい部分と堅くブロック状になった部分があり、遺物と亜角礫を多く含んでいる。

床・壁　西辺の一部を除く床面は、地山砂利層を掘り込んでいるため、堅く平坦である。壁は北西辺が不明瞭ながら、北から東辺はしっかりしており、垂直に立ち上がる。東辺の壁面には砂利が一部露出しているが大きい礫はない。

壁溝・柱穴　壁溝は認められない。柱穴は、位置・規模・埋土の状況からＰ２・６が主柱穴である。Ｐ６は、ＳＩ54Ａ床面構築の際に地山風化軽石の混土で埋められている。

炉　床面中央部に東西1.0ｍ、南北65㎝の楕円形に弱く赤化した部分があり、地床炉である。ＳＩ54Ａ床面の構築の際に赤化部分の上部が削平されており、残った赤化部分の厚さは２

cm前後である。赤化部分中央部にこの地床炉よりも古く浅いピットＰ３があるが、人為的に埋められ、上部は白色粘土で埋められていた。白色粘土の一部も赤変している。

出土遺物　ＳＩ54Ａで説明した。

ＳＩ55　（第379図、図版148）

位置・確認状況　調査区西端斜面のＳＢ・ＳＣ113グリッドを中心に、第Ⅵ層上面で検出された。ＳＩ54南北土層断面用のベルトでその存在を知ったものである。北側でＳＩ54Ａ・Ｂを切っており、南辺の一部は風倒木痕で攪乱されている。ＳＩ54Ａ・Ｂよりも新しく、３者の新旧関係は、古い方からＳＩ54Ｂ→ＳＩ54Ａ→ＳＩ55である。

形態・規模　斜面に構築されているため、北西壁と西壁はやや不明瞭であるが、長径5.2ｍ、短径3.6ｍの不整隅丸長方形を呈する。長軸方向は南南東―北北西をさす。深さは、東壁で最大52cmを測るが、西壁では４～８cmである。床面積は14.9㎡である。

覆土　４層は地山風化軽石粒や小砂利・炭化物・遺物を多く含み、堅くしまっている。東側住居外からの流入土と考えられる。２・３層は比較的軟らかいが、遺物や小砂利などを含む。１層は牧草地の耕作土で、９層は土坑様の掘り込みの埋土とも考えられるが、詳細は不明である。

床・壁　本住居跡部分では、地山砂利層が深いところにあるのか、掘り込み底面は風化軽石を主体にする層である。このため床面は、滑かでよくしまり堅く平坦である。壁は北西～西壁が不明瞭なものの、他は垂直に立ち上がり、東壁の北部では若干オーバーハングしている。

壁溝・柱穴　壁溝は認められない。Ｐ１・２・３・４の４本が主柱穴で、規模・掘り方・配置が非常にしっかりしている。Ｐ５は、２本の柱穴の重複で、埋土の状況から本住居跡よりは古く思われるものの、性格等については不明である。

炉　床面中央部に長径1.2ｍ、短径0.9ｍ、深さ９cmの浅い掘り込みがあり、その底面が火熱によってスクリーントーンの範囲で赤化している。赤化した部分の厚さは数cmで、良好な地床炉である。

その他の付属施設　床面北部に段化した部分が存在する。北側で床面との高低差６cm前後であるが、底面南側は漸移的に本住居跡の床面に連続している。位置・形状から、本住居跡と重複する何らかの遺構の可能性が強いが、判然としない。また、南西隅と西辺北部に最深部で床面から16cmの浅い掘り込みがある。西辺北部のものは、本住居よりも新しい土坑のようにも見えるが、やはり判然としない。

出土遺物　床面上及び覆土中などから、388図39～41の土器と、395図Ｓ19～379図Ｓ63の石器

が出土している。39は、覆土中から出土したもので、底部からわずかに外傾して立ち上がった胴部がそのまま口縁に至る器形を呈する。口縁部文様帯を持たず、全面に複節の斜縄文が施されている。口唇部は平坦に面取りされているが、施文はない。胎土には砂粒と繊維を多く含み、焼成は良好であるが、内面には砂粒が表出しており、器面調整痕は見えない。器内外面ともに煤状炭化物が付着している。41は、地床炉北側の床面上から、底部を南、口縁部を北にして捨てられた状況で出土した。いわゆるバケツ形を呈する器形で、口縁部には不整の綾絡文、胴部には複節の斜縄文が施されている。平口縁の口唇上には縄文の回転文がうすく見えている。胎土には繊維を多く含むが、砂粒は少なく、間隙がある。焼成は普通で、器内面の調整は口縁部で横方向のミガキ痕があるものの、それより下半は器面が荒れて残っていない。内外面に煤状炭化物が付着しており、特に外面の上半が著しい。40は、住居跡西辺の外側、西壁に接するように出土したものであるが、本住居跡に関連あるものと考えここで述べることにした。口縁部がほんのわずかにすぼむ筒形を呈する小型土器である。底部と口縁端部を欠いている。口縁部には不整の綾絡文、胴部には不整の撚糸文が斜位に施されている。胎土には繊維を含み、砂粒は多くない。焼成は普通で内面はやや荒れている。器内外面ともに煤状炭化物が付着しているが、外面胴部中位以上が著しい。

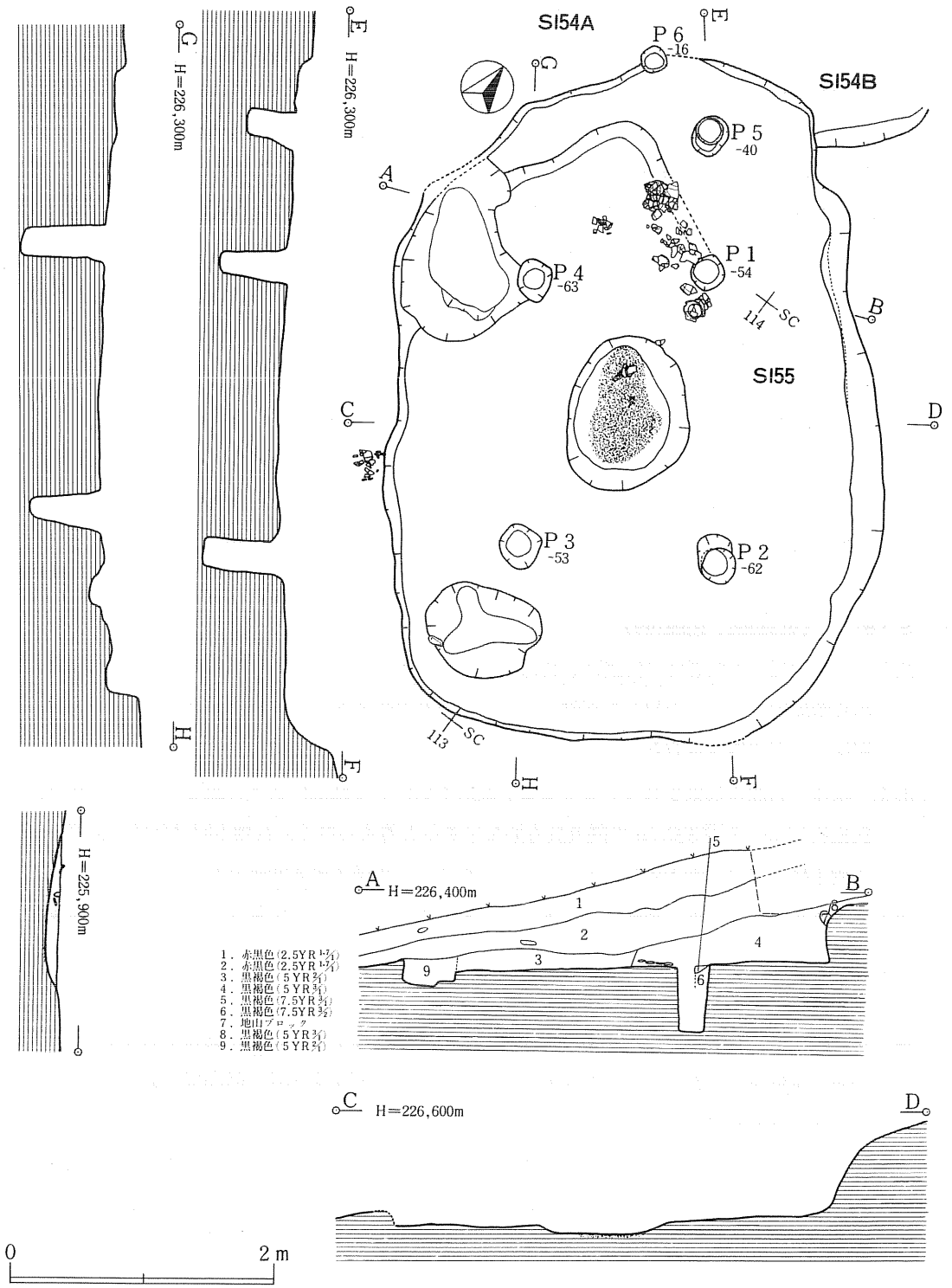
石器は、S55などが床面上から出土したが、覆土中から出土したものも含めて、全て捨てられたと考えられるものである。

S19〜46は石鏃で、そのうちS30〜46は製作途中で折れてしまったものである。これらを見ると、石鏃の素材となる剥片の厚さは3〜5㎜のものが主体を占め、7㎜前後（S29）は稀で、縦長剥片（S31・43など）よりも横長や不定形の剥片（S26・28・36など）の方が多く、このことは、SI54A・Bの覆土中から出土した石核（S76）の状況とも一致している。この他の石器としては、石鏃（S48）、石匙（S49〜51）、掻器（S52・53）、石箆（S54・55）くぼみ石（S64）、敲石（S65）などがある。S56〜63は種々の石器の破損品あるいは失敗品である。

SI56　（第378図、図版149）

位置・確認状況　調査区西端SC・SD113グリッドに位置する竪穴住居跡で、東側半分のみを調査した。SI54とした竪穴住居跡の東西土層断面のためベルトを西側に延長したところ、確認できたものである。本住居跡東壁と、推定されるSI54A・Bの西壁とは、およそ50㎝しか離れていない。

形態・規模　東側約半分のみの調査であるが、長径約3.5m、短径2.4m以上の隅丸長方形（あ



第379図　SI 55竪穴住居跡

るいは楕円形）プランを呈すると推定される。深さは、東壁部分で第Ⅵ層上面から55cmである。東壁東側の土坑様の掘り込みは、土坑か否か判断できなかった。

覆土　主体を占める6・7層中には木炭片や地山土粒子や小砂利が含まれ、強くしまっている。この中には、堅いブロック状をなしている部分もあるところから、周囲からの流入土というよりも、投げ込まれたものである可能性もある。

床・壁　床面は砂利層で、略平坦で堅いものの、ＳＩ54Ａ・Ｂ・55などの床面に比べると風化軽石が少なく、あまり滑らかではない。壁は良好で垂直に立ち上がっている。

壁溝・柱穴・炉　東半部分ではいずれも検出されなかった。隣接する同期の住居跡ＳＩ54Ａ・Ｂなどから壁溝は存在せず、主柱穴は２本で、地床炉を持つものと考えられる。

出土遺物　床面から出土した遺物はなく、覆土中から392図63〜65の土器と、400図Ｓ77〜80の石器が出土している。63は、わずかに外反する口縁部破片で、不整綾絡文が施されている。口唇部に縄文等はなく、内面にはていねいな横位のみがき痕が残っている。64・65は複節の斜縄文の施された胴部破片である。Ｓ77は石鏃の失敗品で、Ｓ79は削器、Ｓ80はノッチのある石器である。

ＳＩ81　（第380図、図版149）

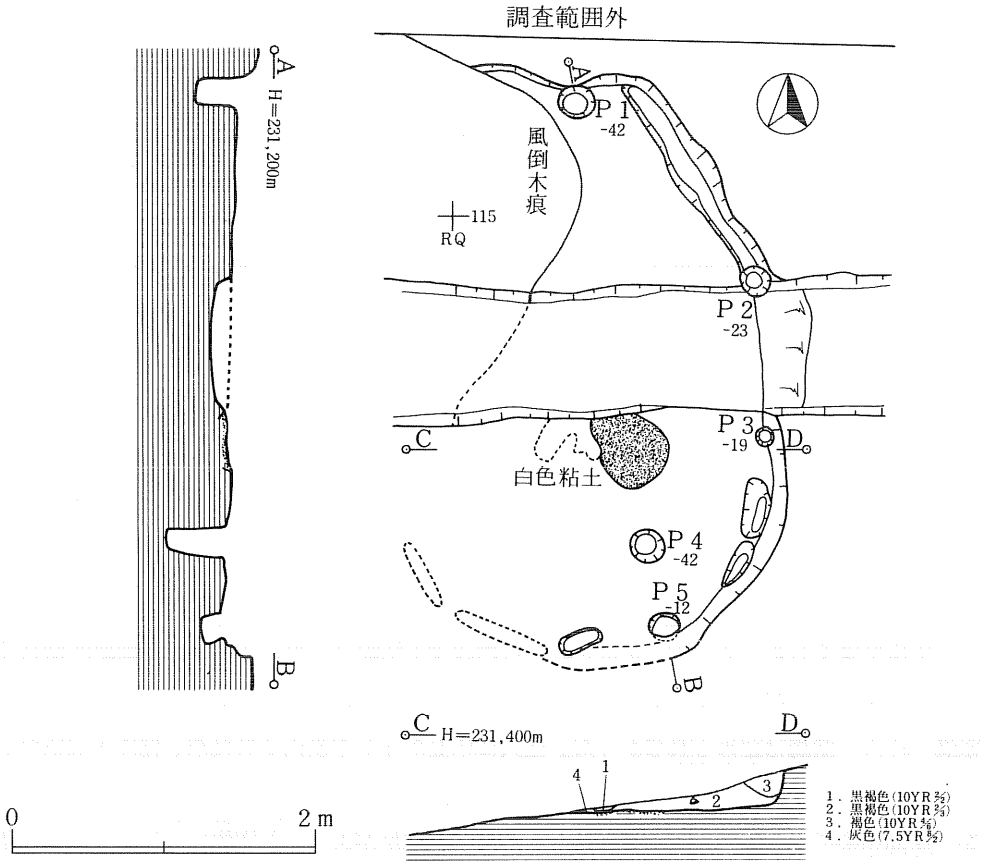
位置・確認状況　本住居跡の位置は、調査区西端のＳＩ51・55などから構成される竪穴住居群から斜度約11°〜12°の斜面を東側に上がった斜面中腹である。ＲＰ125・116グリッド第Ⅶ層地山上面で確認された。

形態・規模　斜面に構築されていることと、風倒木痕による攪乱によって西辺は不明であるが、長径約4.0ｍ、短径約2.7ｍの隅丸長方形を呈すると考えられる。長軸方向は略南―北で、北側主柱穴部分が若干内側に入っている。深さは、東壁で最大20cmである。

覆土　主体を占める２層は周囲からの流入土と考えられ、土器片も少量含まれる。３層は東側壁外からの流入土であろうが、堅くしまっており、地山土とあまり変わらない。４層は地床炉の西側にある灰白色の粘土である。

床・壁　地山砂利層を掘り込んでおり、小砂利の露頭はあるものの床面は概ね平坦でしまっている。東壁もしっかりしており垂直に立ち上がる。床面中央部は、範囲確認調査の際のトレンチで失われている。

壁溝・柱穴　東壁北部には幅10〜15cm、深さ２〜５cmの壁溝があり、東壁南部ではそれが断続的に続いている。東壁以外にも壁溝のあった可能性はあるが判然としない。柱穴は計５本を検出したが、位置・規模からＰ１・４が主柱穴である。Ｐ２・３・５は壁柱穴の可能性もある。



第380図　SI 81竪穴住居跡

炉　地床炉が、床面中央部南寄りにある。この部分、長径60cm以上、短径45cmの範囲が火熱によって赤化している。地床炉の西側に接して白色粘土（図の点線部分）が床面上にあるが、性格等は不明である。

出土遺物　地床炉のわずかに上位から392図66～68の土器が、覆土中から400図Ｓ81の石器が出土している。66～68は同一個体で、口縁部が外反する器形を呈する。口縁部（66・67）には不整の綾絡文、胴部（68）には粗いＲＬ斜縄文が施されている。平口縁の口唇上には、指頭によると思われる深い刺突列が施され、口縁端部が細かい波状になっている。胎土には繊維・砂粒を含み（特に繊維が多い）、焼成は極めて良好である。内面のミガキ痕はあまり見えず、凹凸があるものの平滑で、外面には煤状炭化物が付着している。Ｓ81は、石鏃の未製品と思われる。

S I 63　（第381図、図版150）

位置・確認状況　調査区の中央北端の小山の頂点から約17m西の緩い斜面に位置する。RK・RL112グリッド第V層中で確認された。周囲には、縄文時代前期の土器片が散在している。なお、住居跡北西部でSK84と重複し、SK84が本住居の床面を切って掘り込まれている。

形態・規模　斜面のため西壁は不明瞭で、南西辺は風倒木痕による攪乱を受けている。南北4.5m、東西約4mの略円形〜隅丸方形を呈する。深さは、明瞭な東辺で約30cmである。推定面積は約13.7㎡である。

覆土　1層が基本層位第Ⅳ層の自然堆積と思われる以外は、地山土粒子や砂利を含み、層界がはっきりしなかったりして複雑な土層堆積を示している。2〜6層は人為的に投げ込まれたものと思われる。7層は、東壁外に盛っていたと思われる土の崩落土と考えられ、壁と同じくらいに堅くしまっている。

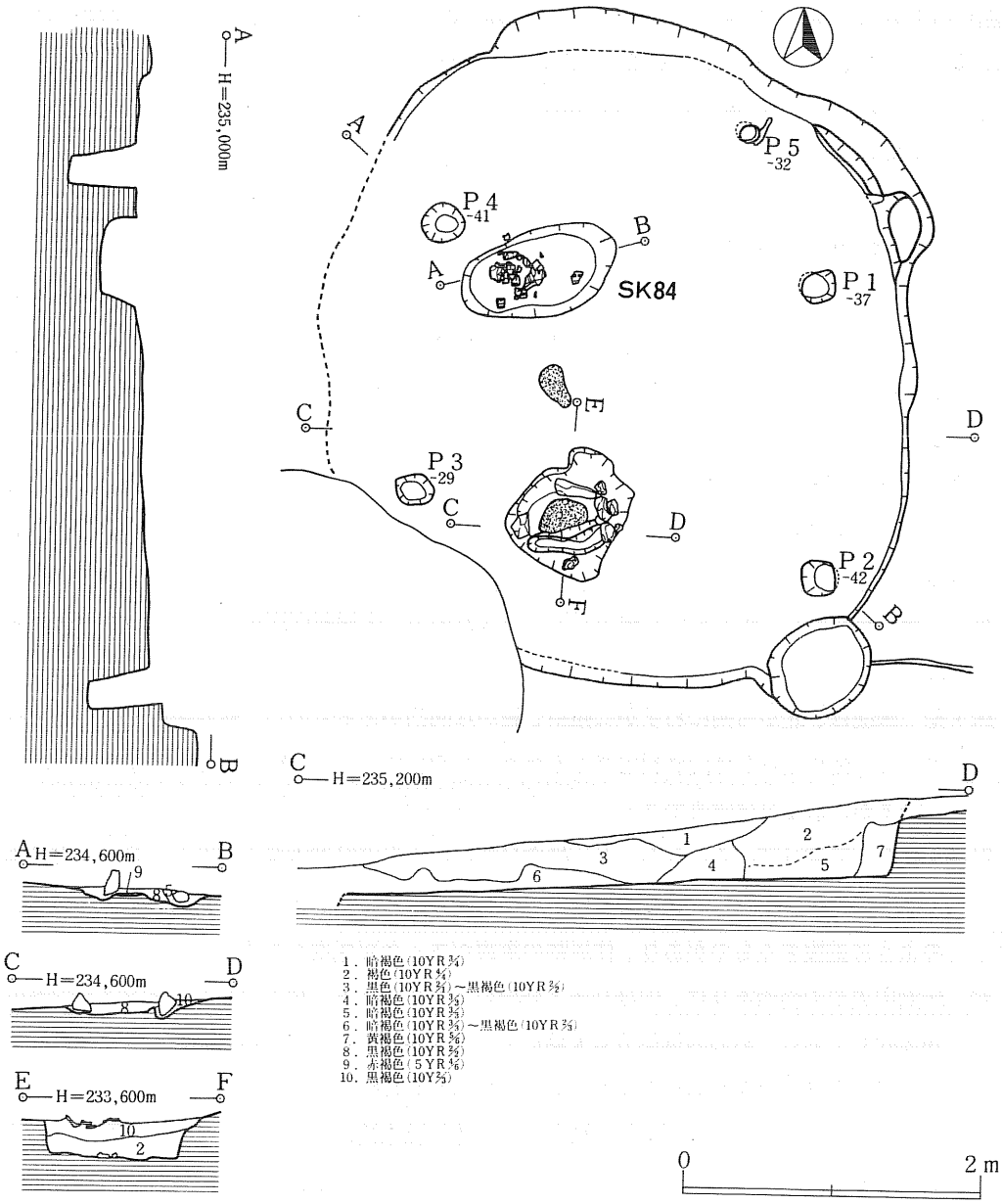
床・壁　床面には、特に東半部ほど地山の砂利が露頭しており、微細な凹凸が多いものの概ね平坦で堅くしまっている。壁は北辺から西辺で不明瞭で、特に西辺は、土層断面観察でも明らかに出来なかった。東壁は一部を除き、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝・柱穴　壁溝は認められなかった。柱穴は床面から5本検出されたが、位置・規模からP1・2・3・4が主柱穴である。

炉　床面中央部から南西方向に寄ったところに、石囲炉がある。石囲炉は、70cm×80cmの不整方形の浅い掘り込みの中に、河原石や角礫をほぼ円形に配したものである。本来は内径およそ30〜40cmに石を並べたものと考えられるが、一部は残存せず、その抜き取り痕が認められる。石囲炉内のスクリーントーン部分が赤化しており、石の中には内側部分が火熱を受け変色しているものもある。また、石囲炉の北側約50cmの床面が赤化しており、地床炉の可能性もある。

その他の付属施設　住居南東隅に径60cm、深さ12cmの円形の土坑様の掘り込みがある。出土遺物はない。本住居跡に伴うものか否か判然としなかった。

出土遺物　覆土中や一部床面から388図42、389図43〜46、392図69の土器、400図S82〜S84の石器が出土している。42は、中位やや上で若干膨んだ胴部が、わずかに内湾してゆるく外反する口縁部に至る深針形土器である。平口縁で、胴部下半を欠いている。文様は、全面にRL斜縄文を施した後に、口縁部から胴部上半にかけて沈線で縦長の波頭文が横位に展開されている。沈線は、細かいが粗く、截断面が平滑にされていない棒状の工具で施されたものである。波頭文は下端で連絡しあっている。内面の磨きはていねいで外面には煤状炭化物が付着している。69もほぼこれに似た文様の描かれた土器と考えられる。43〜45は



第381図　SI 63竪穴住居跡、SK84土坑

同一個体であるがうまく接合しない。外傾して立ち上がった胴部が上半でわずかに膨らみ、やや外反する口縁部に至る深鉢形土器である。全面よく磨かれて無文化されており、口縁部から胴部上半に細かく浅い沈線で、大きな構図の文様が描かれている。なお、無文化される前には無節の斜縄文が施されていたことが、同一個体の小破片からわかる。46は、石

囲炉の南東側約30cmの床面近くから出土した土器である。器形は42などに同じで、全面にＲＬ原体の縄文を縦位回転施文している。内面のミガキはていねいで、内外面ともに煤状炭化物が付着している。Ｓ83は、断面形が四角の細長い安山岩礫の稜に剥離を加えた後にこれを擦っている。主柱穴Ｐ５のそばに立って出土したものである。

ＳＩ59　（第382図、図版151）

位置・確認状況　調査区中央北端の小山頂部南側（ＲＩ111グリッド）に位置する。小山頂部から続く緩い斜面で、本住居跡の南辺から南側は急な斜面に移行する。確認面は地山上面である。本住居跡の床面北東部にフラスコ状ピットＳＫＦ69があり、これを埋めて床面としている。

形態・規模　南壁と西壁を確認できなかったが、柱穴配置によって推定できる。それによると、一辺約3.5ｍの隅丸方形と考えられ、推定床面積は9.4㎡である。深さは、北東側で地山上面から15～16cmである。

覆土　覆土がうすく、床面を早く確認してしまったので、土層断面図をとることができなかった。

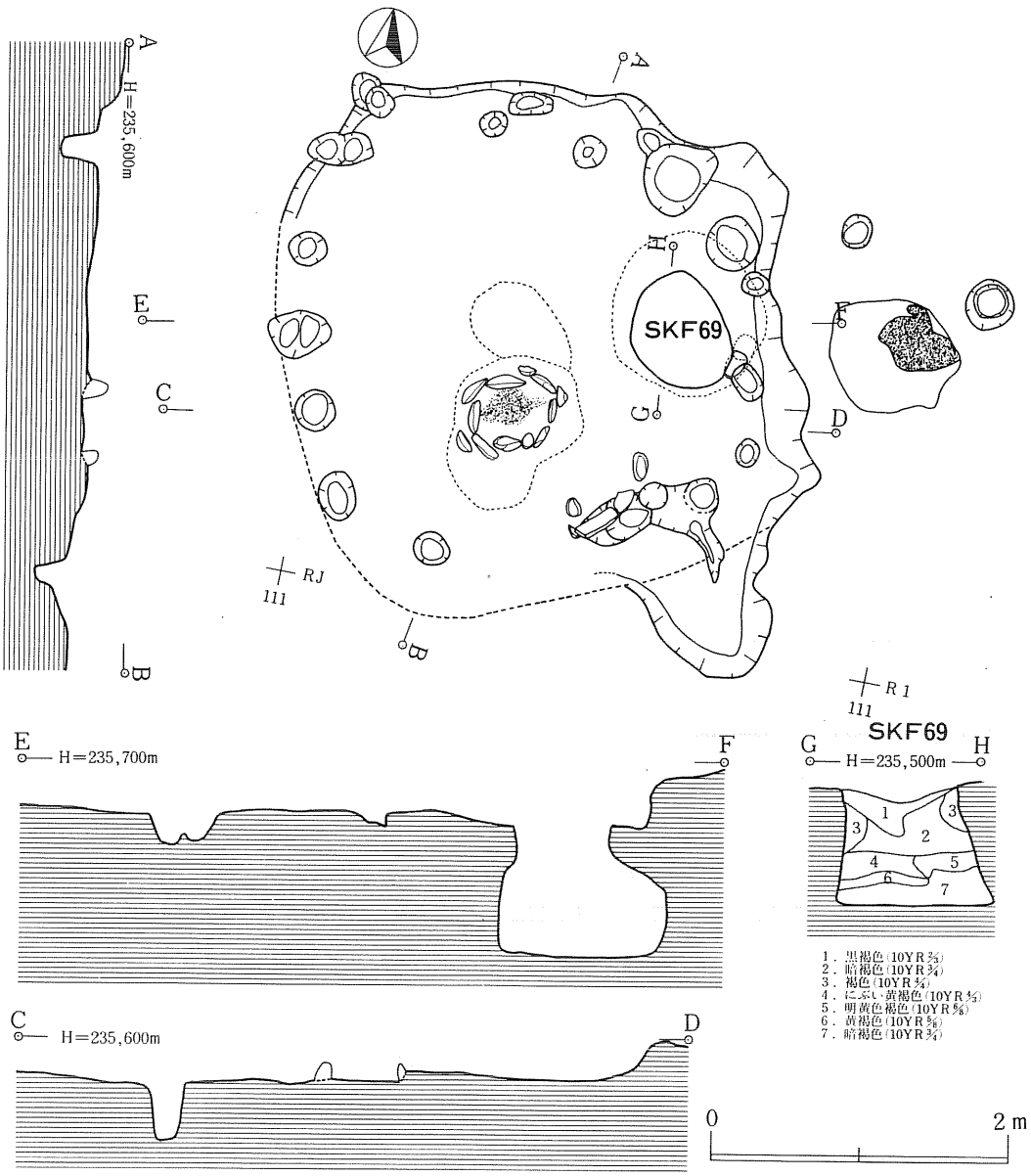
床・壁　床面は、北から南にわずかに傾斜し細かな凹凸があるものの、概ね平坦で堅くしまっている。掘り込みが地山砂利層であるため、やや崩れ易く、東壁は上部ほど緩やかな部分もあるが、他はほぼ垂直である。

壁溝・柱穴　壁溝は認められなかった。柱穴は壁に沿う形で計22本検出された。Ｐ５など数本を除く15～18本が壁柱穴になるものと思われる。柱穴にはＰ８と９、Ｐ20と19、Ｐ21と22のように重複するものがあり、住居跡の重複があった可能性もある。

炉　床面中央やや南西寄りに、内径35cm×45cmの石囲炉がある。炉内のスクリーントーン部分が赤化しており、石の内側部分も火熱によって変色している。この石囲炉の構築に際しては、床面をほんの僅か掘り込んで、その中に石を直に配している。石囲炉の外周もほんの僅かながらくぼんでおり（図の点線部分）、そこに木炭が粉になった感じの漆黒土が分布している。

その他　石囲炉の南東側50～70cmの床面上に、火熱によって一部変色した河原石が数個検出された。明らかに石囲炉に使用された石であるが、検出された場所と状態からすれば、ここに捨てられていたものと考えられる。本住居跡の石囲炉は原形を留めており、捨てられた時期は本住居跡廃絶後と考えられる。

　また、ＳＩ59の東側に、ＳＩ59の確認面を床とする住居跡の地床炉と考えられる焼土を検出した。床面と考えられる焼土の周囲も、部分的に平坦で堅くしまっているが、木の根



第382図　SI 59竪穴住居跡、SKF69フラスコ状ピット

等の攪乱による凹凸が著しい。P23・24の存在などからも、竪穴住居跡が存在したものと思われるが、詳細は不明である。

出土遺物　覆土中から389図47～50、392図70～73の土器と、400図S85の石器が出土している。47は、石囲炉の検出面で出土したものである。胴部上半を欠いていおり全体の器形は不明である。地文のない胴部には、鰭状突起に似た小さな円盤状の粘土塊を捻って多数器面に貼り付け、その間に沈線を垂下させている。胴部下端から底面にかけてはていねいに磨か

れ、底面はわずかに丸味を持って据わりが悪い。底面に笹葉の圧痕がある。残っている部分に関しては煤状炭化物の付着が見られない。48は、胴部中位やや下方で大きく膨らみ、口縁側に徐々にすぼむ器形を呈する深鉢形土器で、胴部中位以下を欠く。無文の口縁部下端には1条の沈線とその下には沈線によるうねりの大きな波状文が、さらに無文部には赤色顔料が塗られ、器内面にも塗られている。器厚が小さく焼成がやや不良で、内外面ともに煤状炭化物が付着している。49は、48とは逆に口縁部を欠き、器形や文様構成がほぼこれに同じであるが、口縁部下の波状文が波状のまま全周せず、3箇所で上の沈線に合流している。48は石囲炉のすぐ東側、49は石囲炉の北側約50cmの地点の床面から数cm上で出土している。50は底部からわずかに外傾して立ち上がった胴部が、ほぼ直立する口縁部に至る器形の粗製深鉢形土器である。口縁端が外に捻り出されたような形状を呈している。全面にＲＬ斜縄文が施され、器内面はミガキによって略平滑にされているが、外面は凹凸が著しい。内外面ともに煤状炭化物が付着している。70・71は48・49とほぼ同レベルの覆土下位から出土した中期末葉の土器で、72・73は覆土上位から出土した後期前葉のものである。S85は削器である。

Ｓ166　（第383図、図版152）

位置・確認状況　ＲＨ・ＲＩ109グリッドの南向き斜面に位置する。斜面下側の南半部は既に削平され、消失していた。

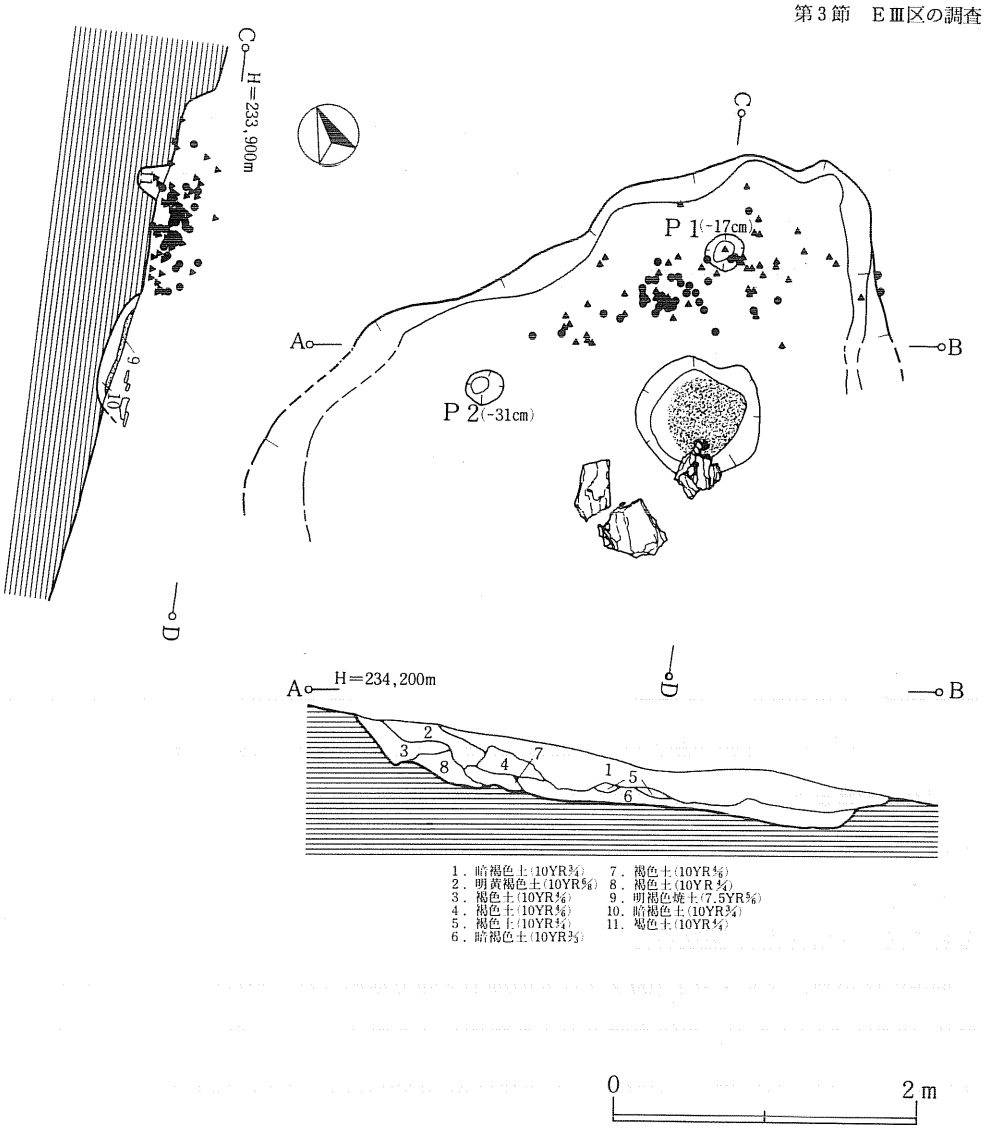
形態・規模　現状からは北辺が4.3m前後の方形プランを呈する可能性が認められる。北壁部分で確認面から床面までの深さは18cm前後を測る。

覆土　2・3・4・8層は壁の崩壊土を主体とする流入土、他の層はクロボク土を主体とする流入土である。

床・壁　床は掘り込んだ礫混じりの地山面をそのまま床面とし、貼床は認められない。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。

炉　径80cm前後、深さ10cm前後の掘り込みをもち、覆土上面が焼土化した炉を1基検出した。周囲には大形の板状礫が点在している。本来石囲炉であった可能性も想定されるが、炉石の抜き取り痕は確認できず、確実ではない。

出土遺物　（第390・393・401図）　51は口縁部を欠く深鉢である。頸部にＬＲ縄文の側面圧痕が施され、胴部にはＬＲ縄文が縦位回転施文されている。76は深鉢の口縁部から胴部上半にかけての破片である。口縁部上半は若干肥厚し、ＬＲ縄文が横位回転施文される。肥厚部下端には沈線が1条巡らされ、沈線以下にはＬＲ縄文が縦位回転施文される。口縁部と胴部の境にも沈線が1条巡らされ、胴部には渦巻き状の曲線的な文様が描かれる。77〜



第383図　SI 66竪穴住居跡

80は深鉢胴部の小破片である。77はＲＬ縄文を、78～80はＬＲ縄文を地文にもち、77～79には沈線で曲線的な文様が描かれる。Ｓ86は凹基鏃状の形態をなす頁岩製石錐である。両面とも全面に二次加工が施されている。Ｓ87は縦型石匙である。刃部先端を折損する。頁岩製縦長剥片を素材とし、素材の打面側につまみを作出する。主要剥離面側にはつまみの抉り部のみに二次加工が施され、表面には周縁に二次加工が施されている。

ＳＩ04　（第384図）

位置・確認状況　ＲＥ109・110グリッド周辺の東向き斜面に位置する。斜面下側の西南半は既に削平されているが、現状からは北西辺が４ｍ前後の方形プランをなす可能性が認められる。残りの良い北西辺で、確認面から床面までの深さは30cmである。

覆土　覆土は北西側の壁際に僅かに褐色土が堆積していたのみで、現状からは自然堆積したものと考えられる。

床・壁　床は掘り込んだ地山面をそのまま床面としている。北西壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝・柱穴　壁溝は認められない。柱穴は西半でＰ１～Ｐ４を確認した。直径20～30cm前後を測り、壁際を巡るものと推定されるが、東半部には認められなかった。

炉　75×42cm前後の楕円形プランで、深さ12cmの掘り込みを持つ地床炉１基を確認した。掘り込み中には黒褐色土が入れられ、上面が焼土化している。このほか西半部では壁や床面に小規模な焼土面が数箇所存在している。

出土遺物　（第393図）　土器破片を２点検出した。81は口縁部の破片で、山形の小突起をもち、Ｌ縄文地に沈線が施される。82は底部破片で、側面にＬＲ縄文が施される。

(2)　Ｔピット

溝状のＴピットと円筒状のＴピットが、それぞれ１基ずつ検出されている。両者ともに斜面の中腹にあり、単独で存在している。

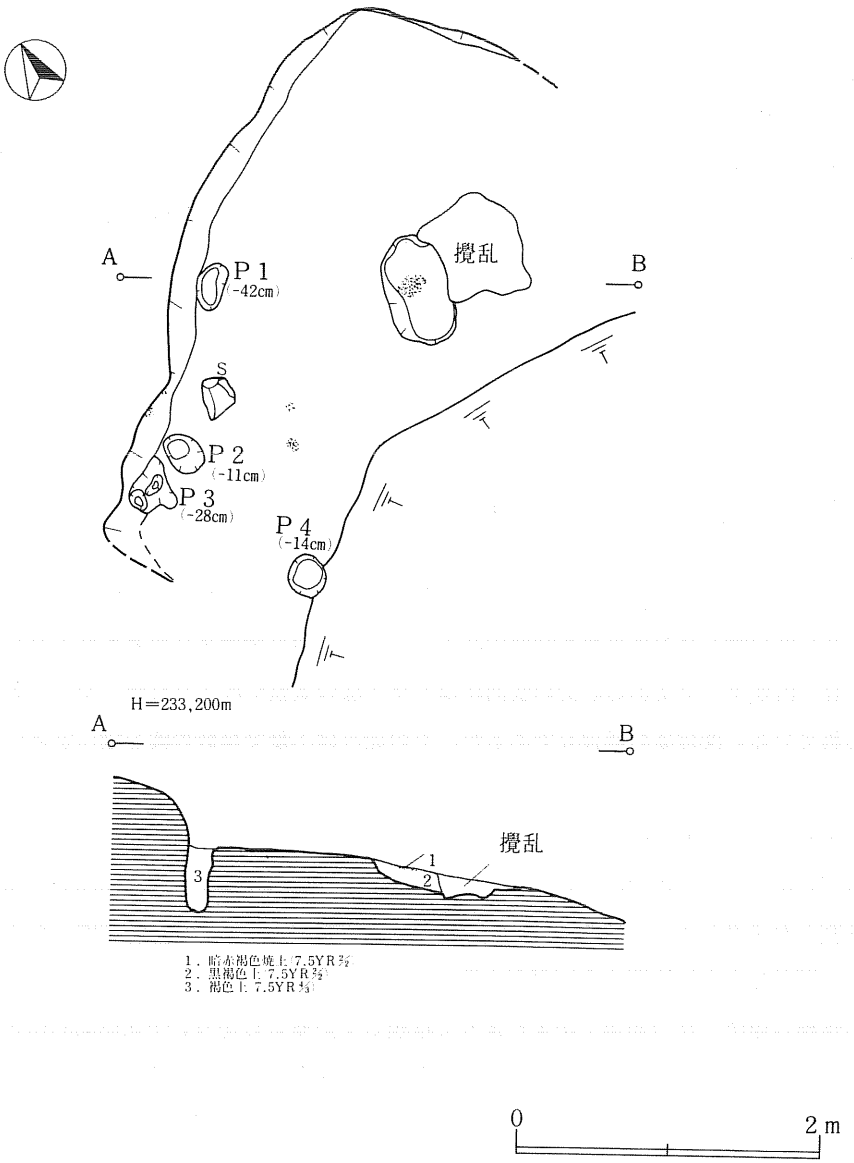
ＳＫＴ70　（第385図、図版153）

調査区中央部、ＲＫ・ＲＬ109グリッドの地山上面で検出された細長いＴピットである。斜度約13°の南西向きの斜面の等高線に沿う形で掘り込まれている。上面長3.9ｍ、底面長4.1ｍ、上面幅40～15cm、底面幅９～13cmで、上面幅は北西側ほど狭くなる。埋土１～３層には、地山土粒子を若干含みいずれも比較的軟く、自然堆積土と考えられる。遺物は出土していない。

ＳＫＴ53　（第385図、図版153）

調査区西部中央（ＲＲ、ＲＳ113グリッド）の西向き斜面で検出された。筒状を呈する土坑底面に、小ピットを有するＴピットである。土坑部の規模は東西1.35ｍ、南西1.5ｍの略円形で、掘り込み面からの深さは、東壁で1.2ｍである。小ピットは、径15～17cmの円形で、深さ35cmである。土層断面から本土坑掘り込み面は第Ⅴ層下部と推定される。

埋土は、７層と８層の層境を除いて漸移的で、１層以外は粘性を持ってしまっている。８層は、断面中央部を除いて強くしまっている。また、平面図中のａ・ｂ・ｃ・ｄは、坑底面から約50cm上での、平面的な埋土の状況を示したものである。ａ・ｂ・ｃの埋土は色調の違いこそあれ、風化した地山軽石を多く含み全体に粘性を持って強くしまっている。ｄはこれとは逆に、



第384図　SI 04竪穴住居跡

しまりがなくブカブカしており、これは底面の小ピットに連続している。これらのことから本Ｔピットの場合、小ピットに少なくとも長さ数十cmの杭状の木材を立てて、これをしっかり固定するためにある程度の厚さまで埋めていたものと考えられる。人為的に埋めた土の厚さは、８層の約15cmは確実であるが、それ以上であったのか否か判然としない。また、小ピットの埋土の状況は、小ピットに立っていたであろう杭状の木材が立ったまま廃棄されたのではなく、木材が抜かれた後の状況を示していると考えられる。遺物は出土していない。

(3) フラスコ状ピット

大小合わせて、4基のフラスコ状ピットが検出されている。3基は比較的急な斜面、1基は緩い斜面に構築されている。

ＳＫＦ01　（第385図）

ＲＥ110・111グリッドに位置する。開口部径120～130cm、底面径160～170cmのフラスコ状を呈する。確認面から底面までの深さは140cm前後である。

覆土は15層に分かれる。4・6・7・9～13・15層は壁の崩壊土を主体とする層である。一方、2・3・5・8・14層は炭化物を多量に混入し、土器も多量に含むことから人為的埋土とみられる。

出土遺物には多量の土器と若干の石器がある（第390・393・401図）。83は波状口縁をなす深鉢の口縁部破片である。2本の沈線で文様が描かれている。84も深鉢の口縁部破片で、2本の沈線が水平に巡らされている。85は口縁部に水平に張り付けられた隆帯が剥離した痕跡が認められる。86は深鉢の胴部破片である。ＲＬ縄文を地文とし、水平に沈線が巡らされている。52・87・88は撚糸文が施された深鉢である。52・87は網目状撚糸文が施されており、条の撚は52がＲ、87がｒとℓである。52の底面にはハケメ様の条痕が施された後「十」字形に沈線が加えられている。88は条の撚はＲであるが、その走行は不整で複数の縄を軸に巻き付けた可能性がある。89はＬ縄文が施された深鉢胴部破片である。90～92は壺破片で、3本の沈線で文様が施文されている。93・94は赤色塗彩が残る土器である。93は波状口縁をなす深鉢で、沈線が施されている。95・96は深鉢の底部破片である。Ｓ88は小形の縦長剥片に両面から周縁に二次加工を施したスクレイパーである。Ｓ89・90は凝灰岩製の円礫もしくは棒状礫を利用した凹石である。凹部はともに片面のみに存在する。

本遺構は壁際に壁の崩壊土がまとまって堆積していることから、一定期間開口状態にあったものと考えられ、本来貯蔵穴であったものと推定される。その後遺物とともに埋め戻されているが、覆土からの土器は完全に近いものは少なく、多くは部分的な破片である。この土器の出土状況からは、これらの遺物は貯蔵穴としての使用が途絶えた後の穴に廃棄されたものと推定される。本遺構の貯蔵穴としての使用時期は出土遺物に近い時期と考えられ、縄文時代後期前半頃であろう。

ＳＫＦ52　（第385図、図版153）

調査区西部の南西向き斜面（ＲＱ111グリッド）に構築されている。壁の崩落が著しく、原形を留めていないと思われるが、口径約1.0m、底径約1.2mで、頸部の径が0.8mである。深さは、東壁で90cmを測る。埋土は自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

ＳＫＦ73　（第386図）

調査区西部の西向き斜面中腹にある小さなフラスコ状ピットである。土層断面図作成時には、フラスコ状ピットであることが明らかであったが、その後壁が崩落して、平面図のようになっている。底径が約50cmの円形で、深さは東壁で45cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫＦ69　（第382）

ＳＩ59の床面下で検出された。開口部は崩落のため原形を留めていないが、径約0.6ｍの円形を呈していたものと考えられる。底面は径約1.1ｍの円形である。覆土は人為的な埋め土で、しまっている。１層の上部にＳＩ59の貼床が施されている。埋土中から392図74・75の土器が出土している。74・75は同一個体で、粗く浅い曲線で文様が描かれ地文はＬＲ斜縄文で、器内外面には赤色顔料が塗布されている。

(4) 土　坑

土坑は、10基検出されている。ＳＫ84を除く９基の土坑は、平面形が円形プランを呈し斜面にほぼ垂直に掘られている。これらの土坑は、特に１箇所に集中することはなく、散在している。遺物が埋土中あるいは底面から出土している土坑もあるが、遺物のないものが多い。従って時期を特定できない土坑もあるが、それらの周辺からは、前期か中期末～後期中葉の土器が出土しており、いずれかの時期に属するものと考えられる。

ＳＫ65　（第386図、図版153）

調査区西部北東端の西向き斜面（ＲＰ114グリッド）で検出された。北側約３ｍには、縄文時代前期の竪穴住居ＳＩ81がある。埋土中から縄文時代前期の土器の小破片が１点出土している。

ＳＫ78　（第386図、図版153）

ＳＫ65の南東約４ｍで（ＲＯ114グリッド）検出された。遺物は埋土中からフレイクが１点出土したのみである。

ＳＫ74　（第386図）

調査区中央部南西斜面中腹（ＲＯ109グリッド）で検出された。斜度約13°の斜面に構築されている。底面は平坦である。埋土中から遺物は出土していない。

ＳＫ75　（第386図、図版153）

調査区中央部（ＲＭ113・117グリッド）で検出された。埋土中から遺物は出土していない。

ＳＫ76　（第386図、図版154）

ＳＫ75の南西約2.5ｍに位置している。遺物は出土していない。

ＳＫ71　（第386図）

調査区中央部南側斜面下方（ＲＭ108グリッド）で検出された。他の土坑に比べ、掘り込みが垂直でないこと、底面も凹凸があることなどから不安もあるが、埋土の状況は土坑と考えら

れるものである。遺物は出土していない。

ＳＫ84　（第381図、図版154）

ＳＩ63竪穴住居の、床面北西部を切って構築された土坑である。ＳＩ63精査中に、本土坑上面から第390図53の土器が割れた状態で出土し、ＳＩ63に伴う何らかの施設かと考えられたが、位置と埋土の状況から、ＳＩ63よりも新しい土坑と判断した。長径1.1ｍ、短径0.6ｍの楕円形を呈し、ＳＩ63床面からの深さは25cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、底面はわずかに波打っている。53は、底部から外傾して立ち上がった胴部が、口縁部でわずかに外反して直ぐに内傾する深鉢形土器である。無文の口縁部４箇所に鰭状突起が付され、各々の鰭状突起部を刺突列で連絡している。４箇所の鰭状突起部のうち、２箇所は左に鰭状突起、右にボタン状の粘土塊が付されており、他の２箇所（１箇所は欠損している）では鰭状突起が対向して付され、その下にボタン状の粘土塊が施されている。ＬＲ斜縄文の施された胴部上半には、鰭状突起部に対応して沈線による「Ｊ」字文が描かれ、それぞれの下端は反転する沈線文と孤線で結ばれている。「Ｊ」字文の末端部には縦位の刻み目が施され、その屈曲部には上方の鰭状突起部に対応するようにボタン状の粘土塊が付されている。胎土には砂粒を多く含むが薄手に作られている。焼成は普通で、内外面には煤状炭化物が付着している。

ＳＫ79　（第386図）

調査区中央北部のＳＩ59の北西約3.5ｍで検出された。遺物は出土していない。

ＳＫ60　（第386図、図版154）

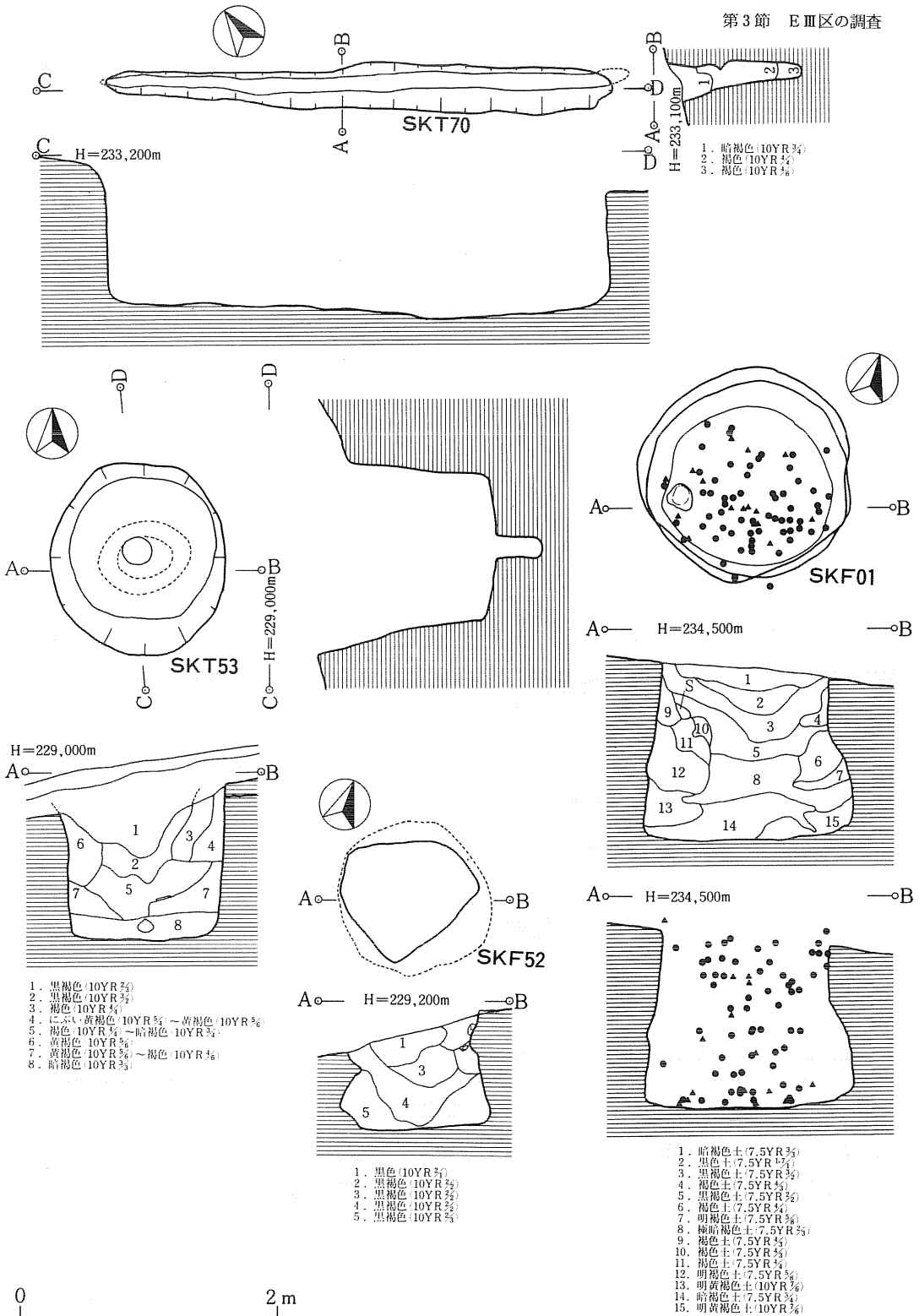
調査区中央南側斜面（ＲＩ・ＲＪ109グリッド）、ＳＩ66の西側で検出された。覆土の４層は人為的な埋め土かと考えられるが、２、３層は自然堆積土で、大湯浮石層がレンズ状に堆積していた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ02　（第387図）

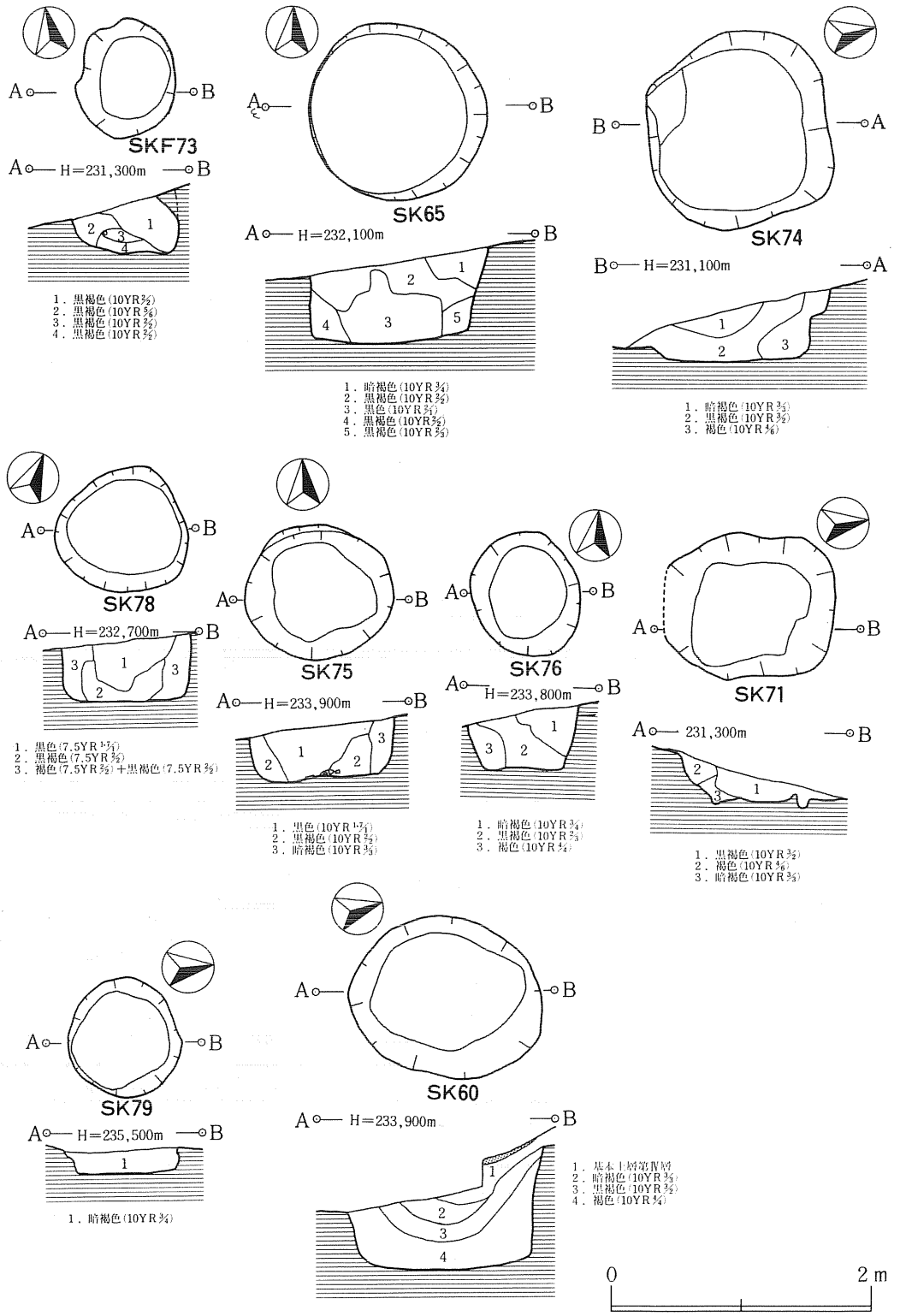
ＲＧ110グリッドの南向き斜面に位置する。斜面下側の壁は既に削平されているが、現状で180×160cmの楕円形プランを呈する。壁は斜めに立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは27cmを測る。覆土は４層に分かれる。４層が壁の崩壊土であるほかは、周囲からの流入土である。遺物は確認面で土器の小破片を検出しているが、本来本土坑に伴うかは不明である（第393図）。97・98はともにＲＬ縄文が施された深鉢の胴部破片である。

ＳＫ03　（第387図）

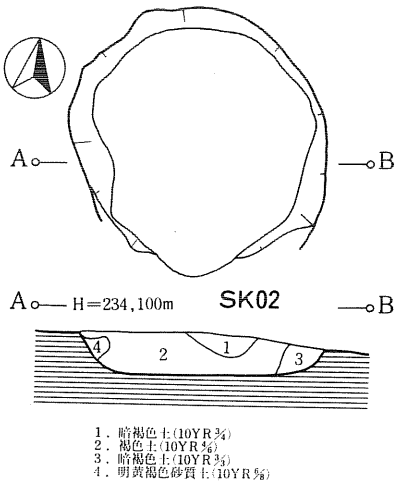
ＲＧ110グリッドの南向き斜面に位置する。西南隣にはＳＫ02が存在する。斜面下側の南端部は既に削平されているが、現状で87×60cmの楕円形プランをなす。壁は斜めに緩やかに立ち上がり、底面には若干の凹凸がある。確認面から底面までの深さは10cm前後である。覆土は２層に分かれるが、ともに周囲からの流入土である。遺物は出土しなかった。

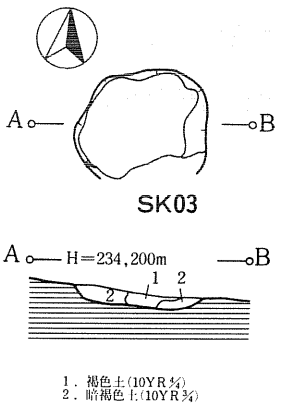


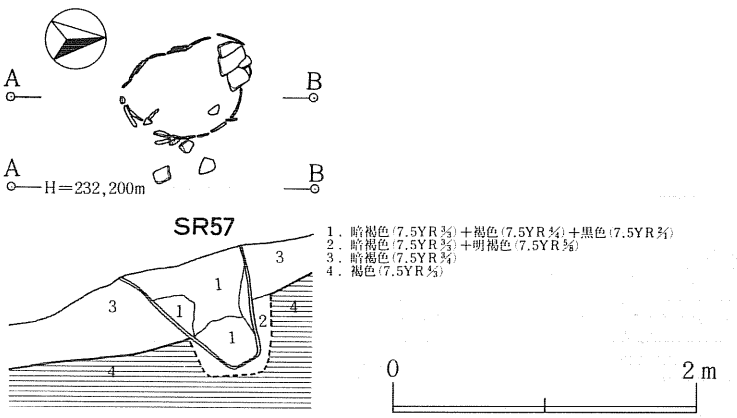
第385図　SKT70・53Tピット、SKF01・52フラスコ状ピット



第386図　EⅢ区　SKF73フラスコ状ピット、SK65・74・78・75・76・71・79・60土坑







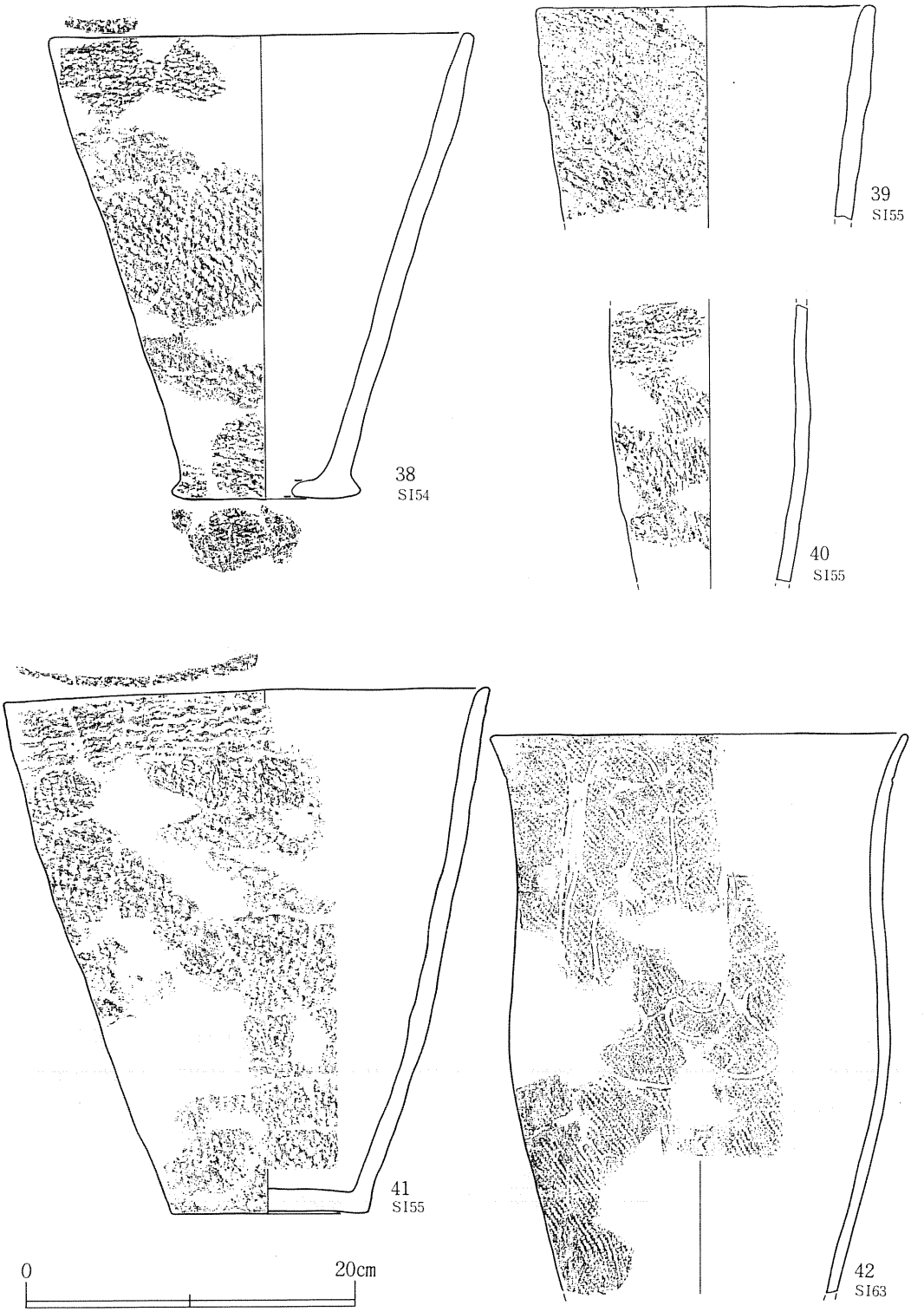
第387図　SK02・03土坑、SR57土器埋設遺構

(5)　焼土遺構

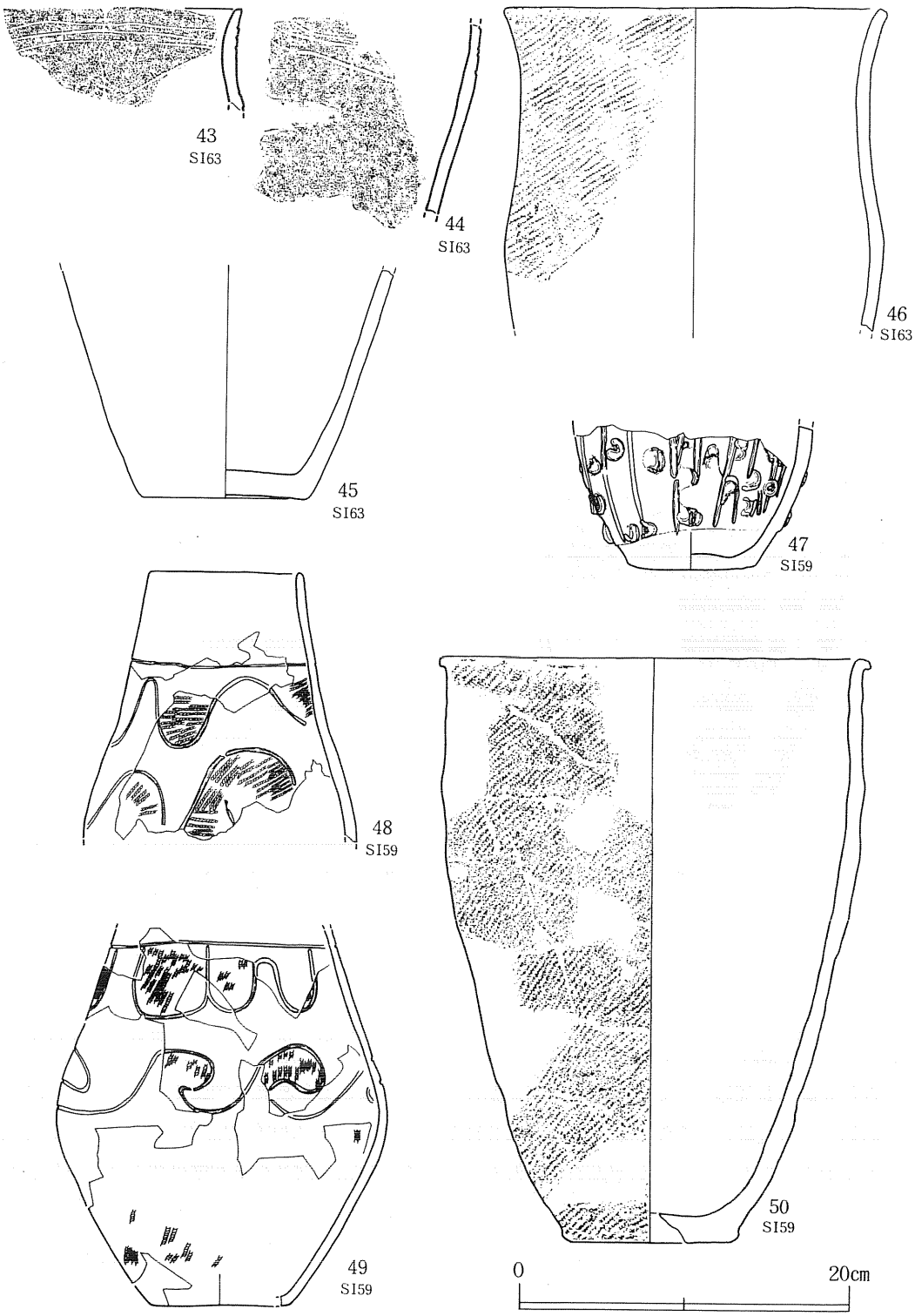
調査区中央北部からＳＮ61・82を検出している。いずれも住居跡の地床炉かと考えられたが、住居跡そのもののプラン等を明らかに出来なかったものである。両者とも周辺から中期末葉～後期初頭の土器片が出土しており、該期のものと考えられる。393図99・100はＳＮ61から出土した土器片である。

(6)　土器埋設遺構

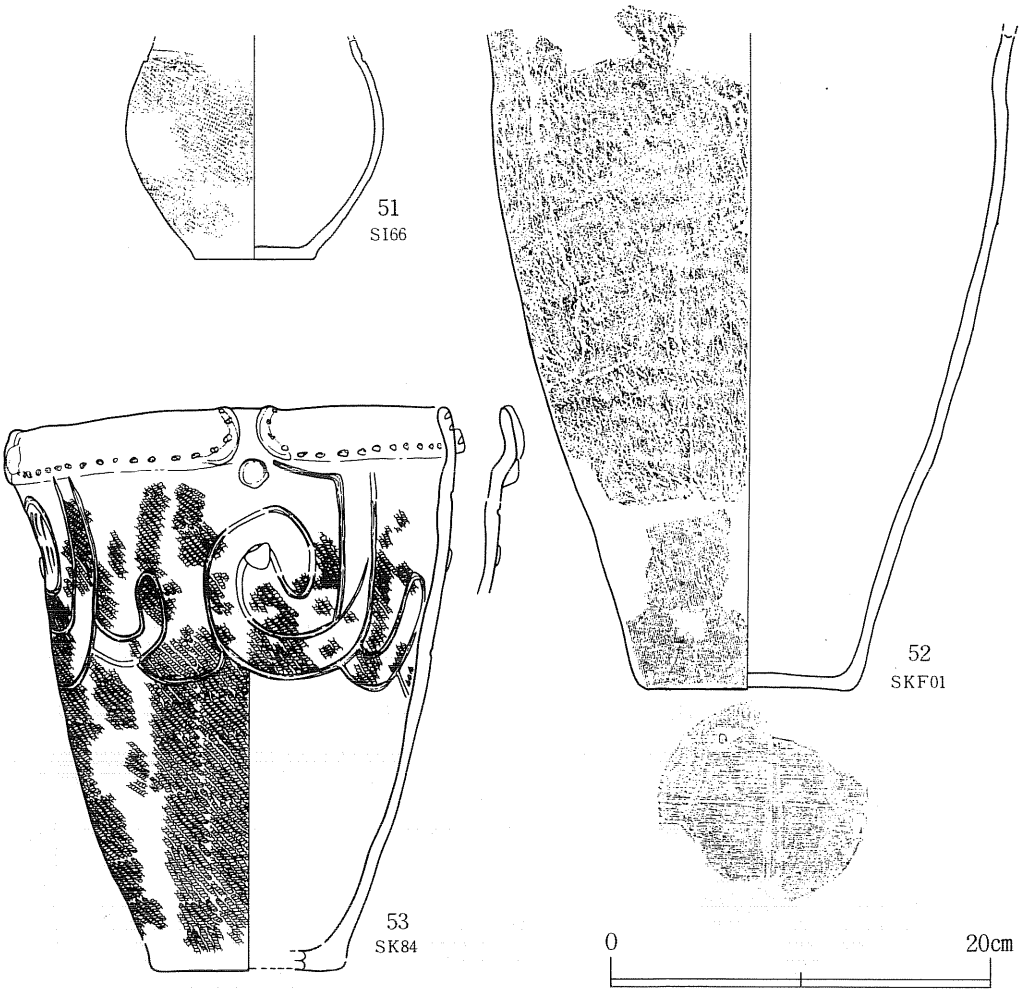
調査区内から、１基だけ検出された土器埋設遺構である。調査区中央南東部の南向き斜面に構築されていた。土器は、器中心線が斜面に直交するような形で埋設されているが、明瞭な掘方を捉えることができなかった。土器の口唇部は第Ⅴ層上位に、底面は第Ⅵ層上位にあり、地山を掘り込んでいない。第391図54が埋設された土器で、晩期前葉～中葉のものと思われ、Ｅ



第388図　EⅢ区　遺構内出土遺物（1）・土器（1）



第389図　EⅢ区　遺構内出土遺物（2）・土器（2）



第390図　EⅢ区　遺構内出土遺物（3）・土器（3）

Ⅲ区内ではこの期の遺構は本遺構1基のみである。54は、口径に比して小さな底部から外傾して立ち上がった胴部が、ゆるやかに内湾しながら口縁部に至る深鉢形土器である。口唇部内側がわずかに肥厚し、口唇部は内傾するように面取りされ、平口縁であるが、口唇部の1箇所にのみ2個のB突起が付されている。胴部全面の約⅔にはLRの斜縄文が施されているが、残りの約⅓には沈線による粗い渦文のような文様が描かれている（391図の左側）。これらの縄文や沈線文は器がかなり乾いてから付されたのと、その後にケズリやナデ等の器面調整が行われているために、浅く不鮮明になっている。胎土には細かい砂粒を含み、内面もケズリやナデ等で平滑に仕上げられている。胴部外面中位以上には煤状炭化物が付着し、下半は二次的火熱によって若干器面が剥落している。焼成は良好である。

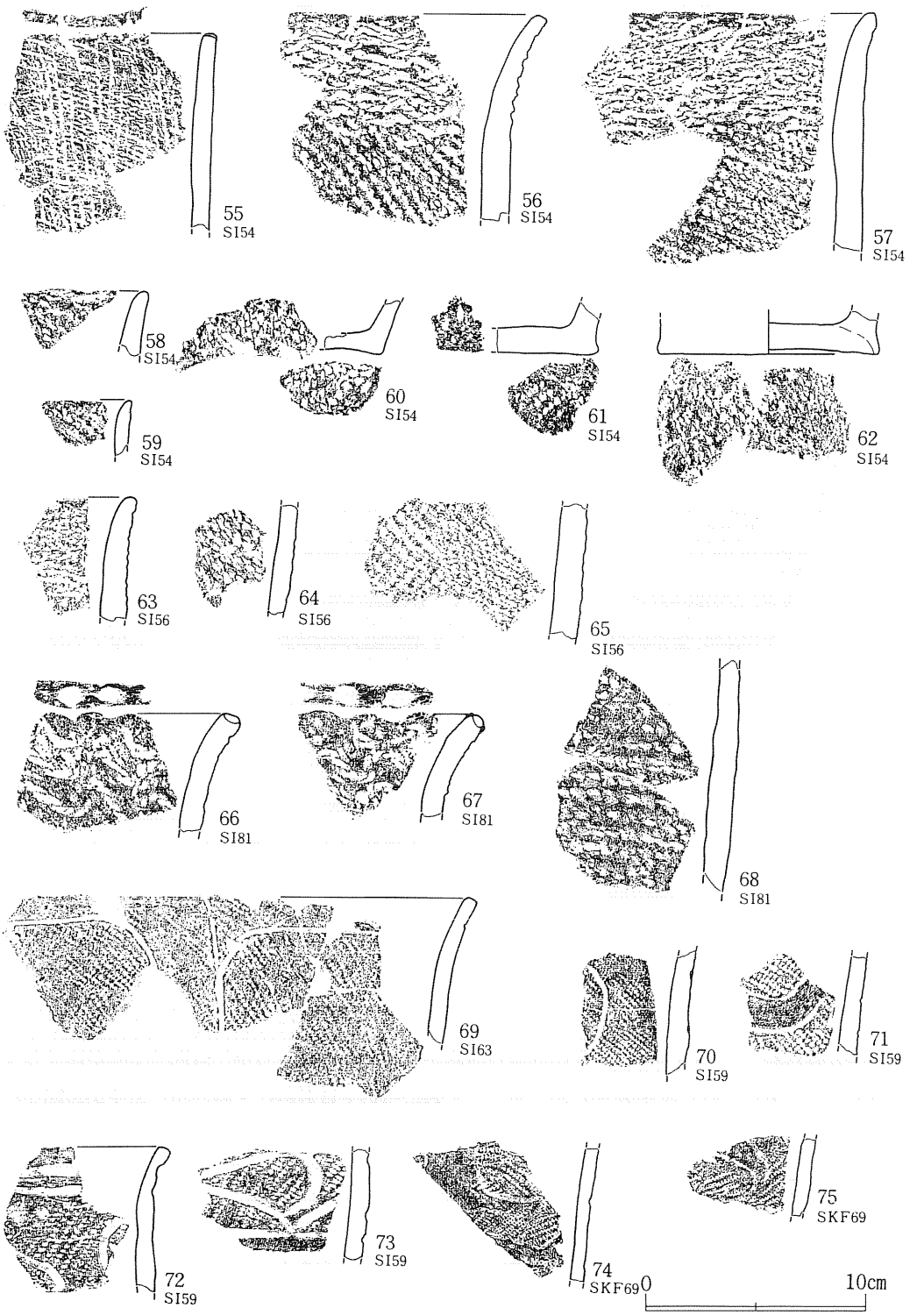
第391図　ＥⅢ区　遺構内出土遺物（４）・土器（４）

４　遺構外の出土遺物

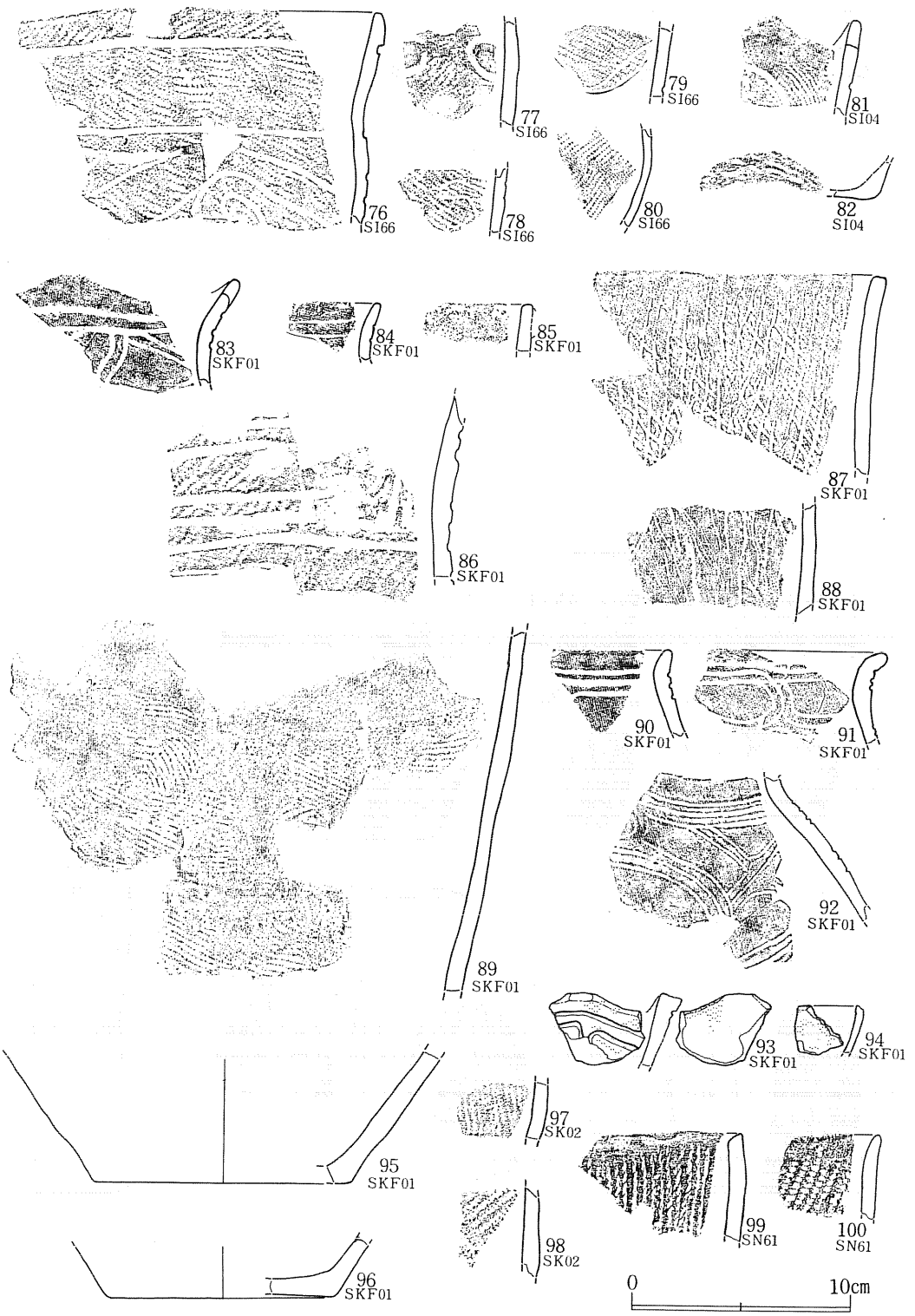
遺構外の出土遺物は縄文時代前期・中期・後期の土器とこれらに伴うと考えられる石器、弥生時代の土器、弥生時代に後続する時代の後北Ｃ式土器などが出土している。このうち土器は、概ねＲＨ112とＲＯ108グリッドを結ぶ線の西側から前期、東側から中・後期のものが出土している。ここではこれらを土器と石器に分け、土器については各時代・時期毎に若干の説明を行う。

(1)　土　　器

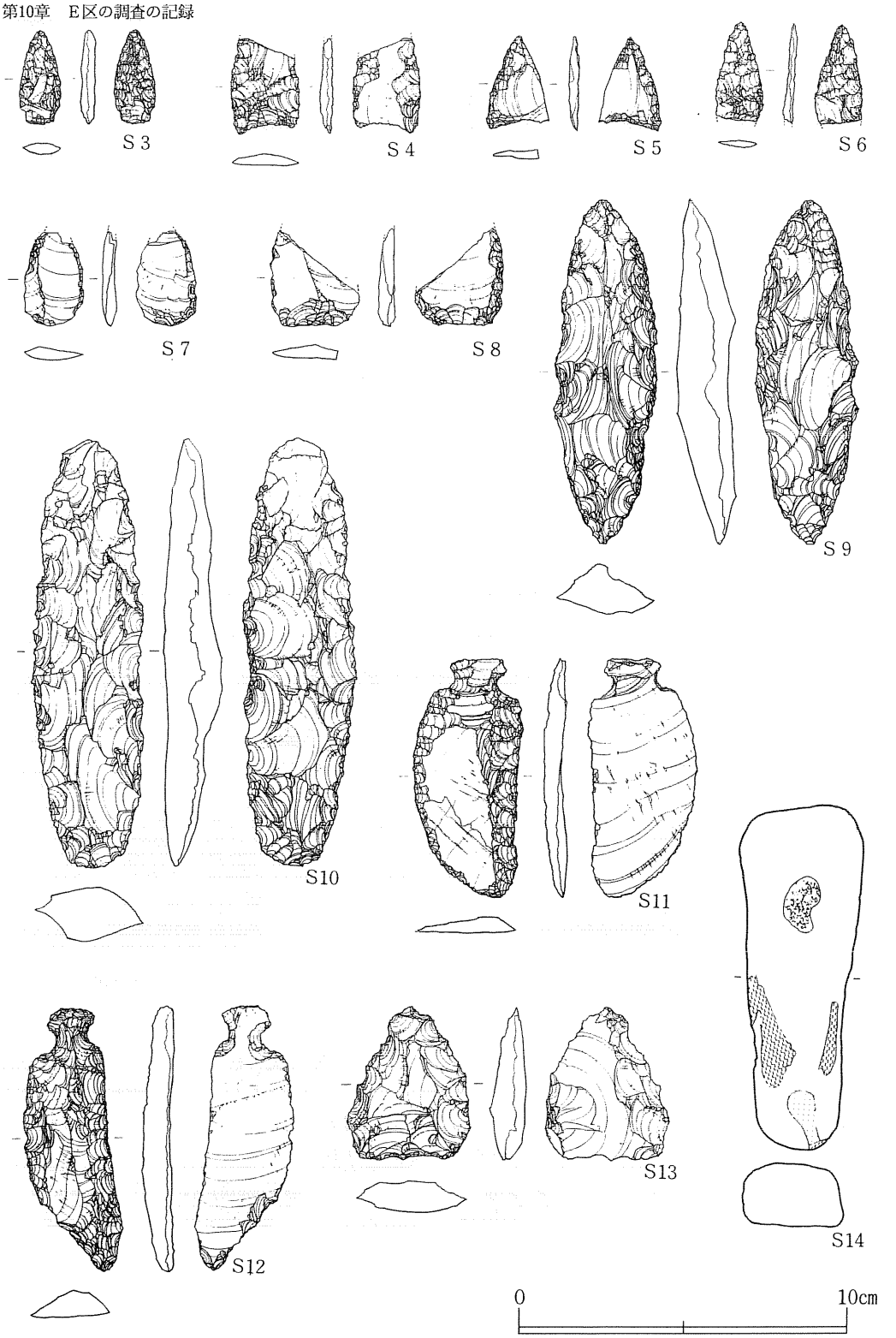
遺構外から出土した土器の約½が縄文時代前期中葉、他の約½が縄文時代中期末葉～後期前葉に属するもので、弥生時代の土器と後北Ｃ式土器は少量である。



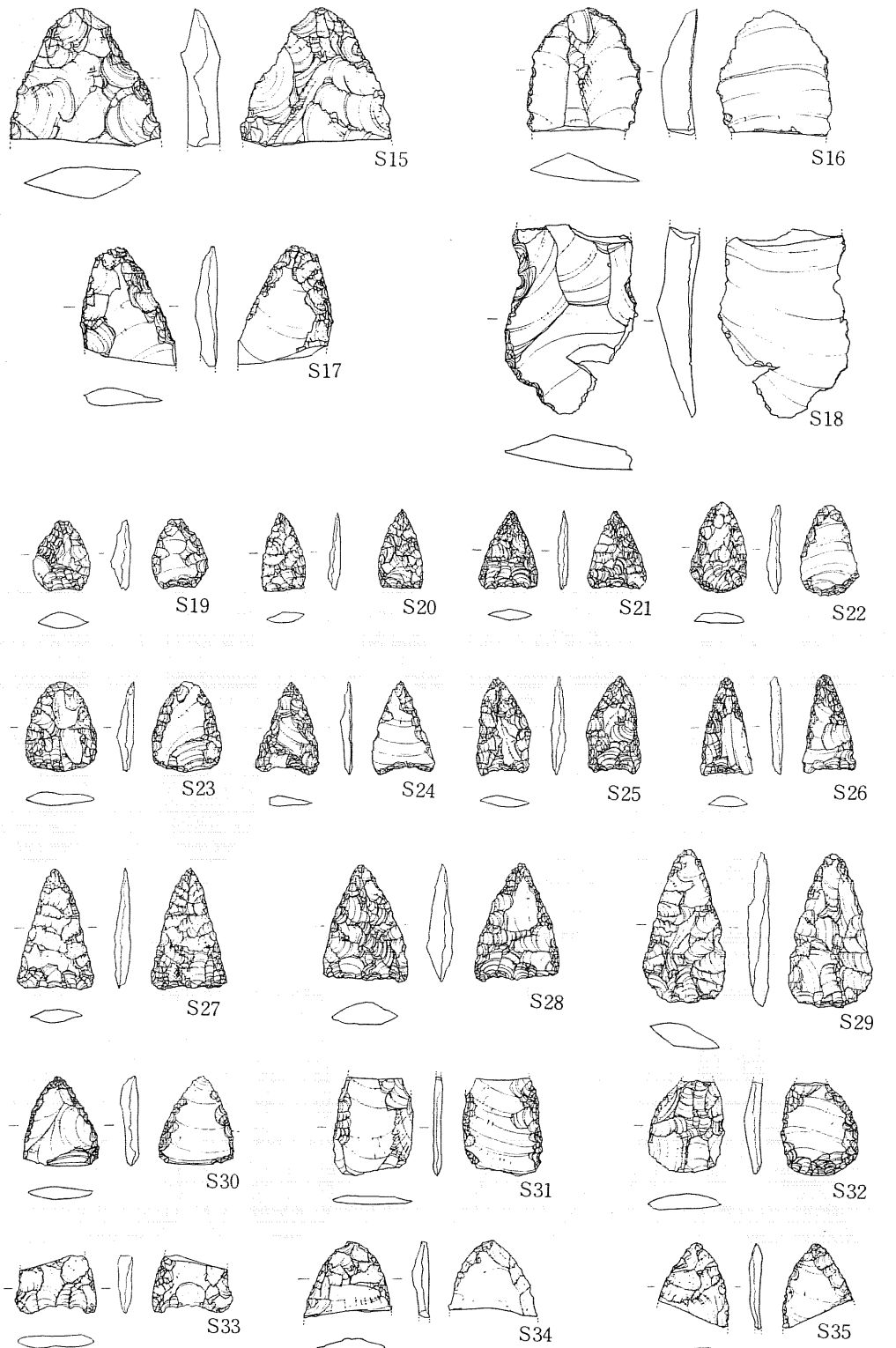
第392図　EⅢ区　遺構内出土遺物（5）・土器（5）



第393図　ＥⅢ区　遺構内出土遺物（６）・土器（６）

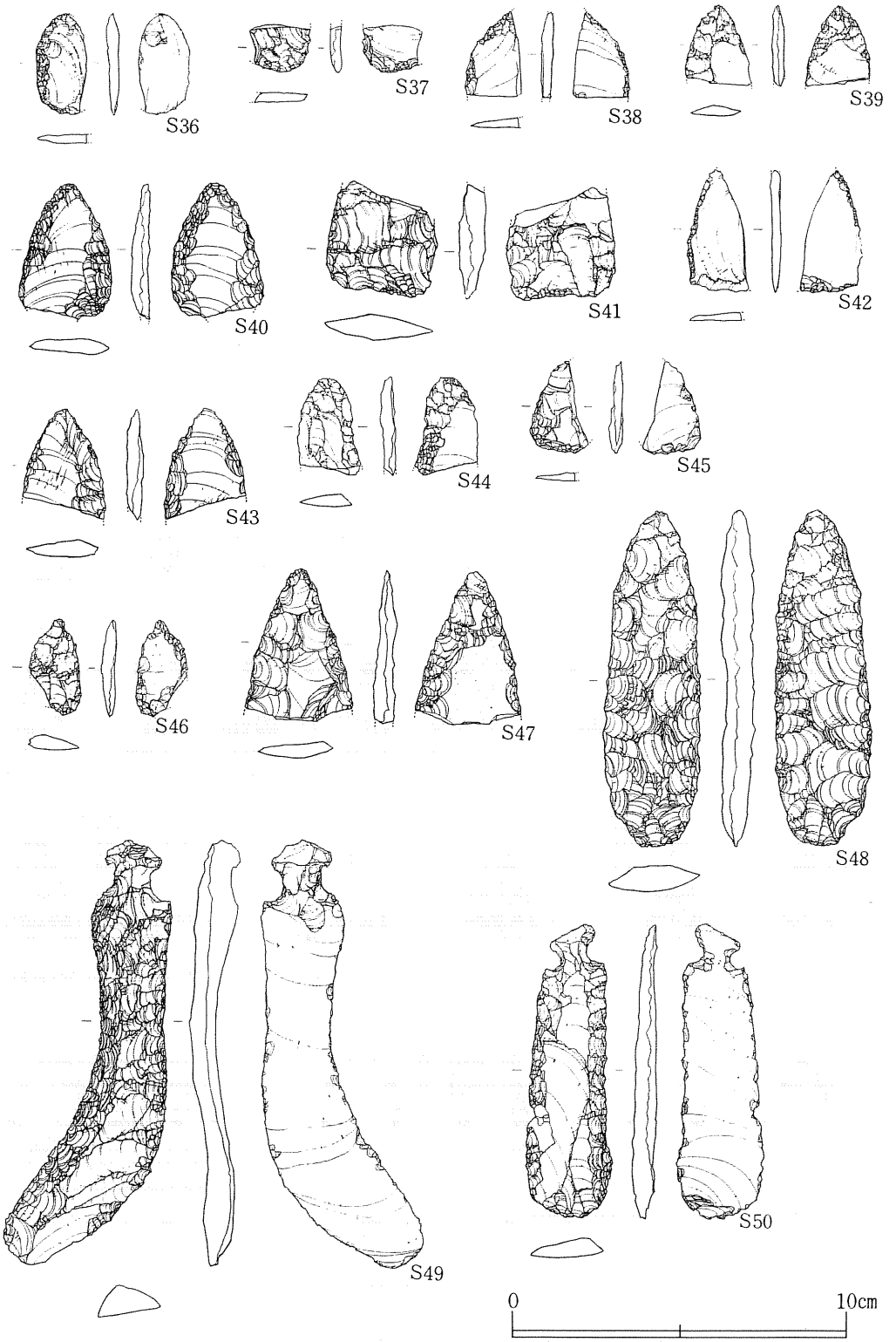


第394図　EⅢ区　遺構内出土遺物（7）・石器（1）

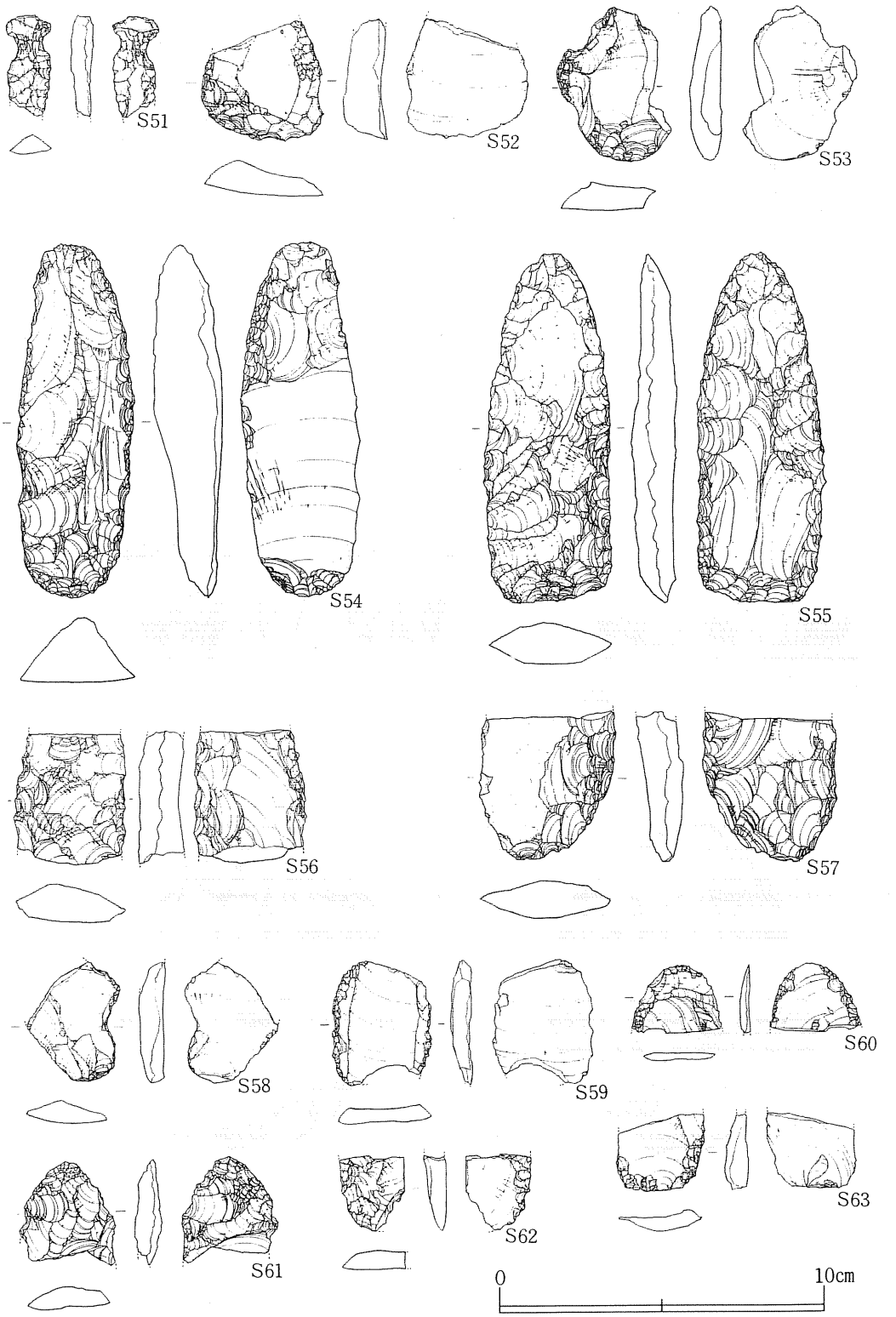


第395図　ＥⅢ区　遺構内出土遺物（８）・石器（２）

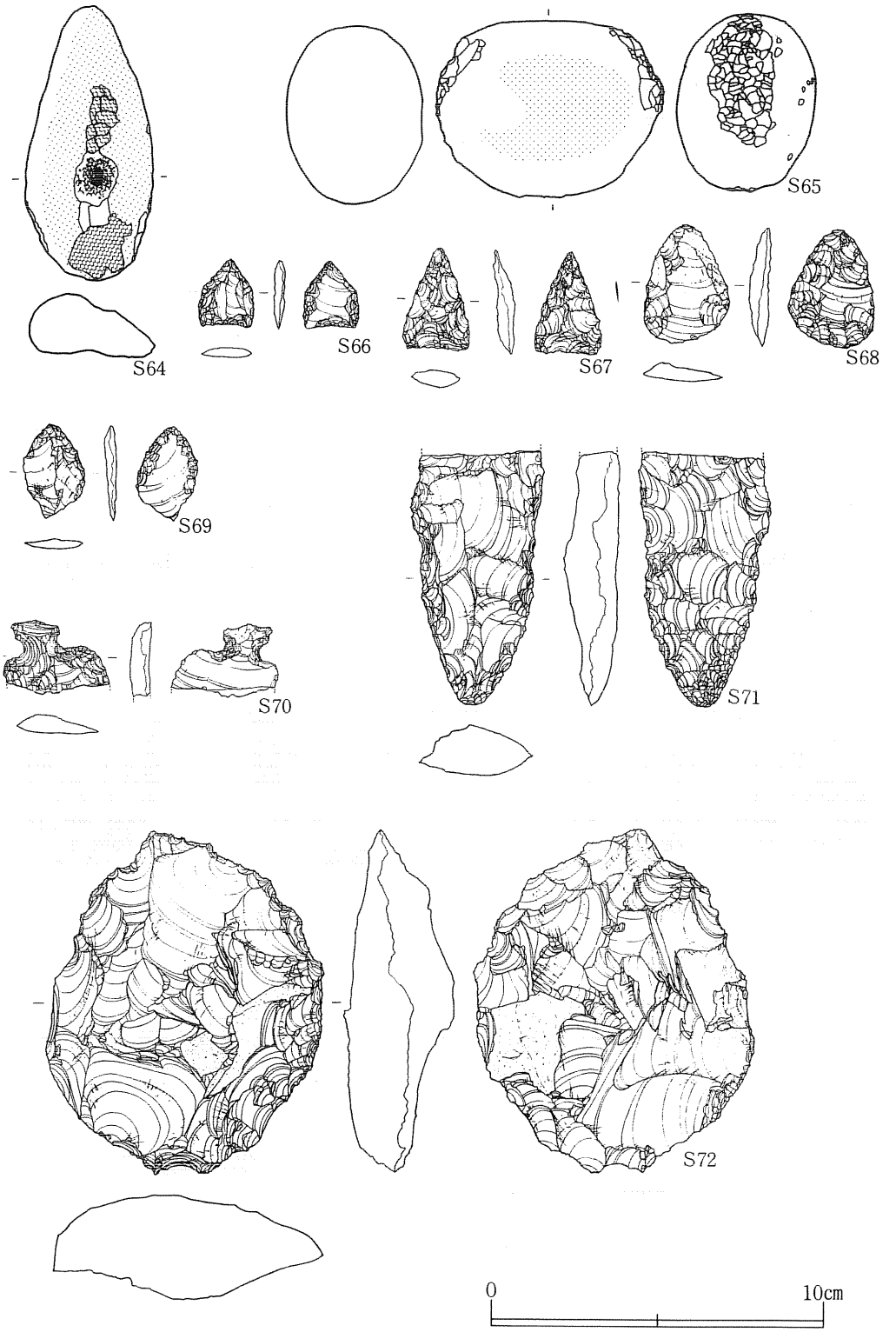
0　10cm



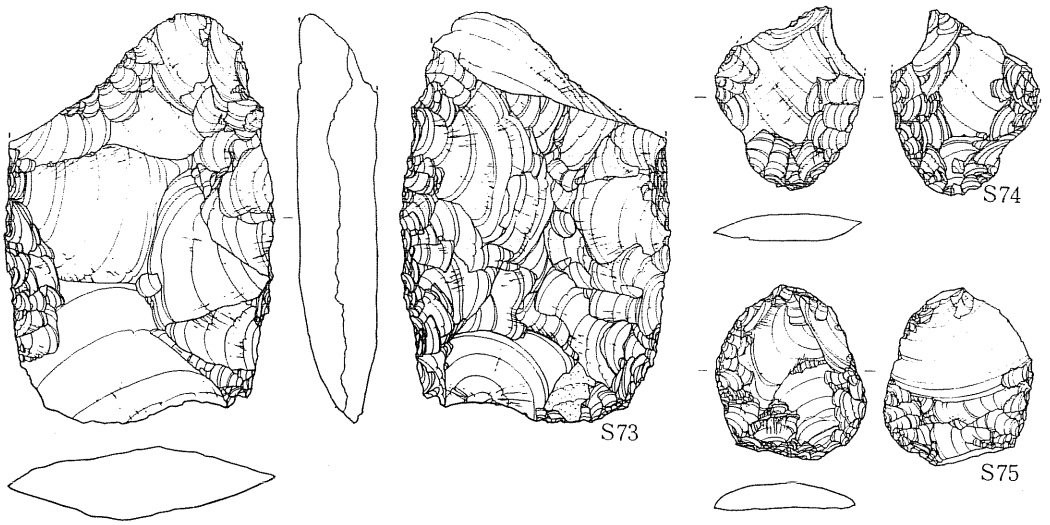
第396図　EⅢ区　遺構内出土遺物（9）・石器（3）

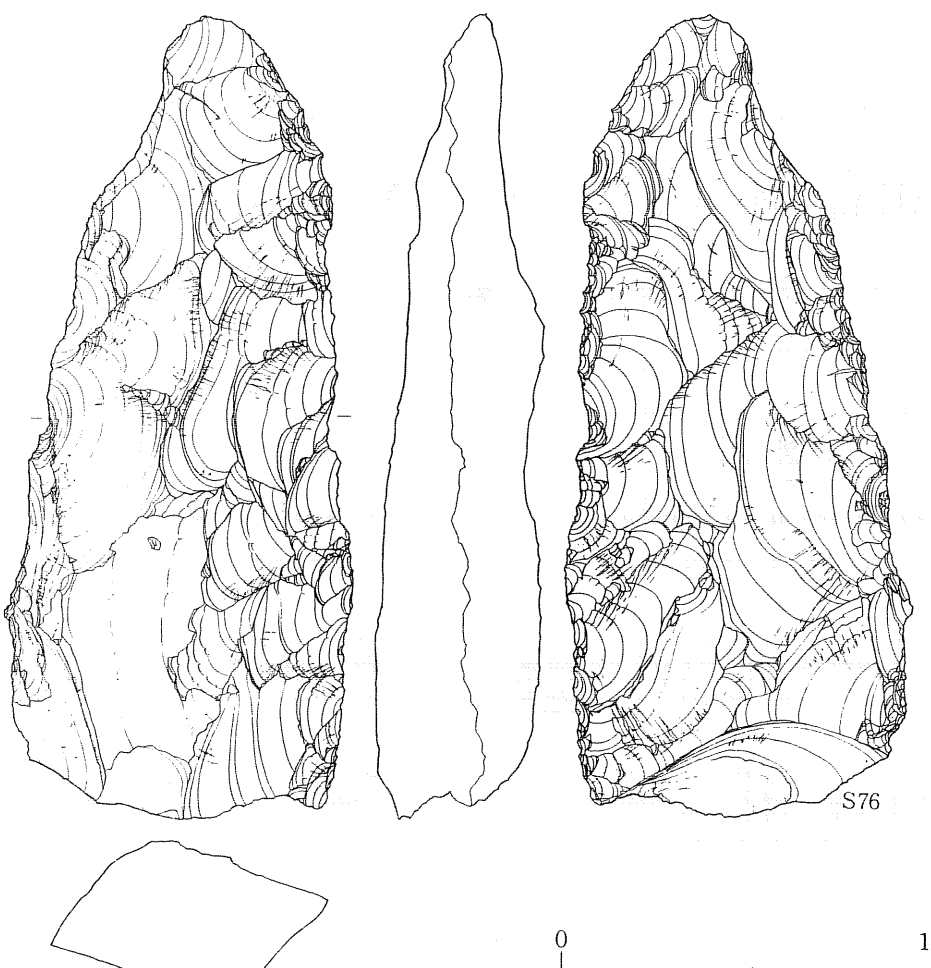


第397図　ＥⅢ区　遺構内出土遺物（10）・石器（４）

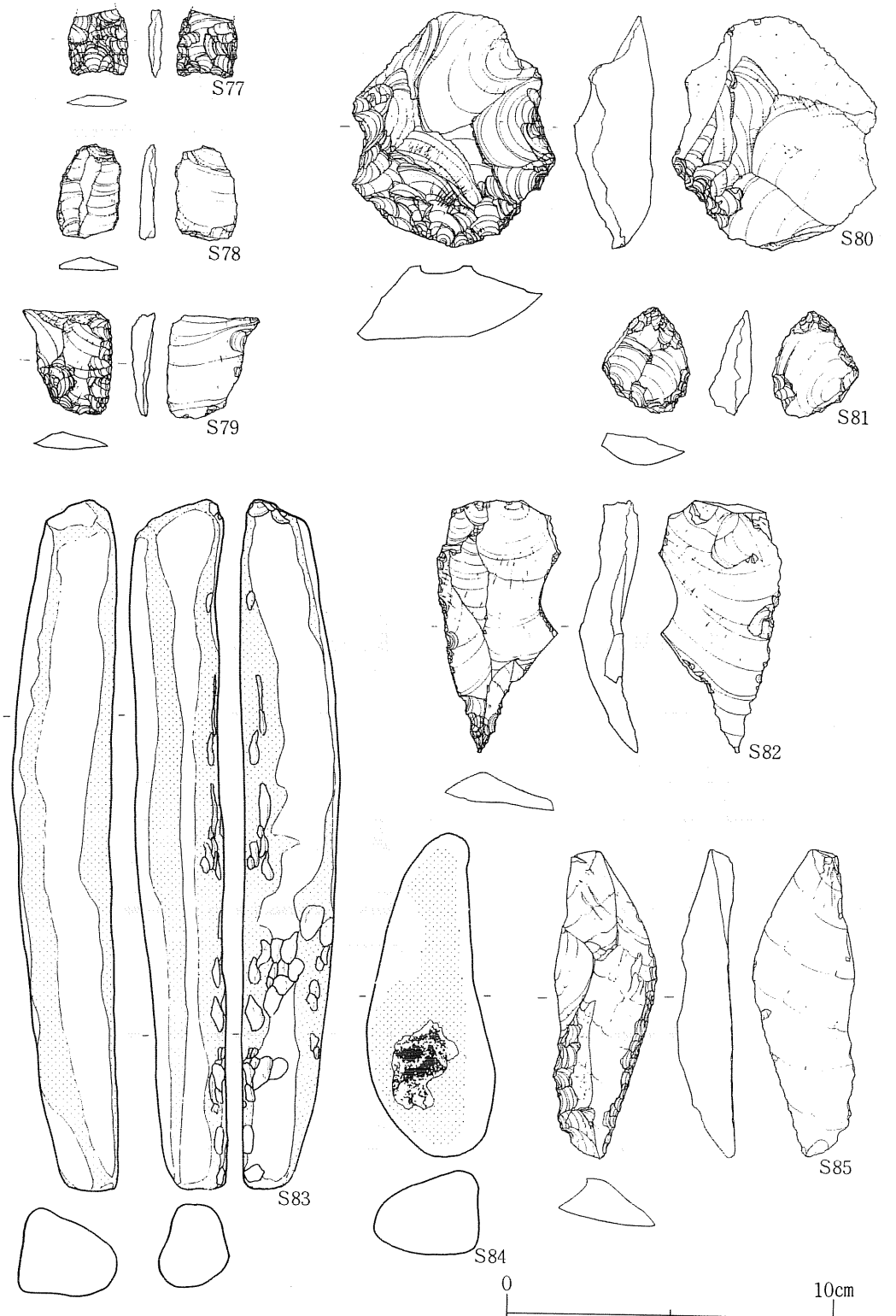


第398図　EⅢ区　遺構内出土遺物（11）・石器（5）

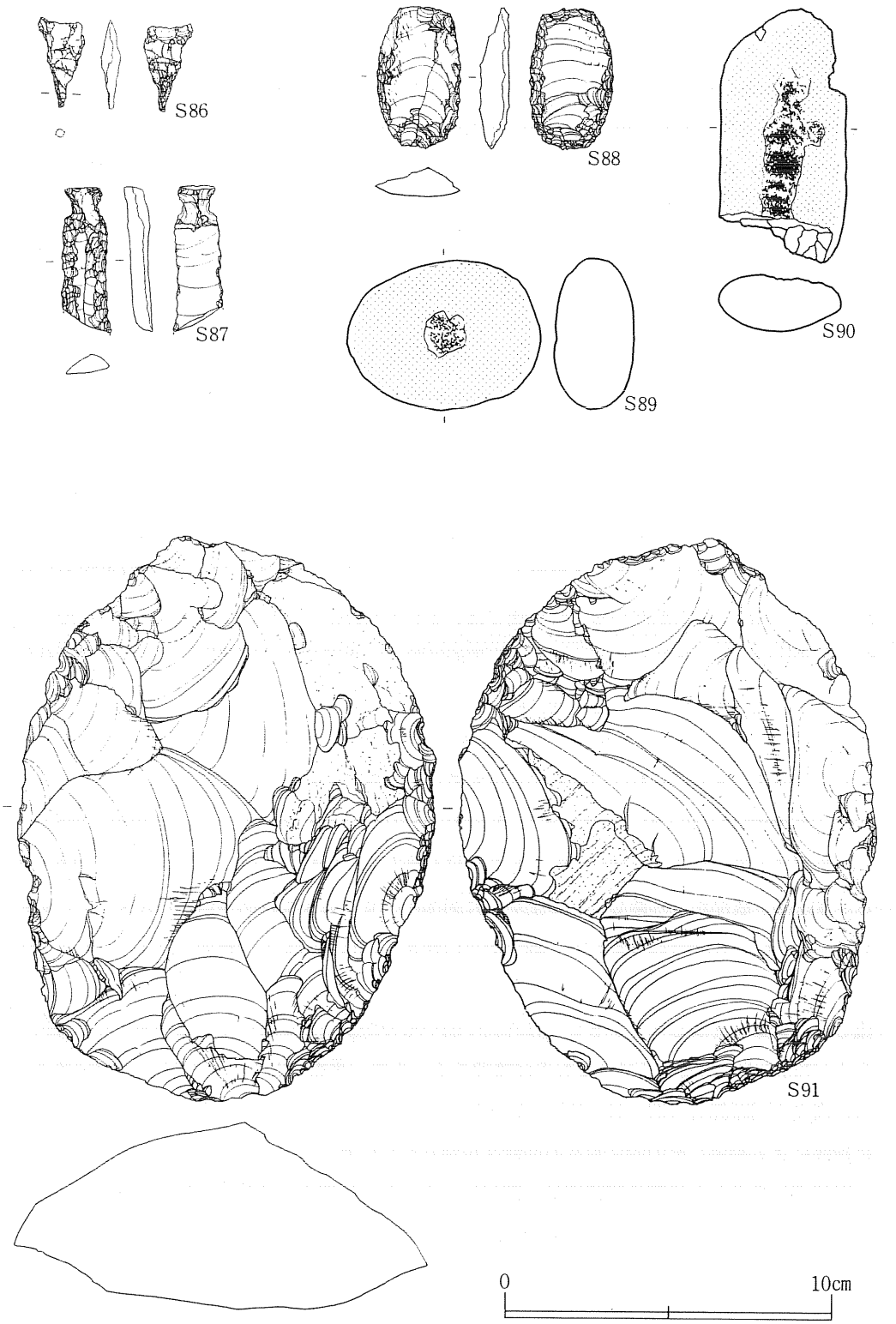




第399図　EⅢ区　遺構内出土遺物（12）・石器（6）



第400図　EⅢ区　遺構内出土遺物（13）・石器（7）



第401図　ＥⅢ区　遺構内出土遺物（14）・石器（８）

ａ．前期

前期の土器は、調査区中央にある小山頂部の西側緩斜面と、その下方の西向きの斜面から出土した。全て、ＡⅠ・Ⅱ区出土前期土器の分類の第Ⅰ群土器に属するもので１・２・３類と新たに設けた７類である。このため記述にあたっては、ＡⅠ・Ⅱ区出土の前期土器の分類に従い、遺構内から出土したものも含めて行う。

第Ⅰ群土器

原則として、口縁部に回転施文による各種の縄文が施された土器群である。ＥⅢ区の場合には、器形・口縁部文様帯の作出・隆帯の有無などによって４つに分類されるが、そのうちの３つはＡⅠ・Ⅱ区分類の第１・２・３に相当する。

１類（第388図39、392図59、403図107）

明瞭な口縁部文様帯を持たない類である。従って、口縁部と胴部には同じ原体による文様が施され、区画施設としての隆帯は付されない。39と59、107がそれで、器形は、胴部が底部からわずかに外傾して立ち上がり、そのまま口縁に至るものと思われ、口縁部は外反しない。３点とも平口縁で、平坦な面をなす口唇上には、107にだけ指頭によると思われる刺突列が施されている。口縁部から胴部に施された縄文は、３点とも複節の斜縄文である。胎土には繊維を含み、39ではこれに砂粒も目立っている。器面調整は、内面のナデ等が行われているが比軟的凹凸がある。焼成は良好である。39は口径20㎝とやや小型であるが、107は30㎝近い口径を持つものと思われる。なお、119は口縁部に斜縄文が施されており、あるいはこの類の可能性もある。この類であるとすれば口縁部が外反する小型土器である。

２類（第388図38・40・41、392図56～58、403図108～118・120・122～125・127、404図128～133）

口縁部に不整の綾絡文を横位回転させた文様を施すが、口縁部下端に隆帯を持たない類である。器形は、底部から外傾して立ち上がった胴部が、そのまま直線的に口縁に至るバケツ状のもの（38、41、108～112など）と、胴部から口縁まで筒状を呈して口縁部が外反しない形のもの（40、108、111、113）、口縁近くで若干～大きく外反するもの（114～120）などがある。概して口縁部が外反しない、もしくは外反の弱いものが多い。口縁は平口縁のものが圧倒的に多く、114のように波状を呈するものは稀である。また、平坦な面をなすものの多い口唇上には、縄文の回転施文（38・41・107・108・112）や斜位の押圧（115）があり、114では波頂部に指頭による刺突、その他に縄文の回転文が施されている。

口縁部に施された不整の綾絡文は、施文帯の幅が概して狭く、綾絡文自体も第Ⅰ群土器４類のものなどに比べて太くて粗く、条間も開いているものが多い。胴部に施される文様は複節の斜縄文が多いが、単節斜縄文の他に120のような異条斜縄文（付加条第２種）などがあり、127・132の結束のある木目状撚糸文も極くわずかであるが認められる。底部は、外縁が外に張り出

す形のもの（38・61・62・128・130・131）が多く、底面には縄文の回転文（38・60～62、129～131、133）の施された例が半数近くあり、網代痕のもの（132）も存在する。胎土には繊維を含み、砂粒を多く含むものと少量しか含まないものがある。器面調整は1類にほぼ同じで、焼成は極めて良好である。

3類　（第402図101、403図126）

口縁部文様帯の下端に隆帯を有する点では、第Ⅰ群土器4類に等しいが、隆帯が4類のものに比べて高く、隆帯上と口唇上に指頭などによる刺突列などの施された類である。101と126がこれで、完成品はない。101は、膨らみが少なくわずかに外傾する胴部が、短くて外反する口縁部に至る形の大型土器である。平口縁で、若干外向きに面取りされた口唇上には、断面形が円形を呈する工具による刺突列が1周している。幅の狭い口縁部にはうねりの大きな不整の綾絡文が施され、その下端には隆帯が付されている。隆帯は、その上下が指で摘まれて高くなっている。隆帯上には、口唇上のものと同じ工具による刺突列が施されているが、刺突のない部分には同じ工具の側面押圧が付されている。胴部文様は複節斜縄文である。胎土には繊維と砂粒を含み、特に砂粒が器内外面に多く見えている。内面の器面調整はナデが施たれているものの、凹凸がある。焼成は良好であるが、二次的火熱によって器表の剥落している部分がある。126も101とほぼ同じ器形を呈すると思われる大型の土器である。口縁部には不整の綾絡文が施され、1本の太い隆帯上には指頭による刺突列が付されている。胴部文様は不明である。胎土に繊維と砂粒を含み焼成極めて良好である。また、口縁部下端に隆帯を有するか否かが不明なために本類には含めなかったが、392図66～68（同一個体）も本類である可能性がある。66～68は平坦な面をなす口唇上に指頭による刺突列が施され、外反する口縁部にはうねりの大きな不整の綾絡文が施されている。

7類　（第402図102、403図121）

口縁部に太い縄文原体の側面圧痕文を4～5条横位に施し、隆帯を有しない類である。器形は、筒状を呈する胴部が上端でわずかに内湾気味となり、直立する口縁部に至るものである。平口縁で、平坦な面をなす口唇上には縄文が回転施文されている。口縁部の側面圧痕文は、第Ⅰ群土器5・6類や第Ⅱ群土器のそれと比べて非常に太く、骨太の感じがし、条の間隔も広い。102と121の胴部には、それぞれＲＬとＬＲ斜縄文が施されているが、それらは口縁部に施された側面圧痕文と同一の原体であると思われる。102と121の胎土には繊維と砂粒を含むが、102に砂粒が多い。器内面の調整は、121の口縁が横方向にみがかれ比較的良好であるが、102は表面がわずかに剥落し砂粒が見えている。両者とも器内面に凹凸がある。焼成は両者とも極めて良好である。なお、121の口径は102よりも若干小さい。

これらの土器群は種々の特徴から全て円筒土器下層ａ式に属すると考えられる。従って、E

Ⅲ区の縄文時代前期の集落は、円筒土器下層ａ式期という比較的限定された期間に存続したものと見ることができる。

ｂ．中期末～後期中葉（第404図・第405図）

第404図134は僅かに外反ぎみに立ち上がる平口縁の深鉢形土器である。口唇は平らに面とりがなされる。口縁と平行して描かれる沈線が垂直に降りて、さらに区画内に弧線となって入り込む。地文にはＬＲ縄文が縦回転施文される。135は区画文が磨消縄文手法を伴って描かれた深鉢形土器の胴部破片である。地文としてのＲＬ縄文が縦位に回転施文され区画文を構成する沈線が施された後、Ｖ字形の無文部分が定られる。無文部分には赤色顔料によって彩色された痕跡が認められる。136の深鉢形土器の胴部は拓影左端が垂直に施された沈線部分で断れている。おそらく、Ｊ字状の構図をもって描かれた区画文が施されたものと思われる。地文にはＬＲ縄文が縦位回転施文されている。137は外傾して開く波状口縁の深鉢形土器である。口唇上は平らに面とりされ、口縁は僅かに内湾し上端は内側に張り出す。口縁内面にも粘土の貼り付けが認められ、おそらく、波頂部内側に鰭状の貼付文としてあったものであろう。口縁外面は幅広の無文部が形成され、以下は沈線を水平に繞らし、一部で垂直にも施している。縄文はＬＲ縄文が沈線の施文後に縦位回転施文されている。

138は口縁上部が僅かに外反する平口縁の深鉢形土器である。口唇部は丸みを帯びて作られ、口縁直下にはＬＲの撚紐の側面圧痕が施される。以下は広く無文とされ、その下に斜位に粘土紐の貼付文が施されて、その上面にも口縁直下と同様のＬＲの撚紐の側面圧痕が施されている。139は僅かに外反する鉢形土器の口縁部破片である。口縁下には上側面に上からの刺突列を施した粘土紐貼付けの隆帯が施される。140は僅かに外反して立ち上がる深鉢形土器の口縁部破片である。口唇部は平らに面とりがなされ、器面には口縁以下結節部の回転文を伴ってＬＲ縄文が縦位回転施文される。

141は外反する平口縁の深鉢形土器である。口縁直下と胴部との境に３条ずつの平行沈線を繞らし文様帯を構成している。この口縁部文様帯中には２条の平行沈線によって横位Ｓ字状、弧状のモチーフが描かれている。胴部にもまた２条の平行沈線による曲線的な構図が描かれる。第405図142・143（同一個体）は口縁上端が短く外反する小形の鉢形土器である。口縁直下に３条の平行沈線が繞り、胴部には３条を単位とした沈線によって曲線的な構図が描かれている。144は胴部上半のくびれる鉢形土器の破片であるが、この場合は２条と３条の沈線を組み合わせて文様を構成している。145は頸部を繞る平行沈線下に反転して２条ずつで施文される沈線によって、綾杉状のモチーフが描かれた土器である。綾杉状のモチーフを縦位の孤線を中心に横位に展開する。146は浅い沈線によって、渦巻き状のモチーフを描く土器である。147は深鉢形土器の胴部下半の破片であるが、３条ずつの粗雑な沈線によって対向する孤線文を描き、そ

の後、器面を平滑に調整している。148は波状を呈する壺形土器の口縁部破片である。口唇は平らに面とりがなされる。口縁に沿って２条の沈線が繞り、沈線の施文後に器面の調整が行われている。149は波状口縁を呈する鉢形土器の口縁部破片である。波頂部には短い隆帯が施され、２条の沈線による帯状の区画文が施される。ＬＲ縄文が沈線施文後に充塡的に施されている。150も波状口縁の鉢形土器である。口縁は肥厚し口唇は平らに面とりがなされる。口縁部には４条の沈線が繞って２帯の縄文帯を作っている。頸部の湾曲部は無文帯とされるが、その下にも平行沈線が繞って縄文帯が設けられている。縄文はＬＲ縄文を横位回転施文したものである。151は僅かに外反する平口縁の鉢形土器であり、口縁下に３条の沈線が繞って縄文帯が作られている。縄文はＬＲ縄文を横位回転して施している。152は鉢形土器の胴部破片である。２条の沈線による縄文帯により文様が構成されている。縄文はＬＲ縄文が充塡的に施文されている。153は波状口縁の鉢形土器の波頂部片で、器外面は丹念に調整され無文とされる。154は波状口縁の深鉢形土器の波頂部片である。ＬＲ縄文が横位回転施文された後、口縁に沿って２条の沈線が繞らされ、波頂部に対応してやはり２条の沈線が垂直に短く降ろされる。沈線の連結部分の両側には沈線施文工具の先端で円形の刺突文が対に施されている。155〜158（同一個体）も波状口縁の深鉢形土器である。波頂部は幾分厚手に作られ、口唇部には刻みが施されている。口縁下には３条の平行沈線が繞り、波頂部に対応して小円文を２段に描き、沈線施文工具をを斜めに押し当てた刺突列が沈線間に施されている。胴部には斜位の平行沈線文(157)、蛇行沈線文(158)が描かれる。地文の縄文はＬＲ縄文を横位回転して施している。159は鉢形土器の胴部破片である。ＬＲ縄文を縦位回転施文した後、器面を水平に繞る沈線、蛇行沈線文を描いている。160は大きく開く波状口縁の鉢形土器の口縁部片である。波頂部には渦巻き状に貼り付けられた装飾突起が付けられ、口唇上、突起の縁にも縄文が施文されている。口縁下には３条の平行沈線が施されるが、波頂部下で末端を反転させてそれぞれ下段の沈線に連結している。地文の縄文はＬＲ縄文を横位回転で施文している。161〜165は折り返し口縁の粗製深鉢形土器である。161ではＬ｛[illegible]縄文が口縁部で横位回転、胴部で一部縦位回転で施されている。162〜164（同一個体）もＬ｛[illegible]縄文が施文されるが、162の破片では口縁下の段の部分で原体閉端の回転圧痕があらわれている。165は櫛歯状工具による縦位の条痕文が施されている。166〜167は単軸絡条体第１類が回転施文された粗製土器である。166ではＬ｛[illegible]、167ではＲ｛[illegible]の撚紐を軸に巻いた原体を用いて施文している。168〜170は縄文施文の深鉢形土器である。168、170の口唇部は丸みを帯びて作られるが、169は内そぎぎみに面とりがなされる。168ではＬＲ縄文を縦位に、169ではＲＬ縄文を縦位に、170ではＬ｛[illegible]縄文を縦位に回転施文している。171〜173はいずれも深鉢形土器の底部片である。171では平行列の後、交差して置かれた禾本科植物の圧痕が、172では笹葉の圧痕が、また173では荒木ヨシ氏分類の｛$^{A1+B2}_{B2+A1}$｝網代痕が残

されている。

c、東部弥生あるいは続縄文式土器

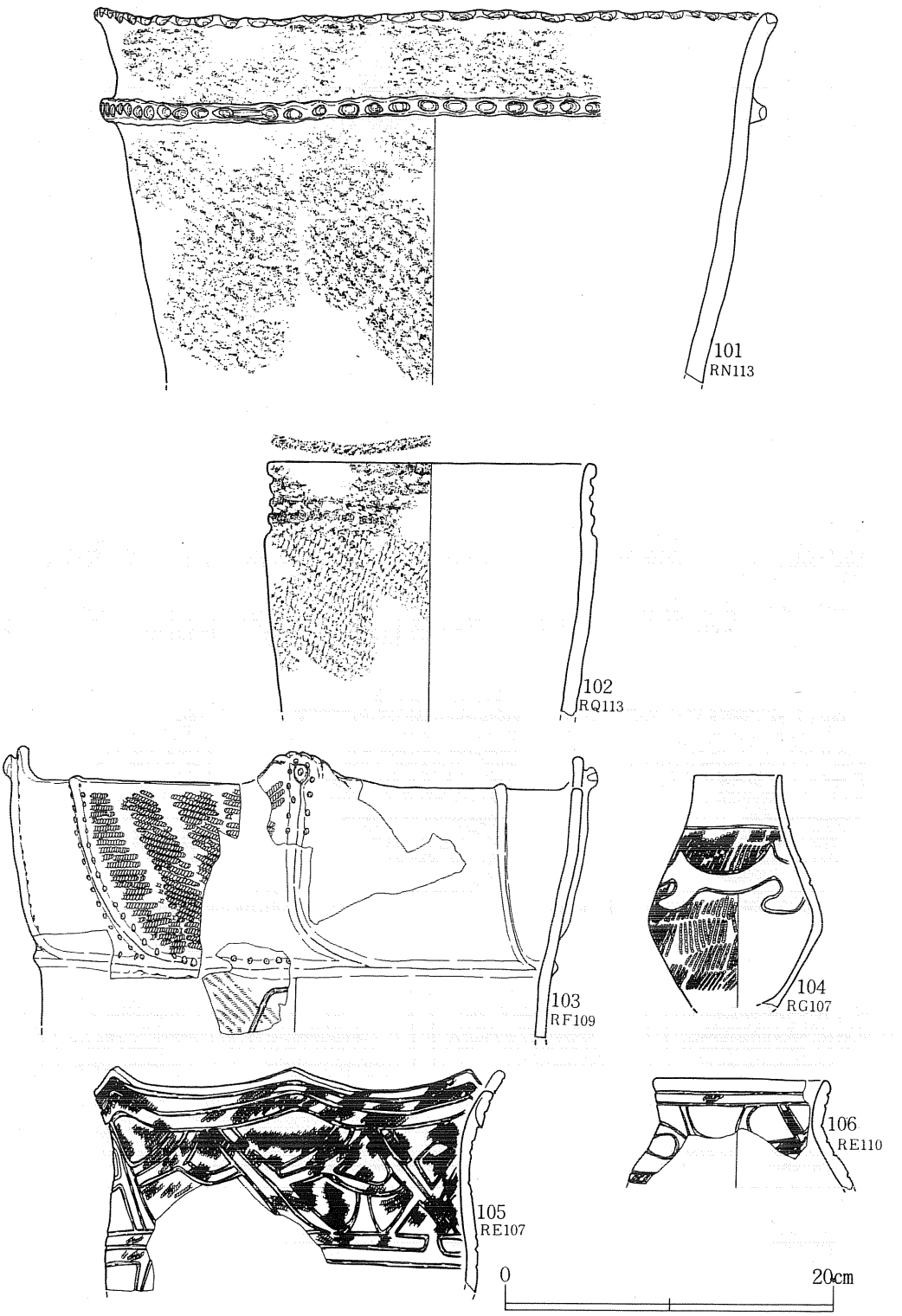
第406図174～180（同一個体）は、僅かに受け口状を呈して外傾する口縁の深鉢形土器に復元される。胴部上半は緩くくびれ下半は丸く湾曲する。口唇部には斜位の刻目が施され、外目には刻目の間を切るように縦位のスリット列が加えられる。口縁部には縦走するＲＬ縄文を施した後、３条の平行沈線を施している。胴部上半の文様帯上限（174～176）および下限（177～179）には、２条の平行沈線間に右から左の方向で施された刺突列が施され、沈線の区画内に横位を基本とした充塡的なＲＬ縄文が施されている。胴部下半（177～180）では斜位置き縦位回転の縄文が施されて、上半文様帯直下に連結する双方向の渦文が描かれている。181～191は縦走するＲＬ縄文が施文された土器である。縄文は斜位置き縦位回転によって施文される。181～186（うち183～185は同一個体）は受け口状の口縁部が屈曲外傾する。183～185では口唇部内外縁に斜位の刻目列が施され、頸屈曲部内面には明瞭な稜が残される。192、193は無文の土器である。192の深鉢形土器胴部片は横位のナデ調整が行われ、193の底部片は指頭調整によって短く垂直に立ち上がる底縁部形状を作り出している。

194～207は口唇部の刻目、微隆起線、刺突文、帯状の特殊縄文（註２）などによって特徴づけられる土器である。194は注口部の破片であり、注口先端に向かう刻目をもった隆線、微隆起線、刺突列、微隆起線に沿ったＲＬ縄文が施されている。195～207（同一個体）は、口唇部が尖り、口縁部には刻目をいれた隆線が２段に施されている。胴部以下には微隆起線の帯状の区画文が施され、ＲＬ縄文が指をずらしながら施文されている。

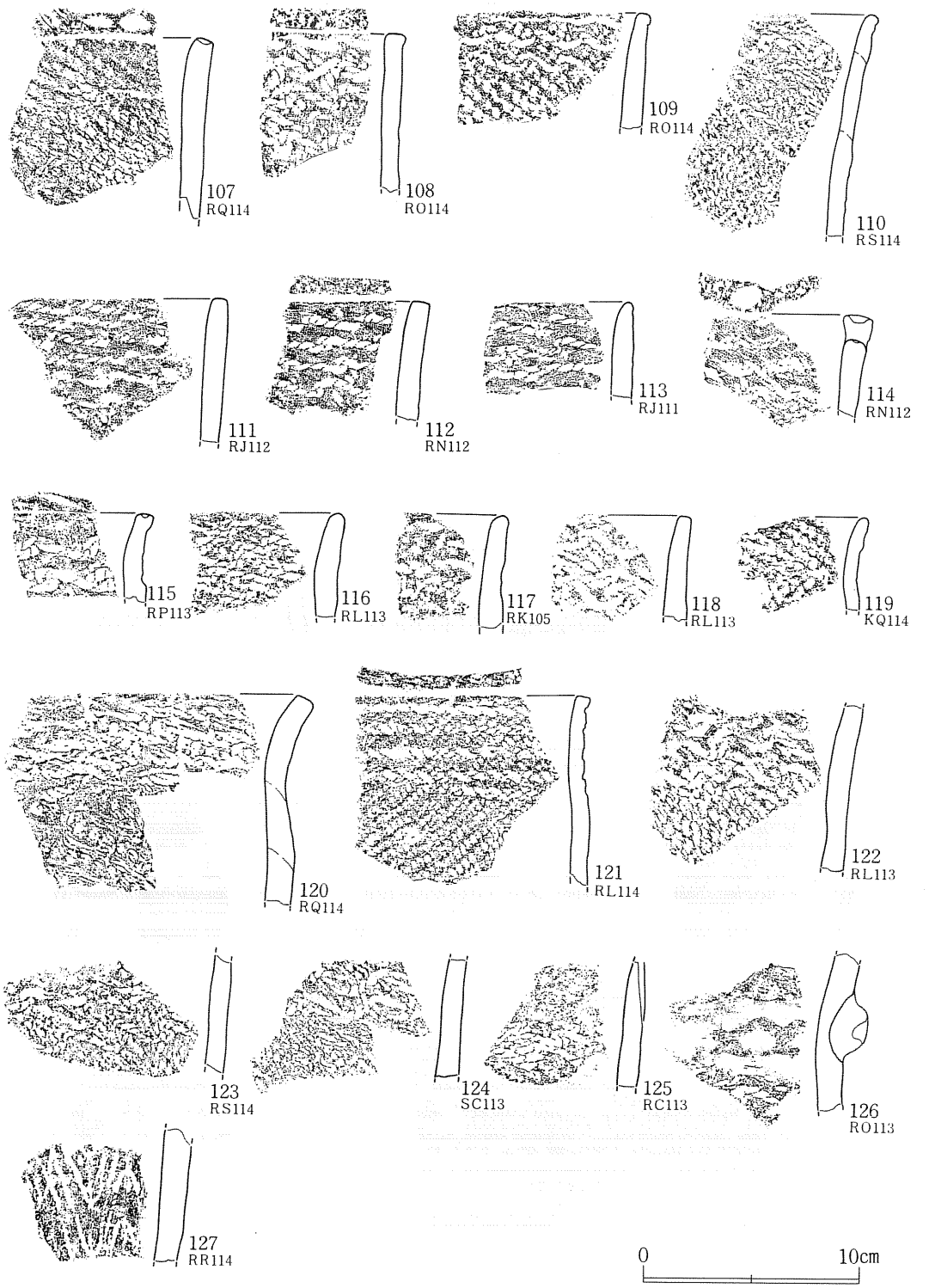
(2)　石器（第407・408図）

遺構外から出土した石器の数は、遺構内出土のものに比べて非常に少ない。石鏃（Ｓ92）、掻器（Ｓ93、94）、石箆（Ｓ95、96）、削器（Ｓ97～101）、ノッチのある石器（Ｓ102）、石皿（Ｓ103）半円状扁平打製石器（Ｓ104）、磨石（Ｓ105）などが出土している。

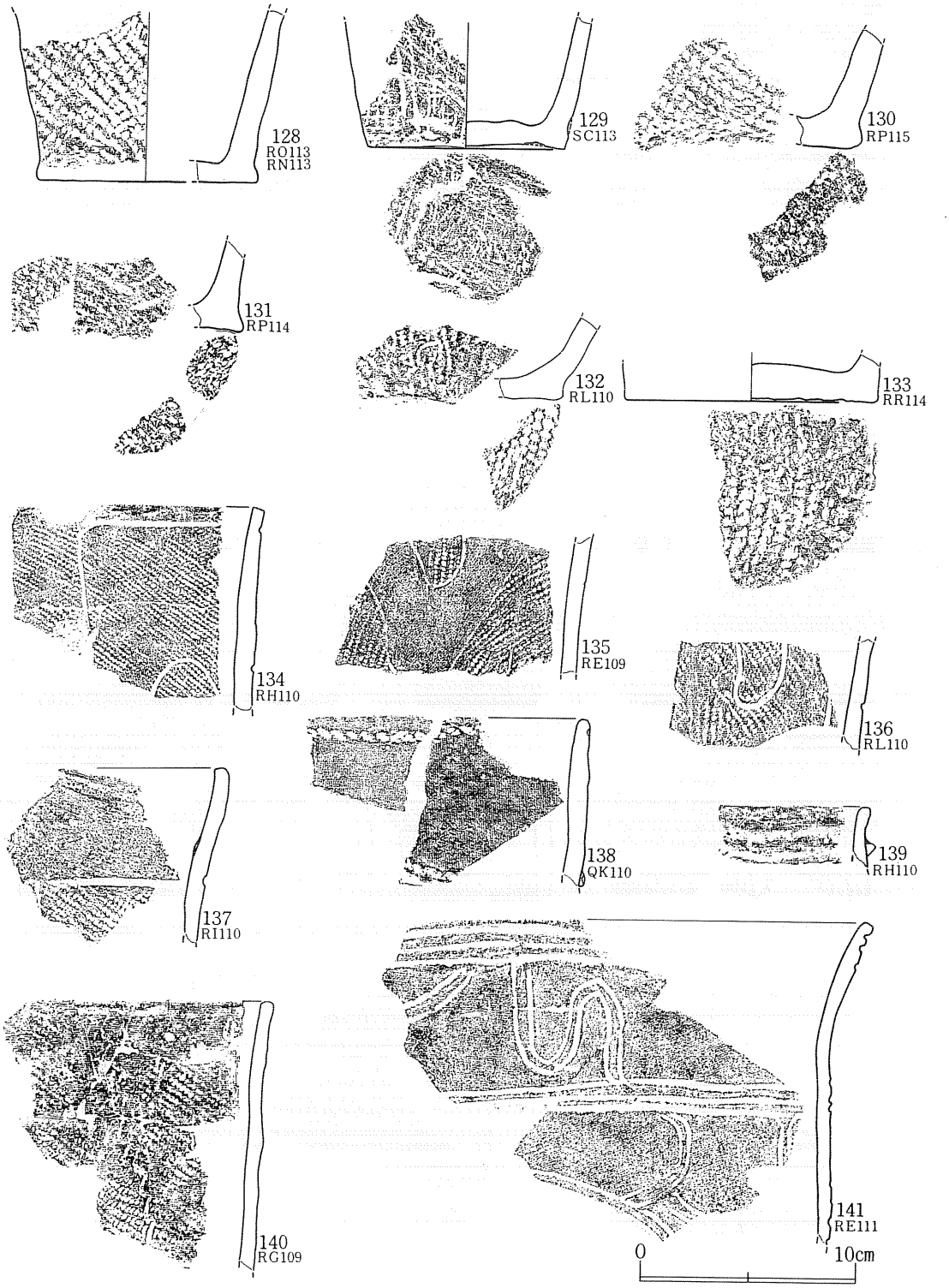
なお、401図Ｓ91は、ＲＯ114グリッドから出土した石核である。この石核を含めた５点の石核と中型の剥片１点が１箇所に固まって出土した（図版154の４）。Ｓ91は、全体として亀の甲形を呈しており、中～小型の薄手の剥片を剥離した後に、周辺の所々に細かい剥離が加えられて、両面調整石器様に仕上げられている。他の４つの石核は、大きな原礫を分割した後に１、２回の剥離が加えられただけのものである。ＳＮ114グリッドからも、Ｓ91のような石核は含んでいないものの、分割して一隅に剥離を加えただけの石核素材様の角礫が４個まとまって出土している。これらはいずれも頁岩で、前期の石鏃等の石材と良く似ている。



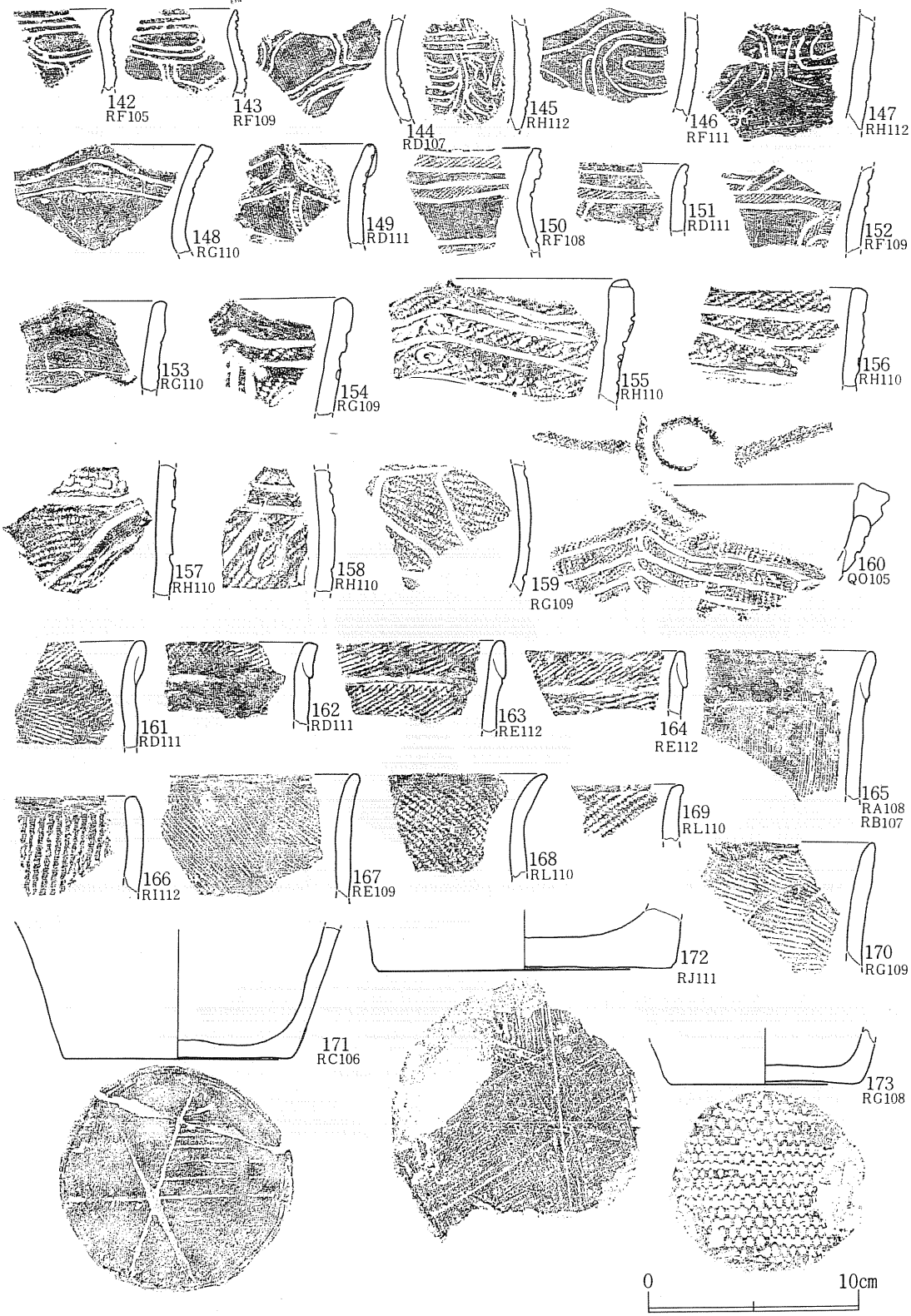
第402図　EⅢ区　遺構外出土遺物（1）・土器（1）



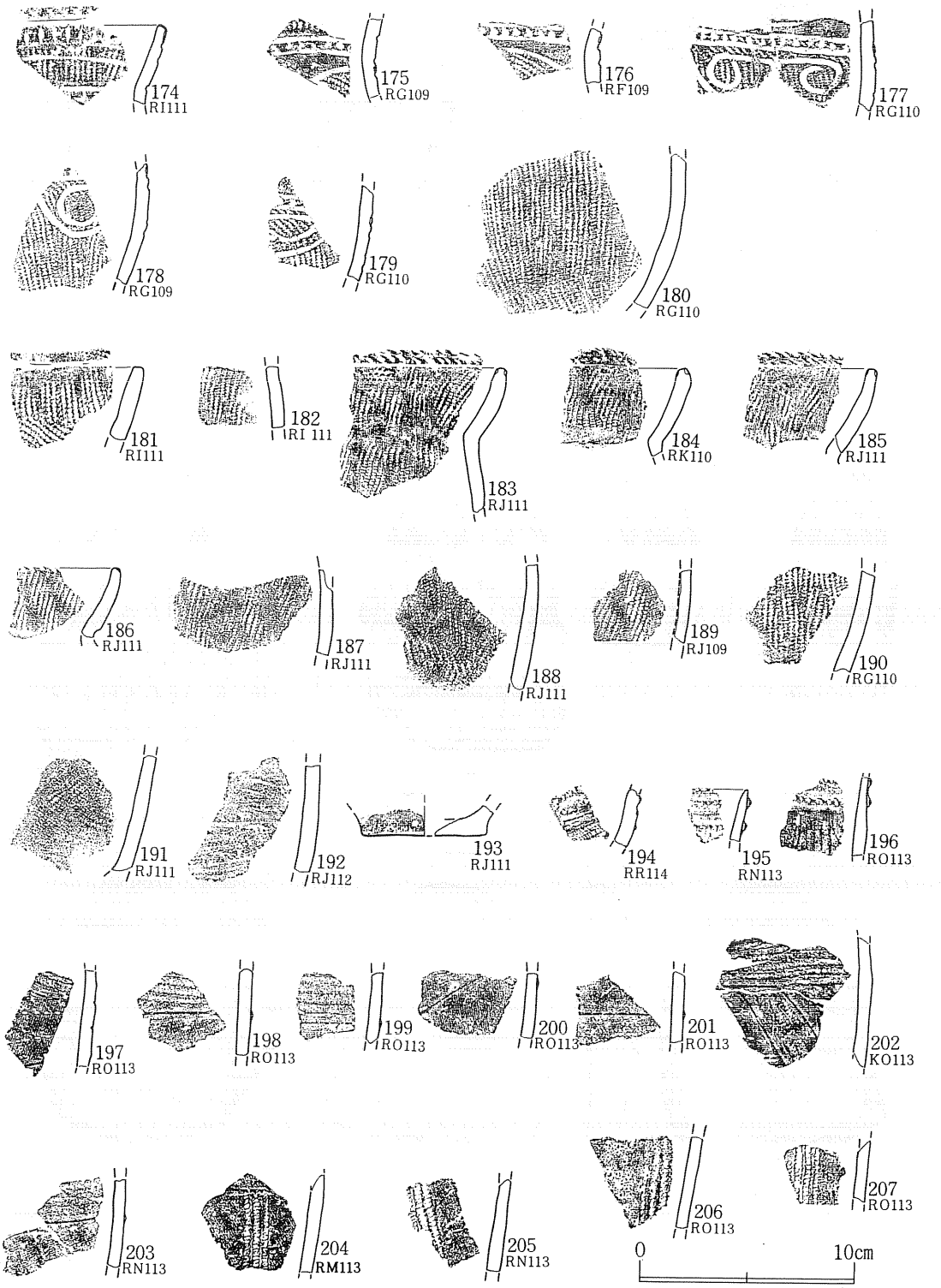
第403図　EⅢ区　遺構内出土遺物（2）・土器（2）



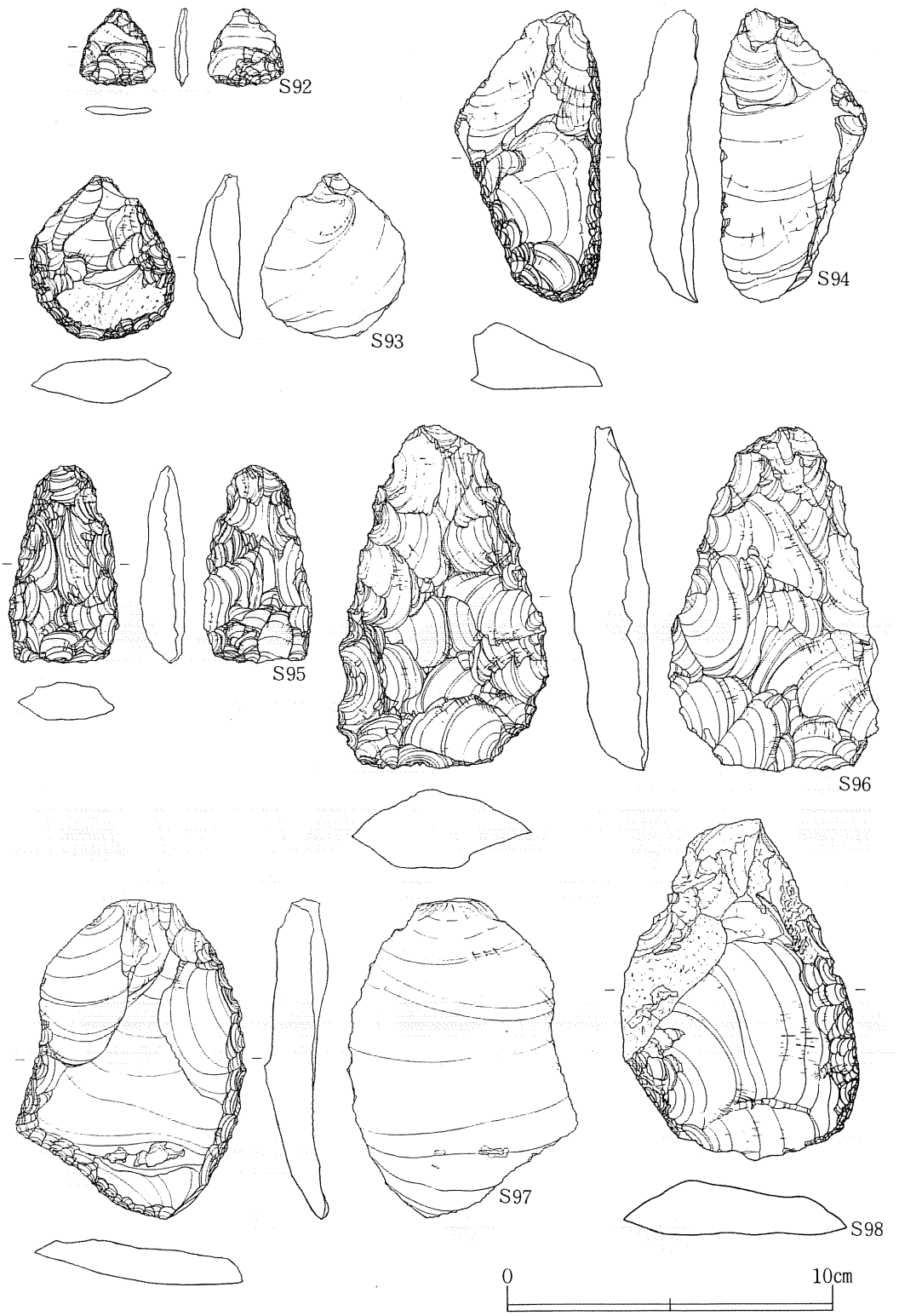
第404図　EⅢ区　遺構外出土遺物（3）・土器（3）



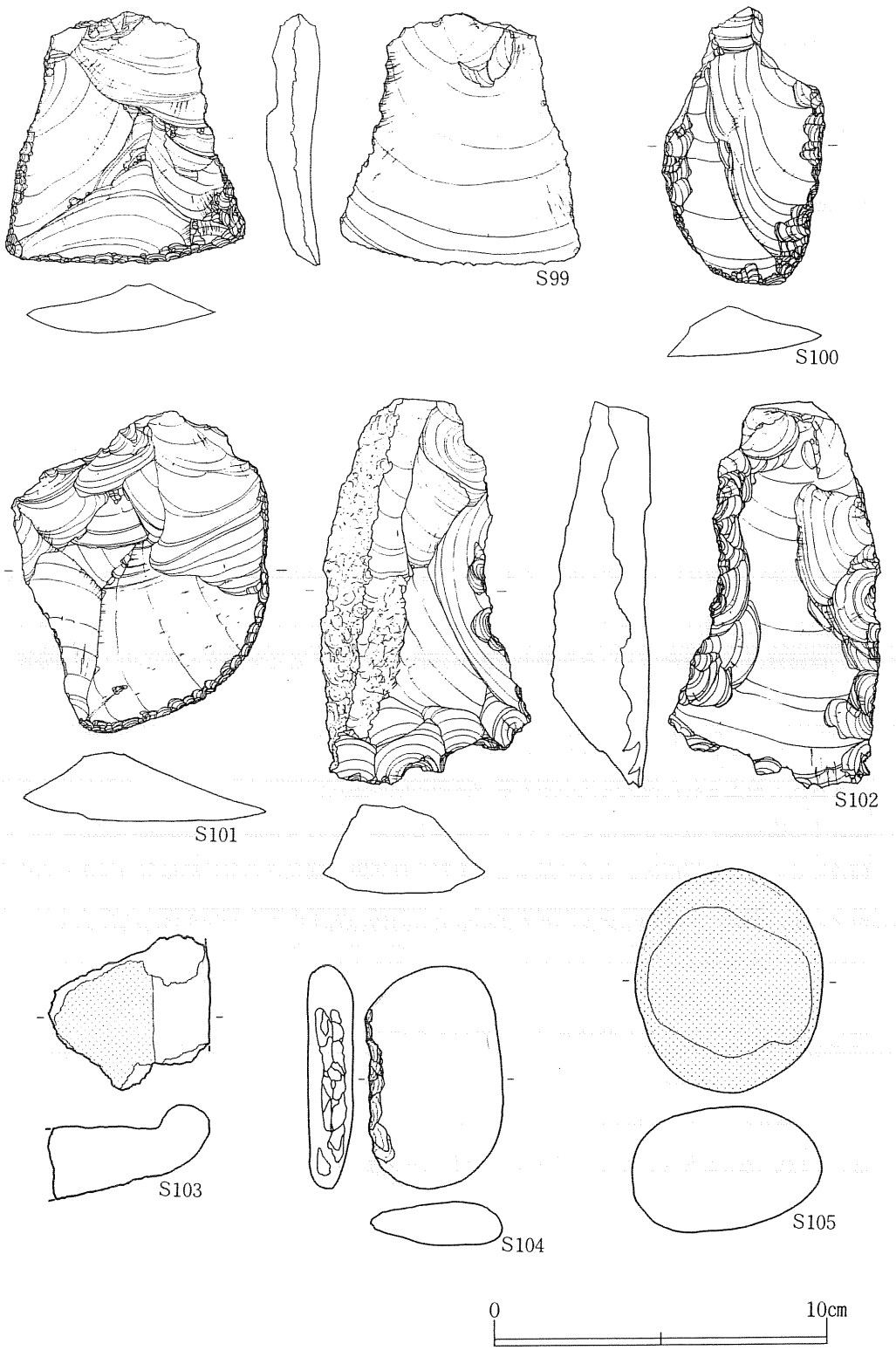
第405図　EⅢ区　遺構外出土遺物（4）・土器（4）



第406図　ＥⅢ区　遺構外出土遺物（５）・土器（５）



第407図　EⅢ区　遺構外出土遺物（6）・石器（1）



第408図　ＥⅢ区　遺構外出土遺物（７）・石器（２）

（S103～S105は縮尺1/3）

第4節　小　　結

EⅢ区で検出された縄文時代前期の竪穴住居跡の中には、その床面や覆土下部から多量の剥片・チップ類の出土したものが存在する。そしてその中には、石器の失敗品と見られるものが多数混在している。例えばＳＩ51の場合、住居跡床面中央部から北西部にかけて、無数のチップや剥片類が集中的に出土し、他の部分の床面にはそれがなかった。チップ類は、床面に密着しており、また、住居外に盛られた土が流入したと考えられる下位の覆土を水洗いしたところ、微細なチップが多く検出された。ＳＩ55もほぼ同様な出土状況が認められ、出土した剥片・チップ類の中に、製作に失敗したり不出来に終ってしまったと考えられる石鏃がおよそ30点混在していた。このような剥片・チップ類や石器の失敗品の出土状況は、何を示すのであろうか。ＳＩ51例から、この住居跡が石器製作跡であり、剥片・チップ類が散乱したままの状態で住居が廃棄された、と考えることも可能である。しかしこれでは、覆土下位にも剥片・チップ類が多数混在していることの説明は困難であろう。あるいは、覆土中に混在する剥片・チップ類は、石器製作後に住居外に少しずつ捨てられていたものが、住居廃絶後に流入したと見ることも可能である。この場合、これら剥片・チップ類を、当時存在していたと推定される捨場に廃棄せず、住居周辺に廃棄するという行動の解釈が必要であろう。ここで縄文人のこのような廃棄パターンを十分に説明できる根拠は見当たらないが、これを解明すべく意識をより強く持って調査に当たるべきことを痛感させられ、今後の課題の１つとしたい。

EⅢ区で検出された縄文時代中期末葉〜後期初頭の竪穴住居跡４軒のうち、２軒は小山の頂部近くの緩斜面、他の２軒はその下の、登降にも普通の歩行では無理な急斜面に位置している。何故にこのような場所に、生活の基本となる竪穴住居跡が構築されなければならなかったのであろうか。調査区の周囲には平坦面が多い。この時期（中期末葉〜後期初頭）にあっては、それ以前の大きな集落が拡散して、小さなあるいは最小単位の集落が形成されることと、このような場所に住居跡が構築されることが無縁でないことだけは確実であろうが、その解釈については、全て今後の課題としなければならないものである。

註１　北海道大学教養部人類学研究室『聖山』1979（昭和54年）

註２　千代　肇「道南地方の土器」『縄文文化の研究６』雄山閣　1982（昭和57年）

第11章　科学的分析

第１節　花粉分析

１　試料および目的

試料は、Ｄ区（１ＨＲＭＤ－Ａ）井戸（ＳＥ04）内の堆積土壌から採取された５点である（表１）。今回の分析は、各試料の花粉分析を行い、遺跡周辺の弥生時代以降の植生にいついて解析することを目的とする。

表１　はりま館遺跡花粉分析試料

試料番号	層　位	土　　質	備　　考
1	1	黒色土（10ＹＲ２／１）	10世紀前後以降
2	5	黒褐色土（（10ＹＲ４／６）	弥生時代遺物包含（相当）層
3	8	黒褐色土（10ＹＲ２／３）	弥生時代遺物包含（相当）層
4	12	黒褐色土（５ＹＲ２／１）	弥生時代遺物包含（相当）層
5	15	暗褐色土（10ＹＲ３／３）	弥生時代遺物包含（相当）層

２　分析方法および結果の表示法

花粉・胞子化石の出方法は、以下の手順で行った。

試料を10ｇ前後秤量し、フッ化水素（ＨＦ）処理により試料中の珪酸質の溶解と試料の泥化を行う。次に重液（ZnBr２　比重2.2）を用いて鉱物質と有機物を分離させ、有機物を濃集する。その有機物残渣について、アセトリシス処理を行い植物遺体中のセルロースを加水分解し、最後にＫＯＨ処理により腐植酸の溶解を行う。処理後の残渣は、よく攪拌しマイクロピペットで適量をとり、グリセリンで封入する。

検鏡においてはプレパラート全面を走査、その間に出現した全ての種類（Taxa）について同定・計数した。

３　結果および考察

分析した全試料を通じて花粉化石の産状が非常に悪く、花粉化石以外の黒褐色から黒色を呈した植物遺体（破片）が非常に多く認められた。検出された花粉化石としては、木本花粉がマツ属複維管束亜属・スギ属・コナラ亜属・アカガシ亜属などの18種類、草本花粉がイネ科・カヤツリグサ科・アブラナ科・ヨモギ科・他のキク亜科・タンポポ亜科の12種類、シダ類胞子が３種類であった（表２）。

弥生時代遺物包含層相当とされる５・８・12・15層の花粉・胞子化石の産状は表２に示したように、検出個体数が少ない。８・12・15層は極めて少なく状況が類似することから、同様の

環境下での堆積物とも考えられる。しかし、どのような環境（植生）であったかは不明である。弥生とされる最上位の５層は下位の３つの層より、化石個体数及び種類とも増加する傾向にみえるものの、植生の変化が反映したとは考えにくい。

10世紀前後に降灰した大湯浮石層（３ａ・ｂ・ｃ・ｄ層）の上位の１層は、弥生時代の各層と異なり化石個体数・種類とも増える。これは植生の違いを考えることができるが、植生の様相を推定するには個体数が少ないため困難である。

試料の採取地点は井戸内の土壌なので、本来ならば水に覆われて花粉化石が保存され易いと考えられる。しかし、分析の結果は花粉化石の保存が非常に悪かった。花粉・胞子は空気（酸素）を断たれた還元的状態でよく保存されるが（例えば、泥炭地・低湿地・湖底・海底などの水に覆われた所）、空気に触れるような酸化的状態では化学的な酸化や土壌微生物の作用によって分解され易い。井戸が使われなくなってから地下水位の低下などにより堆積物が酸化的状態になったのではなかろうか。そして、その後の経年変化によって大半の花粉・胞子は分解されたと考えられる。

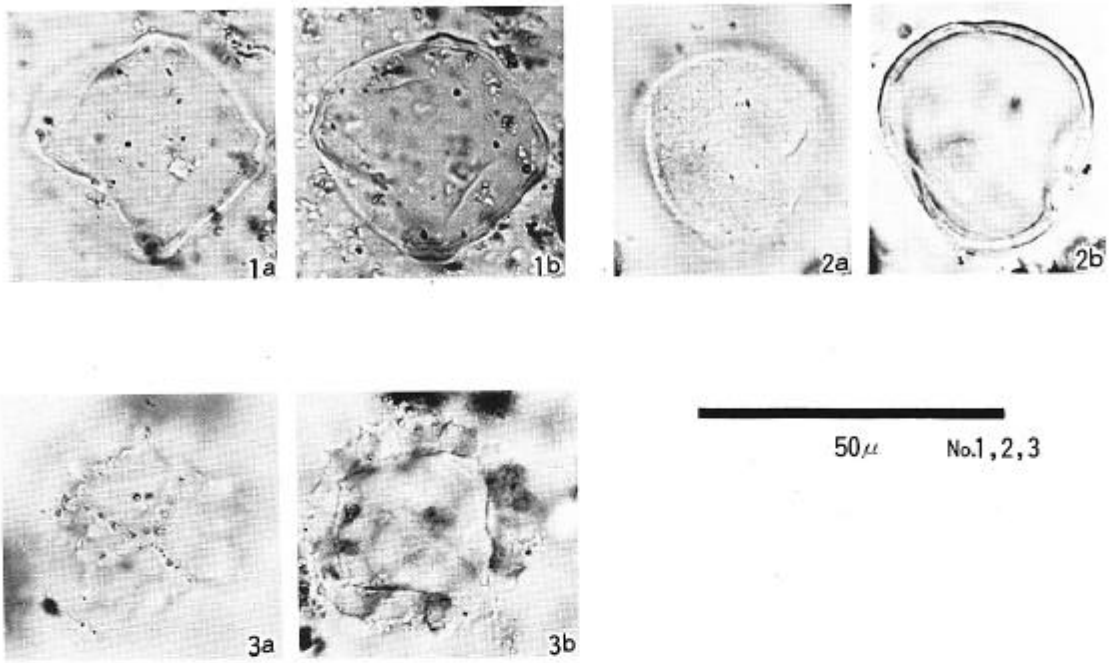
今回の試料は堆積した花粉化石の大半が失われてしまった可能性が高いものの、検出された花粉化石は堆積当時の遺跡周辺に分布していた母植物に由来するものと考えられる。しかし、前記したように堆積後の経年変化によって大半の花粉・胞子が分解・消失している可能性が高いことを考慮すると検出された花粉化石の種類以外の母植物が遺跡周辺に分布していたと考えられる。

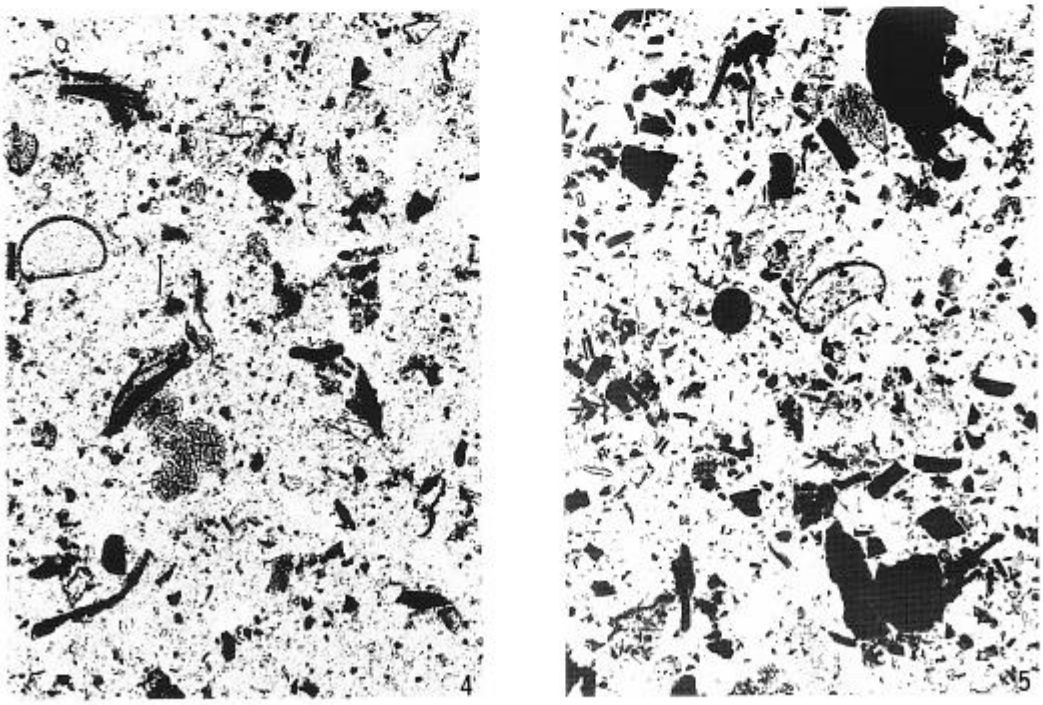
図　版　説　明

	写真番号	花粉化石名	試料番号	層
図　版　1				
	１ａ、ｂ	ハンノキ属	1	1
	２ａ、ｂ	コナラ属コナラ亜属	1	1
	３ａ、ｂ	タンポポ亜科	1	1
	4	顕微鏡下状況写真	1	1
	5	顕微鏡下状況写真	2	5
図　版　2				
	6	顕微鏡下状況写真	3	8
	7	顕微鏡下状況写真	4	12
	8	顕微鏡下状況写真	5	15

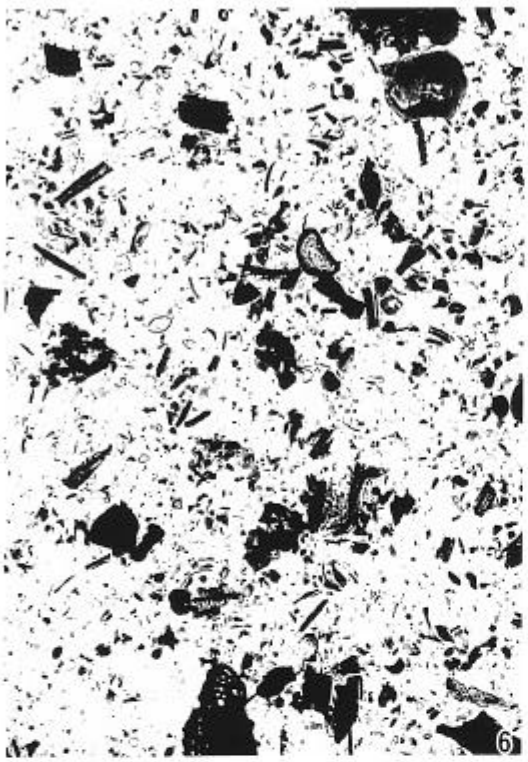
表2　はりま館遺跡D区（1HRMD-D）井戸（SE04）試料花粉分析結果

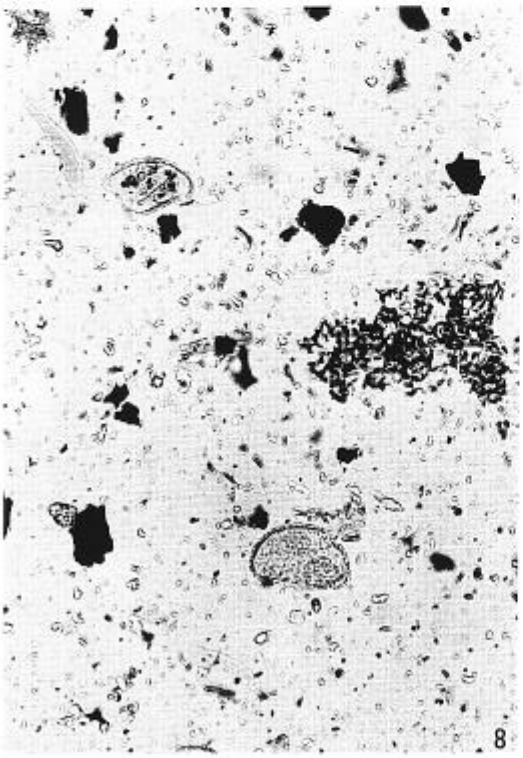
種類（Taxa）　試料番号	1	2	3	4	5
木本花粉					
モミ属	1	-	-	-	-
ツガ属	1	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	2	1	-	-	-
スギ属	-	5	2	-	-
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	-	1	-	-	-
クルミ属	-	1	-	-	-
クマシデ属－アサダ属	-	1	-	-	-
ハシバミ属	2	-	-	-	-
カバノキ属	-	1	-	-	-
ハンノキ属	1	1	-	-	-
ブナ属	-	2	1	1	-
コナラ属コナラ亜属	4	10	2	1	1
コナラ属アカガシ亜属	3	-	-	-	-
ニレ属－ケヤキ属	-	-	1	-	-
カエデ属	1	1	-	-	-
トチノキ属	1	1	1	-	-
ウコギ科	-	-	-	1	-
草本花粉					
イネ科	6	2	3	1	-
カヤツリグサ科	1	-	-	-	-
タデ属	1	-	-	-	-
ナデシコ科	2	-	-	-	-
アブラナ科	10	-	-	-	-
キカシグサ属	1	-	-	-	-
セリ科	2	-	-	-	-
シソ科	-	-	-	-	-
ヤエムグラ属－アカネ属	1	-	-	-	-
ヨモギ属	3	-	1	1	1
他のキク亜科	11	-	-	-	-
タンポポ亜科	7	-	-	-	-
不明花粉	15	3	1	1	1
シダ類胞子					
ヒカゲノカズラ属	-	1	-	-	-
ゼンマイ属	-	19	14	1	6
他のシダ類胞子	20	51	30	10	56
Botryococcus	41	-	-	-	-
合計					
木本花粉	16	25	7	3	1
草本花粉	45	2	4	2	1
不明花粉	15	3	1	1	1
シダ類胞子	20	71	44	11	62
総花粉・胞子	96	101	56	17	65





図版 1





100μ

図版 2

第２節　種子同定

１　試　　料

試料は№１～３の３点である。いずれも、はりま館遺跡ＡⅡ区の平安時代のものとされる竪穴住居跡から検出されたもので、№１はＳＩ106のカマドから、№２、３はＳＩ116のカマド炭化材下から検出されたものである。

２　方法および結果

試料は、肉眼および実体顕微鏡で観察し同定・計数した。同時に写真図版（図版１）も作成した。

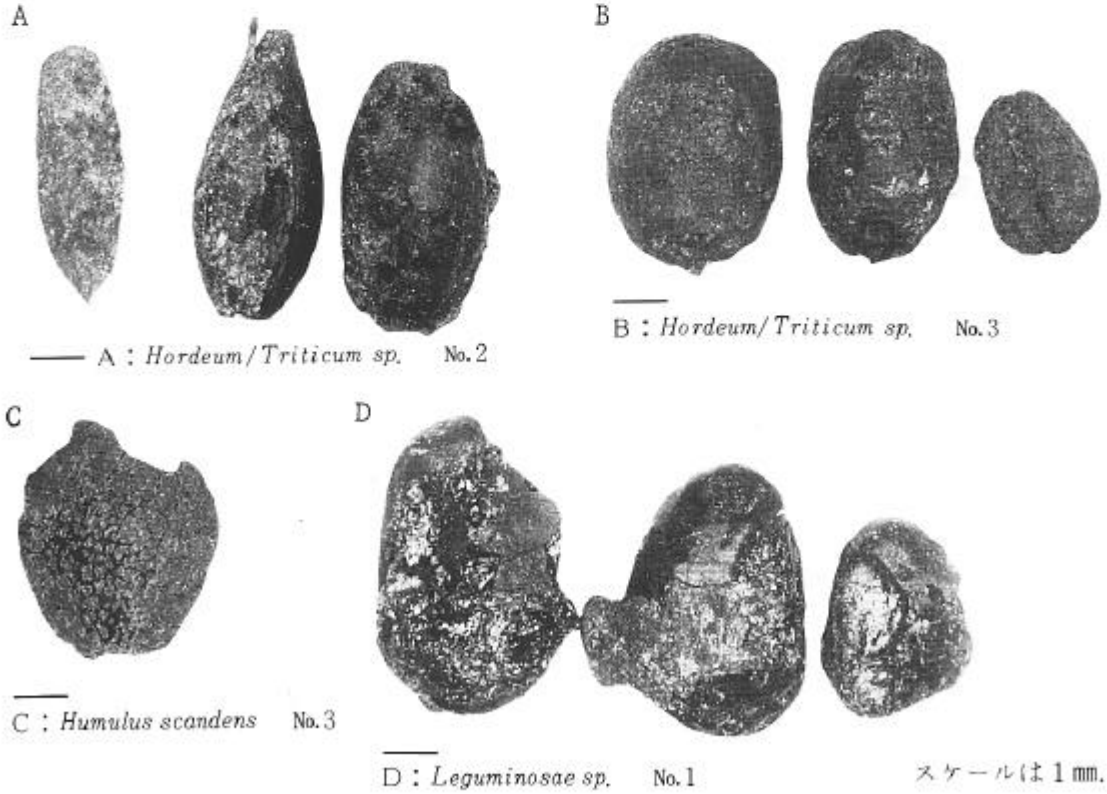
各試料からは次のようなものが同定された。（　）内は個体数を示す（破片も１個にかぞえた）。

№１・・・マメ類（Leguminosae sp.）（18）

№２・・・ムギ類（Hordeum／Triticum spp. ＊）（646）

№３・・・ムギ類（595）、カナムグラ（Hululus scandens）（１）

＊：ほとんどはオオムギ属のようであるが、コムギ属の可能性もあるためムギ類としておく。



A：*Hordeum/Triticum sp.*　No.2

B：*Hordeum/Triticum sp.*　No.3

C：*Humulus scandens*　No.3

D：*Leguminosae sp.*　No.1

スケールは１mm.

第３節　はりま館遺跡出土鉄製品・鉄滓の金属学的解析

岩手県立博物館　赤沼　英男

はりま館遺跡は秋田県鹿角郡小坂町に立地する。同遺跡は縄文から平安にわたる複合遺跡であるが、平安の集落遺跡（ＡⅡ区）からは竪穴住居跡とともに一基の鉄生産関連炉跡（ＳＸ110）、鉄滓、鉄製品が、また、平安の集落跡とは地点を異にするＤ区では４基の鉄生産関連炉跡（ＳＸ05・同Ｂ・同Ｅ・ＳＸ57）、鉄滓、鉄製品が検出されている[1)]。ＡⅡ区のＳＸ110の時期は大湯浮石層との関係、および周辺遺構の検出状況から平安後期と推定されている。また、Ｄ区４基の炉は大小の規模の差があるものの、大形の炉（ＳＸ05）はＳＸ110と構造が類似することから、やはり同時期に属する可能性があるとされている。

このたび秋田県埋蔵文化財センターから上述の明確な炉跡をもつ鉄生産関連炉内および炉周辺より出土した鉄滓、鉄製品ならびに住居跡から出土した鉄製品に関する金属学的解析の依頼を受けた。明確な鉄生産関連炉より出土した鉄滓および鉄製品の解析は、発掘された鉄生産関連炉の具体的役割はもちろん、はりま館遺跡における鉄あるいは鉄製品生産の概要を解明するうえで有益である。以下に解析結果を報告する。

１　解析試料

解析に供した鉄滓は図１－ａの３点、鉄製品は図１－ｂに示す№14刀子、№16盤状鉄製品、№20棒状鉄製品の３点である。

２　解析方法

鉄滓については、できる限り中央付近に近い位置から分析試料片を採取し２分した後、それぞれを化学分析・組織観察に供した。化学分析用試料片はエタノール・アセトンで洗浄・乾燥、タングステンカーバイト製のルツボを使って粉砕、酸を使って完全に溶解させた後、ＩＣＰ法により必要成分の定量を行った。組織観察用試料片は樹脂に埋め込みダイヤモンドペーストを用いて十分に研磨した後、金属顕微鏡によるミクロ観察に付した。また、必要部位についてはＥＰＭＡを使ってその組成を決定した。

鉄製品の金属学的解析は鉄器の形状を損ねることなく採取することのできた微小な錆片（最大合計0.2～0.3ｇ）により行った。なお、解析は鉄滓に準じて行った。

３　調査結果ならびに考察

(1)　鉄滓の化学組成とミクロ組成

〔№12鉄滓〕表１に示す化学分析値によれば、Tiが12%以上、Siは４%以上と高い。CaO/SiO_2、CaO/Al_2O_3は、いずれも0.1～0.2%程度であり、粘土に比べやや高い値を示しているものの、人為的にカルシウム分を投入したといえるほどの量ではない。図２－a_1に№12鉄滓のマクロ

組織を示す。領域A部を高倍で拡大観察したものが図2-a_2・a_3であるが、内部に灰色角状化合物(T)、暗灰色柱状化合物(F)、黒色領域(D)を認めることができる。図3のEPMAによる定性分析結果から、TはFeO-Fe_2O_3-TiO_2系のチタン鉱物、Fは(Fe, Mg)O-SiO_2系化合物、DはFeO-SiO_2-AI_2O_3-CaO-(Na, K)$_2$O-TiO_2-P_2O_5から成るガラス相であることがわかる。通常製錬滓に認められる鉄相がミクロ組織中に観察されないこと、ならびに推定直径55cm程度の円形の炉内から検出されたことを考え合わせれば、No.12鉄滓は精錬滓(大鍛冶滓)と判定される。

〔No.25鉄滓〕No.12鉄滓に比べFe領域が低い反面、Si・AIは多量に含有されている。図4-a_1はマクロ組織、図4-a_2は図4-a_1領域A部のミクロ組織、図4-a_3・a_4は図4-a_2の領域B・C部をそれぞれさらに高倍で観察したものである。図4-a_3は、EPMAによる分析の結果、灰色柱状をしたチタン化合物(T)、FeO-SiO_2-Aℓ_2O_3-(K, Na)$_2$O-MgO-TiO_2-P_2O_5系黒色領域(D)によって構成されていることが判明した。図4-a_4には上記のガラス相の他に黒錆層が認められる。図4-a_2から明らかなように、図4-a_4で観察された黒錆層はガラス層のところどころに残存している。銑や鉧を含んだ不均一な鉄素材を精製する過程で、脱炭剤および脱炭剤とともに添加された造滓材が鉄溶中で反応する際に排出される精錬滓の中に、生成した鋼が貫入したタイプの鉄滓と推定される。

〔No.27鉄滓〕図5-a_1にマクロ組織、図5-a_2に領域A部(図5-A_1マクロ組成中に指示)のミクロ組織を示す。図5-a_3・a'_3・a_4は図5-a_2領域B・C部(図5-a_2に指示)をさらに高倍で拡大観察したものであるが、図5-a_3・a'_3はほぼ白色細線をしたセメンタイトによって構成されていることがわかる。また図5-a_4は黒錆層である。図5-a_2に示すミクロ写真からも明らかなように、No.27鉄滓はそのほとんどがセメンタイト部分と黒錆層によって構成されている。これまでに提唱されている古代の精錬原理に基づいて解釈すれば[2)]、このセメンタイト部分を脱炭前の残留銑鉄部、黒錆層を脱炭反応の結果生成した鋼塊、あるいはこの鉄滓全体を銑や鉧を含んだ不均一な精錬前の鉄素材とみなすことによって、明確な炉底、炉壁を伴う炉内より検出された上記組織から成るNo.27鉄滓の存在を、合理的に説明することができる。No.27鉄滓は、精錬前の鉄素材か精錬途上のいわば反応中間物と解釈される。

(2)　試料鉄製品の化学組成

表2は各試料鉄製品の化学分析値である。鉄は銹化の過程で酸素と水素分を増す一方、鉄分の含有量は溶出のため減ずる。従って分析試料が銹化している場合、もとの健全な鋼の状態を推定するためには、対Fe比による比較を行ったほうが有効と考えられる。表1の上段には化学分析値を、下段は各分析値の対Fe比を示している。以下の議論においては表下段の数値を用いることとする。

No.14刀子はCuおよびMnがいずれも0.1%以上の高い値をとっていることから、始発原料とし

て含銅磁鉄鋼をあげることができる。№16・20鉄製品は鉱石の指標元素であるCu・Mn・P、砂鉄の指標元素であるTiがいずれも0.1%以下の低レベルにあることから、化学分析値でもって原料鉱石を推定することはできない。

(3) 試料鉄製品の非金属介在物組成

図6－a・bは№14刀子中に認められる代表的な非金属介在物の2次・反射電子像である。残存する非金属介在物は30μ程度と小さく、薄層状を呈している。№14に使用されている鋼が清純で、よく鍛造されたものであることを指摘することができる。図6－bに示す反射電子像から明らかなように、介在物は灰色をした均一な相から構成されている。図6－cは非金属介在物領域A部のＥＰＭＡによる定性分析結果である。介在物の主成分はMn・S、他に微量のCrが含有されている。図7は介在物における各元素の分布状態をカラーで示したものであるが、各元素ともほぼ均一に介在物中に分布していることがわかる。これら一連の分析結果から№14刀子に認められる介在物は、MnS（硫化マンガン）を主体としたものと推定される。

なお、№16・20鉄製品には非金属介在物が認められなかったため、非金属介在物に関する分析を行うことができなかった。

(4) 試料鉄製品の鍛造条件

図8に各試料鉄製品から採取した錆片のマクロおよびミクロ組織を示す。白色部分は健全なメタル、灰色部は黒錆、暗灰色部は赤錆、黒色部は試料中に走る亀裂である。

〔№14刀子〕図8-a_2・a_3は図8－a_1領域A_1・A_2部のミクロ組織である。いずれにも内部に白色細線をした結晶とその欠落孔を観察することができる。白色細線結晶はもとの健全な鋼におけるパーライト相のうちフェライト部分が銹化によって失われ、セメンタイトのみが残った組織と推定される。このセメンタイトをパーライト相とし、銹化による結晶の膨張を無視すれば、もとの健全な鋼は、セメンタイトが緻密である図8－a_2においては0.4～0.5%、図8-a_3においては0.1～0.2%と推定される。また、図8-a_3から読みとれるフェライト結晶粒は5～10μである。以上の観察結果を総合すれば、№14刀子刃部付近には、パーライト変態点以上の高温領域からかなり速い速度で冷却された、やや硬い鋼と軟らかい鋼が合わさった、いわゆる硬・軟合わせ鍛えによる鋼が配されていたものと考えられる。

〔№20鉄製品〕図8-b_2・b_3は図8-b_1領域B_1・B_2のミクロ組織であるが、いずれにもセメンタイトの欠落孔が認められる。この組織から推定されるもとの健全な鋼の炭素含有量は0.2%程度、フェライト結晶の大きさは10～20μである。№20鉄製品はパーライト変態点以上の高温領域から比較的速い速度で冷却された軟鋼によって構成されていたのであろう。

〔№16鉄製品〕図8-c_2・c_3は図8-領域C_1・C_2のミクロ組織である。図8-c_2はセメンタイトおよびその欠落孔がきわめて緻密であり、炭素含有量0.5～0.6%の比較的硬い鋼と推定され

る。No.16鉄製品には少なくとも硬鋼が配されていることが、この観察結果から指摘できる。

以上はりま館遺跡より出土した鉄滓ならびに鉄製品の金属学的解析結果について述べてきた。これまでの解析結果は表３、４に総括され、それらを要約すれば以下のとおりとなる。

① No.12鉄滓は出土状況ならびにミクロ組織中に半還元砂鉄粒子が存在することから判断して精錬滓と推定される。

② No.27鉄滓はセメンタイトと黒錆層が混在した組織をとっていることから、鋼精錬（大鍛冶）を行う前の鉄素材（銑や鍛を含んだ不均一な鉄素材）か、鋼精錬時における脱炭中間物と考えられる。

③ No.27鉄滓と共判して出土したNo.25鉄滓は、No.12鉄滓同様精錬滓と判断される。ミクロ組織におけるガラス相と黒錆の混在は、精錬時に生成した造滓材によるスラグの中に、鋼が貫入したものと解釈することによって、合理的に説明できる。

④ No.14刀子は含銅磁鉄鉱を始発原料としている。含銅磁鉄鉱は列島内に産出しないことから、少なくとも刀子の製作に使用された原料鉱石は大陸産と考えなければならない。また介在物中にもチタン化合物が認められないことから、砂鉄を脱炭材として使用したと考えられるはりま館遺跡において製品化された可能性は低く、むしろ最終製品として同遺跡内に搬入されたとみるべきであろう。

⑤ No.16、20鉄製品については介在物に関する情報がないので、詳細に考察することはできない。Ｐ含有量が少ないので、原料鉱石が含リンの磁鉄鉱である可能性は小さい。平安期における東北地方北部出土鉄製品の多くが含リンの磁鉄鉱を始発原料としていることを考えれば、興味深い結果である。

註

1）炉ならびに炉に伴って出土したスラグの形状のみからは炉の性格を判断することができないため、ここではとりあえず鉄生産関係炉跡と述べるにとどめておく。

2）佐々木稔　1985「ふただび古代の砂鋼法について」『たたら研究27号』

表１　はりま館遺跡出土スラグの化学分析値

	T.Fe	Cu	Ti	Mn	P	Si	Ca	Al	Mg	CaO/SiO_2	Al_2O_3/SiO_2
No.12	40.26	0.005	12.04	0.54	0.13	4.56	1.11	3.59	2.69	0.16	1.39
No.25	10.74	0.002	2.77	0.35	0.11	23.26	1.76	8.60	1.66	0.05	0.65
No.27	55.61	0.012	0.45	0.042	0.093	2.58	0.15	1.33	0.15	0.04	0.91

表２　はりま館遺跡出土鉄製品の化学分析値

試料名	T.Fe	Cu	Ti	Mn	P	Si	Ca	Al	Mg
No.14鉄製品	64.42	0.27 / 0.42	0.003 / 0.004	0.11 / 0.18	0.006 / 0.009	0.40 / 0.62	0.009 / 0.014	0.14 / 0.22	0.006 / 0.009
No.16鉄製品	70.53	0.004 / 0.006	0.003 / 0.004	0.007 / 0.011	0.012 / 0.016	0.31 / 0.44	0.006 / 0.009	0.051 / 0.073	0.004 / 0.005
No.20鉄製品	66.58	0.008 / 0.011	0.007 / 0.010	0.004 / 0.006	0.035 / 0.052	0.70 / 1.057	0.013 / 0.019	0.17 / 0.26	0.018 / 0.027

表 3　はりま館遺跡出土スラグの金属学的解析一覧

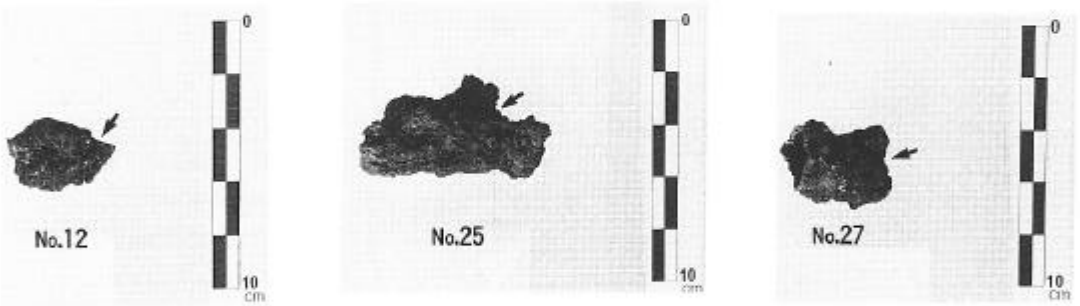
試料名	化学成分 T.Fe	Ti	Si	Ca	Al	Mg	CaO / SiO_2	CaO / Al_2O_3	組織学的特徴	鉄滓判定区分
No.12スラグ	40.26	12.04	4.56	1.11	3.59	2.69	0.16	0.12	T＋F＋D	精錬滓と推定
No.25スラグ	10.74	2.77	23.26	1.76	8.60	1.66	0.05	0.06	ガラス＋鋼	精錬時鉄滓表面に形成されたガラス相が冷却・固化したもの
No.27スラグ	55.61	0.45	2.58	0.15	1.33	0.153	0.04	0.04	銑＋鋼	精錬時に使用された銑が脱炭され鋼になっていく際の中間生成物　もしくは精錬原料

c：　W；ウスタイト(FeO)，　F；FeO-SiO_2 系化合物，T；FeO-Fe_2O_3-TiO_2系化合物，D；黒色領域

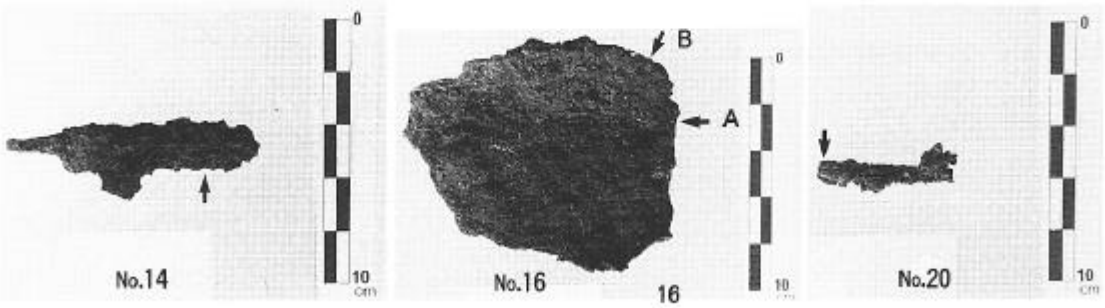
表 4　はりま館遺跡出土鉄製品金属学的解析一覧

試料名	化学成分[a] Cu/Fe	P/Fe	Ti/Fe	C量[b] (%)	非金属介在物[c]	始発原料	脱炭剤	備考
No.14鉄製品	0.43	0.010	0.004	0.1～0.2 0.4～0.5	D	含銅砒鉄鋼	鉱石粉と推定	第366図M1
No.16鉄製品	0.006	0.016	0.004	0.5～0.6	不　明	不　明	不　明	第370図M2
No.20鉄製品	0.013	0.052	0.010	0.2%程度	不　明	不　明	不　明	第143図M1

a：　Cu/Fe, P/Fe, Ti/Feは各元素の鉄対比を示す
b：　組織観察結果による
c：　W；ウスタイト(FeO)，　F；FeO-SiO_2 系化合物，T；FeO-Fe_2O_3-TiO_2系化合物，D；黒色領域



a；鉄滓



b；鉄製品

図 1　試料鉄滓・鉄製品の外観（↓は試料採取位置を示す）

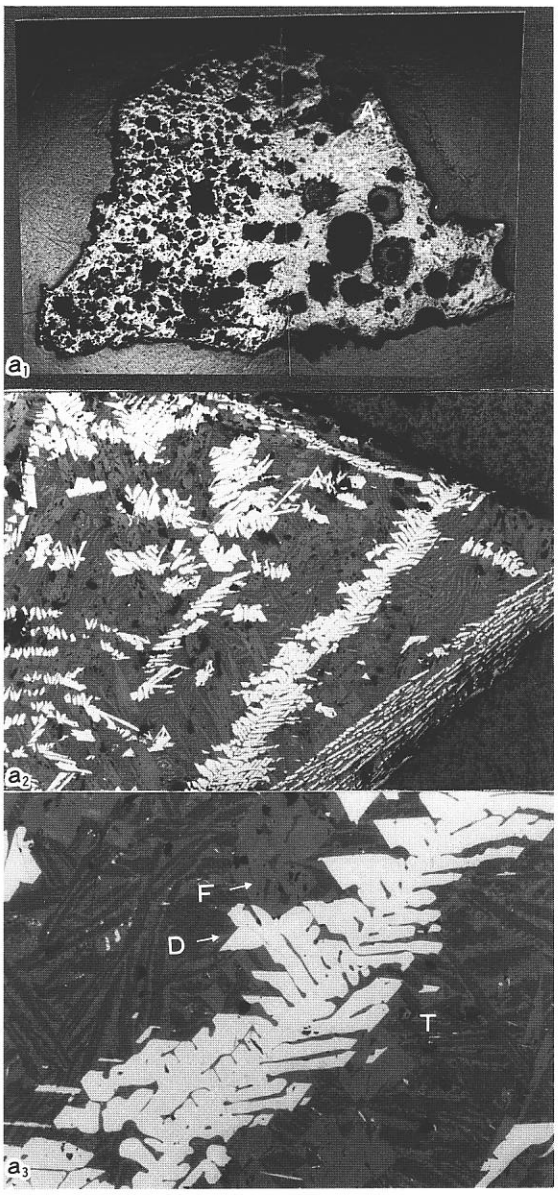
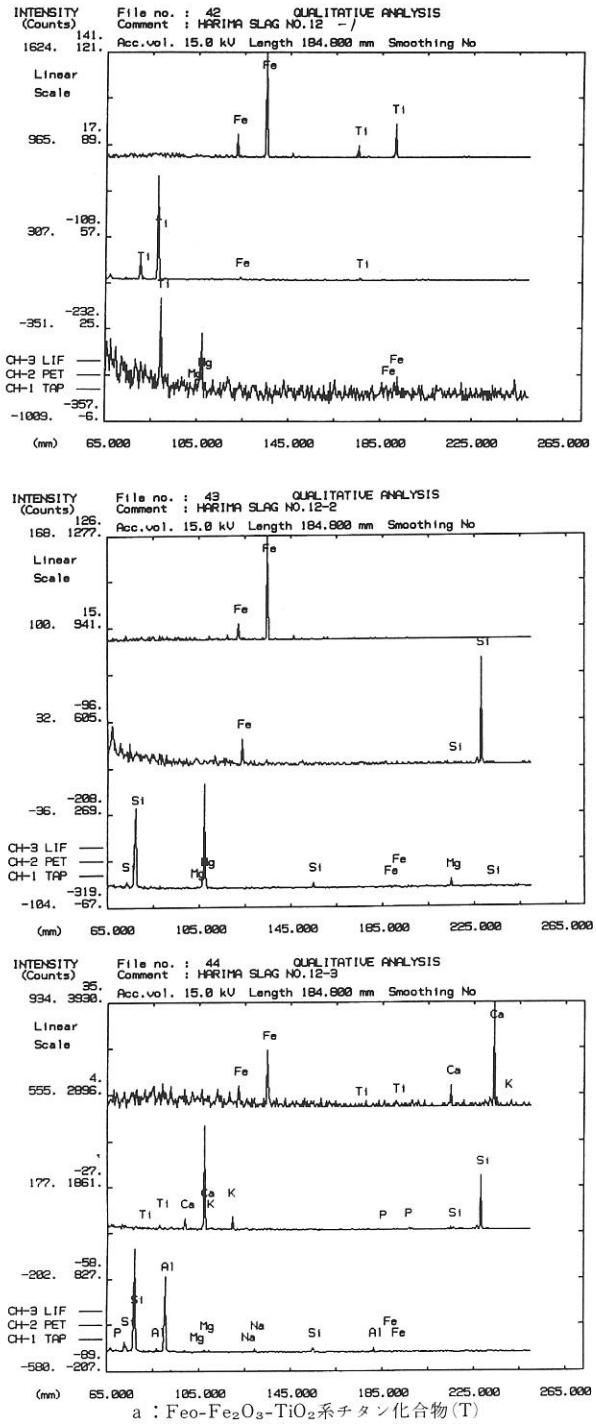


図２　No.12鉄滓のマクロおよび
ミクロ組織



a：Feo-Fe_2O_3-TiO_2系チタン化合物(T)
b：FeO-SiO_2系化合物(F)
c：黒色領域(D)

図３　図２化合物T.F.黒色領域DのEPMAによる定性分析結果

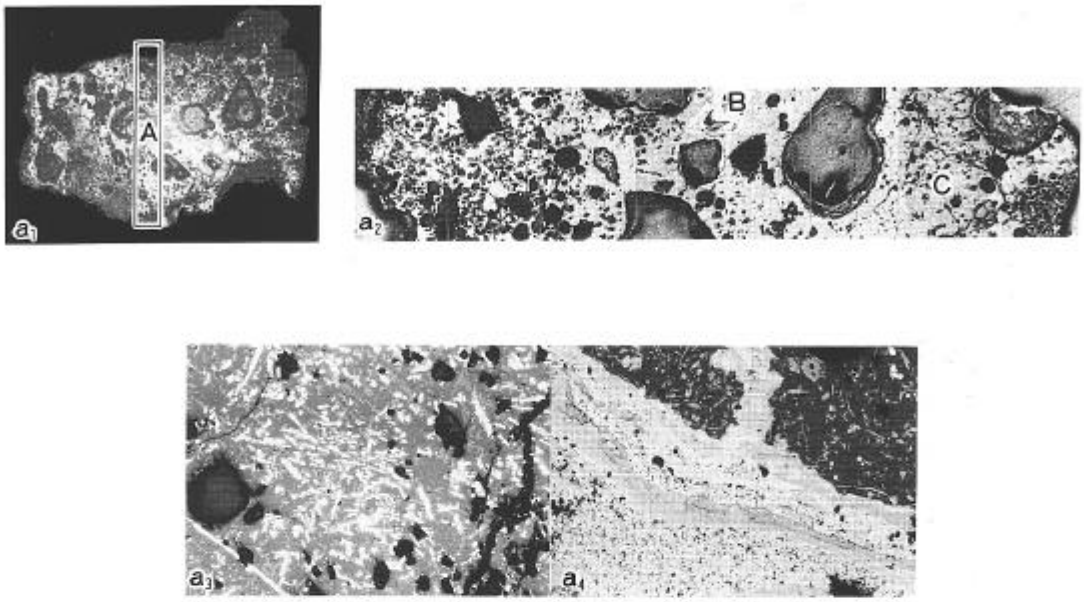


図４　No.25鉄滓のマクロおよびミクロ組織

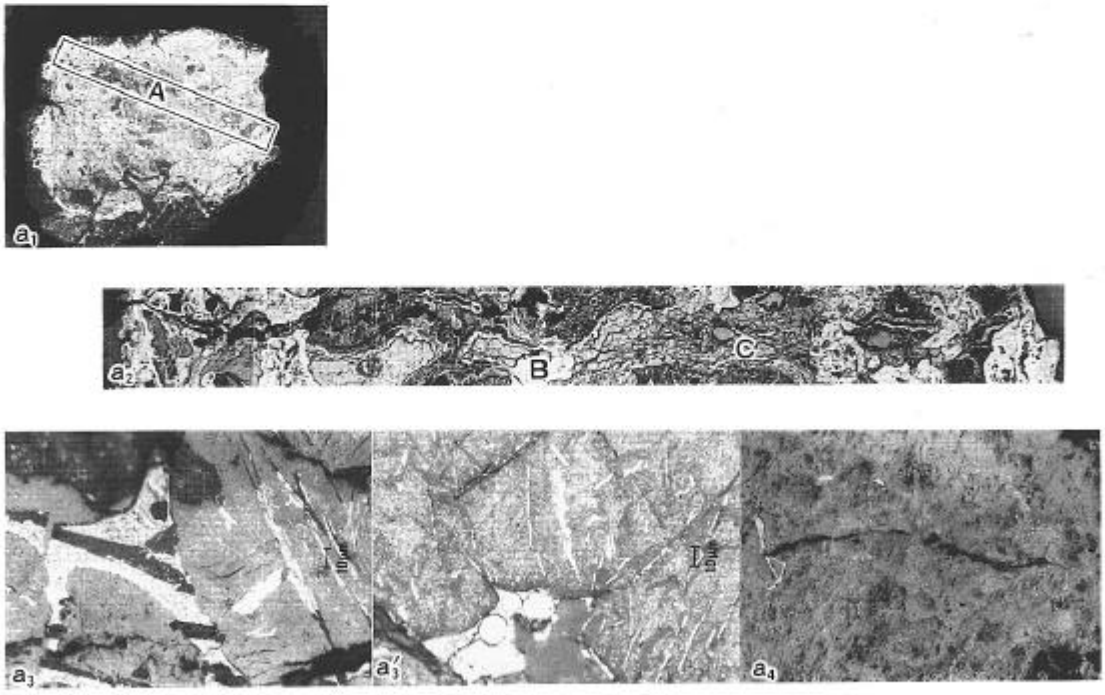
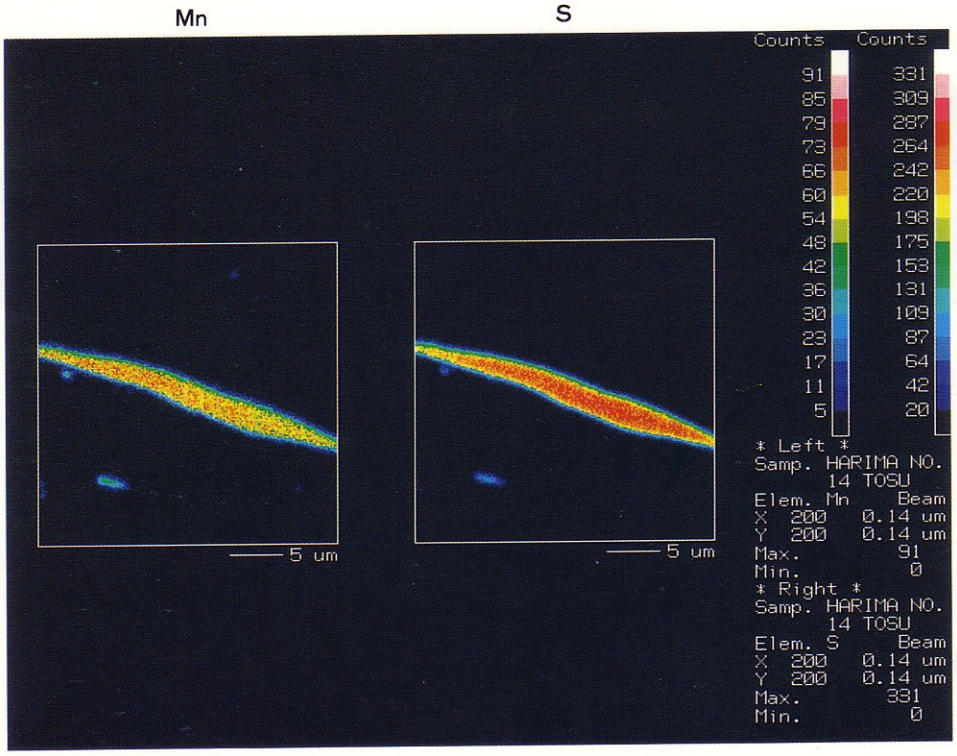


図５　No.27鉄滓のマクロおよびミクロ組織



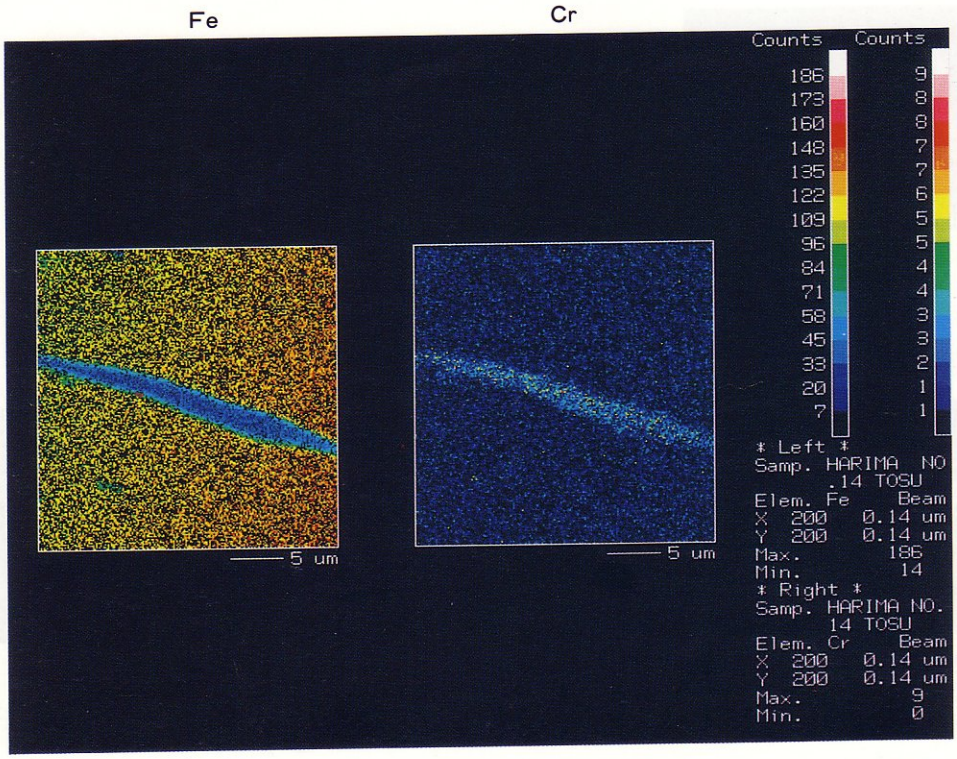
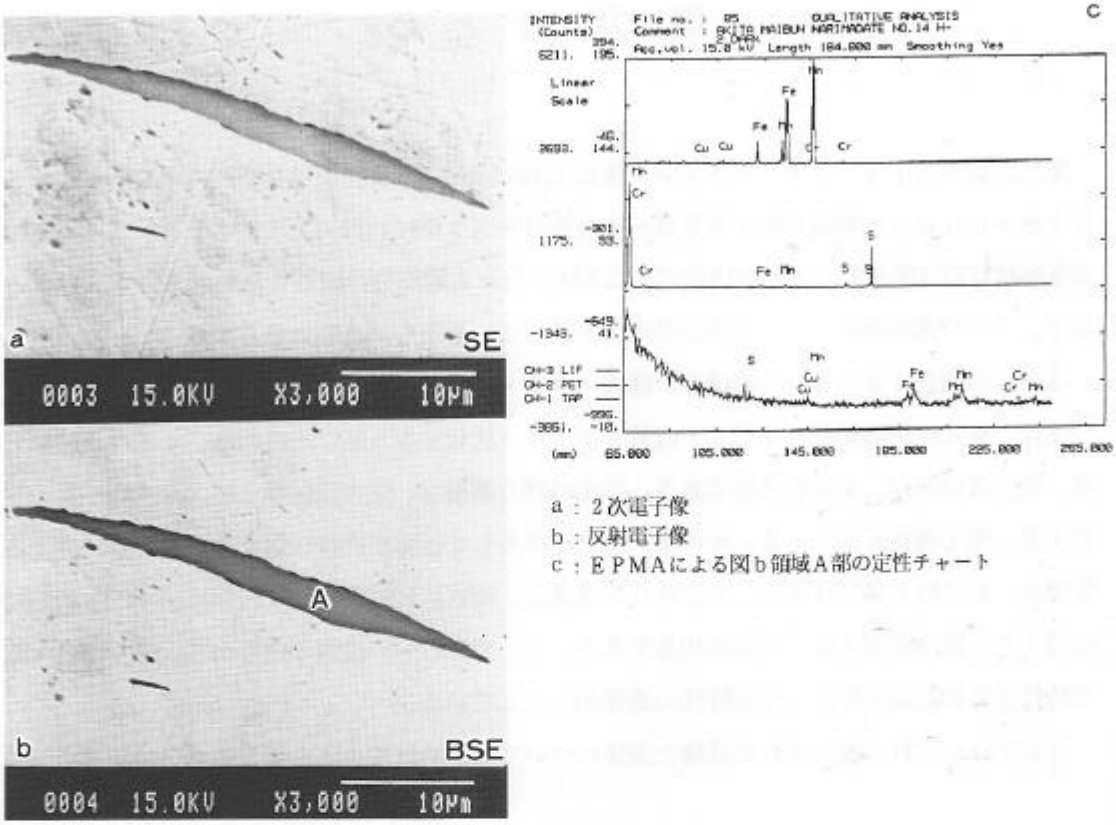


図７　No.14刀子に残存する非金属介在物中に含有される元素のカラーマッピッグ図



a：2次電子像
b：反射電子像
c：EPMAによる図b領域A部の定性チャート

図6　No.14刀子メタル中に残存する非金属介在物のEPMAによる分析

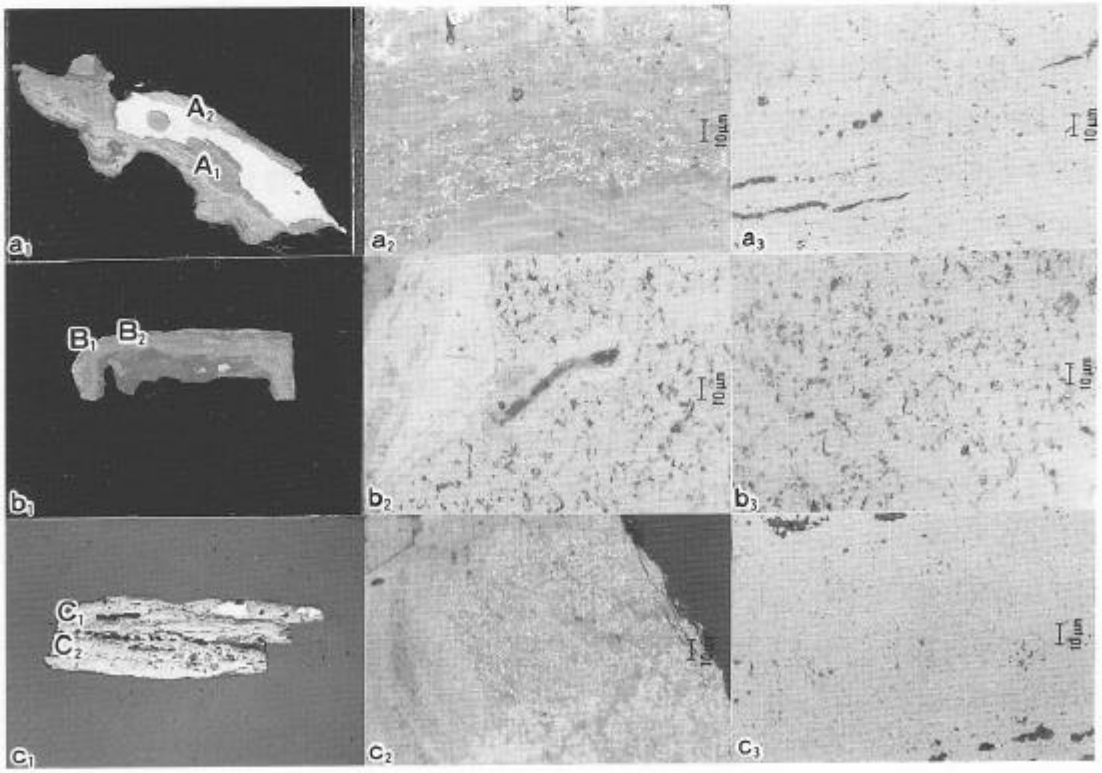


図8　試料鉄製品のマクロおよびミクロ組織

第12章　まとめ

東北自動車道小坂インター・チエンジ建設工事に係るはりま館遺跡発掘調査は、昭和63年5月9日～12月8日と平成元年4月2日～4月28日の2ケ年にわたって実施された。2ケ年での調査面積は37.180㎡で、これに昭和57年に実施された本線部分の調査(註1)を合わせると49.780㎡となり、1つの遺跡単位としては秋田県内でも最も広い面積を調査したことになる。

2ケ年の調査で検出された遺構は、縄文・平安・弥生の各時代にわたる。縄文時代の遺構としては、竪穴住居跡49軒、Tピット41基、フラスコ状ピット5基、土坑46基、土器埋設遺構9基、焼土遺構16基、その他2基である。弥生時代の遺構は、竪穴住居跡1軒、井戸跡1基、土坑7基、焼土遺構6基である。その他、縄文時代もしくは弥生時代に属する土坑36基、焼土遺構30基、その他5基存在する。平安時代の遺構は、竪穴住居跡28軒、土坑14基、溝状遺構19条、柱列3列、鍛冶遺構5基、その他10基である。そしてこれらの遺構の内外から、縄文時代・弥生時代とこれに続く時代・平安時代の遺物が出土している。

ここでは、これら検出された遺構と遺物について若干触れて、まとめとしたい。

第1節　縄文時代

1　はりま館遺跡出土の縄文時代前期の土器について

今回のはりま館遺跡発掘調査で出土した縄文時代前期の土器は、概ね筒形あるいは植木鉢形を呈する深鉢形土器で、縄文時代前期の東北地方北半部に一般的な円筒土器下層様式に属するものである。この円筒土器下層様式は、山内清男によってa～d式に4細別されており(註2)、それはまさに三宅徹也が指摘するように(註3)「半世紀以上を経た今日にあっても、なんら改定の必要がない」ものと言えよう。そこで今ここでは、今回の調査で出土したはりま館遺跡の前期土器を山内の編年に従いつつ、d式についてのみは2細分（下層d_1・d_2式）の計5細分としてその変遷を見てみたい。なお、山内による円筒土器下層様式の型式名称は、「円筒土器下層式a・b・c・d」であるが、ここでは通例化している型式名称「円筒土器下層a・b・c・d_1・d_2式」、もしくは「円筒下層a・b・c・d_1・d_2」を用いることとする。山内は、前出の「関東北に於ける繊維土器」の中の「Ⅵ　繊維土器諸型式の装飾」で、円筒土器下層様式の各細別の特徴について述べている。今これを隆帯・文様帯・器外面・口端の突起・口端の点列などの項目別にまとめると以下のようになる。

＜下層様式に共通＞

・頸部に横走する隆線一二条加えられることがあり、ないこともある。

・口縁部に文様があって、ここに以下体部とは別な装飾が加えられていることもあり、そうでないこともある。

・文様帯は隆帯のある場合は通常これより上、ない場合にも同じくらいの幅に加えられる。

・口端の突起は、少数又は稀に認められる。

・口端に撚糸列、縄文等が加えられることがある。

＜下層ａ式＞

隆帯：少数あり、その場合には１条である。隆帯の付着部に空洞のあるものが数例あるが、ｂ・ｃにはない。

文様帯：文様帯のないものもある。不整撚糸文が最も多い。溝線を含むのはａの少数のみである。

器外面：大部分は斜縄文で、縄文のない例が少量ある。

口端の点列：半数近く存在する。

＜下層ｂ式＞

隆帯：半数内外認められ、その場合には１～２条である。隆帯上には点列、撚糸の圧痕、縄文等が加えられる。

文様帯：文様帯のないものもあるが、ある場合には不整撚糸文が最も多い。

器外面：過半は単なる撚糸文で、他には斜行縄文、木目状結束撚糸文（少量）などがある。

口端の突起：１個及び２個の例が知られている。極めて低い小さい突起である。

口端の点列：全くない。

＜下層ｃ式＞

隆帯：半数内外認められる。

文様帯：文様帯のないものもある。ある場合には、無文面上に撚糸で文様を押したものが多い。

器外面：結束された帯状（斜行）縄文が最も多く、単なる斜行縄文、平織撚糸文、木目状結束撚糸文、単なる撚糸文等がある。

口端の突起：あまり大きいものはない。

口端の点列：全くない。

＜下層ｄ式＞

隆帯：極めて細く低く著明でない。

文様帯：殆ど全部に認められる。無文面上に撚糸で文様を押したものが多いが、ｃとは文様も異なり、その幅が特に狭い。口の突起に続く隆線が文様帯中に加えられる例がある。

器外面：結束された帯状（斜行）縄文と木目状結束撚糸文が約半数宛を占め、他のものは稀である。

口端の突起：あまり大きいものはない。

口端の点列：存在するが、aのものとは趣を異にしている。

以上が、山内が示した円筒土器下層様式の細別内容である。これをもとに、第4章及び第11章で分類したはりま館遺跡出土の土器群を各型式に当てると、以下のように考えられる。

円筒下層a式：第Ⅰ群土器1・2・3・7類

下層b式：第Ⅰ群土器4・5・6類

下層c式：第Ⅱ群土器1類

下層d_1式：第Ⅱ群土器3、4類・第Ⅲ群土器1類

下層d_2式：第Ⅱ群土器5、6、7類・第Ⅳ群土器2、3類

それでは以下にはりま館遺跡出土土器の各型式の概要を見てみたい。

円筒下層a式　（第409図、EⅢ38・39・40・101・102）

円筒下層a式には第Ⅰ群土器1・2・3・7類が含まれ、2類が大部分を占める。これらの土器群に共通するのは、口唇部が面取りされたように平坦な面をなすものが多く、焼成は極めて良好で堅牢、器内面の調整はそれ程丁寧ではなく凹凸が多いことである。

1類土器は、明瞭な口縁部文様帯がなく、全面に斜縄文などが施され、隆帯が付されない。口唇上には、指頭による刺突列の加えられたものがある。

2類土器は、不整の綾絡文が施された口縁部文様帯を有するが、隆帯が付されず、胴部文様には複節・単節の斜縄文、異条斜縄文の他に結束のある木目状撚糸文も極く僅かであるが存在する。口唇上には、縄文の回転文・斜位の押圧、指頭による刺突列などの施されるものがあり、底面には縄文の回転文の施されたものが半数内外に認められ、1点のみであるが網代痕のあるものが存在する。

3類土器は、口縁部文様帯には不整の綾絡文、胴部には斜縄文が施され、口縁部下端に比較的高い隆帯を有し、隆帯上と口唇部に刺突列が加えられる。刺突は下層d_1・d_2式のものなどに比べて、非常に大きい。

7類土器は、口縁部の無文面上に太い縄文原体の側面圧痕文を4～5条横位に施し、隆帯を有しない。胴部文様は口縁部の側面圧痕文の原体と同じ原体による斜縄文と見られ、平坦な面をなす口唇上には縄文の回転文が付される。

以上、はりま館遺跡第Ⅰ群土器1・2・3・7類が円筒下層a式に該当すると考えられるが、この中で1・2類は問題ないとして、3・7類について多少説明したい。3類の特徴は前述の通りであるが、その中で、口唇上にも刺突列の付されることが最大の特徴である。口唇上に刺

突列の加えられる例は下層d₁・d₂式にも見られるが、本類のものは刺突がそれらよりもはるかに大きく、また口縁部に不整撚糸文が施される例は下層d₁・d₂式には皆無であることから、山内の指摘する下層a式に少数見られる例に当たると考えられる。7類のように、無文面の口縁部に縄文の側面圧痕文の施される例は、下層b～d₂式にすべて見られる。しかしそれらとは、側面圧痕文の原体が太く条間が広いことで異なり、また胴部文様との関係もさることながら、口唇が平坦な面をなしその上に縄文の回転文が施されていること、及び極めて堅牢な焼成であることなどから、区別されるものである。そして、このように第Ⅰ群土器1・2・3・7類（＝下層a式）のみから構成されるEⅢ区出土の土器群は、相当に限定された期間だけ存続した集落によって残された土器群であると見ることができる。従って、山内によって指摘されていないものの（否定もされていない）、2類土器に含めた結束のある木目状撚糸文や7類土器も、下層a式を構成する1つの要素として存在した可能性が強い。

なお、第409図130は、7類に指頭による刺突列の付された隆帯が加えられたもので、胴部には結束のある木目状撚糸文が施されている。この土器は、7類とほぼ同時期か、その系統の中で促え得る可能性がある。また、1は口縁部に不整の綾絡文が施され、隆帯を持たず、胴部に斜縄文が付されていることから、下層a式の特徴を持つかに見える。しかし、口縁部文様帯の幅が比較的広いこと、胴部が下層a式のものよりは長くてやや膨らんでいること、口唇が丸く収められていることなどは、下層b式の特徴により近いと見ることもできる。

円筒下層b式　（第409図、1・2・11・15・20・25・129・130・242・244）

下層b式には、第Ⅰ群土器4・5・6類が相当すると考えられ、その中では4類が大半を占める。これらの土器群に共通するのは、下層a式に比べて器形が細長く円筒状を呈するものが主体となり、口縁部文様帯の幅も広く、大半に隆帯を有する。隆帯は、次の下層c式のものよりも太いものが多い。

4類土器は、口縁部文様帯に不整の綾絡文、各種の網目状撚糸文、羽状縄文、斜縄文などが施され、その下端には隆帯を有する。隆帯上には、各種の刺突列や圧痕列、縦位の刻みなどが付される。胴部には、羽状縄文・斜縄文の他、縦位の撚糸文、多軸絡条体などが単独で施されることが多く、それらの2～3の組み合わせで施される例は少ない。また、上記口縁部文様を地文として、その上に縄文の側面圧痕文が横位もしくは縦・斜位に施されるものも存在するが、その場合、不整の綾絡文の上に施される例は殆どない。

5類土器は、下層c式以降に通有な、“無文面の口縁部に縄文や撚糸の側面圧痕文が施される”ものであるが、その下端には1～2本（まれに3本）の太い隆帯が付されており、口縁部文様帯の幅、隆帯の状況、胎土の状況、器厚などの点でそれらとは区別されるものであると考えられる。下層c式土器の胎土は、繊維を多量に含み、砂粒はむしろ少ないのに対して、本類

では砂粒も比較的多く含み、器肉が下層ｃ式よりも厚い。側面圧痕文には、口縁に平行するのみのものと、種々の文様を描くものとがある。

６類土器は、斜縄文や羽状縄文の施された口縁部文様帯の下端に隆帯を持たず、側面圧痕文で胴部文様との区画をするものである。

以上、はりま館遺跡出土の下層ｂ式土器の概要を見てみたが、ここで触れなければならない若干の問題がある。例えば三宅は、これをb_1・b_2の２つに細分している。しかし、はりま館遺跡出土土器の中には、三宅が変遷模式図の下層b_1式で掲げてあるよう(註４)な、器肉が厚く太い隆帯を有するもの（409図242・244　同一個体）や、下層b_2式とした、口縁部に施された各種の撚糸文などの上に側面圧痕文を縦横に加えるものが少なかったこともあり、敢えて下層ｂ式を２細分するような根拠が見い出せなかった。また、第Ⅰ群土器５類が比較的多く存在するものではないかと考えた理由は、下層ａ式の中に第Ⅰ群土器７類が確たる座を占めるのであれば、下層ｂ式の中でもその座は守られもしくは徐々にその占有率を高め、次の下層ｃ式土器へと繋がる可能性が強いと考えたものである。しかし、特に第Ⅰ群土器５類については、本遺跡での完形品が少なく判然としない面も多いことから、これが細分されて、その１部が下層ｃ式に含まれる可能性もあると考えている。

円筒下層ｃ式　（第409図、135・138・140・141）

円筒下層ｃ式には、第Ⅱ群土器１類が相当する。第Ⅱ群１類土器は、無文面の口縁部文様帯に縄文や撚糸の側面圧痕文により直・曲線的な文様を施す類のうち、口縁部文様帯が幅広で、器最大径に比して器高のあるものである。本類は、円筒土器下層様式の中では、土器の大きさに比較して器肉が最も薄い。口縁は４つの波頂部を持つ比較的明瞭な波状をなすものが主体を占める。口縁部文様帯の下端に隆帯があるものとないものがあり、隆帯は下層ｂ式に比べて細く、隆帯上には棒状やヘラ状を呈する工具による刺突列や、縄文を点列状に押圧したものなどがある。胴部には、羽状縄文、縦位回転の撚糸文、多軸絡条体などが各々単独に、もしくはこれらが組み合わさって施される。しかし複数の組み合わせで施される場合には、下層d_1式も含め、胴部文様の最上位に羽状縄文が付されることが多い。また、胎土には繊維を多量に含むが、砂粒はあまり目立たない。

円筒下層d_1式　（第410図、156・158・159・167・175・187・213）

はりま館遺跡における下層ｄ式の細分は、d_1式を口縁部文様帯の狭い類、d_2式を口縁部文様帯の幅が再び広くなり、口縁部が屈曲もしくは屈折することが多く、胴部の形状もd_1式に比べてより変化のある類とした。

下層d_1式には、第Ⅱ群土器３・４類及び第Ⅲ群１類が相当し、前２者がほぼ相半ばしている。３・４類共に口縁部文様帯を有し、その下端に隆帯が付されるが、文様帯の幅が狭く（殆

どが2～3㎝）、隆帯も低く細いものである。3類は、隆帯上に縄文もしくは撚糸の側面圧痕文が1条加えられたもので、4類は、隆帯上に細かい刺突列あるいは刻目が施されたものである。3・4類の器形は同じで、下層b・c式に比べて、口径・底径ともに大きいものが多いが器高はそれらよりも減じて、全体としてずんぐりした安定感のあるものが多い。口縁は、平口縁のものと波状口縁のものがあるが、後者は極めてゆるく低い4波頂部を持ち、口縁部文様帯も器周4単位のものが多い。底面は、下層b・c式に比べて接地面が広く、器面調整は、下層a・b・c式よりも丁寧で、特に器内面と底部は平滑である。3類の胴部文様には、羽状縄文、縦位の撚糸文、両者が上から下に交互に並べられたもの（いわゆる、すだれ状縄文）などがあり、縦位の撚糸文が単独で用いられる例は稀で、最上位に羽状縄文が1～2段施されるものが大部分である。4類の胴部文様は、羽状縄文、縦位の撚糸文、木目状撚糸文及びそれらの組み合わせからなり、これに多軸絡条体の加わる例が稀にある。この中では、縦位の撚糸文が羽状縄文との組み合わせで用いられており、3類では単独に用いられるのは羽状縄文が殆どであったのに対し、木目状撚糸文が単独で用いられている例が相当量あり、際立った特徴となっている。また、口縁部下端に楕円形の小孔（4個が多い）を有するものも存在する。

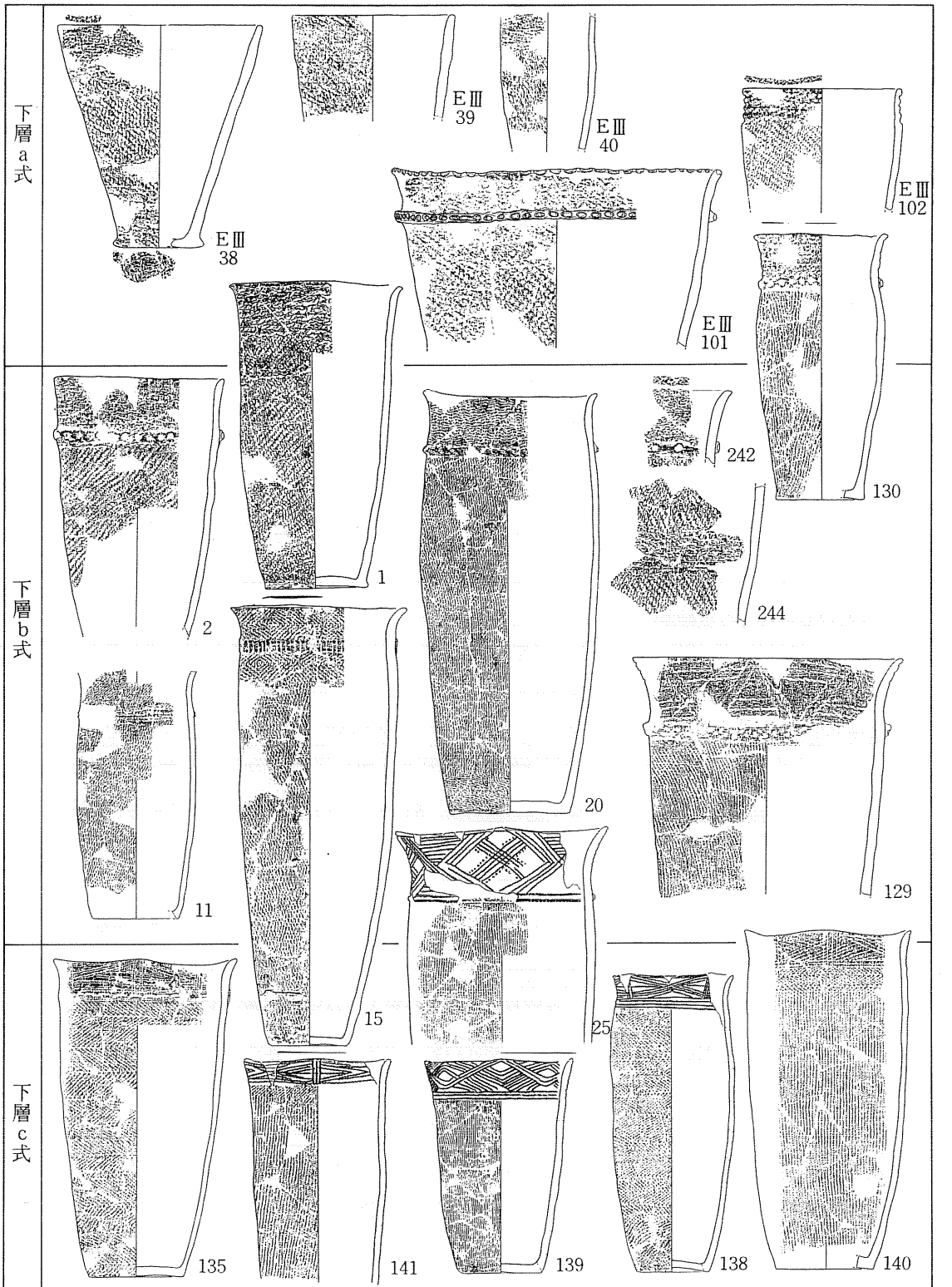
第Ⅲ群1類は量的に非常に少ないが、屈曲の殆どない胴部や胎土、器面調整などから下層d_1式のものと考えられる。

また、第Ⅲ群土器2類は中～小型の土器を主にしているが、器形や胎土などにより下層d_1式もしくは下層c式に含まれるものと思われる。

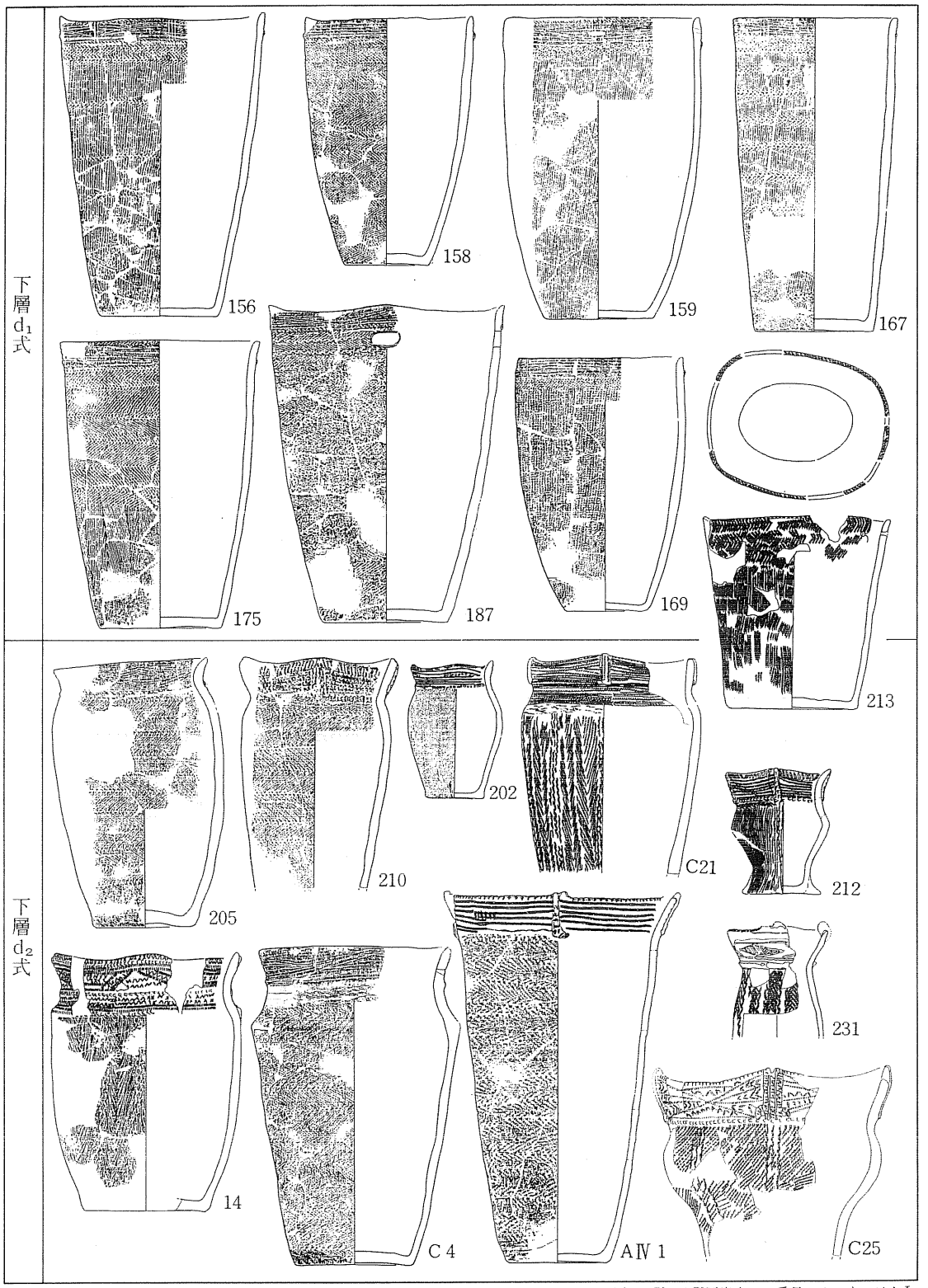
円筒下層d_2式　（第410図、14・20・202・205・210・212・231・AⅣ1・C4・21・25）

下層d_2式には、第Ⅱ群土器5・6・7類及び第Ⅳ群土器2・3類が相当し、第Ⅱ群土器5・6・7類が主体を占める。Ⅱ群5類土器の器形は、胴部が丸みを持ち頸部ですぼまり、口縁部が外反するもので、それまでのd_1式とは明らかな変化が生じている。また、Ⅱ群6・7類は、Ⅱ群5類の口縁部がさらに幅広となり、胴部上端から口縁部が大きく屈曲もしくは屈折するものが主体を占める。幅広になった口縁部文様帯には、縄文もしくは撚糸の側面圧痕文が細やかに施されるが、網目状撚糸文の原体の側面圧痕文が多用される。さらに口縁部文様帯には、口縁端や口縁部中央と下端などに低い隆帯が付され、隆帯上には半截竹管による刺突列の加えられるものが多い。口縁は4つ波頂部を持つ波状口縁が主体を占め、各波頂部からは隆帯の垂下するものも多くなる。口縁端部は若干肥厚するが、斜めに面取りされたような形状を呈するようになり、その上に丸刀で削られたような刻み目列の施されたものもある。胴部文様は、羽状縄文と木目状撚糸文が多用され、これに結び目が1～2の綾絡文が加えられることもある。

第Ⅳ群2類土器は、細い粘土紐を器面に貼り付けて文様を描いたものであり、ソーメン状の粘土紐を貼り付けただけのものと、それよりは太い粘土紐を貼り付けて、その上を半截竹管の



第409図　はりま館遺跡出土円筒土器下層様式変遷模式図（1）EⅢはEⅢ区出土で，番号のみのものはAⅠ・Ⅱ区出土



第410図　はりま館遺跡出土円筒土器下層様式変遷模式図（2）CはC区，AⅣはAⅣ区出土で，番号のみのものはAⅠ・Ⅱ区出土，土器番号は本文中の各章のものに対応する。

内面側をあてて圧し引いたものがある。第Ⅳ群３類土器は、口縁部文様帯全てを背竹管による押し引きで文様を描いたものである。また、第Ⅱ群６類ｄは、大きく膨らむ胴部上半がそれよりも径の小さな円筒状を呈する胴下半と合わさり、口縁部が外反する器形を呈するものである。これらのうち、第Ⅳ群２・３類土器の胴部の形状が不明であるものの、これらの土器群は下層d_2式期に円筒土器様式以外の周辺の土器様式（特に大木６式が考えられる）の影響を強く受けた一群であると考えられる。そしてその中でも第410図25などは、波頂部の先端に刻み目が入り、口縁部文様帯の直線的な側面圧痕文の中を、縄文原体の端を交互に「ハ」の字に押圧した圧痕文で埋めるなど、円筒土器上層ａ式としても誤りではないようなものも含んでいる。

なお、第Ⅳ群土器１類のうち、ｂは口縁部文様帯の狭さや器面調整の状況によって、下層ｃ式かd_1式に属するものであると考えられるが、ａについては不明な点が多い。第Ⅳ群１類ａは、胴部がわずかに外傾して立ち上がり、ほとんどくびれのない頸部を経て口縁部が外反する器形で、幅の広い口縁部文様帯には、半截竹管による平行沈線で文様の描かれたものである。口縁端部と口縁部文様帯の下端には、指頭による刺突列の加えられた隆帯が付されている。胴部には、付加条のある複節斜縄文が施され、その上に間隔を置いて綾絡文が垂下している。従ってこの土器は、器形や隆帯の状況及び胴部文様によって、下層ｂ式期のもので、半截竹管による施文を、例えば諸磯様式等の影響を受けたもの、と推定することも可能であるが、類例を持って判断すべきものと考えている。

以上、はりま館遺跡の昭和63年・平成元年調査で出土した、縄文時代前期円筒土器下層様式の変遷を追ってみたのであるが、その基準の骨子としたのは山内清男の「関東北における繊維土器」に示されたわずかな部分だけであり、はりま館遺跡独自の層位的な調査結果に基づくものではない。従ってこの中には、誤認している部分や説明不足の点など多々あると考えられるが、今後、層位的な事例を待ち、今回は全くできなかった隣県も含めた周辺遺跡での成果を基に、再構成を図りたいものと考えている。

２　はりま館遺跡における縄文時代前期の竪穴住居跡の変遷について

はりま館遺跡における、今回の発掘調査で検出された縄文時代の竪穴住居跡は49軒で、その時期別の内訳は、前期43軒、中期末葉～後期前葉５軒、後期１軒である。ここではこのうち、最も多く検出された前期の竪穴住居跡の、はりま館遺跡に於ける変遷を見てみたい。

前期の竪穴住居跡は、ＡⅠ・Ⅱ区から35軒、ＥⅢ区から６軒、ＡⅣ区から２軒検出されている。このうちＡⅠ・Ⅱ区のものについては既に第４章第２節で、その変遷を述べた。ＥⅢ区検出の竪穴住居跡のうち５軒（ＳＩ51、54ＡＢ、55、56）は、１箇所に集中して住居跡群を形成しており、住居床面や覆土及び周囲から出土している土器によって、円筒土器下層ａ式期のも

のとすることができる。また、他の1軒（ＳＩ81）も、その規模・形態や覆土中の土器によってほぼ同じ時期のものと思われる。AⅣ区検出の重複する2軒（ＳＩ332Ａ・Ｂ）は、新しい方の床面から円筒土器下層ｄ$_2$式の土器が出土しており、この時期のものである。第411・412図は、上述のことをまとめた、はりま館跡における竪穴住居跡の変遷模式図である。住居跡の平面形（外形・柱穴・炉・壁溝などを主体にし、他は省略してある）と、各々の住居跡から出土した土器を示している。これからもわかるように、はりま館遺跡における前期円筒土器下層様式期の竪穴住居跡は以下のように推移したものと思われる。

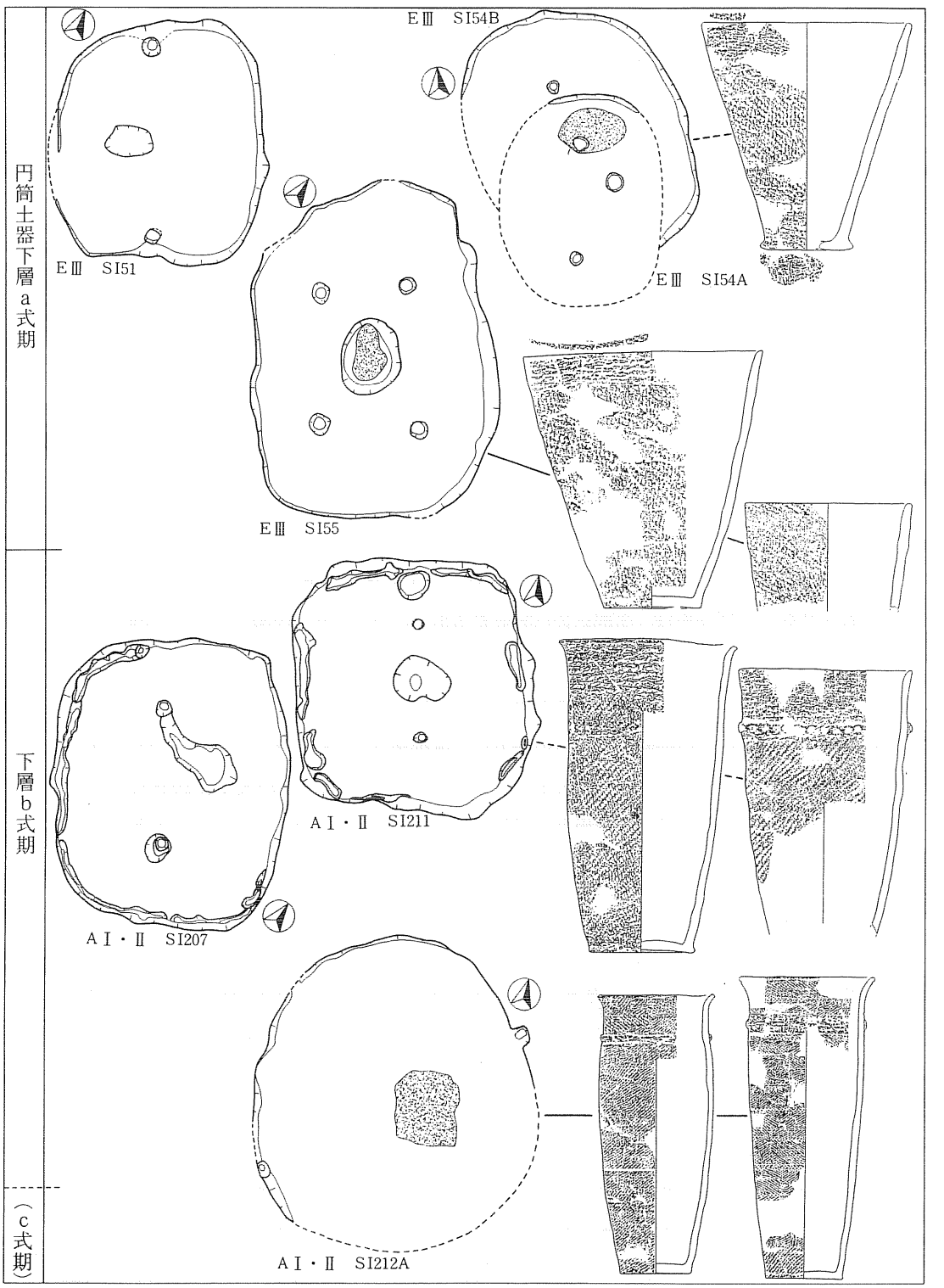
＜下層ａ式期＞：平面形は、長方形の隅だけを丸くした形の隅丸長方形で、楕円形とは異る。主柱穴は2本（ＳＩ51、54Ａ・Ｂ、81）と4本（ＳＩ55）があり、2本が主体をなすと思われる。2本の主柱穴は住居跡長軸線上にあり、壁際にあるもの（ＳＩ51・81）と壁から離れるものがある。4本主柱は、床面中央部の地床炉の外側に整った長方形で配される。炉は、床面中央の地床炉であるが、焼土が残っているもの（ＳＩ54Ｂ、55）と、焼土が明瞭に残っていない浅いくぼみ（ＳＩ51）とがある。焼土は浅くくぼんだ部分が赤変している程度であるが、明瞭な掘り込みのある場合もある。床面積は6.8～14.9㎡であるが、ＳＩ55（14.9㎡）は他の住居跡の平均（8.9㎡）よりも大きいため4本主柱になったとも考えられる。

＜下層ｂ式期＞：平面形は、方形に近い隅丸長方形(ＳＩ211・207)や楕円形に近い隅丸長方形(ＳＩ205)、円形(ＳＩ212・223)など種々あるが、長径と短径の差の大きいものは少ない。主柱穴は2本で、円形のものを除けば長軸線上にあり、壁から離れる。炉は床面中央部がわずかにくぼむ地床炉で、焼土の明瞭でないものが多い。床面積は5.7～16.2㎡で、平均11.4㎡である。

＜下層ｃ式期＞：明確にｃ式期と言えるのは不明で、ＳＩ152Ａ・Ｂの大型住居がほぼこの期かと思われる。しかし大型住居の場合、当時の技術的な意味から考えても梁間の規模には限界があると思われ、床面積を広くしようとすれば桁行を延ばした楕円形もしくは長方形にせざるを得ず、ＳＩ152Ａ・Ｂからこの期の一般的な形態等を推定することはできない。この期のものは、ｂ式期の状況を踏襲しているか、あるいはよりｄ$_1$式期のものに近い形と思われる。

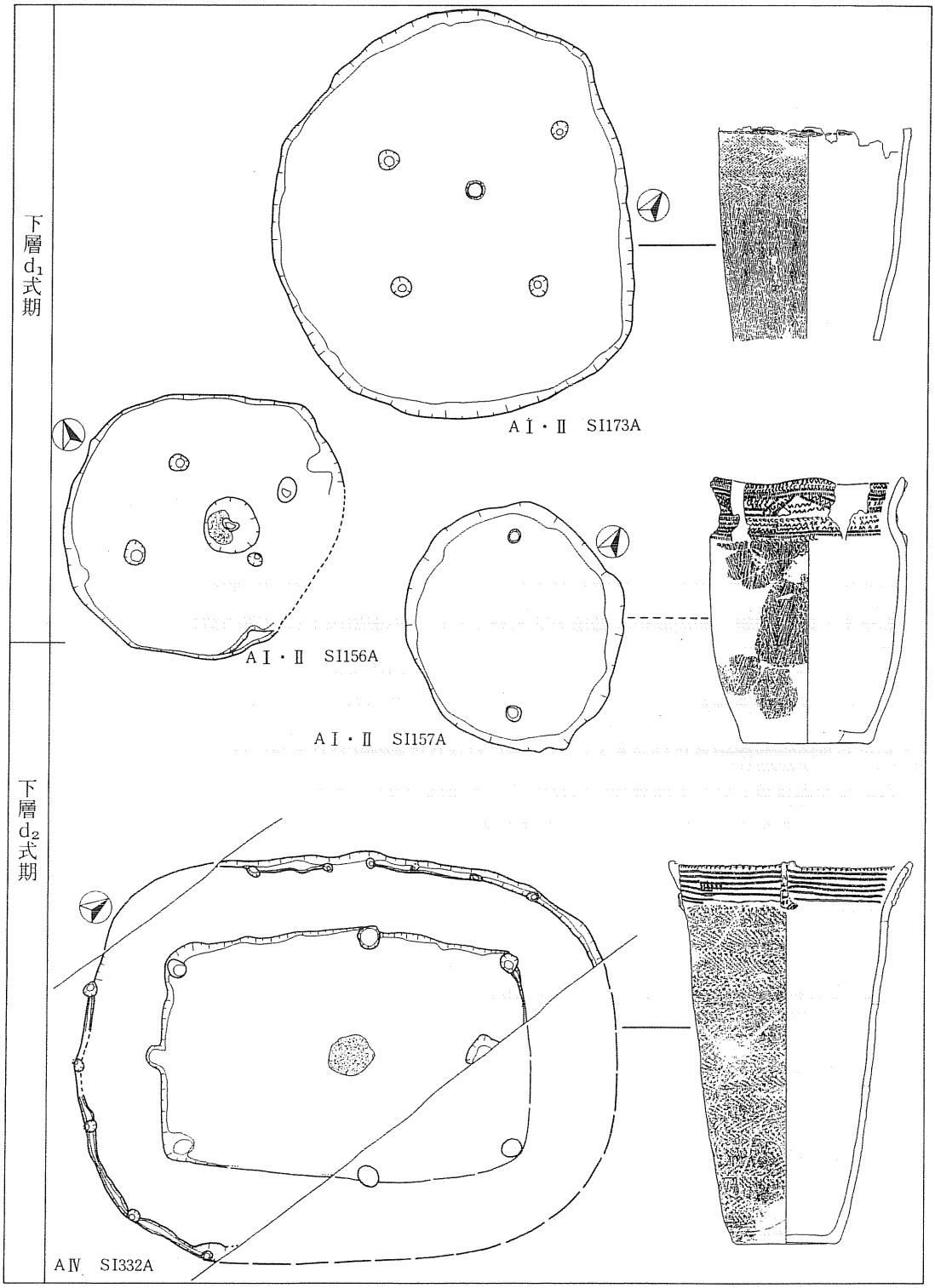
＜下層ｄ$_1$式期＞：平面形は、不整ながらも円形（ＳＩ173Ａ・Ｂ・Ｃ、156Ａ・Ｂ）を基調にすると考えられる。主柱穴は炉を囲む4本を主体とする。炉は床面中央部を、浅いが比較的広く掘りくぼめた地床炉を主とし、土器を埋設する例もある（ＳＩ173Ａ）。比較的規模の大きいものが主体となっている可能性もあり（ＳＩ173Ａ・Ｂ・Ｃ、213Ａ・Ｂ）、床面積も12.8～34.4㎡と幅がある。

＜下層ｄ$_2$式期＞：他の遺跡においても、ＳＩ332Ａ・Ｂのような二段構造の床面を持つものが一般的であったか否かは不明であるが、はりま館遺跡の場合、第6章第4節小結でも述べたように、このような形態の住居跡だけで集落を構成している地区が存在する。平面形は隅丸長方



―― 床面出土　---- 覆土中出土

第411図　はりま館遺跡における縄文時代前期竪穴住居跡の変遷模式図（1）



―― 床面出土・埋設炉　----覆土中出土

第412図　はりま館遺跡における縄文時代前期竪穴住居跡の変遷模式図（２）

形で、床面中央部が外形と相似形で一段低くなる。床面中央部が土間状床面、その外側の一段高い部分がヘッド状床面で、両者の境に６～８本の柱穴がある。炉は、床面中央部の地床炉である。床面積は25.3～44.2㎡で、これまでのものと比べて大きくなる。なお、ＳＩ175Ａの覆土からもこの期の土器が出土しているが、ＳＩ175Ａのように２本主柱でも規模の小さいものは、１本主柱のものと共にｂ式からｄ$_2$式期の各期に存在する可能性が強い。

以上のことから、円筒土器下層ａ式期には、長方形を基調にすると考えられる隅丸長方形で２本主柱のものが主体を占めるが、下層ｂ式期には２本主柱は変わらないが、平面形がより円形に近くなり、ｂ・ｄ$_1$式期の中間的と考えられるｃ式期を経て、ｄ$_1$式期にはほとんど円形基調で主柱穴も４～６本と多くなる。そして、ｄ$_2$式では再び隅丸長方形となるが、はりま館遺跡の場合、床面が二段構造となっている。また、ｄ$_1$式から見られた床面積の拡大傾向はｄ$_2$式期でより明確となり、次の円筒土器上層式期の竪穴住居跡へと連続するものと思われる。

ところで、これら各期の竪穴住居跡が存在する位置は、下層ａ式期がＥⅢ区、下層ｂ～ｄ$_1$もしくはｄ$_2$式期がＡＩ・Ⅱ区、下層ｄ$_2$式期がＡⅣ区及び昭和57年調査区である。単純にこれだけを見ると、はりま館遺跡における縄文時代前期中葉～後葉の集落が、ＥⅢ区→ＡＩ・Ⅱ区→ＡⅣ区・昭和57年調査区と移動したようにも見える。しかし、その可能性は否定できないにしても、第２章第２節の歴史的環境で述べたように、小坂町内には該期の遺物を出土する遺跡が多い。例えば、はりま館遺跡の北2.5kmに位置する大岱Ⅳ遺跡(註５)からは、該期の竪穴住居跡などが検出され、遺物が多量に出土しており、大きな集落の存在したことが予想されている。また、ＥⅢ区は発掘調査されるまで、これほどの竪穴住居跡が存在するとは予想もされていなかった。このように、はりま館遺跡の周縁には、未発見の遺跡が存在しているものと思われる。なお、ＡＩ・Ⅱ区の北西200ｍに位置する横館遺跡(註６)からは、昭和57年の調査で、円筒下層ａ～ｂ式期のものと見られるフラスコ状ピットなどが検出され、同期の遺物も多く出土している。横館遺跡は、今回の調査区に隣接する地区であり、それらの遺構・遺物については、はりま館遺跡の一部をなすものと見ることが妥当と思われる。

註１　秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ｘ』秋田県文化財調査報告書第109集　1984（昭和59年）

註２　山内清男「関東北における繊維土器」『史前学雑誌』１－２　1929（昭和４年）

註３　三宅徹也「円筒土器下層様式」『縄文土器大観』１　1989（平成元年）

註４　註３に同じ

註５　秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅻ』秋田県文化財調査報告書第120集　1984（昭和59年）

註６　註１に同じ

第２節　弥生時代

今回のはりま館遺跡の調査ではＤ区において比較的まとまった量の弥生土器と８基の弥生時代の遺構が検出された。これに対し、他の調査区においてはＡⅣ区で検出された土坑ＳＫ311が唯一の該期の遺構であり、弥生土器の出土も全体に散発的であった。

本節でははりま館遺跡Ｄ区における弥生時代の遺構の分布とその変遷について記述し、弥生時代のまとめとする。遺構の変遷は土器による時期区分をもとに記述することとし、以下において、まずこの時期区分について略述する。

１　時期区分

今回の調査で検出した弥生土器は甕が過半を占め、若干の壺、小形の鉢などが伴い、明確な高坏、蓋などは認められなかった。以下では甕と壺を扱い、その形態と出土状況から時期区分を行うこととする。

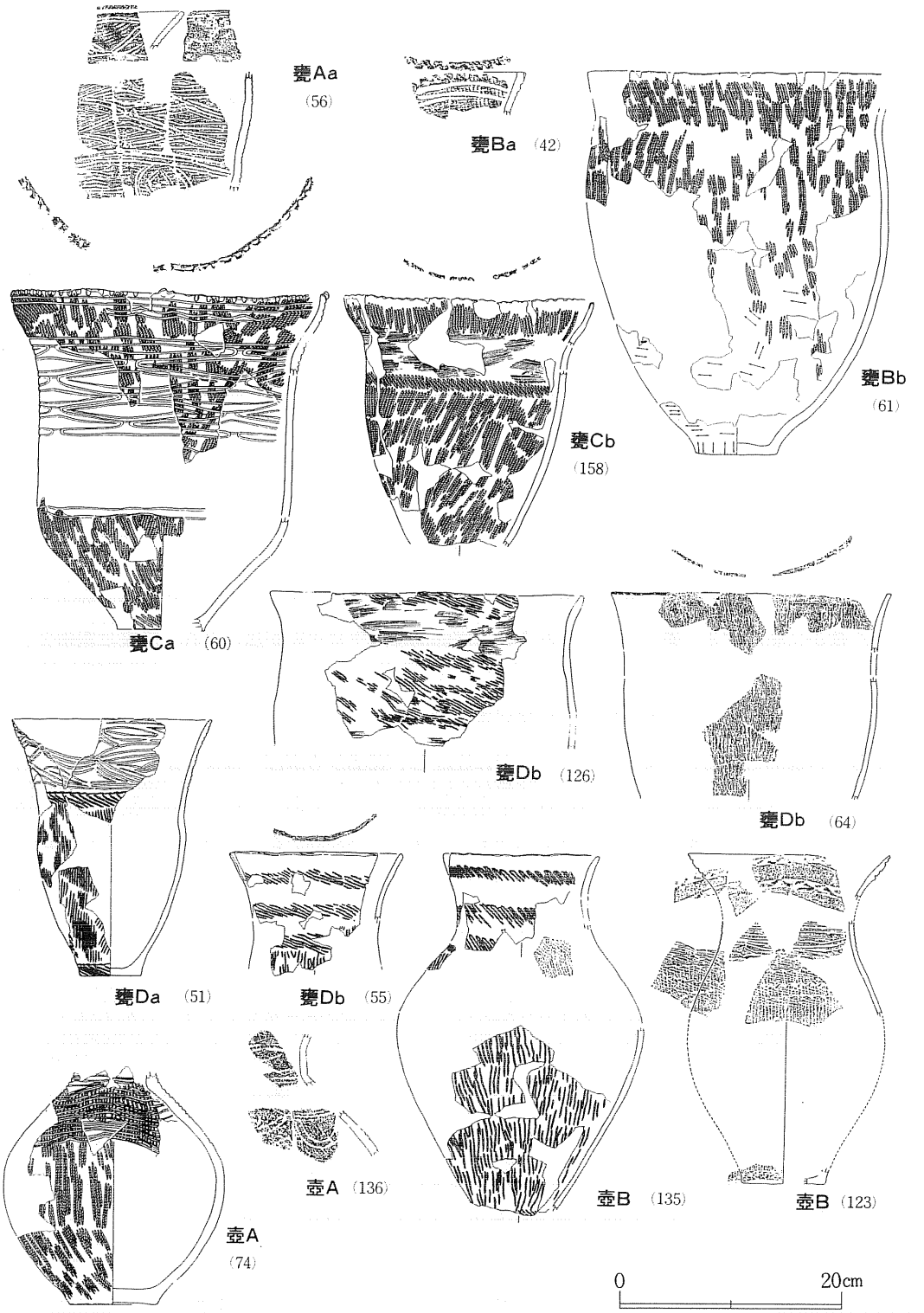
甕はその器形からＡ～Ｄの４類に大きく分けることができる。さらに各類はヘラ状工具による沈線文をもつもの（ａ）と地文のみのもの（ｂ）とに二分する（第413図）。

甕Ａ：口縁部は外反し、口縁部と頸部との境が「く」の字形に屈曲し、さらに頸部と胴部との境が微かに屈曲する。甕Ａａにはそれぞれの屈曲部に水平に沈線が巡らされ、口縁に鋸歯文、頸部に重菱形文、胴部上半には円の中に菱形を充塡する文様が描かれるものがある（56）。56の地文はＬＲ縄文である。甕Ａｂは認められない。

甕Ｂ：口縁部と頸部との境が「く」の字形に屈曲し、頸部から胴部へは緩やかにつながる。口唇は面取りされ、施文をもつものが多く、小突起をもつものもある。甕Ｂａは器形の全容が明らかなものがなく、量的に限られたものである。甕Ｂｂは今回の資料では最も多い。口縁部から胴部にかけてＲＬ縄文が施されるものが大半であるが、なかには口縁部から胴部にかけて無文のものもある（第296図63）。第313図94のように内面に施文をもつものもあるが、数例に過ぎない。

甕Ｃ：口縁が受け口状となり、頸部との境が屈曲する。完形になるものがないため明確ではないが、頸部と胴部との境は明瞭な屈曲をなさないものとみられる。口唇部には刻みや小突起をもつものが多い。甕Ｃａは文様帯の構成が甕Ａａと類似する。口縁部には鋸歯文、頸部には重菱形文あるいは変形工字文、胴部には鋸歯文をもつものが代表的であるが、頸部に曲線的な文様を描くものも存在する。磨消し縄文もしくは充塡縄文をもつものは極めて希である。甕Ｃｂにはｒｌ縄文を地文とし、頸部が無文のもの（158）と口縁部から胴部が無文のものがある（第325図171）。

甕Ｄ：口縁部と頸部との境が屈曲せず、緩やかに外反する。口縁が若干肥厚するもの（51・



第413図　はりま館遺跡D区出土主要弥生土器集成図

126）と肥厚しないもの（55・64）とがあり、細分が可能である。本類には口唇部に突起をもつものは存在しない。甕Ｄａは１例のみで、口縁部から頸部にかけて不整の重菱形文が描かれ、胴部以下はＬ撚糸文が施される（51）。甕Ｄｂには口縁部から頸部にかけてはＬ撚糸文が横位回転施文されるもの（55・126）、口縁部から撚糸文が縦走するもの（64）がある。

以上のほか今回の出土土器には折り返し口縁状を呈するもの（第314図103）、口縁がほとんど外反しないもの（第312図88・89）などが存在するが、少数例のためここでは分類から除外する。今回の資料では甕Ａｂ・Ｂａ・Ｃｂ例は極めて乏しく、器形の相違と文様の有無とが対応する傾向が認められる。

一方、壺は資料が少なく、全形を窺える例を欠く。ここでは推定される器形からＡ・Ｂに二分する。

壺Ａ：胴部が球形を呈する。口縁部から頸部にかけての形態は不明であるが、胴部と頸部の境は「く」の字形に屈曲する。胴部上半には不整の波状文などを描くもの（74）や連孤文を描くもの（136）がある。

壺Ｂ：口縁が外反し、胴部が緩やかに張る。先の甕Ｄと口縁部から胴部にかけての形態は類似する。口縁部から頸部に３段に撚糸文が横位回転施文され、胴部は縦走するもの（135）と口縁部が比較的強く外反し、交互刺突文が２段施され、頸部には横位の沈線が施され、胴部以下には結節回転文と撚糸文が施されるもの（123）がある。

以上の甕と壺についてその出土状況を検討する。

甕Ａａは井戸ＳＥ04（第287図45）と土坑墓ＳＫ73（56）で認められる。甕Ｂａには、口縁部のみの破片のため確実ではないが、ＳＩ90出土土器（42）が属するものと思われる。甕Ｂｂは土坑ＳＫ78に伴って61・63などが出土しており、これには甕Ｃａ（60）、壺Ａ（74）も伴うものとみられる（第302図）。甕Ｃｂは出土例が乏しく、確実な共伴土器は不明である。甕Ｄａ・Ｄｂは土坑墓ＳＫ69Ａで共伴しており（51・55）、壺Ｂ（123）と甕Ｄｂ（226）も共伴する可能性がある（第309・310図）。このほか甕Ｄｂは土坑ＳＫ14およびその周辺で６個体がまとまっている（第321図）。ここでは羽状の撚糸文をもつもの（第298図65・66）や口縁部から撚糸文が縦走するもの（64）があり、甕Ｄａは認められない。

以上の出土状況からは、Ⅰ群：甕Ａａ、Ⅱ群：甕Ｂｂ・甕Ｃａ・壺Ａ、Ⅲ群：甕Ｄａ・甕Ｄｂ・壺Ｂとに群別が可能である。また甕Ｂａは口唇部の外側に刻みが施される特徴が甕Ｃａと類似し、Ⅱ群に属するものと推定される。さらにⅢ群は甕Ｄａ・Ｄｂ・壺Ｂが伴う群（Ⅲａ）と甕Ｄｂのみのもの（Ⅲｂ）とに分離できる。後者の甕Ｄｂには口縁部が肥厚するものが認められず、中には口縁部から撚糸文が縦走する例（64）がある。これらのことから口縁部の横方向の施文帯が崩れてゆく方向性を想定すれば、Ⅲｂ群はより後出のものと考えられる。

以上の各群を従来の編年と比較すると、Ⅰ群は宇津ノ台式Ⅱ群[註1]、Ⅱ群は県内には良好な資料がなく、総体として天王山式[註2]の一部、Ⅲａ・ｂ群は小坂Ｘ式[註3]に対比される[註4]。各群は本調査区内で大勢として排他的な分布を示すことから、基本的に時期差を有するものと考えることができる。各群間では器形と文様帯の対比から、Ⅰ群（甕Ａａ）→Ⅱ群（甕Ｃａ）とⅢａ群→Ⅲｂ群の変化が予想できる。これに先に対比した従来の編年を総合すると、Ⅰ群→Ⅱ群→Ⅲａ群→Ⅲｂ群の変遷を想定することができる[註5]。

以上の土器群別を本調査区の弥生時代の時期区分に援用し、それぞれⅠ・Ⅱ・Ⅲａ・Ⅲｂ期とする[註6]。

2　はりま館遺跡Ｄ区の遺構の変遷

以下では上述の時期区分に従い、遺構の変遷について略述する（第414図）。なお、今回の調査では比較的多数の時期を特定できない土坑や焼土遺構が検出されている。調査区全体の弥生土器出土状況からは該期に属するものも少なくないと推定されるが、ここでは扱わない。

Ⅰ期：該期の遺構には井戸ＳＥ04・土坑墓ＳＫ73がある。該期の遺物集中地点は認められない。井戸は開口部直径３ｍを越える大形の素掘り井戸で、弥生時代に属するものとしては東北地方で最初の検出例であろう[註7]。開口部が擂り鉢形を呈し、下半が円筒状をなす形態は西日本の弥生時代の素掘り井戸と類似し、その系譜を引くものと考えられる。本井戸は既述のように湧水が豊富でなく、掘削後短期間で廃絶されたものと推定される。また、本調査区を始め周辺地域に類例を欠くことを考え合わせると、該地域においては井戸は導入されたものの定着することなく、一旦その系譜は断絶した可能性が考えられる。このことは東北北部における弥生時代の稲作の定着問題と考え合わせると注目される。

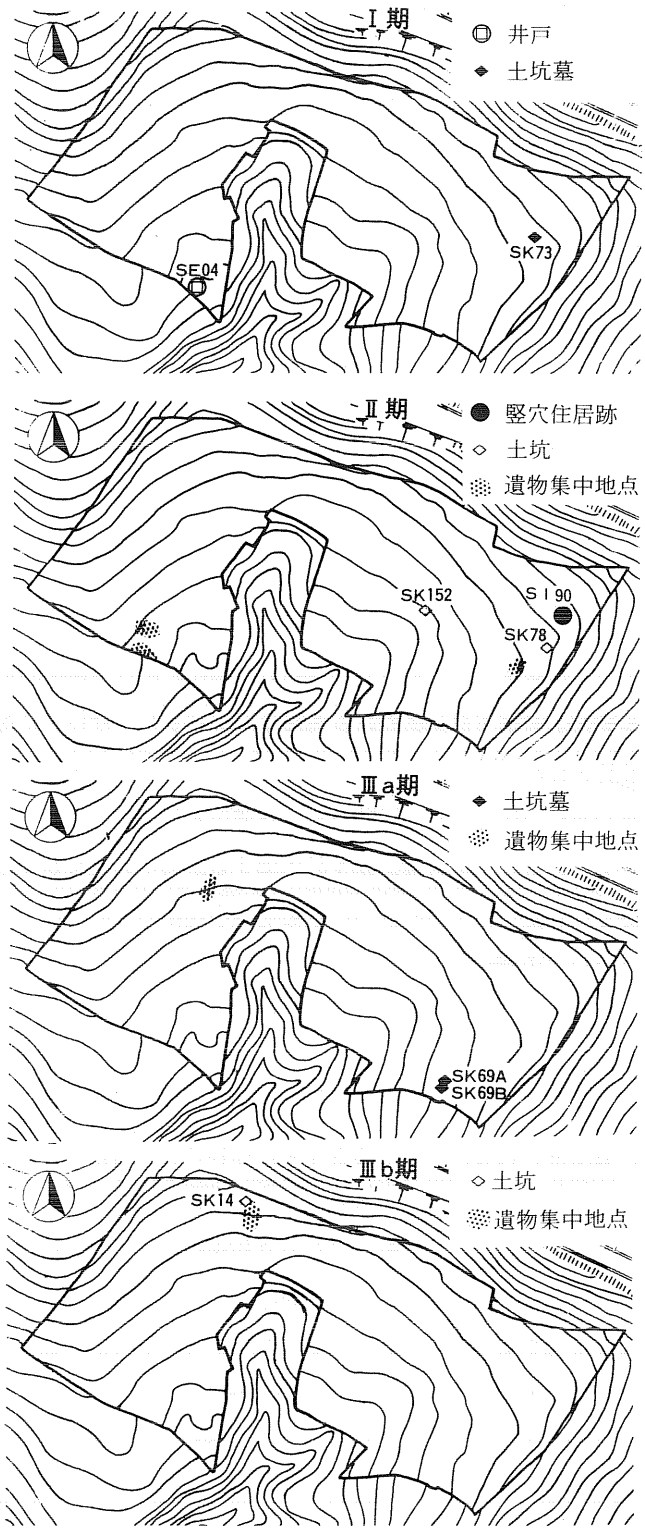
土坑墓は張り出しをもつ円形プランをなし、その上面では焼土が形成され、土器破片が置かれている[註8]。この土坑墓と井戸とは調査区中央の開析谷を挟んで大きく離れており、両者の同時性は明確ではない。今回の調査では井戸周辺で同時期の遺構や遺物集中地点は確認されていない。井戸の近辺で居住域をもとめれば、調査区西半の南側に続く平坦面に存在した可能性があろう。

Ⅱ期：竪穴住居跡ＳＩ90・土坑ＳＫ78・152がある。このほかＮＦ・ＮＧ84グリッド周辺、ＯＫ・ＯＬ86グリッド周辺、ＯＫ84グリッド周辺などで該期の遺物が比較的集中的に出土している。竪穴住居跡は１軒のみの検出である。土坑のうちＳＫ78は竪穴住居跡の西南に比較的隣接する。２基の土坑はともにその上位に土器を伴うが、土坑墓であるかは明確ではなく、竪穴住居跡と同時併存したかも確実ではない。少なくとも本竪穴住居跡周辺には同時期の住居跡は存在しない。遺物の検出状況からはⅠ期同様井戸の西南側の平坦面に居住域が存在した可能性も考えられよう。

竪穴住居跡ＳＩ90は直径３ｍ前後の円形プランをなす小規模なものである。該期の竪穴住居跡は秋田県内では本例が唯一の例で、県内の同時期の比較資料を欠くが、弥生時代前～中期の例がより大形で、周溝をもち、立て替えする例が顕著であることと際立った対照をなしている。(註９)弥生時代の後半に竪穴住居跡の規模が縮小することは岩手県などの調査例からも指摘されており、(註10)本例もその状況と対応するものであろう。上述したように調査区域外に居住域がさらに存在する可能性がある。しかし、本竪穴住居跡については単独の存在であり、該期には前代に比べ集団が小規模化したことが推定できよう。

Ⅲａ期：土坑墓ＳＫ69Ａ・Ｂがある。ＳＫ69ＢはⅢｂ期まで下る可能性もあるが、後述するようにＳＫ69Ａと関係する遺構と考えられることから、ここではⅢａ期に属するものとして扱う。このほかＯＧ93～95グリッド周辺に比較的該期の土器が集中する。

ＳＫ69Ａは張り出しをもち、上位に焼土と土器を伴い、先に触れたＳＫ73と類似した特徴を有している。土坑墓からの出土石器にはＳ５のように恵山文化の靴形石鎚(註11)



第414図　はりま館遺跡D区の遺構分布

に類似するものがあり、その系譜を暗示している。一方ＳＫ69Ｂは円形プランでまとまった遺物を出土せず、焼土も伴わない。両者はその形態や遺物の検出状況などに相違が認められるが、両者のみ隣接して存在することから、近接する時期に営まれた同一集団の土坑墓と考えられる。両者の相違は被葬者の性差あるいは出自の違い等を反映している可能性があろう。周囲に居住域を伴わないが、本土坑墓の南側の調査区外の平坦面に竪穴住居跡が存在した可能性も考えられる。

Ⅲｂ期：土坑ＳＫ14が存在する。このほか土坑周辺のＯＤ97～99グリッド周辺に遺物が散在している。ＳＫ14は周囲に土器および焼土を伴うことから、土坑墓であった可能性があるが、確実ではない。該期の遺構・遺物はＯＤ97～99グリッド周辺にほぼ限定され、該期の活動域は縮小したものと推定される。

以上の本調査区の弥生時代の遺跡の在り方の変遷をまとめ、その性格について若干の想定を述べる。

Ⅰ期においては井戸が掘られ、土坑墓も残されている。鑿井は当時においてはかなりの大工事であると推定されることから、一定規模の相対的に定着的な集落が存在したものと想定される。この段階での生業としては鑿井を稲作に伴う技術体系のひとつととらえるならば、谷水田を利用した稲作農耕の存在を考慮すべきかもしれない。ただし、井戸覆土の花粉分析結果では花粉の保存が良好でなかったこともあり、稲作農耕が存在した可能性は指摘されていない。今後の資料の増加をまって検討する必要があろう。

Ⅱ期になると竪穴住居が１軒出現する。若干の土坑が伴う可能性があるが、上述したように該期の集団は弥生時代前～中期と比べ小規模のものであった可能性が認められる。該期は生業についての資料を欠く。

Ⅲａ期には調査区外に存在した可能性も想定できるが、現状では竪穴住居跡は認められない。土坑墓が２基存在するが、上述のように同一集団によって残された可能性が考えられる。土坑墓の出土遺物からは恵山文化との関連が想定されるが、生業については不明である。

Ⅲｂ期には土坑１基が存在する。遺物の分布は限定され、住居跡も認められず、この段階ではすでに定住的な集落ではなかったと推定される。

以上のように、弥生時代のはりま館遺跡Ｄ区では当初比較的定着的な集落が存在するが、次第にその定着度を弱め、規模が縮小するという変遷を想定することができる。この変遷の背景には生業形態が変化したことが予想されるが、今回の調査では生業を復元する具体的な資料を得ることができなかった。今後の課題としたい。また、上述の遺跡変遷の想定は調査区外に遺構が存在するとする仮定や土器による時期区分の是非など検討すべき問題を多数含んでいる。周辺地域における該期の遺跡の在り方の検討や土器の系統分析(註12)を合わせて、これらも今後の課

題である。

註１　須藤隆「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」『文化』第33巻第３号　1970（昭和45年）

註２　坪井清足「福島県天王山遺跡の弥生式土器－東日本弥生文化の性格」『史林』第36巻第１号1953（昭和28年）

註３　奥山潤・安保彰「十和田湖西南部（小坂鉱山）の弥生式文化とその後続形態（上）・（下）」『考古学雑誌』第49巻第２・３号　1963（昭和38年）

註４　Ⅲａ群は口縁部に交互刺突文をもつ壷が存在することから天王山式の一部と併行するものと思われる。

註５　Ⅱ群からⅢａ群への変遷は今回の調査資料から直接的にたどることはできない。青森県沖附（１）遺跡第６類を介することによって甕Ｃｂから甕Ｄｂへの変遷を想定できる可能性があろう。

青森県教育委員会『沖附（１）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第100集　1986（昭和61年）

註６　ここでの時期区分は遺構変遷の記述を目的としたものであり、各時期の土器の内容については検討を要する。

註７　本遺構に類似する例に、本遺跡の北約2.6㎞に位置する大岱Ⅰ遺跡の井戸状遺構ＳＫ09・14がある。本遺跡例とはその規模・形態と遺構が開析谷際に立地する点に共通性が認められる。

秋田県教育委員会「大岱Ⅰ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅹ』秋田県文化財調査報告書第109集　1984（昭和59年）

註８　張り出しをもつ土坑の形態と上面の焼土および土器の検出状況が類似する土坑墓には青森県大面遺跡第24号土坑墓例がある。

青森県教育委員会『碇ケ石大面遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第55集　1980（昭和55年）

註９　冨樫泰時「地蔵田Ｂ遺跡（弥生時代）の歴史的意義について」『あきた史記』歴史論考集２　1989（平成元年）

註10　小田野哲憲「岩手県における弥生時代の住居址」『紀要Ⅷ』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1988（昭和63年）

註11　千代肇「弥生式文化の北方伝播とそれをめぐる課題」『考古学研究』第９巻第１号　1962（昭和37年）

註12　例えば第313図92は口縁下端が突出し、突出部が刻まれる特徴が東北南部の踏瀬大山式に類似し、第326図180は文様が２本同時施文具によって施される特徴が同じく東北南部の十三塚式に類似する（多賀城市埋蔵文化財調査センター相沢清利氏の御教示による）。

また、甕Ｂｂは北海道の恵山式（瀬棚南川第Ⅳ群ｉ類）に類似する。ただし、前者の底部が平底であるのに対し、後者では揚げ底になるものが一般的であるという相違がある。さらに、本遺跡では瀬棚南川第Ⅳ群のうちｉ類以外に対比可能な資料がほとんど認められないこともあり、両者の対比にはなお検討を要する。

瀬棚町教育委員会『瀬棚南川』　1983（昭和58年）

第３節　平安時代

はりま館遺跡発掘調査で得られた平安時代の資料は、昭和57年調査分を含めて次のように総括できる。遺構としては、竪穴住居跡31軒、掘立柱建物跡４棟、土坑14基、鍛冶炉５基・鍛冶関連遺構２基・炭焼成遺構３基、焼土遺構２基、溝状遺構19条、柱列３列、配石遺構１基、畑畝跡１箇所。遺物としては、土師器（坏、甕、鍋、壷、把手付土器、ミニチュア土器、器種不明）、須恵器（坏、壷）、木製品（皿）、鉄製品（刀子、鎌？、釘・棒状鉄製品など）、砥石、フイゴ羽口、及び炭化米・麦、骨・歯、鉄滓、鍛造薄片などである。

この内、遺構ではＤ区の鍛冶炉４基及び鍛冶関連・炭焼成遺構、Ｃ区の溝状遺構１条以外はＡ区、すなわちはりま館遺跡の東端部、関上段丘面で検出している。遺物もＤ区鍛冶炉周辺出土の鉄製品（刀子）、フイゴ羽口片を除く全ては、Ａ区出土である。

このＡ区を一覧すると、比較的整然と配された竪穴住居跡が主要構築物であった。そして「はりま館」は、調査した範囲内という前提には立つが、遺構間の重複の少なさ、遺構の選地と無遺構域の存在、そして遺構群の外郭を巡る溝状遺構・柱列のあり方などから、比較的短い期間－集落内に規制が行き届いていた期間－に営まれた区画施設を伴う集落であったと考えることができる。

本節では、「はりま館」集落の復元に欠くことのできない遺構・遺物の一部を抽出し、検証を行い、まとめとしたい。

１　遺構について

「はりま館」（Ａ区）を構成する遺構は、その立地から標高約198ｍ前後の関上段丘下位面に位置する一群（ＡⅠ・Ⅱ区）と標高201ｍ前後の同段丘上位面に位置する一群（ＡⅢ・Ⅳ区、昭和57年調査区）に類別できる。

前者は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、鍛冶遺構、焼土遺構、配石遺構、畑畝跡及び溝状遺構・柱列からなる。竪穴住居跡は、比較的狭い範囲内に11軒集中しているが、重複が認められないことを特徴とする。遺構群の北端と西端にはそれぞれ、ＳＤ207とＳＤ200、ＳＤ126・ＳＡ129とＳＤ134の少なくとも２時期の溝状遺構・柱列が巡り、遺構群を画するような配置を示している。また竪穴住居跡・土坑・鍛冶炉などと掘立柱建物跡・溝状遺構が一体となって、あるいは密接な関係を保ちながら併存していたのではないかと想定できる遺構を何例が抽出できる。すなわち、①ＳＩ101竪穴住居跡・ＳＫ103土坑（製鉄関連遺構）とＳＤ102・104溝状遺構、②ＳＩ107竪穴住居跡と鍛冶遺構ＳＸ110・ＳＢ111、③ＳＩ109竪穴住居跡とＳＫ137土坑、138土坑（製鉄関連遺構）及びＳＢ184掘立柱建物跡、④ＳＩ119竪穴住居跡とＳＫ128土坑・Ｓ

B185掘立柱建物跡である。①～③は、竪穴住居と製錬あるいは精錬に係る遺構が組み合う形となり、これを囲う塀や上屋などが存在していたことが想起できるものである。この種の遺構は、竪穴住居と掘立柱建物が一つの建物（住居）として機能していたと考えられるものに類似し、秋田県・青森県で16遺跡から検出例がある。(註1) これらの内、一部については、掘立柱建物部分を「厩であったと仮定」できるとし、「内厩型民家の祖形」をなすとも考えられている。(註2) 「はりま館」例とは性質を異にするが、建物（住居）の構造、住居と周辺遺構との係りには、示唆を得るところがある。

後者は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、焼土遺構及び溝状遺構・柱列からなる。遺構の配置は段丘東縁部に点在し、段丘中央部寄りに遺構は存在しない。遺構群の北端にはＳＤ06溝状遺構・ＳＡ09柱列が配され、同遺構群北側の竪穴住居跡など（ＡⅢ区遺構群）の西側にもＳＤ18、ＳＤ303溝状遺構により画されていた可能性がある。また前者ＳＤ207と後者のＳＤ06・ＳＡ09は、その方向性、規模・形態から一連の施設であった可能性が高い。この点から言えば、両遺構群は、塀・垣根・柵などと考えられるＳＤ207、ＳＤ06・ＳＡ09区画施設を北限の遺構とする集落と想定できる。

区画施設を伴う集落は、米代川流域を中心に10数例確認している。(註3) 中でも、集落もしくはその一部を溝状遺構等により区画している施設は、鹿角市御休堂遺跡・高市向館跡、能代市十二林遺跡・福田遺跡等で検出されている。また埋没家屋遺跡として周知されている鷹巣町胡桃館遺跡のＡ$_2$柵列・Ａ$_3$杭列もここに含まれる。

次に集落を構成する各要素、特に竪穴住居跡、鍛冶遺構について見ていきたい。

(1)　カマド構築材・構築方法について

竪穴住居跡に普遍的に設置されているカマドは、一般的には、カマド袖部（基部）は石（河原石・礫・切石）や粘土等を用い、煙道部はトンネル状・溝状に長く、あるいはU字状などに短く壁外を掘り込む。支脚は専用の土製品、石・土器・フイゴ羽口などを転用する例がある、と理解できる。袖部は、石組あるいは石を芯材とする“石”が主である場合と、“粘土等”が主となり石などを補強材として用いている場合がある。

ここでは、後者“粘土等”を主とするはりま館遺跡検出のカマドを中心に、構築材・構築方法などを次の３つの視点に立ち検討してみる。

①　袖部構築材と構築方法

たとえば県内で調査・報告されている大部分のカマドは、「袖部には粘土を用いている」という記述が多い。これに誤りがあるということではない。ただ、粘土だけで袖部が作られているのであろうか。近年刊行の報告書を見てみると、既にこの点に着目して、袖部の断ち割り等による観察所見を加えている例もある。(註4) すなわち、粘土に砂やシルト質土、あるいは火山灰や焼土、

炭化物などを混和材として用いているもの、逆に粘土以外の用材(土)を主として少量の粘土を混ぜているものなど、袖部の構築材にバラエティーがあることが知られるようになってきた。

袖部を断ち割りしてみると、大きく二つの構造が認められる。1つは全体がほぼ同一の用土で構成されるものであり、仮に単層構造としておく。いま1つは袖基部と上部で異なる用土により構成されるもので、これを複層構造としておく。前者をA種、後者をB種とすると、両方とも細分して把えることが可能となる。

A種（単層構造をもつ）

ア)粘土を主とするもの。地山粘土を二次的に利用している例（ＳＩ107か）と、別種の粘土を用いる例（ＳＩ101・106・109・116・129Ａ・323など）がある。いづれの粘土も、それ自体そのまま用いるのではなく、混入量に多寡はあるものの大湯浮石粒子、砂質土、シルト質土などを含ませている。後者は、一般に白色粘土と称されている灰白〜浅黄橙色を呈する粘土を用いている。ＳＩ101・109は、切石を芯材とし、ＳＩ106・116・323は、石・塼・土器などを袖部の補強材として用いているようである。なお、塼をカマドの芯材等に用いている例は、鹿角市下沢田遺跡ＳＩ07・08・11で5点認められる。(註5) なお、はりま館では確認されなかったが地山を掘り残すことによって袖を構築している例もある。

イ)シルト質土を主とするもの。袖部が遺存している例では確認できなかったが、崩落土の観察からＳＩ115・120にその可能性がある。ＳＩ115袖部は、おそらく石を芯材とし、黒褐色シルト質土に・大湯浮石粒子を混ぜている。

粘土とシルト質土などの混合割合によっては、ア)・イ）の中間に位置する例も想定できる。昭和57に調査したＳＩ004・005（314）・020（302）は、報告書で見る限りにおいては、ア)・イ)あるいはその中間に位置づけられる。

B種（複層構造をもつ）

本種は、断ち割りを行わなければ、複層構造であるか否かの判別はできない。

ア)基部にシルト質土、上部に白色粘土で構築するもの(ＳＩ301右袖・310)。ＳＩ301右袖基部のシルト質土には、地山粘土が含まれる。同左袖の基部は、地山土の掘り残しとなっている。

イ)シルト質土、白色粘土を互層に積重ねているもの（ＳＩ21）。

② 煙道部の形態とその構築材・構築方法

カマドの排煙についての基本的な考え方は、カマドは、ほぼ例外なく竪穴住居の壁に取り付くという点に着目すると、炉・囲炉裏とは明らかに異なり、何らかの方法を以て煙道を設け戸(壁）外に排煙していたと考えられる。この場合、「煙道が短く住居周壁部を煙出し」とする記載は原則的にあり得ない。すなわち周壁＝板壁であるので、少なくとも板壁より外に排煙口が位置しなければならない。従って煙道部（煙出し）は、削平により失われたか、掘り込みを

殆ど伴わずに粘土等で架構－地上式など－していたと想定する必要がある。

この観点に立脚し、本遺跡のカマド煙道部を観察すると、次の2つの形態に分けられる。

A：壁外をU字形に短く、やや幅広に掘り込むタイプ（ＳＩ21・301・310）。煙道底面はおよそ30°以上の急傾斜で立ち上がる。削平されているが、ＳＩ310もこのタイプと考えることができる。

B：壁外を溝状に比較的長く掘り込むタイプ。トンネル状に掘り込む例はなく、煙道底面も一様に煙出しに向かって上り勾配となる。斜度は8～25°でおよそ17°前後に集中する。

a）溝の幅が50cm以上の幅広の煙道をもつもの（ＳＩ109・116・129Ａ・323）

b）約40cm前後の幅の狭い煙道をもち、先細りとなっているもの（ＳＩ101・106～108・113・115・120）がある。

Ｂ－ｂ）タイプは、ＳＩ101を除いて煙道部架構材が失われている。Ｂ－ａ）タイプは4例とも白色粘土等の架構材の一部が遺存している。ＡタイプＳＩ301も同様である。

煙道部構築材は、袖部と一連して白色粘土等で架構している場合（ＳＩ109・116・323）と、袖部とは明らかに異なる用材を使用している場合（ＳＩ101・119Ａ）がある。前者は、煙道側壁から天井部にかけて粘土を貼っている。ＳＩ109は、袖部と同じ白色粘土を用いているようであるが、袖部のそれより幾らか黄味・粘性が強く感じられ、浮石粒子などの混和材の量が少ないのかもしれない。

後者には決定的な違いがある。ＳＩ101・119Ａ煙道天井部は、細い竹（笹竹か）を骨材とし、この上にスサを混ぜた粘土を貼り架構している。竹は径7㎜前後、最大で約9㎜の材を使用し、カマド中軸線に平行するように一列密に並べていく。従って完成した煙道部天井内壁は縦方向に配された竹材がむきだしで並んでいたことになる。これに直交する材や側壁の状態は分からなかった。ただ内側に面する壁は、著しい熱作用で硬化している。

③　支脚等について

煙道部と燃焼部を画する支脚は、7例確認できた。支脚に石（礫）を用いているもの5例（ＳＩ101・106・113・115・310）、フイゴ羽口のもの（ＳＩ109）、粘土を芯に土師器甕を被せているもの（ＳＩ323）である。昭和57年に調査したＳＩ004では、土師器把手付土器を逆さにして転用していた。

一般に支脚は、燃焼部奥中央に位置するはずである。ところがＳＩ101・109・310・323の4例の支脚は、左右いづれかの袖部に寄っている。もちろん原位置を保ってである。このことは何を意味するのであろうか。一方、ＳＩ310に注目したい。同カマド燃焼部奥には礫の支脚に隣あって粘土塊が存在していた。袖部で用いている白色粘土とは異なり、地山粘土を主としているようである。この粘土はＳＩ323支脚基部の粘土と同じに見える。このことから、ＳＩ310

では２つの支脚を有していたのか、あるいは他の偏在する支脚と合わせ一般的に想定されている支脚の用途とは異なる設置物であったのか、現段階ではこれ以上言及できない。ただ煙道部構築方法には、製鉄・須恵器などの築窯方法に類するものがあり、この点から想定するなら偏在している支脚の一部は、“障壁”、“分焔柱”のような機能であった可能性も呈示できるのかもしれない。

以上の３項目をを踏まえて見ると、カマドの良し悪しはそれがいかに高温に耐えるような構造に設計し構築するかと言えるであろう。遺存しているカマドの使用頻度は明らかではないが、火床面の状態を観察する限りでは、それ程短い期間とは考えられない。ところがカマド本体、特に燃焼部を包む袖部内壁は火床面と比較して赤変の度合が低いのではないか。他方、袖部と煙道部の構築材を比較した場合、袖部は粘土に砂・シルト質土を混ぜたり、逆に粘土を殆ど使用していない例もあり、いわば“軟”構造と言える。これに対し、煙道部は同じ粘土であっても粘性の強い用材を使用したり、スサ入り粘土を用いたりする“堅”構造を特徴とすることができる。このことから袖部の構造は赤変・硬化の度合を低くおさえ、耐久性をもたせていると考えることができるのではないか。特に袖Ｂ種は、最も火熱を受ける火床面と本体を直接的に結合させることなく、間（基部）にシルト質土というクッションを介在させることによって、耐久性を増すような構築方法と想定できる。また使用中の破損等に伴う改築を行い易い袖部と、壁の下に潜り込むような構造となる煙道部では、おのずと用材・構築方法に違いが生じることは、先人達の経験則に基づく結果なのかもしれない。

(2)　焼失家屋について

31軒の竪穴住居跡には、焼失家屋と考えられる遺構が８軒含まれている。遺存状態から次の２つのタイプを想定できる。

Ａ：ほぼ完全に焼失した住居、あるいは焼失後、炭化材などを整理している住居（ＳＩ07・19・106・113・120）。このタイプには、（ａ）ほぼ完全に焼失したか、整理をおこなっている住居（ＳＩ113・120）、（ｂ）完全に焼失し切れずに部分的に炭化材が残る住居、あるいは部分的に炭化材の整理を行っている住居（ＳＩ07・19・101・106）の別が想定できる。（ａ）は床面上に砕片化した材・炭化物を一面に薄く確認できる。（ｂ）ＳＩ101は、東西の壁板が床面に倒れ、南北の壁板は直立したまま遺存している特異な例である。覆土中には炭化材をほとんど確認できず、壁板材以外の材は完全に焼け落ちたと考えられる。

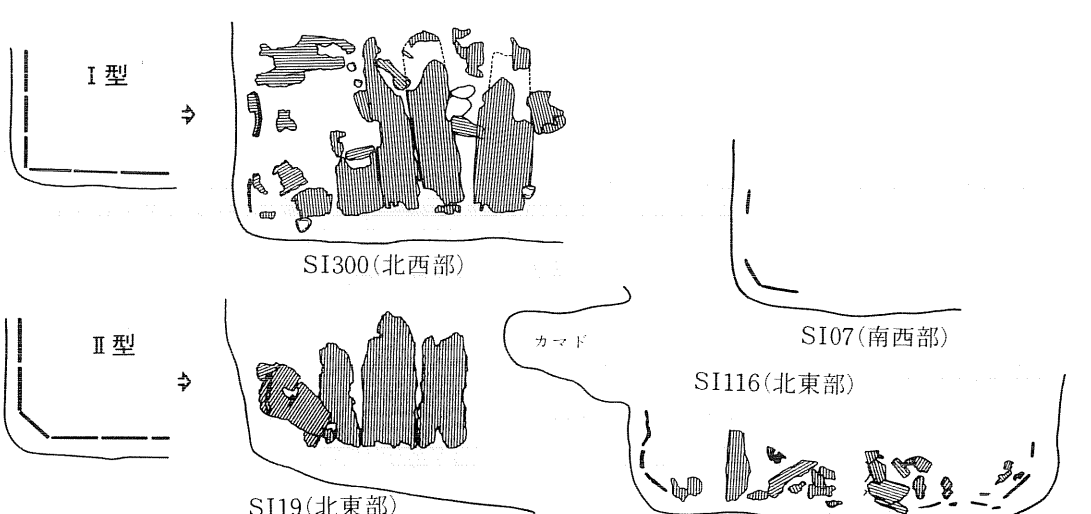
Ｂ：焼失後、ほぼそのままの状態で廃棄した住居（ＳＩ116・300）。ＳＩ116は、炭化材の下から炭化麦・米などが多量に出土していることから、居住中に火災を受けたことが想定できる。仮に家財を一切持ち出さずに火災を受けたとすると、火災当日、少なくとも土師器甕12個体、

把手付土器1個体、砥石3点を保有していたことになる。一方、ＳＩ300は、全体を調査できなかったが、精査した範囲内に土器は覆土中を含めて1点もなく、火災に伴い家財を搬出したか、搬出の後焼失させた可能性がある。

A(ａ)タイプ以外の焼失家屋には、各種の炭化材が確認できた。ＳＩ101を代表例とする壁板材（ＳＩ07・19・101・116・300)、壁板材を押さえていたであろう横木材（ＳＩ116・300）、床面上の根太材（角棒状、ＳＩ07）などである。柱状の角材は一切確認できなかった。またＳＩ116では、屋根材と想定できる炭化材も検出しているが、遺存状態が良好ではなく特定には至らなかった。ＳＩ07では、炭化した萱も確認した。屋根に葺いていたのであろうか。

数多く検出した壁板材に注目しよう。この炭化材は、近年の調査事例の増加に伴い、竪穴周壁直下の壁溝を掘り方とする壁板と認知され、定着化していると言える。はりま館遺跡で検出した壁板（列）は、一枚当たりの大きさが、ＳＩ101・116で幅20～30cm（平均23cm前後）、ＳＩ19・300で幅30～42cm（平均35cm前後）、長さ（高さ）は、最長でＳＩ300の135cmである。板材の幅については、同じ焼失家屋である鹿角市下乳牛遺跡ＳＩ01(註6)を例にとれば、その幅24～34cmであり、28～30cmのものが多いと記されてある。また同市北の林Ⅰ遺跡ＳＩ016(註7)では、その幅15～25cm、同市案内Ⅲ遺跡ＳＩ010(註8)で、幅20～30cm、同市歌内遺跡ＳＩ001(註9)で、幅24～26cm、また埋没家屋で知られる鷹巣町胡桃館遺跡Ｂ1建物(註10)で幅20cm前後であり、板材の幅が35cmを超えるような壁板はほとんどないようである。この点からＳＩ19・300の材は米代川流域で確認されている中では幅広の部類に入れることができる。

また壁板材の確認・検出状況から次の点を指摘できる。住居隅部で立ったまま、あるいは倒れかけている材を観察すると、壁隅部の構築に際し2種類の方法が採用されていることが分かる。第415図の模式図で説明すると、



第415図　竪穴住居跡壁板の配置類型

Ⅰ型：住居隅部で隣合う壁板どおしがほぼ直交する例（ＳＩ300北西隅）。

Ⅱ型：Ⅰ型の直交部分に壁板を斜め方向に配する例（ＳＩ19北東隅、ＳＩ116北東・北西隅）。

ＳＩ07南西隅は、上例ほど明確ではないが、Ⅱ型に属すると考えられる。２種類の構築方法、特にⅡ型の壁板と柱の関係は、上屋構造との係りを含めて興味深い。なお、鹿角地方で壁板材の確認できる竪穴住居跡、たとえば前述の下乳牛遺跡ＳＩ01などを例にとってもⅠ型のみのようであり、Ⅱ型は例を見ない。

(3) 出入口施設をもつ竪穴住居跡　（第416図）

はりま館遺跡で検出した平安時代の竪穴住居跡には、数例であるがカマドの設置されている壁側に方形、U字・V字形を呈する張出しが認められる。確認・精査時の状況から土坑などとの重複ではなく、各住居に伴う施設であることが確かめられている。これら施設の性格付けについては、位置と張出し部底面の状況から「住居の“出入口”施設」と想定している。また出入口を念頭において見ると、壁溝が一箇所だけ数10cm途切ている住居が存在することに気付く。これも出入口に伴う遺構と考えられる。

ここで昭和57年の検出遺構も含めて、竪穴住居跡に伴う出入口を類型化して一覧に供したい。

Ⅰ類：張出しをもつタイプ。全てカマドと同じ壁面に取り付く。４例あり、いずれもＡⅡ区で確認している。平面形状から２分できる。

Ａ―方形を呈する張出し（ＳＩ109・126）ＳＩ109は、張出し部各隅に小柱穴を伴う。東側が階段状をなし、東側から出入りしていた可能性もある。

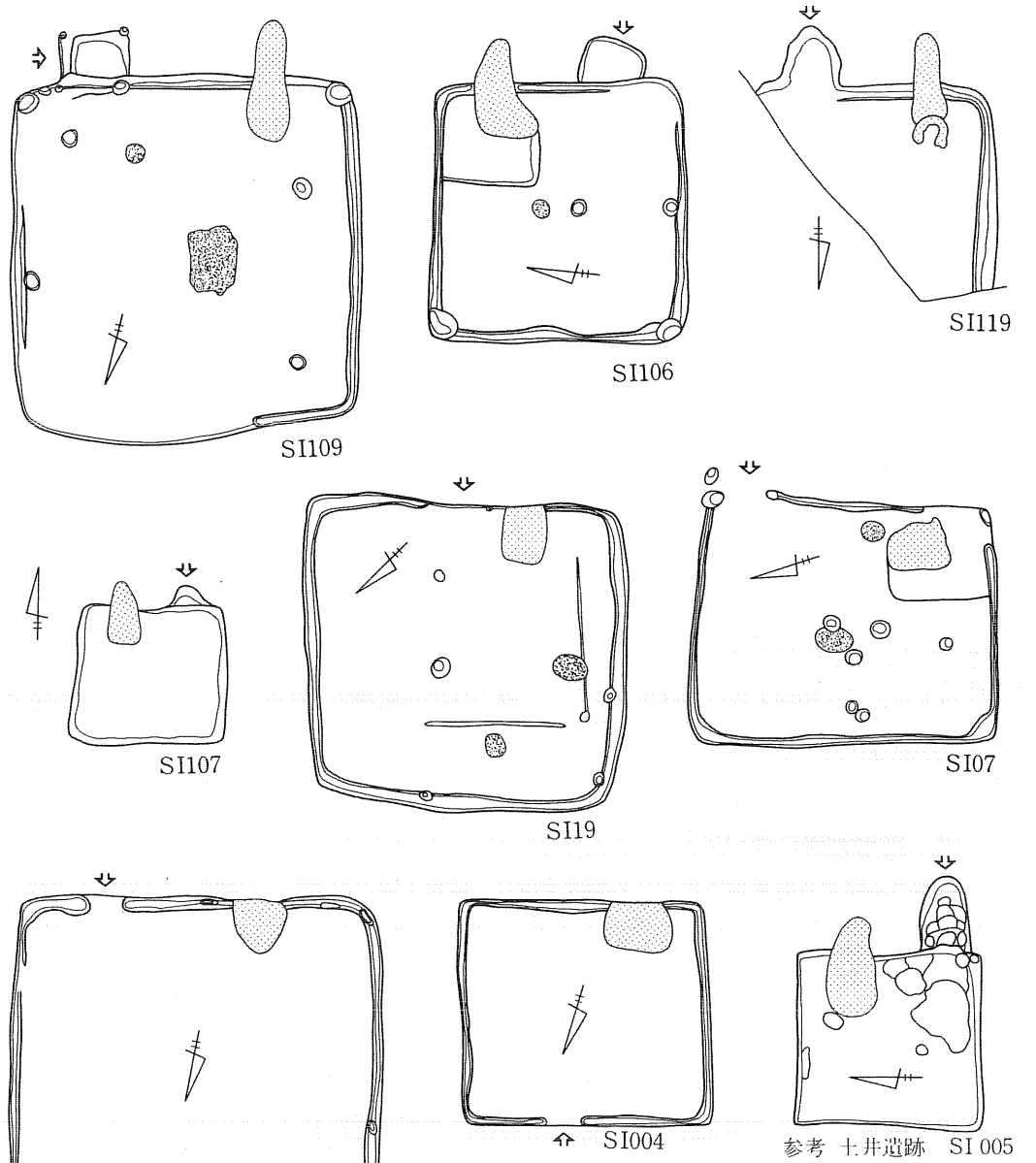
Ｂ―U・V字形を呈する張出し（ＳＩ119・107）ＳＩ119は、緩いスロープ状となっている。

Ⅱ類：壁溝の途切れ部分から想定できるタイプ。これも４例あり、ＡⅢ・Ⅳ区、昭和57年調査区で確認している。出入口とカマドの位置関係から２分できる。

Ａ―Ⅰ類同様、カマドと同じ壁面に出入口をもつ（ＳＩ19・07・302）ＳＩ19例はカマド脇に出入口部が位置し、他はⅠ類と同じく１ｍ以上の間隔を置いている。ＳＩ07は、溝両端に小柱穴が取り付く。

Ｂ―カマド対壁面に出入口をもつ（ＳＩ004）昭和57年調査の１軒だけである。

このようにして見ると、Ⅰ類はＡⅡ区、Ⅱ類はＡⅢ・Ⅳ区、昭和57年調査区でのみそれぞれ確認されている。この差異は、出入口施設の構造差から時期・集団の差異を引き出す材料となる、と想定もできるが、ここでは遺存状態の良し悪しに導かれた結果と考える方が妥当のようである。ＡⅡ区は、竪穴住居跡の確認面である第Ⅲ層大湯浮石層面が良好に保存されており、同上面で遺構を確認できる。他方ＡⅢ・Ⅳ区は、大湯浮石層を面的に把えられなかったり、あるいは耕作などに伴う削平を受け、遺構確認面は第Ⅴ層上面以下であった。Ⅰ類の張出し部底面は概ね第Ⅴ層中に収まることから、Ⅱ類の中にも張出しを有していたタイプの施設が存在し



遺構番号	奥行き	幅	深さA	深さB	備　　考
S I 109	100	140	10〜20	22	階段状を呈す
S I 116	60〜90	130	5〜15	50	
S I 119	120	120	～35		斜度約15°のスロープ
S I 107	45	90	18	14	
S I 19	—	110			
S I 07	—	85			柱間距離で110cm
S I 302	—	60			
S I 004	—	70			

第416図　出入口をもつ竪穴住居跡

（深さAは、確認面から張出し部底面までの深さ、同Bは、張出し部底面から住居床面までの深さを示す）

ていた可能性が強いものと思われるからである。

張出しをもつ竪穴住居跡は、八森町土井遺跡(註11)、比内町袖ノ沢遺跡(註12)などで確認されている。土井遺跡(Ａ調査区)では、10世紀代と想定している竪穴住居跡６軒の内３軒に、階段状の張出しが認められる。いずれもカマドの設置されている壁に取り付いており、本Ⅰ類に相当する。

一方、袖ノ沢遺跡では５軒の竪穴住居跡の内の１軒であるが、方形の張出しを有する住居が確認された。ただし張出しの位置が、カマドに隣あった壁に取り付き、ここで言うⅠ類の範疇に収まらない。

またⅡ類のような壁溝の途切れ部分から想定できる事例は、能代市上の山Ⅱ遺跡(註13)（第１次調査）、同市腹鞍の沢遺跡Ａ地区(註14)などを抽出できる。この内、上の山ⅡＳＩ06・16・27、腹鞍の沢ＳＩ03は、カマド側に出入口を想定できるＡタイプであり、腹鞍の沢ＳＩ04は、カマド対壁面に位置するＢタイプである。

鹿角市高市向館跡(註15)では、Ⅰ類Ａの張出しを住居内に収めたような「階段状の施設」が存在する。ＳＩ13ではカマドと同じ壁面に、ＳＩ18ではカマドと隣合う壁面に、報告書ではふれていないが、おそらく地山土等を掘り残して、階段状や緩いスロープ状の施設を作出し、出入口としていた可能性が想定できる。

以上のように類例を導いた結果では、この種の施設は形態的に差異はあるものの、現段階で米代川流域に集中していると言えるであろう。

2　鍛冶遺構について

遺跡の所在する鹿角地方における製鉄遺構は、鹿角市堪忍沢遺跡、小坂町白長根館Ⅰ遺跡の製鉄炉、鹿角市太田谷地館跡の「精錬か大鍛冶に関する遺構」(註16)などが確認されている。本遺跡の２地点５基の鍛冶炉は、遺構確認面（掘り込み面）が第Ⅲ層大湯浮石層面であり、周辺の遺構・遺物の分布、配置状況から、竪穴住居跡等と同じ平安時代の構築施設であると考えている。

ＡⅡ区ＳＸ110とＤ区ＳＸ05（Ａ・Ｃ・Ｄ・Ｆの最低４枚の操業面を持つ）の２基は、炉下部の平面箱形を呈する掘り方（下部施設）の形態・規模が類似し、ＳＸ05では、大鍛冶に係る炉を想定している。またＤ区ＳＸ05Ｂ・Ｅの２基については、径20cm内外の椀形の炉形を示すことから、小鍛冶に係る炉と考えている。Ｄ区における大鍛冶、小鍛冶２種の炉は、その重複関係から「大鍛冶から小鍛冶までの一貫した操業が数回繰り返されたことが推定される」（Ｐ618）とまとめている。

鍛冶炉として明確な形で検出された事例は県内では、秋田城跡第44次調査のＳＸ878鍛冶炉跡(註17)一例であろう。その炉形・規模（径20cm）は、Ｄ区ＳＸ05Ｂ・Ｅに近似するが、ＳＸ878の遺構確認面（第９層）から導き出された年代（９世紀前半から後半前葉）は、Ｄ区例と時期差がある。

3　遺物について―その分類と時期設定―（第417・418図）

はりま館遺跡で確認した平安時代の遺物は、土師器甕を主体とする。とは言っても、口縁部で換算して個体数を割り出した数字は103個体、昭和57年調査分を含めても120個体には満たない。竪穴住居跡だけでも都合31軒の検出であるから、その数は決して多くはない。また土師器・須恵器坏、壺、木製品（Ⅲ）などは、それぞれ1・2点（個体）ずつの出土である。なお土師器は全て非ロクロ成形による。

土師器甕をその器面調整及び口縁部の形態から分類すると、大きく3分できる。

Ⅰ類：器内面にハケメ調整の認められるもの。外面胴部はハケメの後、軽いケズリ（ナデツケ）を加える場合（1）と、軽いケズリ（ナデツケ）のみの場合（2）がある。口縁部は、横ナデである。本類は図示したＳⅠ310・323出土の2点及び、昭和57年調査のＳⅠ004出土土器だけである。頸部の屈曲は比較的明瞭で、いわゆる「く」の字に外反している。1は頸部に弱い段を残す。最大径は口縁部あるいは胴部上半に位置する。

Ⅱ類：器外面をケズリ、口縁部には横ナデを施し、内面はナデ調整であるもの（3～15）。ハケメ手法は認められない。口縁部の形態から細分される。

1種―口縁部がⅠ類同様、「く」の字に比較的長く外反するタイプ（3、4）。

2種―頸部の屈曲が不明瞭となり、1種より短く外反・外傾するタイプ（5～13）。口縁部形態にバラエティーがあるが、口唇部を丸くおさめている資料が多い。

3種―口縁部が直立あるいは内傾するタイプ（14、15）。口唇部は先細りの形状となる。

Ⅲ類：器外面をケズリのみで調整しているもの。横ナデは認められない。内面はナデとなる（16～22）。一般にケズリは粗くなり、口縁部は小さく波打つ。

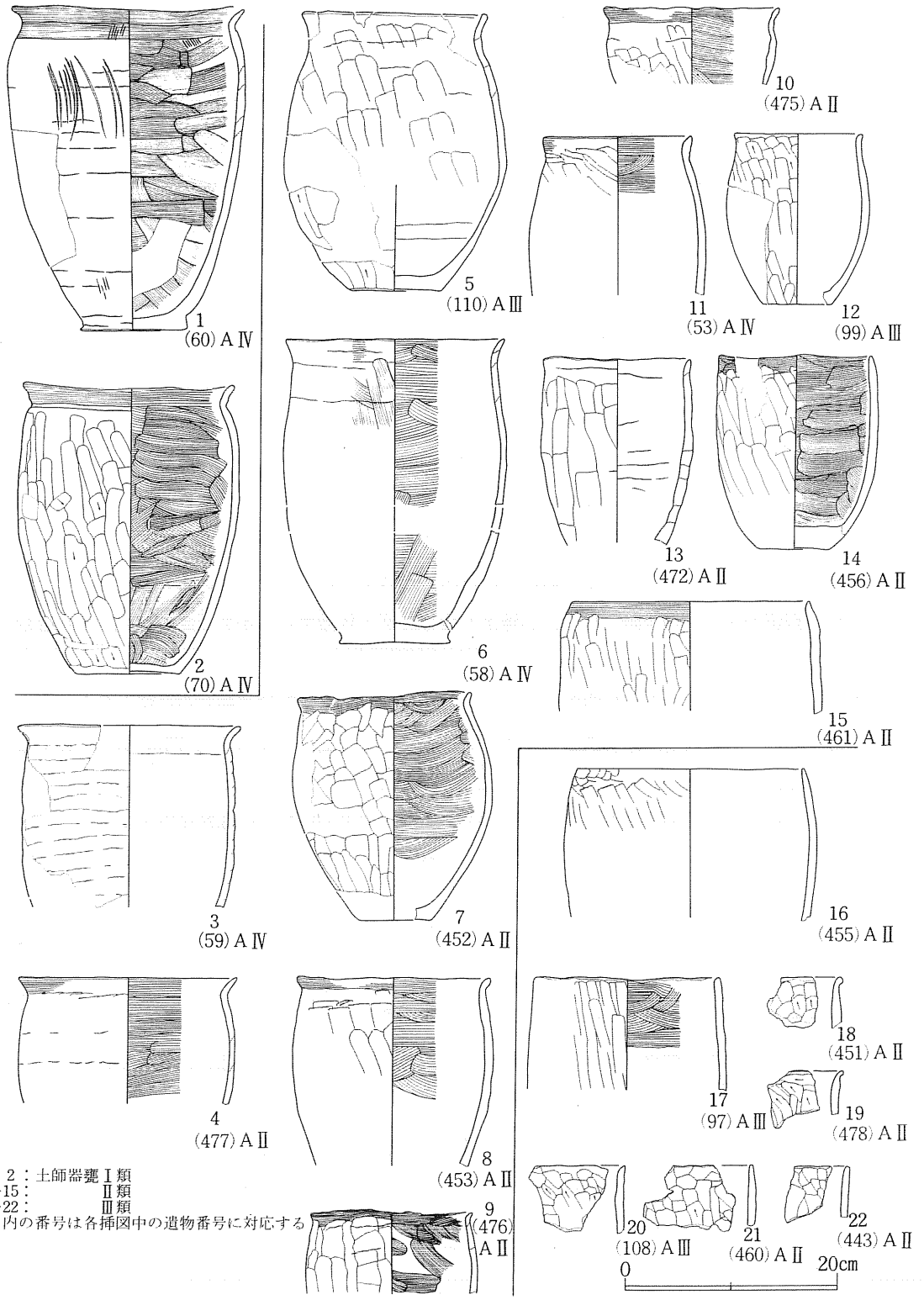
Ⅱ類1種、2種の分類基準に曖昧な点があるが、一応各分類毎の個体数は次のようになる。Ⅰ類（2個体）、Ⅱ類1種（8個体）・2種（48個体）・3種（20個体）、Ⅲ類（25個体）で、Ⅱ類が全体の約74％、Ⅲ類で約24％、Ⅰ類は約2％の比率となる。

この分類を基に、土器組成を加味していくと、大きく2時期を想定できる。Ⅰ類土器をはりま館Ⅰ期、Ⅱ・Ⅲ類土器をはりま館Ⅱ期として整理してみる。

はりま館Ⅰ期（ＳⅠ310・323期）

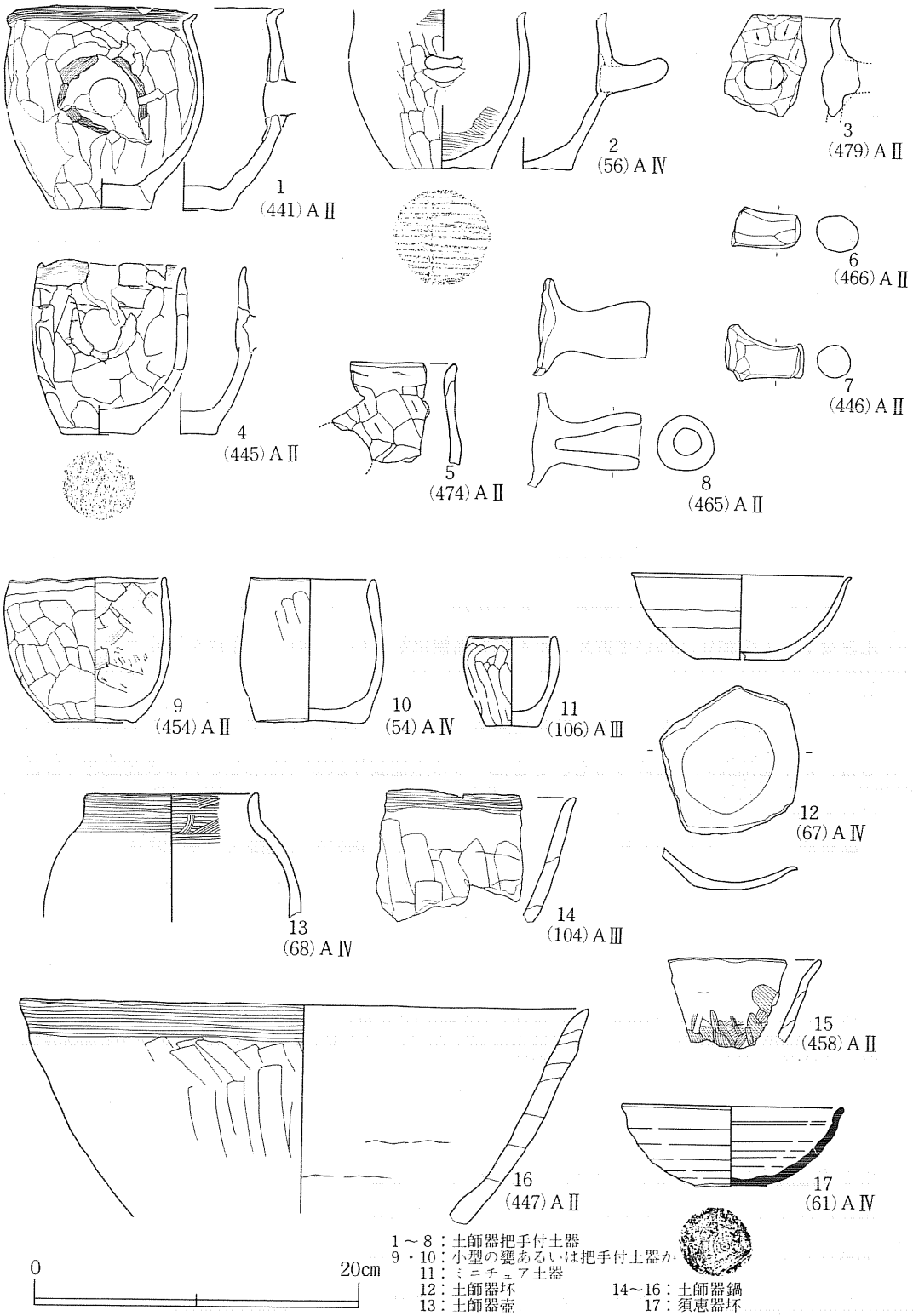
器種構成は、土師器甕を主として、僅かに坏、壺が含まれる。須恵器には回転糸切りの坏が残る。Ⅲ類土器は入らない。土師器甕は、非ロクロ成形であり、内面にハケメが施されることを特徴とする。外面はナデツケ様の軽いケズリであり、前段階のハケメ整形痕が残るものもある。口縁部の形態は、頸部が比較的明瞭に屈曲し、「く」の字に外反する。段・稜を残す例もある。底部は木葉痕、砂底が併存する。

はりま館Ⅱ期



1・2：土師器甕Ⅰ類
3～15：　　Ⅱ類
16～22：　　Ⅲ類
（　）内の番号は各挿図中の遺物番号に対応する

第417図　はりま館遺跡土器組成（1）土師器甕



1～8：土師器把手付土器
9・10：小型の甕あるいは把手付土器か
11：ミニチュア土器
12：土師器坏
13：土師器壺
14～16：土師器鍋
17：須恵器坏

第418図　はりま館遺跡土器組成（2）

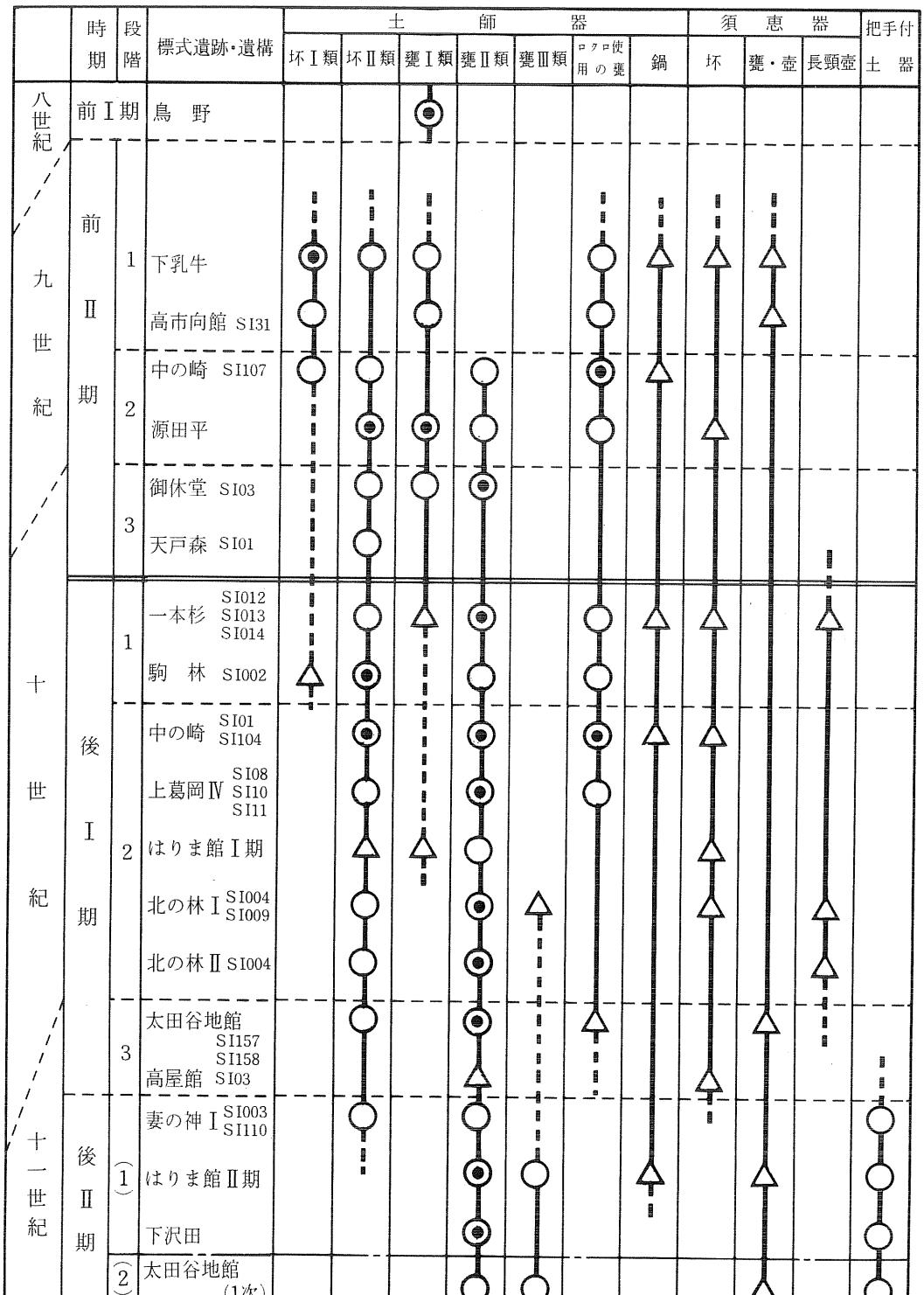
器種構成は、土師器甕を主として鍋、把手付土器が加わる。須恵器には壺を僅か含む。坏類は土師器、須恵器を問わず認められず、供膳形態は木製に移行している（ＡⅢ区ＳＩ08）。土師器甕は、ハケメが見られなくなり、外面にはケズリ調整が施される。この後、口縁部に横ナデを加えるもの（Ⅱ類土器）と、これの認められないもの（Ⅲ類土器）の別がある。Ⅲ類土器は本期から加わり全体の１／４を占める。口縁部の形態はバラエティーに富む。頸部の屈曲は明瞭でなくなり、短く外反・外傾するものが多いが、直立するもの、内傾するものも存在する。底部は、木葉痕も残るが、砂底、ナデ調整の例が多くなる。

4　はりま館遺跡の年代

はりま館遺跡を含む鹿角地方（鹿角市、小坂町）は、1979年から実施された東北縦貫自動車道建設に伴う発掘調査を始め、数多くの遺跡が調査されている。ここで扱う平安時代の集落遺跡―竪穴住居跡あるいは掘立柱建物跡が１軒（棟）以上確認している遺跡を一応「集落跡」とする―については、鹿角地方で40遺跡（集落）が調査され、竪穴住居跡385軒、掘立柱建物跡42棟を確認している。(註18) これは秋田県内で検出された竪穴住居跡、掘立柱建物跡の約45％を占めている（除く秋田城跡、払田柵跡）。にもかかわらず、この膨大な資料を基にした論述はほとんどなく、土器編年について言及したものも皆無に等しい。これは、年代を決定づける定点がなく、土器組成も地方色の強い土師器甕を主とし、編年の先行している須恵器の出土が少ないことなどから、やむを得ない面も確かにある。しかし、今回はりま館遺跡をまとめるにあたっては、多くの問題点を含みつつも、ここに一つの土器編年試案を提示し、はりま館遺跡の位置付けを探ってみることとする。

鹿角地方で、その年代を模索しようとする場合の唯一絶対的な基準は、十和田火山灰（大湯浮石）の存在に他あるまい。具体的には、竪穴住居跡などに大湯浮石が層を成して堆積している例、覆土中に大湯浮石が斑状に含まれる例などがある。一般に前者が大湯浮石降下・堆積以前に構築・廃棄され、後者が大湯浮石堆積の後に構築されている、と解されている。ただ後者の場合、竪穴住居がその機能を果たしている時点で火山灰の降下を受けたか、住居廃絶直後の降灰・堆積であるのか、あるいは大湯浮石層を切り込んで構築しているのかによって時間的幅が大きいことも考慮しなければならない。大湯浮石の降下・堆積の時期は、決定的根拠を欠くが、現在では10世紀前半と想定している場合が多いようである。これを基にして、大湯浮石が層を成して堆積している竪穴住居跡に遺されていた土器群を前Ⅰ・Ⅱ期、覆土中に大湯浮石が斑状に含まれている竪穴住居跡に遺されていた土器群を後Ⅰ・Ⅱ期として、その土器の形態・調整技法等から細分して時間軸に当てはめていくと、第419図のように想定できる。

なお、同図における土師器坏Ⅰ類は、底部を回転糸切りの後、体部下半をケズリによる調整



各遺跡・遺構における土器出土量を○印を基準として、相対的に多いものを⊙印、1・2点(個体)のものを△印としてある

第419図　鹿角地方における竪穴住居跡出土土器の消長と年代

を施しているもの、同Ⅱ類は、回転糸切りの後、調整の成されていないものを指す。土師器甕Ⅰ～Ⅲ類は、前項の分類基準による。

〔前Ⅰ期〕：8世紀後半（標識遺跡＝鳥野）本期は、土師器甕の形態・調整技法等から、類例を平鹿町下藤根遺跡に求め、8世紀後半の年代を与えている。鹿角地方の古代の土器の中でも古い段階の一つに数えられる。はりま館出土の土器と時期的な隔たりも大きく、ここでは詳述をさけ、報告書(註19)および秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第2号における桜田論文(註20)を参照いただくことで次に進みたい。

〔前Ⅱ期〕：9世紀～10世紀初頭ないし前半　下限時期を大湯浮石降下・堆積時期とする。土器組成は、土師器坏Ⅰ類・Ⅱ類、同甕Ⅰ類・Ⅱ類・ロクロ使用の甕・鍋、須恵器坏・甕・壺からなる。この中で主体となるのは土師器坏・甕であり、土師器鍋、須恵器はごく少ない。土師器甕Ⅲ類は認められない。組成の内容を検討すると、次の3段階に細分できる。

第1段階―（下乳牛、高市向館ＳⅠ31）土師器坏Ⅰ類と同甕Ⅰ類が組成の中心となる。甕Ⅱ類は副次的である。土師器坏Ⅰ類は、底部を回転糸切りによる切り離しの後、体部下半にケズリ調整を施す類であるが、唯一高市向館ＳⅠ31出土(註21)の坏は、静止糸切りの後、体部中央以下をケズリ調整している。

第2段階―（中の崎ＳⅠ107(註22)、源田平(註23)）土師器坏はⅠ類も残るが、Ⅱ類が主となる。甕もⅠ類から次第にⅡ類へ漸移している。

第3段階―（御休堂ＳⅠ03(註24)、天戸森ＳⅠ01(註25)）土師器坏にⅠ類が見られなくなり、Ⅱ類だけとなる。甕Ⅰ類も残るが主体はⅡ類に移行している。本段階は、組成の上で第2段階と重複しており、単純に第2段階の土器群より後出であるとは言えない。

〔後Ⅰ期〕：10世紀前半～末　上限時期を大湯浮石降下・堆積時期とする。土器組成は土師器坏Ⅰ・Ⅱ類、土師器甕Ⅰ～Ⅲ類・ロクロ使用の甕・鍋、須恵器坏・甕・壺・長頸壺からなる。この内主体となるのは、土師器坏Ⅱ類、同甕Ⅱ類・ロクロ使用の甕であり、土師器坏Ⅰ類、甕Ⅰ・Ⅲ類・鍋、須恵器はごく少量である。ロクロ使用の甕も本期中に消失するようである。土師器甕Ⅲ類、須恵器長頸壺は、本期から組成に加わる。覆土中に大湯浮石を混入する竪穴住居跡出土の土器群を第1・2段階、大湯浮石層を切り込んで構築し、覆土中に苫小牧火山灰をレンズ状に堆積している竪穴住居跡出土の土器群を第3段階とする。

第1段階―（一本杉ＳⅠ12(註26)、駒林ＳⅠ02(註27)）土器組成に土師器坏Ⅰ類あるいは甕Ⅰ類が残る段階。

第2段階―（中の崎ＳⅠ01・104など、上葛岡Ⅳ(註28)、はりま館Ⅱ期など）第1段階に認められた土師器坏・甕Ⅰ類は消失する。鹿角地方における大部分の竪穴住居跡出土遺物は本段階に含まれるものと考えられる。現状では土器組成・調整技法から細分はできない。竪穴住居跡、カマドの形態・構造などからも細分の試みをしていかなければならない。

第3段階―（太田谷地館ＳＩ157・158[註29]、高屋館ＳＩ03[註30]）土器組成の上では、第2段階土器群と変わるものではない。従って、本期は第1段階を先行させることができるものの、第2・3段階はまとめて10世紀中頃（？）～末の年代を想定しておきたい。

〔後Ⅱ期〕：およそ11世紀（妻の神ＩＳＩ003・110[註31]、はりま館Ⅱ期、下沢田、太田谷地館（第1次[註32]）土器組成は、土師器甕Ⅱ・Ⅲ類が主となり、土師器坏Ⅱ類、鍋、須恵器はごく少量、あるいは認められなくなる。土師器把手付土器が現れる。妻の神Ⅰに土師器坏Ⅱ類が伴うことから、本期の中でも古手の部類に入るのかもしれない。

数多くの仮定と問題点の上に立脚しているとは言え、土器の形態・調整技法、器種の消長から一応の流れは追えるものと考えている。これに従うと、はりま館Ⅰ期は10世紀中～後葉、はりま館Ⅱ期は11世紀代に入ると想定される。ただ後Ⅰ・Ⅱ期境界の時期、後Ⅱ期の下限時期は現段階では明確にできない。

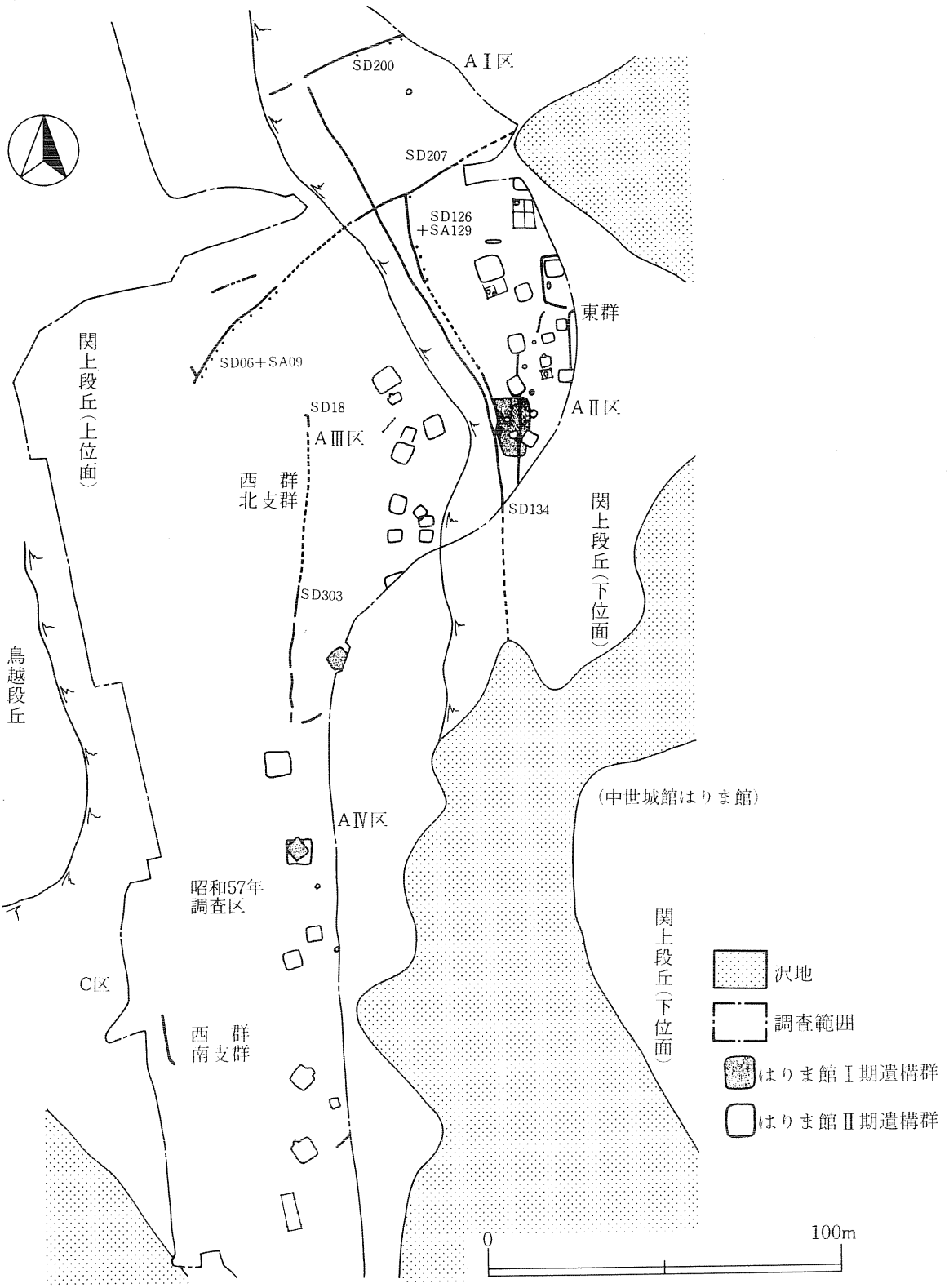
5　「はりま館」集落の景観と終焉（第420図）

10世紀中～後葉のある時期、「はりま館」南端部（AⅣ区）に小規模の集落が営まれる（はりま館Ⅰ期）。調査範囲内では2軒（ＳＩ310・323）確認しているが、東側調査区外の段丘（上位面）縁辺部にも何軒か存在していた可能性はある。この2軒は、竪穴住居跡の主軸方位、カマドの構築方法から見れば、ほぼ同時期に併存していたと考えられる。

また次のⅡ期に伴うＡⅡ区溝状遺構に切られる畑畝跡は、大湯浮石堆積後の耕作跡であることが明らかであり、本Ⅰ期に伴う遺構とも推定できる。そこで想像をたくましくすれば、はりま館Ⅰ期は、段丘上位面を居住地とし、下位面を耕作地として利用していたと言えるであろう。

11世紀に入ると、1つの定型的な集落としての形をなすようになる。前述の2軒以外の遺構はこの時期（はりま館Ⅱ期）に含まれると考えている。果たしてⅠ期とⅡ期は継続して営まれたのか否か、これを明らかにはできない。しかし昭和57年調査のＳＩ004出土土器は、Ⅰ期の特徴（土師器甕Ⅰ類の存在）とⅡ期の特徴（土師器甕Ⅱ類、把手付土器などの存在）を具備しており、両期をつなぐ遺構であったのかもしれない。

集落の北端には東西方向の溝状遺構・柱列（ＳＤ207、ＳＤ06・ＳＡ09）が配され、これに接続し南北方向に南下する溝状遺構・柱列（ＳＤ126・ＳＡ129、ＳＤ134）で集落が2分される。すなわち、大きくは東側の一群（東群―ＡⅡ区）と西側の一群（西群―ＡⅢ・Ⅳ区、昭和57年調査区）であり、後者は更に北側の支群（北支群―ＡⅢ区、AⅣ区ＳＩ300を含む）と南側の支群（南支群―AⅣ区、昭和57年調査区）に細別できる。各群・支群は、更に細分される可能性を残しているが、出土遺物の量と遺構間の重複の少なさから、竪穴住居跡の主軸方位などでの検討を加えても、確たる類別はできなかった。従って各群・支群にも時間的幅を見なけ



第420図　平安時代の遺構配置と地形の関係

ればならないが、既述のように、遺構の重複・配置状況から、区画施設が機能を果たしていた、言い換えれば規制の及んでいた期間内に営なまれた集落であったとすることができよう。

また集落内での、生業という点から見ると、東群と西群では明らかに様相を異にする。東群では、区画施設内に精錬あるいは製錬に係る遺構が少なくとも3箇所に認められ、そのいずれもが竪穴住居跡と密接な関係を有し、掘立柱建物、溝状遺構を介在とし、両者一連の施設としてその役割を担っていた可能性が強い。一方の西群では、鉄製品、フイゴ羽口などの出土はあるものの、鉄滓、鍛造薄片など直接的に製鉄に係る遺物をほとんど確認できず、積極的に本群内で製鉄が行われていたとは想定しづらい。このことから、東群は鉄生産に係る集団の居住・作業区域であったと想定でき、西群はその他の生業部門を担っていたことになる。それは明らかではないが、本群の北側、西側に広がる無遺構域の存在に注視しておく必要がある。Ⅰ期における畑作の想定は、Ⅱ期の無遺構域にもその存在を想起させるものがある。

はりま館Ⅱ期の下限時期、すなわち「はりま館」集落の終焉はいつであろうか。現段階では漠然と11世紀としか答えられない。少なくとも次代中世期の遺構・遺物が確認できないことから、この地を離れたことは確かであろう。東群の南側には空堀と考えられる沢を隔てた平坦面が存在する。ここは中世城館はりま館として周知されているところであり、沢で画された要害の地である。発掘調査等がなされていないので、仮定でしか言えないが、同様の立地条件を示す集落の存在－たとえば太田谷地館跡など－及び、11世紀という時代背景から「はりま館」集落の人々もこの地に移動したと想定できそうである。

註1　高橋　学「竪穴住居と掘立柱建物が併列して構築される遺構について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第4号　1989（平成元年）

註2　高島成侑「発茶沢（1）遺跡の建物跡について」『発茶沢（1）遺跡Ⅳ』青森県教育委員会　1989（平成元年）

註3　高橋　学「区画施設を伴う古代集落遺跡について」『よねしろ考古』第5号　1990（平成2年）

註4　秋田県教育委員会『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』秋田県文化財調査報告書第178集　1989（平成元年）における福田・十二林遺跡など

註5　鹿角市教育委員会『下沢田遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料27　1984（昭和59年）

註6　秋田県教育委員会「下乳牛遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅺ』秋田県文化財調査報告書第119集　1984（昭和59年）

註7　秋田県教育委員会「北の林Ⅰ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅲ』秋田県文化財調査報告書第89集　1982（昭和57年）

註8　秋田県教育委員会「案内Ⅲ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ』秋田県文化財調査報告書第99集　1983（昭和58年）

註9　秋田県教育委員会「歌内遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅱ』秋田県文化財調査報告書第88集　1982（昭和57年）

註10　秋田県教育委員会『胡桃館埋没建物遺跡第３次発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第22集　1970（昭和45年）

註11　秋田県教育委員会　『土井遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第111集　1984（昭和59年）

註12　秋田県教育委員会「袖ノ沢遺跡」『味噌内地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書』秋田県文化財調査報告書第169集　1988（昭和63年）

註13　秋田県教育委員会「上の山Ⅱ遺跡」『此掛沢Ⅱ遺跡・上の山Ⅱ遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第114集　1984（昭和59年）

註14　秋田県教育委員会『腹鞍の沢遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第97集　1982（昭和57年）

註15　鹿角市教育委員会『高市向館跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料22　1982（昭和57年）

註16　大野憲司「太田谷地館跡について－空堀を持つ平安時代後葉の集落跡－」『よねしろ考古』第５号　1990（平成２年）

註17　秋田市教育委員会　秋田城跡調査事務所『昭和61年度秋田城跡発掘調査概報』　1987（昭和62年）

註18　註３に同じ

註19　秋田県教育委員会『鳥野遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第49集　1978（昭和53年）

註20　桜田　隆　「鹿角盆地に於ける古代土器群の様相（Ⅰ）」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第２号　1987

註21　註15に同じ

註22　秋田県教育委員会「中の崎遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ』秋田県文化財調査報告書第106集　1984（昭和59年）

註23　秋田県教育委員会「源田平遺跡」『鳥野遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第49集　1978（昭和53年）

註24　鹿角市教育委員会『御休堂遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料19　1981（昭和56年）

註25　鹿角市教育委員会『天戸森遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料26　1984（昭和59年）

註26　秋田県教育委員会「一本杉遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ』秋田県文化財調査報告書第99集　1983（昭和58年）

註27　秋田県教育委員会「駒林遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅴ』秋田県文化財調査報告書第91集　1982（昭和57年）

註28　秋田県教育委員会「上葛岡Ⅳ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅴ』秋田県文化財調査報告書第91集　1982（昭和57年）

註29　秋田県教育委員会「太田谷地館跡第２次調査」『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』秋田県文化財調査報告書第183集　1989（平成元年）

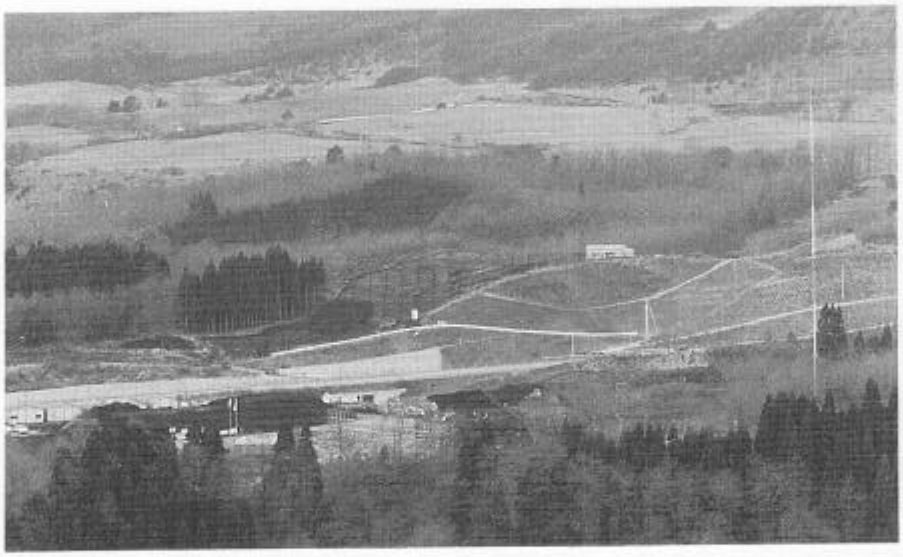
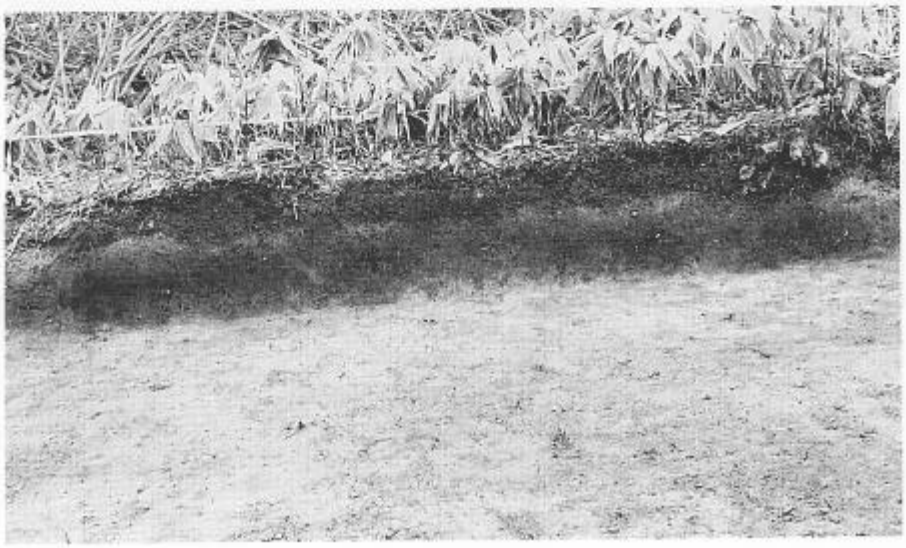
註30　1989年秋田県埋蔵文化財センターで調査、1990年３月に報告書刊行予定。

註31　秋田県教育委員会「妻の神Ⅰ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅷ』秋田県文化財調査報告書第107集　1984（昭和59年）

註32　秋田県教育委員会「太田谷地館跡」『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』秋田県文化財調査報告書第172集　1988（昭和63年）

1
調査前全景
（斜面下より上を望む）

2
遠景（東▶）



3
斜面基本土層